

深江町文化財調査報告書 第2集

権現脇遺跡

2006

長崎県深江町教育委員会

深江町文化財調査報告書 第2集

権現脇遺跡

2006

長崎県深江町教育委員会



有明海上から望む島原半島





(島原市提供)

有明海上空から望む島原半島

島原半島は普賢岳(標高1359m)をはじめとする雲仙の山々が中央に連なり、東側は有明海に、西側は橋湾に面する。

普賢岳は有史以来1663(寛文3)年、1792(寛政4)年の2回の噴火があり、いずれも中腹の北東斜面から溶岩が流出したとの記録が残る。普賢岳の手前に構える圓山は、1792年の噴火時に度重なる地震によって山体が崩壊し、大量の土砂が有明海へと流れ込んだ。圓山の崩壊によって発生した大津波は対岸の肥後・天草地方に打ちあがり、またその返し波が島原半島沿岸部を再び襲った。死者・行方不明者は15,000人にも及んだ。この出来事は日本火山災害史上、ほかに例を見ない大惨事であり、「島原大変肥後迷惑」と呼ばれ今に語り継がれている。

1990(平成2)年11月17日、普賢岳は突如噴煙を上げ始めた。そして翌1991年5月20日には山頂付近に溶岩ドームが姿を現した。その後6年もの間溶岩ドームは成長と崩落を繰り返し、火砕流となって東斜面を駆け下りた。火砕流によって多くの家屋が焼失し、死者と行方不明者はあわせて44名にも上る。また降雨のたびに土石流が発生し、深江と島原を結ぶ生活道路が寸断され、多くの家屋が流失・埋没した。火砕流、土石流、降灰等による人的・経済的被害は甚大なものであった。

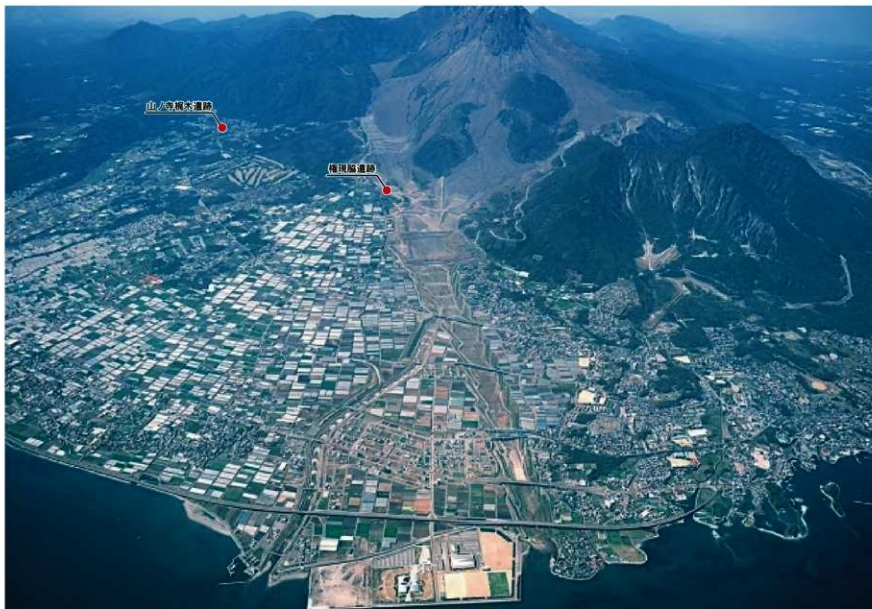
普賢岳が落ち着きを取り戻した現在、溶岩ドームは「平成新山」と命名され、島原半島の新しいシンボルとなった。また、麓ではさまざまな復興事業が進められている。

水無川流域では土石流対策として砂防堰堤と逆「八」字形をした導流堤が建設されている。溶岩崩落の危険性が残る上流域ではオペレーターがカメラの画像を頼りに遠隔操作で重機を動かす無人化施工によって工事が進められている。この無人化施工は普賢岳災害を機に開発され、今では全国の被災地で採用されるようになった。

水無川と導流堤建設地にはさまれた三角地帯では、最大9m、平均6mにも達する崖上げ工事(93ha)と海岸線を200~300m前進させる埋め立て工事(25ha)が火砕流と土石流の堆積物を利用して行われ、また土石流にも耐えうる「島原深江道路」が水無川と導流堤を横断して建設された。

深江町は島原市とともに災害に強い町、災害と防災について学べる町として着々と復興の道を歩んでいる。

今回の権現脇遺跡の発掘調査も導流堤建設に伴うもので、立ち入りの禁止される無人区域の縮小に伴い実施が可能になった。



水無川流域航空写真①（国土交通省雲仙復興事務所提供）



水無川流域航空写真② (国土交通省雲仙復興事務所提供)



権現脇遺跡周辺航空写真（国土交通省雲仙復興事務所提供）



調査区航空写真



埋 甗



第83图510



第84图512

A·D区出土土器



第53图35



第73图376



A·D区出土土器



A·D区出土土器



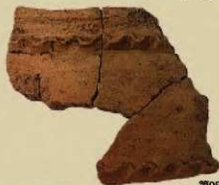
B·C区出土土器



第95图709



第95图712



第95图715



第97图768



第97图772



第100图830



第100图829



第100图831



第100图832



第100图833



第102图844



第103图891



第103图893



第103图892



第125图1342



第125图1343



B·C区出土土器



B·C区出土土器



第96图726



第64图218



第82图507



第120图1239



第96图725



第95图710



第78图451

出土土器



第73图375



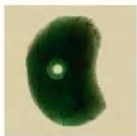
第98图779



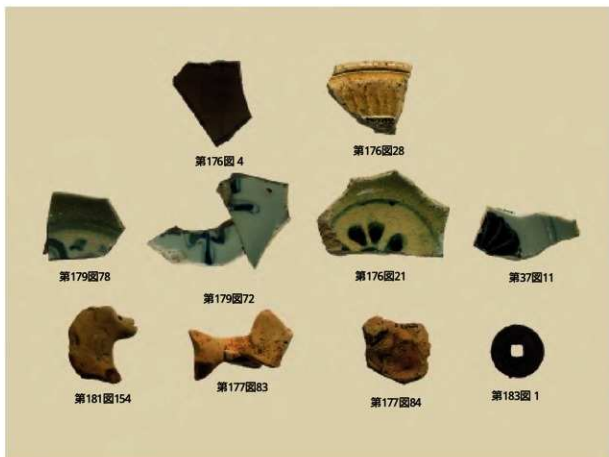
第150图189



第143图132



第171图307





①～⑥：黒曜石 A (③～⑥は被熱資料)。⑦：黒曜石 B (早期資料)。⑧：黒曜石 C (姫島産か?)。⑨：鉄石英。⑩～⑪：無斑晶質玄武岩 (⑩は早期資料)。⑫～⑬：結晶片岩。⑭：頁岩。⑮：石灰岩。⑯～⑰：蛇紋岩 (⑯は風化により白色化)。⑱～⑲：安山岩。⑳～㉑・㉔：砂岩 (㉑の中央は被熱による黒色化)。㉒：石英。㉓：頁岩

発刊にあたって

このたび、平成14年度から平成16年度にかけて発掘調査を実施いたしました権現脇遺跡の調査報告書を刊行することになりました。

深江町には山の寺槻木遺跡という縄文時代から弥生時代へと移行する時期の考古学的に非常に重要な遺跡があります。権現脇遺跡はこの山の寺槻木遺跡と同時期の遺跡ということもあり、今回の調査には計画段階から大きな期待が寄せられました。そして、発掘調査の結果、数万点にも及ぶ貴重な土器や石器が出土し、当時の生活の様子が明らかとなりました。今後、遺跡や出土した遺物が学術や教育、観光などさまざまな場面で広く活用されることを祈るばかりです。

権現脇遺跡の発掘調査を契機として、町民の皆様をはじめ多くの方々の温かいご支援とご指導のもと、教育委員会では文化財行政の充実に努めてまいりました。深江町は平成18年3月31日をもって周辺7ヶ町と合併し南島原市となりますが、今後も皆様方の声を大切にしながら、文化財の保存と保護に尽力する所存であります。

最後に、無事に発掘調査を終了し報告書を刊行できましたことは、関係者の皆様、町民の皆様、発掘調査と整理に従事くださいました作業員の皆様のご協力とご理解があったからにほかなりません。この場を借りて深くお礼申し上げます。

平成18年3月15日

深江町教育委員会 教育長 永田 九州男

例 言

- 1 本書は権現脳遺跡（長崎県南高来郡深江町大野木場）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は深江町教育委員会が主体となり、長崎県教育庁学芸文化課・島原市教育委員会の指導・協力を得て行った。調査期間は以下の通りである。
範囲確認調査 平成14年8月26日～平成14年9月5日
本調査 平成15年2月26日～平成16年8月31日
- 3 調査主体者および調査担当者は以下の通りである。

調査主体

深江町教育委員会	教育長	上田 和春（～平成17年3月）
同	教育長	高原 武光（平成17年3月～平成17年10月）
同	教育長	永田九州男（平成17年11月～）
同	教育次長	永田九州男（～平成16年12月）
同	教育次長	永石 輝邦（平成17年1月～）
同	参事監	永石 輝邦（～平成16年12月）
同	参事監	柴田 直久（平成17年4月～平成17年11月）
同	社会教育係長	松本 英世（～平成16年3月）
同	主 事	上田 勝也（～平成16年3月）
同	主 事	高柳 泰宏（平成16年4月～）

調査担当

（範囲確認調査）

長崎県教育庁学芸文化課	主任文化財保護主事	川道 寛
同	主任文化財保護主事	村川 逸朗
同	文化財保護主事	本田 秀樹
島原市教育委員会社会教育課	主 事	土橋 啓介

（本調査）

深江町教育委員会	文化財調査員	本多 和典（平成14年度・平成15年度・平成16年度）
長崎県教育庁学芸文化課	文化財保護主事	本田 秀樹（平成14年度・平成15年度）
埋蔵文化財サポートシステム		秀嶋 龍男（平成14年度・平成15年度）
同		大坪 芳典（平成16年度）

- 4 本書の執筆は、本多（深江町教育委員会）、渡邊康行・島内浩輔・大坪芳典（埋蔵文化財サポートシステム）が分担執筆し、目次に執筆者名を記した。
- 5 遺構の実測は、土層断面図に関しては調査担当者が行い、その他は埋蔵文化財サポートシステムに委託した。遺構の写真撮影は本多が行い、調査中の航空写真については埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

- 6 出土遺物の洗浄・注記等の基礎整理は岩永英子・坂上智恵・平坂美奈・松岡喜久子・松本由紀子・溝田利枝・山口大輔が行った。石器の実測・トレースは深江埋蔵文化財サポートシステムに委託し、土器・陶磁器等については実測を安達信行・市川裕子・岩永英子・上田五月・坂上智恵・佐藤三夏・高橋美和・廣瀬祐美・松岡喜久子・宮川ひろみ・本多が行った。拓本は荒木秀之が、復元作業は岩永英子が行った。トレースは上田五月・坂上智恵・廣瀬祐美・宮川ひろみが行った。写真撮影は松本由紀子・溝田利枝の協力のもと、岩永英子・大河憲二が行った。
 - 7 本書における遺物・図面・写真等は深江町池平避難所で保管し、遺物の一部を深江埋蔵文化財・噴火災害資料館に展示・収蔵している。
 - 8 調査および本書の刊行にあたって以下の方からご助言、ご指導をいただいた。記して謝意を表します。荒木信也、安楽勉、安楽哲史、井立尚、伊藤健司、井上弦、上田万秋、宇土靖之、小畑弘己、遠部慎、川口洋平、川道寛、木村岳史、小林謙一、下山覚、仙波靖子、早田勉、高野晋司、高原俊治、田川肇、竹中哲朗、田崎博之、多々良正人、辻田直人、土橋啓介、常松幹雄、鳥越俊行、中尾篤志、長岡信治、中嶋直樹、中田裕樹、中山清隆、西山賢一、東貴之、比佐陽一郎、廣瀬三祐、廣瀬雄一、福田一志、藤尾慎一郎、古門雅高、本田秀樹、本田雄峰、松尾吉高、松末和之、松本慎二、三隅龍雄、宮崎貴夫、村川逸朗、山口勝也、山崎純男、柚木亜希子、吉留秀敏、渡辺誠
- (五十音順, 所属・敬称略)
- 9 本書の編集は本多による。

本文目次

第Ⅰ章 位置と環境	1
第1節 地理的環境	1 (大坪)
第2節 歴史的環境	5 (本多)
第Ⅱ章 調査に至る経緯と調査の経過	8 (本多)
第1節 範囲確認調査	8
第2節 本調査	12
1. 調査区の設定と調査の方法	12
2. 調査区概要	12
第Ⅲ章 調査の成果	14
第1節 基本土層	14 (本多)
第2節 遺構	20
1. 縄文時代後期～弥生時代前期の遺構	20 (本多)
(1) ビット群	20
(2) 埋瓦	29
(3) 土坑	30
2. 中・近世の遺構	32
(1) 土坑墓	32 (本多)
(2) 柵状水場遺構	34 (大坪)
(3) 円形水場遺構	36 (大坪)
(4) 水場遺構に伴う水田址	37 (大坪)
第3節 倒木痕	41 (本多)
第4節 包含層出土の遺物	42
1. 縄文時代早・前期の遺物	42 (大坪)
(1) 土器	42
(2) 石器	52
2. 縄文時代後期～弥生時代前期の遺物	58
(1) 土器・土製品	58 (本多)
出土状況	58
土器・土製品の分類	60
A・D区出土の土器・土製品	62
B・C区出土の土器・土製品	108
(2) 石器・石製品	214
概要	214 (渡邊)

A・D区Ⅲ層出土の石器群	228 (島内)
B・C区Ⅲ層出土の石器群	252 (島内)
接合資料	280 (渡邊)
Ⅲ層以外の石器群	288 (島内)
(3) 金属器	294 (本多)
3. 弥生時代中期以降の遺物	295 (大坪)
(1) 土器・陶磁器・その他	295
(2) 金属器	316
第5節 遺物の分布	318
1. 遺物の取り上げと出土状況	318 (本多)
2. 土器の分布	326 (本多)
3. 石器の分布	376 (島内)
第Ⅳ章 ま と め	420
第1節 縄文時代後期～弥生時代前期の土器について	420 (本多)
第2節 石器について	432 (渡邊)
第Ⅴ章 総 括	438 (本多)
附編	
長崎県深江町権現脇遺跡出土土器に付着した炭化物の炭素14年代測定	623 (藤尾慎一郎・小林謙一)
レブリカ法による長崎県権現脇遺跡出土土器圧痕の種子類の同定	637 (小畑弘己・仙波靖子)
約5600年前の眉山起源、権現脇火砕サージに伴って生じた倒木の跡	645 (長岡信治・松末和之)

挿 図 目 次

第1図	深江町位置図	1
第2図	周辺地形概念図	2
第3図	深江町内遺跡地図(S = 1/100,000)	6
第4図	青銅鏡実測図(S = 1/1)	7
第5図	導流堤・堰堤位置図(S = 1/20,000)	9
第6図	試掘坑配置図(S = 1/3,000)	9
第7図	試掘坑内土層図(S = 1/40)	10
第8図	範田確認調査出土遺物実測図①(S = 1/3)	10
第9図	範田確認調査出土遺物実測図②(1~15 S = 1/3 , 16・17 S = 2/3)	11
第10図	グリッド配置図(S = 1/2,000)	13
第11図	A・D区土層図(S = 1/200)	15~16
第12図	B・C区土層図(S = 1/200)	17~18
第13図	層位対応概略図	19
第14図	雨裂2内出土遺物(S = 1/3)	20
第15図	遺構配置概略図(縄文時代後期~弥生時代後期)(S = 1/4,000)	20
第16図	A区ビット群配置図(S = 1/400)	21~22
第17図	B・C区ビット群配置図(S = 1/400)	23~24
第18図	D区ビット群配置図(S = 1/300)	25
第19図	A・D区ビット群出土遺物(S = 1/3)	28
第20図	B・C区ビット群出土遺物(S = 1/3)	28
第21図	埋篋実測図(S = 1/6)	29
第22図	出土土器実測図(S = 1/3)	29
第23図	土坑1実測図(S = 1/40)	30
第24図	土坑1内出土遺物実測図(S = 1/3)	30
第25図	土坑2実測図(S = 1/40)	31
第26図	土坑2内出土遺物実測図(S = 2/3)	31
第27図	遺構配置概略図(中・近世)(S = 1/4,000)	32
第28図	土坑墓実測図(S = 1/20)	32
第29図	土坑墓内出土土師皿の器高と口径	33
第30図	土坑墓内出土土師皿実測図(S = 1/3)	33
第31図	柵状水場遺構土層図(S = 1/30)	34
第32図	柵状水場遺構内出土銭貨(S = 1/1)	35
第33図	柵状水場遺構内出土陶磁器・鉄製品・青銅製品(S = 1/3)	36
第34図	円形状水場遺構(S = 1/30)	36
第35図	円形状水場遺構内出土遺物(S = 1/3)	37

第36図	水田基本土層模式図	37
第37図	水場遺構に伴う水田址遺構内出土遺物 (S = 1 / 3)	38
第38図	縄文時代早・前期の土器① (S = 1 / 3)	43
第39図	在地 (島原半島) 系押型文土器の概念図	44
第40図	縄文時代早・前期の土器② (S = 1 / 3)	45
第41図	縄文時代早・前期の土器③ (S = 1 / 3)	47
第42図	縄文時代早・前期の土器④ (S = 1 / 3)	49
第43図	縄文時代早・前期の石器① (S = 2 / 3)	53
第44図	縄文時代早・前期の石器② (S = 2 / 3)	55
第45図	縄文時代早・前期の石器③ (S = 2 / 3)	56
第46図	土器出土点数 (一括取り上げ分)	59
第47図	土器出土層位の比率 (一括取り上げ分)	59
第48図	土器出土点数 (出土位置記録分)	59
第49図	土器出土層位の比率 (出土位置記録分)	59
第50図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器① (S = 1 / 3)	63
第51図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器② (S = 1 / 3)	64
第52図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器③ (S = 1 / 3)	65
第53図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器④ (S = 1 / 3)	67
第54図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器⑤ (S = 1 / 3)	68
第55図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器⑥ (S = 1 / 3)	69
第56図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器⑦ (S = 1 / 3)	70
第57図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器⑧ (S = 1 / 3)	72
第58図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器⑨ (S = 1 / 3)	73
第59図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器⑩ (S = 1 / 3)	75
第60図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器⑪ (S = 1 / 3)	76
第61図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器⑫ (S = 1 / 3)	77
第62図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器⑬ (S = 1 / 3)	79
第63図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器⑭ (S = 1 / 3)	81
第64図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器⑮ (S = 1 / 3)	82
第65図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器⑯ (S = 1 / 3)	84
第66図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器⑰ (S = 1 / 3)	85
第67図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器⑱ (S = 1 / 3)	87
第68図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器⑲ (S = 1 / 3)	89
第69図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器⑳ (S = 1 / 3)	91
第70図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器㉑ (S = 1 / 3)	92
第71図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器㉒ (S = 1 / 3)	93
第72図	縄文時代後期→弥生時代前期の土器㉓ (S = 1 / 3)	95

第73図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉓ (S = 1 / 3)	97
第74図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉔ (S = 1 / 3)	98
第75図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉕ (S = 1 / 3)	100
第76図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉖ (S = 1 / 3)	101
第77図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉗ (S = 1 / 3)	103
第78図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉘ (S = 1 / 3)	104
第79図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉙ (S = 1 / 3)	105
第80図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉚ (S = 1 / 3)	106
第81図	縄文時代後期～弥生時代前期の土製品① (S = 1 / 2)	107
第82図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉛ (S = 1 / 3)	109
第83図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉜ (S = 1 / 3)	111
第84図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉝ (S = 1 / 3)	112
第85図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉞ (S = 1 / 3)	114
第86図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉟ (S = 1 / 3)	115
第87図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㊱ (S = 1 / 3)	116
第88図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㊲ (S = 1 / 3)	118
第89図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㊳ (S = 1 / 3)	119
第90図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㊴ (S = 1 / 3)	120
第91図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㊵ (S = 1 / 3)	121
第92図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㊶ (S = 1 / 3)	123
第93図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㊷ (S = 1 / 3)	125
第94図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㊸ (S = 1 / 3)	126
第95図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㊹ (S = 1 / 3)	129
第96図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㊺ (S = 1 / 3)	131
第97図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㊻ (S = 1 / 3)	133
第98図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㊼ (S = 1 / 3)	135
第99図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㊽ (S = 1 / 3)	137
第100図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㊾ (S = 1 / 3)	138
第101図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㊿ (S = 1 / 3)	139
第102図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉀ (S = 1 / 3)	141
第103図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉁ (S = 1 / 3)	143
第104図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉂ (S = 1 / 3)	145
第105図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉃ (S = 1 / 3)	146
第106図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉄ (S = 1 / 3)	148
第107図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉅ (S = 1 / 3)	149
第108図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉆ (S = 1 / 3)	151
第109図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉇ (S = 1 / 3)	152

第110図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑩ (S = 1 / 3)	153
第111図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑪ (S = 1 / 3)	155
第112図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑫ (S = 1 / 3)	157
第113図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑬ (S = 1 / 3)	159
第114図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑭ (S = 1 / 3)	160
第115図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑮ (S = 1 / 3)	162
第116図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑯ (S = 1 / 3)	163
第117図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑰ (S = 1 / 3)	164
第118図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑱ (S = 1 / 3)	166
第119図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑲ (S = 1 / 3)	169
第120図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑳ (S = 1 / 3)	170
第121図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉑ (S = 1 / 3)	171
第122図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉒ (S = 1 / 3)	172
第123図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉓ (S = 1 / 3)	174
第124図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器㉔ (S = 1 / 3)	176
第125図	縄文時代後期～弥生時代前期の土製品② (1332～1343 S = 1 / 2 , 1344・1345 S = 2 / 3)	177
第126図	器種別の石材利用状況グラフ	222
第127図	Ⅲ a 層とⅢ b 層の遺物量比較グラフ	224
第128図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器① (S = 2 / 3)	229
第129図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器② (S = 2 / 3)	231
第130図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器③ (S = 2 / 3)	232
第131図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器④ (S = 1 / 2)	233
第132図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑤ (S = 1 / 2)	234
第133図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑥ (S = 2 / 3)	236
第134図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑦ (S = 2 / 3)	237
第135図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑧ (S = 2 / 3)	239
第136図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑨ (85・86 S = 2 / 3 , 87～90 S = 1 / 2)	241
第137図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑩ (S = 1 / 2)	242
第138図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑪ (S = 1 / 2)	243
第139図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑫ (S = 1 / 2)	244
第140図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑬ (109～119 S = 1 / 3 , 120 S = 1 / 1)	246
第141図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑭ (121～129 S = 1 / 3 , 130 S = 1 / 2)	247
第142図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑮ (S = 1 / 4)	248
第143図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑯ (S = 1 / 1)	248
第144図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑰ (S = 2 / 3)	253
第145図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑱ (S = 2 / 3)	254

第146図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑱ (S = 2 / 3)	255
第147図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑲ (S = 2 / 3)	256
第148図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑳ (178～180 S = 2 / 3 , 181 S = 1 / 2)	257
第149図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㉑ (S = 1 / 2)	258
第150図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㉒ (S = 2 / 3)	259
第151図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㉓ (S = 2 / 3)	261
第152図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㉔ (S = 2 / 3)	262
第153図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㉕ (206・207, 209～228 S = 2 / 3 , 208 S = 1 / 2)	264
第154図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㉖ (S = 1 / 2)	265
第155図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㉗ (S = 1 / 2)	266
第156図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㉘ (239・240 S = 1 / 2 , 241 S = 2 / 3)	267
第157図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㉙ (S = 1 / 2)	268
第158図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㉚ (S = 1 / 2)	269
第159図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㉛ (250・252～262 S = 1 / 3 , 251 S = 1 / 1)	271
第160図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㉜ (S = 1 / 3)	273
第161図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㉝ (267～273 S = 1 / 3 , 274～276 S = 1 / 2)	274
第162図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㉞ (S = 1 / 3)	275
第163図	A・D区石器接合資料分布図 (S = 1 / 800)	280
第164図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㉟ (279 S = 2 / 3 , 280・281 S = 1 / 2)	281
第165図	B・C区石器接合資料分布図 (S = 1 / 800)	282
第166図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㊱ (282 S = 2 / 3 , 283 S = 1 / 2)	283
第167図	石器接合資料の点間距離グラフ	284
第168図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㊲ (284～287 S = 1 / 2 , 288 S = 1 / 3)	285
第169図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㊳ (289～300 S = 2 / 3 , 301～304 S = 1 / 2)	289
第170図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㊴ (S = 1 / 2)	290
第171図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㊵ (S = 1 / 1)	290
第172図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㊶ (308 S = 2 / 3 , 309 S = 1 / 3)	291
第173図	縄文時代後期～弥生時代前期の石器㊷ (310 S = 2 / 3 , 311・312 S = 1 / 2 , 313・314 S = 1 / 3)	292
第174図	鉄器出土地点	294
第175図	鉄器実測図 (S = 1 / 3)	294
第176図	弥生時代中期以降の遺物 A・D区① (S = 1 / 3)	296
第177図	弥生時代中期以降の遺物 A・D区② (S = 1 / 3)	297
第178図	弥生時代中期以降の遺物 B区① (S = 1 / 3)	299
第179図	弥生時代中期以降の遺物 B区② (S = 1 / 3)	301
第180図	弥生時代中期以降の遺物 B区③ (S = 1 / 3)	302

第181図	弥生時代中期以降の遺物 B区④ (S = 1/3)	303
第182図	弥生時代中期以降の遺物 C区 (S = 1/3)	305
第183図	弥生時代中期以降の金属器 (1~8 S = 1/1, 9~14 S = 2/3)	317
第184図	各調査区細分名称図 (S = 1/1 600)	318
第185図	全体図 (S = 1/800)	319~320
第186図	A・D区Ⅲ a層土器・石器分布 (S = 1/800)	322
第187図	A・D区Ⅲ b層土器・石器分布 (S = 1/800)	323
第188図	B・C区Ⅲ a層土器・石器分布 (S = 1/800)	324
第189図	B・C区Ⅲ b層土器・石器分布 (S = 1/800)	325
第190図	B・C区器種別出土数	328
第191図	A・D区器種別出土数	328
第192図	B・C区器種別出土層位の比率	329
第193図	A・D区器種別出土層位の比率	329
第194図	B・C区深鉢A類・深鉢B類の分布 (S = 1/800)	330
第195図	A・D区深鉢A類・深鉢B類の分布 (S = 1/800)	331
第196図	B・C区深鉢C類の分布 (S = 1/800)	332
第197図	A・D区深鉢C類の分布 (S = 1/800)	333
第198図	B・C区深鉢C類口縁部 (文様帯沈線2本・3本)の分布 (S = 1/800)	334
第199図	A・D区深鉢C類口縁部 (文様帯沈線2本・3本)の分布 (S = 1/800)	335
第200図	B・C区深鉢C類口縁部 (文様帯沈線4本・5本・6本・0本)の分布 (S = 1/800)	336
第201図	A・D区深鉢C類口縁部 (文様帯沈線4本・5本・6本・0本)の分布 (S = 1/800)	337
第202図	B・C区深鉢D類の分布 (S = 1/800)	338
第203図	A・D区深鉢D類の分布 (S = 1/800)	339
第204図	B・C区深鉢E類 (刻目原体・指)の分布 (S = 1/800)	340
第205図	A・D区深鉢E類 (刻目原体・指)の分布 (S = 1/800)	341
第206図	B・C区深鉢E類 (刻目原体・棒)の分布 (S = 1/800)	342
第207図	A・D区深鉢E類 (刻目原体・棒)の分布 (S = 1/800)	343
第208図	B・C区深鉢E類 (刻目原体・ヘラ)の分布 (S = 1/800)	344
第209図	A・D区深鉢E類 (刻目原体・ヘラ)の分布 (S = 1/800)	345
第210図	B・C区深鉢底部A類・深鉢底部B類の分布 (S = 1/800)	346
第211図	A・D区深鉢底部A類・深鉢底部B類の分布 (S = 1/800)	347
第212図	B・C区深鉢底部C類・深鉢底部D類・深鉢底部E類の分布 (S = 1/800)	348
第213図	A・D区深鉢底部C類・深鉢底部D類・深鉢底部E類の分布 (S = 1/800)	349
第214図	B・C区浅鉢A類・浅鉢B類の分布 (S = 1/800)	350
第215図	A・D区浅鉢A類・浅鉢B類の分布 (S = 1/800)	351
第216図	B・C区浅鉢C類の分布 (S = 1/800)	352
第217図	A・D区浅鉢C類の分布 (S = 1/800)	353

第218図	B・C区浅鉢D類・浅鉢E類の分布 (S = 1/800)	354
第219図	A・D区浅鉢D類・浅鉢E類の分布 (S = 1/800)	355
第220図	B・C区浅鉢F類・浅鉢G類の分布 (S = 1/800)	356
第221図	A・D区浅鉢F類・浅鉢G類の分布 (S = 1/800)	357
第222図	B・C区浅鉢H類・浅鉢I類の分布 (S = 1/800)	358
第223図	A・D区浅鉢H類・浅鉢I類の分布 (S = 1/800)	359
第224図	B・C区浅鉢K類の分布 (S = 1/800)	360
第225図	A・D区浅鉢K類の分布 (S = 1/800)	361
第226図	B・C区浅鉢L類・浅鉢M類の分布 (S = 1/800)	362
第227図	A・D区浅鉢L類・浅鉢M類の分布 (S = 1/800)	363
第228図	B・C区浅鉢M類(種類別)の分布 (S = 1/800)	364
第229図	A・D区浅鉢M類(種類別)の分布 (S = 1/800)	365
第230図	B・C区浅鉢J類・浅鉢N類・浅鉢O類の分布 (S = 1/800)	366
第231図	A・D区浅鉢J類・浅鉢N類・浅鉢O類の分布 (S = 1/800)	367
第232図	B・C区貼り付け・リボン状突起・ヒレ状突起を持つ土器の分布 (S = 1/800)	368
第233図	A・D区貼り付け・リボン状突起・ヒレ状突起を持つ土器の分布 (S = 1/800)	369
第234図	B・C区胎土に小礫を多量に含む土器の分布 (S = 1/800)	370
第235図	A・D区胎土に小礫を多量に含む土器の分布 (S = 1/800)	371
第236図	B・C区彩色土器の分布 (S = 1/800)	372
第237図	A・D区彩色土器の分布 (S = 1/800)	373
第238図	B・C区壺の分布 (S = 1/800)	374
第239図	A・D区壺の分布 (S = 1/800)	375
第240図	A・D区剥片素材石器群の分布 (S = 1/800)	376
第241図	A・D区礫・岩片素材石器群の分布 (S = 1/800)	377
第242図	A・D区原石・石核の分布 (S = 1/800)	378
第243図	A・D区剥片・砕片の分布 (S = 1/800)	379
第244図	A・D区石鏃・局部磨製石鏃・石鏃未製品の分布 (S = 1/800)	380
第245図	A・D区石錐・彫器・楔形石器の分布 (S = 1/800)	381
第246図	A・D区播 / 削器A～C類の分布 (S = 1/800)	382
第247図	A・D区播 / 削器D類の分布 (S = 1/800)	383
第248図	A・D区石砲丁様石器の分布 (S = 1/800)	384
第249図	A・D区籠状石器・異形石器・つまみ形石器の分布 (S = 1/800)	385
第250図	A・D区二次加工剥片A・B類の分布 (S = 1/800)	386
第251図	A・D区使用痕剥片の分布 (S = 1/800)	387
第252図	A・D区打製石斧A～D類の分布 (S = 1/800)	388
第253図	A・D区打製石斧未製品・打製石斧剥片の分布 (S = 1/800)	389
第254図	A・D区磨製石斧A～C類・磨製石斧未製品・蛇紋岩片の分布 (S = 1/800)	390

第255図	A・D区石皿の分布 (S = 1/800)	391
第256図	A・D区台石・砥石の分布 (S = 1/800)	392
第257図	A・D区磨石/敲石A類(サイズ大・中・小)の分布 (S = 1/800)	393
第258図	A・D区磨石/敲石B類(サイズ大・中・小)の分布 (S = 1/800)	394
第259図	A・D区磨石/敲石C類・ストーンリッターの分布 (S = 1/800)	395
第260図	A・D区円盤状石器・玉の分布 (S = 1/800)	396
第261図	A・D区岩片・水磨礫・小礫の分布 (S = 1/800)	397
第262図	B・C区剥片素材石器群の分布 (S = 1/800)	398
第263図	B・C区礫・岩片素材石器群の分布 (S = 1/800)	399
第264図	B・C区原石・石核の分布 (S = 1/800)	400
第265図	B・C区剥片・砕片の分布 (S = 1/800)	401
第266図	B・C区石鏃・石鏃未製品の分布 (S = 1/800)	402
第267図	B・C区石錐・礫錐・彫器・楔形石器の分布 (S = 1/800)	403
第268図	B・C区搔/削器A〜C類の分布 (S = 1/800)	404
第269図	B・C区搔/削器D類・石匙の分布 (S = 1/800)	405
第270図	B・C区石庖丁様石器・磨製石庖丁の分布 (S = 1/800)	406
第271図	B・C区籠状石器・つまみ形石器の分布 (S = 1/800)	407
第272図	B・C区二次加工剥片A・B類の分布 (S = 1/800)	408
第273図	B・C区使用痕剥片の分布 (S = 1/800)	409
第274図	B・C区打製石斧A〜D類の分布 (S = 1/800)	410
第275図	B・C区打製石斧未製品・打製石斧剥片の分布 (S = 1/800)	411
第276図	B・C区磨製石斧A〜C類・蛇紋岩片の分布 (S = 1/800)	412
第277図	B・C区石皿の分布 (S = 1/800)	413
第278図	B・C区台石・砥石の分布 (S = 1/800)	414
第279図	B・C区磨石/敲石A類(サイズ大・中・小)の分布 (S = 1/800)	415
第280図	B・C区磨石/敲石B類(サイズ大・中・小)の分布 (S = 1/800)	416
第281図	B・C区磨石/敲石C類・ストーンリッターの分布 (S = 1/800)	417
第282図	B・C区石錐・円盤状石器の分布 (S = 1/800)	418
第283図	B・C区岩片・水磨礫・小礫の分布 (S = 1/800)	419
第284図	石器変遷概略図	423
第285図	深鉢E類の刻目原体別出土数とその比率(出土位置記録分)	423
第286図	B・C区時期別分布① (S = 1/800)	426
第287図	A・D区時期別分布① (S = 1/800)	427
第288図	B・C区時期別分布② (S = 1/800)	428
第289図	A・D区時期別分布② (S = 1/800)	429
第290図	B・C区時期別分布③ (S = 1/800)	430
第291図	A・D区時期別分布③ (S = 1/800)	431

第292図	権現脇遺跡の石器組成グラフ①(全器種)	433
第293図	権現脇遺跡の石器組成グラフ②(一部除外)	437
第294図	権現脇遺跡の石器	438

表 目 次

第1表	深江町内遺跡一覧	6
第2表	範囲確認調査出土遺物観察表	11
第3表	A・D区ビット群出土遺物観察表	39
第4表	B・C区ビット群出土遺物観察表	39
第5表	出土石器観察表	39
第6表	土坑1内出土遺物観察表	39
第7表	土坑2内出土遺物観察表	39
第8表	土坑墓内出土土師皿観察表	39
第9表	枡状水場遺構内出土遺物(銭貨)	40
第10表	枡状水場遺構内出土遺物(陶磁器・磁器製品・鉄製品・青銅製品)	40
第11表	円形水場遺構内出土遺物	40
第12表	水場遺構に伴う水田址内出土遺物	40
第13表	縄文時代早・前期土器観察表①	50
第14表	縄文時代早・前期土器観察表②	51
第15表	縄文時代早期石器計測表	57
第16表	土器出土点数	59
第17表	A・D区出土土器・土製品観察表①	178
第18表	A・D区出土土器・土製品観察表②	179
第19表	A・D区出土土器・土製品観察表③	180
第20表	A・D区出土土器・土製品観察表④	181
第21表	A・D区出土土器・土製品観察表⑤	182
第22表	A・D区出土土器・土製品観察表⑥	183
第23表	A・D区出土土器・土製品観察表⑦	184
第24表	A・D区出土土器・土製品観察表⑧	185
第25表	A・D区出土土器・土製品観察表⑨	186
第26表	A・D区出土土器・土製品観察表⑩	187
第27表	A・D区出土土器・土製品観察表⑪	188
第28表	A・D区出土土器・土製品観察表⑫	189
第29表	A・D区出土土器・土製品観察表⑬	190
第30表	B・C区出土土器・土製品観察表①	191
第31表	B・C区出土土器・土製品観察表②	192

第32表	B·C区出土石器·土製品觀察表③	193
第33表	B·C区出土石器·土製品觀察表④	194
第34表	B·C区出土石器·土製品觀察表⑤	195
第35表	B·C区出土石器·土製品觀察表⑥	196
第36表	B·C区出土石器·土製品觀察表⑦	197
第37表	B·C区出土石器·土製品觀察表⑧	198
第38表	B·C区出土石器·土製品觀察表⑨	199
第39表	B·C区出土石器·土製品觀察表⑩	200
第40表	B·C区出土石器·土製品觀察表⑪	201
第41表	B·C区出土石器·土製品觀察表⑫	202
第42表	B·C区出土石器·土製品觀察表⑬	203
第43表	B·C区出土石器·土製品觀察表⑭	204
第44表	B·C区出土石器·土製品觀察表⑮	205
第45表	B·C区出土石器·土製品觀察表⑯	206
第46表	B·C区出土石器·土製品觀察表⑰	207
第47表	B·C区出土石器·土製品觀察表⑱	208
第48表	B·C区出土石器·土製品觀察表⑲	209
第49表	B·C区出土石器·土製品觀察表㉑	210
第50表	B·C区出土石器·土製品觀察表㉒	211
第51表	B·C区出土石器·土製品觀察表㉓	212
第52表	B·C区出土石器·土製品觀察表㉔	213
第53表	器種·石材分類表	215
第54表	石器屬性表	215
第55表	地区別·層位別石器數量表	221
第56表	器種別·石材別集計表	223
第57表	A·D区, B·C区石器組成表(實數)	225
第58表	地区別·層位別石器組成表(實數)	226
第59表	地区別·層位別石器組成表(点数/100m ²)	227
第60表	A·D区Ⅲa·Ⅲb層石器計測表①	249
第61表	A·D区Ⅲa·Ⅲb層石器計測表②	250
第62表	A·D区Ⅲa·Ⅲb層石器計測表③	251
第63表	B·C区Ⅲa·Ⅲb層石器計測表①	276
第64表	B·C区Ⅲa·Ⅲb層石器計測表②	277
第65表	B·C区Ⅲa·Ⅲb層石器計測表③	278
第66表	B·C区Ⅲa·Ⅲb層石器計測表④	279
第67表	石器接合資料座標值·点間距離一覽表	286
第68表	石器接合資料計測表	287

第69表	Ⅱ・Ⅳ層出土石器計測表	293
第70表	中世土器・陶磁器の分布状況	307
第71表	遺跡出土の中世土器・陶磁器類の集計表	308
第72表	A・D区土器・陶磁器・その他観察表①	309
第73表	A・D区土器・陶磁器・その他観察表②	310
第74表	A・D区土器・陶磁器・その他観察表③	311
第75表	B区土器・陶磁器・その他観察表①	311
第76表	B区土器・陶磁器・その他観察表②	312
第77表	B区土器・陶磁器・その他観察表③	313
第78表	B区土器・陶磁器・その他観察表④	314
第79表	B区土器・陶磁器・その他観察表⑤	315
第80表	C区土器・陶磁器・その他観察表	315
第81表	中・近世金属器	316
第82表	器種別出土数(出土位置記録分)	327

図版目次

図版 1	遺跡遠景(西から), 遺跡遠景(北から)	441
図版 2	調査風景・整理風景	442
図版 3	範囲確認調査出土遺物	443
図版 4	D区G列北壁土層(南から), D区東側露頭(南東から)	444
図版 5	A区(A 5)Ⅳ層上面遺構検出状況(西から), A区(A 3)Ⅳ層上面遺構検出状況(南から)	445
図版 6	A区(A 1・2)Ⅳ層上面遺構検出状況(西から), A区(A 4)Ⅳ層上面遺構検出状況(西から)	446
図版 7	A区(A 1)Ⅳ層上面遺構検出状況(南西から), A区(A 2)Ⅳ層上面遺構検出状況(西から)	447
図版 8	D区Ⅵ層上面検出状況(南から), D区Ⅵ層上面検出状況(北から)	448
図版 9	C区Ⅳ層上面遺構検出状況(東から), C区Ⅳ層上面遺構検出状況(西から)	449
図版10	B区Ⅳ層上面遺構検出状況(西から), B区Ⅳ層上面遺構検出状況(北東から)	450
図版11	B区Ⅳ層上面遺構検出状況(西から), B区Ⅳ層上面遺構検出状況(東から)	451
図版12	B区埋甕検出状況(東から), B区埋甕検出状況(南から)	452
図版13	A区土坑1検出状況(西から), A区土坑2検出状況(北から)	453
図版14	A区土坑墓検出状況(北から), A区土坑墓検出状況(西から)	454
図版15	A区土坑墓検出状況(北から), A区土坑墓検出状況(北から)	455
図版16	D区楕円状水場遺構(北から), D区円形水場遺構(東から)	456
図版17	雨裂1(東から), 雨裂1(東から), 雨裂2(東から), 雨裂2(北から), 倒木痕, 倒木痕,	

	倒木痕、クズの根	457
図版18	A区土器・土製品出土状況	458
図版19	A区石器出土状況、D区土器・石器出土状況	459
図版20	B区土器・石器出土状況	460
図版21	B区鉄器出土地点、B区鉄器出土状況	461
図版22	A・D区ビット群出土土器、B・C区ビット群出土土器	462
図版23	B区埋葬	463
図版24	A区土坑1内出土土器、A区土坑2内出土土器	464
図版25	A区土坑墓内出土土師皿	465
図版26	D区榊状水場遺構内出土遺物、D区円形水場遺構内出土遺物・水田址内出土遺物	466
図版27	縄文時代早・前期の土器	467
図版28	縄文時代早・前期の土器	468
図版29	縄文時代早・前期の土器	469
図版30	縄文時代早・前期の土器	470
図版31	縄文時代早・前期の石器	471
図版32	縄文時代早・前期の石器	472
図版33	縄文時代早・前期の石器	473
図版34	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）	474
図版35	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）	475
図版36	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）	476
図版37	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）	477
図版38	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）	478
図版39	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）	479
図版40	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）	480
図版41	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）	481
図版42	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）	482
図版43	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）	483
図版44	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）	484
図版45	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）	485
図版46	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）	486
図版47	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）	487
図版48	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）	488
図版49	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）	489
図版50	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）	490
図版51	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）	491
図版52	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区・刻目突帯文土器拡大）	492
図版53	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）	493

図版54	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区)	494
図版55	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区)	495
図版56	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区)	496
図版57	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区)	497
図版58	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区)	498
図版59	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区)	499
図版60	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区)	500
図版61	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区)	501
図版62	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区)	502
図版63	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区)	503
図版64	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区)	504
図版65	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区)	505
図版66	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区)	506
図版67	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区)	507
図版68	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区・組織痕土器拡大)	508
図版69	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区・組織痕土器拡大)	509
図版70	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区・組織痕土器拡大)	510
図版71	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区・組織痕土器拡大)	511
図版72	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区・組織痕土器拡大)	512
図版73	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区)	513
図版74	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区)	514
図版75	縄文時代後期～弥生時代前期の土製品 (A・D区)	515
図版76	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	516
図版77	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	517
図版78	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	518
図版79	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	519
図版80	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	520
図版81	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	521
図版82	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	522
図版83	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	523
図版84	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	524
図版85	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	525
図版86	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	526
図版87	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	527
図版88	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	528
図版89	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	529
図版90	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	530

図版91	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	531
図版92	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	532
図版93	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	533
図版94	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	534
図版95	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	535
図版96	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	536
図版97	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	537
図版98	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	538
図版99	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	539
図版100	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	540
図版101	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区・線刻土器拡大)	541
図版102	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	542
図版103	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区・刻目突帯文土器拡大)	543
図版104	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区・刻目突帯文土器拡大)	544
図版105	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区・刻目突帯文土器拡大)	545
図版106	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区・刻目突帯文土器拡大)	546
図版107	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区・刻目突帯文土器拡大)	547
図版108	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区・刻目突帯文土器拡大)	548
図版109	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区・刻目突帯文土器拡大)	549
図版110	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区・刻目突帯文土器拡大)	550
図版111	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区・刻目突帯文土器拡大)	551
図版112	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区・刻目突帯文土器拡大)	552
図版113	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	553
図版114	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	554
図版115	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	555
図版116	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	556
図版117	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	557
図版118	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	558
図版119	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	559
図版120	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	560
図版121	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	561
図版122	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	562
図版123	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	563
図版124	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	564
図版125	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	565
図版126	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	566
図版127	縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)	567

図版128	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区・組織痕土器拡大）	568
図版129	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区・組織痕土器拡大）	569
図版130	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区・組織痕土器拡大）	570
図版131	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区・組織痕土器拡大）	571
図版132	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）	572
図版133	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）	573
図版134	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）	574
図版135	縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）	575
図版136	縄文時代後期～弥生時代前期の土製品（B・C区）	576
図版137	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）	577
図版138	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）	578
図版139	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）	579
図版140	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）	580
図版141	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）	581
図版142	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）	582
図版143	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）	583
図版144	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）	584
図版145	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）	585
図版146	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）	586
図版147	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）	587
図版148	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）	588
図版149	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）	589
図版150	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）	590
図版151	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）	591
図版152	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）	592
図版153	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）	593
図版154	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）	594
図版155	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）	595
図版156	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）	596
図版157	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）	597
図版158	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）	598
図版159	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）	599
図版160	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）	600
図版161	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）	601
図版162	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）	602
図版163	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）	603
図版164	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）	604

図版165	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）	605
図版166	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）	606
図版167	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）	607
図版168	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）	608
図版169	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区・接合資料）	609
図版170	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区・接合資料）	610
図版171	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区・接合資料）	611
図版172	縄文時代後期～弥生時代前期の石器（Ⅱ層）	612
図版173	縄文時代後期～弥生時代前期の石器	613
図版174	縄文時代後期～弥生時代前期の石器	614
図版175	B区出土鉄器	615
図版176	弥生時代中期以降の遺物（A区）	616
図版177	弥生時代中期以降の遺物（B区）	617
図版178	弥生時代中期以降の遺物（B区）	618
図版179	弥生時代中期以降の金属器	619

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

1. 立地・環境

長崎県南部は、西彼杵半島、長崎半島、島原半島の3つの半島により構成される。島原半島は、長崎県の最南端にあたる東西約24km、南北約32kmの「胃袋状」の形状である。半島は、東が有明海、西が橘湾（千々石湾）に面し、南が早崎瀬戸をへだてて天草と向き合っている。半島の付け根でもある諫早市・旧愛野町の付近は、かつて縄文海進により肥前半島と島原半島が寸断され、有明海と橘湾とが水道状に繋がる諫早地峡・愛野地峡であった。

半島には、別府 島原地溝帯（断層帯）が横断する。雲仙火山地域は、普賢岳を主峰に、東

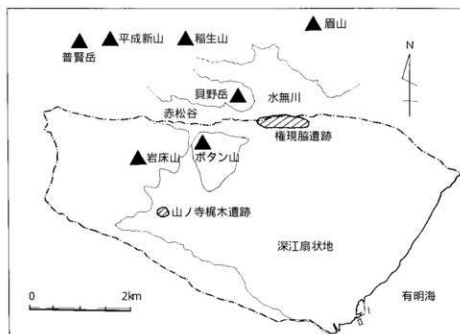


第1図 深江町位置図

に眉山、西に国見岳、九千部岳、北に吾妻岳、鉢巻山等により構成している。この主峰である普賢岳が、1990年より5年に及ぶ平成の噴火活動の末に平成新山を形成した。その甚大な被害を受けた深江町は、その普賢岳・平成新山などの急峻な山々を背に控え、北に島原扇状地との境にそびえたつ眉山といった山々に囲まれ火山山麓扇状地の「深江扇状地」を形成している。遺跡は、急峻な山麓と緩斜面との傾斜変換点に位置し、海に向かい緩やかな勾配にある。また、遺跡は、深江扇状地の扇頂部付近にあたる。

遺跡の北には、平成新山（1,486m）、稲生山（820m）、貝野岳（485m）等がある。遺跡に最も近接する貝野岳の南を赤松谷が走り、貝野岳の北を走る水無川と合流する。遺跡は、水無川の右岸の標高218m～235mの大字「大野木場」に位置する。遺跡の南西には、西より岩床山（694m）、ポタン山（452m）が位置する。ポタン山の北東に位置するのが権現脳遺跡で、南西に位置するのが山ノ寺榎木遺跡である（第2図）。両遺跡は、ポタン山により分断する形で、その左右に位置している。遺跡との距離は直線距離で約3kmである。権現脳遺跡の遺跡範囲とも関わってくるが、遺跡よりポタン山を赤松谷に沿って登ると標高350m付近で縄文時代晩期の遺物が散布している。この地点までを遺跡の範囲とするならば、岩床山とポタン山との間のポタン山東周回ルートを通れば山ノ寺榎木遺跡まで2km程で到達し近距離に思える。またポタン山東側周辺にも水源があり、山ノ寺の集落へ流れている。

標高約200mに広がる遺跡からの眺めは、有明海（島原湾）を挟んで対岸の熊本、宇城、天草周辺がパノラマ状に一望できる。遺跡から有明海を挟んで見渡せることのできる対岸の「環有明海東部沿岸地域」（荒尾、玉名、熊本、宇城の一带）は、縄文時代で著名な曾畑貝塚、轟貝塚、阿



第2図 周辺地形概念図

高貝塚、太郎迫遺跡、御領貝塚等の標識遺跡がある。有明海は、内海で魚介類の生息に好条件な砂礫や干潟が広がる。陸地もまた肥沃な土壌で農作物に恵みをもたしている。これら有明海を囲む「環有明海沿岸地域」は、陸・海ともに豊かな生活を営むのに適した文化圏として形成されていたと言える。同様に環有明海西部には、その恩恵を授かった百花台遺跡、一野遺跡、弘法原遺跡、山ノ寺楯木遺跡といった著名な遺跡がある。権現脇遺跡もまたその代表例といえ、有明海に面する島原半島の東端部、つまり「環有明海西部沿岸地域」に位置している。

2. 火山と遺跡

深江町は、雲仙火山地域である。遺跡には、過去の人々の残してきた痕跡を、火山による噴出物が幾層にも堆積し包含している。

雲仙火山は、単成火山の小規模な活動の末に、遡ること50万年前に島原半島の中央で活動を開始した。雲仙火山の歴史は、古期（50万年前～15万年前）と新期（15万年前～現在）に大別される。

古期の最初の15万年間には、爆発的な噴火を伴う活発な火山活動があり、急速に大きな山体が形成され、火砕流が四方に流れて、裾野を広げた。この裾野が島原半島の北と南とに広がる扇状地であり、雲仙地溝が活発に動き始める30万年以前の火山の噴出物で形成されている。20万年前の1～2万年間にも、火砕流を発生させる噴火が20回以上もあった。溶岩に換算された雲仙火山全体の総噴出量は約44km³であり、その8割が古期に噴出している。雲仙火山の土台は、古期の噴火活動で作られた。

新期の噴火活動は火口が東に偏り、半島東側の地形を形成してきた。野岳、妙見岳、そして普賢岳の火山が次々と生まれた。8万年前後に活動した野岳火山は2回の山体崩壊を起こしている。その崩壊地形の中で3万年ほど前に妙見岳が成長していくが、妙見岳も山体崩壊を起こし、南東に開いた直径1.5kmの馬蹄形の崩壊地形である妙見カルデラが残った。そのカルデラの中に2万年前から4、5

千年おきに出現する溶岩ドームによって形成されたのが普賢岳である。平成新山は4番目に出現したドームである。溶岩ドームの形成とともに、火砕流が流下し、土石流が発生し、麓には扇状地が発達していった。4千年ほど前には、雲仙火山で最大級の溶岩ドームである眉山が出現した。

有史以降の噴火歴は、過去2回、江戸時代に見られる。1663年（寛文3年）、普賢岳九十九丸火口から噴煙が上がり、北東斜面より古焼溶岩が約1km流下した。水無川で土石流が発生し、30余名の死者がでている。そして1792年（寛政4年）、普賢岳地獄跡火口から噴煙が上がり、北東斜面より新焼溶岩が約2km流下した。その後、島原城下町の背後にそびえる眉山の東斜面が鳴動し崩れた。3億 m^3 以上の土砂が、町を埋めながら有明海に流入し、津波を発生させた。島原城下町と対岸の肥後との有明海沿岸部での津波による犠牲者は、1万5千人にものぼった。これが、わが国の火山災害史最大規模の惨事「島原大変肥後迷惑」である。

1990年11月17日に始まる普賢岳の平成噴火であるが、その約1万年前から普賢岳西方、橘湾の地下10kmほどの深さを震源とする群発地震が発生した。震源はしだいに東へ移動しながら浅くなり、普賢岳の直下へと向かった。震源の移動は、マグマの移動を示していた。1991年5月20日に地表に現れた溶岩は、過去の雲仙火山の溶岩と同質の粘性の強いデイサイト溶岩である。溶岩の粘質が強いため流れずに溶岩ドームを形成するという噴火の形態をとった。斜面に成長する溶岩ドームの不安定な部分が崩れ、砕ける溶岩から火砕流が発生するメラビ型火砕流であり、9千回以上の火砕流が繰り返し流下した。斜面に堆積した噴出物は、雨が降るとたびたび土石流となり、住宅地、田畑を破壊して有明海まで達した。溶岩の噴出量は、最盛時に1日に30～40万 m^3 におよび、約4年間の総噴出量は約2億 m^3 で、そのおよそ半分の量が異様な姿の溶岩ドームとして山頂に残っている。「平成新山」と命名された溶岩ドームは、それ自身の高さが250m以上あり、標高は1,483mとなり、雲仙火山の新たな主峰となった。今回の噴火においては、44名の犠牲者がでた。深江町の主たる産業である農業、酪農、水産業も大きな痛手を受け、多方面にわたる経済的な損失も莫大なものであった。

さて、権現脳遺跡は、扇状地の扇頂部付近に位置しており、背に火山山麓がそびえたち、火山活動災害を受けやすい立地・環境にある。遺跡で認められる災害現象は、詳しくは第Ⅲ章、第1節の「基本土層」と第3節の「風倒木痕」に詳述している。遺跡より、縄文時代早期後半の遺物包含層の上方より約6千300年前に鹿児島県の硫黄島や竹島を外輪山とする海底火山である鬼界カルデラで発生した大規模噴火に伴う噴出物（アカホヤ火山灰）が二次堆積したと思われる無遺物層が確認できた。アカホヤという広域テフラにより遺跡にも影響を及ぼしたのであろう。この層の上面には、眉山方面からの火砕流により、木々がなぎ倒された風倒木痕跡や土層断面が確認できた。その上面には、縄文時代後期末から弥生時代早期遺物を多量に含む黒色腐食質火山灰土、いわゆる「クロボク」が堆積している。この黒土が肥沃な土壌となり縄文時代後期末から弥生時代早期にかけて、人々の生活の拠点であったことであろう。

【参考・引用文献】

- 大河憲二 2005『地理的環境』『下末宝・上畦津遺跡』深江町教育委員会
諫見富士郎 2001『遺跡と立地』『大野原遺跡』有明町教育委員会
田島俊彦 2001『雲仙火山の火山噴出物について』『大野原遺跡』有明町教育委員会



噴火以前の普賢岳



噴火沈静後の普賢岳

第2節 歴史的環境

深江町は雲仙普賢岳麓から有明海へ東に向かって複合的に形成された扇状地上に立地し、有明海をはさんで対岸には熊本平野や宇土半島を臨むことができる。

深江町における遺跡の立地は、主に地下水の湧出の見られる扇状地の頂部付近と扇端、扇状地の両脇を流れる水無川、深江川の両河川の流域に限られ、扇状地の中央部分は遺跡の空白地帯となっている。これまでに遺跡の内容について詳細が明らかになっている遺跡は少ないが、近年深江川流域一帯において古江・田中地区圃場整備事業が計画されたことにより、それに伴って実施した試掘調査等では下末宝遺跡、上畦津遺跡、堂家遺跡などの新たな遺跡の発見が相次いでいる。

深江町には、現在22ヶ所の遺跡が知られている。時代を追って町内遺跡を概観する。

深江町においてはこれまで旧石器時代の遺跡は知られていない。

縄文時代に入ると縄文時代早期から出土地が知られるようになる。下末宝遺跡においては縄文時代早期の押型文期の土器・石器が多量に検出されている。また、瀬野地区から中原地区にかけての海岸や山ノ寺田中山遺跡において押型文土器や捺糸文土器が採集されている。

前期の遺跡としては、山ノ寺榎木遺跡があり、曾畑式土器が採集されているようである。

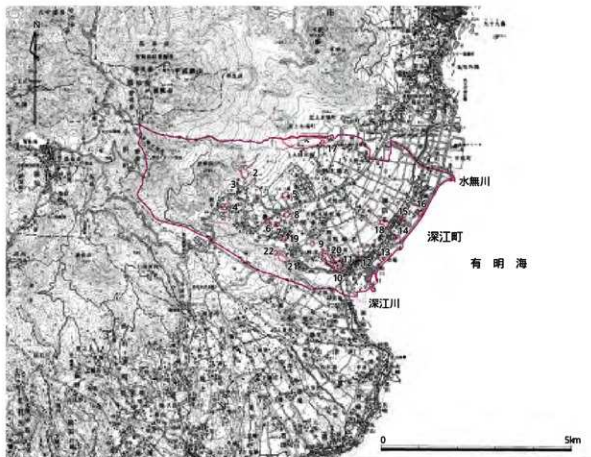
縄文時代晩期～突帯文期の出土地を上げると、山ノ寺榎木、山ノ寺田中山、瀬野海岸、中原海岸、末宝、内野、舟川海岸、大野木場、弓太郎、下江中の地名を『深江町郷土史』によって知ることができ、近年も二本樫遺跡、権現脇遺跡、上畦津遺跡、堂家遺跡、西板首地区等で遺物の発見が相次いでいる状況で、非常に多彩である。雲仙普賢岳のすぐ麓から海岸近くまで標高を選ばずに分布している。

その中でも考古学史上の重要な遺跡として山ノ寺榎木遺跡が上げられる。山ノ寺榎木遺跡は、古田正隆氏によって初圧痕土器や紡錘車が採集されたことによってその重要性が知られることとなり、これまでに5回の発掘調査が実施されている。また、出土した刻目突帯文を特徴とする土器は、森貞次郎氏によって縄文時代晩期終末に位置付けられる山ノ寺式土器として設定されている。縄文時代から弥生時代への移行期にあたり、その歴史的重要性は日本における初期農耕文化を考えると欠くことができない。

弥生時代の遺跡としては、近年の圃場整備に伴う試掘・範囲確認調査、本調査において上畦津地区に中期から後期にかけての良好な遺物出土地が知られるようになった。また、『深江町郷土史』によれば中期から後期にかけての土器片が上瀬野から中原にかけて分布するとある。二本樫遺跡でも中期の遺物が採集可能である。中原地区においては甕棺墓、壺棺墓、配石土坑墓の発見の記録がある。いずれも海岸に近い一帯である。中原地区において成人用の甕棺墓が出土していることは、北隣、島原市に所在する墳墓遺跡である景華園遺跡や北部九州をはじめとする有明海沿岸の他地域との交流を考える上で重要である。

古墳時代の遺跡としては、平成16年には山ノ寺榎木遺跡の畑地から古墳時代の青銅製重圏文鏡が表面採集され、山ノ寺榎木遺跡の新たな一面が知られることとなった。これまでに山ノ寺榎木遺跡において古墳時代にかかわる遺物の発見はなく、また深江町内全体を見ても古墳はおろか古墳時代の遺跡自体もほとんど知られていない状況にある。水田地帯の広がる海岸近くの平野部ではなく、標高の高い山麓地での採集であることは、注目すべきところであろう。

1 が山ノ寺榎木遺跡で採集された重圏文鏡で直径6.0cmを測り、重量は29.6gである。背面には半



第3図 深江町内遺跡地図 (S = 1/100,000)

第1表 深江町内遺跡一覧

番号	名称	所在地	種別	立地	時代
1	権現脇遺跡	深江町大野木場名	遺物包含地	台地	縄文・弥生・中世・近世
2	田中山遺跡	深江町田中山牡丹開墾地	遺物包含地	丘陵	縄文
3	山ノ寺宝篋印塔	深江町田中名山ノ寺	石造物	丘陵	中世
4	山ノ寺榎木遺跡	深江町田中名山ノ寺	遺物包含地	丘陵	縄文
5	池平遺跡	深江町大野木場名池平	遺物包含地	丘陵	縄文
6	内野遺跡	深江町古江名内野	遺物包含地	丘陵	縄文
7	未宝遺跡	深江町古江名未宝	遺物包含地	丘陵	縄文
8	弓太郎遺跡	深江町古江名弓太郎	遺物包含地	平野	縄文
9	江川遺跡	深江町田中名江川	遺物包含地	平野	縄文
10	深江貝塚	深江町馬場名立馬場	貝塚	丘陵	不明
11	深江城跡	深江町馬場名立馬場	城跡	台地	中世
12	井手口キリシタン墓碑	深江町馬場名井手口	キリシタン墓碑	丘陵	中世・近世
13	舟川遺跡	深江町諏訪名舟川	遺物包含地	平野	縄文
14	瀬野遺跡	深江町諏訪名中原	墳墓	丘陵	弥生
15	中原遺跡	深江町諏訪名中原	墳墓	平野	弥生
16	瀬野海中干潟遺跡	深江町諏訪名下瀬野	遺物包含地	海岸部	縄文
17	深江木場遺跡	深江町大野木場名椎ノ木坂	遺物包含地	丘陵	縄文
18	二本榎遺跡	深江町諏訪名二本榎	遺物包含地	平野	縄文・弥生
19	下未宝遺跡	深江町古江名下未宝	遺物包含地	丘陵	縄文
20	上畦津遺跡	深江町田中名上畦津	遺物包含地	丘陵	縄文・弥生・中世
21	高平原遺跡	深江町古江名高平原	遺物包含地	丘陵	縄文・弥生
22	堂家遺跡	深江町古江名堂家	遺物包含地	丘陵	縄文・弥生

球形の鈕を持ち、鈕孔は長方形である。これを5重の円圏文、さらにその周りを櫛歯文が巡る。また、背面には赤色顔料が塗付されている。

古代の遺跡としては、深江城跡周辺において土師器・須恵器の採集の記録がある。水田地帯の広がる深江川下流域を生活の基盤において集落が営まれていた可能性がある。

中世期になると、鎌倉時代中期に安富氏が地頭として深江の地に入り、深江城を本拠地としている。安富氏は1584年の島津連合軍と竜造寺軍の争いで、竜造寺方について敗北し、佐賀県鹿島市に逃れ、姓を深江と改めている。深江城は深江川とその支流の畦津川・葉師川に挟まれた台地上にあり、石垣が築かれていたとされるが、現在にその面影はあまり無い。石垣の石材は1618年から7年の歳月をかけて築城された森岳城へと運ばれたという。

また、松山地区には「木の宮の谷」と呼ばれるところがあり、今でも高さ約2mの石垣が確認でき、谷が周囲をめぐる。おそらく谷は堀として利用されたものであろう。ここを中世期に豪族が屋敷とし、一帯を支配したと考えられている。

【参考文献】

深江町郷土誌編さん委員会 1971『深江町郷土史』深江町

本多和典編 2004『下末室遺跡・上畦津遺跡』深江町教育委員会

福田一志 1999『山ノ寺槻木遺跡』『県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅱ』長崎県教育委員会

古田正隆 1973『山ノ寺槻木遺跡』百人委員会



第4図 青銅鏡実測図 (S = 1/1)

第Ⅱ章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 範囲確認調査

調 査

権現脇遺跡は、普賢岳平成噴火の沈静後、水無川流域における砂防工事の過程で発見され、周知のものとなった。そうした中、国土交通省雲仙工事事務所により、遺跡内において水無川直轄砂防事業の一環として赤松谷川1号導流堤・2号導流堤の建設が計画された。普賢岳噴火活動の沈静化による立ち入り禁止区域の縮小を受け、導流堤の工事計画地において深江町教育委員会が主体となり範囲確認調査を実施した。調査にあたっては長崎県教育庁芸文化課及び島原市教育委員会の協力を得た。

試掘坑は、赤松谷川2号導流堤の計画地を中心に設定した。調査面積は80㎡で、人力によって掘削した。調査の結果、土層はいずれの試掘坑においても概ね共通しており、以下の7層に分けられた。

- | | | | |
|------|--------------|-----|---------------|
| 1 層 | 茶褐色土層（耕作土） | 4 層 | 暗黄褐色土層（遺物包含層） |
| 2 層 | 暗茶褐色土層 | 5 層 | 黄褐色土層 |
| 3 a層 | 黒褐色土層 | 6 層 | 灰黒色土層 |
| 3 b層 | 黒褐色土層（遺物包含層） | 7 層 | 黄色土層 |

9箇所の試掘坑において3層下部から4層上部にかけて縄文時代晩期を主体とする遺物を確認し、この時点で遺構の確認はできなかったが、良好な遺物包含層の残存することが明らかとなった。よって、A～C区の約7,300㎡について本調査が必要であると判断された。

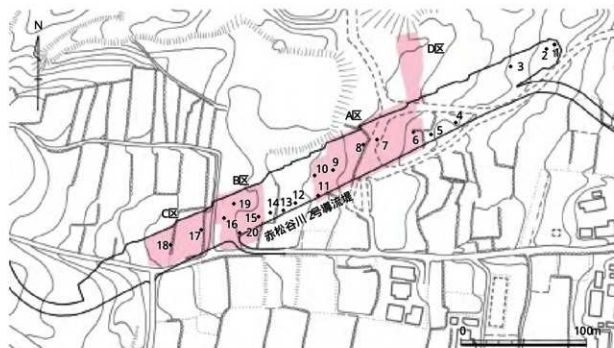
出土 遺 物

1は口縁部文様帯を持つ深鉢の口縁部の資料である。口縁部は外傾し、文様帯に4条の沈線を施す。内面には頸部と口縁部の境に稜を作り出す。内外面ともに調整はナデである。2はボール状をなす浅鉢の底部付近で、調整は外面が擦過、内面は擦過の後ナデである。3～5は深鉢の口縁部である。3は口唇部上端を平坦に整える。調整は外面が擦過、内面がナデである。4は内外面ともに擦過調整である。5は内外面ともにナデ調整を施す。外面には粘土紐の積み上げの跡が残り、炭化物が付着する。6は深鉢の屈曲部で、調整は外面が貝殻条痕、内面がナデである。7は浅鉢で、屈曲する胴部の外面には屈曲部の直上に段を持ち、口縁部は内外面に段を持ち波状をなすものと思われる。調整は外面が貝殻条痕、内面がナデである。8は口縁部にリボン状突起を持つ黒色磨研の鉢である。復元口径は23.8cmである。胴上部で屈曲し、口縁部内面には段を持つ。調整は内外面ともに研磨である。9は黒色磨研の浅鉢口縁部である。短く開く頸部を持ち、口縁部には外面に沈線、内面には段を施す。調整は内外面ともに研磨である。10は胴部から一旦屈曲して肩部を作り、短い頸部の先に内面に段を持つ口縁部が付く。内外面ともに研磨調整である。11は短い頸部に口縁部が付く資料である。口縁部は外面に沈線、内面に段を持つ。内外面ともに研磨調整である。12は深鉢底部で断面は張り出しを持つ。復元底径は10.0cmを測る。内外面ともにナデ調整を施す。13は刻目突帯文土器である。口縁部突帯は持たず、屈曲する胴部には突帯を貼り付け、指による刻目を施す。内外面の調整は、外面が貝殻条痕の後ナデ、内面はナデである。内面には粘土紐の跡が残る。復元径は残存部分が少なくやや不安はあるが、口縁部で20.8cm、胴部突帯部分で22.2cmである。14は刻目突帯文土器口縁部である。口縁部の突帯は

口唇部に接して貼り付けている。刻目はヘラによるもので、器壁は非常に薄手である。内外面の調整はナデである。15は丹塗りの壺頸部の資料である。外面は研磨調整、内面はナデ調整を施す。16は無斑晶質玄武岩製の打製石鏝である。左側縁から右下方向に施された剥離が脚端に達しているため左右非対称形となっているが、完形と考えられる。17は小石刃状の縦長剥片を素材とする削器で、両側縁に丁寧な二次加工による刃部を作り出している。石材は漆黒色良質の黒曜石である。

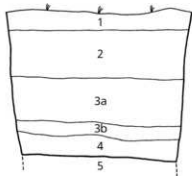


第5図 導流堤・塚位置図 (S = 1/20,000)

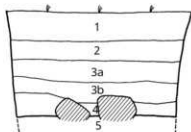


第6図 試掘坑配置図 (S = 1/3,000)

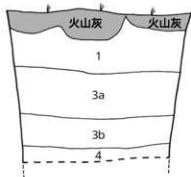
TP 9 L 226 000M



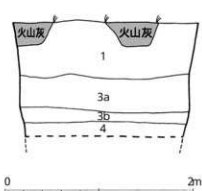
TP 15 L 231 200M



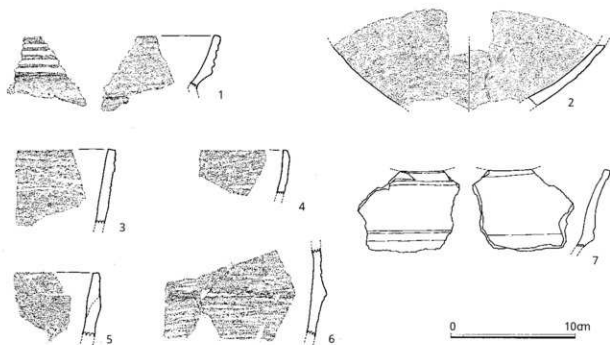
TP 18 L 235 800M



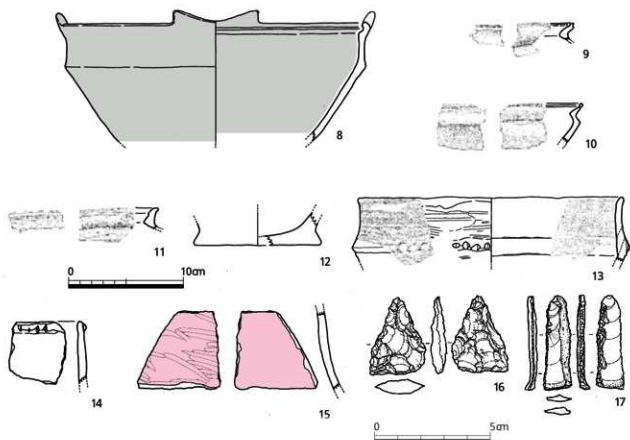
TP 19 L 233 000M



第7図 試掘坑内土層図 (S = 1/40)



第8図 範囲確認調査出土遺物実測図① (S = 1/3)



第9図 範囲確認調査出土遺物実測図②(1-15 S = 1/3, 16・17 S = 2/3)

第2表 範囲確認調査出土遺物観察表

図	番号	試掘坑	出土層位	文様・調整		色調		焼成	胎土	備考
				外面	内面	外面	内面			
8	1	TP・3	4	ナデ	ナデ	明赤褐色	橙色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	2	TP・3	4	擦過	擦過・ナデ	にぶい褐色	橙色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	3	TP・6	4	擦過	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい橙色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	4	TP・7	4	擦過	擦過	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	5	TP・7	4	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	6	TP・7	2・3	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐色	浅黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
9	7	TP・6	4	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐色	浅黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	波状口縁
	8	TP・7	4	研磨	研磨	灰黄褐色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	リボン状突起
	9	TP・9	3	研磨	研磨	橙色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	10	TP・9	3	研磨	研磨	にぶい黄褐色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	11	TP・15	2	研磨	研磨	灰黄色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	12	TP・18	3	ナデ	ナデ	橙色	橙色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	13	TP・19	3	貝殻条痕・ナデ	ナデ	橙色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	14	TP・19	3	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	明黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	15	TP・19	3a	研磨	ナデ	明赤褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	
図	番号	試掘坑	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	注記番号
9	16	TP・19	2	石磨	無垢晶質玄武岩	3.0cm	2.2cm	0.6cm	3.4g	TP_19_層
	17	TP・6	4	搥り器B類	黒曜石A	3.7cm	1.1cm	0.5cm	1.2g	TP_6_層

第2節 本 調 査

1. 調査区の設定と調査の方法

調査区は範囲確認調査の結果に基づいてA～C区の3つの調査区を設け、平成15年2月より調査にとりかかった。また平成16年度において赤松谷川2号堰堤の建設計画が国土交通省より出されたのを受け、平成17年度にD区の調査を行った。

調査は、基本的にⅡ層までを重機によって取り除き、次に調査区全体を覆うように8m×8mのグリッドを設定した。南北軸を北から南へ順にA～X、東西軸を西から東へ順に1～31と記号を付し、アルファベットと数字の両方の記号を合わせて各グリッドの名称とした。

人力による掘削はグリッドごとに行い、出土した遺物の取り上げに際しては、重機による表土剥ぎで残存したⅡ層以上の遺物についてはグリッドごと、層位ごと一括して行った。Ⅱ層については調査区の中で調査開始当初はⅡa層、Ⅱb層、Ⅱc層に細分したが、その後は出土遺物に顕著な差異が見られなかったことと必ずしも調査区全体において共通して見られる層序ではなかったことから、普賢岳噴火災害直前まで耕作土として利用されていたⅠ層より下位で、中世の遺物を含む漆黒色のⅢa層より上位の層として一括してⅡ層として扱った。近世以降の開墾、耕作地整備による人為的造成土である。

Ⅲa層以下の包含層出土の遺物については石器については基本的にすべての出土位置と出土層位を記録して取り上げた。土器については口縁部や底部など器種や器形、時期などを特定する上で重要な属性を有すると思われるもの、比較的大きな土器片等については出土位置を記録した。また他に、小片でも彩色や穿孔などといった特徴を備えるもの、周辺の出土状況等から接合の可能性が考えられるものなどについても記録の対象とした。それ以外については層位を記録し、グリッドごと一括して取り上げた。また、A区の一部の遺物については層位の読み違いから本来出土地点を記録して取り上げるべき遺物について一括して取り上げたものがあった。

炭化物についてはⅢa層以下のものについて出土位置を記録しながら取り上げを行った。しかしながら調査の進捗状況等によって検出の精度に調査地点ごとに多少の差が出たことは否めない。

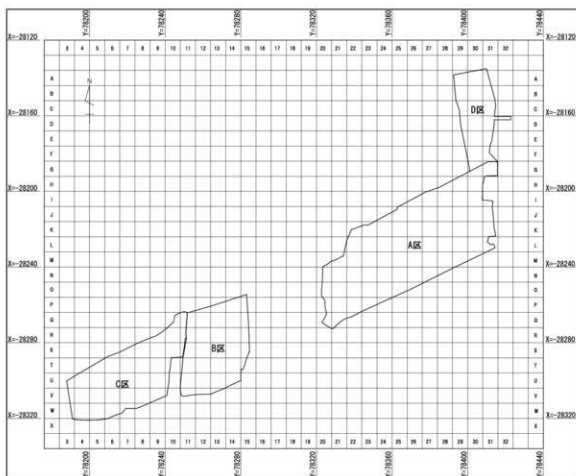
土層については、グリッドのラインから南北にそれぞれ25cm、東西にそれぞれ25cmの幅が計50cmになるベルトを残して掘削し、断面を観察した。また、その中から必要に応じて土層断面図を作成した。

調査終了後は砂防工事が引き続き行われることから埋め戻しは行わず、そのまま国土交通省雲仙復興事務所に引渡しを行った。

2. 調査区概要

A区

4つの調査区のなかでは最も面積が大きく、調査面積は3,943㎡を測る。D区とともに最も海手になる。B区に続いて調査に入る。調査区を縦横に分割するように後世の攪乱や耕作地造成が及んでいたが、そのほかは比較的遺物包含層の残存は良好であった。土坑2基（縄文時代後期～晩期）、土坑墓（中世）などの検出がある。



第10図 グリッド配置図 ($S = 1/2,000$)

B区

最初に調査に取りかかった調査区である。調査面積は1,509 m^2 を測る。埋硯1基（弥生時代前期）と雨裂が2条検出されている。雨裂1より北側に刻目突帯文土器や丹塗りの施された壺の集中が認められた。

C区

B区、A区に続いて調査に入った。調査面積は1,835 m^2 である。全体として遺物の密度は少なく、遺構として認められるものもビット以外は特に無い。B区同様2条の雨裂が確認されている。

D区

平成16年度に調査を行った。調査面積は870 m^2 である。縄文時代早期の遺物の検出がある。また、近世の水場関連遺構や近世～現代の水田址が遺構として検出されている。

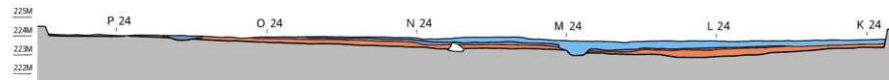
第Ⅲ章 調査の成果

第1節 基本土層

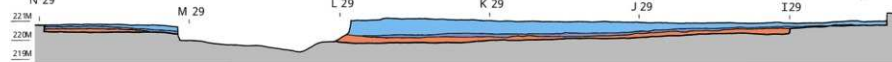
本調査において確認した権現脇遺跡の基本層序は以下に示す0層～Ⅶ層の10層である。

- 0 層 灰白色火山灰。平成噴火時の火山灰層。非常にきめが細かく、葉タバコ栽培地では間層に厚い堆積を見る。
- I 層 暗褐色土。粘性はほとんど無く、5mm以下ほどの小礫を多量に含む。平成噴火以前までの耕作土。
- II 層 暗褐色土。近世以降の耕作地造成による攪乱土層。5mm以下の小礫を多量に含む。II a層、II b層、II c層に細分され、下位に行くほど色調は暗くなり小礫が少なくなる。地割りに沿って階段状に造成される。
- III a層 漆黒色土。非常にきめが細かく、小礫はあまり含まない。粘性は弱く、しまりが無い。保水力に富む。縄文時代後期～弥生時代前期の遺物も含むが、出土する遺物の下限は中世期である。
- III b層 褐色土。5mm以下ほどの小礫をわずかに含み、粘性は弱い。下位に行くにしたがってやや色調が明るくなり、しまりが出てくる。また、降水時の雨水の流路となるようなところでは、小礫の含有量が高くなる。縄文時代後期～弥生時代前期の遺物を多量に包含する。
- IV 層 浅黄橙色土。粒子の整った細かい砂質土である。眉山起源の火砕サージとされ、部分的に赤味の強い部分がある。各調査区でこの層に伴い多くの倒木痕が検出された。無遺物層。
- V a層 明黄褐色土。1cm前後の小礫を非常に多く含む。また、地点によっては人頭大以下の礫を多量に含むところがある。粘性は少なく、しまりが強い。無遺物層。
- V b層 暗黄褐色土。色調以外はV b層とほぼ同質で、1cm前後の小礫を多量に含むことを特徴とする。縄文時代早期の遺物包含層。
- VI 層 漆黒色土。地点によっては暗褐色。しまりは地点によって異なり、非常に硬質なところもあれば、軟質なところもある。軟質なところでは保水力が高い。軽石状の1cm前後の小礫を多量に含む。無遺物層。
- VII 層 灰白色砂礫。約1万年前に形成されたとされる土石流の堆積物による砂礫層で、非常に硬くしまる。無遺物層。

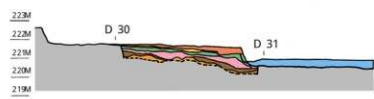
2列西壁 (a)



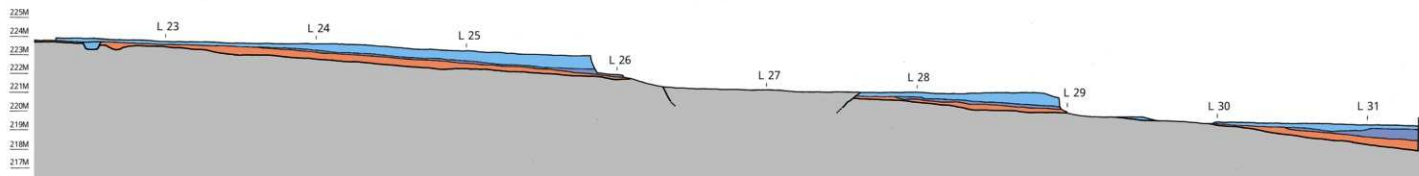
2列西壁 (b)



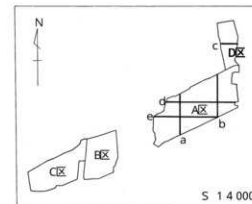
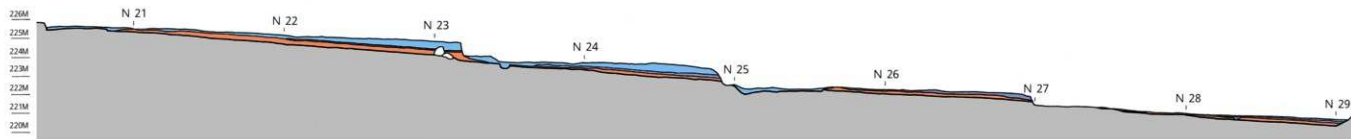
D列北壁 (c)



L列北壁 (d)



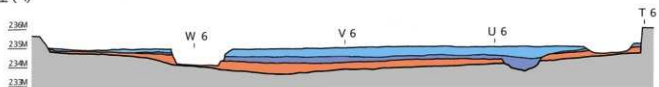
N列北壁 (e)



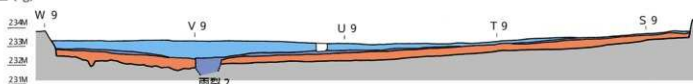
- 层
- a层
- b层
- 层
- a层
- b层
- 层
- 层

第11图 A·D区土层图 (S = 1 / 200)

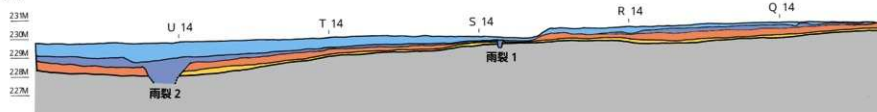
9列西壁 (f)



9列西壁 (g)



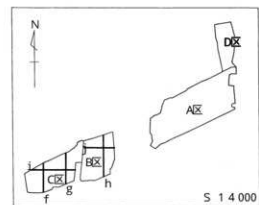
14列西壁 (h)



U列北壁 (i)



R列北壁 (j)



第12圖 B・C区土層圖 (S = 1/200)

範囲確認調査時の層位との対応を見ると第13図ようになる。

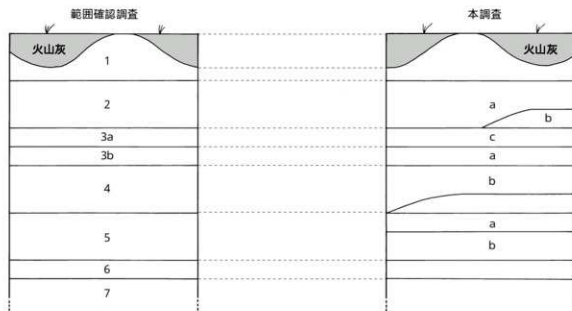
調査区はいずれも基本的に西から東へと緩やかに傾斜する。

南北方向で見ると、A・D区の土層はK列とL列の境くらいを西から東へと浅い自然流路が走っており、ごく緩やかな二つの高まりが隣り合っている。よってA区北半からD区へは水無川右岸の断崖となる部分までわずかではあるが緩やかにのぼり、そのまま水無川右岸まで達する。現在D区より北側は水無川の谷へと急激に落ち込んでいるが、これは平成噴火後の砂防工事によるもので、それ以前はもう少し緩やかな斜面であったという。

B・C区では西から東へと走る2条の雨裂が形成され、中世期には埋没している。この降雨時の自然流路である2条の雨裂のうち、南側の雨裂2を境にしてごく緩やかな高まりが隣り合うようであり、B・C区の南北方向の土層を見ると雨裂2の部分が最も低位である。

遺物を主体的に包含するのはⅢb層で、時期的には縄文時代後期～弥生時代前期が中心となる。包含する遺物の下限は弥生時代中期まで下る可能性もあるが、弥生時代中期の遺物自体が極めて少ないため判然としない。Ⅲa層においても縄文時代後期～弥生時代前期の遺物は出土するが、出土はⅢa層の下部部分が多く、自然営力によるⅢb層からの遺物の移動を考慮しておく必要がある。それを裏付けるように、弥生時代前期の埋篋1基がB区Ⅲb層において検出されたが、土器を埋設した際の土坑の確認はできていない。Ⅲa層からの堀込みではないものとする。

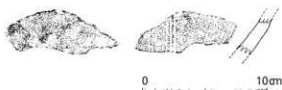
しかし視点を変えれば、突笈文期の土器群がⅢb層と対比したときⅢa層においてもかなりの割合で出土しており、突笈文期に関してはⅢb層の上位からⅢa層の下部にかけて出土すると捉えることもできる。あるいは本来一連の同一層であったものが何らかの自然的影響によって上位と下部で色調変化をきたし、結果的に調査ではそれを分層できるものとして捉えたということも言える。この問題については今後地質の見地からの検討が必要である。



第13図 層位対応概略図

第2節 遺 構

ここでは縄文時代後期～弥生時代前期の遺構と、中・近世の遺構とに分けて報告する。特に縄文時代後期～弥生時代前期の遺構については明確な遺構として断定しうるものは少ないが、あるいはそのことが遺跡自体の性格や遺跡全体の中での調査区における場の機能を考えるとき大きな意味を持つかもしれない。



第14図 雨裂2内出土遺物 (S = 1/3)

B・C区については西から東へと走る2条の雨裂がⅢb層上面で確認されている。雨裂1は削平を受けて底面近くしか残存していないが、雨裂2は幅が広いところで約1.5m、深さが深いところで約1.0mある。両雨裂とも断面「U」字状をなし、細かく蛇行するように左右の壁面が浸食を受け、えぐられている。覆土は最下部に10cmほどの厚さでこぼし大の礫を含む砂り層があり、その上部にⅢa層が覆う。出土遺物は大部分が縄文時代後期～弥生時代前期のもので、上流からかなりの激しい水流の中を流れてきたものと思われ、著しい磨耗を受けている。埋没した時期については雨裂2の最下部に堆積する砂り層から極度の磨耗を受けた瓦質の摺鉢を検出しているの中で世期と見てよいであろう。

1. 縄文時代後期～弥生時代前期の遺構

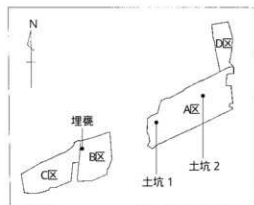
縄文時代後期～弥生時代前期の遺構としては各調査区のⅣ層上面においてピット群を検出し、B区において埋篋1基、A区において土坑2基を検出している。

(1) ピット群

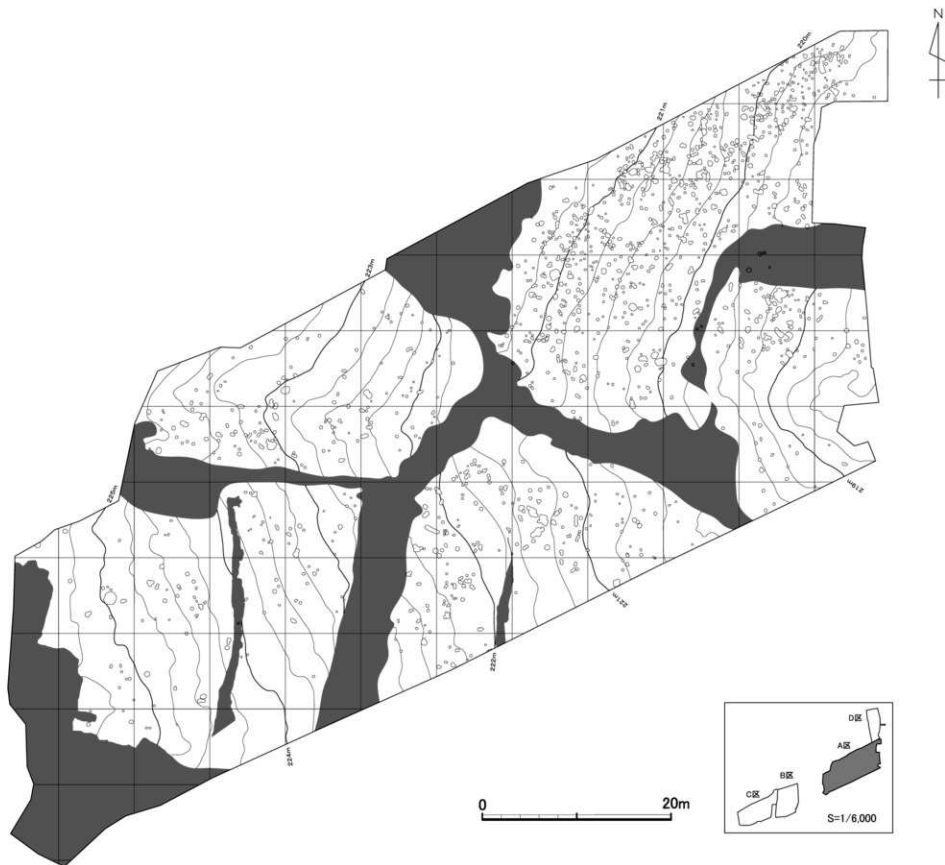
ピット群の説明に入る前に調査区の表土を除去する以前の状態について述べておきたい。なぜならば繁茂する植物の植生によっては地下に影響を及ぼす可能性を考慮する必要があると考えられるからである。植物の占地は地形や土壌中の有機物含量や水分量、日照条件等のさまざまな環境要因によって決定され、複数の種が混在したり、特定種が一定領域にまとまったりするものと考えられ、時間の推移とともに変化する。また、地表での占地の違いがあれば、当然地下に及ぼす影響にも違いが出ることも想定される。

調査区周辺は平成噴火以前においては耕作地として利用され、主に葉タバコや野菜の栽培が行われていた。しかし、平成噴火以来、特に火砕流が頻繁に発生するようになってからは無人区域として住民の出入りは禁止された。

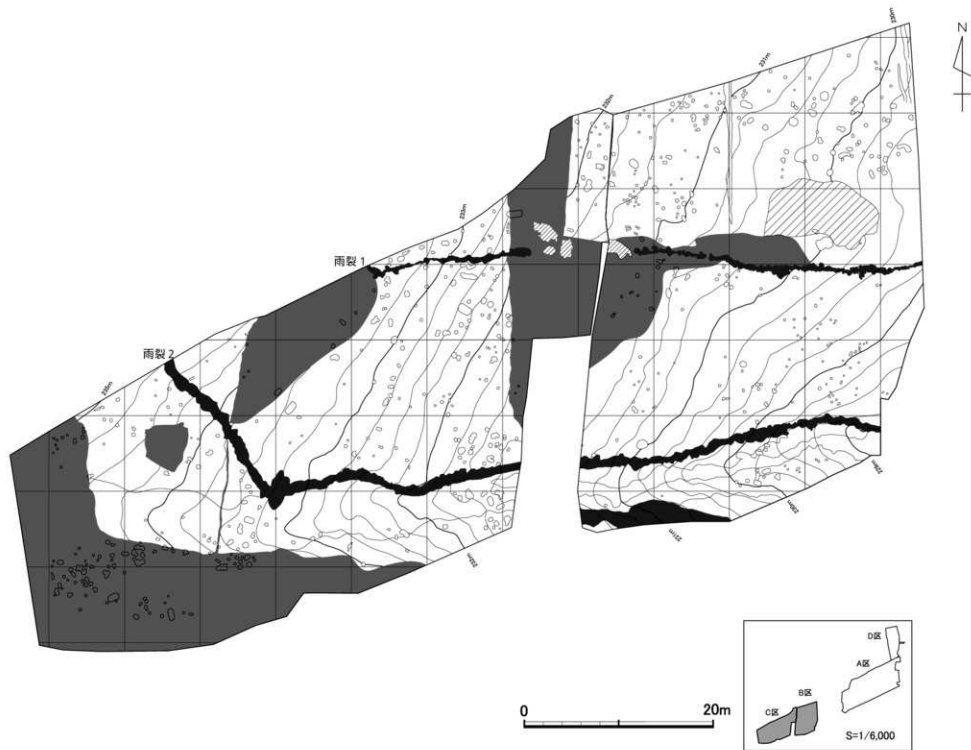
水無川右岸に立地する権現脳遺跡とその周辺の一帯は火砕流による火山灰の降下と堆積によって裸地化し、本来の目的を果たさなくなって放置された耕作地は砂防事業を行うことを前提として国有地化されて現在に至る。よって調査区を含め本遺跡周辺はいったん裸地化した土地が、新たな植物の侵入によって緑化し、遷移していくその過程にあるといつてよい。平成噴火の終結が1996年であるから、



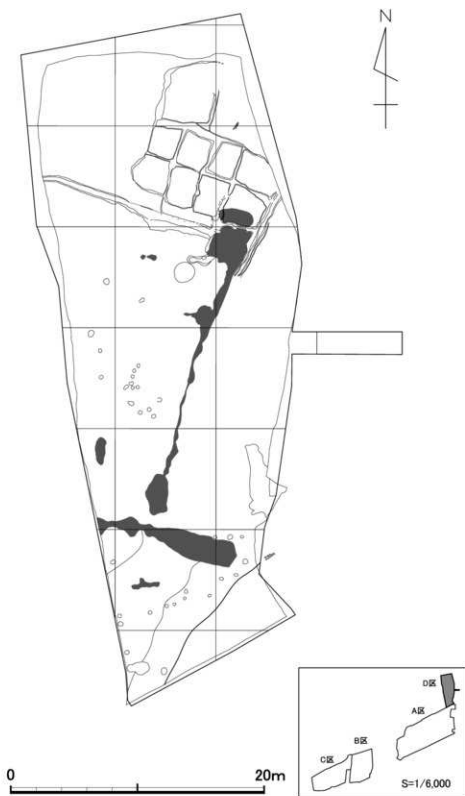
第15図 遺構配置概略図(縄文時代後期～弥生時代後期)(S = 1/4,000)



第16図 A区ビット群配置図 (S = 1/400)



第17図 B・C区ビット群配置図 (S = 1/400)



第18図 D区ビット群配置図 (S = 1 / 300)

まだ数年という短い時間幅でしか捉えることができないし、将来的には人為的にさまざまな手入れが行われ、管理されるであろうから、植生遷移の基本的図式は途中で寸断される事になろう。しかし、一年性草本類群落 多年性草本類群落 低木群落 高木群落というようにより複雑化する方向で遷移するとされる植生遷移の構造に当てはめてみたとき、遺跡周辺ではこの過程の前半部分、すなわち草本類の群落形成段階として理解できる。

噴火の沈静後は水無川一帯が国有地化され、砂防関係の工事等が行われるようになり、調査区周辺も一部は工事用道路や資材置き場として利用されてきた。しかしそれ以外は湧流堤や砂防堰堤の建設が計画されるまで特に利用されることはなく、雑草が生い茂り荒蕪地と化していた。また、一口に荒蕪地といってもその植生の様相は場所によって大きく異なっていた。各調査区ごとにその様相について述べる。

まず一番上手のC区については噴火の前までは民家の敷地となっていた地点であり、地固めされた状態であったので、一年性の草本類の侵入がごくわずか見られる程度であった。B区は噴火前に葉タバコの栽培地であったところで、表土剥ぎ直前は冬場であったので枯死している植物が多かったが、一年性草本類であるセイタカアワダチソウなどと多年性草本類であるススキとが混在している状態を見ることができた。A区に関しては山手になる西側部分に関してはススキが主体的に群落を形成し、著しく繁茂している状態で、海手の東側に関してはススキのほかにも多くのクズが繁茂し、人が立ち入ることができないくらいに蔓が伸び、うっそうとしている状態であった。D区は調査に入った時点で資材置き場・作業場として削平や造成を受けており、噴火以降の植生の状況を知ることはできなかった。

ここで注意を要するのはクズの状況である。クズは多年性の植物であるが、根は主根が垂直に地下へと伸び、深いものでは数mにも及ぶ。また、主根は肥大化してデンプン質を蓄えるという特徴を持つ。繁殖力の強いクズは伐採・管理を定期的に行わないと領域を一気に拡大してしまうことから、害草として扱われることもしばしばである。遺跡周辺でも長らく人の手はいはることが無かったため現在でも最も目に付く植物のひとつである。

特にA区においては、表土剥ぎの前に行った調査区設定時の除草作業段階から南東側についてはクズの著しく繁茂している状況を確認できた。表土剥ぎの段階では梅雨時であったため土壌も十分に湿っており、クズの根の様子がよく観察できた。いくつかの特徴をあげると、クズの根は垂直方向に伸びるものが多く、斜めに伸びたものはあっても横方向に伸びたものは見られなかった。クズの茎や根は多くが直径3cm前後であったが、中には直径10cmを超える大きなものも見られた。クズの根の周辺は正確に測定したわけではないが、おおむね半径10cm程度の平面円形に変色が確認されるものが度々あり、クズの根の検出面は特定の層位に限定されるのではなく、表土剥ぎの段階を含め層位を選ばず確認できた。また、変色は灰色や暗褐色などが見られ、灰色系の変色を来すものも多かった。色調の変化は各層の持つ色調に左右される可能性がある。特に繁茂の著しかったA区の南側では変色部分の切りあい関係から新旧を判断できるものさえあった。重機による表土剥ぎ時のⅠ層やⅡ層の掘削時には頻繁に見られた。

クズの根は表皮が厚く木質化するため、枯死して地表の葉や茎が分解されても、地下の根はそのまましばらくの間分解されずに残るようで、調査のとき特にA区の南東部では掘り進むごとに根の切断作業を要するときもあった。根が残存する場合に必ずしもその周辺部分に変色しているわけではなく、

また、根の残存がなくても変色が見られる場合もあった。このことはクズの根とビット状の土壌の変色が無関係であるという考え方が一つ、そしてもう一つはクズの根は分解されて消滅し、土壌の変色部分のみが残存したというのがもう一つ、これら二つの考え方ができよう。調査員としてそれがどちらかということを確認するすべは調査時において持ち得なかったが、ただクズの根は表土剥ぎや調査の時に腐敗して強い臭気を漂わせる事が度々あり、土壌への何らかの影響というものを想像させるに十分であった。実際、A区南側で確認したビットの埋土の特徴として、灰色系の色調を呈し、細かい砂混じりやや粘性を持つという特徴は、B区などクズの侵入の少なかった地点で確認したⅣ層上面のビット内埋土と微妙ではあるが確実に違うところである。それがすなわち人為的構造物ではなく、自然的構造物であるという事の直接的証明の材料にはならないであろうが、ビットの集中域がクズ群落と重なるということは考慮しておく必要はあろう。反面ビットの集中域と遺物の集中域が一部で重なるということも忘れてはならない。以上を踏まえて各調査区について見ていきたい。

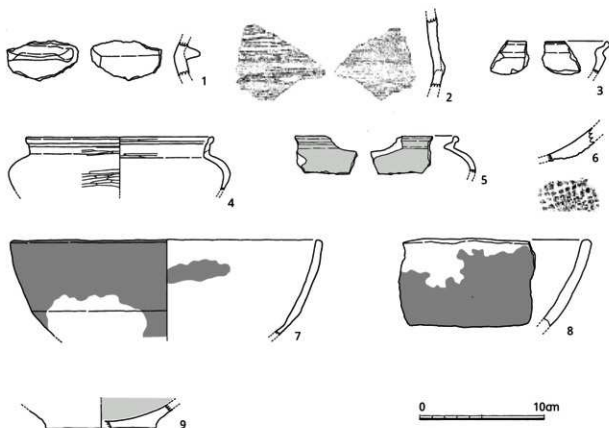
A区はA1区においてもっともビットの密度が高く、その傾向はA2区の北側まで続くようである。しかしながら、遺物の集中と必ずしも一致するわけではなく、たとえば遺物の集中はA4区の北側部分やA5区の北東部分でも見られるが、ビットは少ない。またA2区の北側部分においてビットは多いが、特に遺物が集中するわけではない。よって遺物の出土密度とビットの検出密度は必ずしも同調するわけではないようである。A3区からA1区とA4区の間を抜けてA2区の中央へ東から西へと下る浅い谷地形があり、この周辺が他の平坦地に比べ小礫を多く含むことから、おそらくは降水時の雨水の流路と考えられるが、むしろこの流路の北側にビットが集中すると見るべきであろう。A3区の谷地形の北側にはビットが少ないが、ここについては数mの高さで瓦礫などの不燃物を大量に廃棄してあったところである。そう考えると、植物の根、特にクズがその影響をもたらしたということも一つの可能性として考えられる。

次にB・C区であるが、やはり遺物の出土密度とビットの検出密度は基本的に一致しない。しかし、突帯文期の遺物が多く出土するB1区ではやや径の大きなビットの検出が多いことが捉えられよう。雨裂2はⅢb層上面で確認でき、中世期に埋没したと考えられるが、その旧流路と考えられる浅い谷地形が雨裂2のすぐ南側を走る。C区はV列あたりを境にして、二つのゆるやかな丘陵が隣り合い雨裂2はこの境となった旧流路に合流するように南東向きから東向きに流れを変える。この合流部分より西側においては急激に南へ地形は上がるがこの谷地形にそって比較的多くビットの検出がある。地形的に見ても遺物の出土状況から見てもこの地点に人為的に何らかの構造物が造営されることは考えにくく、この周辺についてはたとえば土壌が水分を多く含むとか日照条件が悪いとか特定の環境条件の下に特定の植物が群落を形成し、その影響が及んだとも考えられる。同様な状況はA3区でも見受けられた。

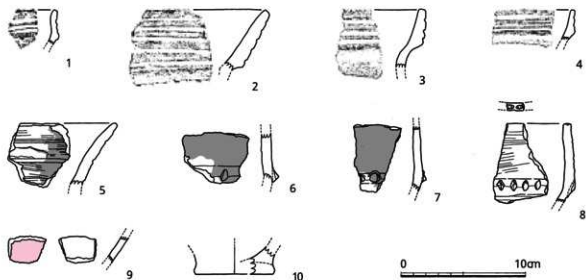
D区については北側部分と東側部分で後世の削平等が入り、Ⅳ層上面でのビットの検出ができた部分は少ない。また地形的にA区よりD区側が高くなっていったようで、その分削平も深く及んでいたようである。(調査区の細分については第184図を参照のこと)

第10図はA・D区のビット群からの出土遺物である。1・2は深鉢胴部で、1は粘土紐の貼り付けを施す。3～8は浅鉢で、4は復元口径14.8cmを測る。6は組織織土器で、網目が確認される。7は復元口径24.0cmを測る。9は復元底径8.6cmを測る。第20図はB・C区のビット群からの出土遺物で

ある。1～4は口縁部に沈線を施す深鉢の資料である。口縁部断面は、1がやや内傾、2が外傾、3・4が直立する。5は大きく外反する深鉢口縁部で、外面に沈線を施す。6～8は刻目突帯文土器で、6はヘラ刻み、7は指刻みである。8の刻目原体は不明で、口唇部上端にも刺突を加える。9は丹塗りを施す壺胴部、10は復元底径6.2cmを測る深鉢底部である。



第19図 A・D区ピット群出土遺物 (S = 1/3)



第20図 B・C区ピット群出土遺物 (S = 1/3)

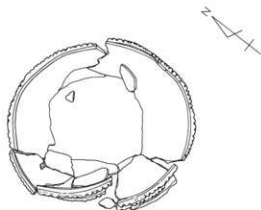
(2) 埋 葬

遺構

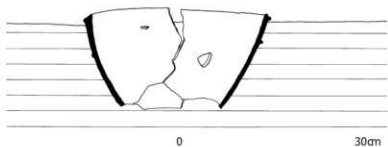
B区東端のグリッドQ 11で検出した。Ⅲ b層中からの検出で、埋設した土坑は確認できなかった。土器棺は口縁部をほぼ水平にして据えられており、底部は意図的に打ち欠かれている。上縁の痕跡はなく、単棺と捉えてよいであろう。死産児や乳児の土器棺として、または出産時の胎盤などを埋納する目的で埋設したものであろう。土器の外面には炭化物が付着し、日常用煮沸土器の転用であったと考えられる。人骨・装身具・副葬品等は認められなかった。

出土遺物

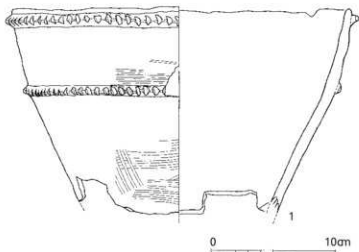
1は埋葬として検出した突帯文土器である。底部を欠くが、口径は27 0cm、残存器高は16 0cmである。胴部で屈曲することなく口縁部まで直線的に立ち上がる。口縁部と胴部には突帯を貼り付け、ともにヘラ状工具による刻目を施す。口縁部突帯は口唇部から0.5cmほど下がった位置に貼り付けるが、一部で口唇部に接するところもある。外面調整は貝殻条痕の後ナデであるが、ナデはさほど丁寧ではなく、胴部突帯より下位では横方向と縦方向の、上位では横方向の貝殻条痕が残る。内面調整はナデである。外面にはわずかに炭化物が付着する。



L 232 000M



第21図 埋葬実測図 (S = 1 / 6)



第22図 出土土器実測図 (S = 1 / 3)

(3) 土 坑

土坑はA区において2基を確認した。いずれもIV層上面での検出である。IV層上面での検出であり、A区においてはB・C区と異なり極端に突帯文期の資料が少ないことを考慮すれば、いずれも縄文時代後期～晩期の所産と見てよいであろう。

土坑1

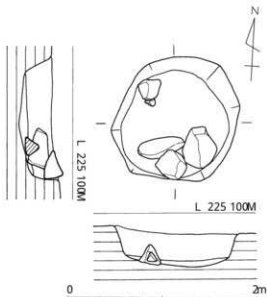
遺構

A区西側のグリッドN 22での検出である。平面は南北1.3m、東西1.3mの円形を呈し、深さは0.3mを測る。土坑中からは、30cm大の礫が検出された。炭化物や焼土等は確認されていない。

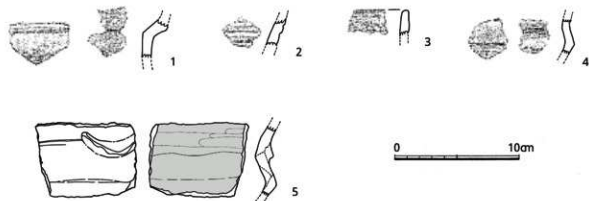
出土遺物

出土遺物としては縄文時代後期～晩期の深鉢・浅鉢が多数検出されたがほとんどが小片である。石器では黒曜石剥片、安山岩剥片、蛇紋岩磨製石斧破片がある。

1は口縁部文様帯を持つ深鉢の頸部から口縁部にかけての資料である。口唇部を欠くが、外面に沈線1条が確認でき、内面には稜を作る。内外面の調整はナデである。2も1と同様口縁部文様帯の資料で、口唇部・下端部を欠くが、3条の沈線が確認される。内外面ともにナデ調整を行う。3は深鉢口縁部である。口唇部は丸く整え、外面は擦過調整、内面はナデ調整である。4は鉢形もしくは深鉢形を呈する土器の胴部の資料である。内側へ屈曲して肩を作り出す胴部は、次に外側へ屈曲する。内外面の調整は、外面が擦過の後ナデ、内面がナデである。5は4と同様の器形を呈する鉢もしくは深鉢の胴部の資料である。いったん内側へ屈曲して肩部を作り出し、次に外側へ屈曲して口縁部へと続く。肩部と口縁部との境には外面に段を作り出し、粘土紐の貼り付けを施す。内外面ともにナデ調整である。



第23図 土坑1実測図 (S = 1/40)



第24図 土坑1内出土遺物実測図 (S = 1/3)

土坑 2

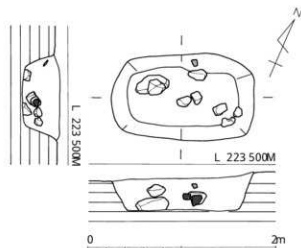
遺構

A区グリッドK 27での検出である。平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸1.5m、短軸0.9m、深さ0.3mを図る。長軸の方向はN 66° 5' Eである。掘り込みは断面「U」字形を呈し、さほど深さはなく、底面は平らである。土坑内には数10cm大の礫を含むが、意図的に配置したという印象は受けない。覆土中には炭化物と焼土が確認された。

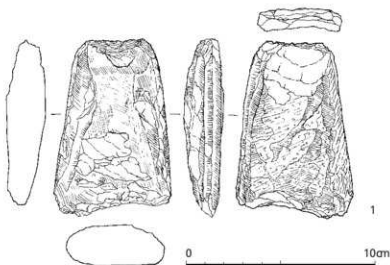
出土遺物

出土遺物としては、土器小片と石斧1点、黒曜石剥片が検出された。土器に関しては粗製土器、精製土器があり縄文時代後期～晩期のものであるが、図化に耐える資料はない。

1は蛇紋岩製の磨製石斧である。側縁は直線のだが器軸に対し一定角度を有しており、形態的には定角式に分類される。素材は板状岩片で、基部および胴部に撃打整形を施した後、全体を入念に研磨している。正面側は中央から下方向に傾斜した研磨が見られ、片刃気味の刃部を作出している。この刃部は両面から撃打されており稜線部の潰れも見られることから、他器種に転用された可能性がある。



第25図 土坑 2実測図 (S = 1/40)



第26図 土坑 2内出土遺物実測図 (S = 2/3)

2. 中近世の遺構

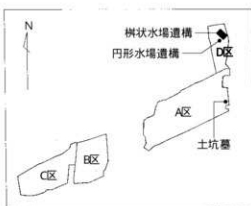
中近世の遺構としては、A区において中世の土坑墓1基、D区において近世の柵状水場遺構、円形状水場遺構、中世から現代にかけての水田址が確認された。

(1) 土坑墓

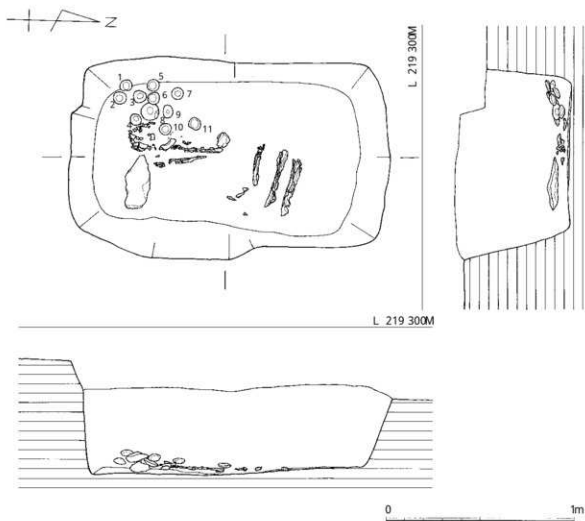
遺構

A区東端の調査区で最も標高の低い地点での検出である。グリッドはK 31である。漆黒色土であるⅢ a層の掘り下げ時に細かい砂混じりの覆土を持つ平面方形の土坑として確認した。長軸は1.7m、短軸は1.05m、深さは0.45mを測り、長軸方向はS 15 Eをとる。

土坑内から成人と思われる人骨1体が検出され、頭位は南に置いている。人骨の残存状況は風化が



第27図 遺構配置概略図(中・近世)
(S = 1/4,000)



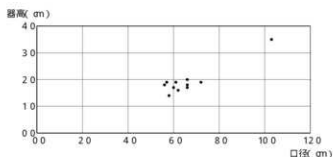
第28図 土坑墓実測図(S = 1/20)

進み良くなかったが、出土状況から屈肢葬であったと考えられる。頭部に向かって左側には自然石を配置しており、枕石として使っていた可能性がある。また、頭部に向かって右側には副葬品として11個の土師器が確認された。

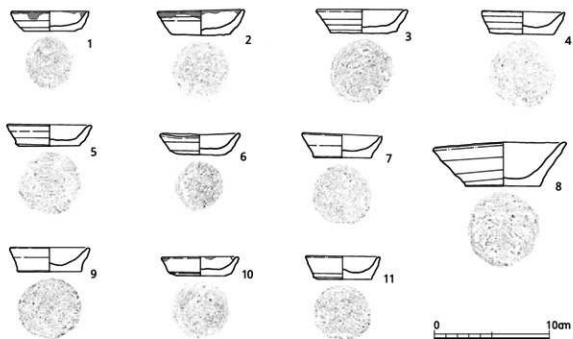
出土遺物

頭部の右側より11個の土師皿が検出されている。いずれも回転系切りの痕跡を底面に残す。

1は口径6.2cm, 底径4.0cm, 器高1.6cmを測る。口縁部の内外面には炭化物が付着する。2は口径6.6cm, 底径4.6cm, 器高2.0cmを測る。口縁部の内外面に炭化物が付着する。3は口径7.2cm, 底径4.4cm, 器高1.9cmを測る。4は口径6.6cm, 底径5.1cm, 器高1.8cmを測る。5は口径6.6cm, 底径4.4cm, 器高1.7cmを測る。6は口径6.0cm, 底径3.6cm, 器高1.6cmを測る。7は口径5.6cm, 底径4.6cm, 器高1.8cmを測る。8は口径10.3cm, 底径5.3cm, 器高3.5cmを測る。9は口径6.1cm, 底径5.1cm, 器高1.9cmを測る。10は口径5.8cm, 底径4.6cm, 器高1.4cmを測る。口縁部の内外面に炭化物が付着する。11は口径5.7cm, 底径4.6cm, 器高1.9cmを測る。8以外は強い規格性がうかがわれる。



第29図 土坑墓内出土土師皿の器高と口径



第30図 土坑墓内出土土師皿実測図 (S = 1/3)

(2) 柵状水場遺構

遺構

遺構は、水無川の右岸に位置し、集落と水無川を結び要所として存在する。Ⅴ層（縄文時代早期遺物包含層）よりもさらに下層にⅦ層（火砕流噴出物が岩盤のように凝結した層）がある。この凝結した礫層を基本的に3m×50cm方形、深さ約1.3mの升状（水槽状）に掘り込み残存する遺構で、格子形に9基確認できた（第31図）。この形状と複数の柵状遺構から、その用途は、取水施設・貯水施設・排水施設・浄化槽などが考えられよう。

近世の水の取水方法は、主に河川や水路から引水し、水量を確保する方法がとられた。一方で、水質の管理は、農村集落の営みから汚物等の排水が用・排水路へ流入して来るものに対して、主に圃場や用・排水路で希釈・浄化作用による自然処理方法によるものであった。現況の遺跡周辺は、ポタン山と深江火山麓扇状地との境目の傾斜変換点である扇頂部付近に位置し、水源である取水口があり、そこから、扇状に水路が張り巡らせている。

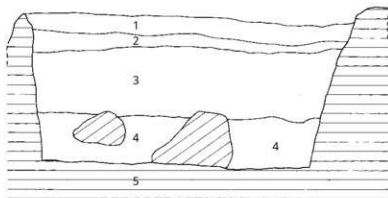
現代と近世に大きな地形の変化がなければ、遺跡の周辺には水源の取水口である湧水地があった可能性が高い。そのことを示す事例として、遺跡の東方に門脇権現神社、別名「水源神社」として地名が残る。現在は見られないが、深江町誌によると当時、門脇神社付近には、水が流れていたという。

さて、山間に比べ緩やかな傾斜をもつ扇状地における水利のシステムは、水源取水口を頂点に勾配を利用し水を広く扇状に分配される。そのため汚水などを下流域の集落へ排水することを最小限に留める注意が必要であろう。そこで、浄化する目的と圃場や用・排水路等で希釈・浄化作用を補う手段として、水が通水により隣合わせの遺構を巡る際に遺構床面へ沈殿する作用を利用することにより、ろ過される機能を考えれば、この遺構が簡易な浄化槽であったのではないかと言えないだろうか。一方で中・近世は、一般的に粘土や木材、シダ類を加工し水底や側面に固めたりして漏水を防いでいたような事例もあるが、この遺構では確認できなかった。

次に、遺構の時間的位置づけを考える。遺構の中に堆積した層からの出土遺物は、主に近世陶磁器や製品などが中心で、他に中世末の土師皿1点のみが出土している。その他に遺構を造成する際に掘り起こされ攪乱されたと思われる縄文時代早期土器・石器や、その上層から近代以降の遺物などの二次堆積物が出土している。これらの出土遺物は、遺構の造成後から使用中に

B 30南壁
東

L= 221 400M



- 1黒褐色土層（粗い粒子を含む）
- 2明黄褐色土層（小礫を多く含む）
- 3礫層（小礫）
- 4礫層（中・大礫）
- 5灰白色凝結土層（基本層序 層と同一）

第31図 柵状水場遺構土層図（S = 1/30）

堆積した層より出土しているため、最も新しい遺物により近世期であることが言えよう。

さらに別の視点から見ていくことにする。近代前期（明治初頭）には、欧米近代技術が灌漑・排水技術の進展をもたらした。その構造材料としてセメントが登場し主要材料となった。大正期には鉄筋コンクリート造の施設が造られるに至る。そのため、遺構がセメントによる構造物ではなく原始的で凝結した礫による構造物であることから解るように、近代前期よりも古く、近世の所産であると言えよう。遺構廃棄後に、堆積状況から整地を行い畑として再利用されていたようである。さらに面取りされた加工の加わった礫などを廃棄集積し、その上から整地し現代では煙草畑が作られていた。

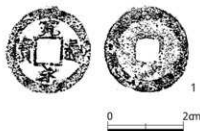
この遺構とⅡc層の鉄分・マンガン沈殿層である近世以降の水田址の間には用水路（小水路）的な役割を担った細くて浅い「U」字状の溝状遺構がある。また、遺構の南側には面取している礫を一段積みされた石列が直線状に並んでいる。これらD区における9基の遺構・用水路的な溝状遺構・水田面の西端のライン・水槽南側の石列などは、正確に座標には乗っていないものの一定の十時方向に合わせ規則的に配置されており、農村集落における近世の水利システムの空間的配置と、近世において岩盤状の凝結土が地中に存在することが知られ、それを利用して造り出す土木技術と知識とを有していたということを知る上で重要な遺構と言えよう。

出土遺物

遺構からの出土遺物は銭貨、中世土師皿、近世陶磁器や陶磁製品、鉄製品などである。

出土銭貨（第32図）

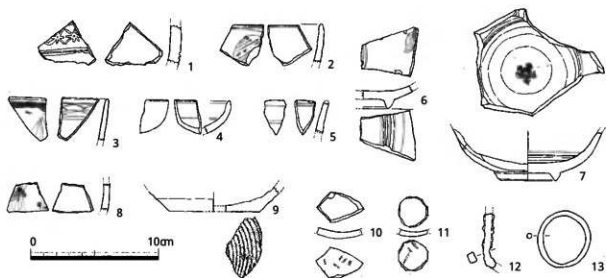
1は、残存状況は不良であるが、直径2.2cm、内面窓径0.6cmの「寛永通宝」である。この出土銭は、寛文以降の「新寛永」である。



第32図 枡状水場遺構内出土銭貨
(S = 1/1)

陶磁器・鉄製品・青銅製品（第33図）

1は陶器鉢の胴部片である。外面に沈線間に菊花形の象嵌を施す。2～7は近世肥前波佐見焼の磁器の類である。2は染付くらわんか碗の口縁部片である。外面に二重圈線を巡らせ、その下に丸文を施す。この圈線は二重から一重に重なり合っている部分もある。内面に一重圈線を施す。3は染付碗の口縁部である。外面は内面が青海波文を施し、その下に二重圈線を巡らせていることから、海に関する絵であると思われる。4は染付皿である。内面に二重圈線が巡る。5は染付碗である。外面に上から一重圈線を巡らせ、やや間隔を置きその下に二重圈線が巡る。6は染付碗である。高台内に二重圈線を施し高台盤に二重間に間隔のある圈線が巡る。7は染付くらわんか碗である。内面の見込みに蛇の目粗ハギを行い、コンニャク印判五弁花を施している。釉ハギの縁に一重圈線を巡らせる。さらに外面にも一重圈線を巡らす。8は肥前系磁器の染付碗の口縁部である。外面に草花文を施す。9は中世末の土師皿の底部である。内・外面に回転横方向ナデで底に糸切り痕跡が見られる。10は肥前磁器碗を玩具のおはじきとして再利用している。底は丸みをもち、多くの擦痕が顕著である。11は円盤状陶磁製品である。肥前磁器碗を玩具のおはじきとして縁辺部を円形に加工している。底に擦痕が見られる。12は鉄製の角柱釘である。13は青銅製の楕円形を呈した環状製品である。断面は丸みをもち、建具の飾り金具であろうか。



第33図 栞状水場遺構内出土陶磁器・鉄製品・青銅製品 (S = 1/3)

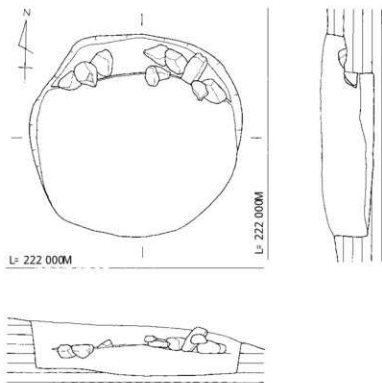
(3) 円形状水場遺構

遺構 (第34図)

遺構は、栞状水場遺構の南側で溝状遺構の西側、C 30グリッドに位置し、周辺の遺構より標高は1 mほど高い。遺構は縦1.7m、横1.6m、深さ0.5mの円形をなしており、北壁に礫が集積している。

遺構の西側には、細かな溝が走っており、標高が一段低くなっている用水路 (小水路) 的な溝状遺構へそそぎ込むような配置になっている。そのため、遺構は、水に関する遺構ではなからうか。遺構の形状と排水される部分に礫を集積していることから生活利用の農作物を洗う洗場である可能性がある。

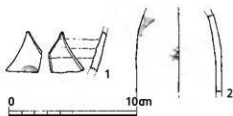
また出土物は、近世の磁器と縄文土器・石器のみであり、栞状水場遺構と概ね同時期であろう。



第34図 円形状水場遺構 (S = 1/30)

出土遺物（第35図）

1は近世肥前波佐見の染付碗である。外面に丸文を施す。2は肥前系磁器染付の徳利である。



第35図 円形状水場遺構内出土遺物（S = 1 / 3）

(4) 水場遺構に伴う水田址

遺構

遺構は、D区の水場遺構に接し東側一面に広がる。遺構は、縄文時代早期から弥生時代早期にかけてやや傾斜面に堆積したⅢ～Ⅳ層を、一定の標高約220.5mですき床層と言われるやや締まった堅い土層とその下層に鉄やマンガンの集積層により水平に切った形で見られた。

水田遺構における基本的な層順（第36図）は、上層から作物が根をはっている部分の「作土層」（水田として機能していた時に水に接していた表面酸化層 - 黄褐色な酸化層 - 青灰色な還元層），その下に

当時の湛水部	
作土層	表面酸化層
	酸化層（黄褐色）
	還元層（青灰色）
酸化的下層土	すき床層
	鉄集積層
	マンガン集積層

第36図 水田基本土層模式図

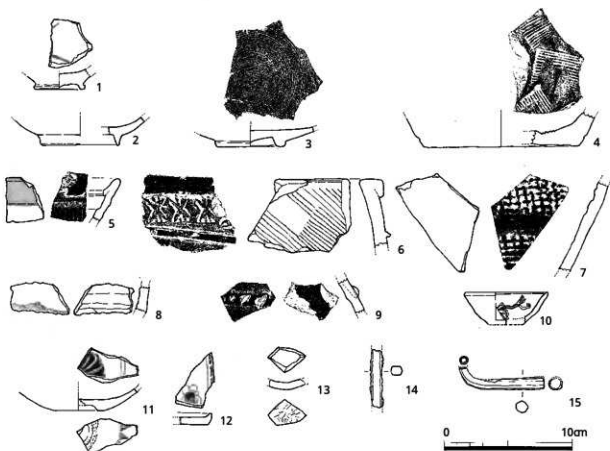
「酸化的下層土」（すき床層 鉄集積層 マンガン集積層）の順で堆積する傾向がある。このすき床層の上面に若干の作土層が残るが、さらに新しい時期に薄く堆積した鉄やマンガンの集積層によって切られているような状況が三度見られる。また、出土遺物が古い時期のもので中世・近世から現代のものであることからわかるように、古くは中・近世の水場遺構に伴う時期の水田址で、近代以降も水田の造り変えなどを行い、延々と土地利用されてことがわかる。

出土遺物（第37図）

遺構からの出土遺物は、近世陶磁器や陶磁製品、中世の瓦器1点、鉄製品などである。

1は給唐津の陶器碗である。内面に草文を施し、高台内は無軸でケズリ調整により兜巾の形状になっている。2は唐津系の陶器碗である。3は唐津系の陶器皿である。見込みにロクロ成形の調整が見られる。高台内は無軸でケズリ調整により兜巾の形状になっている。4は備前焼の播鉢の底部である。5は肥前内野山窯系に後続する17世紀後半、襜屋窯系の播鉢の口縁部である。口縁部内面を肥厚し、口縁部外面のみに鉄釉を施している。6は瓦質土器の火鉢の口縁部片である。外面の2つの突帯間に「X」字形のスタンプを連続的に型押しし、内面にハゲ目調整を行う。7は近世の大甕である。内面に格子目のアテ具痕が見られる。8は肥前陶器土瓶の底部付近である。外面に炭化物が付着している。9は朝鮮系の襖で縄状突帯が付く。器壁は薄手である。10は肥前青磁小碗である。外面に草花文を陽刻している。11は明代山西省景徳鎮窯系の小野正敏分類（小野1982）という磁器染付皿C群であり、底部の形態が砂目高台の蕃筒底である。15世紀後半から16世紀前半のものである。外面に蕪葉文を施し、内面に二重圏線が巡り、見込みに捻花文が施される。12は肥前波佐見の染付平皿である。破片であるため明確ではないが、口縁部が円形ではなく直線的であるため方形の皿であろうと思われる。

口唇部に一重圏線を巡らせ、内面にも一重圏線が巡る。また、花の文様が部分的に残存する。13は



第37図 水場遺構に伴う水田址遺構内出土遺物 (S = 1/3)

肥前磁器碗を玩具のおはじきとして再利用している。底には丸みをもち、多くの擦痕が見られる。14は端部が欠損しているが、鉄製の角柱釘である。15は青銅製の喫煙道具の一部で雁首である。

【参考・引用文献】

- 石井一郎 1994 『土木の歴史』 森北出版
 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗・皿の分類」 『貿易陶磁研究』 No 2 日本貿易陶磁器
 川根正教 2005 「近世出土土銭貨研究の課題と展望」 『考古学ジャーナル』 No 526 ニューサイエンス社
 坂井隆夫 1989 『遺品に基づく貿易古陶磁史概要 海を渡った中国陶磁』 京都書院
 田川肇編 1984 『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅳ』 長崎県教育委員会
 長谷部素爾・今井敦 1995 『日本出土の中国陶磁』 平凡社
 中野雄二 2000 「波佐見」 『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会
 久村貞男編 1975 『江永古窯』 佐世保市教育委員会
 松中照夫 2003 『土壌学の基礎 生成・機能・肥沃度・環境』 農文協
 山本晃一 1996 『日本の水制』 山海堂
 渡部一二 2002 『水路の用と美 農業用水路の多面的機能』 山海堂

第3表 A・D区ピット群出土遺物観察表

図 番号	出土グリッド	ピット番号	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考		
			外面	内面	外面	内面					
1	J-28	AⅦp-136	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	明褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け
	I-29	AⅦp-62	貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕・ナデ	灰褐色	褐灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母			
	I-28	AⅦp-106	研磨	研磨	灰黄色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
	H-29	AⅦp-34	研磨	研磨	にぶい黄褐色	褐灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
19	O-23	AⅦp-201	研磨	擦過	褐灰色	褐灰色	良	角閃石・長石・石英			
	H-28	AⅦp-93	組織痕	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英			網目
	I-30	AⅦp-21	研磨	擦過・研磨	黒褐色	黒褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母			
	J-29	AⅦp-74	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・銀色雲母			
	K-28	AⅦp-161	擦過	研磨	にぶい黄褐色	黒色	良	角閃石・長石・石英			

第4表 B・C区ピット群出土遺物観察表

図 番号	出土グリッド	ピット番号	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考	
			外面	内面	外面	内面				
20	K-12	BⅦp-5	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母		
		Bp-72	研磨・ナデ	研磨	にぶい褐色	灰褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母		
	Q-10	CⅦp-2	研磨	ナデ	にぶい褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	K-11	BⅦp-4	研磨	研磨	にぶい褐色	灰褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	Q-12	BⅦp-6	貝殻条痕	ナデ	にぶい赤褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	Q-11	CⅦp-4	擦過	擦過	黒褐色	黒色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母		
	Q-11	CⅦp-4	擦過	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母		
	Q-10	CⅦp-2	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母・銀色雲母		
	K-12	BⅦp-5	丹塗	擦過・ナデ	明赤褐色	にぶい黄褐色	良	石英・赤色粒子・金色雲母		
	K-11	BⅦp-3	ナデ	ナデ	にぶい褐色	灰褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		

第5表 出土土器観察表

図 番号	出土グリッド	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
		外面	内面	外面	内面			
22	Q-11	貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	

第6表 土坑1内出土遺物観察表

図 番号	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考	
	外面	内面	外面	内面				
24	1	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	2	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・銀色雲母	
	3	擦過	ナデ	黒褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	4	擦過・ナデ	ナデ	暗褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	5	ナデ	ナデ	褐色	黒色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	貼り付け

第7表 土坑2内出土遺物観察表

図 番号	出土グリッド	器 種	石 材	長 さ	幅	厚 さ	重 量
26	1	K-27	磨製石片	94 Dmm	62 Dmm	21 Dmm	165 2. g

第8表 土坑墓内出土土師皿観察表

図 番号	文様・調整			色 調		焼成	胎 土	備 考
	外面	内面	底面	外面	内面			
30	1	ナデ	ナデ	回転糸切り	褐色	褐色	良好	長石・小礫
	2	ナデ	ナデ	回転糸切り	褐色	褐色	良好	長石・石英・雲母片・小礫
	3	ナデ	ナデ	回転糸切り	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	長石・雲母片・小礫
	4	ナデ	ナデ	回転糸切り	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	小礫
	5	ナデ	ナデ	回転糸切り	褐色	褐色	良好	石英・雲母片・小礫
	6	ナデ	ナデ	回転糸切り	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	長石・雲母片・小礫
	7	ナデ	ナデ	回転糸切り	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	長石・小礫
	8	ナデ	ナデ	回転糸切り	褐色	褐色	良好	石英・小礫
	9	ナデ	ナデ	回転糸切り	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	長石・雲母片・小礫
	10	ナデ	ナデ	回転糸切り	褐色	褐色	良好	長石・石英・小礫
	11	ナデ	ナデ	回転糸切り	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	長石・雲母片・小礫

第9表 枅状水場遺構内出土遺物(銭貨)

図	番号	グリッド	出土層位	種類・器種	法量(単位: cm・g)	備考
32	1	B 30	遺構内一括	寛永通宝	直径2.2・内面窓径0.6	新寛永

第10表 枅状水場遺構内出土遺物(陶磁器・磁器製品・鉄製品・青銅製品)

図	番号	グリッド	出土層位	種類・器種	成形・調整・文様		備考
					外面	内面	
33	1	B 31	遺構内一括	陶器・鉢	象嵌		肥前
33	2	B 31	遺構内一括	磁器・染付碗	二重圏線・丸文	一重圏線	肥前波佐見
33	3	B 31	遺構内一括	磁器・染付碗		青海波文・二重圏線	肥前波佐見
33	4	B 30	遺構内一括	磁器・染付碗	二重圏線		肥前波佐見
33	5	B 31	遺構内一括	磁器・染付碗	一重圏線・二重圏線		肥前波佐見
33	6	B 31	遺構内一括	磁器・染付碗	二重圏線	二重圏線・不明文様	肥前波佐見
33	7	B 31	遺構内一括	磁器・染付碗	一重圏線	コンニャク印料五弁花	肥前波佐見
33	8	B 31	遺構内一括	磁器・染付碗	草花文		肥前
33	9	B 31	遺構内一括	土師器・皿	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り
図	番号	グリッド	出土層位	種類・器種	法量(単位: cm・g)		備考
33	10	B 31	遺構内一括	玩具・おはじき	直径3.7	2.4・厚さ0.5	肥前磁器碗の再利用
33	11	B 31	遺構内一括	玩具・おはじき	直径2.4	2.4・厚さ0.4	円盤状磁製品
33	12	B 31	遺構内一括	鉄製釘	長さ4.3・幅0.8・厚さ0.6		角柱釘
33	13	B 30	遺構内一括	青銅製輪	厚さ0.4		

第11表 円形水場遺構内出土遺物

図	番号	グリッド	出土層位	種類・器種	成形・調整・文様		備考
					外面	内面	
35	1	C 30	遺構内一括	磁器・染付碗	丸文		肥前波佐見
35	2	C 30	遺構内一括	磁器・染付徳利	不明文様		

第12表 水場遺構に伴う水田址内出土遺物

図	番号	グリッド	出土層位	種類・器種	成形・調整・文様		備考
					外面	内面	
37	1	E 31	遺構内一括	陶器・碗	草文		絵唐津・高台内宛巾
37	2	E 31	遺構内一括	陶器・碗			
37	3	E 31	遺構内一括	陶器・皿		見込みにロクロ成形	唐津系・高台内宛巾
37	4	F 30	遺構内一括	漆鉢		掻目(節目)	備前焼
37	5	E 30	遺構内一括	漆鉢		掻目(節目)鉄軸	肥前・17世紀後半
37	6	E 31	遺構内一括	瓦質土器・火鉢	突帯・菊花文を型押し	ハケ目調整	口唇部ヨコナデ
37	7	E 31	遺構内一括	大甕		格子目のタタキ	
37	8	D 31	遺構内一括	陶器・土瓶	ナデ	ナデ	肥前・外面炭化物付着・底部付近朝鮮系
37	9	E 30	遺構内一括	陶質・甕	縹状突帯		
37	10	D区	表探	磁器・青磁小碗		草花文を陽刻	肥前
37	11	E 30	遺構内一括	磁器・染付皿	蕉葉文	二重圏線・捻花文	明代江西省景德鎮系・幕筒底
37	12	F 30	遺構内一括	磁器・染付平皿		一重圏線・不明花文	肥前波佐見・口唇部に一重圏線
図	番号	グリッド	出土層位	種類・器種	法量(単位: cm・g)		備考
37	13	E 30	遺構内一括	玩具・おはじき	直径3.0	2.0・厚さ0.6	肥前磁器碗の再利用
37	14	D区	遺構内一括	鉄製釘	長さ4.5・幅0.9・厚さ0.7		角柱釘
37	15	E 30	遺構内一括	煙管・薩首	長さ6.6・厚さ1.2		

第3節 倒木痕

各調査区では多くの倒木痕を検出した。検出時の状況をあげると以下ようになる。

- ①検出面はⅣ層上面に限られる。
- ②構造物内に認められたのは黒色を呈する軽石混じりの土である。
- ③検出面での黒色土部分の平面形は長さ2〜3m、幅数10cmの帯状の細長い形状を呈する。
- ④構造物内の黒色土部分を掘り進めるとⅣ層の下部に入ぐつたように入り込んだり、Ⅵ層に到達したりし、時にⅦ層に含まれる礫と同様のものがブロック状に含まれる。
- ⑤細長い形状の平面形はいずれも東西方向に長軸をとり、北側には人為的に配したかのように礫が並ぶ場合がある。
- ⑥構造物内には遺物を全く含まない。

こうした状況を踏まえて、構造物内の黒色土をⅢb層とⅥ層のどちら由来のものとして考えるのか、礫の並びを人為的とみなすかといったところで調査員の間で意見の相違を見た。しかしながら、検出した構造物の性格や成り立ちについては調査員の間で明らかにすることはできなかった。

そうした中、長岡信治、松末和之の両氏に現場を見ていただく機会を得、検証の結果倒木痕であるということが判明した。結果的に遺構様に検出された構造物は樹木が倒れるときにもがれた下層のⅤ層・Ⅵ層・Ⅶ層が層序の逆転を起こしたものであった。黄色を呈するⅣ層上面で視覚的に目に付きやすいⅥ層をⅢb層と誤認し、また上層へと樹根によってつかみあげられたⅦ層の礫を人為的石列として誤認していたことになる。

一般的な倒木痕と異なりその成因は、調査区の北側に位置する眉山が溶岩ドームとして形成されたときに発生した火砕流の熱風に求める事ができるようである。火山活動の直接的影響を受けやすい雲仙岳山麓ならではの特殊構造物と言えよう。詳細は附編を参照されたい。



平成噴火・火砕流の熱風による倒木（長崎新聞社提供）

第4節 包含層出土遺物

1. 縄文時代早・前期の遺物

(1) 土器（第38図～第42図）

A類（第38図1・2）

1・2は縄文時代早期前半の厚手の無文土器の胴部であり内外面に粗くナデ調整を施し、1は内面に指頭圧痕が残っている。

B類（第38図3～20）

3～20は縄文時代早期中葉の押型文土器である。3を除いては、ほぼ深鉢形土器である。

3は遺跡出土の押型文土器の中で古い段階の早水台式土器の口縁部片である。当該期における深鉢形土器の口縁部器形は基本的に直行するものか、もしくはやや内湾するものであるが、一方で強く強く外反していること、口径がすばまること、また粘土紐が外傾接合であることから考えて壺形土器の可能性もある。口唇部に刻目を施し、外面に横方向楕円文を施文する。内面上部に原体条痕を施し、その下部にヨコナデ調整を行う。

4・5は早水台式土器に後続する下管生B式土器の口縁部片である。4は器壁が薄くやや外反し、外面に斜方向楕円文を施し、内面上部に横方向楕円文を施文する。その下部にヨコナデ調整を行う。

5は外面にやや粒の大きい楕円文を施し、内面に原体条痕が施文される。

6は下管生B式土器に後続する田村式土器古段階の口縁部片である。口唇部内面に刻目を施し、外面に縦方向楕円文を施文する。また、外面全面に炭化物が付着している。内面にナデ調整後に3cm程のやや長大化した原体条痕を施す。原則としてこの時期になると原体条痕の下部に文様を施さなくなる。

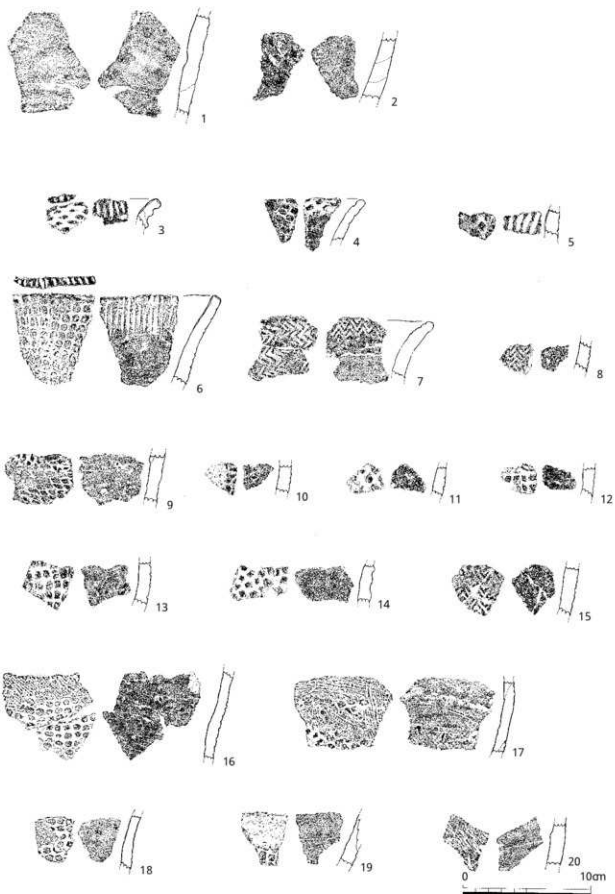
7は田村式土器に後続する手向山式土器直前段階もしくは手向山式古段階の口縁部片である。器壁がやや厚く、強く外反する器形で、外面にやや間延びした縦方向山形文を施文する。内面に横方向山形文を施文し、その下部にヨコナデ調整を行う。

8は早水台式土器の胴部片である。外面に横方向山形文を施し、内面にナデ調整を行う。

9～12・15は下管生B式土器の胴部片である。9は外面に縦や横方向に楕円文を施し、内面にナデ調整を行う。15は外面に縦や横方向に山形文を施し、内面にナデ調整を行う。10～12は外面に早水台式土器に比べやや粒の大きな楕円文を施し、内面にナデ調整を行う。

13・14は田村式土器古段階の胴部片で、外面に下管生B式土器よりもさらに楕円の粒が粗大化し、内面にヨコナデ調整を行う。

16～19は下管生B式土器新段階以降の胴部片である。16は外面にやや粒の大きい楕円文を施したあとに、外面上部に燃糸文により重複施文を行っている。内面にケズリ調整後にさらにナデ調整を行っている。内面を調整する際についた工具痕が、D類に分類した手向山式土器に見られる工具痕に共通しており、手向山式土器と近い時期にある可能性もある。17も16に類似しているが、外面に楕円文を施したあとに粗ケズリを行い、さらにナデ調整を行っている。また指頭圧痕も見られる。さらにその上から重複施文として横方向と縦方向に燃糸文を施文している。このような複雑な文様構成の土器である。18・19は外面の楕円文の文様と内面調整から16・17と同類であろう。19は胎土に黒曜石片を含む。



第38図 縄文時代早・前期の土器① (S = 1 / 3)

20は押型文土器併行期の燃糸文土器の胴部片である。外面に燃糸文を施し、内面に指頭圧痕が見られる。

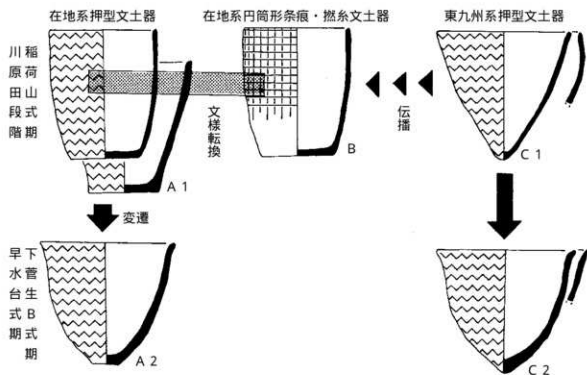
C類（第40図21～27）

21～27は縄文時代早期中葉の厚手押型文土器もしくは厚手燃糸文土器である。

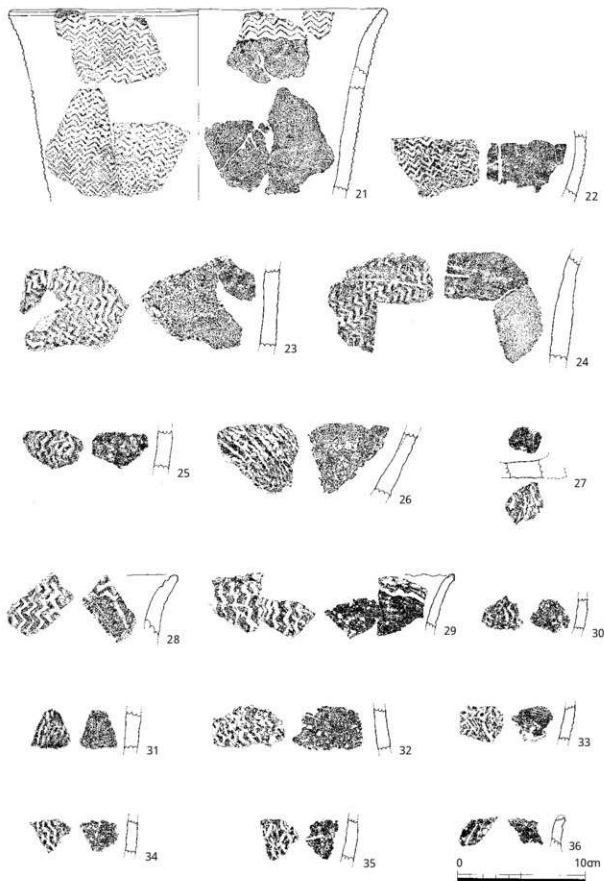
21～25は器壁の厚さが1cm超であることから土器寸法が大型深鉢形土器であるのか、もしくは器壁が厚い円筒形押型文土器である弘法原式土器の影響を受けた在地系土器のいずれかの可能性のある類である。そこで考えられるのが、島原半島の弘法原式併行期（川原田段階から稲荷山式期）は東九州系押型文土器の「器形が深鉢形・薄手化傾向の器壁・尖底+文様が押型文様」（第39図C1）が伝播してくる。その過程で円筒形条痕土器の一野式土器や円筒形燃糸文土器（第39図B）に文様転換が行われた円筒形押型文土器である弘法原式土器（第39図A1）が成立し、それに後続して早水台式から下管生B式併行期に「器形が円筒形基調の押型文尖底の影響を受けた狭脚な平底・厚手の器壁+文様が押型文様」（第39図A2）という特徴をもち押型文土器が漸移的に在地化する。その代表的な例として21・22の土器があげられる。ちなみに分類したC類が在地（島原半島）系土器だとするならば、B類が搬入品もしくは模倣品といった客体の土器だと言えよう。

21・22は早水台式土器から下管生B式土器併行期である。21は口縁部で器壁が厚くやや外反し、外面に横方向山形文を施す。内面上部に横方向山形文を施し、その下部にヨコナデ調整を行う。22は胴部片で21と類似するが、外面に横方向山形文を施し、内面にヨコナデ調整を行う。

23～25は田村式土器から手向山式土器直前段階併行期の胴部片であり、文様と器壁から同一個体の



第39図 在地（島原半島）系押型文土器の概念図



第40図 縄文時代早・前期の土器②(S = 1 / 3)

可能性もある。器壁が厚く、外面が縦方向山形文を施し、内面にナデ調整を施す。

26は押型文土器併行期の燃糸文土器胴部（底部付近）である。器形が厚手なのか、底部付近のため部分的に器壁が厚いのかは判別しがたい。外面に斜方向燃糸文を施し、内面にナデ調整を行う。

27は平底の底部で、弘法原式土器の底部に見られる網代圧痕である可能性がある。

D類（第40・41図28～51）

28～37は縄文時代早期後半の押型文土器終末段階で山形文を残した手向山式土器である。以下にあげる「手向山式土器古段階」、「手向山式土器中段階」、「手向山式土器新段階」とは便宜上、当遺跡に限り新旧関係を示すものとして断っておきたい。

29・32～51は良質な粘土を用い、表面調整・成形は工具を使うなど非常に丁寧であるが一方で、粘土との混和剤となるべき砂粒が少なく、焼成中・焼成後・使用中・使用後のいずれかの段階で土器の胎土が「すかさずかな状態」になっている。繊維痕の可能性も考えられる。この状態は28・30・31といった手向山式土器古段階以前では確認できない。そのため胎土がすかさずかな状態は手向山式土器中段階以降の特徴と言える。また、内面調整は、ヘラ状工具によるものかといった種類は不明だが、工具両端によるキズを残し、両端の内側は調整のケズリではなく指でナデたよりも丁寧である。そのため工具によるケズリというよりも、工具を使用した丁寧なナデ調整（第41図37 2、写真）と見えよう。

28は手向山式土器でも古段階の口縁部片である。器壁が外反し、外面に間延びした縦方向山形文を施す。内面上部に横方向山形文を施し、その下部にヨコナデ調整を行う。

29は28に後続するであろう手向山式土器の胴部片である。器壁が外反し、口唇部に刺突を施す。

外面に間延びした縦方向山形文を施し、内面上部に横方向山形文を施文する。その下部にヨコナデ調整を行う。

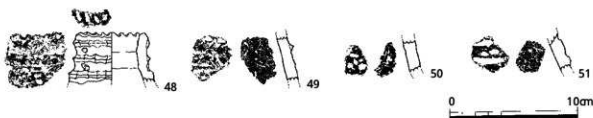
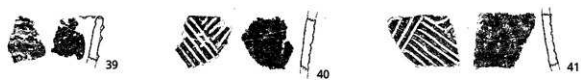
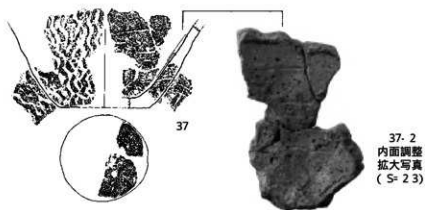
30・31は手向山式土器古段階の胴部片である。外面に間延びした縦方向山形文を施し、内面にナデ調整を行う。

32～36は手向山式土器中段階の胴部片である。押型文様終末期で外面に間延びした縦方向山形文様を施し、内面は工具により調整を行い、胎土がすかさずかな状態の組み合わせである。36は口縁部付近であるが外面の山形文様が崩れたような細かい沈線文を施文している。

37は手向山式土器中段階の底部である。一般的に手向山式土器は上げ底ぎみの平底だと言われているが、37は平底である。また、外面は間延びした縦方向山形文を施し、内面は工具により調整が行われている。胎土はすかさずかな状態である。

38～47は手向山式土器新段階である。38は波状口縁であり、39は平坦口縁部である。38・39は器壁が薄く、外反する。口唇部に刻目を施し、外面にミミズばれ文とその下部に綾杉状沈線文のモチーフで、内面に工具によりナデ調整を行う。この工具痕は中段階に比べ土器製作過程における工具使用による調整順序が解るほど明瞭に見られる。40～44は外面にミミズばれ文より下部の綾杉状沈線文の部分である。44は綾杉状沈線文の上部に沈線が巡る。45～47は、その綾杉状沈線文の沈線が太くなり44と同様にその上部に沈線が巡る。

48～51は手向山式土器の壺形土器である。48は口縁部で口唇部に刻目を施し、外面にミミズばれ文を2条巡らせる。そのミミズばれ文の下部に不規則な間隔で刺突列点文を施す。



第41図 縄文時代早・前期の土器③ (S = 1 / 3)

49～51は壺形土器の肩部である。49は、ミミズばれ文と刺突列点文を施す。50・51は太い沈線を巡らせ、その下部に刺突列点文を施す。①38～44は細い沈線で②45～47は38～44に比べ太めの沈線になる。この沈線は後続する妙見・天道ヶ尾式土器の沈線に類似するため「① ② 分類したE類」への時間的変遷の可能性がある。

E類（第42図52～63）

52は縄文時代早期後半の妙見・天道ヶ尾式土器である。妙見・天道ヶ尾式土器は手向山式土器と平栴式土器とを繋ぐと考えられる土器である。52は器壁が薄く外反する波状口縁部片である。手向山式土器や平栴式土器の口縁部が刻目であるのに対して刺突列点を口縁部に施す。口縁部を巡る突帯文に直行させ縦に突帯文を貼り付ける。その巡る突帯上に直行する縦方向突帯文上に刺突列点文を施す。

縦方向突帯を境に両側に沈線文が施されている。

53～63は52に後続する縄文時代早期後半の平栴式土器である。

53～56は口縁部片で平坦口縁である。口縁部文様帯が縦幅広で器壁は胴部に比べ肥厚し、やや内湾ぎみである。口縁部は丸みをもち、浅い刻目を施し、外面は2重突帯を巡らせ、その突帯上に刻目を入れる。さらに両突帯の下部に棒状工具による刺突列点文を施している。また、両突帯間に波状の沈線を施しているような文様構成である。内面はヨコナデ調整を行う。

57は口縁部文様帯の器壁が胴部に比べ肥厚していない。小破片であるため判別しがたいが長頸状の壺の器形をなす口縁部であろう。口縁部から頸部になだらかに向かう土器片で、やや内湾ぎみで直行する。口縁部に刻目を施し、外面に沈線、短沈線文、曲線状沈線文といった棒状工具による曲線状刺突列点文の特異なモチーフである。

58～63は外面に縄文を施す、やや内湾ぎみの胴部片である。58は外面に刺突列点文を巡らせ、その下部に縄文を施し、内面にヨコナデ調整を行う。61は外面に縄文と波状の沈線を施し、内面にヨコナデ調整を行う。

F類（第42図64～66）

64～66は縄文時代早期の底部片である。

64は尖底もしくは丸底ぎみの平底であり、押型文土器の底部であろう。

65は丸底ぎみの平底であり、押型文土器の底部であろう。

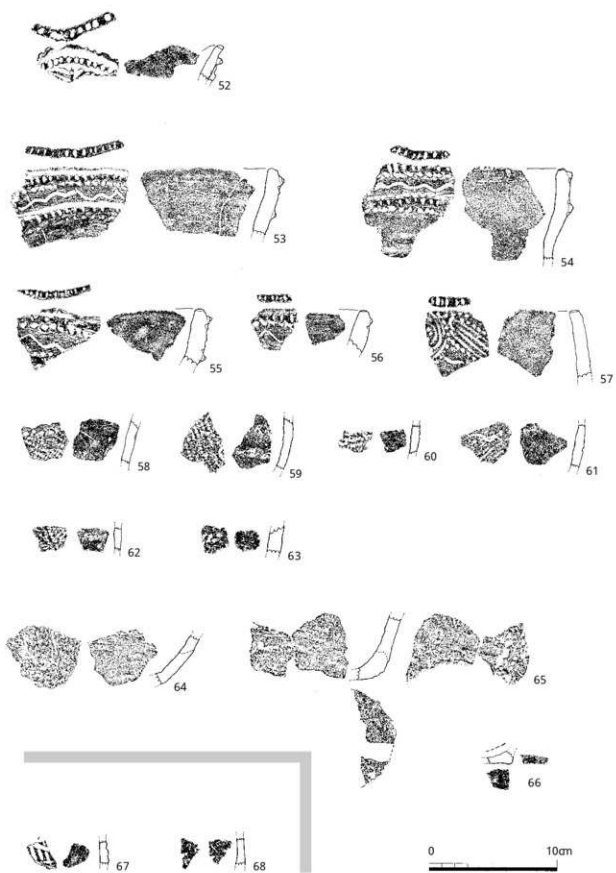
66は平底である。小径の底部のため手向山式土器から平栴式土器の底部であろう。

G類（第42図67・68）

67・68は縄文時代前期後半の曾畑式土器の胴部片であり、胎土に滑石を混入している。文様は幾何学文様の一部である。

67は外面に縦・横方向に丸棒状工具により沈線が施されている。内面にナデ調整を行う。

68は外面に刺突を施す。内面にナデ調整を行う。



第42図 縄文時代早・前期の土器④ (S = 1/3)

第13表 縄文時代早・前期土器観察表①

図	番号	区	グリッド	出土層位	文様・調整		色		焼成	胎	土	備	考
					外蓋	内蓋	外蓋	内蓋					
38	1	D	A 30	Ⅱb層	ヨコナデ・指頭圧痕	ヨコナデ・指頭圧痕	褐色	褐色	不良	角閃石・石英・長石・赤粘土		縄文早期厚手黒文土器	
38	2	D	D 32	Ⅱb層	ケズリ後削いナデ	削いヨコナデ	明赤褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・石英・長石・赤粘土		縄文早期厚手黒文土器	
38	3	C	V 8	Ⅱb層	縦方向楕円押型文	原形糸痕・ナデ	にぶい赤褐色	明赤褐色	良好	角閃石・長石・赤粘土		豊形土器の口縁部の可能性 口唇部に刺目	
38	4	D	B 30	Ⅱa層	斜方向楕円押型文	横方向楕円文・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・石英・長石・赤粘土		近世水塚遺構内出土	
38	5	C	V 9	Ⅱ層	斜方向楕円押型文	原形糸痕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・石英・長石・雲母			
38	6	D	C 31	Ⅱb層	縦方向楕円押型文	長大化した原形糸痕・ヨコナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・石英・赤粘土			
38	7	D	C 30	Ⅱb層	まのびした縦方向山形押型文	横方向山形押型文・ナデ	黄褐色	褐色	不良	角閃石・石英・長石・赤粘土・黒曜石?			
38	8	D	F 30	Ⅱb層	横方向山形文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不良	角閃石・石英・長石			
38	9	A	Tr 2	Ⅱb層	縦・横方向楕円押型文	横方向楕円押型文	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・石英・長石			
38	10	D	D 30	Ⅱb層	横方向楕円押型文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不良	角閃石・石英・長石			
38	11	D	C 30	Ⅱb層	やや粒の大きい楕円押型文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不良	角閃石・石英・長石・雲母・赤粘土			
38	12	D	B 30	Ⅱ層	やや粒の大きい楕円押型文	ヨコナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石			
38	13	D	D 31	Ⅱb層	やや粒の大きい楕円押型文	ヨコナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不良	角閃石			
38	14	A	L 25	Ⅱb層	楕円押型文	ヨコナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・赤粘土			
38	15	D	D 30	Ⅱb層	横・縦方向山形文	ヨコナデ	明黄褐色	明黄褐色	良	角閃石・石英・長石・赤粘土			
38	16	D	B 31	Ⅱa層	やや粒の大きい楕円押型文・照糸文	工具ナデ痕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・石英・赤粘土		近世水塚遺構内出土	
38	17	D	B 31	Ⅱa層	楕円押型文・ケズリ・ナデもしくは指頭圧痕	ヨコケズリ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・石英・長石・赤粘土		近世水塚遺構内出土	
38	18	D	B 31	Ⅱ層	楕円押型文で部分的にナデ消し	ヨコナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・金色雲母・赤粘土			
38	19	D	C 30	Ⅱb層	楕円押型文・上部は剥落	ヨコナデ	黄灰色	淡黄色	良好	角閃石・石英・長石・黒曜石			
38	20	D	D 32	Ⅱb層	斜方向に照糸文を施す	ナデ・指頭圧痕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・石英・長石・赤粘土			
40	21	D	D 31	Ⅱb層	横方向山形押型文	ヨコナデ	黒褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・石英・長石			
40	22	D	C 31	Ⅱb層	横方向山形押型文	ヨコナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・石英・長石			
40	23	D	D 30	Ⅱb層	横・縦方向山形押型文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不良	角閃石・石英・長石・金色雲母・赤粘土			
40	24	D	C 30	Ⅱb層	横・縦方向山形押型文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不良	角閃石・石英・長石・金色雲母・赤粘土			
40	25	D	D 30	Ⅱb層	ややまのびきみな縦方向山形押型文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不良	角閃石・石英・長石			
40	26	D	D 32	Ⅱb層	山形くずれの押型文	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・石英・長石・赤粘土			
40	27	D	E 30	Ⅱb層	照糸文	丁寧なナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良好	角閃石・石英			
40	28	B	S 13	ⅡC層	まのびした縦方向山形押型文	まのびした横方向山形押型文・ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・金色雲母			
40	29	A	Tr 1	Ⅱb層	まのびした縦方向山形押型文	まのびした横方向山形押型文・ヨコナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良好	角閃石			
40	30	D	E 31	Ⅱ層	まのびした横方向山形押型文	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石			
40	31	C	V 8	Ⅱb層	まのびした縦方向山形押型文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	-			
40	32	D	溝 1	Ⅱ層	まのびした縦方向山形押型文	工具調整	褐色	にぶい褐色	良好	角閃石			
40	33	D	C 30	Ⅱb層	まのびした縦方向山形押型文	工具調整	褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石			
40	34	D	D 30	Ⅱb層	まのびした縦方向山形押型文	工具調整	褐色	褐色	良	角閃石・石英			
40	35	D	E 31	Ⅱb層	まのびした縦方向山形押型文	工具調整	褐色	にぶい褐色	良	-			
40	36	D	C 30	Ⅱb層	突帯に刺突 ミミズばれ 穴の突帯下部を沈埋	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	良好	-			
41	37	D	E 30	Ⅱb層	まのびした縦方向山形押型文	工具調整	褐色	にぶい赤褐色	良好	D 30出土遺物と併合			
41	38	D	C 30	Ⅱb層	ミミズばれ穴・沈線文・ナデ	工具調整	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	-		塗料口縁 口唇部に刺目	
41	39	D	C 30	Ⅱb層	ミミズばれ穴・ナデ	工具調整	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	-		口唇部に刺目	
41	40	D	C 30	Ⅱb層	沈線文	工具調整	にぶい褐色	にぶい赤褐色	良好	-			

第14表 縄文時代早・前期土器観察表②

図	区	グリップ	出土部位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考	
				外層	内層	外層	内層				
41	41	D	C 30	V b 層	沈線文・ナデ	工具調整	灰青色	にぶい褐色	良好	-	
41	42	D	C 30	V b 層	ミミズばれ文・沈線文・ナデ	工具調整	褐色	灰黄褐色	良好	-	
41	43	D	C 30	V b 層	貝殻断面	工具調整	明赤褐色	明赤褐色	良好	-	
41	44	D	C 30	V b 層	沈線文・ナデ	工具調整	褐色	褐色	良好	-	
41	45	D	E 30	V b 層	沈線文・ナデ	工具調整	にぶい褐色	暗灰黄色	良好	-	
41	46	D	E 30	V b 層	沈線文・ナデ	工具調整	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	-	
41	47	D	F 30	V b 層	沈線文・ナデ	工具調整	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	-	
41	48	A	Tr 1	V b 層	ミミズばれ文・沈線文・ナデ	工具調整	明赤褐色	にぶい褐色	良好	-	
41	49	A	Tr 1	V b 層	ミミズばれ文・刺突列点文	工具調整	明赤褐色	褐色	良好	-	
41	50	D	F 30	V b 層	刺突列点文・ナデ	ナデ?	明赤褐色	明赤褐色	良好	-	
41	51	D	F 30	V b 層	沈線文・刺突列点文・ナデ	工具によるナデ	明赤褐色	明赤褐色	良好	-	
42	52	D	A 31	II 層	縦・横交差文・連続刺突列点文・ヨコナデ	ヨコナデ	明赤褐色	明赤褐色	良好	-	
42	53	D	C 30	V b 層	刺突列点文・斜目交差文・流状沈線文・ナデ	ヨコナデ	褐色	灰黄褐色	良	角閃石・石英・長石・金色雲母・赤粘土	
42	54	D	C 30	V b 層	刺突列点文・斜目交差文・流状沈線文・ナデ	ヨコナデ	にぶい褐色	褐色	良	角閃石・石英・長石・金色雲母・赤粘土	
42	55	D	C 30	V b 層	刺突列点文・斜目交差文・流状沈線文・ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・石英・長石・金色雲母・赤粘土	
42	56	D	D 30	V b 層	刺突列点文・斜目交差文・流状沈線文	ヨコナデ	にぶい褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・金色雲母	
42	57	A	L 25	IV 層	刺突列点文・沈線文	ヨコナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・石英・金色雲母・赤粘土・黒曜石	
42	58	D	C 30	V b 層	刺突列点文・横文・ナデ	ヨコナデ	にぶい褐色	黄褐色	良好	角閃石・長石・金色雲母・黒曜石	
42	59	D	C 30	V b 層	横文	ヨコナデ	にぶい黄褐色	灰褐色	良好	角閃石・石英・長石・金色雲母	
42	60	D	C 30	V b 層	横文	ヨコナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・石英・長石・金色雲母・赤粘土	
42	61	A	M 29	II b 層	横文・流状沈線文	ナデ	暗灰黄色	にぶい黄褐色	良	角閃石・石英・長石	
42	62	D	C 30	V b 層	横文	ヨコナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・金色雲母	
42	63	A	J 27	II 層	横文?	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・石英・長石	
42	64	D	F 30	II b 層	ナデ?	ナデ?	褐色	褐色	不良	角閃石・石英・長石・赤粘土	
42	65	D	F 30	II b 層	ナデ	ナデ	褐色	暗灰黄色	不良	角閃石・石英・長石	
42	66	D	E 30	II b 層	ナデ	-	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・石英・長石	
42	67	C	V 7	II C 層	沈線文	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・石英・長石・滑石	縄文時代前期土器
42	68	A	M 24	II b 層	沈線文	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・石英・長石・滑石	縄文時代前期土器

【参考・引用文献】

大坪芳典・遠部慎 1999「早水台式土器の新例 - 竹田高校収蔵資料の提起する問題 - 」『南九州縄文通信』No.13 南九州縄文研究会

木崎康宏 1998「中原式土器について」『九州縄文土器編年の諸問題 - 早期後半土器編年の現状と課題 - 』九州縄文研究会

高野晋司編 1983『弘法原遺跡』吾妻町の文化財7 吾妻町教育委員会

橋 昌信他 1970『福荷山遺跡調査報告』大分県文化財調査報告第18輯 大分県教育委員会

古門雅高・渡邊康行編 1998『広久保遺跡』長崎県江迎町教育委員会

水ノ江和同 1998「九州における押型文土器の地域性」『九州の押型文土器 - 論攷編 - 』九州縄文研究会

村川逸朗編 1992『弘法原遺跡』吾妻町の文化財13 吾妻町教育委員会

渡邊康行 1999「一野式・弘法原式の設定をめぐって」『西海考古』創刊号 西海考古同人会

八幡一郎・賀川光夫 1995『早水台』大分県文化財調査報告書3輯 大分県教育委員会

(2) 石器 (第43図～第45図)

概要

D区Vb層を中心とした地点より、縄文時代早期の土器に伴って石器や剥片類が出土した。同地点から出土した土器は早期後半の土器が主体を占めており、これらの時期に伴うと思われる石器は全32点の内、3割がⅢb層に混在し、残りの7割がVb層より出土した。使用された石材は黒色・暗灰色・灰色黒曜石が7割で、玄武岩が3割である。黒色黒曜石が伊万里市の腰岳産、暗灰色黒曜石が佐世保市の針尾産もしくは淀姫産、灰色黒曜石が西彼杵半島の上土井行産(従来の亀岳産)と思われる。石器の種類は石鏃17点、石匙1点、削器6点、石核5点、剥片3点である。

石鏃 (第43図1～17)

いずれも打製石鏃で局部磨製石鏃は含まれていない。

1・2は基部の挟りが「V」字状を呈するものである。1は全体が狭小な二等辺三角形の形状で、基部の挟りが「V」字状である。鋭い先端部と、胴部から脚部にかけて内に反り気味であるのが特徴である。両側縁に鋸歯状の細かい加工が施されている。2は二等辺三角形の形状で、基部の挟りが「V」字状である。胴部から脚部にかけて反り気味である。

3～17は二等辺三角形の形状で、基部の挟りが「U」字状をなす「鎌形鏃」である。3は小形なもので、両側縁が若干反り気味で脚端部が細く尖る。片脚を欠失している。胴部中央には自然面を残す。5は深く基部を挟られている細身の長脚鏃である。片脚を欠失している。4・6は胴部と脚部の両側縁が張り出す特徴を持つものである。6は先端を欠失しており、側縁の欠失部と脚部が張り出すものである。7～10は脚部が膨らみをもつ。7は長幅比の小さい三角形でややいびつな形である。幅広い脚部に比べ先端部が細身になる。先端部は欠失している。9・10は脚部の膨らみに比べ屈曲部から先端部が若干細身になる。9は先端部を欠失している。11・12は先端部がやや丸みを帯びている。14～17は全面に丁寧な調整が施され、深い「U」字状の挟りをもつ典型的な鎌形鏃である。13は胴部の一部のみが残存している。14・15は片脚が欠失している。

また、13～15は、衝撃剥離により先端部が大きく欠失している。16は表裏ともに二次加工が丁寧で、左右対称な二等辺三角形である。17は片脚を欠失している。

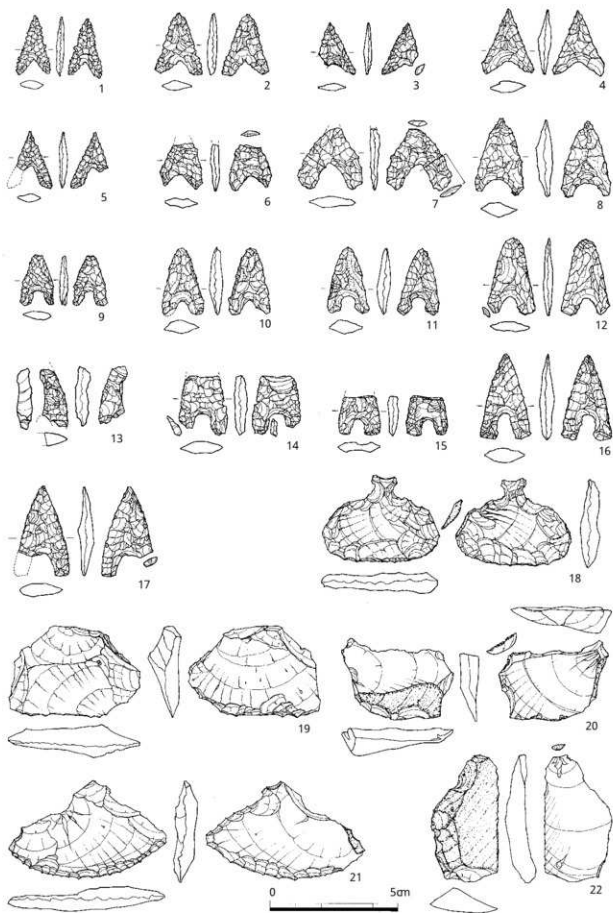
石匙 (第43図18)

18は黒曜石製の横型石匙で、片縁を欠失している。刃部形態は弱く内湾する刃である。刃部と握み部の加工はしっかりとつくられており、両端は丸みをもつ。握みの先端部にも加工している。表裏とも主要剥離面を残している。

削器 (第43図19～21, 第44図23・25・26)

19～21は横長剥片を素材とする削器である。19・21は定形化した削器で、幅広い横長剥片の両端が扇状を呈している。素材の剥片の広がった末端部全体に加工を施し刃部とする。19は刃部が直線刃の形状である。21は刃部が緩やかに弧状をなす形状である。刃部に両面加工を施す。20は刃部の加工を2ヶ所に施している。21は石匙に類似するが握み部の加工が見られないので石匙にするには無理があるろう。

23は縦長剥片を素材とする削器である。表面に自然面が残る。23は玄武岩製の縦長剥片の側辺に急に加工を加えたものである。



第43図 縄文時代早・前期の石器① (S = 2/3)

25・26は楕円形を呈する形状の削器である。25はやや厚みのある削器である。剥片下端に粗い加工を施し、表面に自然面を残す。26は25に比べ、厚手の削器で、剥片下端に粗い加工を施す。

剥片（第43図22，第44図24・27）

22は黒曜石製の縦長剥片の側面に使用痕が見られる。24は玄武岩製で表面に稜が入る。27は玄武岩製で断面三角形を呈する縦長の剥片である。側辺にはガジリが見られる。24・27は縄文時代早期のものかは判断しがたく、旧石器時代の剥片である可能性もある。

石核（第44・45図28～32）

28～30は比較的扁平で平面概形が三角形を呈し分割面を有する石核である。28は黒曜石製で表裏ともに分割面を打面として分割剥離を有するものである。その側面に自然面を残している。

29は表裏ともに分割面を打面として分割剥離を有するものである。30は黒曜石製で裏面に分割面を打面として剥離面を有するものである。28～30は柏原F遺跡（山崎・小畑1983）でⅡa型石核に分類された、いわゆる「柏原型石核」と類似する。

31は安山岩の大形で厚手の石核である。表裏ともに多方向から剥片剥離が行われている。所々に自然面を残している。

32は黒曜石の亜円礫を素材とするものである。表面に多方向から剥片剥離が行われ、側面および裏面に自然面が残る。裏面は一定方向から剥片剥離が行われている。

小 結

遺跡のD区V層を中心とする包含層から出土した石器は、縄文時代早期後半の土器に伴って出土した。早期の石器は、D区にほぼ密集しており、周辺のA・B・C区で点在する状況である。

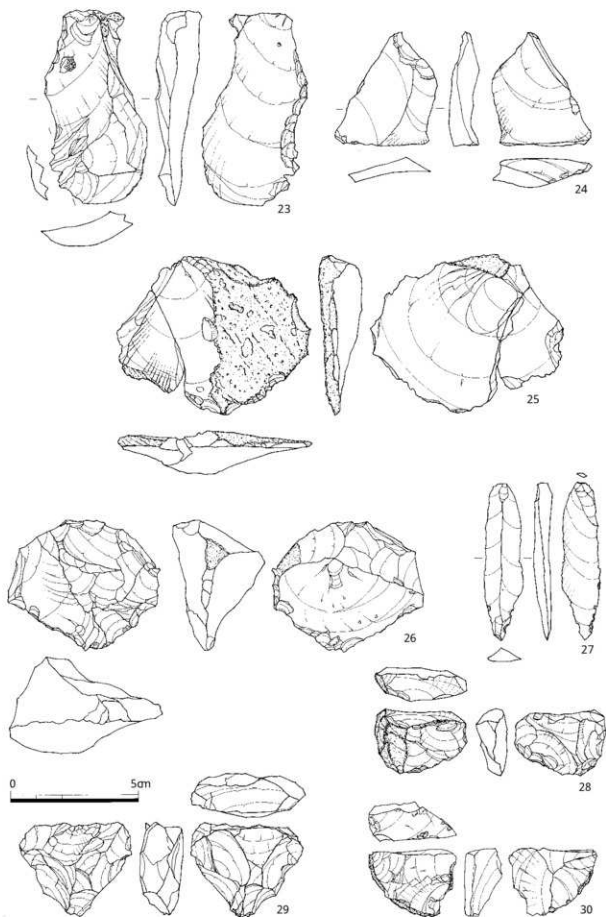
このD区以外に点在する石器や縄文時代早期単純層のV層以外のⅢb層より出土したものは、縄文時代晩期から弥生時代早期に混在し出土しているため原位置を保っていない可能性がある。

また器種は、石鏃や削器の割合が大半を占める。

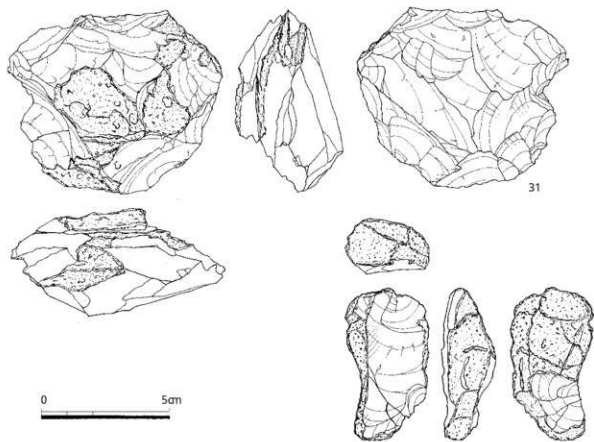
さて、縄文時代早期の包含層から出土した石鏃は、細身で袂入部が「V」字状のものを除けば袂入部が「U」字状で、かつ「二等辺三角形の鋸形鏃（以降、B類石鏃）」のものが多く、土器は早水台式土器以降の手向山式土器や平楯式土器といった早期後半土器が多い。

一方で稲荷山式前段階の円筒形燃土土器・稲荷山式土器・早水台式土器といった押型文土器前半期ものも多く占める町内遺跡の下末宝遺跡（本多2005）では、「正三角形もしくは長幅比の小さい三角形の石鏃（以降、A類石鏃）」が多く出土した。

下末宝遺跡では、押型文土器前半期の土器とA類石鏃が伴関係にあり、権現胎遺跡では、押型文後半期～早期後半期の土器とB類石鏃が伴関係にある状況から、押型文土器前半期のA類石鏃と後半期以降のB類石鏃との間に、一つの特徴として鋸形鏃の長さに長大化が見られると言えよう。県内の早期後半の遺跡である国見町松尾遺跡（辻田2002）や当該期の遺物が数量的に多い江迎町広久保遺跡（古門・渡邊編1998）では、早期手向山式土器に伴い遺跡と類似するような長幅比が2：1以上の長身の石鏃が出土している。また、広久保遺跡の削器は、刃部形態が「直線的なもの」や「緩やかに弧状をなすもの」があり、権現胎遺跡の削器と類似している。県内では、早期後半の資料がまとまって出土する遺跡が少ない。これらの遺跡からの早期後半の石器の特徴が、早期後半の一樣相とも言え



第44図 縄文時代早・前期の石器②(S = 2 / 3)



第45図 縄文時代早・前期の石器③ (S = 2 / 3)

るのではないだろうか。その他に、柏原型石核と類似する28～30は、町内からは下末宝遺跡で出土しており、県内からは広平遺跡（古門・渡邊1997）で類似資料が見られる。

【参考・引用文献】

- 麻生 優 1968 『岩下洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会
 木下修・橋昌信 1978 『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第8集 福岡県教育委員会
 高野晋司・村川逸郎他 1992 『弘法原遺跡』吾妻町教育委員会
 高野晋司他 1983 『弘法原遺跡』吾妻町教育委員会
 高野晋司他 1992 『一野遺跡』有明町教育委員会
 秀島貞康他 2002 『下峰原高場遺跡』諫早市教育委員会
 古門雅高・渡邊康行他 1996 『頭ヶ島白浜遺跡』有川町教育委員会
 古門雅高・渡邊康行編 1997 『広平遺跡』長崎県教育委員会
 古門雅高・渡邊康行編 1998 『広久保遺跡』長崎県教育委員会
 本多和典編 2005 『下末宝遺跡・上畦津遺跡』深江町教育委員会
 辻田直人 2002 『松尾遺跡』国見町教育委員会
 山崎純男・小畑弘己 1983 『柏原遺跡群Ⅰ - 縄文時代遺跡F遺跡の調査 - 』福岡市教育委員会

第15表 縄文時代早期石器計測表

図版	番号	注記番号	区	層位	グリット	器種	石材	先端角度 (度)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
43	1	GGW_C区_表探	C	表探		石鏃	黒色黒曜石	35.0	23.0	15.0	3.0	0.5
43	2	GGW_O22_Ⅲb層_A2510	A	Ⅲb層	O 22	石鏃	暗灰色黒曜石	45.0	25.0	19.0	3.5	1.1
43	3	GGW_CTr_9_Vb層_040902	C	Vb層	CTr 9	石鏃	黒色黒曜石	47.0	21.0	15.0	3.0	0.3
43	4	GGW_C31_Vb層_D494	D	Vb層	C 31	石鏃	玄武岩	48.5	26.0	20.0	6.0	1.2
43	5	GGW_Q11_Ⅲb層_4349	B	Ⅲb層	Q 11	石鏃	黒色黒曜石	47.0	23.0	14.0	3.0	0.3
43	6	GGW_C30_Vb層_D481	D	Vb層	C 30	石鏃	暗灰色黒曜石	18.0	16.0	3.0	0.9	
43	7	GGW_D30_Vb層_D341 (接合番号01301) GGW_D30_Vb層_D343 (接合番号01302)	D	Vb層	D 30	石鏃	黒色黒曜石	64.0	24.0	26.0	4.0	1.4
43	8	GGW_F31_Ⅲb層_D257	D	Ⅲb層	F 31	石鏃	暗灰色黒曜石	46.0	30.0	19.0	7.0	2.4
43	9	GGW_U 7_Ⅱc層_040210	C	Ⅱc層	U 7	石鏃	暗灰色黒曜石	45.0	20.0	13.0	3.5	0.7
43	10	GGW_K27_Ⅲb層_A4137	A	Ⅲb層	K 27	石鏃	暗灰色黒曜石	102.0	26.0	16.0	5.5	1.5
43	11	GGW_C31_Vb層_D509	D	Vb層	C 31	石鏃	暗灰色黒曜石	111.0	28.0	17.0	5.0	1.3
43	12	GGW_C30_Vb層_D467	D	Vb層	C 30	石鏃	暗灰色黒曜石	118.0	30.0	19.0	4.0	1.5
43	13	GGW_E31_Ⅲb層_D303	D	Ⅲb層	E 31	石鏃	黒色黒曜石	23.0	15.0	5.0	1.0	
43	14	GGW_G31_Ⅲb層_A4515	A	Ⅲb層	G 31	石鏃	暗灰色黒曜石	23.0	19.0	5.0	1.9	
43	15	GGW_D31_Vb層_D412	D	Vb層	D 31	石鏃	黒色黒曜石	16.0	16.0	3.0	1.0	
43	16	GGW_E31_Vb層_D331	D	Vb層	E 31	石鏃	黒色黒曜石	43.0	33.0	20.0	6.0	2.0
43	17	GGW_D区_IV層_溝 1	D	IV層		石鏃	黒色黒曜石	43.0	35.0	21.0	6.0	2.4
43	18	GGW_D31_Vb層_D321	D	Vb層	D 31	石鏃	灰色黒曜石	34.0	45.0	7.0	9.5	
43	19	GGW_D区_Vb層_表探_040830	D	Vb層		削器	玄武岩	36.0	52.0	13.0	18.6	
43	20	GGW_F30_Vb層_D359	D	Vb層	F 30	削器	暗灰色黒曜石	32.0	43.0	8.0	10.1	
43	21	GGW_C30_丹形土坂_近世以降_040621	D	攪乱	C 30	削器	玄武岩	39.0	62.0	9.0	14.9	
43	22	GGW_F30_Vb層_D356	D	Vb層	F 30	使用痕剥片	黒曜石	50.0	27.0	12.0	9.7	
44	23	GGW_C30_Vb層_D471	D	Vb層	C 30	削器	玄武岩	76.0	44.0	19.0	31.1	
44	24	GGW_R14_IV層_7024	B	IV層	R 14	剥片	玄武岩	45.0	40.0	12.0	11.8	
44	25	GGW_C30_Vb層_D491	D	Vb層	C 30	削器	玄武岩	63.0	77.0	17.0	59.9	
44	26	GGW_K30_Ⅲb層_A4608	A	Ⅲb層	K 30	削器	玄武岩	51.0	61.0	39.0	62.6	
44	27	GGW_E30_Vb層_D387	D	Vb層	E 30	剥片	玄武岩	52.0	16.0	8.0	5.0	
44	28	GGW_M24_Ⅲb層_A2855	A	Ⅲb層	M 24	石核	暗灰色黒曜石	26.0	36.0	13.0	10.8	
44	29	GGW_G30_Ⅲb層_A4287	A	Ⅲb層	G 30	石核	玄武岩	37.0	45.0	17.0	25.4	
44	30	GGW_J30_Ⅲb層_A4558	A	Ⅲb層	J 30	石核	暗灰色黒曜石	26.0	34.0	15.0	11.3	
45	31	GGW_C30_Vb層_D456	D	Vb層	C 30	石核	玄武岩	72.0	85.0	42.0	200.0	
45	32	GGW_F31_Vb層_D519	D	Vb層	F 31	石核	暗灰色黒曜石	60.0	33.0	22.0	39.6	

2. 縄文時代後期～弥生時代前期の遺物

(1) 土器・土製品

出土状況

縄文時代後期から弥生時代前期にかけての土器・土製品は、主に各調査区のⅡ層・Ⅲa層・Ⅲb層から出土した。出土総数は50,000点を越え、内6,800点あまりについては出土位置の記録を行っている。

土器の出土位置の記録に際しては、全点記録が本来望ましいところではあるが、出土量が膨大で、なおかつ時間的制約もあったため、一定の取り上げ基準を定め、選択的に出土位置の記録を行った。取り上げ基準としては、層位に関しては近世以降の耕作地造成に伴う攪乱土であるⅡ層以上は対象から除外し、基本的にⅢa層とⅢb層に限った。器種分類等に有効と考えられる口縁部や特徴的な属性を備えているもの、一定以上の大きさを持つ土器片を記録することとし、それ以外に出土状況から周辺の出土資料と接合の可能性が高いものなどについては細片であっても出土位置の記録を行った。

調査区別、層位別に見た出土点数は右表ようになる。出土地点の記録を行ったのは基本的に各調査区を通じてⅢa層とⅢb層にほぼ限られるが、B区においてⅡ層とⅣ層の出土地点記録が一定量ある。Ⅱ層記録分についてはB区から最初に調査に取り掛かったため、取り上げ層位の基準が定まっていなかったこと、層位自体の認定に一部誤りがあったためである。本来無遺物層であるはずのⅣ層からの記録分については、一部に自然営力による垂直方向での遺物の移動が考えられるが、主に出土層位の認定に誤りがあったためである。基本的にはⅢb層出土遺物と同等の扱いでよいものとする。それに加え、B区の特に北側の部分については突帯文土器の出土が著しいが、調査開始当初は範囲確認調査結果等を踏まえ、Ⅲa層が本遺跡の主要な遺物包含層であるという認識が調査員の中にあっただけで、本来Ⅲb層であるはずの遺物がⅢa層出土として扱われた部分がある。

また、A区についても一部層位の取り違えによって本来Ⅲb層出土遺物として出土地点の記録を行うはずであったものがグリッド一括での取り上げとなってしまったグリッドがあった。

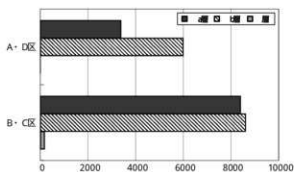
第46図・第48図のように一括取り上げをした資料においても、出土位置の記録を行った資料においても数量的にはⅢb層出土数がⅢa層出土数を上回る。

Ⅲa層、Ⅲb層、Ⅳ層において層ごとの土器の出土割合を見てみると、一括取り上げ分と出土位置記録分とはその比率に若干の違いがある。D区の出土位置記録分については数量的に少ないのでここでは除外して考えるが、出土位置記録分でのⅢb層・Ⅳ層の出土比率はA区が70.2%、B区が67.4%、C区が65.0%で、一括取り上げ分におけるA・D区が63.9%、B・C区が51.1%という比率に対してやや高い値を示している。このことはⅢb層がⅢa層に対して取り上げ基準を満たす資料が多かったことを意味している。出土資料の多くは本来的にはⅢb層に所属することを示唆するものとする。

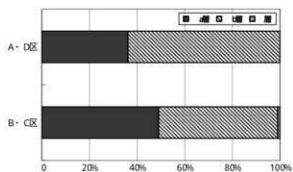
また、土器の出土数を層ごとに見てみると一括取り上げ分ではⅢb層、Ⅳ層あわせたとこでの比率はA・D区が63.9%を占めるのに対し、B・C区では51.1%とやや下がる。同様に出土位置記録分についてもA区が70.2%であるのに対し、B区では67.4%、C区で65.0%とやはり下がる。このことは突帯文期の土器群の出土がB・C区において多量にあるのに対し、A・D区では皆無に近いことが一因として影響しているものとする。

第16表 土器出土点数

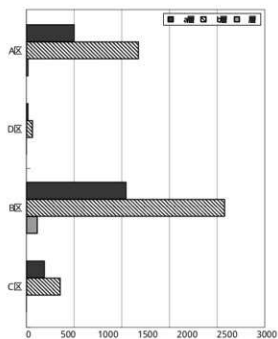
層位	A・D区			B・C区			計	
	一括取り上げ (A・D区合計)	出土位置記録		一括取り上げ (B・C区合計)	出土位置記録		一括取り上げ	出土位置記録
		A区	D区		B区	C区		
Ⅱ層	5,480	0	1	9,245	107	0	14,725	108
Ⅲa層	3,383	611	18	8,400	1,267	232	11,783	2,128
Ⅲb層	5,990	1,419	89	8,614	2,485	431	14,604	4,424
Ⅳ層	0	21	0	179	138	0	179	159
その他(複製・ピット内等)	1,806	0	0	763	0	0	2,569	0
計	16,659	2,051	108	27,201	3,997	663	43,860	6,819
		18,818			31,861			50,679



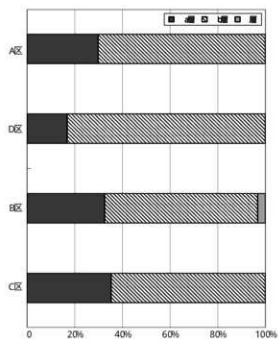
第46図 土器出土点数 (一括取り上げ分)



第47図 土器出土層位の比率 (一括取り上げ分)



第48図 土器出土点数 (出土位置記録分)



第49図 土器出土層位の比率 (出土位置記録分)

土器・土製品の分類

土器については深鉢、浅鉢、壺、土製品に大別し、さらに深鉢については5類に、浅鉢については15類に類分けした。また、深鉢の底部については上部の器形までは断定できないことから、別に4類に分類した。浅鉢の底部については器種の断定できるものは各類に含め、他は一括した。

深鉢

- 深鉢 A 類 砲弾形を呈するもの。
- 深鉢 B 類 胴部で一旦屈曲するもの。屈曲は曖昧であるが粘土紐を胴部に貼り付けて肥厚させるものも含める。
- 深鉢 C 類 胴部で一旦屈曲し頸部となり、口縁部文様帯を持つもの。一次調整に貝殻条痕、二次調整に研磨を施すことが多く、また、全体的に色調が赤味を帯びるものが多いため、他の深鉢類と区別がしやすい。
- 深鉢 D 類 肩部を持ち、口縁部は大きく開くもの。口縁部に平行沈線や弧状沈線を持つもの、肩部外面の直上に段を持つもの、肩部や肩部の直上に粘土紐や粘土塊の貼り付けを持つものがある。また、肩部の作り出しが不明瞭で断面がゆるい「S」字状をなすものがある。胎土に数mm大の小礫を多量に含むものが一定量存在する。また、外面は貝殻条痕等の一次調整を残し、内面は丁寧にナデ調整を施すものが多い。
- 深鉢 E 類 刻目突帯を持つもの。一部に突帯を貼り付けず、胴部や口縁部に直接刻目を施すものもある。ほとんどが胴部と口縁部にそれぞれ刻目突帯を持つものと思われるが、口縁部のみ、胴部のみ刻目突帯を持つものもある。
- 深鉢底部 A 類 断面が直線的に開いて立ち上がるもの。
- 深鉢底部 B 類 断面がいったんごくわずかに直立するか、小さな張り出しを持って立ち上がり、胴部へと開くもの。
- 深鉢底部 C 類 断面がしっかりと張り出しを持つもの。
- 深鉢底部 D 類 断面が張り出しは持たないが、比較的底面が厚いもの。形態的に深鉢底部 A 類と似るものがあるが、作りが粗い。
- 深鉢底部 E 類 断面が分厚いもの。胴部との境に刻目突帯を付すものがある。
- その他の底部 器形的には深鉢なのか不確定であるが、深鉢底部とあわせて報告する。支脚を持つもの、底面に組織痕のあるものがある。

浅鉢

- 浅鉢 A 類 長くのびる頸部を持ち、口縁部は直立して文様帯を作る。口縁部文様帯には沈線を引くものと引かないものがある。頸部は外反のピークが上位にあるものと、下位にあるものがある。
- 浅鉢 B 類 長くのびる頸部を持ち、口縁部は玉縁状に肥厚させる。口縁部外面には沈線を引くものと引かないものがある。

- 浅鉢 C 類 短い頸部を持ち、口縁部内面に段を作る。
- 浅鉢 D 類 短い頸部に幅の広い口縁部文様帯を持つ。口縁部文様帯には沈線を引くものと引かないものがある。
- 浅鉢 E 類 胸部で屈曲し、外反する口縁部が付く。
- 浅鉢 F 類 扁球状の胸部・肩部を持ち、短い頸部に玉縁状の口縁部を付ける。口縁部の外面には沈線を引くものと引かないものがある。まれに、肩部に頸部なしで直接口縁部を付けるもの、玉縁の口縁部を付けないものがある。
- 浅鉢 G 類 肩部と長めの頸部を持つもの。
- 浅鉢 H 類 丸底気味の平底、平底の底部から大きく開く胸部は外面で一旦段を作って口縁部に至り、口縁部は波状をなす。
- 浅鉢 I 類 胸部と頸部に段を作るかもしくは突帯を付し、口縁部は波状をなすもの。
- 浅鉢 J 類 逆「く」字形に胸部が屈曲するもの。口縁部は内傾するものがほとんどで、口唇部は外反するものがある。口縁部外端には沈線を施したり段を作ったりするものがある。
- 浅鉢 K 類 皿形もしくは壙形を呈するもの。
- 浅鉢 L 類 ポール形あるいはザル形を呈するもの。内面は丁寧なナデ調整や研磨調整を施すが、外面は貝殻条痕調整や擦過調整を残すものが多い。口縁部に刻目突帯を施すものも見られる。外面には厚く炭化物が付着するものも多く見られる。
- 浅鉢 M 類 組織痕土器。内面は丁寧なナデ調整や研磨調整を施すものが多いが、外面の口縁部付近は貝殻条痕調整や擦過調整をそのまま残す。アンギン、網目、平織り、籠目がある。外面には厚く炭化物が付着するものが多い。
- 浅鉢 N 類 胸部は外面で一旦段を作り、口縁部は直線的に開いてのびて波状をなす。
- 浅鉢 O 類 逆「く」字形に胸部が屈曲するもの。屈曲部の直上には沈線を引く。
- 浅鉢底部類 浅鉢底部を一括する。また、浅鉢 J 類の中には脚部を持って高坏となるものもあると考えられるので、高坏の資料もここに含める。
- 壺 多くが外面に丹塗りを施す。口縁部には内面にも丹塗りを施すものも多く認められる。口縁部先端は先細りとなって外反するものが多いが、口縁部外面を肥厚させ段を作るものもある。

土製品

- 円盤型土製品 多くが深鉢胴部片を再加工している。円形に整えた後に割れ口を研磨整形するものがある。
- 紡錘車 B 区での出土がある。文様を施すものと施さないものがある。
- 土製装身具 A 区での出土があり、勾玉形を呈する。背面に穿孔を施している。
- ミニチュア土器 B 区で 2 点の出土がある。1 点は 2 条の刻目突帯を持ち、深鉢 E 類を模す。
- 不明土製品 A 区において出土がある。楕円形を呈する。浅鉢胴部片を再加工する。

A・D区出土の土器・土製品

深鉢A類（第50図～第52図）

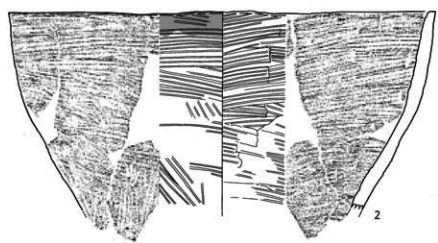
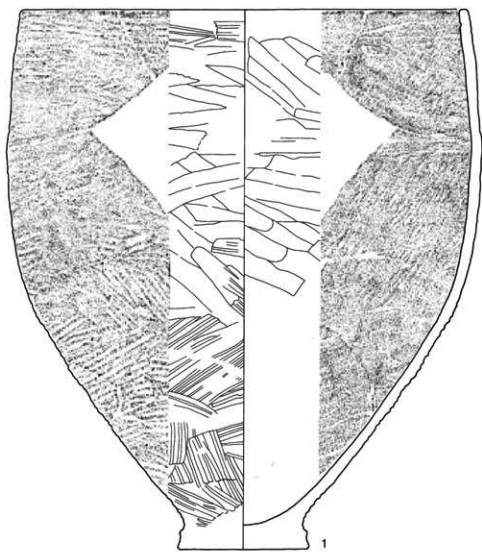
1は復元口径35.3cm，復元底径10.0cm，器高42.5cmを測る。底部断面はやや張り出しを持ち，胴部は開いて立ち上がるが，口縁部はやや内傾する。調整は，外面が貝殻条痕調整を施した後，上半部は擦過調整を施すが，胴下半部と口縁部付近については貝殻条痕をそのままに残す。内面はナデ調整であるが，上半部は擦過調整の痕跡が残る。外面口縁部付近には炭化物が付着する。2は開いて立ち上がる胴上部から口縁部にかけての資料である。復元口径は33.8cmを測る。内外面ともに貝殻条痕調整を施す。外面には炭化物の付着が認められる。3は復元口径35.2cmを測る。口縁部はわずかに内傾する。内外面の調整はともに擦過で，外面の下端にはわずかに貝殻条痕が残る。

4はやや外に開く口縁部で，調整は外面が貝殻条痕，内面が貝殻条痕の後ナデである。5は口縁部断面が尖り気味になる。外面は擦過調整，内面はナデ調整である。6はわずかに外傾する口縁部で，口唇部上端を平坦に整える。器壁は薄い。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ，内面がナデである。7は口唇部に刻目を持つ資料である。刻目の原体については不明である。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ，内面が貝殻条痕である。8は外傾する口縁部で，外面には貝殻条痕調整を残し，内面の調整は擦過の後ナデである。9はやや薄手の外傾する口縁部である。調整は内外面ともに擦過である。外面にはわずかに炭化物が付着する。10は口縁部からわずかに下がった位置を横ナデし，口縁部を肥厚させたように見える。内外面ともにナデ調整である。

11は直立する口縁部で，内外面ともにナデ調整であるが，外面については指で器面の粘土を掻き取るようにして整形しているため，凹凸がある。外面には炭化物が付着するが，ふきこぼれ状に付着しない部分が認められる。12は直立する口縁部であるが，わずかに外側に反る。内外面ともに擦過調整である。13はわずかに内湾する口縁部で，内外面ともに調整は貝殻条痕の後ナデである。14は外傾する口縁部で，調整は外面が貝殻条痕の後ナデ，内面がナデである。15は口縁部外面の直下を横ナデし肥厚させる。内外面ともに調整は擦過の後ナデで，外面には厚く炭化物が付着する。16はわずかに外傾する口縁部で，調整は外面が擦過，内面が貝殻条痕である。17は薄手の資料で，わずかに外傾する。内外面ともに擦過調整で，外面にはわずかに炭化物が付着する。18は直立する口縁部で，調整は内外面ともに貝殻条痕の後ナデである。19は外傾する口縁部で，調整は外面が貝殻条痕，内面が，貝殻条痕の後ナデである。外面の貝殻条痕は縦方向で，横方向主体の調整の中では異質である。

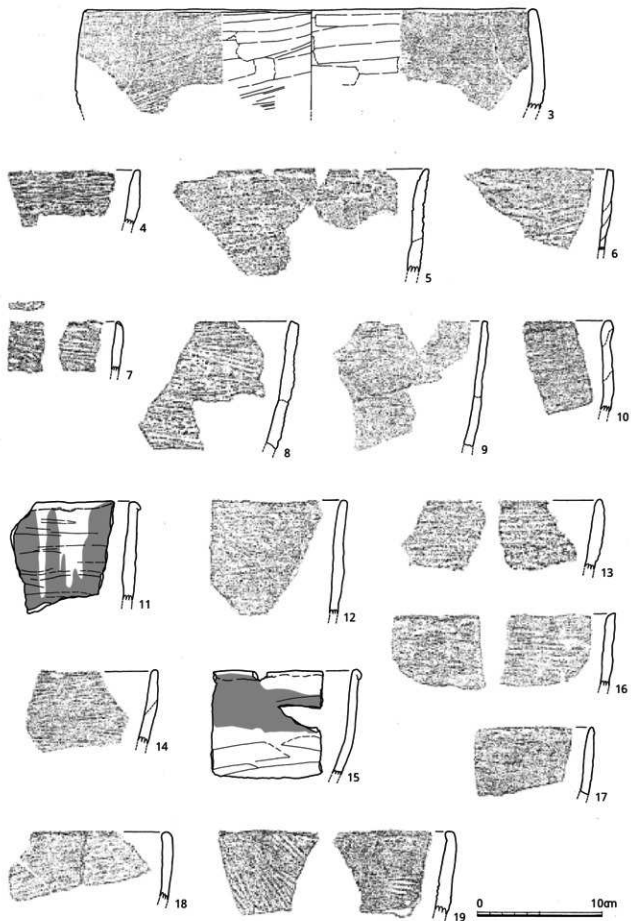
20は外傾する口縁部で，口唇部上端は平坦に整える。調整は外面が擦過，内面が貝殻条痕の後研磨である。21はわずかに外傾する口縁部で，調整は外面が擦過の後ナデ，内面が貝殻条痕の後ナデである。22も外傾する口縁部で，内外面ともに貝殻条痕調整である。23は外傾する口縁部で，調整は外面が刷毛目の後ナデ，内面が刷毛目である。外面には下部に炭化物が付着する。24はやや薄手の口縁部で，調整は外面が貝殻条痕，内面が貝殻条痕の後軽くなる。25は口縁部断面が先細りとなる。内外面ともにナデ調整である。

26はやや内傾する口縁部である。口唇部上端は平坦に整える。調整は外面が擦過，内面がナデで，外面には焼成時の黒斑が付く。27は薄手の外傾する口縁部で，調整は外面が擦過の後ナデ，内面がナデである。28は直立する口縁部で，内外面ともに調整は貝殻条痕の後ナデである。器壁が厚い割に口径は小さくなりそうである。29はわずかに外傾する口縁部で，調整は外面が貝殻条痕，内面はナデで



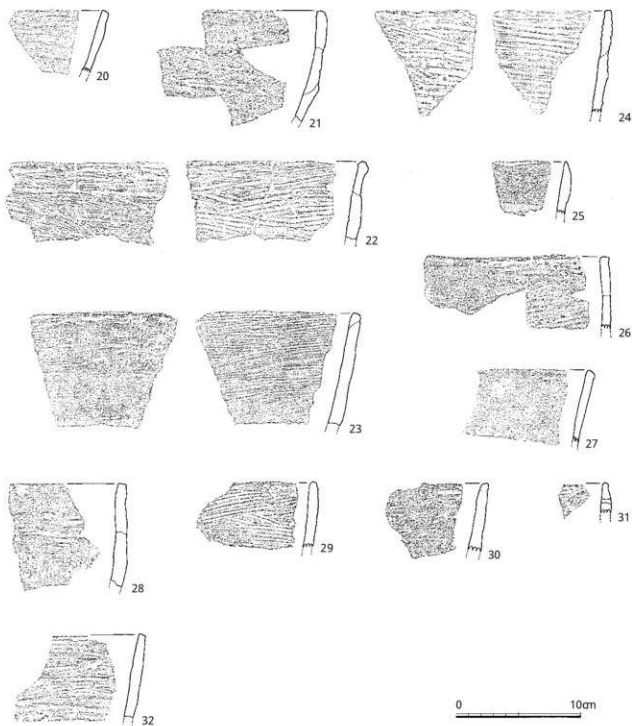
0 10cm

第50図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器① (S = 1 / 3)



第51図 縄文時代後期一弥生時代前期の土器② (S = 1/3)

ある。30は外傾する口縁部で、内外面ともに擦過調整である。外面には炭化物が付着する。31は小片であるが、口縁部断面は先細りとなる。調整は内外面ともにナデで、外面から焼成前に穿孔を施す。32はやや薄手の資料で、外傾する。調整は外面が貝殻条痕、内面が貝殻条痕の後ナデである。



第52図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器③ (S = 1/3)

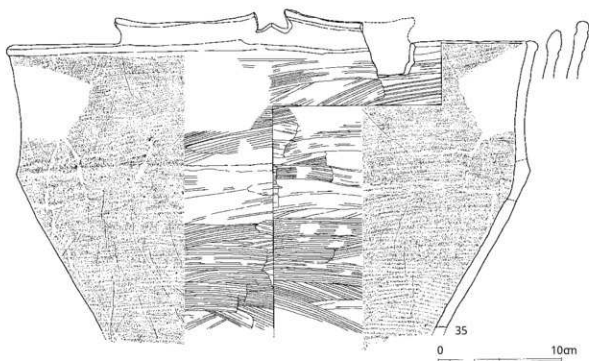
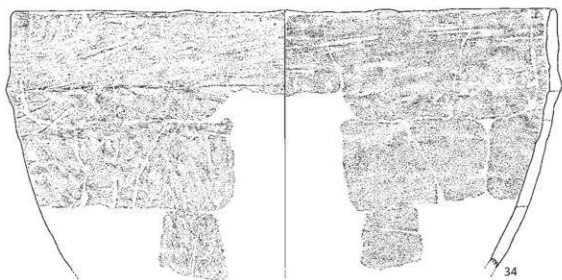
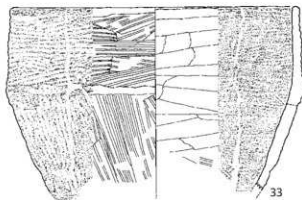
深鉢 B 類 (第53図～第56図)

33は胴部上位で屈曲し、口縁部はわずかに内傾する。復元口径は22.4cm、胴部最大径は23.6cmを測る。外面の調整は貝殻条痕であるが、屈曲部より下位は縦方向、上位は横方向に施す。内面の調整は擦過である。34は胴部上位で屈曲し、口縁部は直立する。復元口径は42.9cm、胴屈曲部での復元径は44.2cmを測る。調整は内外面ともに貝殻条痕の後ナデである。35は胴上部で屈曲し、口縁部はゆるく外反する。復元口径41.0cm、胴屈曲部での復元径40.8cmを測る。口唇部は内外に段を作り、突起を貼り付ける。調整は内外面ともに貝殻条痕である。36・37は同一個体である。復元口径36.0cm、屈曲部での復元径35.1cmを測る。胴部の比較的下位に屈曲部を持ち、径の割に器壁は薄い。内外面ともにナデ調整である。38は胴部上位で屈曲し、口縁部は直立する。復元口径47.1cm、胴屈曲部での復元径46.4cmを測る。口縁部にはヒレ状突起が付いていたと思われるが、欠損する。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面がナデである。

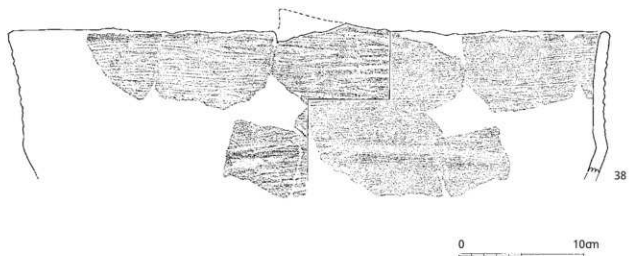
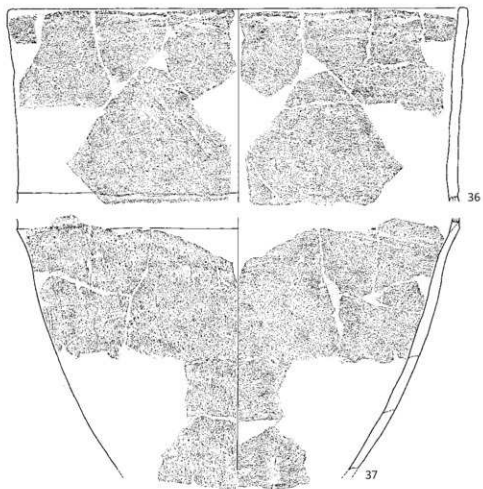
39は復元口径26.7cm、屈曲部での復元径27.6cmを測る。屈曲部は意識的に肥厚させているが、しっかりとしたものではない。調整は外面が貝殻条痕の後上半部のみ擦過、内面は貝殻条痕の後口縁部付近のみナデである。40は復元口径28.2cm、屈曲部での復元径29.2cmを測る。比較的高い位置に屈曲部を持つが、不明瞭である。口縁部はやや外反する。調整は外面が擦過の後ナデ、内面がナデである。

41・42は同一個体である。胴部の比較的低い位置に屈曲部がくるものと思われる。屈曲は弱いが、意識して肥厚させている。調整は外面が貝殻条痕の後擦過、内面がナデである。

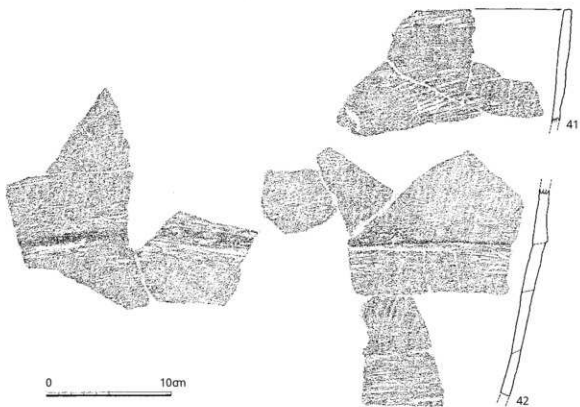
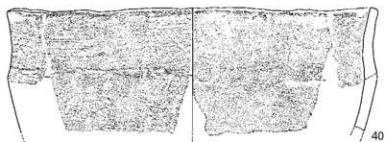
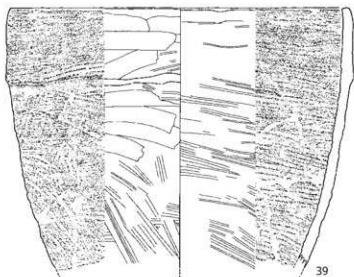
43は内傾する口縁部である。調整は外面が擦過の後ナデ、内面がナデである。44は外傾する口縁部で、調整は外面が貝殻条痕、内面が貝殻条痕の後ナデである。45は外反する口縁部で、器壁はやや薄手である。内外面ともに調整はナデである。46・47は同一個体である。屈曲部から口縁部は外傾する。基本的には平縁で、部分的に47のように突起を持つものと思われる。調整は外面が刷毛目の後ナデ、内面はナデである。48は粘土紐の最終積み上げ時にあまり整形してないため口縁部が肥厚する。内外面ともに調整はナデである。49は屈曲はほとんどしないが、粘土を補充して屈曲部を作り出す。調整は外面が擦過、内面が下半は貝殻条痕の後ナデ、上半は擦過の後ナデである。50は外反する口縁部で、内外面ともにナデ調整である。51は薄手で小振りの資料である。口縁部はやや外反し、調整は外面が屈曲部より下位が貝殻条痕、上位が擦過、内面が擦過である。52は小振りの資料で、口縁部は内傾する。内外面ともに調整は擦過である。53は口縁部が内傾する。比較的薄手の作りで、調整は外面が屈曲部より下位はナデ、上位は斜方向の貝殻条痕、内面は貝殻条痕の後ナデである。54は外反する口縁部である。内外面ともに擦過調整である。55は内傾する口縁部の資料である。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面がナデである。口唇部は最終積み上げの粘土紐の形状を明瞭に残す。



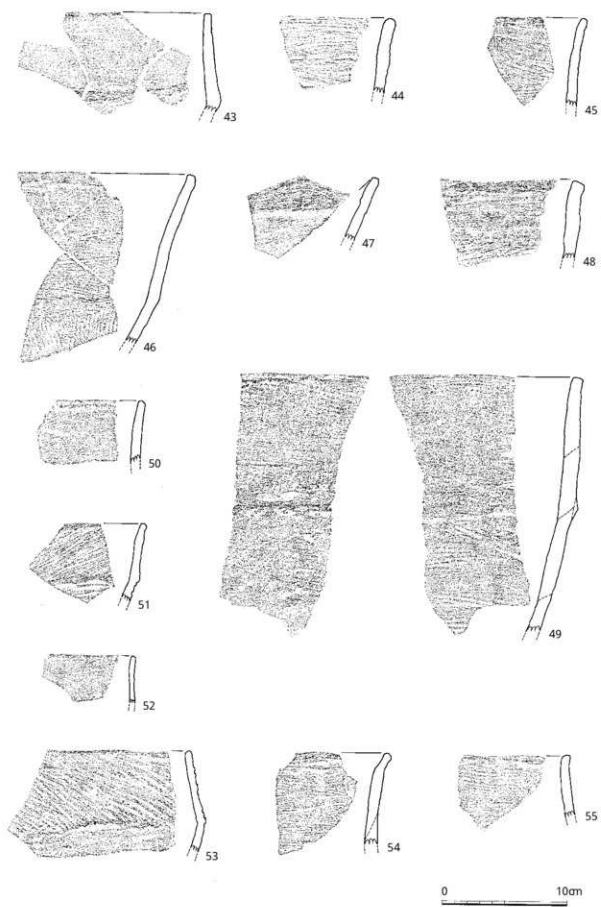
第53図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器④ (S = 1 / 3)



第54図 縄文時代後期一弥生時代前期の土器⑤ (S = 1 / 3)



第55図 縄文時代後期一弥生時代前期の土器⑥ (S = 1 / 3)



第56図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑦ (S = 1 / 3)

深鉢C類（第57図～第60図）

56～60は口縁部文様帯に2本の沈線を施す。

56・57は内外面ともに研磨調整を施す。58はやや作りが雑であるが、内外面ともに研磨調整を施す。内面には段を作る。59は内面に段を持つ。頸部に口縁部文様帯を貼り付ける際、工具で横ナデする時にできた段をそのまま残したものである。調整は内外面ともに丁寧な研磨調整を施す。60は口唇部上端を平坦に整形する。内外面ともにナデ調整で、内面には段を持つ。

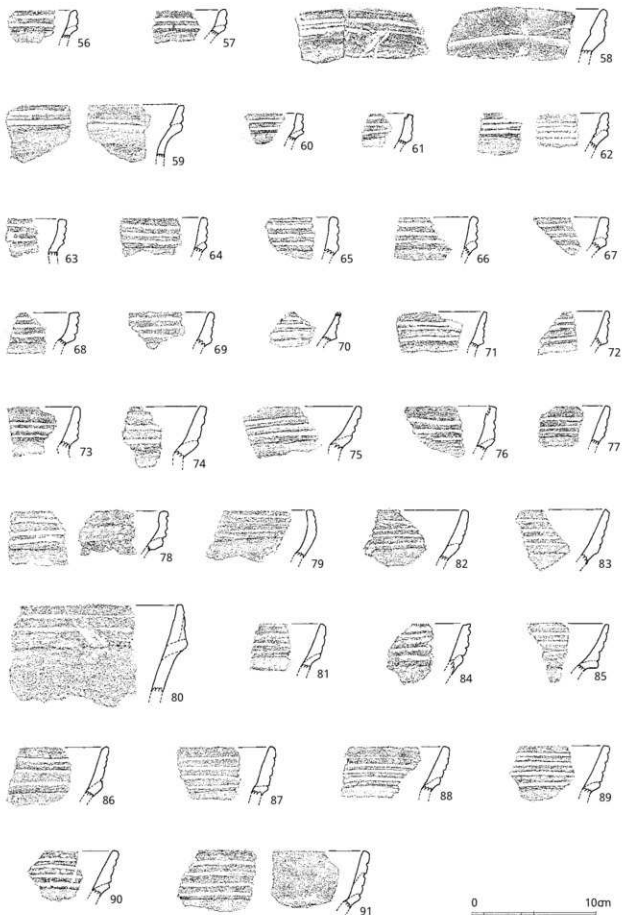
61～82は口縁部文様帯に3本の沈線を施すものである。

61は口唇部上端を平坦に整える。内外面ともに研磨調整である。62は外面調整が研磨、内面調整が貝殻条痕の後研磨である。63はやや焼成が良くないが、内外面ともに研磨調整である。64は内外面ともにナデ調整である。65・66は内外面ともに研磨調整を施す。67はやや厚手の資料で、内外面の調整は研磨である。68は口唇部上端を平坦に整える。内外面ともに研磨調整である。69は外面がナデ調整、内面が研磨調整である。70は断面が先細りになる口縁部文様帯で、下端の張り出しが強い。内外面ともに研磨調整である。71・72・73も70同様断面が先細りになり、内外面ともに研磨調整を施す。71・72は口縁部文様帯下端の張り出しが強い。74は口唇部上端を平坦に整える。内外面の調整は研磨である。75・76・77は内外面ともに研磨調整で、76は口唇部上端を平坦に整える。78は内湾気味の口縁部文様帯を持ち、内面には段を持つ。内外面ともにナデ調整で、研磨は施さない。79の口縁部文様帯は内湾し、下端の張り出しはない。内外面ともにナデ調整で、外面の沈線は引いた後になるため不明瞭である。外面には炭化物の付着が認められる。80は頸部から口縁部へ直線的にやや開いて立ち上がる。外面の調整は頸部が擦過、口縁部文様帯がナデ、内面の調整はナデである。焼成は良くない。81は外面の調整はナデ、内面の調整は研磨である。

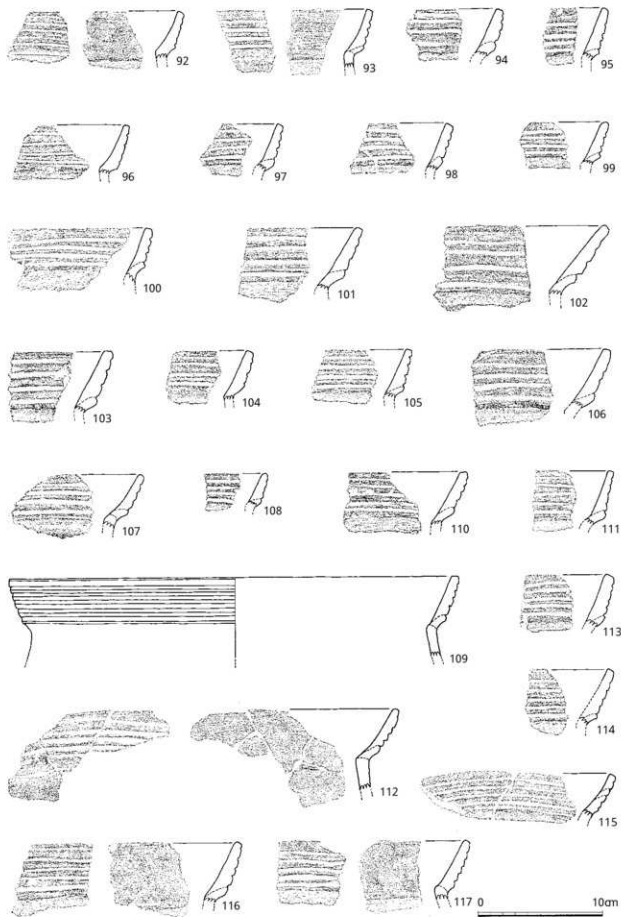
82～108は口縁部文様帯に4本の沈線を施すものである。いずれの資料も口縁部文様帯は外傾する。

82は口縁部文様帯の下端の張り出しがほとんどない。内外面の調整は研磨である。83は内外面ともに研磨調整を施す。84は口唇部上端を平坦に整える資料で、内外面の調整は研磨である。85は口縁部文様帯の断面が先細りの形状を呈し、下端の張り出しが強い。内外面ともに研磨調整を施す。86も断面先細りの口縁部文様帯を持つ。内外面の調整は研磨である。87は外面が研磨調整、内面はナデ調整の後口唇部付近のみ研磨する。88～91は内外面ともに研磨調整を施す。

92は口唇部上端を平坦に整える。内面には頸部と口縁部文様帯の境に稜を作る。内外面ともに研磨調整を施す。93も内面に稜を作る。外面は黒褐色を呈し、意図的なものであろう。調整は外面が研磨調整、内面が貝殻条痕調整の後研磨調整である。94は外面がナデ調整、内面が研磨調整である。95は内外面ともにナデ調整である。96は口唇部上端を平坦に整形し、内面には頸部口縁部の境に稜を作る。内外面ともに研磨調整である。97は内外面ともに研磨調整を施す。98は口唇部上端を平坦に整える。内外面の調整は研磨である。99の内外面の調整は研磨調整である。100の外面の色調は黒褐色を呈する。外面調整は研磨、内面調整は貝殻条痕の後研磨である。外面には炭化物が付着する。101は口縁部文様帯の幅が広く、沈線も間隔が広い。内外面ともに研磨調整で、外面の沈線は下側の稜を研磨調整の際につぶす。102も口縁部文様帯の幅が広い。内面には稜を作る。内外面ともにナデ調整である。103は内外面ともに研磨調整を施す。104はやや焼成が悪いが、口唇部上端は平坦に整え、内外面ともに研磨調整を施す。105は内外面の調整は研磨である。106は外面の色調は褐色を呈する。内外面とも



第57図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑧ (S = 1 / 3)



第58図 縄文時代後期-弥生時代前期の土器⑨ (S = 1/3)

に研磨調整である。107も内外面ともに研磨調整である。108は口縁部文様帯の幅がやや狭い。内外面ともに研磨調整である。

109～117は口縁部文様帯に5本の沈線を施すものである。いずれの資料も口縁部文様帯は外傾する。

109は復元口径が35.6cmを測る。口唇部上端は平坦に整え、内面の頸部と口縁部文様帯の境には稜を作る。調整は、外面の頸部は貝殻条痕の後研磨、口縁部文様帯は研磨、内面の稜より下位はナデ、上位は研磨である。110は内面の頸部と口縁部文様帯との境に稜を作る。内外面ともに研磨調整で、外面には炭化物が付着する。111は断面が先細りになる。口唇部上端は平坦に整える。内外面ともに研磨調整である。112は強く外傾する口縁部文様帯を持ち、内面には稜を作る。口唇部上端は平坦に整え、調整は内外面ともに研磨である。113は外面が灰褐色を呈する。内外面ともに研磨調整を施す。114は断面が先細りになる。口唇部上端は平坦に整え、内外面ともに研磨調整である。115の内外面の調整はともに研磨で、色調は灰褐色を呈する。116・117も内面に稜を持ち、内外面ともに研磨調整を施す。

118・119は口縁部文様帯に6本の沈線を施すものである。

118は口縁部文様帯が外傾し、内面は頸部との境に稜を作る。内外面ともに研磨調整である。119も外傾する口縁部文様帯の資料で、調整は外面が研磨、内面が貝殻条痕の後ナデである。

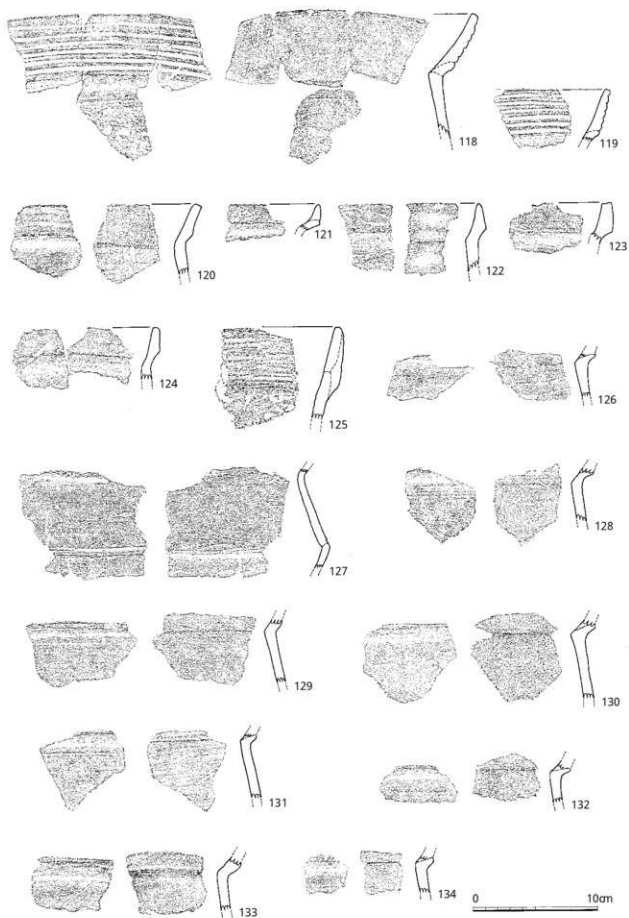
120～125は口縁部文様帯に沈線を施さないものである。

120は口縁部が外傾し、内面は頸部から口縁部へ稜を作らず移行する。外面調整は頸部が研磨、口縁部がナデ、内面調整はナデである。121は外反する頸部に直立する口縁部が付く。内外面ともに調整はナデである。122は断面が先細りになる口縁部を持つ。内面には口縁部と頸部の境に稜を作る。内外面ともに調整はナデである。123は短めの口縁部文様帯で、口唇部上端は平坦に整える。内外面ともに調整はナデである。124は外反する頸部に直立する口縁部が付く。外面調整は頸部が研磨、口縁部がナデ、内面調整はナデである。125は外面の口縁部の張り出しを後から粘土を継ぎ足して作り出している。調整は内外面ともに貝殻条痕の後ナデである。

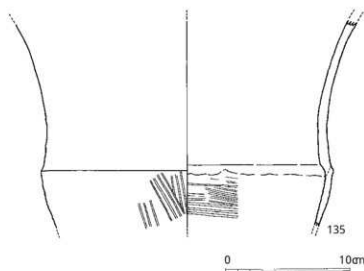
126～134は頸部の資料である。

126・128～134は頸部上端を外へ屈曲させ、内面には稜を作る。126の調整は外面がナデ、内面が貝殻条痕の後ナデである。127は屈曲部の直上に段を設け、上位は口縁部へと外反する。内外面ともに研磨調整である。128の調整は外面が貝殻条痕の後研磨、内面がナデである。129の調整は外面が研磨調整、内面がナデ調整である。130の調整は外面が研磨、内面がナデである。131の調整は内外面ともに貝殻条痕の後研磨である。132の調整は外面が研磨、内面がナデである。133の調整は外面が研磨、内面がナデである。134は内外面ともに研磨調整である。

135は胴部で屈曲し、頸部が外へ開いて立ち上がる。一応深鉢C類に含めたが口縁部文様帯を持たず、そのまま頸部上端が口縁部になる可能性が高い。調整は内外面ともに屈曲部より下位は貝殻条痕で、屈曲部より上位は外面がナデ、内面が貝殻条痕の後ナデである。



第59図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑩ (S = 1 / 3)



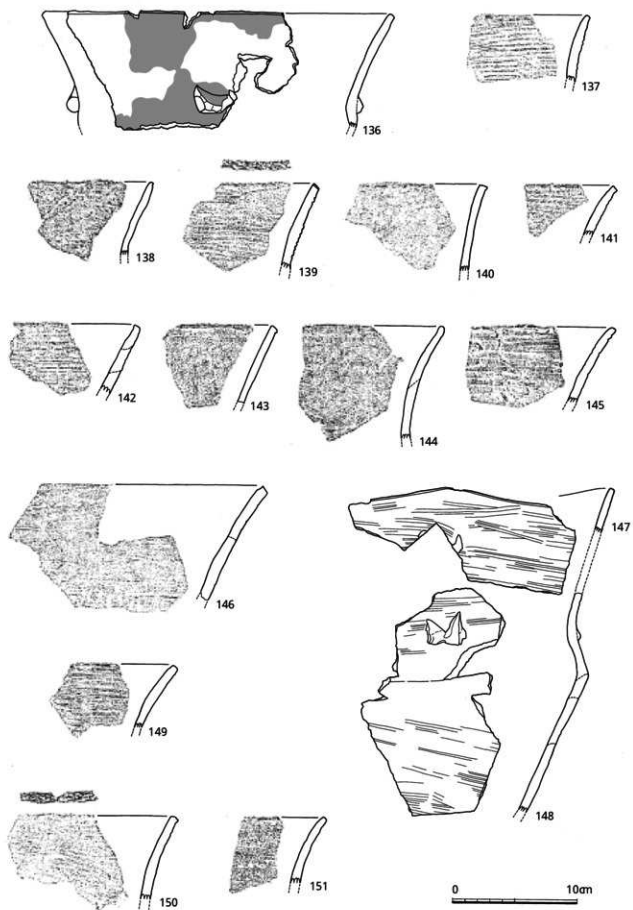
第60図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器① (S = 1 / 3)

深鉢D類 (第61図～第63図)

136は復元口径27.2cmを測る。肩部を持ち、蝶ネクタイ状の貼り付けを施す。口縁部は大きく開き、口唇部上端は平坦に整える。内外面ともにナデ調整で、外面には炭化物が付着する。137は外反する口縁部で、調整は外面が貝殻条痕、内面がナデである。138は非常に薄手の作りで、大きく開く。胎土には小礫を多量に含む。内外面の調整はナデである。139は大きく開く口縁部で、口唇部上端には刻目を施すが、原体については不明である。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面がナデである。140も外へ開く口縁部で、薄手である。口唇部上端は平坦に整え、粘土のはみ出しが口唇部外端に出る。内外面ともに調整はナデである。141は外へ開く口縁部の資料で、口唇部上端は平坦に整え、粘土のはみ出しが外端に出る。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面がナデである。142は外傾する口縁部で、口唇部上端を平坦に整える。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面がナデである。143は外傾する口縁部で、口唇部上端を平坦に整える。調整は外面が擦過、内面がナデで、外面には炭化物の付着が認められる。144は外反する口縁部である。内外面ともにナデ調整を施す。145は外反する口縁部で、内外面ともにナデ調整を施す。146はわずかに外反する口縁部で、厚手の作りで比較的大振りの深鉢のようである。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面がナデである。147・148は同一個体である。胴部から一旦肩部を作り、外傾して波状をなす口縁部へと至る。肩部には蝶ネクタイ状の貼り付けを施す。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面がナデである。149は外反する口縁部で、口唇部上端を平坦に整える。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面がナデである。150は外反する口縁部で、口唇部上端には刻目を施す。刻目の原体については不明である。調整は外面が貝殻条痕、内面はナデである。151は外反する口縁部である。外面調整は貝殻条痕の後ナデ、内面調整はナデである。

152～193は平行沈線や弧状沈線を施すものである。

152は外傾する口縁部で、内外面ともにナデ調整である。外面には太くて浅い平行沈線を引く。153は外傾する口縁部で、胎土には多量の小礫を含む。焼成後に外面から穿孔を施している。調整は内外面ともにナデである。外面には太めの沈線を施す。154は外傾する口縁部で、内外面ともにナデ調整



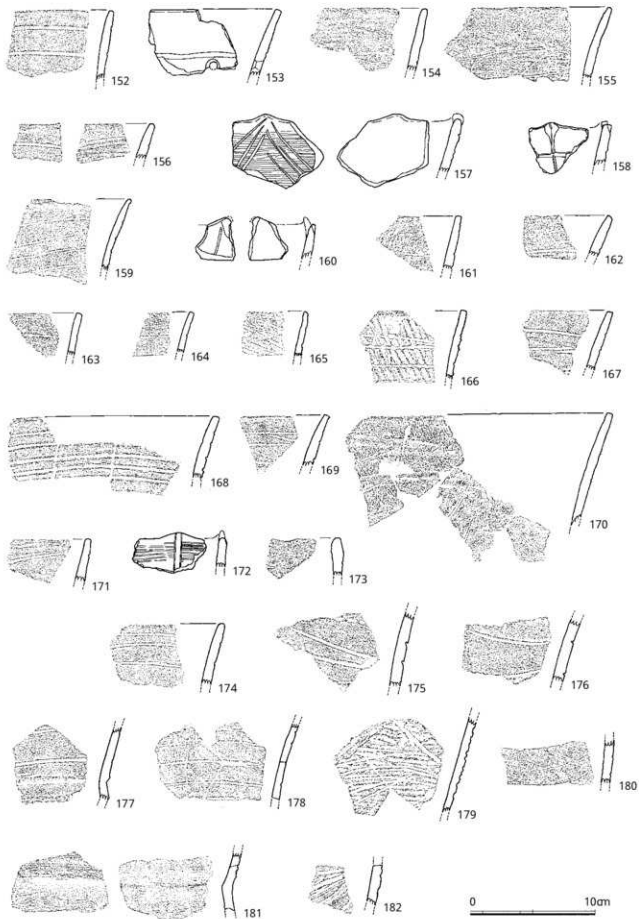
第61図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器② (S = 1/3)

である。細い沈線を弧状に施す。155はわずかに外反して開く口縁部で、口唇部上端は平坦に整え、平行沈線を施す。内外面ともにナデ調整である。156は外傾する口縁部で、沈線を引く。調整は外面がナデ、内面が貝殻条痕の後ナデである。157は外傾する口縁部で、突起を持つ。調整は外面が貝殻条痕で、内面は擦過の後ナデである。弧状沈線を施す。158は外傾する口縁部で、内外面の調整はナデである。指押さえによって口唇部外端に凹点を施し突起状にし、そのまま爪先で沈線を縦に引く。その後横方向の沈線を引く。159は外傾する口縁部である。調整は内外面ともにナデで、ゆるい斜方向の平行沈線を施す。160は外傾する口縁部で、指押さえによる凹点を施し、突起を作り出す。内外面ともに調整はナデで、凹点から縦に沈線を下ろす。161は外傾する口縁部で、口唇部上端を平坦に整える。調整は内外面ともにナデで、外面には沈線を引く。162は外傾する口縁部で、調整は内外面ともにナデ、外面には沈線を引く。163・164は外傾する口縁部で、調整はどちらも内外面ともにナデである。外面には沈線を施す。165は外傾する口縁部で、胎土に小礫を多量に含む。内外面ともにナデ調整で、外面には弧状沈線を施す。166は外傾する口縁部で、胎土に多量の小礫を含む。調整は外面が貝殻条痕、内面がナデで、外面には平行沈線を引く。167は外傾する口縁部で、口唇部上端を平坦に整える。内外面ともにナデ調整で、外面には平行沈線を引く。168はわずかに外反して開く口縁部で、口唇部上端は平坦に整える。内外面ともにナデ調整で、外面には平行沈線を施す。169は外傾する口縁部で、口唇部上端を平坦に整える。内外面ともにナデ調整で、外面には平行沈線を施す。170は外傾する口縁部で、口唇部上端は平坦に整える。内外面ともにナデ調整で、外面には弧状沈線を施す。

171は外傾する口縁部で、口唇部上端を平坦に整える。調整は内外面ともにナデで、外面には沈線を施す。172は外傾する口縁部で、突起を作り出す。調整は外面が貝殻条痕、内面がナデで、外面には突起部分から縦方向に2条の沈線を引く。173は内外面ともにナデ調整で、外面にはごく細い縦方向の沈線と弧状をなす沈線が走る。174は外傾する口縁部で、内外面ともにナデ調整である。外面には平行沈線を施す。

175の調整は外面が擦過の後ナデ、内面がナデで、外面には弧状沈線を施す。176の調整は外面が擦過、内面がナデで、外面には弧状沈線を施す。177の調整は外面がナデ、内面が擦過である。外面は肩部と口縁部の境に段を持ち、平行沈線を施す。178は内外面ともにナデ調整で、外面には平行沈線を施し、それに直行する沈線を1条引く。179の調整は外面が貝殻条痕、内面がナデで、外面には弧状沈線が確認できる。180は内外面ともにナデ調整で、外面には弧状沈線を施す。181は内外面ともに研磨調整で、内面には口縁部と肩部の境に稜を作り、外面には段を作る。外面には平行沈線を施す。182は内外面ともにナデ調整である。外面には弧状沈線を施す。

183は内外面ともにナデ調整で、外面に沈線を引く。184の調整は外面はナデ、内面は貝殻条痕の後ナデである。外面に平行沈線を施す。185の調整は外面がナデ、内面が擦過の後ナデで、外面には平行沈線を施す。186は内外面ともにナデ調整で、内面には稜を作り、外面には平行沈線を施す。外面には炭化物の付着が認められる。187は不明瞭だが、肩部を持つ。内外面ともにナデ調整で、外面には弧状沈線を施す。188は内外面ともにナデ調整で、外面には平行沈線を引く。189は内外面ともにナデ調整で、外面には弧状沈線を施す。190は内外面ともにナデ調整で、外面に平行沈線を施す。191は内外面ともにナデ調整で、内面は黒色を呈する。外面には平行沈線を施す。192は肩部直上の資料で、



第62図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑬ (S = 1/3)

肩部との境には外面に段を作る。内外面ともにナデ調整で、外面には沈線を施す。193の調整は、外面が貝殻条痕の後ナデ、内面がナデで、外面には弧状沈線を施す。

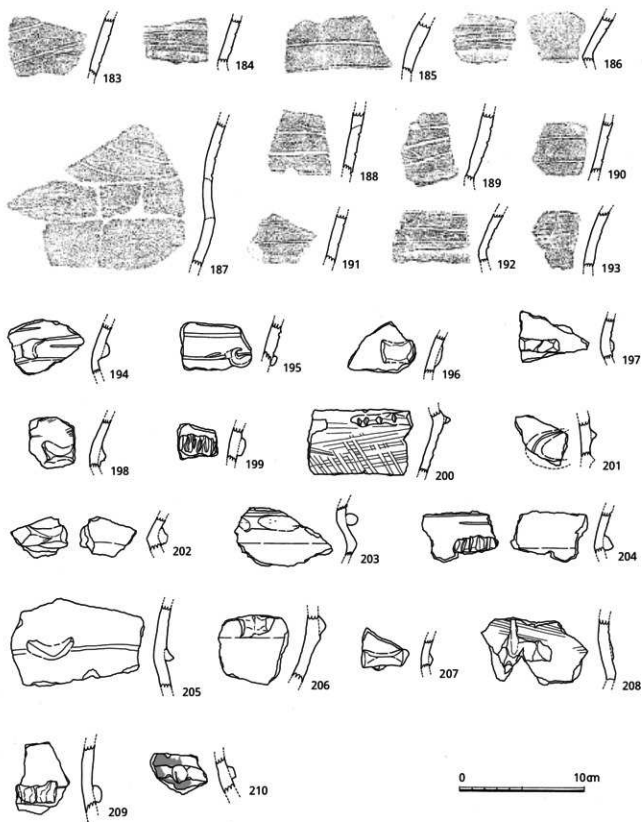
194～210は粘土紐や粘土塊の貼り付けを施すものである。

194は内外面ともにナデ調整で、外面には肩部の直上に段を設け、平行沈線を施し、蝶ネクタイ状の貼り付けを施す。195は内外面ともにナデ調整で、平行沈線を施し、粘土塊を貼り付ける。196の胎土は小礫を多く含む。内外面ともに調整はナデで、外面に蝶ネクタイ状の貼り付けを施す。197の調整は内外面ともにナデで、外面には粘土紐を貼り付ける。198の調整は内外面ともにナデで、外面に蝶ネクタイ状の貼り付けを施す。199は内外面ともにナデ調整で、外面に粘土紐を貼り付け、ヘラ状の工具によって刻目を施す。200の調整は外面が貝殻条痕、内面がナデである。胸部から肩部へと屈曲するところに粘土紐を貼り付け、ヘラ状の工具で刻目を施す。201は内外面ともに調整はナデで、「U」字状の粘土紐の貼り付けを施す。202は内外面ともにナデ調整である。外面に蝶ネクタイ状の貼り付けを施す。203は外面がナデ調整、内面が擦過調整である。肩部上端に粘土紐を貼り付け、左右を指押さえる。204は内外面ともにナデ調整である。外面には沈線が確認でき、また、粘土紐を貼り付け、ヘラ状の工具で刻目を施す。205の調整は外面が擦過の後ナデ、内面がナデである。肩部の直上に段を設け、粘土紐を貼り付ける。206は胎土に小礫を多量に含む。外面の調整は貝殻条痕の後ナデ、内面の調整はナデで、肩部に蝶ネクタイ状突起を貼り付ける。207は内外面ともにナデ調整である。外面に蝶ネクタイ状突起を貼り付ける。208の調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面がナデである。肩部に蝶ネクタイ状突起を貼り付ける。209は内外面ともにナデ調整である。外面には段を持ち、蝶ネクタイ状貼り付けの亜種と考えられる3つの突起を持つ粘土紐の貼り付けを施す。210は内外面ともにナデ調整で、外面に粘土紐を貼り付け、両端と中央を指押さえる。外面には炭化物が付着する。

深鉢E類（第64図）

211～222は指による刻目を施す資料である。

211は内傾する口縁部で、口唇部上端は平坦に整える。口唇部から1.0cm下がった位置に突帯を貼り付ける。内外面ともにナデ調整で、外面には炭化物が付着する。212は口唇部上端を平坦に整える。口唇部から0.6cm下がった位置に突帯を貼り付ける。内外面ともに調整は貝殻条痕の後ナデである。213は胴部と口縁部にそれぞれ突帯を貼り付ける。口縁部突帯は口唇部から0.2cmの位置に貼り付けている。調整は外面が擦過、内面がナデである。214は胴部の資料で、突帯を貼り付ける。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面が擦過である。215は胴部突帯の資料である。内外面ともに貝殻条痕調整を施すが、内面はその後になる。外面には炭化物が付着する。216は胴部突帯の資料で、調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面がナデである。外面には炭化物が付着する。217は胴部の資料で、比較的薄手の作りである。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面が擦過の後ナデである。218は胴部の資料で、内外面ともにナデ調整である。外面には炭化物が付着する。AMS測定資料。219はしっかりとした屈曲を持つ胴部で、調整は外面が貝殻条痕、内面がナデである。220は屈曲の弱い胴部で、内外面ともにナデ調整である。外面には炭化物が付着する。221は薄手の器壁を持つ胴部で、調整は外面が貝殻条痕、内面がナデである。222は胴部の資料で、調整は外面がナデ、内面が擦過の後ナデであ



第63図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑭ (S = 1/3)

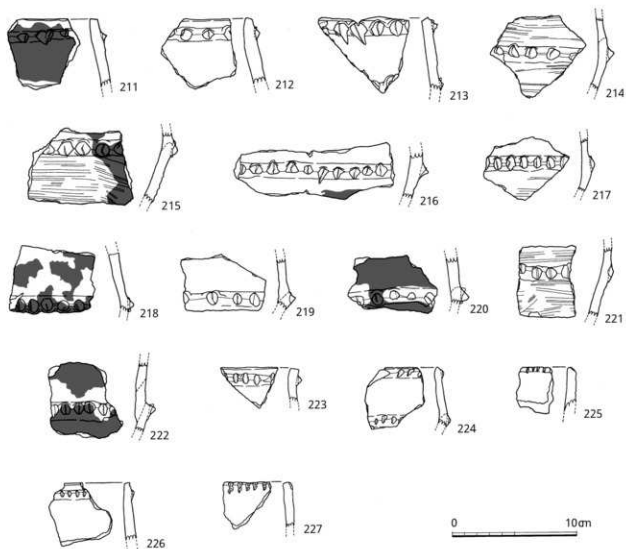
る。外面には炭化物が付着する。

223は棒による刻目を施した資料である。口唇部から0.4cm下がった位置に口縁部突帯を貼り付ける。口唇部上端は平坦に整える。内外面ともにナデ調整である。

224～226はへら状の工具による刻目を施した資料である。

224は胴部と口縁部にそれぞれ突帯を付す。口縁部突帯は口唇部にほぼ接する。内外面ともにナデ調整である。225は直接口唇部外端に刻目を施す。内外面ともにナデ調整である。226は口唇部から0.6cm下がった位置に口縁部突帯を貼り付ける。内外面ともにナデ調整である。

227は貝殻腹縁によって直接口唇部外端に刻目を施す。内外面ともにナデ調整である。



第64図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器15 (S = 1/3)

深鉢底部A類 (第65図228～230)

228は復元底径9.1cmを測る。内外面の調整はナデ、底面の調整は擦過である。229はわずかに上底をなし、復元底径は9.9cmを測る。調整は外面と底面が研磨、内面はナデである。230の調整はいずれもナデである。

深鉢底部B類（第65図231～235）

231は復元底径9.0cmを測る。内外面の調整はナデ、底面の調整は擦過である。232はやや小振りであり、底径7.0cmを測る。調整はいずれもナデである。233は復元底径8.9cmを測る。調整は内外面が研磨、底面はナデである。234はわずかに上底をなし、復元底径は7.8cmを測る。調整はいずれもナデである。235は底径9.4cmを測る。調整はいずれも研磨である。

深鉢底部C類（第65図236～246）

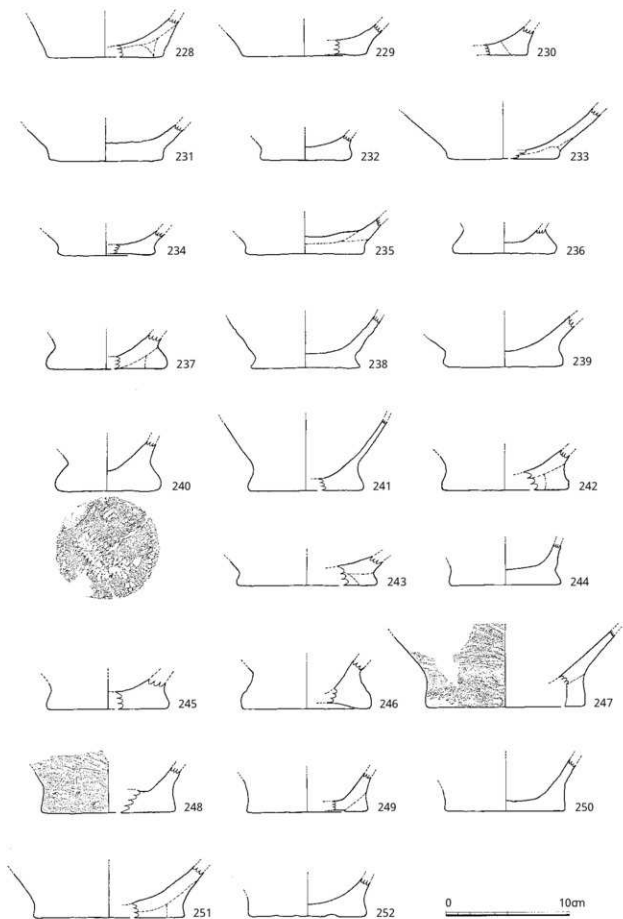
236は復元底径8.0cmを測る。調整はいずれもナデである。237は復元底径9.2cmを測る。調整はいずれもナデである。238は復元底径8.7cmを測る。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面と底面が研磨である。239は底径8.8cmを測る。調整はいずれもナデである。240は底径8.0cmを測る。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面がナデである。底面には組織痕が認められ、籠目である。241は復元底径9.0cmを測る。胴部の器壁は薄手である。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面と底面がナデである。242は復元底径9.9cmを測る。調整はいずれもナデである。243は復元底径11.0cmを測る。調整はいずれもナデである。244は底径8.7cmを測る。外面の調整は擦過、内面と底面の調整はナデである。245は復元底径9.5cmを測る。調整は内外面がナデ、底面が研磨である。246は上底をなし、復元底径は10.2cmを測る。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面と底面はナデである。

深鉢底部D類（第65図247～252・第66図253）

247は復元底径12.5cmを測る。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面と底面がナデである。248は復元底径10.6cmを測る。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面、底面がナデである。249はわずかに上底をなし、復元底径は9.6cmを測る。外面の調整は貝殻条痕の後ナデ、内面と底面の調整はナデである。250は底径9.5cmを測る。調整は内外面がナデ、底面が擦過である。251は復元底径11.9cmを測る。調整は外面が擦過の後ナデ、内面がナデ、底面が擦過である。252は底径9.2cmを測る。調整はいずれもナデである。253は底径9.8cmを測る。調整はいずれもナデである。

深鉢底部E類（第66図254～262）

254は底径9.2cmを測る。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面が擦過、底面はナデである。255はわずかに上底をなし、復元底径は9.6cmを測る。外面は貝殻条痕の後ナデ、内面と底面はナデである。256はしっかりとした上底で、復元底径は10.7cmを測る。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面と底面はナデである。257は底径8.7cmを測る。調整は外面と底面が貝殻条痕、内面がナデである。258は底径7.0cmを測る。内外面の調整はナデである。底面には籠目と思われる組織痕を残す。内面に炭化物が付着する。259は復元底径11.2cmを測る。調整は外面が貝殻条痕、内面が貝殻条痕の後ナデ、底面が擦過である。260はわずかに上底をなし、底径10.1cmを測る。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面がナデ、底面が貝殻条痕である。261は復元底径11.7cmを測る。調整は外面が貝殻条痕、内面と底面がナデである。262はしっかりとした上底をなし、復元底径は7.5cmを測る。胴部との境に突帯を貼り付け、その頂部に沈線を引く。調整はいずれもナデである。

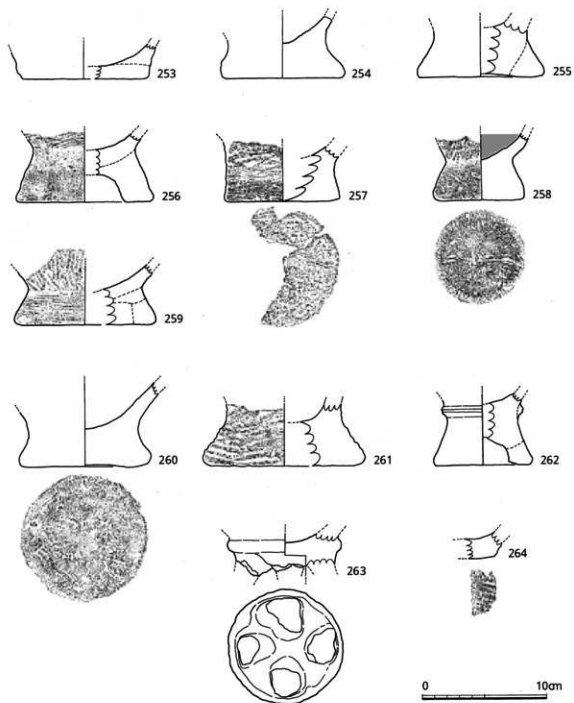


第65図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑩ (S = 1/3)

その他の底部 (第66図263・264)

263は4本の突起状の支脚を持つと思われるが、いずれも欠損している。粗製であるが、器形的にはさほど高さを持たないかもしれない。脚部と胴部との境はやや膨らみを持たせ、径はこの部分で9.1cmを測る。調整は外面がナデで、内面には貝殻条痕が残る。

264の調整は内外面ともにナデで、底面にはアンギンの圧痕が残る。



第66図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑦ (S = 1 / 3)

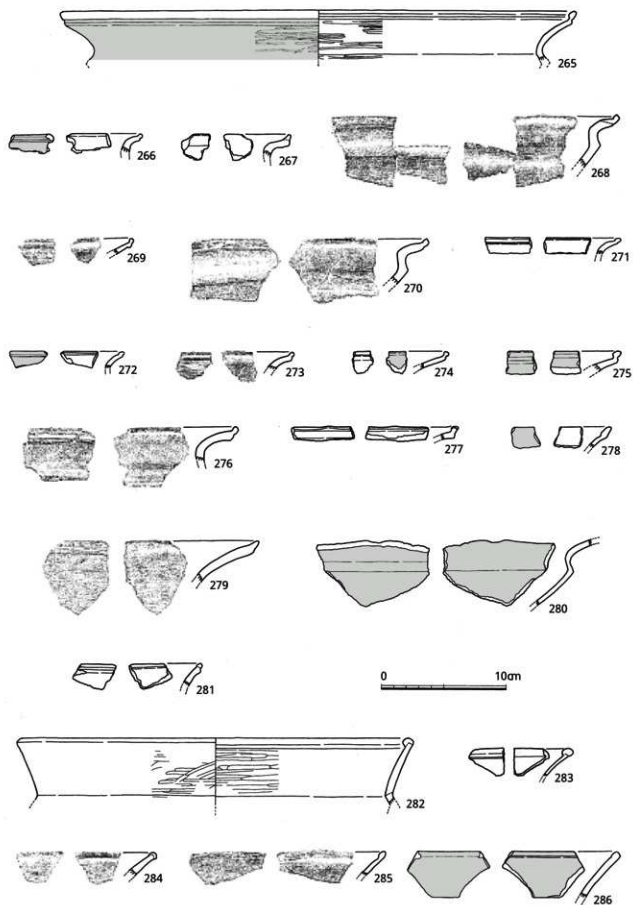
浅鉢 A 類 (第67図265~281)

265は復元口径が40.5cmを測る。頸部は大きく外反し、口縁部文様帯外面には沈線を引く。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。外面は黒色に仕上げる。266は短めの頸部を持ち、口縁部文様帯外面には沈線を引く。内外面ともに横方向の研磨調整で、外面を黒色に仕上げる。267も266同様短めの頸部であるが、口縁部文様帯外面には沈線を施さない。内外面ともに横方向の研磨調整である。268は胴部に外反する頸部が付く。口縁部は内面に段を持ち、口唇部上端を平坦に整形する。内外面ともに調整は研磨である。269は口縁部文様帯外面に沈線1条を引き、下端部には張り出しを作る。内外面ともに横方向の研磨調整である。270は下位で強く外反する頸部を持ち、口縁部文様帯外面には沈線を引く。内外面ともに横方向の研磨調整である。271・272は外反する頸部で、口縁部文様帯は外に開いて付き、頸部と口縁部の境がやや不明瞭で、浅鉢B類に近い。外面には沈線を引く。内外面ともに横方向の研磨調整である。272は口縁部内面に沈線を引き、外面を黒色に仕上げる。273は開く頸部で口縁部文様帯外面には沈線を引く。内外面ともに横方向の研磨調整である。274も大きく開く頸部に口縁部が付くが、口縁部文様帯外面は沈線ではなく、段にする。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、内面は黒色に仕上げる。

275は開く頸部で、口縁部文様帯外面には沈線を施す。内外面ともに横方向の研磨調整で、黒色に仕上げる。276は頸部が下位で強く外反し、上位では厚くなる。口縁部文様帯外面には沈線を施す。調整は内外面ともに横方向の研磨である。277は大きく開く頸部に突起を持った口縁部が付く。口縁部文様帯外面には段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。278は口縁部文様帯に沈線を引かない。内外面ともに横方向の研磨調整で、外面は黒色に仕上げる。279も口縁部文様帯の立ち上がりゆるく、特に内面は段を持たず、頸部との境が不明瞭である。外面には沈線を施す。調整は、外面が横方向の貝殻条痕後横方向の研磨、内面が横方向の研磨である。280は胴部から頸部にかけての資料で、頸部は下位で大きく外反する。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。281は口縁部文様帯外面に沈線を引く。内外面ともに横方向の研磨調整である。

浅鉢 B 類 (第67図282~286・第68図)

282は復元口径30.5cmを測る。直線的で立ち気味の頸部を持つ。外面には沈線を施さない。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。283は非常に薄い作りで、口縁部外面に沈線を引く。内外面ともに横方向の研磨調整である。284は口縁部外面の沈線がなく、口縁部に積み上げた粘土紐の形状をそのまま残して肥厚させる。内外面ともに横方向の研磨調整である。285も口唇部外面に沈線を引かない。内外面ともに横方向の研磨調整である。286は口縁部内面の段が浅く、曖昧である。口縁部外面には沈線を引かない。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。287・289も口縁部外面に沈線を引かない。いずれも内外面ともに横方向の研磨調整を施し、287は内外面ともに黒色に仕上げる。288は胴部から屈曲して頸部がやや開いて立ち上がるが、他に比べると開きが弱い。口縁部はゆるい波状をなし、内面には段を作るが、外面には沈線を引かず、頸部との境を肥厚させる。内外面の調整は、横方向の研磨である。290は口縁部の内面に明瞭な段を付けず、外面は肥厚させて沈線は引かない。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。291は頸部が大きく開き、口縁部外面に沈線を引く。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、内面は黒色に仕上げる。292・293は口縁部外面に沈線を施さ



第67図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑧ (S = 1/3)

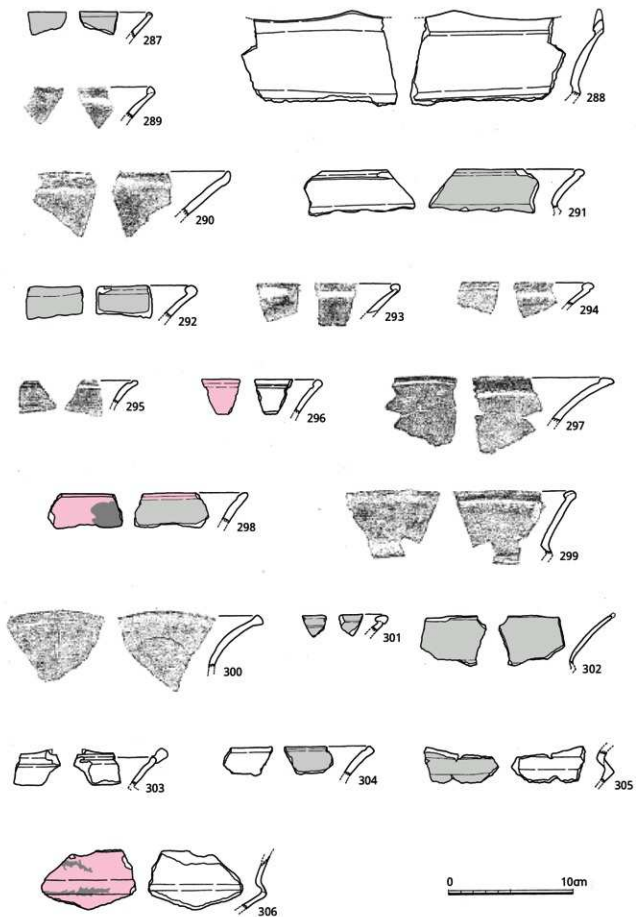
ない。内外面ともに調整は横方向の研磨である。292は口縁部外面をやや肥厚させ、内外面を黒色に仕上げる。294は内外面ともに研磨調整である。口縁部外面に沈線を引く。295は内外面にそれぞれ沈線を引く。両面とも横方向の研磨調整を施す。296は内面に沈線を引き段の代わりとし、外面には沈線を引かない。内外面ともに横方向の研磨調整で、外面には赤色顔料が塗付される。297は口縁部外面に沈線を引く。内外面ともに調整は横方向の研磨である。298は口縁部の内面に段を持ち、外面には沈線を施さない。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。外面と内面の口縁部には赤色顔料を塗付する。また外面には炭化物が付着する。299は肩部から頸部が開いて立ち上がるが、他に比べると開きは弱く、直線的である。口縁部は外面をやや肥厚させる。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。300は強く外反する頸部を持ち、口縁部は内外面ともに肥厚させ、段や沈線は施さない。調整は内外面ともに横方向の研磨である。301は口縁部外面に沈線を引く。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。302は肩部から大きく開く頸部を持つ。口縁部は欠損するが、外面には沈線を引くようである。非常に薄手の作りで、内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。303は口縁部にヒレ状突起を付し、内外面には沈線を引く。内外面の調整は横方向の研磨である。304は口縁部外面の沈線を引かない。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、内面は黒色に仕上げる。305は胸部から頸部位にかけての資料である。肩部までを一旦作り、頸部は肩部の内面に貼り付けるようにして接合する。内外面ともに調整は横方向の研磨である。外面を黒色に仕上げる。306も胸部から頸部にかけての資料で、調整は内外面ともに横方向の研磨である。外面には赤色顔料が塗付され、炭化物の付着がある。

浅鉢C類（第69図）

いずれの資料も口縁部内面に段を持つ。

307は復元口径が21.8cmを測る。本来頸部基部にあたる部分が間延びしたものと考えられる。口縁部にはヒレ状突起を持ち、他に比べ内面に作り出される段が不明瞭である。内外面ともに研磨調整である。308は復元口径が16.6cmを測る。口縁部がわずかに波状をなす。波長部には外面に凹点を施す。短い頸部は内面基部付近の張り出しを作らない。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。309は復元口径が15.5cmを測る。復元胸部最大径は17.5cmで胸部の上位にくる。他の資料と異なり、深い胸部は上位で内湾させ、そこに短い頸部を付ける。口縁部には突起を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。310は復元口径が19.9cmを測る。外反する短い頸部を持つ。内外面ともにナゲ調整である。311は口縁部を欠く。器壁は薄手で、肩部を作り出す。復元胸部最大径は25.6cmを測る。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。

312は復元口径が31.7cmを測る。直線的な短い頸部を持つ。内外面ともに研磨調整を施すが、胸部外面の研磨は研磨痕が残らず方向は不明である。313は直線的な短い頸部を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整で、黒色に仕上げる。314は薄手の作りで、直線的な短い頸部を持つ。外面胸部上端の段は不明瞭である。口縁部外面には凹点様の窪みが見られ、突起になるかも知れない。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。315は直線的な短い頸部を持つ。外面胸部上端の段は不明瞭である。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。316は直線的な短い頸部を持つ。内外面ともに調整は横方向の研磨で、黒色に仕上げる。317は316と同一個体の可能性がある。直線的な短い頸部を持つ。内外面とも



第68図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑨ (S = 1 / 3)

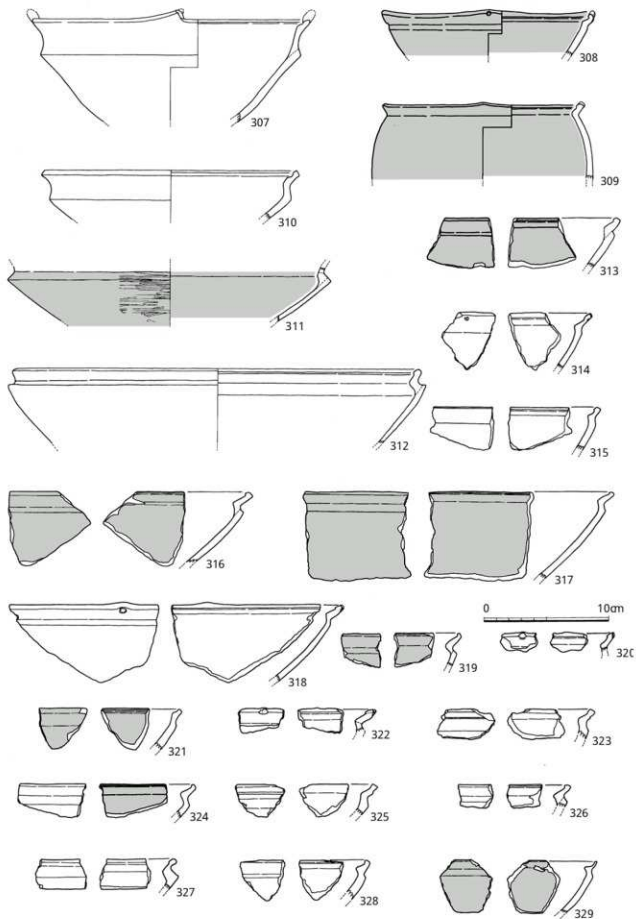
に横方向の研磨調整で、黒色に仕上げる。

318は直線的な短い頸部を持つ。口縁部には突起を持ち、外面に凹点を施す。内外面ともに調整は横方向の研磨である。319は下位で強く外反する短い頸部を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整で、黒色に仕上げる。320は口縁部が突起を持つが、ゆるい波状をなす。波長部の口唇部上端には凹点を施す。頸部は短く直線的である。内外面ともに横方向の研磨調整である。321は307同様直線的な短い頸部の基部が間延びしたようになり、外面胴部上端の段や内面頸部の張り出しは不明瞭である。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。322は肩部を持ち、直線的な短い頸部を付ける。口唇部外端には凹点を施す。内外面ともに調整は横方向の研磨である。323は直線的な短い頸部を持つ。外面胴部上端の段は不明瞭で、口唇部外面に浅い段を作る。内外面の調整は横方向の研磨である。

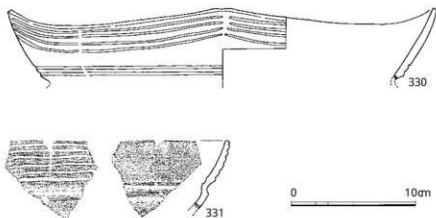
324は直線的な短い頸部を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、内面は黒色に仕上げる。325は直線的な短い頸部を持つ。外面胴部上端の段は不明瞭である。口縁部外面に段を作る。焼成が悪く器面の状態は良くないが、内外面ともに研磨調整か。326は直線的な短い頸部を持つ。調整は内外面ともに横方向の研磨調整である。327は直線的な短い頸部を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整である。328は直線的な短い頸部を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。329は直線的な短い頸部を持ち、頸部から口縁部にかけては非常に薄い作りである。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。

浅鉢D類（第70図）

330は口縁部が波状をなし、復元口径は波長部で33.5cmを測る。口縁部文様帯に施された6条の沈線は、上4条が波状をなす口縁部に沿い、下2条は水平に引く。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。331は短い頸部に口縁部文様帯が付く。口縁部文様帯の外面には6条の沈線を引き、内面には頸部との境に沈線を引く。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。



第69図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器② (S = 1 / 3)

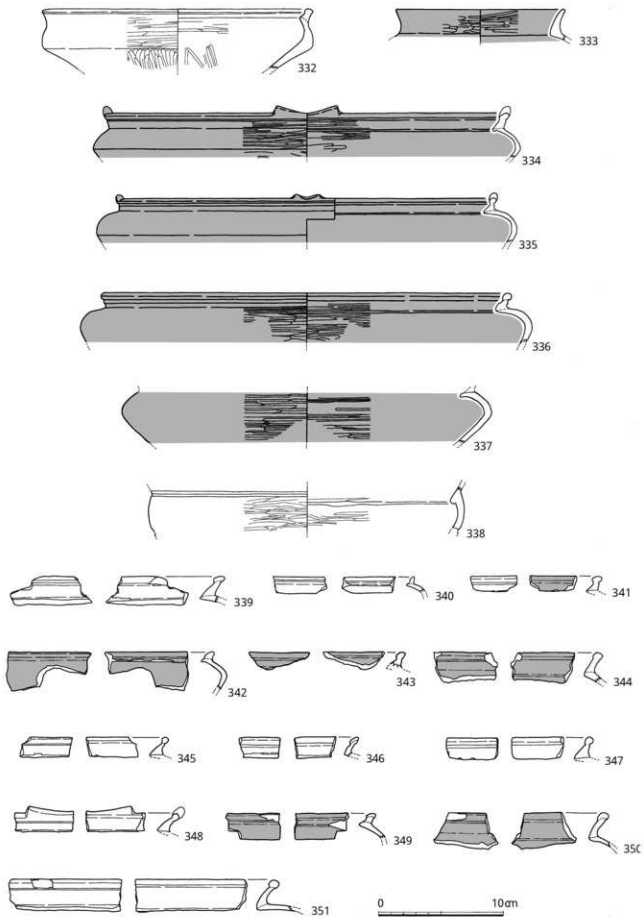


第70図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器②(S = 1 / 3)

浅鉢F類(第71図・第72図352～372)

332は復元口径が20.4cm,復元胴部最大径が21.3cmを測る。肩部の張りが弱く,なで肩となり,胴部と肩部の境に稜を作る。短い頸部に付けられた口縁部は内面に段を作り,外面にも沈線ではなく,浅い段を持つ。内外面の調整は研磨であるが,胴部は内外面とも縦方向,それより上位は横方向の調整である。333は復元口径が13.0cmを測る。本来付くべき玉縁状をなす口縁部を付けず,頸部先端をそのまま口縁部とする。内外面ともに横方向の研磨調整を施し,黒色に仕上げる。334は復元口径が31.8cm,復元胴部最大径が34.0cmを測る。胴部と肩部の境には稜を作る。口縁部にはリボン状突起を付し,外面に沈線を引き,内面に段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整を施し,黒色に仕上げる。335は復元口径が29.4cm,復元胴部最大径が33.4cmを測る。口縁部にリボン状突起を付し,外面には沈線を引き,内面には段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整を施し,黒色に仕上げる。焼成がやや不良である。336は復元口径が32.2cm,復元胴部最大径が35.9cmを測る。内外面ともに横方向の研磨調整を施すが,肩部内面には貝殻条痕が残る。内外面ともに黒色に仕上げる。337は頸部より上位が肩部との接合面で剥離し,欠損する。復元胴部最大径が29.3cmを測る。内外面ともに横方向の研磨調整を施し,黒色に仕上げる。338は肩部はなで肩で,頸部内面下端は張り出しを持つ。内外面ともに横方向の研磨調整である。

339は口縁部外面に沈線を引き,内面に段を作る。内外面とも調整は横方向の研磨である。340は非常に薄手で,小振りの資料である。口縁部は内外面に段を持つ。調整は内外面ともに横方向の研磨である。341は粘土紐の接合面で肩部から剥離している。口縁部は外面に沈線を引き,内面に段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。内面は黒色に仕上げる。342は頸部を作らず直接肩部に口縁部を貼り付ける。口縁部は内面に段を作るが,外面の沈線は施さない。内外面ともに調整は横方向の研磨で,黒色に仕上げる。343・344は口縁部の外面に沈線を引き,内面には段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。ともに内外面を黒色に仕上げる。345は粘土紐の接合面で肩部から剥離している。口縁部外面に沈線を施し,内面に段を設ける。内外面の調整は横方向の研磨である。346は口縁部の外面に沈線,内面に段を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整である。347・348は粘土紐の接合面で肩部から剥離している。口縁部は外面に沈線,内面に段を持つ。内外面の調整は横方向の研磨である。348はヒレ状突起を付す。349は非常に短い肩部を持ち,口縁部には外面に沈線,内面に段



第71図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器② (S = 1 / 3)

を設ける。内外面ともに横方向の研磨調整で、黒色に仕上げる。350はやや長めの頸部で、口縁部は外面に沈線を引き、内面には段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。351もやや長めの頸部を持ち、口縁部には外面に沈線、内面に段を設ける。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。焼成がやや不良である。

352～354は粘土紐の接合面で肩部から剥離している。いずれも口縁部の内面に段を作るが、外面には352が沈線を施すのに対して、353・354は施さない。いずれも内外面の調整は横方向の研磨で、黒色に仕上げる。355は肩部がしっかりと張り、頸部はやや長めである。口縁部は外面に沈線、内面に段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整である。356は粘土紐の接合面で肩部から剥離している。口縁部は外面に沈線を引き、内面には段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。357・358は口縁部の外面に沈線を引き、内面に段を作る。いずれも調整は内外面ともに横方向の研磨である。358は内外面を黒色に仕上げる。359は長めの外反する頸部を持ち、口縁部にはヒレ状突起を付して外面に沈線を引き、内面には段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。

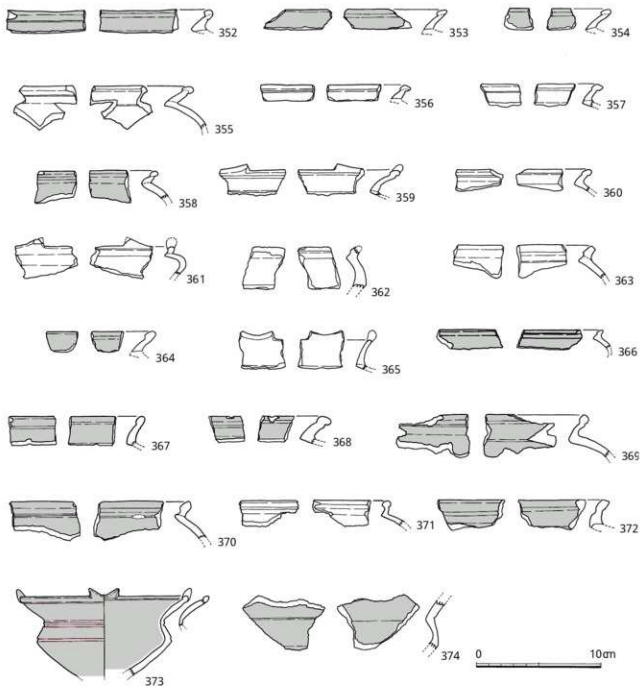
360も口縁部の外面に沈線、内面に段を設ける。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。361は小振りの資料で、肩部が張る。頸部は持たず、肩部に直接口縁部を付ける。口縁部にはヒレ状突起を付し、内面に段を付ける。外面の沈線は施さない。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。362は厚手で、なで肩の資料である。胴部と肩部の境には稜を作る。口縁部は内面に段を作り、外面には沈線を持たない。内外面の調整は横方向の研磨である。焼成はやや不良である。363も肩部に直接口縁部を付ける。口縁部は内面に段を持ち、外面の沈線は引かない。内外面ともに横方向の研磨調整である。364は粘土紐の接合面で肩部から剥離している。口縁部は内面に段を持つが、外面には沈線を持たない。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。365は333同様本来頸部の部分をそのまま口縁部とし、リボン状突起を付ける。焼成不良で器面の状態が悪いため、内外面の調整は不明である。

366は薄手の作りで、比較的小振りの資料である。頸部を持たず、肩部に直接口縁部を貼り付ける。口縁部は内面に段を持ち、外面の沈線は施さない。内外面ともに横方向の研磨調整で、黒色に仕上げる。367～369は口縁部の外面に沈線を引き、内面には段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。370は口縁部内面に段を作り、外面には沈線を引くようだが、不明瞭である。内外面ともに調整は横方向の研磨で、黒色に仕上げる。371は口縁部の外面に沈線を引き、内面に段を作る。内外面ともに調整は横方向の研磨である。372は粘土紐の接合面で肩部から剥離している。口縁部は外面に沈線を引き、内面には段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整で、黒色に仕上げる。

浅鉢G類（第72図373・374）

373は復元口径13.2cm、復元胴部最大径10.7cmを測る。底部は欠損するが、おそらくは尖底か丸底をなすものと思われ、そこから開いて立ち上がる胴部は一旦肩部を作り、再度頸部が開いて立ち上がり口縁部へと至る。肩部には胴部との境に1条の沈線を引き、また頸部との境には2条の沈線を引くことで、隆線状に作り出す。口縁部にはリボン状突起を付し、内外面に段を作る。口縁部外面はリボン状突起の付く側のみ肥厚させて段を作り、残りの半周は段を付けない。リボン状突起の対面には口縁部直下に焼成前穿孔を施す。調整は、外面は胴部が縦方向の研磨、肩部より上位が横方向の研磨、内面は横方向の研磨である。内外面ともに黒色に仕上げる。肩部と口縁部の外面には赤色顔料

の塗付を施す。374は肩部から頸部にかけての資料で、肩部はややなで肩で、頸部は開く。内外面とも横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。



第72図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器③ (S = 1 / 3)

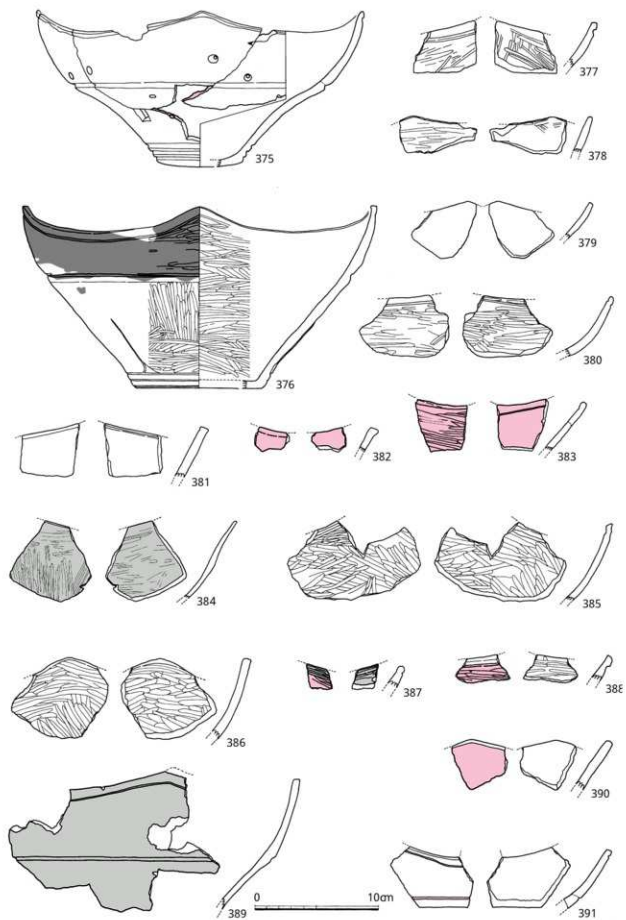
浅鉢H類（第73図・第74図392～401）

375は平底に近い丸底から大きく開く胴部は一旦外面で段を作り、波状をなす口縁部へと至る。波長部での復元口径は25.8cm、復元底径は6.9cmを測る。底部付近には3条の平行沈線を施し、口唇部には外面に段を持つ。内外面ともに研磨調整である。器面には3対の焼成後に穿った補修孔が確認され、割れ口部分と穿孔部分には赤色顔料が付着する。また、破損・補修した土器片の口縁部欠損部分の割れ口にも赤色顔料が確認できる。赤色顔料を混入した接着剤で割れ口を張り合わせ、補修孔を紐で結んで補強し、その紐と穿孔部分も接着剤で固定したものと考えられる。376は平底をなす復元底径9.9cmの底部から胴部は開いて立ち上がり、一旦外面に段を作って波状をなす口縁部へと至る。波長部での復元口径は28.1cmを測る。底部付近には3条の平行沈線を引き、その最上段の沈線から口縁部へ向かっても垂直方向に沈線を引き、基部は暗文を施す。口縁部は外面に段を設ける。この垂直方向の沈線は口縁部の波長部・波短部に関係なく5本が等間隔にめぐっていたものと思われる。調整は内外面ともに研磨で、胴部が縦方向、底部付近と口縁部付近が横方向、内面は横方向に施す。外面の胴部から上位には炭化物が付着する。

377は口唇部外面に沈線を引く。内外面ともに研磨調整である。378・379は口縁波長部の資料である。378の調整は内外面ともに研磨、379の調整は外面が擦過の後研磨、内面が研磨である。380は口唇部の内外に沈線を施す。内外面ともに研磨調整である。381は口唇部内面に段を作る。内外面ともに研磨調整である。382は口唇部が外側に張り出す。内外面ともに研磨調整で、赤色顔料の塗付が認められる。383は口唇部内面に段を持つ。内面左端はやや口唇部の段の幅が広がるので、ヒレ状突起になるかもしれない。内外面ともに研磨調整で、内外面ともに赤色顔料の塗付が確認される。384は他に比べ薄手の資料である。口唇部には内外面ともに段や沈線は持たない。内外面ともに研磨調整で、黒色に仕上げる。385は口唇部の内面に段を持つ。内外面ともに研磨調整である。386は口縁波長部の資料で、口唇部内外に段や沈線を施さない。内外面ともに研磨調整である。387は口唇部外面に沈線を引く。内外面ともに研磨調整で、黒色に仕上げ、外面には赤色顔料を塗付する。388は口唇部外面に段を設ける。内外面ともに研磨調整で、外面に赤色顔料を塗付する。389は胴部から口縁部にかけての資料で、胴部外面には段を持ち、口唇部外面に沈線を引く。内外面ともに研磨調整である。外面を黒色に仕上げる。

390は口縁波長部の資料で、内外面ともに研磨調整である。外面には赤色顔料を塗付する。391は口唇部と胴部の外面に沈線を引く。沈線の中には赤色顔料が残り、あるいは外面全体への塗付であったかもしれない。内外面ともに研磨調整である。392は口縁波長部の資料で、外面に段を作る。内外面ともにナデ調整である。393は口唇部の内外に段や沈線を施さない。内外面ともに研磨調整である。394は口縁波長部で、口唇部の内外に段を設ける。内外面ともに研磨調整である。395は口唇部と胴部の外面に段を作る。内外面ともに研磨調整である。

396は胴部の資料で、外面に段を持つ。内外面ともに研磨調整で黒色に仕上げ、外面には炭化物が付着する。397・398は底部付近の資料で、外面の沈線には赤色顔料が確認できる。内外面ともに研磨調整である。399～401は底部の資料で、外面に沈線を施す。内外面・底面いずれも研磨調整である。400の沈線内には赤色顔料が確認できる。



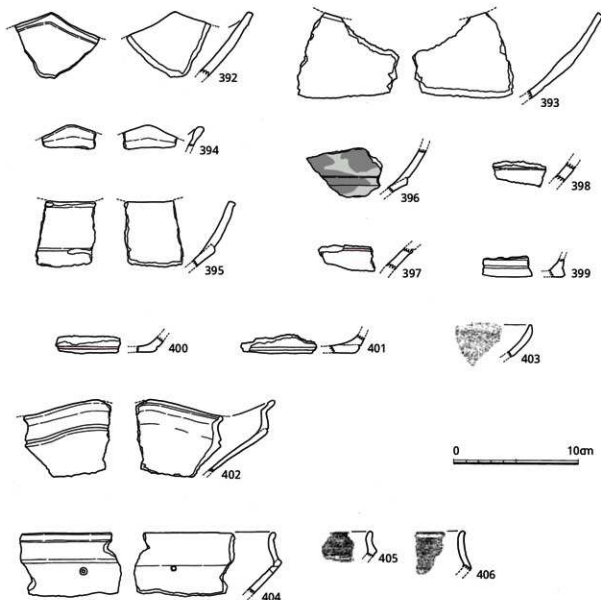
第73図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器片 (S = 1/3)

浅鉢Ⅰ類（第74図402）

402は胴部で一旦屈曲し肩部を作り、口縁部は波状をなす。胴屈曲部の直上には沈線を引く。口唇部内面には段を設ける。内外面ともに研磨調整である。

浅鉢Ⅱ類（第74図403）

403は口縁部の資料で、浅い椀形か皿形を呈するものと思われる。内外面の調整はナデである。



第74図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器器（S = 1 / 3）

浅鉢 K 類 (第74図404~406)

404は口縁部がやや内傾し、口唇部外面には段を作る。胴部には焼成後の穿孔を外面から施す。内外面ともに横方向の研磨調整である。405・406は内傾する口縁部を持つ。いずれも内外面の調整は研磨である。

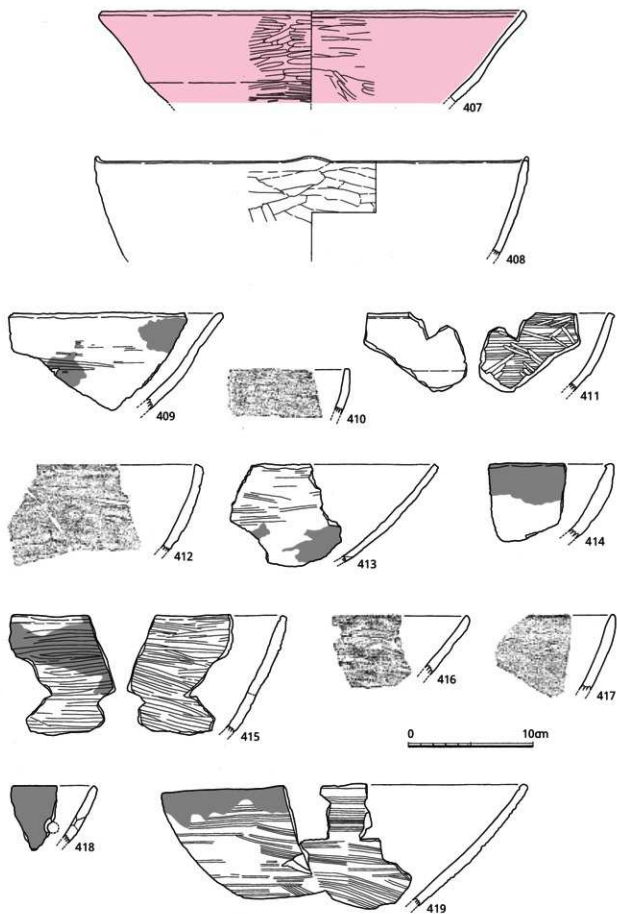
浅鉢 L 類 (第75図・第76図)

407は復元口径33.4cmを測る。開いて立ち上がる胴部は一旦屈曲し、口縁部へと至る。口唇部内面には段を作る。調整は外面が屈曲より下位が横方向の貝殻条痕、上位が横方向の研磨、内面が横方向の研磨である。内外面ともに黒色に仕上げ、内外面に赤色顔料を塗布する。408は復元口径34.2cmを測る。口縁部には突起を持つ。調整は外面が擦過、内面が研磨である。

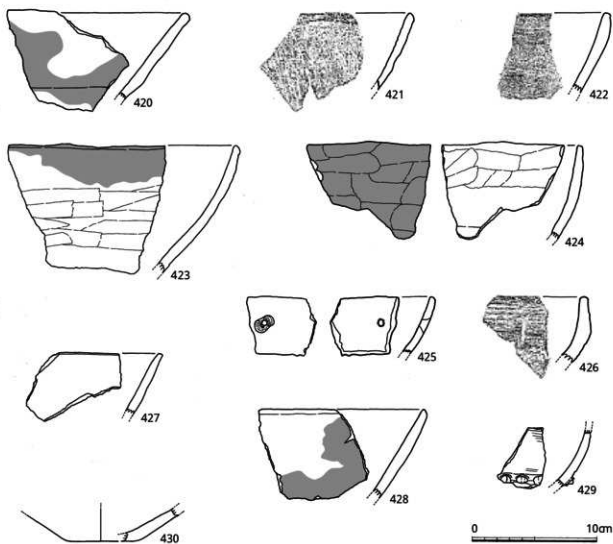
409の調整は、外面が貝殻条痕の後研磨、内面が研磨である。外面には炭化物が付着する。410は口唇部上端を平坦に整える。内外面ともに擦過調整である。411は口唇部上端を整え、口唇部外端に段を作る。胴部途中で一旦わずかに屈曲し、外面に稜を作る。内外面ともに研磨調整である。412の調整は外面がナデ、内面が研磨である。413の調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面が擦過の後ナデで、外面には炭化物の付着が認められる。414は内湾する口縁部で、内外面ともにナデ調整である。外面には炭化物が付着する。415は内外面ともに貝殻条痕調整を施し、外面はその後軽く研磨調整を施す。外面には炭化物の付着が認められる。416は外面がナデ調整、内面が研磨調整である。417は外面が丁寧なナデ調整で、内面は研磨調整である。418は焼成後の穿孔が認められる。調整は内外面ともに擦過で、外面には厚く炭化物が付着する。419は外面が貝殻条痕調整、内面が研磨調整である。外面口縁部付近には厚く炭化物が付着する。

420は胴部途中でわずかに屈曲する。内外面ともに調整は横方向の貝殻条痕の後、横方向の研磨である。外面には炭化物が付着する。421は外面が縦方向の貝殻条痕の後ナデ、内面は横方向の貝殻条痕の後、横方向の研磨である。422はゆるく内湾する口縁部で、調整は外面が丁寧なナデ、内面が横方向の研磨である。423は、外面は幅1.2cmほど板状工具によって横方向の擦過調整を施す。内面は横方向の丁寧なナデ調整である。外面の口縁部付近には炭化物が厚く付着する。424は口唇部上端を平坦に整える。内外面ともに調整は工具によって横方向に幅1.8cmほどのケズリを施す。外面には炭化物が付着する。425は外面から焼成後に穿孔を施す。内外面ともに調整は横方向のナデである。426は胴部が開いて立ち上がり、屈曲して口縁部は直立する。外面調整は横方向の貝殻条痕の後ナデ、内面調整はナデである。427は口唇部上端を平坦に整える。内外面ともに横方向の貝殻条痕調整の後、横方向の研磨調整を施す。

428の調整は、外面が横方向の貝殻条痕の後、横方向の研磨、内面が横方向の研磨である。外面には炭化物が付着する。429は内湾する胴部の資料で、突帯を貼り付け、指による刻目を施す。外面は横方向の貝殻条痕の後ナデ調整、内面調整はナデである。430は底部の資料で、復元口径5.8cmの平底をなす。内外面・底面いずれもナデ調整である。



第75図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑥ (S = 1/3)



第76図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器破片 (S = 1 / 3)

浅鉢M類（第77図・第78図443～454）

431～441はアンギンの圧痕を残すものである。

431, 432は同一個体である。復元口径は35.4cmを測る。粘土紐の輪積みの痕跡を明瞭に残し、厚手の作りである。調整は外面が貝殻条痕、内面が貝殻条痕の後ナデで、外面には炭化物の付着がある。433の内面調整はナデである。434は胴部への立ち上がりが屈曲する。外面は圧痕を消すように上からなでる。内面は研磨調整である。内面のみ黒色に仕上げる。435は厚手の資料で、内面調整はナデである。436は内面に研磨調整を施す。437の内面調整はナデである。438・439の内面調整は研磨である。440は底部から屈曲して胴部へと至る部分の資料で、内面調整はナデである。441の内面調整はナデである。

442～450は網目の圧痕を残すものである。

442は復元口径31.0cmを測り、口縁部は直線的にやや外傾して立ち上がる。内外面の調整は貝殻条痕で、外面の圧痕部分と貝殻条痕部分の境については擦過調整を施す。外面に炭化物が厚く付着する。443は口縁部付近の資料で、下部に圧痕が残る。内外面の調整は擦過である。444も口縁部の資料で、外面調整は貝殻条痕の後ナデ、内面調整はナデである。外面に炭化物が付着する。445は厚手の資料で、口縁部がわずかに外傾して立ち上がる。内外面ともにナデ調整である。外面には炭化物が付着する。446は口縁部へと屈曲して立ち上がる部分の資料で、調整は、外面は貝殻条痕であるが、圧痕との境は擦過を施す。内面はナデである。447は内面調整が研磨である。448は内面調整がナデで、外面には炭化物が付着する。449の内面調整は研磨である。450の内面調整は研磨で、内面は黒色に仕上げる。

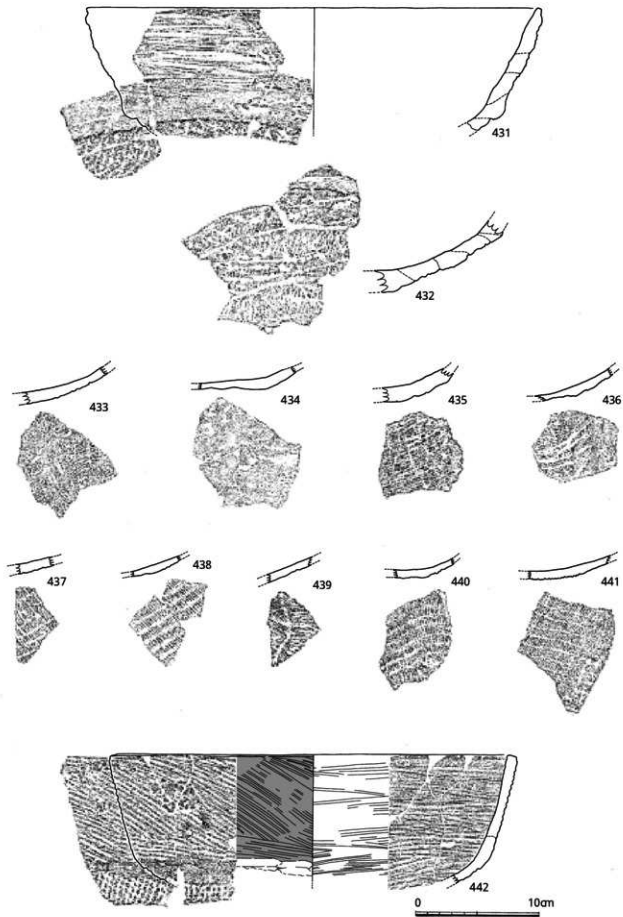
451～453は籠目の圧痕を持つものである。

451は復元口径31.6cm、器高13.7cmを測る。底部付近にのみ圧痕を残し、胴部から口縁部の外面には擦過調整を施す。内面はナデ調整である。外面に厚い炭化物の付着が認められる。AMS測定資料。452は底部から口縁部への立ち上がる屈曲する部分の資料である。圧痕部分は薄手であるが、上位は厚手になる。外面はナデ調整、内面は研磨調整を施す。453の内面調整はナデである。

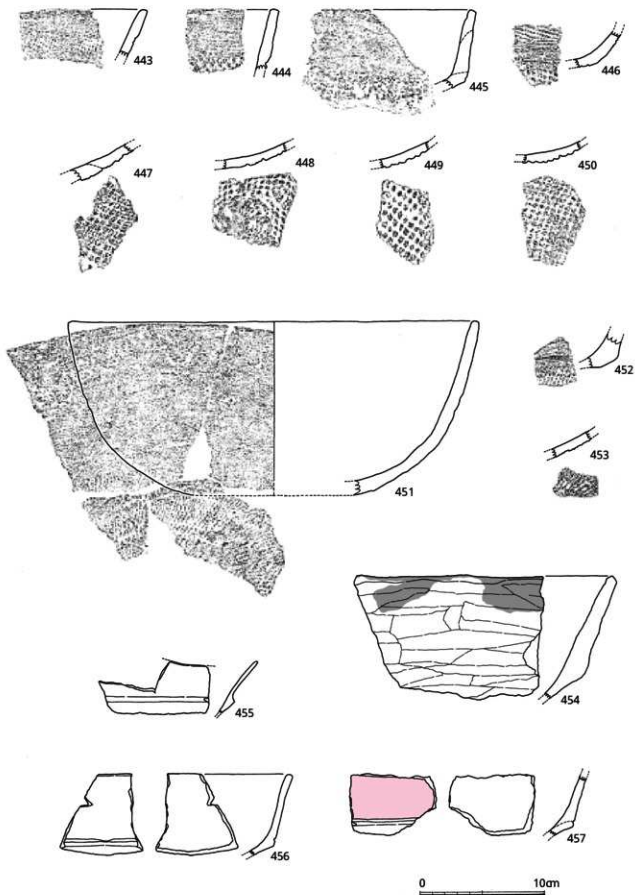
454は屈曲部を持ち、屈曲部より上位は厚手となる。外面は全面に擦過調整を施すため、圧痕の種類は不明である。内面調整は擦過の後ナデである。外面には口縁部付近に炭化物の付着が認められる。

浅鉢N類（第78図455）

455は外面に段を持ち、口縁部は波状をなす。内外面ともに横方向の研磨調整である。外面には焼成時に黒斑が付く。



第77図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑧ (S = 1 / 3)



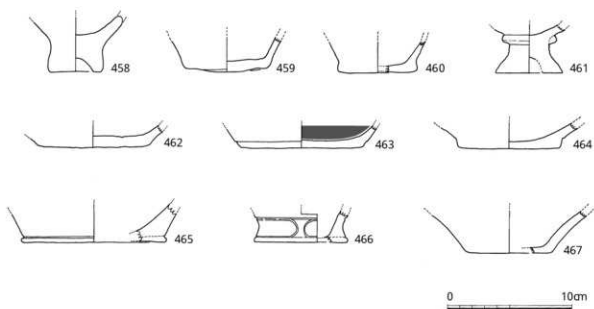
第78図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器片 (S = 1/3)

浅鉢O類（第78図456・457）

456は胴部で屈曲し、直線的に口縁部は立ち上がる。屈曲部の直上に沈線1条を施す。内外面ともに横方向の研磨調整である。457も456同様屈曲し、屈曲部直上に沈線1条を引く。口縁部は欠く。内外面ともに横方向の研磨調整で、外面には沈線より上位に赤色顔料の塗付を行う。また外面にはわずかに炭化物が付着する。

浅鉢底部（第79図）

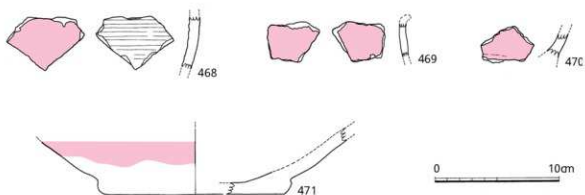
458は上底をなし、底径は4.0cmを測る。調整は内外面が研磨で、底面はナデである。459は復元底径6.5cmを測り、調整は内外面が研磨、底面は擦過である。460はわずかに上底をなし、復元底径は6.3cmを測る。調整はいずれもナデである。461は上底をなし、復元底径は5.4cmを測る。胴部との境には突帯をめぐらす。調整は内外面ともにナデである。462は底径8.8cmを測る。調整は内外面が研磨、底面は擦過の後研磨である。463は復元底径が9.7cmを測り、外面には段を作る。調整は内外面が研磨、底面が擦過の後研磨である。内面には厚い炭化物の付着が認められる。464は復元底径8.0cmを測る。調整はいずれも研磨で、内面にはわずかに炭化物が付着する。465はわずかに上底をなし、復元底径が11.2cmを測る。外面には胴部との境に沈線を引く。調整はいずれも研磨である。466は復元底径7.4cmを測る。外面には沈線とえぐりによって文様装飾を施す。調整はいずれも研磨である。467は復元底径が6.8cmを測る。内外面・底面いずれも研磨調整である。



第79図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑩（S = 1/3）

壺（第80図）

468は胴部の資料である。調整は外面が研磨，内面が貝殻痕の後ナデで，外面には丹塗りを施す。469は頸部の資料で口縁部を欠く。内外面ともに研磨調整で，両面に丹塗りを施す。470は底部付近の資料で，器面の状態が良くないが，わずかに丹塗りが外面に確認できる。471は復元底径14.3cmを測る。外面の調整は，底部付近はナデであるが，胴部は斜方向の研磨を施し丹塗りをを行う。内面は器面の剥落が著しいが，ナデ調整である。



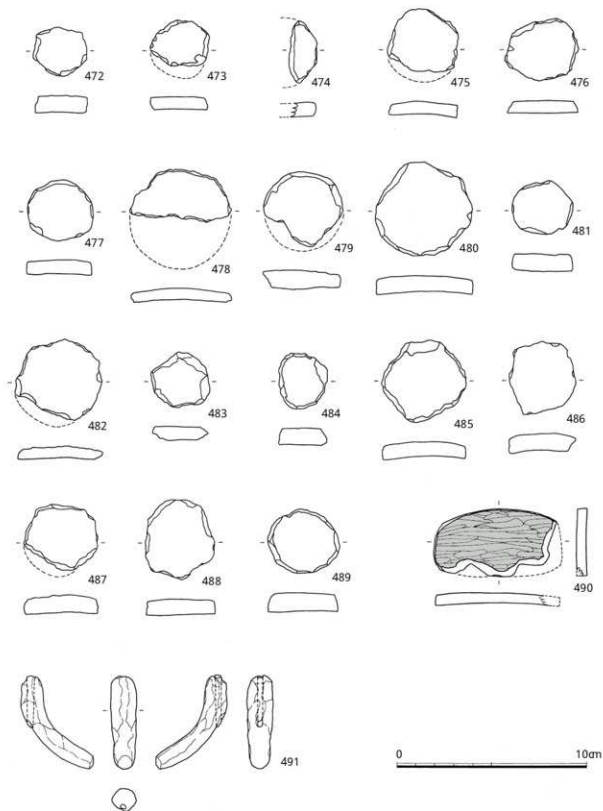
第80図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器①（S = 1 / 3）

土製品（第81図）

472は直径2.8cm，厚さ0.9cm，重量7.7gを測り，深鉢胴部片を用いる。473は直径3.1cm，厚さ0.7cm，重量6.5gを測り，浅鉢胴部片を用いる。474は復元径3.7cm，厚さ0.7cm，重量4.1gを測り，深鉢胴部片を用いる。475は直径3.7cm，厚さ0.7cm，重量12.0gを測り，深鉢胴部片を用いる。476は直径3.8cm，厚さ0.7cm，重量11.6gを測り，深鉢C類の胴部片を用いる。477は直径3.5cm，厚さ0.7cm，重量11.2gを測り，深鉢胴部片を用いる。478は直径5.4cmとやや大きく，厚さ0.6cm，重量は10.6gを測る。浅鉢胴部片を用いる。479は直径4.2cm，厚さ0.9cm，重量16.9gを測る。深鉢胴部片を用いる。480は直径5.1cm，厚さ0.8cm，重量26.4gを測り，深鉢胴部片を用いている。断面は軽く研磨する。481は直径3.2cm，厚さ0.9cm，重量11.4gを測る。深鉢胴部片を用い，断面は軽く面取りするように研磨する。482は直径4.6cm，厚さ0.6cm，重量13.7gを測り，深鉢胴部片を用いる。483は直径3.0cm，厚さ0.7cm，重量7.9gを測り，深鉢C類の胴部片を用いる。484は直径2.6cm，厚さ0.9cm，重量8.7gを測る。深鉢C類の胴部片を用いる。485は直径4.5cm，厚さ0.8cm，重量17.4gを測り，浅鉢胴部片を用いている。486は直径3.5cm，厚さ0.9cm，重量13.8gを測り，深鉢胴部片を用いる。487は直径3.9cm，厚さ0.9cm，重量15.1gを測り，深鉢胴部片を用いる。488は直径3.7cm，厚さ0.8cm，重量15.5gを測る。深鉢胴部片を用いる。489は直径3.8cm，厚さ1.0cm，重量15.7gを測る。深鉢胴部片を用い，断面は丁寧に研磨して面取りする。

490は浅鉢胴部片を加工した土製品である。推定長軸6.7cm，短軸3.6cm，厚さ0.5cmを測る。重量は18.4gである。断面を丁寧に研磨し，楕円形に整える。

491は勾玉形の土製品で，長さ5.0cm，重量10.2gを測る。穿孔は焼成前に行う。



第81図 縄文時代後期～弥生時代前期の土製品① (S = 1 / 2)

B・C区出土の土器・土製品

深鉢A類（第82図）

492は口唇部上端を平坦に整えた後に工具によって刻目を施す。調整は外面が貝殻条痕、内面がナデである。493も口唇部を平坦に整形する。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面がナデである。外面には炭化物の付着が認められる。494は軽く口唇部上端を整え平坦にする。外面調整は貝殻条痕、内面調整はナデである。495は口唇部上端を平坦に整え、その際粘土が外面の方へ突帯状にはみ出す。外面は貝殻条痕調整、内面は擦過調整で、内面の口縁部付近はなでる。外面には炭化物が付着する。496は口唇部上端整形時の粘土のはみ出しを外面側でなで付ける。調整は外面が擦過の後ナデ、内面がナデである。497は口縁部にヒレ状突起を付す。調整は外面が横方向の貝殻条痕、内面は横方向の擦過であるが、口縁部内面は指ナデして凹線を施す。外面には炭化物が付着する。498はやや薄手の資料で、外面は貝殻条痕調整、内面はナデ調整を施す。499は口唇部整形時の粘土のはみ出しを外面にそのまま残す。調整は外面が貝殻条痕、内面はナデである。500は内外面ナデ調整で、口唇部には細かい刻目を施す。501はヒレ状突起を付す。外面は貝殻条痕調整、内面はナデ調整である。502は外面調整が貝殻条痕であるが口唇部付近のみなでる。内面調整は貝殻条痕後ナデである。外面には炭化物が付着する。503は口唇部付近が内傾する。外面調整が擦過の後ナデ、内面調整がナデである。504は口唇部外端に粘土のはみ出しが見られ、肥厚させたようになる。内外面ともにナデ調整を施すが、内面には貝殻条痕が残る。505は口唇部上端に刻目を施す。外面調整は貝殻条痕、内面調整はナデである。506はヒレ状突起を付し、調整は内外面ともに貝殻条痕調整で、内面はその後なでる。外面にはわずかに炭化物が付着する。507は復元口径が26.9cmを測る。口縁部に長めの突起を付し外面は貝殻条痕調整を、内面はナデ調整を施す。外面には炭化物が付着する。AMS測定資料。508の調整は外面が貝殻条痕、内面が擦過の後ナデである。

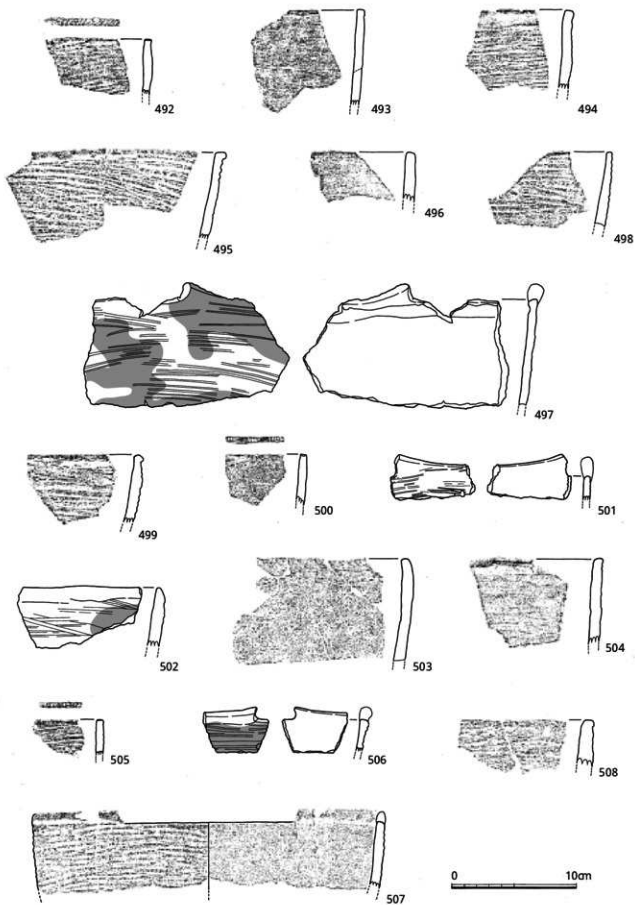
深鉢B類（第83図・第84図）

509は胴部で屈曲し、口縁部は外傾する。復元口径26.7cm、胴屈曲部での復元径23.9cmを測る。外面調整は貝殻条痕で、屈曲部より下位が縦方向、上位が斜方向に施す。内面調整は横方向の擦過である。外面にはわずかに炭化物が付着する。510は底部を欠損するが、大きく開いて立ち上がる。胴部は上位で屈曲し、口縁部はわずかに内傾する。復元口径31.8cm、胴屈曲部での復元径33.6cmを測る。外面調整は下半が縦方向の貝殻条痕、上半が横方向の貝殻条痕である。内面調整は横方向の貝殻条痕の後ナデである。

511は胴上位で屈曲し、口縁部はわずかに内傾する。復元口径36.3cm、胴屈曲部での復元径40.2cmを測る。外面調整は貝殻条痕で、縦方向に施した後横方向に施す。内面調整は斜方向の擦過である。512は復元口径40.0cm、胴屈曲部での復元径41.4cmを測る。胴上位で屈曲し、内傾するが、口縁部はやや外反する。内外面ともに調整は貝殻条痕の後ナデである。内面には外面に比べて丁寧になるが、胴部の下位の部分と口縁部に貝殻条痕が残る。

513～524は胴部に屈曲部を持つと思われる深鉢の口縁部の資料である。

513は突起を持つ資料である。内面には突起の下部に指ナデによる凹線を施す。外面調整は貝殻条痕の後ナデ、内面調整は擦過である。外面には炭化物の付着が認められる。514も突起を持つ。外面



第82図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器② (S = 1/3)

調整は貝殻条痕の後ナデ、内面調整はナデである。515は口唇部に粘土紐の形状をそのまま残す。内外面ともにナデ調整である。516は外傾する口縁部で、口唇部上端は平坦に整える。調整は、外面が擦過の後ナデ、内面がナデである。517はほぼ直立する口縁部で、粘土紐を2.5cm～4.0cmの幅で積み上げている。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面がナデである。518は外反する口縁部である。調整は内外面ともに貝殻条痕の後ナデである。519は外反する口縁部で、リボン状突起を付す。外面調整は貝殻条痕後ナデ、内面調整はナデである。520は直立する口縁部で、外面調整は貝殻条痕、内面調整がナデである。521はごくわずかに外反する。外面調整は貝殻条痕、内面調整はナデである。522もわずかに外反する口縁部で、口唇部上端を平坦に整える。外面調整は貝殻条痕、内面調整は貝殻条痕の後擦過である。523は内傾する口縁部で、口縁端部を外反させる。外面には段を作る。外面調整は擦過の後ナデ、内面調整はナデである。524はやや外傾する口縁部で、内外面ともにナデ調整を施す。外面には炭化物が付着する。

深鉢C類（第85図～第91図）

525～535は口縁部文様帯に2条の凹線もしくは沈線を引く。

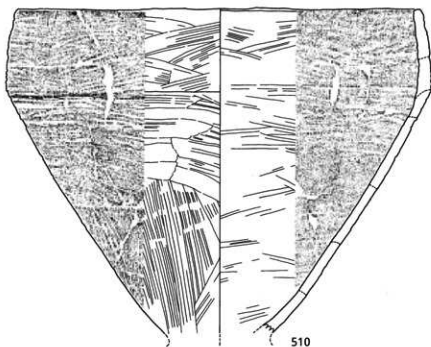
525は直立する口縁部文様帯に凹線を引く、口唇部上端は平坦に整える。内外面ともに研磨調整である。526は口縁部文様帯が直立し、内外面の調整は研磨である。527もほぼ直立する口縁部文様帯で、口唇部上端を平坦にする。内外面ともに研磨調整である。528は鋭利な工具で沈線を施す。口縁部文様帯は直立し、口唇部は平坦に整える。内外面の調整は研磨である。529は内外面ナデ調整で、口唇部を平坦に整える。530は外反する頸部に直立する口縁部文様帯を持ち、口唇部は平坦である。鋭利な工具で細い沈線を入れる。内外面とも研磨調整を施す。531は外反する頸部に直立する口縁部文様帯を付ける。内外面ともに研磨調整である。532は口唇部内面に段を作る。内外面ともに研磨調整を施す。533は口縁部文様帯が直立し、凹線様の太い沈線を持つ。口唇部は平坦に整え、口縁部内面には段を持つ。内外面の調整は研磨である。534は口縁部文様帯を頸部に取り付けるのではなく、頸部先端を直接外側へつまみ出し、外面に沈線を入れる。内外面の調整は外面が研磨、内面がナデである。535は口縁部文様帯が外傾し内面には稜を作る。沈線は平行しておらず、口縁部は波状をなすかもしれない。外面調整はナデ、内面調整は研磨である。

536～558は口縁部文様帯に3条の沈線を引く。

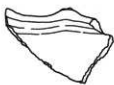
536は内傾する口縁部文様帯を持ち、沈線の幅は広めである。内外面ともにナデ調整で、内外面の色調は浅黄色で他に比べ白っぽく、特徴的である。537は頸部との境となる口縁部文様帯の下端をしっかりと張り出させ、幅広い沈線を引く。口縁部文様帯はやや内傾する。内外面ともに研磨調整を施すが、外面が黒褐色を呈し、黒味がかかるのは意図的なものか。口縁部資料の538と頸部資料の539は同一個体である。口縁部文様帯は内傾し、内面で頸部との境に段を作る。538の色調は536と近く、頸部資料の539は焼成時の火のあたりが良かったためだろう、口縁部に比べてやや赤味を帯びる。内外面ともに研磨調整であるが、頸部の内面と口縁部・頸部の内外面が横方向の調整であるのに対し、頸部の外面は縦方向の調整である。540・541はやや外傾する口縁部で内外面ともに研磨調整を施す。542・543・544は直立する口縁部で、口唇部を平坦に整える。内外面ともに調整は研磨である。545も口唇部を平坦に整える口縁部で、外面は研磨調整、内面は貝殻条痕調整の後研磨調整である。外面には炭



509



510



513



514



515



516



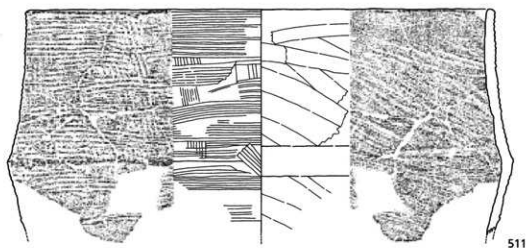
517



518

0 10cm

第83図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器③ (S = 1 / 3)



511



512



519



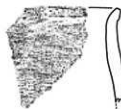
520



521



522



523



524



第84図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器④ (S = 1 / 3)

化物が付着する。546は口縁部文様帯の下端がしっかりと張り出す口縁部で、口唇部上端は平坦に整える。外面調整はナデ、内面調整は研磨である。547は口唇部上端を平坦にする口縁部で、ほぼ直立する。口縁部文様帯下端の張り出しが強い。調整は外面が研磨、内面が擦過の後研磨である。

548は口唇部上端を平坦に整える。調整は外面が研磨、内面が貝殻条痕の後研磨である。549はわずかに内湾気味になる口縁部で、内外面の調整は研磨である。550は外傾する口縁部の資料で、内外面の調整は研磨である。551は外傾する口縁部で、器壁がやや薄い。外面調整は研磨、内面調整は貝殻条痕の後研磨である。552は外傾する口縁部で、口縁部文様帯の幅が広めである。内外面ともにナデ調整を施す。553は口縁部が外傾し、断面が先細りとなる。口縁部文様帯下端はしっかりと張り出し、内面の頸部と口縁部の境には段を作る。内外面ともに研磨調整である。554はやや外傾する口縁部で口唇部上端を平坦にする。調整は内外面ともにナデ調整である。

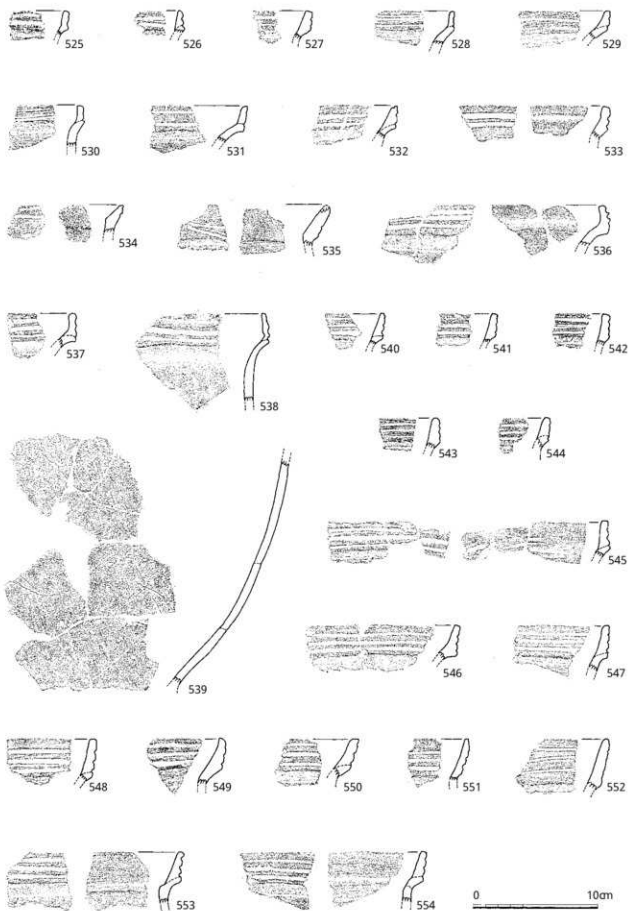
555は直立する口縁部で、口唇部上端を平坦に作る。内面には段を持つ。内外面ともにナデ調整である。556は口縁部断面が先細りになり、内面には稜を作る。外面は研磨調整、内面はナデ調整である。557は外傾する口縁部で、頸部との境になる口縁部文様帯の下端はほとんど張り出さない。内外面ともに研磨調整である。558は外傾する口縁部で、557同様口縁部文様帯下端は張り出しを持たず、わずかな段を頸部との境にし、屈曲する。内面には稜を作る。外面調整はナデ、内面調整は研磨である。

559～596は口縁部文様帯に4本の沈線を持つものである。567・570・571はほぼ直立する口縁部文様帯を持つが、他はいずれも外傾する口縁部文様帯を持つ。

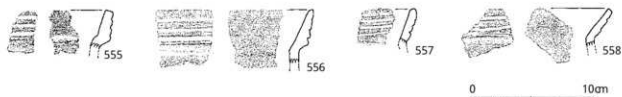
559は波状をなす口縁部で、口縁波長部外端には凹点を施す。内面には頸部と口縁部文様帯の境に稜を作る。復元口径は38.6cmを測る。調整は外面が研磨、内面がナデである。560は内傾して立ち上がる頸部に外傾する口縁部文様帯を付ける。外面の調整は貝殻条痕後研磨を施す。内面頸部と口縁部文様帯の境には段を作り、段より下位はナデ調整、上位は貝殻条痕調整後研磨調整である。561は内面に稜を作る。外面は研磨調整、内面は貝殻条痕調整の後研磨調整である。562は口縁部文様帯と頸部の境で内面は稜を持つが、外面は口縁部文様帯下端の張り出しがない。内外面ともにナデ調整である。563・564は内外面ともにナデ調整である。565は内面に稜を持つ。外面の調整は、口縁部文様帯の部分はナデ、頸部は研磨、内面の調整は貝殻条痕の後研磨である。566は内面に稜を持ち、外面はナデ調整の後に研磨調整、内面は貝殻条痕調整の後ナデ調整である。

567は比較的幅の狭い口縁部文様帯で、断面は先細りになる。内面には段を持つ。内外面ともに研磨調整である。568は内面に稜を作る。外面はナデ調整の後に研磨調整、内面は貝殻条痕調整の後にナデ調整である。569も内面に稜を持ち、調整は内外面ともに研磨である。570も567同様口縁部文様帯の幅が狭く、断面が先細りになる。内面には段を作る。内外面ともに研磨調整である。571も同様で口縁部文様帯の幅は狭く先細りの断面を呈する。内面には稜を作る。調整は外面が研磨、内面がナデである。572は内面に稜を作り、調整は外面が研磨、内面が貝殻条痕の後研磨である。573は内面に浅い段を作る内外面ともにナデ調整で、外面はその後研磨調整を施す。

574は内外面ともに研磨調整である。575は内外面ともに研磨調整を施し、外面には炭化物の付着がある。576は外面がナデ調整、内面は研磨調整である。口唇部上端は平坦に整える。577の調整は外面が研磨、内面が貝殻条痕後研磨である。578は口唇部上端を平坦に整える。沈線は浅く、口縁部文様



第85図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑨ (S = 1/3)



第86図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑨ (S = 1 / 3)

帯下端の張り出しは小さい。内外面ともにナデ調整である。579の口縁部文様帯はわずかに内湾する。内外面ともにナデ調整である。580の調整は内外面ともにナデ調整である。581は内湾する口縁部文様帯である。内外面ともにナデ調整である。582は内外面ともにナデ調整である。583は非常に薄手で、断面がやや先細りになる。口唇部上端は平坦に整え、内外面ともに研磨調整を施す。584は内外面ともに研磨調整を施す。585は内外面ともに研磨調整を施し、外面にはわずかに炭化物が付着する。586は内外面の調整はナデである。587は口唇部上端を平坦に整える。口縁部文様帯の幅は広く、沈線の間隔も広めである。内外面の調整は研磨である。

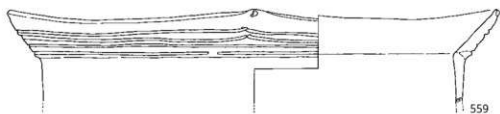
588は波状をなす口唇部の波長部の資料である。口唇部外端には凹点を施す。口縁部文様帯の沈線は最下段のみ水平で、上3本は口縁部のラインに沿って波状をなす。内外面ともに研磨調整で、外面には炭化物の付着が認められる。589は内外面ともに研磨調整を施す。590は口縁部文様帯の幅は狭く、断面は先細りとなる。内外面ともにナデ調整を施す。591は内外面ともに研磨調整である。592は口唇部を平坦に整える。内外面ともにナデ調整である。593は口縁部文様帯の幅がやや狭く、口縁部文様帯下端の張り出しは弱い。外面はナデ調整、内面は研磨調整である。594は外面がナデ調整、内面は研磨調整である。595は内外面ともにナデ調整である。596は口唇部を平坦にする。内外面ともに研磨調整である。

597～616は口縁部文様帯に5本の沈線を施す。いずれも外傾する口縁部文様帯を持つ。

597は復元口径が40.8cmを測る。口縁部文様帯は外傾し、内面の頸部と口縁部文様帯の境には段を作る。口唇部上端は丸く整える。外面は横方向の貝殻条痕調整の後研磨調整、内面はナデ調整であるが、口唇部近くは内面も研磨調整を施す。598は復元口径が31.9cmを測る。外傾する口縁部文様帯を持ち、断面は先細りになる。口唇部上端は平坦に整え、内外面ともに研磨調整を施す。

599は内面に稜を作り、口唇部上端は平坦に整え、調整は内外面ともに研磨である。600は内面に段を作る。調整は外面が研磨で、内面はナデであるが、口唇部付近は研磨を施す。601は口唇部上端を平坦に整え、内面は頸部と口縁部文様帯の境に稜を作る。内外面ともに研磨調整である。602は口縁部文様帯の幅がやや狭く、断面が先細りになる。口唇部は上端を平坦にし、頸部と口縁部文様帯の境で内面に稜を作る。内外面ともに研磨調整である。

603は内外面ともにナデ調整である。604の外面は研磨調整、内面は貝殻条痕調整の後研磨調整である。605の口縁部文様帯は比較的幅広であるが、器壁は薄手である。内外面ともに研磨調整である。606の外面調整は研磨、内面調整は貝殻条痕の後研磨である。607・608は内外面ともに研磨調整を施す。609の調整は、外面が研磨、内面が貝殻条痕の後ナデである。頸部から粘土紐の接合面で剥離する。610は薄手の作りで、内外面ともに研磨調整を施す。611は口縁部文様帯がやや内湾する。外面は



559



560



561



562



563



564



565



566



567



568



569



570



571



572



573

0 10cm

第87図 縄文時代後期一弥生時代前期の土器⑦ (S = 1 / 3)

研磨調整，内面はナデ調整である。612は口唇部上端を平坦に作り，内外面の調整は研磨である。613は外面が研磨調整，内面がナデ調整である。外面には炭化物が付着する。614は薄手で，口唇部上端を平坦に整える。調整は外面が研磨，内面がナデである。615は口縁部文様帯の断面が先細りになる資料である。内外面の色調はにぶい黄橙色で，他に比べると赤味が弱く明るい。内外面ともに研磨調整である。616は小振りの土器の口縁部文様帯であろう。口縁部文様帯の幅は狭く，断面は先細りになる。内外面ともにナデ調整である。

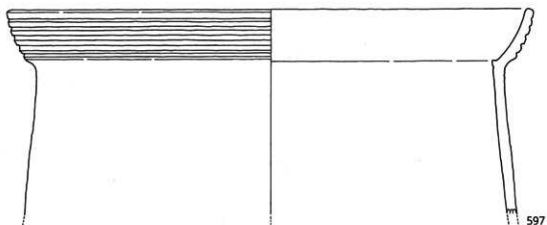
617～619は口縁部文様帯に6本の沈線を施すものである。いずれも口縁部文様帯は外傾する。

617は頸部から口縁部にかけての資料で，復元口径は44.6cmになる。口唇部上端を平坦に整え，内面の頸部と口縁部文様帯の境には段を設ける。内外面の調整は，外面が研磨，内面がナデである。618も口唇部上端を平坦に作る。口縁部文様帯下端の張り出しは弱い。内外面ともに研磨調整である。619は口唇部上端を平坦に整え，内外面ともに研磨調整を施す。

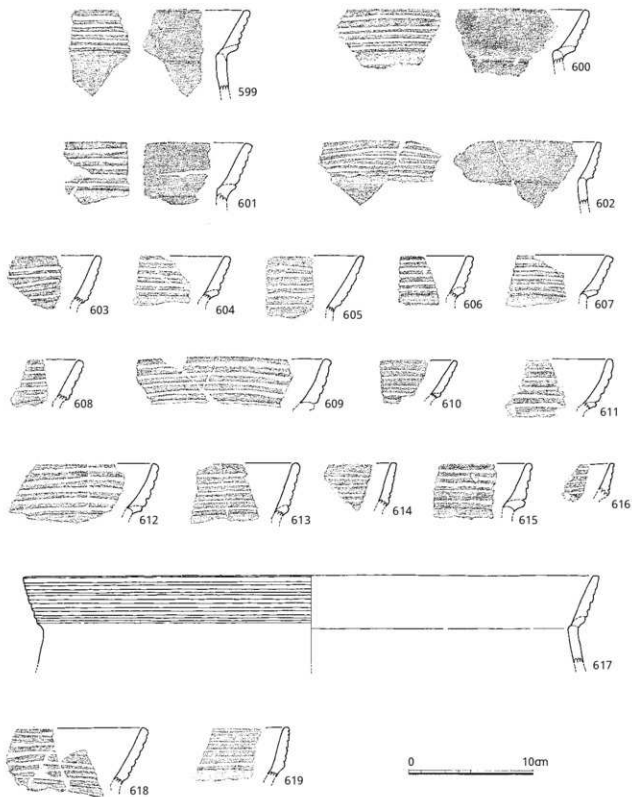
620～636は口縁部文様帯を持つが，文様帯には沈線を施さないものである。沈線を施すものに比べると研磨調整を施すものが少なく，ナデ調整を多用する傾向にある。

620は外傾する口縁部文様帯を持ち，復元口径は42.6cmを測る。外面調整は貝殻条痕の後ナデ，内面調整はナデである。621は口縁部文様帯を意識して製作するが，頸部と口縁部文様帯の明瞭な境はなく，緩やかに移り変わる。内外面ともにナデ調整である。622も頸部と口縁部文様帯の境が曖昧で，外面に緩やかな段を持つのみである。内外面ともにナデ調整である。623は外反する頸部に直立する口縁部文様帯が付く。比較的薄手の作りである。内外面の調整はナデである。624は直立する口縁部文様帯を持つ。内外面の調整は貝殻条痕の後なである。625は外傾する幅の広い口縁部文様帯の資料である。外面の調整は貝殻条痕の後にナデ，内面の調整はナデである。626は外面調整が貝殻条痕の後に研磨，内面調整が研磨である。627は外傾する口縁部文様帯の資料で，口唇部上端は平坦に整え，内外面ともに研磨調整を施す。外面には炭化物が付着する。628も外傾する口縁部文様帯で，口唇部上端を平坦に整える。内外面ともに研磨調整である。

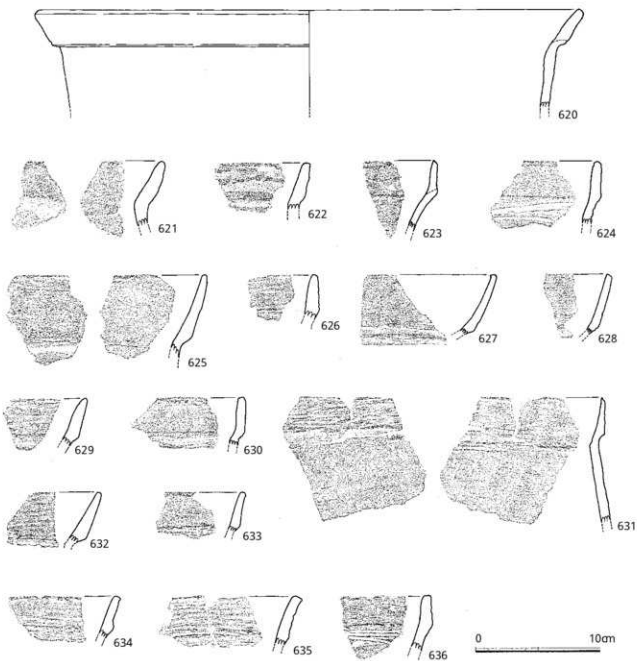
629は内外面の調整は，外面が貝殻条痕の後ナデ，内面がナデである。630は直立する口縁部文様帯で，外面の段は工具で横ナデして作り出す。内外面ともにナデ調整を施す。631は直線的に内傾する頸部に直立する口縁部文様帯が付く。口縁部文様帯下端の張り出しはしっかりしていて，内面には稜を作る。外面の調整は頸部が擦過の後ナデ，口縁部文様帯が貝殻条痕の後ナデ，内面調整は擦過の後ナデである。632は断面が先細りになる口縁部文様帯で，外傾する。口縁部文様帯下端の張り出しはしっかりしている。調整は，外面が貝殻条痕の後ナデ，内面がナデである。633はやや外傾し，外面調整は擦過の後ナデ，内面調整はナデである。634は外傾する口縁部文様帯で，内外面ともにナデ調整を施す。635は外傾する口縁部文様帯で，口唇部上端は平坦に整える。内外面の調整は外面が貝殻条痕の後ナデ，内面がナデである。636は直立する口縁部文様帯である。調整は内外面ともに貝殻条痕の後ナデである。



第88図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑧ (S = 1 / 3)



第89図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑨ (S = 1 / 3)

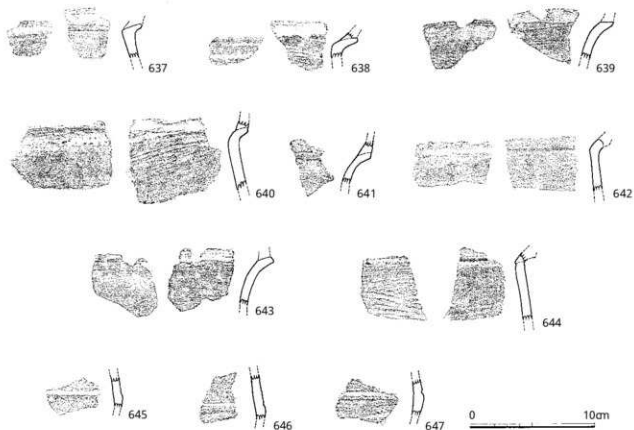


第90図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器④ (S = 1/3)

637～644は頸部の資料である。

639・641・643は頸部上端が外反して、口縁部へと至る。いずれも内外面ともに研磨調整である。637～640・642・644は頸部上端を一旦外側へ屈曲させ、内面には稜を作る。637の調整は内外面ともにナデである。638は内外面ともにナデである。640は外面が縦方向の研磨、内面が貝殻条痕の後ナデである。642は内外面ともにナデである。644の調整は外面が貝殻条痕の後研磨、内面がナデである。

645～647は胴屈曲部の資料である。いずれも屈曲部の直上に段を設ける。645の調整は外面が研磨、内面が貝殻条痕の後ナデである。646の調整は外面が研磨、内面がナデである。647の調整は外面が擦過の後研磨、内面がナデである。



第91図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器④(S = 1 / 3)

深鉢D類 (第92図～第94図)

648は外反して開く口縁部で、復元口径は32.7cmを測る。薄手の作りで、胎土は多量の小礫を含み、他に比べて粗い。外面は横方向の貝殻条痕調整、内面はナデ調整である。外面には炭化物が付着する。649は復元口径31.6cmを測る。薄手の作りで、胴部上位で一旦わずかにすぼまり口縁部はやや外傾して立ち上がる。調整は外面が貝殻条痕、内面はナデである。外面に炭化物が付着する。

650は外反する口縁部で、口唇部は先細りとなる。外面調整は横方向の貝殻条痕、内面調整は貝殻条痕の後ナデである。651はわずかに外反し、口唇部上端は平坦に整える。口唇部整形時の粘土が外側へはみ出す。調整は外面が横方向の貝殻条痕の後ナデ、内面調整がナデである。652はやや外反する口縁部である。内外面の調整はともに貝殻条痕の後ナデである。653の断面はゆるい「S」字状をなして立ち上がる。口唇部断面は先細りとなる。胴部のすぼまる部分には段を持つ。外面調整は貝殻条痕、内面調整は貝殻条痕の後ナデである。外面には炭化物が付着する。654はわずかに外傾する口縁部で、口唇部上端を平坦に整える。調整は、外面がナデの後研磨、内面が研磨である。外面には炭化物の付着が認められる。655は薄手の作りで、胎土は小礫を多量に含み、粗い。口唇部断面は先細りとなってやや外反する。内外面ともにナデ調整を施す。656も小礫を多量に含む粗い胎土である。薄手の作りで、口縁部は外傾し、口唇部上端は平坦に整える。内外面ともに調整は貝殻条痕の後ナデである。657は外反する口縁部である。外面調整は横方向の貝殻条痕で、口唇部から縦に指ナデして凹点を施す。内面調整はナデである。外面には炭化物が付着する。

658は外反する口縁部で、外面には段を作る。他に比べ器壁が厚い。調整は、外面が貝殻条痕の後ナデ、内面がナデである。659は外反する口縁部で、口唇部断面は先細りになる。調整は、外面が貝殻条痕の後ナデ、内面がナデで、外面には炭化物の付着が認められる。660は外反して強く開く。口唇部上端は平坦に整える。調整は、外面が横方向の貝殻条痕、内面がナデである。661は外傾する口縁部で、口唇部は平坦に整形する。外面には横方向の貝殻条痕調整を施す。内面調整は擦過の後ナデである。外面には炭化物が付着する。662は胴部の資料である。器壁の内外から焼成後の穿孔が施される。まず内面から途中まで穿孔し、その後外面から穿孔しているが、途中で穿孔位置のずれに気付いて位置を調整し、再度穿孔し直して貫通させている。調整は外面が擦過、内面が貝殻条痕の後ナデである。外面には炭化物が付着する。

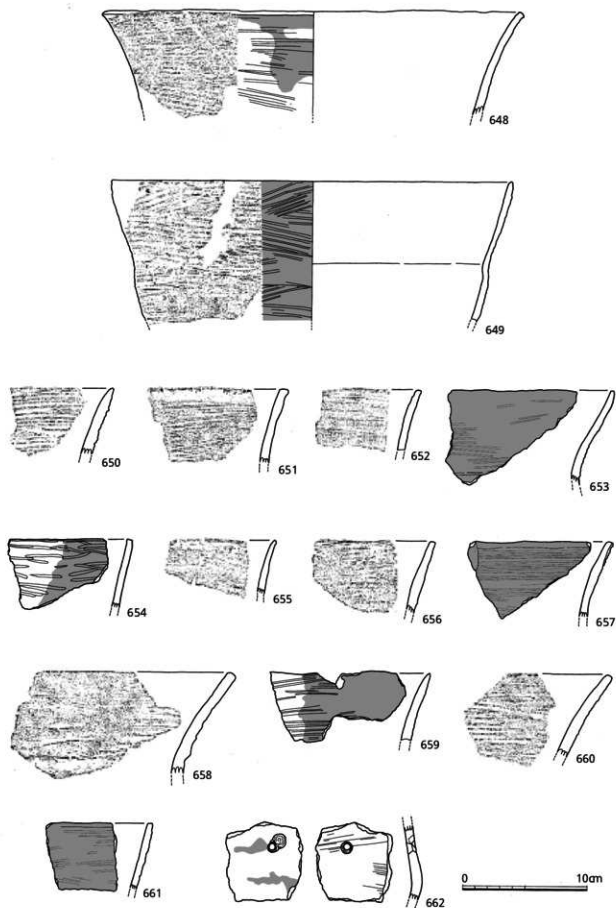
663～675は平行沈線や弧状沈線を施すものである。

663は外傾する口縁部で、弧状の沈線を施す。内外面ともに調整は貝殻条痕の後ナデである。664は外傾する口縁部で、平行沈線を引き、口唇部外端には凹点を施す。調整は外面が研磨、内面が貝殻条痕の後ナデである。665は3条の沈線が確認できる。内外面ともにナデ調整である。666は外反する口縁部で、外面は貝殻条痕調整の後平行沈線を引く。内面はナデ調整である。胎土は粗く、小礫を多く含む、器壁は他に比べ厚手である。667は外反する口縁部で、口唇部は整形時の粘土のはみ出しが外面に出る。内外面ともにナデ調整を施し、葉脈状に沈線を入れる。668は外面には貝殻条痕調整を施し、弧状の沈線を入れる。内面はナデ調整である。669は外傾する口縁部で、口唇部に凹点を施す。外面調整は貝殻条痕の後ナデで、葉脈状に沈線を入れる。内面調整はナデである。

670・671は同一個体の可能性がある。いずれも肩部の資料で、口縁部の方から斜方向で肩部へとのびる沈線が確認できる。調整は外面が横方向の貝殻条痕、内面が貝殻条痕の後ナデである。672は胴部が屈曲するだけで肩部を作らないものと思われる。外面が横方向の貝殻条痕調整、内面がナデ調整で、外面には斜方向に沈線が走る。673も明確な肩部は作らないが、胴部で一旦屈曲し、外反して口縁部へと続くようである。調整は外面が縦方向に、内面が横方向に擦過調整を施し、外面には平行沈線を入れる。674は胴部の資料で、肩部も屈曲部も持たない。薄手の作りで、胎土には小礫を多く含む。外面には口縁から伸びる斜方向の沈線が確認できる。外面調整は横方向の貝殻条痕、内面調整はナデである。675は外面が横方向の貝殻条痕調整、内面がナデ調整で、外面には弧状の沈線を入れる。

676～708は粘土紐や粘土塊の貼り付けを施すものである。

676は肩部と口縁部の境のすばまった部分に段を作り、蝶ネクタイ状の粘土塊を貼り付ける。外面は横方向の貝殻条痕調整、内面はナデ調整である。内外面ともに炭化物の付着が認められる。677は細い粘土紐を貼り付け、ヘラ状の工具で刻目を入れる。内外面ともにナデ調整である。678は肩部のすばまった部分に蝶ネクタイ状の貼り付けを施す。内外面ともにナデ調整である。679は肩部のすばまった部分に粘土紐を貼り付ける。ヘラ状工具による刻目を施す。内外面ともにナデ調整である。680は蝶ネクタイ状の貼り付けを行う。内外面ともに調整はナデである。681は胎土に小礫を多く含む、器壁は薄手の作りである。肩部の明瞭な作り出しはなく、屈曲部の直上に粘土塊を貼り付ける。調整は外面が横方向の貝殻条痕、内面が横方向の貝殻条痕の後ナデである。外面には炭化物が付着する。682は小さめの粘土塊を貼り付ける。内外面の調整はともにナデである。683は肩部に粘土紐を貼り付け、ヘラ状工具で押し引いて刻目を施す。粘土紐の直上には沈線を引く。内外面ともにナデ調整であ

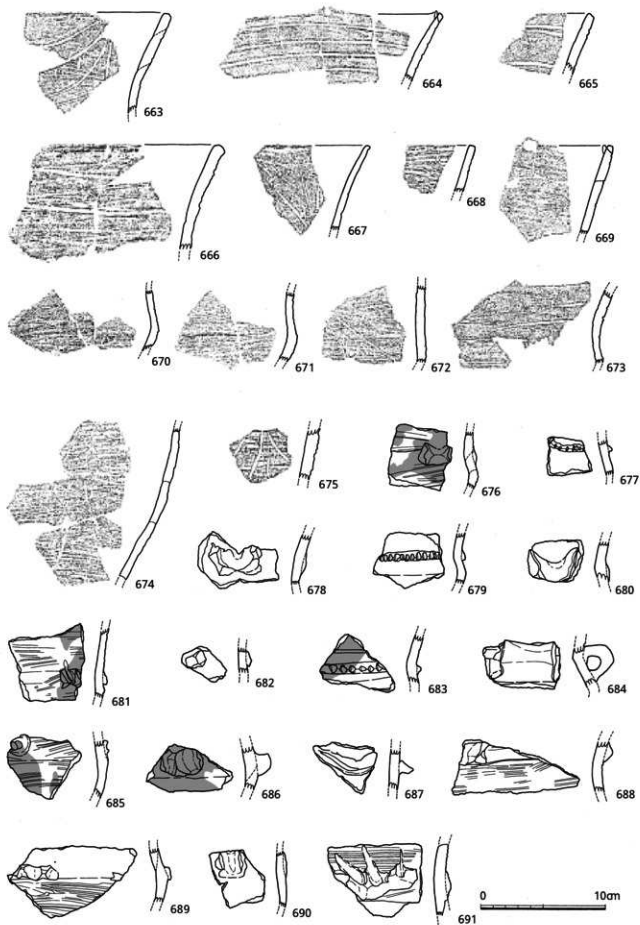


第92図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器④ (S = 1/3)

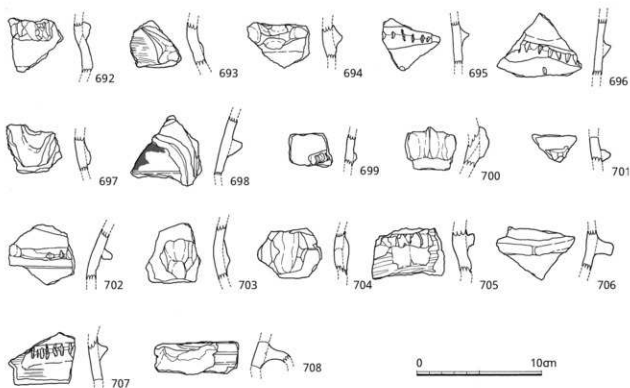
る。外面には炭化物が付着する。684は肩部に板状の粘土を丸めて筒状に貼り付ける。内外面ともにナデ調整を施す。685は小礫を多量に含む特徴的な胎土である。肩部に粘土塊を貼り付ける。外面調整は横方向の貝殻条痕、内面調整はナデである。外面には炭化物が付着する。686は肩部に粘土塊を貼り付ける。3つの突出部を持ち、蝶ネクタイ状貼り付けの亜種であろう。内外面ともにナデ調整で、外面には炭化物が付着する。外面には炭化物が付着する。687は粘土紐を緩く曲げて貼り付ける。内外面ともにナデ調整である。688は肩部と口縁部の境にわずかな段を作り、その直上に左側を欠損するが蝶ネクタイ状の貼り付けを施す。内外面ともに調整は貝殻条痕の後ナデである。689は肩部に粘土紐を指で押し付けて貼り付ける。調整は外面が後部は横方向の貝殻条痕、肩部はナデで、内面は貝殻条痕の後ナデである。690はやや小さめの蝶ネクタイ状の貼り付けを行う。内外面ともにナデ調整で、外面にはわずかに炭化物が付着する。691は粘土紐を指先でなで付けるようにして貼り付ける。外面は横方向の貝殻条痕調整、内面はナデ調整である。

692は肩部のすばまる部分に粘土塊を貼り付ける。調整は外面がナデ、内面は貝殻条痕の後ナデである。693は蝶ネクタイ状の貼り付けを行う。右側は欠損する。外面は横方向の貝殻条痕調整、内面はナデ調整である。694は肩部に粘土紐の上下左右を指押さえて貼り付ける。内外面ともに調整はナデである。695は粘土紐を貼り付け、ヘラ状の工具で刻目を付ける。内外面ともに調整はナデである。696も粘土紐を貼り付け、ヘラ状の工具による刻目を施す。調整は、外面が貝殻条痕の後ナデ、内面が擦過の後ナデである。外面にはモミ圧痕が残る。697は肩部に蝶ネクタイ状の貼り付けを付す。内外面ともに調整はナデである。698は段を作り、それにまたがって粘土紐を貼り付ける。内外面ともにナデ調整で、外面には縦方向と斜方向にのびる沈線がわずかに確認される。外面には炭化物が付着する。699は粘土紐を貼り付け、半裁竹管状の工具で刻目を施す。内外面ともにナデ調整である。700は蝶ネクタイ状貼り付けの亜種と思われる、3つの突起部分を持つ。内外面ともにナデ調整である。701は小さめの粘土塊を貼り付ける。内外面ともにナデ調整である。

702は段を持ち、その直上に粘土紐を貼り付ける。粘土紐は両端を指押さえて貼り付け、浅い刻目を入れる。刻目は爪によるものか。内外面の調整はナデである。703・704は蝶ネクタイ状の貼り付けを施す。いずれも内外面ともにナデ調整を施す。705は肩部に粘土紐の左右両端と下部を板状工具によりなで付けており、工具により刻目を施す。調整は外面が貝殻条痕、内面がナデである。胎土に小礫を多量に含む。706は粘土紐を三角形に整えて貼り付ける。内外面ともにナデ調整である。707は粘土紐を貼り付け、ヘラ状工具による刻目を施す。外面調整は貝殻条痕の後ナデ、内面調整はナデである。708は欠損するが、筒状の貼り付けになるものと思われる。外面には沈線が確認でき、内外面ともに調整はナデである。



第93図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器④ (S = 1/3)



第94図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器44 (S = 1/3)

深鉢E類 (第95図～第105図)

709～767は指による刻目を施した資料である。

709は口縁部下と胴部にそれぞれ刻目突帯を付ける。非常に大型で復元口径は43.1cm, 復元胴部最大径は47.2cmを測る。口縁部・胴部とも大振りの指刻みで、爪痕を明確に残す。口縁部の突帯は口唇部から0.7cm下がった位置に付ける。口縁部突帯と胴部突帯の間の外面には炭化物の付着が認められる。内外面の調整は、いずれも横方向の貝殻条痕であるが、軽くなで消している。710は胴部のみ刻目突帯を施す。突帯部分の屈曲は緩やかで、口縁部は内傾する。復元口径は24.1cm, 復元胴部最大径は26.8cmである。外面は胴部突帯より下位では貝殻条痕を残し、炭化物の付着が認められる。胴部突帯より上位では貝殻条痕調整をなで消している。内面は貝殻条痕後、ナデ調整である。711は復元口径が26.7cm, 復元胴部最大径が29.8cmで、胴部のみ刻目突帯を施す。口縁部はわずかに内傾する。外面の調整は貝殻条痕の後ナデ、内面の調整は丁寧なナデである。712も710・711と同様に胴部のみ刻目突帯を施す。復元口径は19.1cm, 復元胴部最大径は22.1cmである。口縁部は内傾する。内外面とも貝殻条痕調整を施すが、内面はその後になで消す。胴屈曲部内面には明瞭に粘土紐の跡を残す。

713と714は口縁部と胴部にそれぞれ刻目突帯を施した資料であるが、同一個体である。やや高く貼り付けた突帯を中ほどまで指で押し付ける。口縁部突帯については、口唇部から1.0cm下がった位置に貼り付け、刻目を施した後、突帯の下側を横方向になで付けて整形する。外面調整は胴部突帯より下位は貝殻条痕を残すが、胴部突帯より上位は丁寧になで消している。内面はナデ調整である。714は外面に炭化物が付着する。715は口縁部と胴部にそれぞれ指刻みの刻目突帯を施す。口縁部突帯は口唇部からやや離れて1.2cmの位置に貼り付ける。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面が擦過の後

ナデである。716は胴部にのみ刻目突帯を付ける。口縁部には突帯は貼り付けず、口唇部外端を肥厚させる。器壁はやや薄い。外面の調整は、胴部突帯より上位は擦過の後なであるが、胴部突帯より下位はなで消さずそのまま擦過調整を残す。内面の調整はナデである。717は口縁部・胴部にそれぞれ刻目突帯を持つ。口唇部は欠くが、口唇部と口縁部突帯の間はやや離れるであろう。内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。

718～746は口縁部に指による刻目を施した突帯を持つ資料である。

718は口唇部から1.0cmの位置に突帯を貼り付ける。内面は擦過調整を残すが、外面は丁寧になで消している。719は口唇部から0.3cmの位置に突帯を貼り付ける。内面は横方向の貝殻条痕を残すが、外面は丁寧になで消す。720は太目の突帯に指による大振りの刻目を施す。口唇部から突帯までは0.9cmを測る。口唇外端部にははっきりと稜を作る。内面はナデ調整を施す。721は口唇部から突帯までの間が1.6cmと他に比べ幅が広い。外面は擦過調整、内面は貝殻条痕の後なでている。また、突帯上に施された刻目と刻目の間は1.1cmであり、やや間隔が広い。722は口唇部から突帯まで0.6cmを測る。内外面の調整は、内面が貝殻条痕の後ナデ、外面は器面の荒れが強いが、貝殻条痕が残るようである。器壁はやや薄手である。

723は口唇部外端に直接刻目を施す。調整は外面が貝殻条痕、内面が擦過である。724はやや内傾し、口唇部外端は肥厚させて段を作る。口唇部上端に直接刻目を施す。調整は外面が貝殻条痕、内面が擦過である。

725は屈曲することなく口縁部まで立ち上がり砲弾形を呈すると考えられる。口唇部から突帯までは0.7cmを測り、突帯は親指と人差指とでつまむようにして刻目状にしてあり、上下二つの窪みが対になって連続する。内外面は貝殻条痕調整を行い、内面はその後軽くなる。外面には炭化物の付着が著しい。AMS測定資料。726も胴上部で屈曲することなく立ち上がる資料である。細めの突帯を貼り付けてあり、刻目もやや小ぶりである。口唇部から突帯までの間隔は0.9cmである。口唇部は上端をなで付けて平縁にする。器壁は薄手である。調整は内外面ともに貝殻条痕の後ナデである。外面には炭化物が付着する。AMS測定資料。727はわずかに外反して内傾する。内外面ともに丁寧なナデ調整するが、内面は貝殻条痕の痕跡が残る。口唇部から突帯までは0.6cmである。728は口唇部から突帯までが1.5cmとやや離れた位置に貼り付ける。外面は擦過調整、内面はナデ調整である。

729は口唇部から突帯までが1.2cmを測る。突帯はやや細めの粘土紐を貼り付けるが、上方からのみ横ナデしているため突帯の断面は下向きである。刻目は小振りである。内外面ともにナデ調整を行う。730は焼成が甘く器面の状態がやや良くないが、内外面ともに丁寧なナデ調整を施している。刻目は、突帯を貼り付けることなく口唇外端部をつまみ出すように整形し、直接指で刻む。731は口唇部から0.3cmの位置に突帯を貼り付ける。突帯は細めで、刻目も小さい。外面は丁寧なナデ調整を、内面は擦過調整を施す。732は器面の状態が良くないが、口縁部断面は先細りになって外反する。口唇部から突帯までは0.8cmを測る。調整は内外面ともにナデである。733は内外面ともに貝殻条痕調整を施し、その後なでがナデは甘く、粗野な印象を受ける。突帯は口唇部から1.2cmの位置にある。外面には突帯の下部に炭化物の付着が認められる。734は口唇部から0.9cm下がった位置に突帯を貼り付ける。大振りの刻みである。内面調整はナデである。735は口縁部断面が先細りとなり外反する。口唇部から突帯までは0.7cmあり、突帯の刻目は右上へ向かって刻んでいる。内外面ともにナデ調整である。

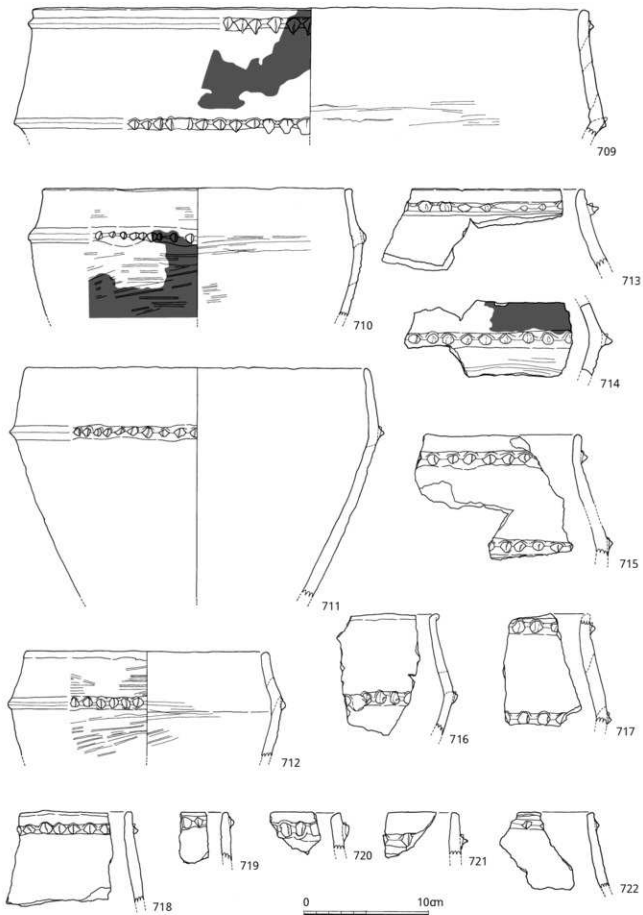
736はやや器面が荒れるが内外面ともにナデ調整を施すようである。外面には貝殻条痕調整の痕跡が残る。口唇部から突帯までは0.4cmを測る。737は口縁部から1.2cm下がった位置に突帯を貼り付ける。突帯は上方からのみ横ナデする。内外面ともにナデ調整である。738は突帯を口唇部から0.4cmの位置に貼り付ける。刻目は指で横方向に押し引くようにして施す。内外面とも丁寧なナデ調整である。

739は太目の突帯を持つ資料で、刻目も大振りである。口唇部から突帯までは0.5cmを測る。内面の調整はナデ、外面は擦過調整である。外面には炭化物が付着する。740は口唇部が外反する。口唇部から0.8cmの位置に突帯を貼り付ける。比較的薄手で、内外面ともにナデ調整を施す。741は口唇部と突帯の間が0.8cmを測る。内外面ともに黒褐色を呈する。内面はナデ調整である。742は口唇部から突帯までは0.6cmの間隔を持って貼り付ける。内外面ともに比較的丁寧なナデ調整を施す。743は口唇部と突帯の間隔は0.3cmを測る。内外面ともにナデ調整を施す。744は、突帯は口唇部から0.6cm下がった位置に貼り付け、大振りの刻目を施す。内面はナデ調整である。外面に炭化物の付着がある。745は口唇部断面が先細りになる資料で、突帯は口唇部から0.5cm下がった位置に貼り付ける。内外面ともナデ調整を施す。746は口唇部が外反する。突帯の位置は口唇部から0.6cm下がったところである。外面は擦過の後なであるが、内面は横方向の擦過調整をそのまま残す。747は口唇部外端に段を作り、直接刻目を施す。内外面の調整は擦過である。

748～767は胴部に指による刻目を施した突帯を持つ資料である。

748は突帯を貼り付ける際の粘土紐の継ぎ目が残る。外面調整は擦過、内面調整はナデである。749はあまり高くない突帯に深く刻目を入れる。内外面ともにナデ調整である。750は比較的強く屈曲する胴部の資料で、突帯より下の部分にモミ圧痕が確認できる。突帯は深く刻まれる。外面には貝殻条痕調整を明瞭に残し、内面は貝殻条痕調整の後ナデ調整を施す。外面には炭化物が付着する。751は大振りの刻目を施す。外面は擦過調整、内面はナデ調整である。752は、屈曲は強くないが、刻目は刻む方向が一定せず粗い印象を受ける。外面はナデ調整、内面は擦過調整である。753は小振りの土器で、胴部突帯の資料であるが、内外面ともに丁寧なナデ調整を行う。754は内外面ともにナデ調整を施す。755は大振りの刻目を施す。突帯の下部には炭化物の付着が認められる。内外面の調整は、外面が擦過、内面が貝殻条痕の後まで消している。756はしっかりと屈曲する。調整は外面がナデ、内面が擦過の後ナデである。

757は、屈曲は強くない突帯に深く刻目を施す。一部では刻目を施した後突帯の上側をなでて整形している。内外面ともにナデ調整である。突帯より下位には炭化物の付着がある。758は胴部突帯から口縁部突帯の直下までの資料である。外面はナデ調整を行うが、内面には擦過調整が残る。759はあまり屈曲は強くない。内外面ともにナデ調整を行うが、外面は指による掻き取るようなナデ調整の痕跡が横方向の筋となって残る。760は屈曲の強い胴部の資料である。突帯は比較的細い。内外面ともにナデ調整を行う。761は突帯を上方へ押し上げるように刻目を施す。外面には貝殻条痕が残る。内面はナデ調整である。762は比較的大きな胴部の資料で、やや屈曲し、外面には擦過調整、内面には貝殻条痕調整の後ナデ調整を施す。外面には炭化物が付着する。763は強めに屈曲する資料で、内外面ともにナデ調整である。突帯より上位に炭化物が付着する。764はやや高めの突帯を貼り付ける。屈曲はあまりない。外面は器面を掻き取るように指ナデした痕跡が残り、内面はナデ調整を施す。765は屈曲部に直接刻目を施す。外面の調整は横方向の貝殻条痕を残し、内面は貝殻条痕調整の後なでて



第95図 縄文時代後期一弥生時代前期の土器49 (S = 1/3)

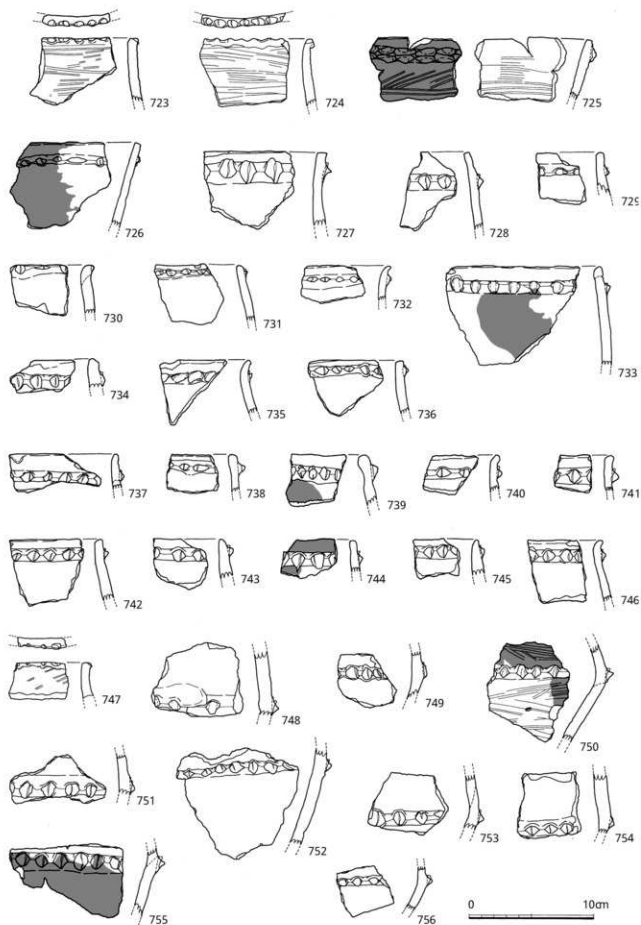
いる。他に比べ器壁は薄手で、色調も明赤褐色を呈し、特徴的である。766は強く屈曲し、内外面ともに軽くなでているが貝殻条痕が残る。767は丁寧な内外面ともにナデ調整した資料である。突帯は横方向に長めの刻目を施しており、特徴的である。

768～828は棒状工具の側面を突帯に押し当てるか引き上げるようにして刻目を施した資料である。

768は復元口径が24.9cm、胴部突帯部分の復元径が26.7cmになる。屈曲はほとんどせず胴部突帯から口縁部へは直立する。口縁部突帯は口唇部から0.3cmの位置に貼り付けている。外面の調整は胴部突帯より下位は擦過、胴部突帯より上位は擦過調整の後なで消している。内面は擦過調整の後ナデ調整を行う。外面にはわずかに炭化物が付着する。769は復元口径が37.0cm、胴部突帯での復元径が40.3cmになる大きめの土器である。口唇部は欠損するが、口縁部突帯は口唇部直下に付けられたものと思われる。胴部の屈曲は比較的緩やかで、胴部突帯から口縁部へはわずかに内傾して立ち上がる。胴部の刻目は棒状工具によるものである。口縁部の刻目は残存部分が少ないため判然としないが、へら状工具によるものであろう。内外面は約1.7cm幅の擦過調整の跡を残すが、突帯より上部についてはなで消している。口唇部から約2.3cmの位置に焼成後に穿たれた穿孔がある。

770は復元口径が14.4cmになる小振りの土器である。胴部突帯での復元径は15.6cmを測る。屈曲はゆるい。突帯は胴部にのみ貼り付け、突帯断面は三角ではなくかまぼこ状を呈する。内外面ともにナデ調整を施す。771は口縁部突帯を口唇部から0.4cmの位置に貼り付ける。外面は丁寧にナデ調整を行うが、内面は擦過痕が残る。772は口縁部と胴部それぞれ突帯を持つが、胴部では屈曲することなくそのまま緩やかに内湾しながら立ち上がる。口縁部突帯は口唇部から0.6cm下がった位置に貼り付ける。他に比べ立ち上がりが開き気味で、鉢形を呈するかもしれない。内外面ともにナデ調整を行う。

773は細めの突帯を口縁部と胴部に貼り付け、器壁に達するまで深く刻目を入れる。口縁部突帯は口唇部から0.5cmの位置である。内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。774は口唇部から2.6cm下がったところに突帯を施す。口縁部突帯がこれほど下がった位置に貼り付ける例は他にないため、一応胴部突帯と捉えておきたい。突帯は太めで刻目もしっかりと付けている。内外面ともにやや粗めのナデ調整である。外面には炭化物の付着がある。775～778は突帯間の幅も狭く、小振りの土器である。775は口縁部突帯は口唇部から0.4cmの位置に施し、外面はナデ調整を、内面は擦過調整を施す。776は、口縁部突帯を口唇部に接して貼り付けている。棒状の原体側面を押し当て上へと引き上げているが、他の棒状原体とは違い刻目内が荒れており、半裁した原体などで施したものか。内外面ともにナデ調整を施す。胴部突帯については刻目施工後に突帯の下側を横ナデして整えている。外面には炭化物が付着する。777は内外の色調が橙色で他に比べて明るく、特徴的である。口縁部の突帯は口唇部に接している。内外面ともに擦過調整の後ナデ調整である。778は口唇部から0.3cmの位置に突帯を施す。内外面ともにナデ調整を施す。779は薄手の器壁を持ち、口唇部は外反して先細りとなる。口縁部突帯、胴部突帯ともにやや細めで、口縁部突帯は口唇部から0.8cmの位置である。内外面は貝殻条痕が残るが、その上から一部ではあるが、器壁とは別の胎土が確認でき、化粧土的なものである可能性がある。780は口唇部から1.6cmと比較的下がった位置に口縁部突帯を貼り付ける。突帯はやや太めで、突帯より下位に炭化物の付着が見られる。内外面ともに擦過調整である。781も口唇部から0.9cmと他に比べ下がった位置に口縁部突帯を貼り付ける。突帯下部は器面まで刻目が及び、器壁はやや薄手で、内外面ともにナデ調整を行うがやや粗く、内面には貝殻条痕が残る。

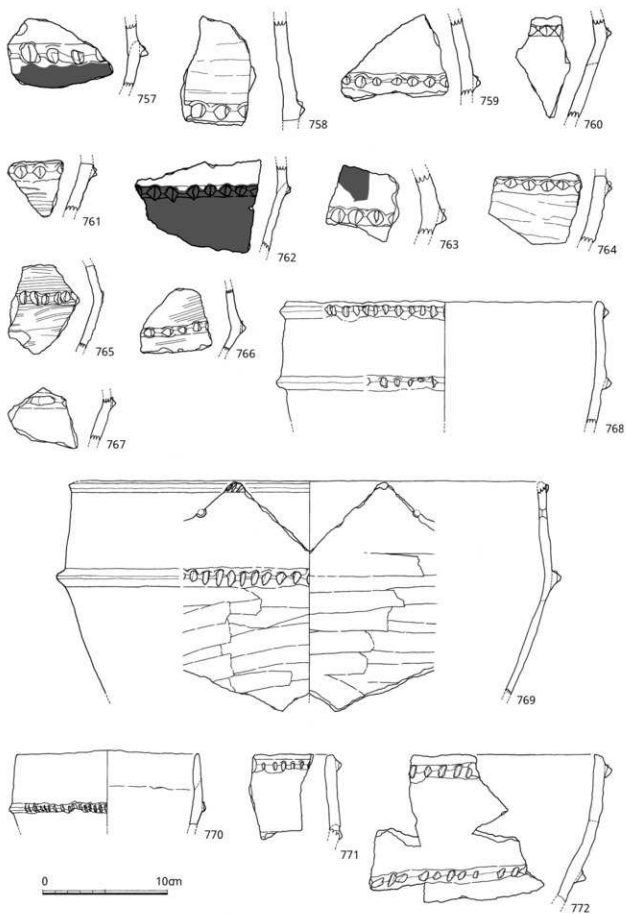


第96図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器④ (S = 1/3)

782は口唇部から0.9cm下がった位置に口縁部突帯を貼り付ける。一応棒状工具による刻目と判断したが、指頭によるものかもしれない。口唇部上端からなでて整える。内面はナデ調整である。783は内外面ナデ調整を施し、突帯は口唇部から0.4cm下がったところに貼り付ける。突帯は太さの割に高さがある。口唇部上端はなでて整えている。784は口唇部から口縁部突帯まで0.3cmを測る。内外面ともにナデ調整を施すが、さほど丁寧ではない。外面には炭化物が付着する。785は口唇部外端が外側へつまみ出したように張り出す。上端はなでて整える。口縁部突帯は口唇部から0.8cm下がった位置に貼り付ける。刻目は棒状工具の先端側面を突帯の下から上へ押し当てるようにして施している。内外面ともに貝殻条痕の痕跡が残るが、後からナデ調整を施している。特に外面のナデは丁寧である。786は口唇部がわずかに外反する。突帯は口唇部からわずかに下がった0.4cmの位置に貼り付ける。内外面ともに貝殻条痕調整の後、なでる。787は全体に磨耗が進み器面の調整は観察できないが、焼成は非常に良い。突帯は口唇部に接して貼り付けている。788は口唇部と口縁部突帯との間が0.7cmを測る。内外面ともにナデ調整を行うが、特に外面の調整は丁寧である。外面に炭化物の付着がある。

789は口唇部と口縁部突帯はほとんど離れておらず、0.3cmを測る。外面はナデ調整、内面は擦過調整の後ナデ調整を施す。790は焼成不良で器面が脆い。口縁部突帯は口唇部から0.8cmとやや下がった位置に貼り付け、突帯・刻目はさほど太くはないが、刻目は器面に届くほど深めに施す。内面調整はナデである。791は器壁はやや薄く、790と同様に焼成が良くない。口縁部突帯は口唇部から0.6cmの位置で、突帯が高くないため刻目は器面に達する。調整は内外面ともに擦過を施すが、内面はその後なでる。792はしっかりとした太目の突帯を口唇部から0.8cmの位置に貼り付け、刻みも強く押さえ上方へ引き上げている。突帯の下には刻目を施す際の痕跡が器面にも残る。内外面ともにナデ調整を施すが、外面のほうがより丁寧である。793は口唇部と口縁部突帯の間が0.4cmを測る。刻目は突帯の下端から下向きに施される。内外面の調整はともにナデであるが、外面には貝殻条痕が残る。794は口縁部が強くと外反し、口唇部は先細りとなる。口縁部突帯は口唇部から0.4cm下がった位置への貼り付けで、突帯は細めで刻目も小さく且つ小刻みである。内外面ともに擦過調整の後、ナデ調整を施す。795はやや内傾し、口縁部突帯を口唇部から1.0cmの位置に貼り付ける。内外面ともにナデ調整を施す。796はやや幅広の突帯を貼り付け、口唇部からは0.3cm下がっている。内面は擦過調整を施す。797は比較的薄手で、口縁部突帯は口唇部に接している。突帯・刻目の幅はともに細めである。内面はナデ調整を施すが、外面は縦方向の擦過調整である。798はわずかに内傾する口縁部で、やや外反する。口縁部突帯は口唇部から0.4cm下がっており、内外面ともに丁寧なナデ調整を行う。また口唇部上端をナデ調整している。799は口縁部突帯が比較的口唇部から下がり貼り付けており、1.0cmを測る。刻目の施文は強く押さえるため突帯の下部は器面にまで痕跡が残る。調整は外面がナデ、内面が擦過である。800は口唇部から0.3cmの位置に口縁部突帯を貼り付ける。内外面ともにナデ調整を施す。801はやや外反する口縁部で、口唇部上端はなでている。口唇部から口縁部突帯までは0.4cmを測る。内外面ともにナデ調整を施す。802は全体に磨耗が激しく内外面の調整ははっきりしない。口縁部突帯は口唇部から0.3cm下がっている。

803は比較的薄手で、外面には炭化物の付着が認められる。胴部上位での屈曲はないものと思われる。口縁部突帯は口唇部に接しており、突帯の貼り付け方はやや粗い。外面は貝殻条痕調整、内面は擦過調整である。804は口縁部突帯と口唇部との間は0.5cmを測る。突帯に施された刻目は斜め方向に



第97図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑦ (S = 1/3)

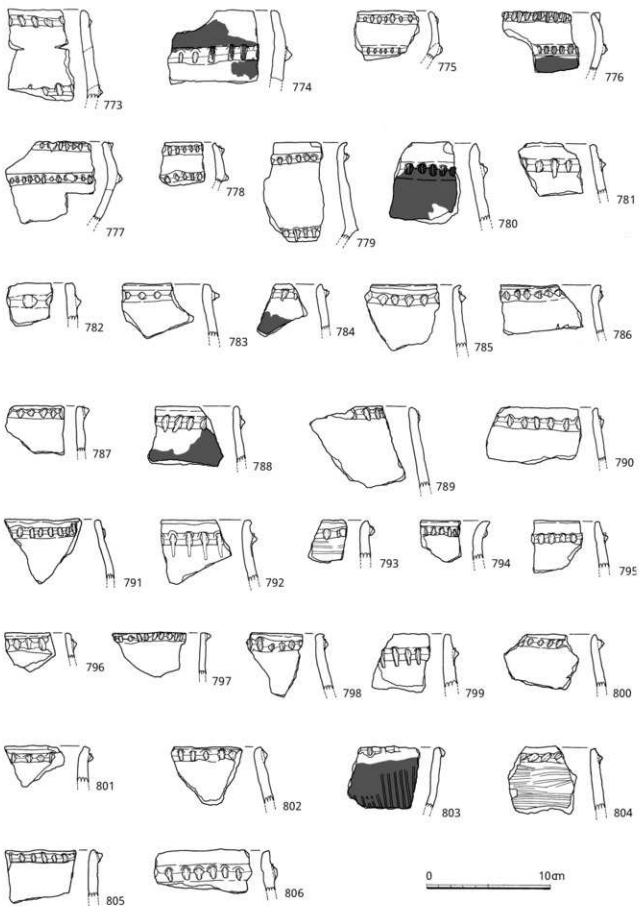
刻んでいる。内面はなでているが、外面には貝殻条痕が残る。805は口縁部突帯と口唇部との間が0.3 cmと非常に近寄っている。内外面擦過調整を施すが、外面は突帯を貼り付け、刻目を施した後に調整するため、突帯の下部に段が付き整えたようになる。806は口唇部から突帯までの間が1.0 cmと広めである。突帯は比較的幅広で、太目の原体によって刻んでいる。内外面ともに擦過調整を施すが、内面はその後なでている。

807～828は胴部突帯を持つ資料である。807の調整は外面が擦過、内面が擦過の後ナデである。緩やかな屈曲である。808も屈曲する胴部で、調整は内外面ともにナデである。突帯より上位に炭化物の付着がわずかながらある。809は高めの突帯を貼り付けており、中程まで刻目を入れている。内外面には貝殻条痕を残し、外面には炭化物の付着が認められる。810は刻目が突帯下の器面まで及ぶ。内外面ともにナデ調整である。811は突帯部分で屈曲せず、内外面ともにナデ調整を施す。812も屈曲しない胴部突帯の資料で、内外面ともに擦過調整である。外面には炭化物の付着が認められる。813は厚手の器壁で、太目の突帯が付く。調整は外面がナデ、内面は擦過の後ナデである。814は比較的大きな胴部の資料で、上端にわずかだけ突帯が残る。外面は擦過調整の後軽くなでており、内面は貝殻条痕調整の後なでている。外面には炭化物が付着する。815は内外面に貝殻条痕が残り、突帯部分で屈曲する。外面には炭化物の付着が認められる。816はしっかりと屈曲する資料で、内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。817は突帯部分で屈曲せず、器壁はやや厚手である。外面は擦過調整の後ナデ調整、内面は貝殻条痕調整の後ナデ調整である。818は胴部突帯から下位の資料で、胴部突帯部分での復元径が39.8 cmを測る。内外面ともにナデ調整であるが、外面は器面の粘土を掻き取るような粗い指ナデである。外面には炭化物が付着する。

819は突帯を貼り付けるのではなく、屈曲部から上位は粘土紐を内面側に積み上げるようにし、外側へせり出した部分に直接刻目を付ける。内面は貝殻条痕を残すが、外面はナデ調整を施す。820は内外面ともにナデ調整を施す。821は器壁は薄く、胴部突帯部分での屈曲はない。突帯の貼り付けは下側が不十分であり、刻目は非常に浅い。内外面ともにナデ調整である。822は胴部突帯部分でしっかりと屈曲する。突帯は細めである。外面調整は貝殻条痕を残し、内面はナデ調整を行う。823は821同様胴部突帯部分での屈曲はなく、器壁も薄く、刻目は非常に浅い。突帯の下側で貼り付けが不十分などところがある。内外面ともにナデ調整である。824は突帯部分で屈曲し、やや斜め方向に刻目を並べる。内外面ともに擦過調整である。825は胴部突帯部分での屈曲がない。突帯は太く高さもあり、突帯の中程まで刻目を施す。外面はなでるが、内面には貝殻条痕を残す。826は、屈曲はほとんどないものと思われ、薄手である。内面には擦過調整が残るが、外面はなでている。刻目はしっかりと深く刻む。827は厚手でしっかりとした屈曲を持つ。内外面ともになでている。828もしっかりとした屈曲を持つが、器壁は比較的薄手である。内外面ともにナデ調整である。

829～926はヘラ状工具による刻目を施した資料である。

829は口縁部と胴部に刻目突帯を施す。復元口径が33.2 cm、胴部突帯部分での復元径が38.4 cmを測る。胴部突帯部分でははっきりとした屈曲は持たず、緩やかに湾曲する胴部の最も径が大きくなった部分へ胴部突帯を貼り付ける。口縁部突帯は口唇部に接して貼り付けているが、部分的に0.4 cmほど離れている部分もある。内外面ともに擦過調整後ナデ調整を施す。外面には炭化物の付着が認められる。830は口縁部と胴部にそれぞれ刻目突帯を持ち、復元口径が37.4 cm、胴部突帯部分での復元径が



第98図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器④ (S = 1/3)

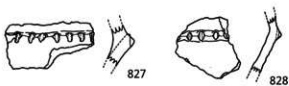
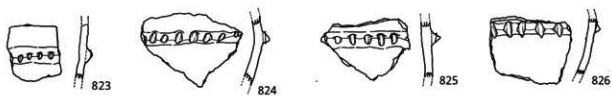
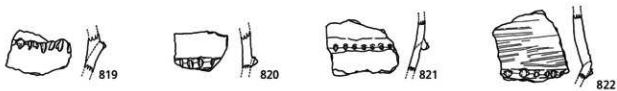
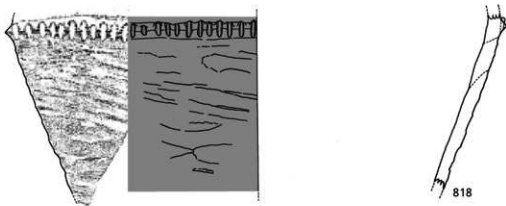
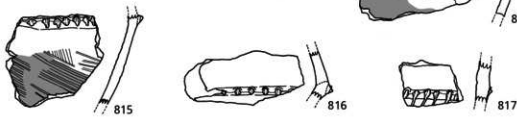
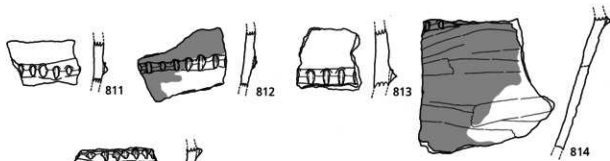
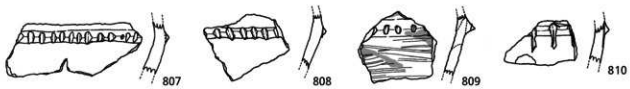
40.5cmである。突帯は胴部のほうがやや太く、口縁部突帯は口唇部に接している。外面は丁寧なナデ調整を施し、内面は擦過調整を施すが、口縁部の内面4.8cmほどはなで消している。

831は口縁部と胴部にそれぞれ刻目突帯を持ち、復元口径が21.4cm、胴部突帯部分での復元径が26.1cmを測る。胴部はしっかりと屈曲し、口縁部は内傾する。口縁部突帯は口唇部から0.5cm下がった位置に貼り付ける。調整は内外面ともに擦過の後ナデである。832は復元口径21.6cm、胴部突帯部分での復元径が26.2cmになる。胴部突帯部分では大きく湾曲し、口縁部突帯は口唇部から0.3cmの位置に貼り付け、接近している。調整は、内面は擦過、外面は擦過を施すが胴部突帯より上位についてはそれをなで消している。胴部突帯より下位に炭化物の付着がある。833は復元口径25.1cm、胴部突帯部分での復元径が28.0cmを測る。屈曲はしっかりといて、口縁部は内傾する。口縁部突帯は口唇部に近接していて、下がった部分でも0.4cmである。口縁部と胴部の両突帯は他の資料に比べると太さが一定せず、雑な印象を受ける。胴部突帯については外面のナデ調整の際に同時に突帯までなでているため、刻目がつぶれる。内面の調整は擦過の後軽くなでている。

834は比較的薄手の器壁で、復元口径は21.5cm、胴部突帯部分での復元径は24.9cmを測る。屈曲はしっかりといて、口縁部は直線的に内傾する。口唇部は上端と外端をつまみ出すようにしてなで、外側へせり出させる。突帯はいずれも細く、口縁部突帯は口唇部から0.4cm下がった位置に貼り付ける。調整は内外面ともに貝殻条痕の後ナデである。外面には炭化物が付着する。835は復元口径21.9cm、胴部突帯部分での復元径23.3cmを測る。口唇部を外側へつまみ出し直接刻目を入れ、胴部には細めの突帯を貼り付け刻目を入れる。器高はさほど高くならないものと思われ、鉢形を呈するであろう。内外面ともにナデ調整を施すが、特に外面は丁寧である。外面には炭化物の付着が認められる。836は復元口径21.4cm、胴部突帯部分での復元径24.3cmを測り、胴部にのみ細めの突帯を貼り付ける。口縁部はわずかに内傾し、断面は口唇部に行くにしたがって細くなり、外端部はつまみ出してそれをなで付けることにより段を形成する。器壁は薄手で、内外面ともに擦過調整を施すが、その後軽くなでる。外面には炭化物が付着する。837は復元口径11.3cm、胴部突帯部分での復元径12.6cmの小型品で、器壁は非常に薄い。突帯は胴部のみで口縁部には持たない。外面の調整はナデ、内面は擦過の後ナデである。838は小振りの資料で、口縁部突帯は口唇部から0.3cmの位置に貼り付ける。胴部には直接刻目を施す。内外面ともに丁寧なナデ調整で、外面には炭化物が付着する。

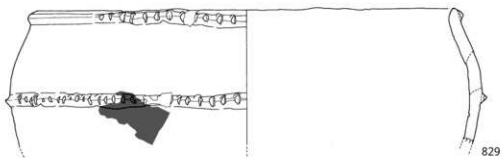
839は胴部突帯部分でしっかりと屈曲し、口縁部は内傾する。口縁部突帯は口唇部から0.3cm下がる。内外面とも擦過調整を施すが、外面はその後軽くなでる。胴部突帯より上位に炭化物が付着する。840は835同様胴部には突帯を持つが、口縁部は突帯を貼り付けず直接口唇部に刻目を施す。内外面ともに丁寧なナデ調整を施し、外面にはわずかに炭化物の付着が認められる。841は口縁部突帯を口唇部から0.5cmの位置に貼り付ける。器壁は薄く、内外面ともにナデ調整である。842は口唇部を外側へつまみ出し直接刻目を入れ、胴部には突帯を貼り付ける。器壁は薄手である。内外面ともに貝殻条痕の後なでるが、外面は横方向の貝殻条痕がはっきりと残る。外面には炭化物が付着する。胎土・焼成が836と非常に似る。

843は残存器高が26.7cm、底径が7.8cm、胴部突帯部分での復元径が23.4cmを測る。断面が張り出す底部はごくわずかに上底となり、胴部は直線的に開いて立ち上がり、胴部突帯部分で屈曲して口縁部はわずかに内傾する。屈曲部に貼り付ける胴部突帯は上側では丁寧になで付けるが、下側では不十分

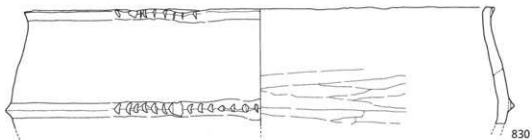


0 10cm

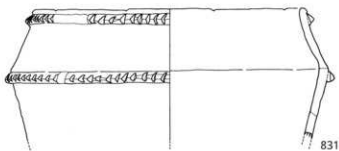
第99図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑨ (S = 1/3)



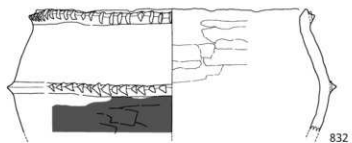
829



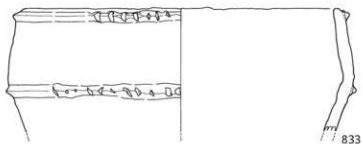
830



831



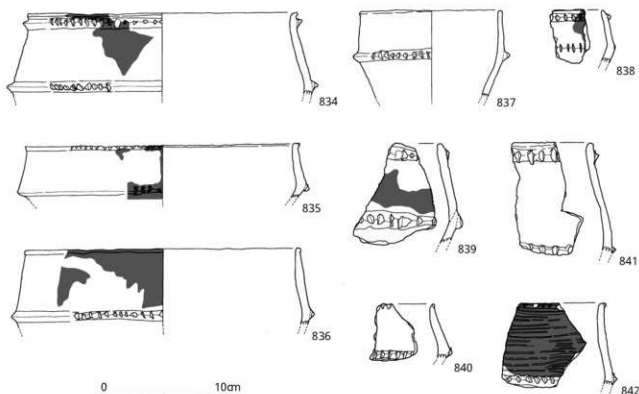
832



833

0 10cm

第100図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑤ (S = 1 / 3)



第101図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑤ (S = 1/3)

である。内面は擦過調整を残すが、外面はなでる。外面胴部突帯より上位に炭化物の付着が認められる。また、胴部突帯より上位には土器の製作時におそらくは刻目原体と同一の工具によるものと思われるが、線刻が施されている。線刻部分には焼成後に穿孔も施すが、貫通はしておらず、線刻に対して意図的に加えられたものであろうか。844は焼成・胎土や出土地点から843と同一個体と判断したが、突帯間の高さが843に比べるとやや低いようである。口縁部突帯は口唇部に接して貼り付ける。両突帯間には2ヶ所に線刻があり、鉤形のモチーフが両方ともに見られる。左側の線刻は刻目原体と同一の工具によるものと思われるが、右側の線刻については線が細く、別の工具とも考えられる。外面の調整はナデ、内面の調整は擦過を残すが、口唇部から約2.3cmの幅はなで消している。845は器壁が薄く、胴部にのみ細めの刻目突帯を持つ。口縁部は外反しながらわずかに内傾し、口唇外端部に段を持つ。調整は外面がナデ、内面が貝殻条痕の後ナデである。846は緩やかに屈曲し胴部突帯を貼り付けるが、口縁部には突帯の貼り付けはしない。口縁部はほぼ直立し、突帯を持たない口唇部外端には一部分だけ直接刻目を施している。内外面の調整は擦過の後軽くなる。外面には薄く炭化物が付着する。847は胴部突帯部分でしっかりとした屈曲を持ち、口唇部に接して口縁部突帯を貼り付ける。胴部突帯に対して口縁部突帯は細い。内外面ともに貝殻条痕調整を残し、内面については口縁部付近4.0cmをなで消している。胎土には5mm大ほどの礫を多く包含し他に比べて粗い。

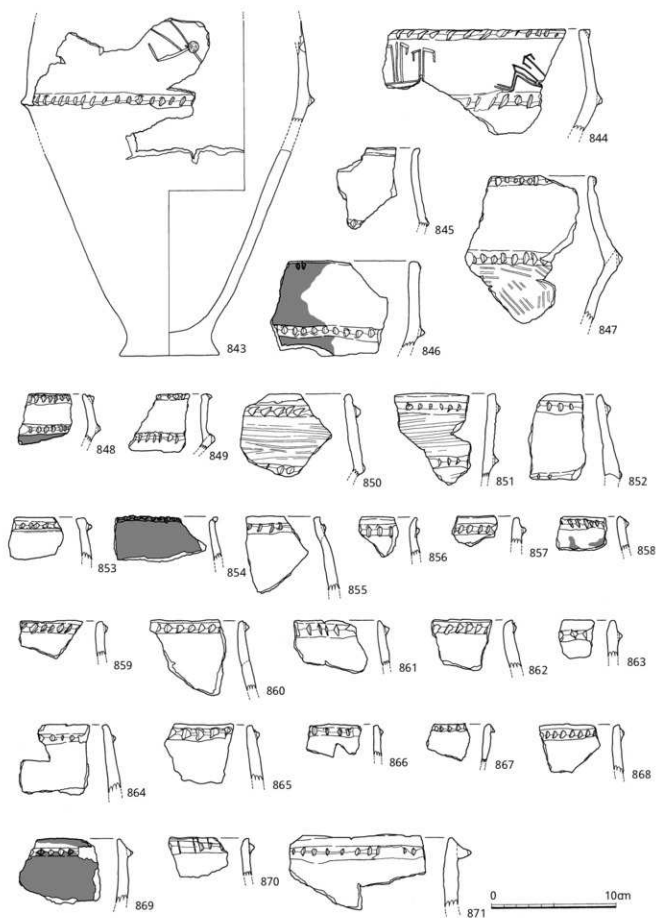
848は小振りの土器で、口縁部・胴部にそれぞれ突帯を持つ。口縁部の突帯は口唇部から0.3cm下がる。内面には擦過調整が残るが、外面はなでる。胴部突帯より下位には炭化物が付着する。849は屈曲部分まで作った後、それより上位はその内面に積み上げ、外側へ張り出した部分に直接刻目を施す。また、口唇部外端もつまみ出して直接刻目を施す。内外面ともにナデ調整を施す。850は屈曲部から

下位は欠損するがしっかりとした屈曲を持つものと思われる。口縁部突帯は口唇部から1.0cm下がっており、やや離れる。調整は外面が貝殻条痕、内面が擦過の後ナデである。851は2条の突帯を持つが、胴部突帯での屈曲はなく直線的に開いて立ち上がる。口縁部突帯は口唇部から0.6cmの位置に貼り付ける。どちらの突帯も細めである。内外面はともにナデ調整を施すが、外面には貝殻条痕が残る。

852は焼成がやや悪く、特に胴部突帯部分については残りが悪い。口縁部突帯は口唇部から0.6cmの位置に付ける。内面はナデ調整であるが、外面は擦過調整か。853は口唇部から0.4cm下がったところに細めの突帯を貼り付ける。内外面ともに非常に丁寧になで、口唇部上端は貝殻腹縁で面取りをしてからなでる。854は口唇部に接して細い突帯を貼り付け、刻目を付ける。内外面の調整は貝殻条痕であるが、外面は縦方向で特異である。また、外面には炭化物の付着が認められる。855は比較的薄手で焼成も良い。口縁部突帯は口唇部より0.5cmの位置に貼り付ける。内外面ともに調整は貝殻条痕の後になる。856は口唇部断面が先細りとなり先端は外反する。口唇部から0.5cmの位置に突帯を貼り付ける。突帯の刻目は器面に達するほど深く入れる。内外面ともにナデ調整である。857は口唇部から0.7cmの位置に突帯を貼り付ける。突帯断面は三角ではなく台形である。内面調整はナデである。858は口唇部に接して突帯を貼り付けている。内外面ともにナデ調整である。外面には炭化物が付着する。

859は口唇部上端をなでて平坦に整える。口縁部突帯は口唇部に接して貼り付ける。内外面ともに丁寧なナデ調整である。860も口唇部上面をなでて平坦にする。立ち上がりはわずかに外反する。口縁部突帯は口唇部からわずかに下がって0.3cmを測る。外面調整はナデ、内面調整は擦過の後ナデである。861は口唇部と口縁部突帯の間は0.4cmである。内外面ともにナデ調整である。862は口唇部と突帯は接近して0.3cmである。器壁に及ぶまで深めに刻目を入れる。内外面ともにナデ調整である。863は口唇部と突帯の間が0.8cmと比較的広い。内外面ともにナデ調整である。864は口唇部からやや下がって0.6cmの位置に突帯を貼り付ける。突帯は細めである。内外面ともにナデ調整を施す。865は口唇部上面を平坦に整える。口唇部から0.4cm下がった位置に突帯を貼り付ける。内外面ともにナデ調整である。一応へら状工具による刻みとしたが、棒状工具の可能性も残る。866は薄手で、口縁部突帯は口唇部から0.3cmの近接した位置に貼り付ける。内外面ともにナデ調整である。867は口唇部を外側へつまみ出して突帯状にし、刻目を入れる。外面は擦過調整、内面はナデ調整である。868は口唇部上面を平坦に整え、口唇部から口縁部突帯までは0.3cmの近接した位置に貼り付ける。内外面ともにナデ調整である。869は口唇部と口縁部突帯との間隔は0.8cmを測り、突帯は細い割に高さを持っている。外面は擦過調整、内面はナデ調整を施し、外面には炭化物が付着する。870は口唇部上端をなでて平坦にする。突帯は口唇部から0.3cm下がった位置で近接している。内外面ともにナデ調整である。871は口唇部から0.6cm下がった位置に高さを持った突帯を貼り付けている。刻目は突帯の先端に浅く入れる。外面はナデ調整であるが、内面は貝殻条痕が残る。

872は口唇部端を外側へつまみ出し直接刻みを付ける。内外面ともにナデ調整である。873は口唇部と口縁部突帯の間が0.8cm離れる。比較的厚手で、外面は擦過調整、内面はナデ調整である。外面には炭化物の付着が認められる。874は口唇部外端をわずかにつまみ出し、突帯は口唇部から0.4cmの位置に貼り付ける。刻目は器壁に及ぶまで深く施す。外面は貝殻条痕調整の後ナデ調整、内面は擦過調整の後ナデ調整である。875は口唇部から突帯までは0.3cm離れており、一部では口唇部と一体化して



第102図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器② (S = 1/3)

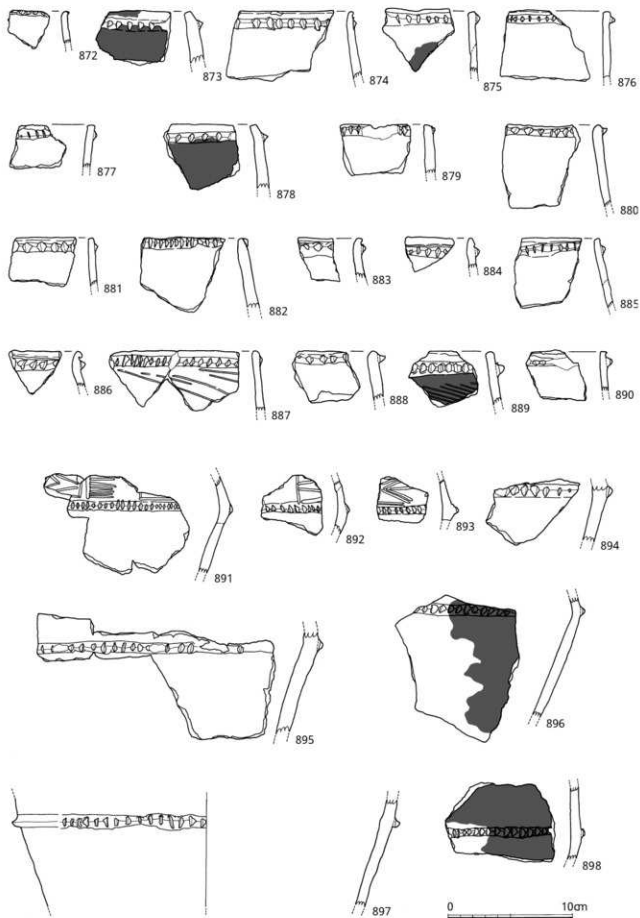
いる。調整は外面がナデ、内面が擦過である。外面には炭化物が付着する。876はほぼ直立する口縁部で、細い突帯を口唇部から0.4cm下がった位置に貼り付ける。刻目も小さい。外面はナデ調整、内面は擦過調整の後ナデ調整である。877も突帯は細めて口唇部から0.3cmと近接しており、やや外傾する。内外面ともにナデ調整である。878は口唇部上端を平坦に整える。口縁部突帯は口唇部との間に0.7cmの間隔を持ち、しっかりとした刻目を施す。内外面ともに擦過調整の後ナデ調整である。外面には突帯より下位に炭化物の付着が認められる。879は口唇部に接して細い突帯を貼り付ける。内外面ともにナデ調整である。880は突帯を口唇部に近接して0.3cm下がったところに貼り付ける。内外面は擦過調整を施すが、外面はさらにその後ナデ調整を行う。

881は口唇部と突帯の間が0.3cmを測る。刻目は器壁に及ぶ。内外面ともにナデ調整である。882は口唇部に接して比較的細くて高さも低い突帯を貼り付ける。内外面ともにナデ調整であるが、外面には貝殻条痕の痕跡が残る。883は口唇部と突帯は0.3cm離れ、外反する口唇部は外端部につまみ出しによる段を持つ。外面調整はナデ、内面調整は擦過の後ナデである。884は口唇部から0.7cmの位置に突帯を持つ。口唇部外端には整形時の余分な粘土をなで付けたことにより段が形成される。内外面ともにナデ調整である。885は比較的薄手の資料で、突帯は細く口唇部からは0.5cm下がっている。刻目は細い。内外面ともにナデ調整を施す。886は口唇部外端を整形時に外側へせり出すように作り出す。突帯は口唇部から0.4cmを測る。内外面ともに擦過調整を施す。887は口唇部上端をなでて平坦に整え、突帯は細めのものを口唇部から0.4cmの位置に貼り付ける。外面はナデ調整、内面は擦過調整であるが、外面には数条の沈線があり、意図的に刻まれた線刻であるかもしれない。888は口唇部に近接して突帯を貼り付け、その間隔は0.4cmである。内外面ともに擦過調整である。889は口唇部からやや離れた0.9cmの位置に突帯を貼り付ける。突帯断面は比較的大振りの刻目を接近して並べるため断面は台形を呈する。外面調整は貝殻条痕の後ナデ、内面調整は擦過の後ナデである。外面には炭化物の付着が認められる。890は口唇部上端を平坦に整え、器壁は薄手である。突帯は口唇部から0.4cmの位置に貼り付けている。内外面ともに調整はナデである。

891～893は胴部突帯より上部の外面に線刻を持つ同一個体の資料である。外面は胴部突帯より下部については擦過調整を残すが、胴部突帯より上位はなで消している。内面は貝殻条痕の痕跡を一部に残すがナデ調整である。891は2条の縦方向の沈線を刻んだ後にその左側には「く」字状の線刻、右側に横方向の7条以上の線刻を施し、さらにその右側には別の線刻であろう横方向の沈線1条が確認できる。892は直交する縦横1条ずつの線刻に「く」字状の線刻を組み合わせる。893も892同様に縦横1条ずつの線刻に「く」字状の線刻が施される。

894は外面が擦過調整、内面がナデ調整である。895は作りが厚手で、しっかりとした屈曲を持つ。外面は擦過調整の後軽くナデ調整し、内面はナデ調整で部分的に炭化物が付着する。896は胴部突帯部分でしっかりとした屈曲を持つが、器壁は比較的薄手である。外面は擦過調整、内面はナデ調整を施す。外面に炭化物の付着が認められる。897は胴部突帯部分での復元径が約30.8cmを測り、突帯部分で屈曲することなく、そのまま開いて立ち上がる。突帯の貼り付けは接着が十分でなく、甘い。内外面ともに板状工具小口によるものと見られる刷毛目が横方向に走る。898は胴部突帯を持つ資料で、屈曲はほとんどない。外面は擦過調整、内面はナデ調整で、外面には炭化物が付着する。

899～901は胴部突帯部分で屈曲を持たずそのまま立ち上がる資料である。899は薄手の作りで内外



第103図 縄文時代後期—弥生時代前期の土器⑤ (S = 1 / 3)

面ともにナデ調整，外面には炭化物が付着する。900も器壁は薄手で，突帯は低くて細い。外面は擦過調整の後ナデ調整，内面はナデ調整である。901も器壁が薄く，内外面の調整はともにナデである。外面には炭化物の付着がある。902は内外面ナデ調整で，刻みはやや間隔をあけて押し引く。903は薄手の器壁で，突帯部分での屈曲は持たない。突帯は細めである。内外面擦過調整を施すが，外面はその後になる。外面には炭化物が付着する。904も屈曲しない胴部突帯の資料である。内外面ともに擦過調整の後ナデ調整を施す。905は内外面ともにナデ調整を施し，刻目は器壁に到達するほど深めに押し引く。906は胴部突帯部分でしっかりと屈曲を持ち，細めの突帯を貼り付ける。内外面ともにナデ調整である。907は突帯部分でやや屈曲し，内外面ナデ調整を施す。908は胴部突帯部分での突帯はなく，外面調整がナデ，内面調整が擦過の後ナデである。909はゆるく屈曲をし，その屈曲部に直接刻目を施す。外面は丁寧なナデ調整，内面は擦過調整である。

910は屈曲部より上位をそれまでの積み上げの内面に積むことによって突帯状の張り出し部分を作り出し，直接刻目を施す。さほど器高が高くなく鉢形を呈するものと思われる。外面の屈曲部直上には焼成後の未貫通の穿孔が認められる。内外面の調整はともに貝殻条痕の後ナデである。911も同様の作りで，内外面ともにナデ調整である。912はしっかりとした屈曲を持ち，内外面ともにナデ調整であるが，外面には貝殻条痕の痕跡がわずかに残る。913は内外面ともにナデ調整を施す。914は910・911と同様に屈曲部を作り出す。外面の調整は屈曲部より上位がナデ，下位が擦過であり，内面の調整はナデである。915は内外面ともにナデ調整を施す。916は突帯部分でしっかりとした屈曲を持ち，突帯の貼り付けはやや雑である。内外面の調整は擦過の後軽くなる。917はわずかに屈曲し，外面調整が擦過の後ナデ，内面調整がナデである。

918は薄手の器壁で屈曲は弱い。内外面ともに擦過調整で，外面には炭化物が付着する。919は薄手の器壁で突帯部分の屈曲はなく，内外面ともにナデ調整を施す。920は線刻土器である。胴部突帯部分での屈曲はない。内外面ともにナデ調整である。921は小振りの土器で，細めの突帯に小刻みに刻目を入れる。内外面ともにナデ調整である。

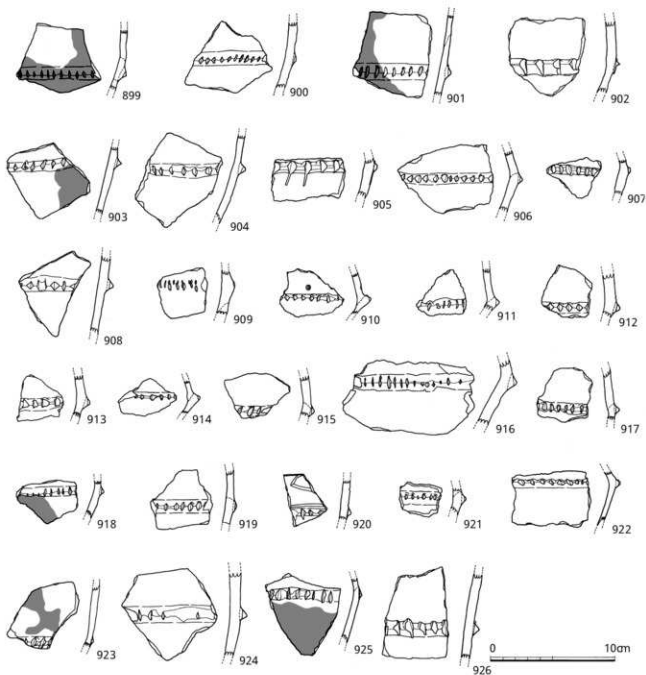
922はやや焼成が良くないが，薄手の器壁でしっかりとした屈曲を持ち，細めの突帯を貼り付ける。調整は外面が擦過，内面はナデである。923は非常に薄手の作りで，突帯部分での屈曲はない。内外面ともにナデ調整で，外面には炭化物の付着がある。924は突帯部分での屈曲はないが，器壁はやや厚手である。内外面ともに擦過調整の後ナデ調整である。925はゆるく屈曲する薄手の資料である。内外面に擦過調整を残し，外面には炭化物が付着する。926は薄手の器壁で，太目の突帯にしっかりとした刻目を施す。内外面ともにナデ調整である。

927～931は貝殻腹縁による刻目を施す資料である。

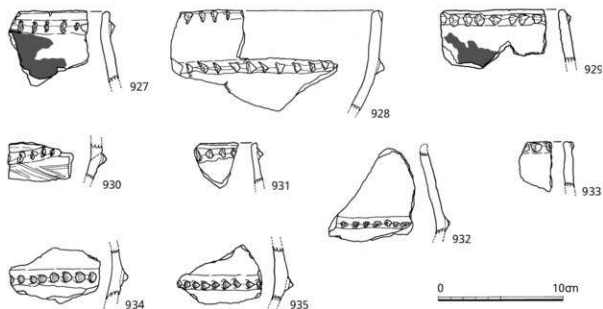
927は内傾する口縁部で先端はやや外反する。口縁部突帯は口唇部から0.5cmの位置に貼り付ける。内外面ともに調整は貝殻条痕の後ナデで，外面には炭化物が付着する。928は胴部突帯での屈曲は曖昧である。口縁部突帯は持たず，口唇部外端に直接刻目を施す。内外面ともに調整は貝殻条痕の後ナデである。929はやや内傾する口縁部で，口唇部と口縁部突帯との間が0.4cmを測る。外面はナデ調整であるが，内面は貝殻条痕を残し，口唇部から1.0cm幅でなでる。外面には炭化物が付着する。930は突帯部分で屈曲し，内外面の調整は，外面が貝殻条痕，内面がナデである。931は口唇部から0.5cmの位置に口縁部突帯を貼り付ける。口唇部上端は平坦に整える。内外面ともにナデ調整である。

932は突帯に竹筒状工具による刺突を施す資料である工具の直径は0.5cmを測る。内外面の調整は外面がナデ、内面が擦過である。

933~935は棒状工具もしくは幅の狭い板状工具の先端で刺突を施した資料である。いずれも水平に工具を構え、右から左へと施文している。933はほぼ直立する口縁部で、突帯は口唇部と接して一体化している。内外面ともにナデ調整である。934はゆるく屈曲し、外面は擦過調整の後ナデ調整を、内面はナデ調整を施す。935は突帯部分での屈曲はややゆるい。調整は外面が擦過の後ナデ、内面がナデである。



第104図 縄文時代後期—弥生時代前期の土器④ (S = 1/3)



第105図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器 fragment (S = 1 / 3)

深鉢底部 A 類 (第106図936～941)

936～941は底部から胴部が直線的に開いて立ち上がる資料である。936は復元底径8.4cmを測り、わずかに上底となる。外面と底面は研磨調整、内面はナデ調整である。937は復元底径8.2cmを測る。やや底部が厚い。調整は内外面ともにナデで、底面には組織織が残る。籠目か。938は復元底径9.0cmを測る。内外面、底面いずれもナデ調整である。939は復元底径9.4cmを測り、内外面、底面はナデ調整である。940はわずかに上底をなし、内外面、底面の調整はナデである。941もわずかに上底で、調整は内外面、底面いずれも研磨調整である。

深鉢底部 B 類 (第106図942～第108図990・991)

942は復元底径8.4cmを測る。内外面、底面の調整はナデである。943は復元底径8.6cmを測る。調整は外面が貝殻条痕、内面がナデ、底面が擦過である。944は底径9.9cmを測る。わずかに上底をなし、器面の調整はいずれもナデである。945は復元底径7.2cmを測る。調整は内外面、底面いずれもナデである。946は復元底径7.4cmを測る。内外面の調整はナデ、底面は研磨である。947は復元底径9.8cmで、調整は内外面ともに貝殻条痕の後ナデである。底面はナデである。948は復元底径7.0cmを測り、わずかに上底になる。外面の調整はナデである。内面の調整は擦過で、1.0cmほどの幅を持つ板状の工具で左回りに螺旋状に施す。底面には組織織が残る。籠目か。949は器壁が薄く、やや小振りの底部である。底径は7.2cmを測る。内外面、底面いずれも調整はナデである。950は復元底径7.4cmを測る。内外面、底面いずれも調整はナデである。951は復元底径9.8cmを測る。器面の調整はいずれもナデである。952は底径8.3cmを測る。内外面、底面いずれもナデ調整である。

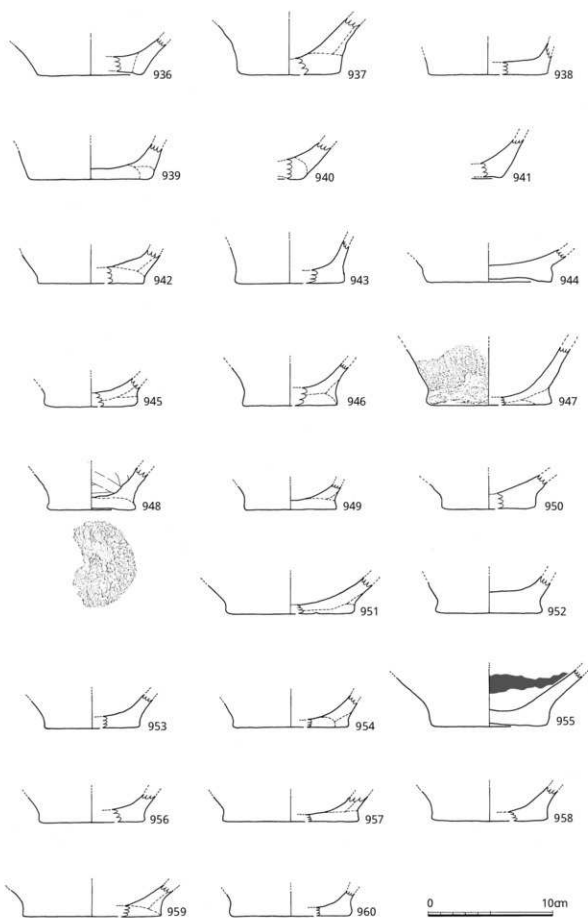
953は復元底径7.5cmを測る。内外面の調整はナデで、底面の調整は擦過の後ナデである。954は復元底径9.1cmを測る。外面の調整は研磨、内面、底面の調整はナデである。955は復元底径9.1cmを測り、わずかに上底をなす。調整は外面が貝殻条痕の後研磨、内面、底面はナデである。内面には環状

に炭化物が付着する。956は復元底径8.2cmを測り、内外面、底面いずれも研磨調整を施す。957は復元底径10.6cmを測る。調整はいずれも研磨である。958は復元底径9.2cmを測る。外面と底面の調整は研磨、内面の調整はナデである。959は復元底径10.9cmを測る。外面と底面の調整は研磨、内面の調整はナデである。960は復元底径9.4cmを測る。調整はいずれもナデである。

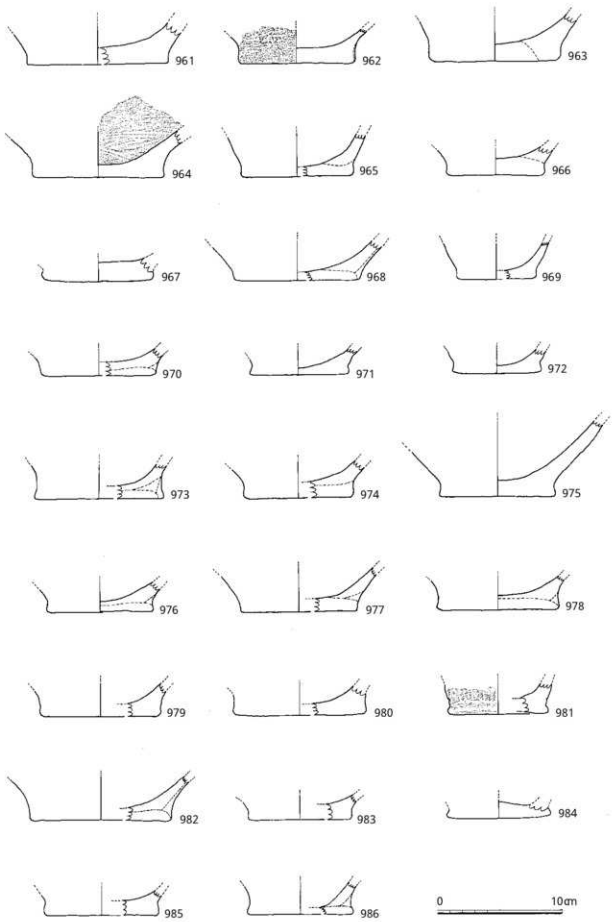
961は復元底径11.2cmを測る。調整は外面が擦過の後ナデ、内面はナデ、底面は研磨である。962は底径8.8cmを測る。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面と底面は研磨である。963は底径9.6cmを測る。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面・底面はナデである。964は底径10.0cmを測る。調整は外面がナデ、内面が貝殻条痕の後研磨、底面は擦過である。965は復元底径8.6cmを測り、器面の調整はいずれもナデである。966は復元底径7.3cmを測る。調整はいずれもナデである。967は底面がやや楕円形をなし、長軸の長さは欠損するため不明であるが、短軸で8.5cmを測る。調整はいずれもナデである。968は復元底径9.9cmを測る。調整は外面が研磨、内面と底面がナデである。969は復元底径5.8cmを測り、調整は外面が擦過、内面が研磨、底面がナデを施す。

970は復元底径8.5cmを測る。調整は外面がナデ、内面と底面は研磨である。971は底径7.7cmを測る。調整はいずれもナデである。972は復元底径7.0cmを測る。調整はいずれもナデである。973は復元底径10.2cmを測る。調整はいずれもナデである。974は復元底径8.4cmを測る。内外面、底面の調整は研磨である。975は底径9.0cmを測る。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面が貝殻条痕の後研磨、底面が研磨である。976は復元底径8.0cmを測る。調整は外面と底面がナデ、内面が研磨である。977は復元底径9.1cmを測る。調整はいずれも研磨である。978は復元底径9.0cmを測り、外面調整は貝殻条痕、内面、底面の調整はナデである。979は復元底径9.1cmを測る。調整はいずれもナデである。

980は復元底径10.2cmを測る。調整はいずれもナデである。981は復元底径7.6cmを測り、わずかに上底となる。調整は外面が貝殻条痕、内面と底面はナデである。982は復元底径11.1cmを測る。内外の調整はナデ、底面の調整は貝殻条痕の後ナデである。983は復元底径7.9cmを測る。調整は内外面がナデ、底面が擦過である。984は復元底径8.1cmを測る。調整は内面、底面ともに研磨である。985は復元底径8.8cmを測る。調整は外面がナデ、内面が貝殻条痕の後研磨、底面が擦過である。986は復元底径8.2cmを測る。調整はいずれもナデである。987は復元底径8.2cmを測る。調整はいずれもナデである。988は復元底径8.9cmを測る。調整はいずれもナデである。989は復元底径9.3cmを測る。内外面の調整はナデ、底面の調整は研磨である。990は底径7.6cmを測る。内外面の調整は研磨、底面の調整は擦過の後ナデである。991は復元底径10.8cmを測る。内外面の調整はナデ、底面の調整は貝殻条痕の後ナデである。



第106図 縄文時代後期—弥生時代前期の土器券 (S = 1 / 3)



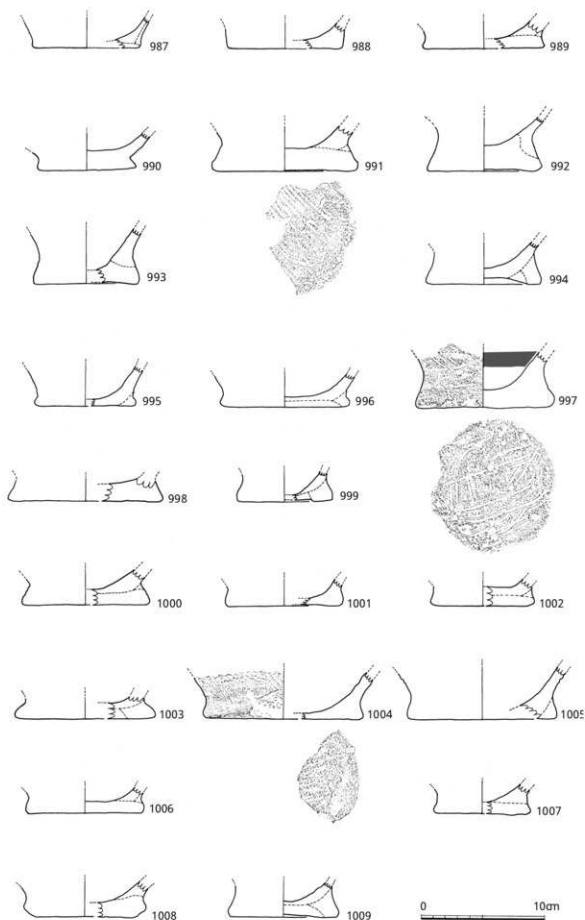
第107図 縄文時代後期—弥生時代前期の土器⑤ (S = 1 / 3)

深鉢底部C類（第108図992～第109図1027）

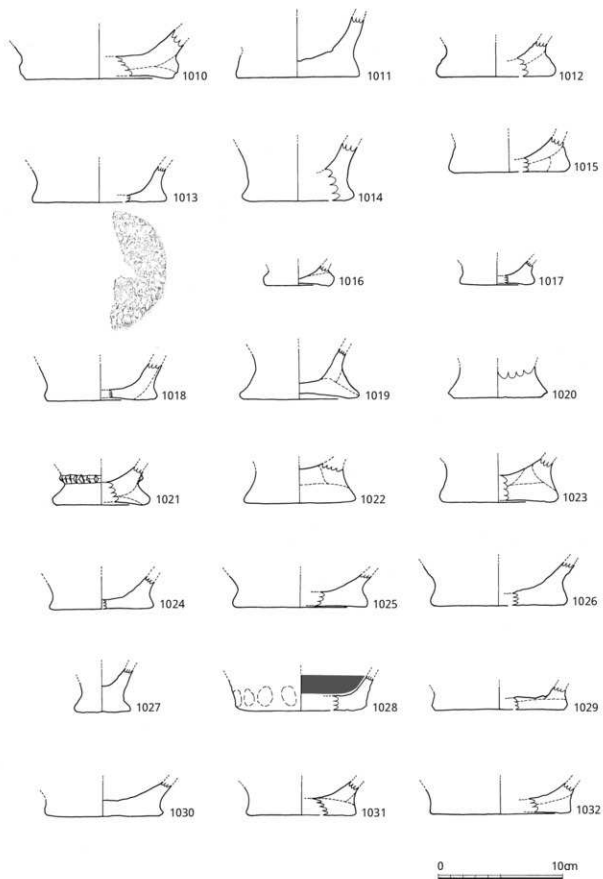
992はわずかに上底となり、底径8.7cmを測る。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面、底面はナデである。993もわずかに上底となる。復元底径8.2cmを測り、調整は内外面がナデ、底面が研磨である。994はしっかりと上底となり、底径9.0cmを測る。内外面の調整はナデ、底面は擦過の後ナデである。995は復元底径7.3cmを測り、調整は外面と底面が擦過、内面がナデである。996は復元底径9.4cmを測る。外面と底面の調整はナデ、内面は貝殻条痕の後ナデである。997は底径10.3cmを測る。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面、底面が貝殻条痕である。内面には炭化物が付着する。

998は復元底径11.8cmを測る。調整はいずれもナデである。999は復元底径7.6cmを測る。わずかに上底になる。調整はいずれもナデである。1000は復元底径9.7cmを測る。調整はいずれもナデである。1001は復元底径8.9cmを測る。調整は内外面ともにナデで、底面は擦過調整を施すためわずかに上底となる。1002は復元底径7.1cmを測り、器面の調整はいずれもナデである。1003は復元底径10.8cmを測る。調整は内外面がナデ、底面が擦過である。1004は復元底径12.2cmを測り、径が大きい割に底面の器壁が薄い。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面はナデ、底面は擦過である。1005は復元底径11.6cmを測る。外面の調整が貝殻条痕、内面、底面の調整はナデである。1006は復元底径9.0cmを測る。調整は内外面がナデ、底面が研磨である。1007は復元底径7.6cmを測る。調整はいずれもナデである。1008は復元底径7.8cmを測る。調整はいずれもナデである。

1009はわずかに上底をなし、復元底径は8.5cmを測る。調整はいずれもナデである。1010はわずかに上底をなし、復元底径は11.8cmを測る。調整はいずれもナデである。1011は底径9.6cmを測る。調整はいずれもナデである。1012は復元底径9.1cmを測る。調整はいずれもナデである。1013は復元底径10.4cmを測る。内外面の調整はナデで、底面には組織痕が残る。1014は復元底径7.8cmを測る。調整はいずれもナデである。1015は復元底径8.9cmを測る。外面の調整は擦過、内面と底面の調整はナデである。1016は小振りの土器底部で、復元底径は5.0cmを測る。わずかに上底をなす。調整はいずれもナデである。1017はわずかに上底をなす底部で、復元底径は5.7cmと小振りである。調整はいずれもナデである。1018は復元底径8.7cmを測り、調整はいずれもナデである。1019は上底をなし、復元底径は9.0cmを測る。調整はいずれもナデである。1020は復元底径7.0cmを測る。調整は外面がナデ、底面が擦過の後ナデである。1021はわずかに上底をなし、復元底径は7.0cmを測る。底部と胴部の境に突帯を貼り付け、ヘラによる刻目を施す。調整はいずれもナデである。1022は復元底径8.7cmを測る。調整は内外面がナデ、底面が擦過である。1023はわずかに上底をなし、復元底径は9.0cmを測る。調整はいずれもナデである。1024は復元底径8.1cmを測る。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面と底面はナデである。1025はごくわずかに上底となり、復元底径は10.5cmを測る。調整はいずれもナデである。1026は復元底径10.4cmを測る。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面、底面がナデである。1027は小振りの土器底部で、底径4.3cmを測る。調整はいずれもナデである。



第108図 縄文時代後期一弥生時代前期の土器壺 (S = 1 / 3)



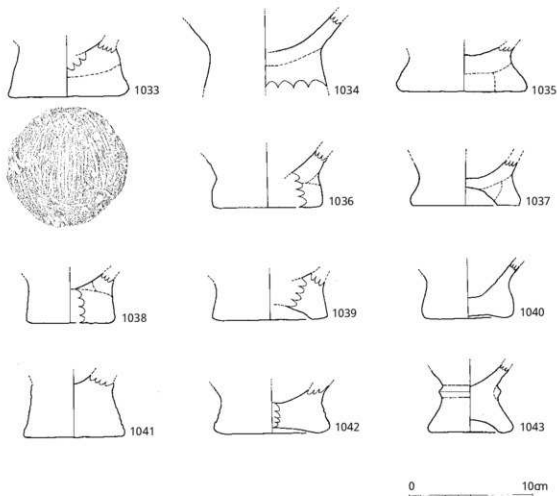
第109図 縄文時代後期—弥生時代前期の土器群 (S = 1 / 3)

深鉢底部D類（第109図1028～1032）

1028は復元底径9.6cmを測る。内外面ともにナデ調整で、外面には指頭圧痕が残る。底面は擦過調整である。内面には炭化物が付着する。1029は復元底径10.2cmを測る。内外面、底面いずれも調整はナデである。1030は底径8.8cmを測り、器面の調整はいずれもナデである。1031は復元底径8.4cmを測る。調整は外面が貝殻条痕の後ナデ、内面、底面はナデである。1032は復元底径11.0cmを測る。調整はいずれもナデである。

深鉢底部E類（第110図）

1033は底径9.0cmを測る。調整は内外面がナデ、底面はなでた後棒状工具の先端によって掻き取る。1034は底面を欠く。外面の調整は擦過の後研磨、内面はナデである。1035は底径9.8cmを測り、調整はいずれもナデである。1036は復元底径8.4cmを測る。調整は外面が擦過、内面と底面はナデである。1037はしっかりとした上底で、復元底径8.4cmを測る。調整はいずれもナデである。1038は復元底径6.1cmを測る。調整はいずれもナデである。1039はしっかりとした上底で、復元底径は8.7cmを測る。調整はいずれもナデである。1040はわずかに上底をなし、復元底径は7.0cmを測る。外面と底面の調整は擦過、内面の調整はナデである。1041は底径7.9cmを測る。調整は外面が貝殻条痕、内面と底面



第110図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑥（S = 1/3）

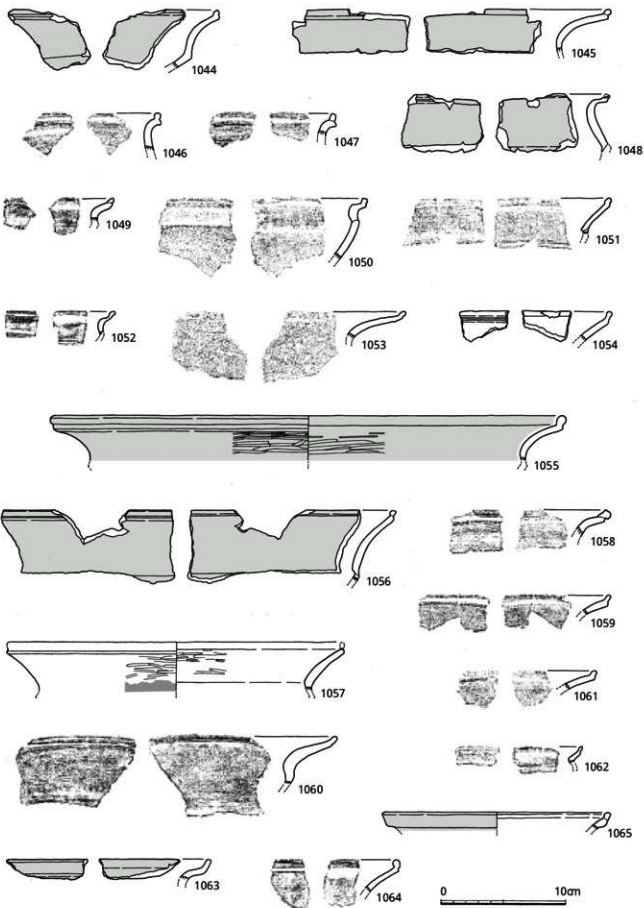
はナデである。1042は上底をなし、復元底径は7.8cmを測る。外面の調整は擦過、内面と底面の調整はナデである。1043はしっかりとした上底をなし、復元底径5.9cmを測る。底部と胴部の境に突帯を貼り付けるが、刻目は施さない。調整は内外面がナデ、底面が擦過である。

浅鉢A類（第111図）

1044は胴部に外反する頸部が付き、口縁部外面には1条の沈線を引く。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。1045も頸部の下位で強く外反する。口縁部外面には工具で段を施し、沈線の代わりとする。内外面ともに横方向の研磨調整で、黒色に仕上げる。1046は内傾する頸部が上位で強く外反する。明確な口縁部文様帯を持ち、沈線1条を施す。口唇部上端は平坦に整える。内外面ともに研磨調整である。1047も頸部の上位で強く外反し、口縁部文様帯を持つ。口縁部文様帯には沈線1条を施す。内外面ともに研磨調整である。1048は内傾する頸部が上位で強く外反する。口縁部文様帯には1条の沈線を引く。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。1049は外反する短い頸部で、口縁部外面に1条の沈線、内面に段を持つ。内外面ともに調整は研磨である。1050は外反する短い頸部を持ち、口縁部文様帯を付ける。口縁部文様帯には沈線1条を引く。内外面ともに研磨調整を施す。1051は直線的に開く頸部で、口縁部には外面に沈線1条、内面に段を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整である。

1052は短めの頸部で、外反する。口縁部の外面には不明瞭であるが沈線1条を引き、内面には段を作る。内外面ともに研磨調整である。1053は頸部の下位で強く外反し、頸部の上位はほぼ水平にのびる。口縁部の外面には1条の沈線を引き、内面には段を持つ。焼成不良で器面の状態が悪く、調整は不明である。1054は直線的に開く頸部を持つ。口縁部には外面に2条の沈線が確認できるが、これは二度引きした為で本来は1条と見てよいであろう。口縁部内面には段を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整である。1055は復元口径が40.3cmを測る。外反する頸部を持ち、口縁部は外面に沈線1条を施し、内面には段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。1056はゆるやかに外反する頸部を持ち、口縁部には外面に沈線1条、内面に段を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整である。外面にはわずかに炭化物が付着する。内外面ともに黒色に仕上げる。1057は頸部下位で強く外反する頸部である。口縁部は欠損するが、推定される復元口径は26.3cmである。内外面ともに横方向の研磨調整で、外面には炭化物が付着する。

1058は外反する頸部を持ち、口縁部には外面に1条の沈線を施し、内面に段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整を施すが、外面の研磨調整はやや粗い。1059は大きく開く頸部を持つ。口縁部には外面に1条の沈線を施し、内面に段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整である。1060は頸部下位で強く外反し、頸部上位は水平に近くなる。口縁部は外面に沈線1条を施し、内面には段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整である。1061は大きく開く頸部を持つ。口縁部には外面に1条の沈線を施し、内面に段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整である。1062の頸部は非常に短く、小振りの浅鉢である。口縁部外面に1条の沈線を施し、内面には段を持つ。内外面の調整は横方向の研磨調整である。1063も外反する頸部に、しっかりとした口縁部文様帯を付ける。口縁部文様帯には沈線を引かない。内外面ともに研磨調整を施し、黒色に仕上げる。1064は大きく開く頸部で、口縁部は外面に1条の沈線を施し、内面に段を持つ。内外面の調整は横方向の研磨である。1065は口縁部付近の資料



第111図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑥ (S = 1/3)

であるが、明確に口縁部文様帯を作り出す。復元口径は17.7cmを測る。口縁部文様帯の外面には沈線を施さず、内面には段を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整である。外面を黒色に仕上げる。

浅鉢B類（第112図）

1066は大きく開く頸部で、口縁部は玉縁状を呈する。口縁部外面の沈線はない。口唇部には突起が付いていたと思われその端部が確認できる。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。1067は復元口径が31.6cmを測る。玉縁状の口縁部を持つことから一応浅鉢B類としたが、あるいは底部から口縁部へとそのまま立ち上がる器形をなすかもしれない。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。1068は口縁部にしっかりとしたりポン状突起を付け、口縁部内面には沈線を施す。内外面ともに研磨調整である。1069は口縁部内面に段を作り、玉縁状にする。調整は内外面ともに研磨である。内外ともに黒色に仕上げる。1070は胴部から一旦屈曲して肩部を作り出し、頸部は直線的に外側へ開いて口縁部に至る。復元口径は36.0cmを測る。口縁部内面は玉縁状に整える。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。1071は1070と同様に胴部が一旦屈曲して肩部を作り、ゆるく外反する頸部が付く。復元口径は18.7cmを測る。口縁部内面は肥厚させて玉縁状にし、外面には沈線を引く。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。1072は1067と同様で、底部からそのまま口縁部まで立ち上がるかもしれない。非常に薄手の作りで、口縁部内面に段を作るが、肥厚はわずかである。復元口径は22.8cmを測る。調整は外面では縦方向の研磨の後口縁部付近のみ横方向の研磨、内面では横方向の研磨である。内外面ともに黒色に仕上げる。

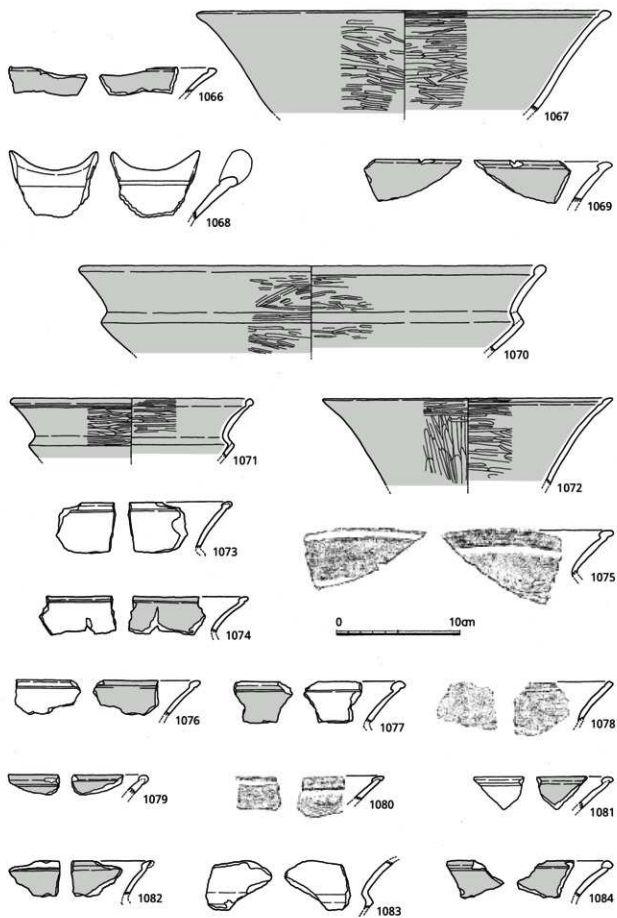
1073は口縁部外面に沈線を引き、口縁部内面は肥厚させ段を作り、玉縁状にする。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。1075も口縁部の外面には沈線を施し、内面は肥厚させて段を作り玉縁状をなす。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。1074・1076・1077も口縁部外面に沈線を引く。また口縁部内面は肥厚させて段を作り、玉縁状をなす。いずれも内外面ともに横方向の研磨調整を施し、1074・1076は内面を、1077は外面を黒色にする。

1078の口縁部は肥厚することなく、内面に1条の沈線を引くことで段の代わりとしている。内外面ともに横方向の研磨調整を施すが、幅広の工具を使ったためであろう、筋状の細かい研磨痕は器面に残らない。1079-1082・1084は口縁部外面に沈線を引く。口縁部内面は肥厚させて段を作り、玉縁状の口唇部にする。いずれも調整は内外面ともに研磨である。1079・1082・1084は内外面ともに黒色に仕上げ、1081は内面のみ黒色に仕上げる。1083は1070・1071同様に胴部から一旦屈曲して肩部を作り、外に開く頸部が付く。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。

浅鉢C類（第113図）

いずれの資料も口縁部内面に段を持つが、1104のみ段を設けない。

1085は外反する短く太い頸部を持つ。内外面ともに研磨調整である。1086・1087は直線的な短い頸部を持つ。内外面ともに研磨調整である。1088は一旦肩部を作り出し、短く直線的な頸部を付ける。内外面ともに研磨調整で、内面は黒色に仕上げる。1089は直線的な短い頸部を持つ。内外面ともに研磨調整を施す。1090は外反する短い頸部を持つ。口縁部はゆるい波状をなすか突起を持つものと思われる。内外面ともにナデ調整である。1091は直線的な短い頸部を持つ。内外面ともに研磨調整である。



第112図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑥ (S = 1 / 3)

1092は口縁部に突起を持ち、凹点を施す。短い頸部は下位で強く外反する。器壁は薄手の作りである。内外面ともに研磨調整で、内面は黒色に仕上げる。1093は下位で強く外反する短い頸部を持つ。内外面ともに研磨調整で、両面黒色に仕上げる。1094は強く外反する短い頸部を持つ。外面頸部基部には途中で途切れるが沈線が確認でき、意図的なものか。内外面ともに研磨調整を施し、黒色に仕上げる。

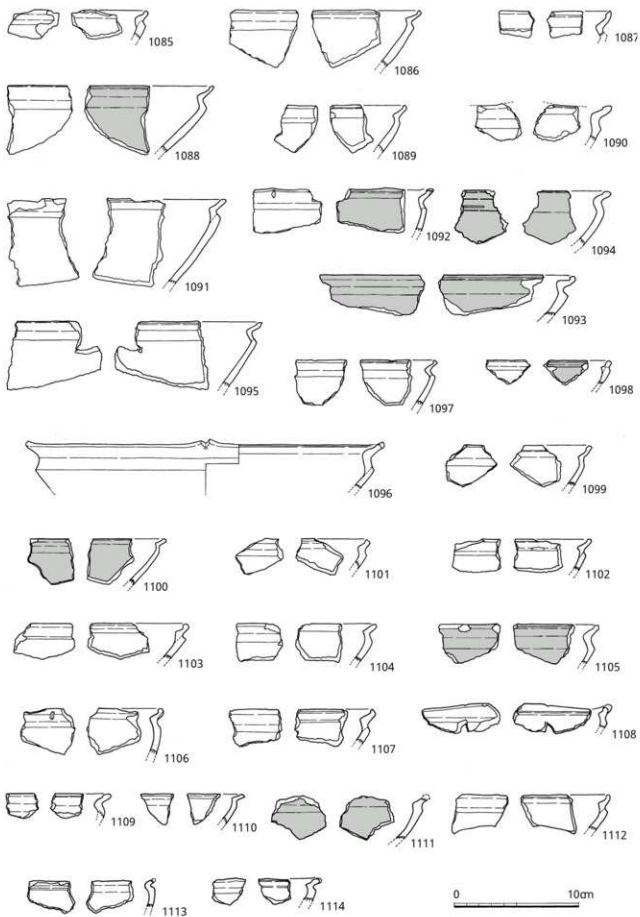
1095は胴部から一旦肩部を作り、短い直線的頸部を付ける。内外面ともに研磨調整である。1096は復元口径28.1cmを測る。口縁部には突起を持ち、先端はヘラ状工具によって切り取る。1092のような凹点から変容してリボン状突起へとつながるものか。中程で強く外反する短い頸部を持つ。内外面ともにナデ調整である。1097は胴部に短い直線的頸部を付すが、頸部基部を内外から強くなせることにより肩部に近い作り出しとなる。内外面ともに研磨調整である。1098は非常に短い頸部を持つ。内外面ともに研磨調整を施す。内面は黒色に仕上げる。1099は直線的な短い頸部を持つ。内外面ともに研磨調整である。1100は非常に薄手の作りで、直線的な短い頸部を持つ。内外面ともに研磨調整である。内外面ともに黒色に仕上げる。1101は短い頸部を持つ。内外面ともに調整は研磨である。1102・1103は短い直線的な頸部を持つ。内外面ともに研磨調整である。1102は内面頸部基部の張り出しがしっかりしている。1104はゆるい肩部を持ち、直線的な短い頸部は内面には段を作らず口縁部になる。内外面ともに研磨調整である。

1105は中程で強く外反する頸部を持つ。内外面ともにナデ調整で、黒色に仕上げる。1106は短い直線的な頸部を持つが、やや外反の意識があるか。外面には凹点を持つ。内外面ともに研磨調整である。1107は直線的な短い頸部である。内外面ともに研磨調整である。1108はごく短い頸部を持ち、口縁部は波状をなす。内外面ともに研磨調整である。1109は下位で強く外反する短い頸部を持つ。内外面ともに研磨調整を施す。1110・1111は短い直線的な頸部を持つ。内外面ともに研磨調整である。1110は非常に薄手の作りである。1111は内外面ともに黒色に仕上げる。1112は短い直線的な頸部を持つ。内外面の調整は焼成不良で器面の状態が悪く、不明である。1113の口縁部は欠損しているが、強く外反する短い頸部を持つ。内外面ともに研磨調整を施す。1114はごく短い直線的な頸部を持つ。口縁部はゆるい突起を持つ。内外面の調整は研磨である。

浅鉢D類（第114図1115～1127）

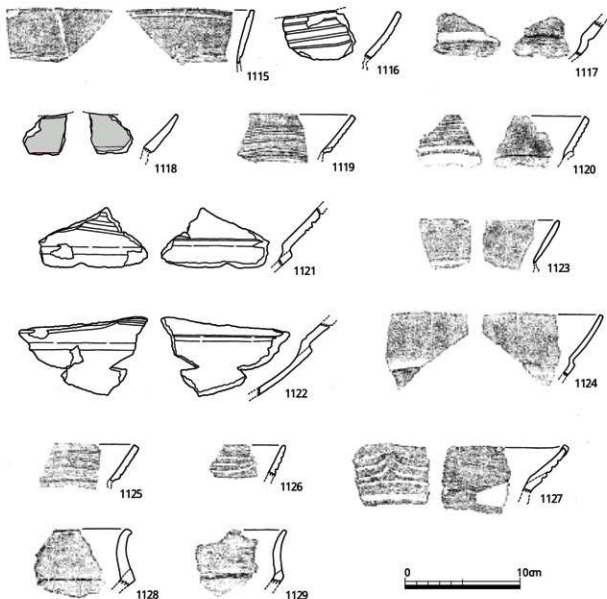
1115は薄手の作りで、広い口縁部文様帯を持つが、沈線などの施文はしない。口唇部上端は平坦に整形し、口縁部内面に段を作る。口縁部文様帯は立ち気味である。調整は外面が擦過の後研磨、内面が研磨である。1116は内外面ともに丁寧な研磨調整を施し、外面には4条の沈線が確認される。波状口縁をなすものと思われる。1117は胴部から口縁部文様帯にかけての資料で、口唇部は欠く。口縁部文様帯は肥厚して頸部との境に段を作り、沈線は見られない。内面には稜を作る。内外面ともに研磨調整である。1118は口縁部文様帯の資料で、口縁部は波状をなす。内外面ともに研磨調整で、両面とも黒色に仕上げるが、外面の頸部との境には赤色顔料の塗付を行う。1119は薄手の口縁部文様帯の資料で、口唇部上端は平坦に整える。外面には4条の沈線を施す。内外面ともに研磨調整である。

1120は口縁部文様帯の資料であるが、下端は粘土紐の接合面で剥離する。口唇部上端は平坦に整える。内面には稜を作る。調整は内外面とも丁寧な研磨調整で、内外面ともに黒色に仕上げる。1121・1122は同一個体である。胴部に直接口縁部文様帯を貼り付け、浅鉢C類における胴部と頸部の接合と



第113図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器群 (S = 1/3)

同様の接合を見せる。よって浅鉢C類の長頸タイプとして捉えることも可能かもしれない。口縁部文様帯外面の下端には頸部との境になる段を設けない。内面には稜を作り、その直上に沈線1条を引く。口唇部は欠くが、沈線は斜方向の施文であるため口縁は波状をなしていたものと思われる。内外面ともに研磨調整を施す。1123は薄手の作りで、焼成はやや甘い。口縁部文様帯には沈線は引かない。内外面ともに研磨調整である。1124も1123同様薄手の作りで、口唇部上端は平坦に整える。内面には口縁部文様帯と胴部の境に稜を設けるが、口縁部文様帯外面下端の段は持たない。内外面ともに研磨調整を施す。1125は口縁部文様帯に平行沈線4条を施す。口唇部上端は平坦に整形する。内外面ともに丁寧な研磨調整である。1126は4条の弧状沈線を引く。口縁部に突起を持つが、波状の口縁をなす可能性がある。内外面ともに研磨調整で、焼成はやや甘い。1127は口縁部文様帯に4条の平行沈線を引くが、上3条はほんのわずかに波状をなす口縁の波長で途切れて上方を向く。口縁部文様帯外面下端には明瞭な段を持たない。内面には稜を作る。内外面ともに研磨調整を施す。



第114図 縄文時代後期一弥生時代前期の土器群 (S = 1 / 3)

浅鉢E類（第114図1128～1129）

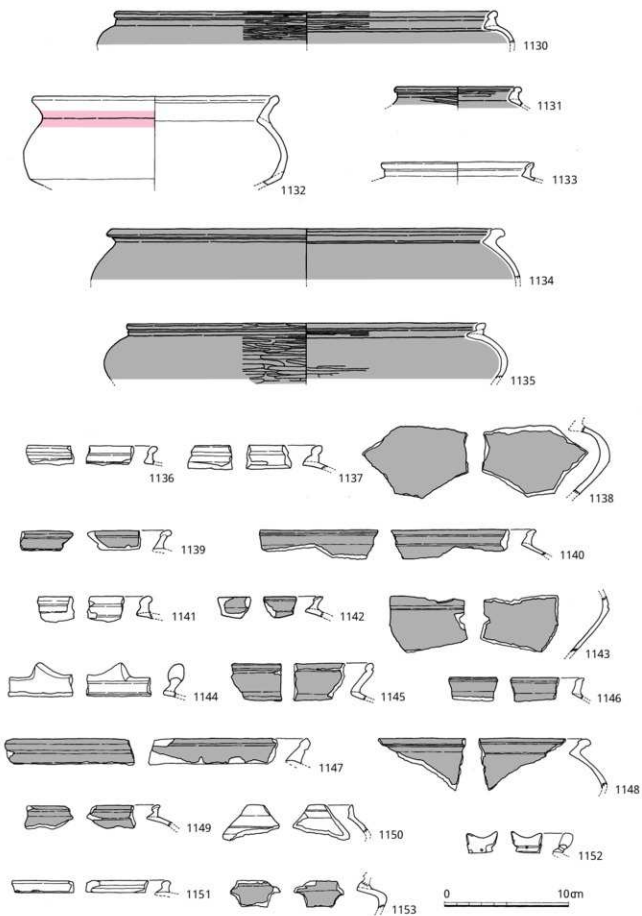
1128は胴部で一旦屈曲し、口縁部は内傾する。内外面ともに横方向の丁寧な研磨調整を施す。1129も胴部で屈曲し、口縁部は外反して立ち上がる。外面の調整は屈曲部より上位が貝殻条痕の後ナデ、屈曲部より下位は研磨、内面の調整はナデである。

浅鉢F類（第115図・第116図）

1130は復元口径が30.0cmを測る。非常に薄手の作りで、内外面ともに横方向の研磨調整を施すが、内面の肩部より下位は貝殻条痕を残す。口縁部の内外には沈線を引き、玉縁状にする。内外面ともに黒色に仕上げる。1131は復元口径が9.6cmを測る。口縁部の内外には沈線を施す。調整は内外面ともに横方向の研磨で、両面とも黒色に仕上げる。1132は復元口径が19.2cm、胴部最大径が20.9cmを測る。胴部下位で一旦稜を作り肩部に至る。頸部は開き気味に立ち上がる。口縁部は内面に段を持つが、外面には沈線を施さない。頸部外面には赤色顔料の塗付を行う。調整は内外面ともに研磨である。1133は復元口径が12.0cmである。口縁部には外面に沈線を引き、内面に段を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。1134は復元口径が30.8cmである。口縁には外面に沈線、内面に段を持つ。調整は内外面ともに横方向の研磨であるが、肩部内面には貝殻条痕が残る。内外面ともに黒色に仕上げる。1135は復元口径が27.8cm、胴部最大径が32.1cmを測る。口縁部の外面に沈線を引き、内面に段を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。

1136・1137は口縁部外面に沈線を引き、内面に段を持つ。いずれも内外面ともに横方向の研磨調整である。1138は胴部から肩部にかけての資料で、内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。1139は頸部から口縁部にかけての資料で、粘土紐の接合部分で剥離している。口縁部外面に沈線を引き、内面に段を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、両面とも黒色に仕上げる。1140は口縁部外面に沈線を持ち、内面に段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、両面ともに黒色に仕上げる。1141は口縁部外面に沈線を引き、内面に段を持つ。焼成がやや甘い。内外面ともに横方向の研磨調整である。1142は口縁部内面に段を作るが、外面には沈線を施さない。内外面ともに非常に丁寧な横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。1143は胴部上位で段を作り、肩部へと至る。内外面ともに横方向の研磨調整を施すが、内面には貝殻条痕が残る。内外面ともに黒色に仕上げる。1144は口縁部にヒレ状突起もしくはリボン状突起を付ける。口縁部は内面に段を設け、外面には沈線を施さない。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。1145は頸部が他に比して長めで異質であるが、肩部と頸部の接合の仕方は他の浅鉢F類の資料と共通する。口縁部は立ち気味で、外面に沈線を引き、内面には段を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。1146は口縁部外面に沈線を持ち、内面には段を作るが、内面の段は曖昧である。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。内外面ともに黒色に仕上げる。1147は口縁部外面に沈線を引き、内面に段を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。1148も口縁部の外面に沈線を引き、内面に段を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整で、両面とも黒色に仕上げる。1149は口縁部内面に段を作り、外面には沈線を引かない。内外面ともに横方向の研磨調整を施すが、肩部内面には貝殻条痕の痕跡が残る。内外面ともに黒色に仕上げる。

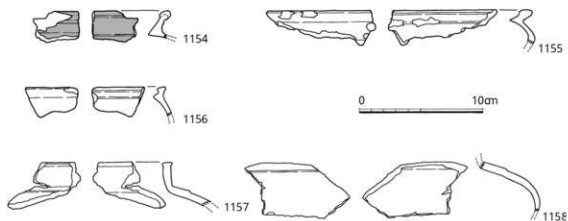
1150は肩部に沈線を施す。口縁部の内面には段を持つが、外面には沈線を引かない。内外面ともに



第115図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器碎 (S = 1 / 3)

横方向の研磨調整を施す。1151は粘土紐の接合部分で肩部から剥離している。口縁部には内面に段を持ち、外面の沈線は持たない。内外面ともに横方向の研磨調整である。1152も肩部との粘土紐の接合部分で剥離する。口縁部にはリボン状突起を付け、内面に段を作るが、外面の沈線は引かない。リボン状突起の直下には焼成前の穿孔を施す。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。1153は口縁部を欠く。肩部はしっかりと張る。内外面ともに横方向の研磨調整で、両面ともに黒色に仕上げる。

1154は口縁部外面に沈線を引き、内面には段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整で、黒色に仕上げる。1155は口縁部の外面には沈線を施さず、内面に段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整である。1156はやや焼成が悪い。口縁部は外面に沈線は施さず、内面には段を持つ。肩部の張りは弱く、かなりなで肩になる。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。1157・1158は同一個体である。口唇部は内外面で段を作るが、玉縁状にはならない。肩部では段を作る。肩部の張り出し方は他の浅鉢F類の資料と共通するが、肩部と頸部の接合の仕方や頸部・口縁部の形態は異なっている。内外面ともに横方向の研磨調整である。



第116図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑥ (S = 1/3)

浅鉢G類 (第117図1159)

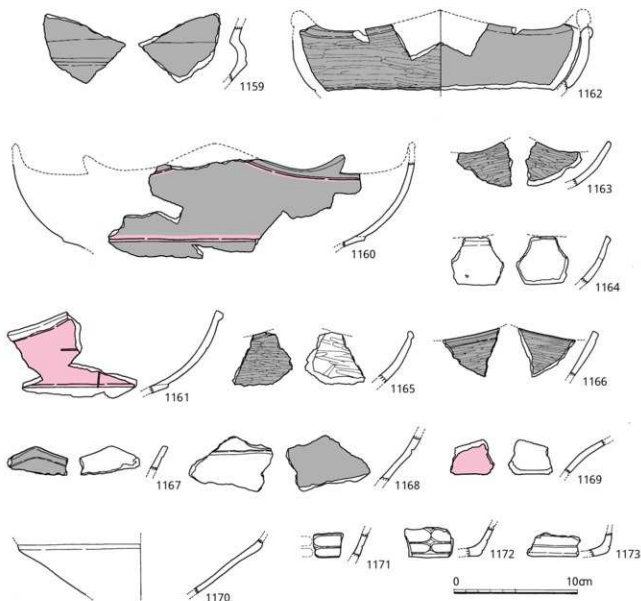
1159はしっかりとした肩部を作り出し、胴部との境には1条の沈線を引く。頸部は開いて立ち上がり、長くのびるようである。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。

浅鉢H類 (第117図1160～1173)

1160・1161は同一個体と思われる。1160には口縁部にヒレ状突起が付く。口縁部は外面を肥厚させ段を作り、胴部外面でも段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。また、1160の外面では胴部と口縁部の段の部分に赤色顔料の塗付が認められるが、1161では胴部の段直上から口唇部直下まで全面の塗付であることが確認できるため、同一個体であるとすれば本来は1160も1161のような塗付であったかもしれない。1161には外面に縦横1条ずつの線刻を入れている。1162は他の浅鉢H類の資料に比べ、器壁が厚めである。口縁部は外面が肥厚して段を作る。胴部外面の下端では段を設けるようである。内外面の調整は横方向の研磨で、黒色に仕上げる。1163は口縁部の内外面に段を持たない。内外面ともに横方向の研磨調整で、黒色に仕上げる。1164は口縁部外面に段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整である。1165は口縁部の内外面に段を作る。内外面の調整は横方向

の研磨調整で、外面は黒色に仕上げる。1166は口縁部外面に沈線1条を引く。内外面ともに調整は横方向の研磨で、両面とも黒色に仕上げる。1167は波状口縁の波長部の資料で、口縁部外面に段を設ける。内外面ともに横方向の研磨調整で、外面は黒色に仕上げる。

1168は胴部の資料で、外面には沈線を引く。内外面ともに横方向の研磨調整であり、内面は黒色に仕上げる。1169は胴部の資料であるが、底部近くであると思われる。内外面とも研磨調整であるが、外面は縦方向、内面は横方向に施す。外面には下端に沈線が確認され、赤色顔料を塗付する。1170は上端で段を作る。段の部分での復元径は19.4cmを測る。内外面の調整はいずれも研磨で、外面は縦方向、内面は横方向に施す。1171～1173は底部から立ち上がる部分の資料である。沈線を引き、1171・1172は沈線間をえぐることで浮き彫りの装飾を施す。いずれも内外面研磨調整を施す。



第117図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑦ (S = 1/3)

浅鉢Ⅰ類 (第118図1174～1185)

1174は口縁部に接して突帯を貼り付け、ヘラによる刻目を施す。内外面ともにナデ調整である。

1175・1176は同一個体で、いずれも波状口縁の波長部である。口唇部外側を肥厚させ、口縁部から下がった位置に突帯を貼り付け、板状もしくは棒状工具の小口を押し当てるようにして刻目を施す。内外面の調整はナデである。1177は口縁部から0.4cm下がった位置に突帯を貼り付け、ヘラによる刻目を施す。内外面ともにナデ調整である。1178・1179は同一個体である。波長部で口唇部から2.5cm下がった位置に断面三角の突帯を貼り付ける。内面には口縁に沿って1条の沈線を入れる。口唇部上端は平坦に整える。外面の調整はナデ、内面の調整は擦過の後研磨である。1180は胴部上位で一旦屈曲し、口縁部に至る。屈曲部と口縁部で外面に段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整で、黒色に仕上げる。

1181は口唇部から0.9cmの位置に突帯を貼り付ける。突帯の刻目はヘラによるものである。内外面ともにナデ調整で、外面には炭化物の付着が認められる。1182は口唇部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。突帯刻目は施さない。内外面ともに調整はナデである。1183は口唇部から2.0cm下がった位置に明瞭な突帯ではないが肥厚させ、その肥厚部と口唇部上端にヘラによる刻目を施す。調整は外面がナデ、内面が擦過調整であるが口唇部付近のみナデである。1184は口唇部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。口唇部および突帯は欠損し、状態は悪い。内外面ともにナデ調整である。1185は口唇部を肥厚させ、その直下に沈線を引く。また、口唇部から1.3cmの位置に突帯を貼り付ける。刻目は施さない。内外面ともに研磨調整である。

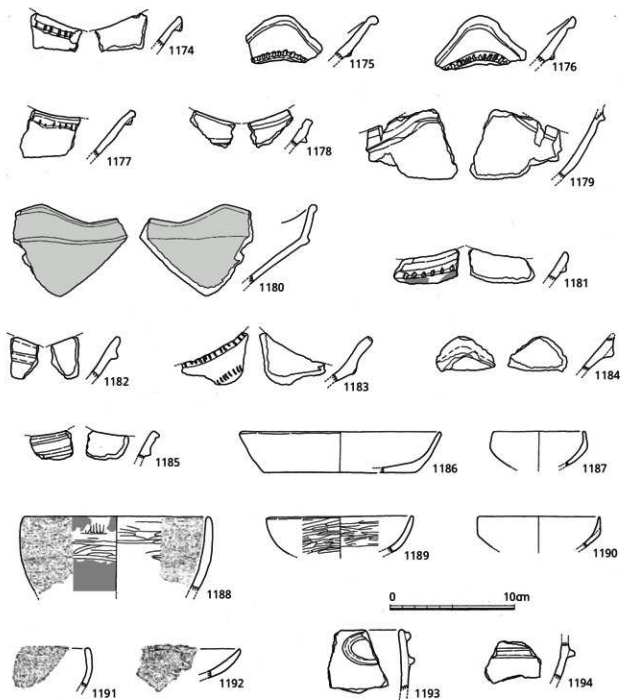
浅鉢J類(第118図1186～1194)

1186は復元底径12.0cm、復元口径15.8cm、器高3.2cmを測り、底部は平底をなす。内外面、底面いずれも研磨調整である。1187は復元口径が7.1cmを測る。底部は丸底か。内外面ともにナデ調整である。1188は復元口径が14.6cmを測る。調整は内外面ともに研磨で、基本的に横方向の調整であるが口縁部の外面のみ縦方向の調整である。外面には炭化物が付着する。1189は復元口径が11.3cmである。内外面ともに横方向の研磨調整である。1190は復元口径が9.6cmである。内外面の調整はナデである。1191は内外面の調整はナデである。外面には炭化物の付着が認められる。1192は大きく開いて立ち上がる。内外面の調整は研磨である。1193・1194は同一個体である。いずれも外面に粘土紐の貼り付けを行う。内外面ともに研磨調整を施す。

浅鉢K類(第119図)

1195は復元口径20.5cm、復元胴部最大径22.0cmを測る。口縁部は内傾し、口唇部はつまみ出すように外側へ折る。内外面ともに横方向の研磨調整である。1196は復元口径21.4cm、復元胴部最大径22.4cmを測る。口縁部の屈曲はややゆるく、わずかに内傾する。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、外面は黒色に仕上げる。1197は復元口径26.5cm、復元胴部最大径27.7cmを測る。口縁部は内傾し、外面には沈線を引き、段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。1198は復元口径28.7cm、復元胴部最大径30.7cmである。口縁部外面には段を作る。調整は内外面ともに研磨調整で外面の調整方向は屈曲部より下部の胴部では斜方向、屈曲部より上部は横方向、内面は横方向である。外面の胴部にはわずかに炭化物の付着がある。

1199は、口縁部は内傾し、外面に段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。1200も内傾す



第118図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器破片 (S = 1/3)

る口縁部を持ち、外面には段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。1201は内傾する口縁部は外面には段を設けず、内外面ともに横方向の研磨調整を施す。両面とも黒色に仕上げる。1202は強く屈曲して口縁部は内傾し、口唇部は外へ折れる。内外面ともに調整は横方向の研磨である。焼成がやや悪い。1203は口縁部の外面に段を持ち、内面にも稜を作る。内外面ともに研磨調整である。1204は外反する口縁部で、外面には沈線を引く。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。

1205は深めの胴部を持ち、口縁部の屈曲はゆるい。内外面の調整は、横方向の研磨である。1206は

口縁部外面に段を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。1207は胴部からゆるい屈曲で口縁部が立ち上がる。内外面ともに横方向の研磨調整である。1208は口縁部が他に比べて分厚く、外面には段を持つ。調整は、外面が横方向の研磨、内面が貝殻条痕の後研磨である。1209は胴部の屈曲がゆるく、口縁部は直立する。口縁部外面には段を設けない。内外面の調整は、外面が横方向の研磨、内面が横方向の貝殻条痕後横方向の研磨である。1210は口縁部が内傾し、外面には段を持つ。内外面ともに研磨調整を施す。

1211は内傾する口縁部で、外面の段はない。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。1212は口縁部が内傾し、外面にはわずかに段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整で、外面は黒色に仕上げ、屈曲部には赤色顔料の塗付がわずかながら確認できる。1213は屈曲部から上位が他に比べ長い資料である。屈曲部は突帯状に突き出し、口縁部は内傾する。口縁部外面には段を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整で、外面の屈曲より下部には炭化物が付着する。口縁部の段の直下には焼成後の穿孔が認められる。1214は内傾する口縁部で、外面には段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。口唇部と外面屈曲部にわずかに赤色顔料が確認される。1215・1216は口縁部が厚く、内傾する。口縁部外面には段を設ける。1215は内外面ともに横方向の研磨調整を施す。1216は焼成不良で、器面の状態が悪く、調整は不明である。1217は比較的薄手の作りで、口縁部は内傾する。口縁部の外面には段を作る。内外面ともに横方向の研磨調整を施すが、内面には貝殻条痕の痕跡が残る。1218～1220は内傾する口縁部で、外面に段を持つ。いずれも内外面ともに横方向の研磨調整である。1221は内傾する口縁部で口縁端部を外に折るようにして段にする。調整は外面が器面の状態が悪いため不明であるが、内面は横方向の研磨調整である。1222は分厚い口縁部を持ち、口縁部外面には段を作る。内外面の調整は研磨である。1223は口縁部外面に段を持たない。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。1224は、口縁部が直立し、外面には段を持たない。内外面ともに横方向の研磨調整である。

1225は内傾する口縁部で、不明瞭ながら外面に段を持つ。内外面ともに横方向のナデ調整である。1226の口縁部は強く屈曲して内傾し、先端は外反して尖る。外面には段を設けない。内外面ともに横方向の研磨調整である。内外面ともに黒色に仕上げる。1227は内傾する口縁部で、外面には沈線を施して段の代わりとする。内外面ともに横方向の研磨調整である。1228は内傾する口縁部で、外面に段を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。1229は内傾する口縁部で、先端は尖る。外面の段は作らない。内外面ともに横方向の研磨調整である。1230・1231は同一個体である。胴屈曲部の外面直上に段を作る。また口縁部内面にも段を作る。内外面横方向の研磨調整で、黒色に仕上げる。

浅鉢L類（第120図）

1232は復元口径が42.3cmを測る。口唇部上端は平坦に整える。調整は、外面が擦過の後ナデ、内面が研磨である。外面には炭化物が厚く付着する。1233はわずかに内湾して立ち上がる。外面が貝殻条痕調整の後ナデ調整、内面が擦過調整である。1234は口縁部に突起を付す。調整は、外面が擦過の後ナデ、内面が研磨である。1235も口縁部に突起を持つ。内外面ともに研磨調整である。1236は口縁部断面が尖り気味になる。外面調整は擦過の後ナデ、内面調整はナデである。1237は口唇部上端を平坦に整える。内外面ともに研磨調整を施す。1238は口縁部に突起を持つ。内外面ともに調整は貝殻条痕の後ナデである。1239は口縁部に突起を持つ。突起は大小のリボン状突起を組み合わせたような形状

である。外面調整は貝殻条痕の後ナデ、内面調整は研磨である。外面には非常に分厚く炭化物の付着がある。AMS測定資料。1240は内外面ともに研磨調整を施す。1241は外面調整が貝殻条痕の後ナデ、内面調整が研磨である。外面にはわずかではあるが炭化物が付着する。1242は口縁部まで直線的に開いて立ち上がる。口縁部断面は先細りとなる。内外面ともに調整はナデである。1243は口縁部にリボン状突起を付す。調整は外面が貝殻条痕、内面が研磨である。1244の調整は、外面がナデ、内面が研磨である。外面は炭化物が付着する。

1245～1250は口縁部に突帯を貼り付けて刻目を施すか、直接刻目を施すものである。

1245は口唇部の上端に指で刻目を施す。内外面ともに研磨調整である。外面には炭化物の付着がある。AMS測定資料。1246は口唇部にほぼ接して突帯を貼り付け、棒状工具による刻目を施す。内外面ともにナデ調整である。外面には炭化物が付着する。1247も突帯を口唇部に接して貼り付け、棒状工具で刻目を施す。内外面ともにナデ調整で、外面には炭化物の付着が認められる。1248は突帯を口唇部に接して貼り付けるが、刻目原体については残存状態が悪く、不明である。内外面ともにナデ調整である。1249は口唇部の上端と外端を親指と人差し指でつまむようにして刻目を施す。調整は外面がナデ、内面が研磨である。1250は口唇部から0.6cmの位置に突帯を貼り付け、指による刻目を施す。外面は貝殻条痕調整、内面は研磨調整である。外面には炭化物が付着する。1251は底部の資料で丸底をなす。調整は外面が擦過の後ナデ、内面が研磨である。

浅鉢M類（第121図）

1252～1257はアンギンの圧痕を持つものである。

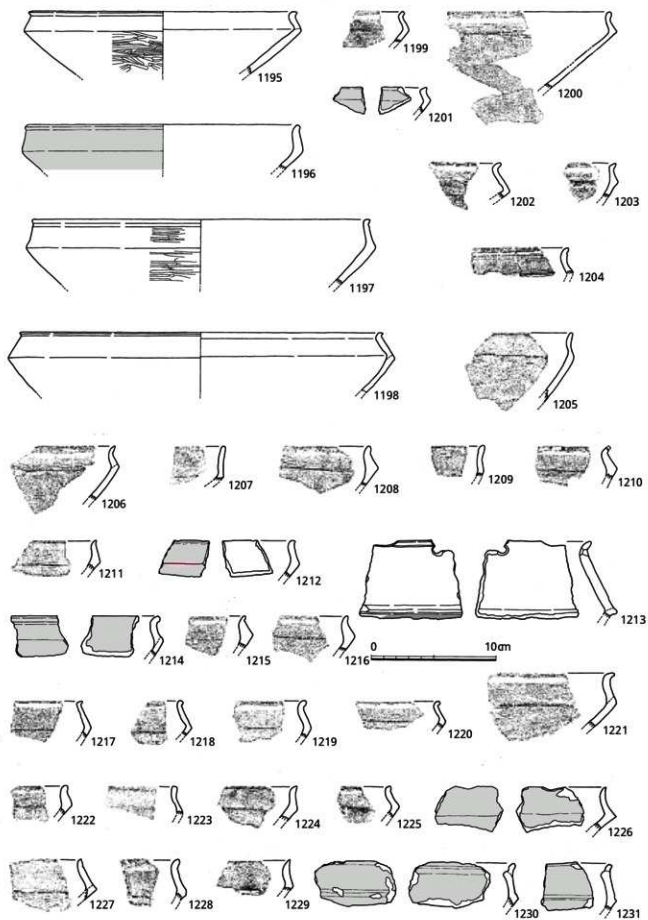
1252は圧痕部分と口縁部との境に段を持つ。口縁部断面は先細りとなる。外面の調整は口縁部分が貝殻条痕で、アンギンの部分には擦過を施す。内面はナデ調整である。1253は比較的薄手の資料で、アンギンの圧痕より上位の部分の幅が広い。調整は外面の口縁部付近が貝殻条痕の後ナデ、内面が基本的に擦過調整で口縁部付近のみである。外面には炭化物の付着が認められる。1254はアンギン圧痕部分とその上位の部分との境で強く屈曲する。内外面の調整はナデである。1255は底部付近の資料で、内面調整はナデである。1256も底部付近の資料で、内面の調整は研磨である。1257は粘土紐の輪積みの痕跡を外面に明瞭に残す。内面の調整は研磨である。

1258～1266は網目の圧痕を残すものである。

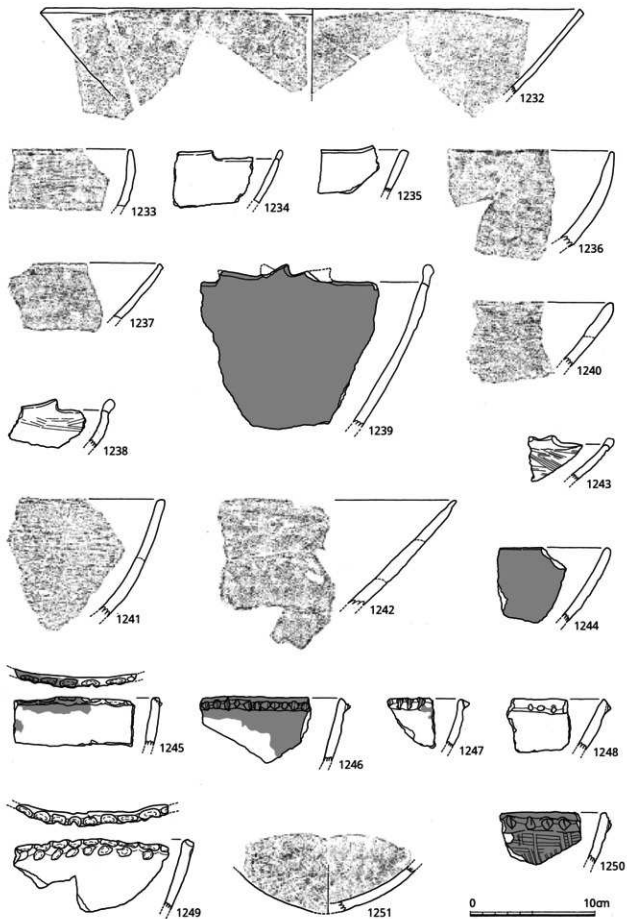
1258は復元口径34.6cmを測る。口縁部付近2cmほどを残して、外面には圧痕が残る。口縁部付近の外面調整と内面調整はともに貝殻条痕の後ナデである。外面には炭化物の厚い付着が認められる。1259は圧痕部分とその上位との境で強く屈曲する。内外面の調整は擦過の後ナデである。1260は圧痕より上位の部分の外面調整が貝殻条痕の後ナデ、内面調整がナデである。1261の内面調整は擦過の後ナデである。1262は屈曲を持つ。内面調整はナデである。1263の内面調整はナデである。1264はやや厚手の資料で、内面調整は擦過の後ナデである。1265もやや厚手の資料で内面調整は研磨である。1266は他の網目に比べ目が細かい。内面調整は研磨である。

1267は平織りの資料である。内面調整はナデである。

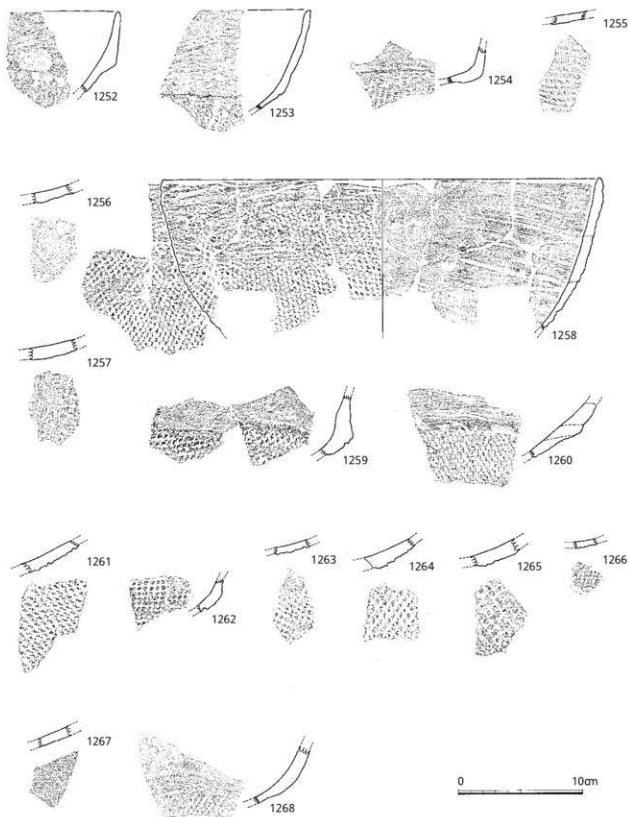
1268は組織痕が残るようであるが、種類は不明である。調整は外面が圧痕より上位はナデで、境の部分は擦過である。内面の調整はナデである。



第119図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器破片 (S = 1 / 3)



第120図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑦ (S = 1 / 3)



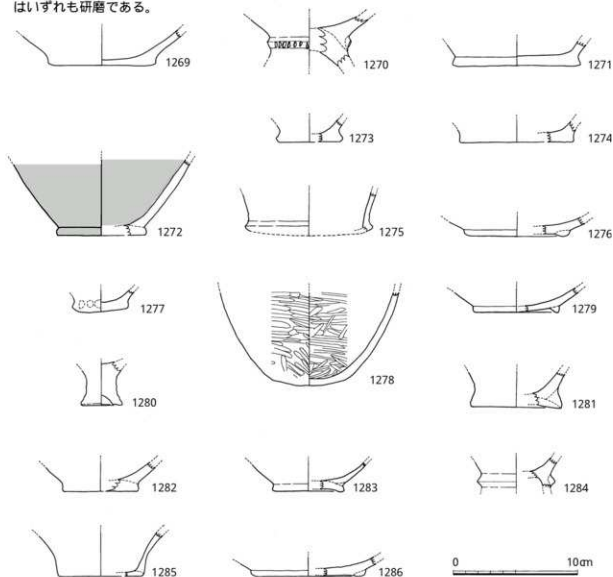
第121図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器⑦ (S = 1/3)

浅鉢底部・その他 (第122図)

1269は復元底径8.6cmを測る。内外面、底面いずれも研磨調整である。1270は高杯胴部の基部付近で、突帯を付し、突帯の下側に刻目を施す。内外面ともにナデ調整である。1271は復元底径10.2cmを

測る。調整は内外面がナデ、底面が研磨である。1272は復元底径6.9cmで、内外面、底面いずれも研磨調整で、黒色に仕上げる。1273は復元底径4.8cmを測る。調整はいずれもナデである。1274は復元底径8.9cmを測る。内外面の調整は研磨、底面の調整は擦過である。1275は丸底をなす底部で、復元底径は10.2cmを測る。調整はいずれも研磨である。1276は高台を持ち、復元底径7.3cmを測る。調整はいずれも研磨である。1277は丸底気味の底部で、底径は4.0cmを測る。調整はいずれもナデである。外面には指頭圧痕が残る。1278は丸底をなす。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。

1279は高台を持ち、復元底径は6.7cmを測る。調整はいずれも研磨である。1280は復元底径3.1cmを測る。上底をなし、調整はいずれもナデである。1281はわずかに上底をなし、復元底径は7.1cmを測る。調整は外面と底面がナデ、内面が研磨である。1282は復元底径5.8cmを測り、内外面の調整は研磨、底面はナデである。1283はわずかに上底をなし、復元底径は5.5cmを測る。調整はいずれも研磨である。1284は高杯胴部の基部で、突帯を持つ。刻目は施さない。内外面の調整は研磨である。1285は復元底径6.5cmで、調整はいずれも研磨である。1286は高台を持ち、復元口径は8.8cmを測る。調整はいずれも研磨である。



第122図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器(S = 1 / 3)

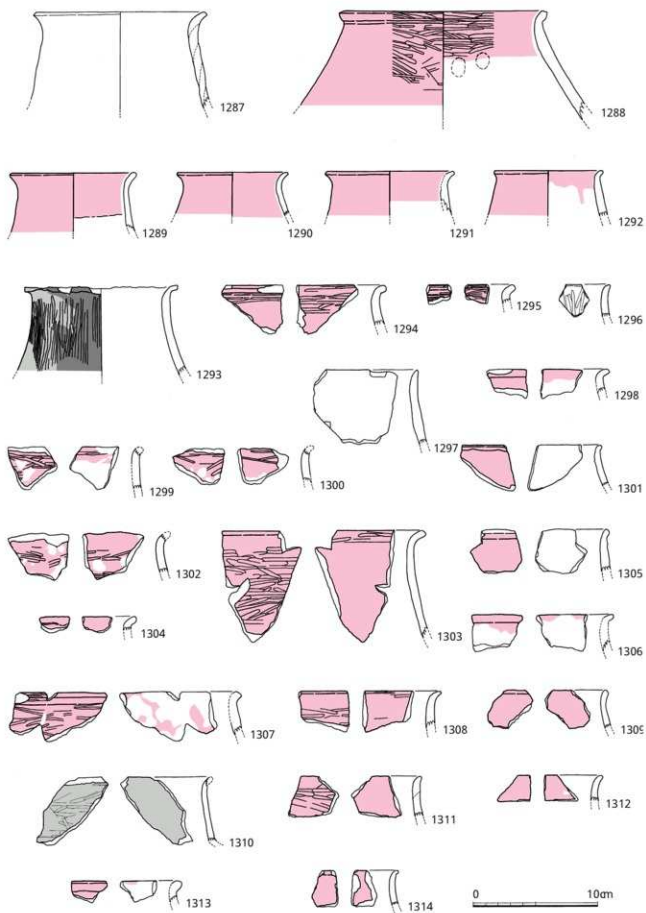
壺（第123図・第124図）

1287は復元口径が13.2cmを測る。頸部は内傾し、口縁部は外反する。粘土紐を1.5cmほどの幅に内傾接合で積み上げる。内外面ともナデ調整であるが、内面には貝殻条痕が残る。丹塗りは行わず、外面には黒斑がある。1288は復元口径が15.6cmを測る。頸部は強く内傾し、口縁部は外面を肥厚させる。調整は外面が横方向の研磨、内面がナデで、指頭圧痕が残るが、口縁部付近は横方向の研磨調整である。外面と内面の口縁部付近に丹塗りをを行う。1289～1292は小振りの口縁部で、復元口径は、1289は9.4cm、1290は8.7cm、1291は10.0cm、1292は8.5cmを測る。1290は器面の状態が悪く、調整は不明であるが、他は内外面とも研磨調整を施す。いずれも内外面に丹塗りを施す。1293は復元口径12.2cmを測る。頸部は内傾し、口縁部は外反する。調整は外面が縦方向の研磨を施し、内面はナデで、口縁部付近のみ横方向の研磨を施す。外面は黒色に仕上げる。外面には炭化物の付着がある。

1294は口縁部が外反し、外面には段を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整で、丹塗りを施す。1295は口唇部が折り曲げたように外反する。内外面ともに調整は横方向の研磨で、丹塗りを施す。1296の調整は外面が縦方向の研磨、内面が横方向の研磨で、丹塗りは施さない。1297の口縁部はさほど外反が強くなく、口唇部断面は尖る。調整は内外面ともにナデで、丹塗りは施さない。1298は口唇部を折り曲げたように外反させる。内外面ともに横方向の研磨調整で、両面に丹塗りをを行う。1299・1300は同一個体の可能性がある。いずれも口唇部を欠き、調整は内外面ともに横方向の研磨で、両面に他の資料に比べ厚く丹塗りを施す。1301は焼成が悪く、調整は不明であるが、外面には丹塗りを施している。口縁部外面に段を作る。1302は口唇部を欠くが、内外面ともに横方向の研磨で、両面に丹塗りを施す。

1303は口縁部を折り曲げるように強く外反させる。調整は外面が横方向の研磨で、内面は横方向のナデであるが口唇部付近は横方向の研磨である。内外面に丹塗りを施す。1304は口唇部の資料で、外面に段を持つ。内外面に横方向の研磨調整を施し、丹塗りをを行う。1305は焼成がやや不良である。内外面ともにナデ調整で、外面には丹塗りを施す。1306は口唇部を外側へ折り曲げるように外反させる。内外面ともに器面の剥落が著しいが、横方向の研磨調整を施し、丹塗りをを行う。1307は口唇部外面を肥厚させた段を作る。内面は器面の剥落が著しい。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、丹塗りをを行う。1308は口縁部が外反し、口唇部断面は尖る。内外面ともに横方向の研磨調整で、丹塗りを施す。1309は焼成が良くなく、器面の状態が悪いが、内外面に丹塗りを施す。1310は頸部の資料で、口唇部は欠く。外面は横方向の研磨調整、内面はナデ調整で、内外面ともに黒色に仕上げる。丹塗りは施さない。1311・1312は内外面ともに横方向の研磨調整を施し、丹塗りをを行う。1313は口唇部外面を肥厚させ段を作る。内面は器面が剥落するが、外面は横方向の研磨調整で、丹塗りを施す。1314は口唇部断面がやや尖り、外面には段を持つ。内外面ともに横方向の研磨調整で、丹塗りを施す。

1315は胴部最大径が26.1cmを測る。底部は丸底がつぶれたような平底と思われる、なで肩の肩部を持つ。外面の胴部下半は被熱によるものと思われる器面の剥落が著しい。調整は外面が研磨、内面がナデである。外面には丹塗りを施す。1316は胴部最大径が30.3cmを測る。外面には厚い丹塗りを施し、調整は不明である。内面はナデ調整で、丹塗りは行わず、器面の剥落が著しい。1317は底部から胴部下半にかけての資料で、復元底径は10.5cmを測る。底部はわずかに張り出しを持ち、器面の調整は内外面・底面いずれも貝殻条痕後軽くなる。外面は底部から高さ約6.4cmより上位に丹塗りを施す。



第123図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器群 (S = 1/3)

外面には黒斑が残る。1318は胴部から頸部の資料で、復元した胴部最大径は14.2cm、頸部の付根部分の復元径は9.0cmを測る。外面は横方向の研磨調整で、肩部と頸部の境には浅い段を作る。内面は胴部・肩部はナデ調整、頸部は研磨調整である。丹塗りは施さない。1319は頸部の資料で、復元した残存部分の最大径は17.2cmを測る。調整は外面が研磨、内面がナデで、両面に丹塗りを施す。内面は器面の剥落が著しい。

1320は頸部の資料で、内外面の調整はいずれも研磨であるが、外面は縦方向、内面は横方向に施す。内外面ともに丹塗りを施す。1321も頸部の資料で、外面は研磨調整、内面はナデ調整で、いずれも丹塗りを施す。1322も頸部の資料である。外面は横方向の研磨調整、内面はナデ調整で、いずれも丹塗りを施す。1323は頸部の上の部分で、口縁部は強く外反するようだが、欠損している。内外面ともに横方向の研磨調整で、丹塗りを施す。1324は頸部の資料で、外面は横方向の研磨調整、内面はナデ調整である。内面には粘土紐の跡が明瞭に残る。外傾接合である。内外面ともに丹塗りを施す。1325は肩部の資料で、頸部の立ち上がりがわずかに残る。外面には丹塗りを施すが、器面の剥落が著しい。内面調整はナデである。1326は肩部で、内面には粘土紐の積み上げの跡を残す。外面は研磨調整、内面はナデ調整で、内外面に丹塗りを施す。1327は肩部の資料で、器壁が厚く、比較的大型品である。外面は横方向の研磨調整、内面は横方向の貝殻条痕調整で、外面には丹塗りを施す。1328は小型の壺肩部で、内外面ともに研磨調整で、外面には羽状文を施す。内外面ともに黒色に仕上げる。

1329は肩部から頸部にかけての資料で、外面は横方向の研磨調整、内面はナデ調整を施し、内外面ともに黒色を呈する。外面は器面の剥落が著しい。1330は肩部の資料で、1327と同一個体の可能性もある。外面は横方向の研磨調整、内面は横方向の貝殻条痕調整である。外面には丹塗りを施し、黒斑が付く。頸部との境には浅い段を作るようである。1331は肩部の資料で、焼成が悪く、器面の状態が良くない。内外面ともにナデ調整で、外面には丹塗りを施す。

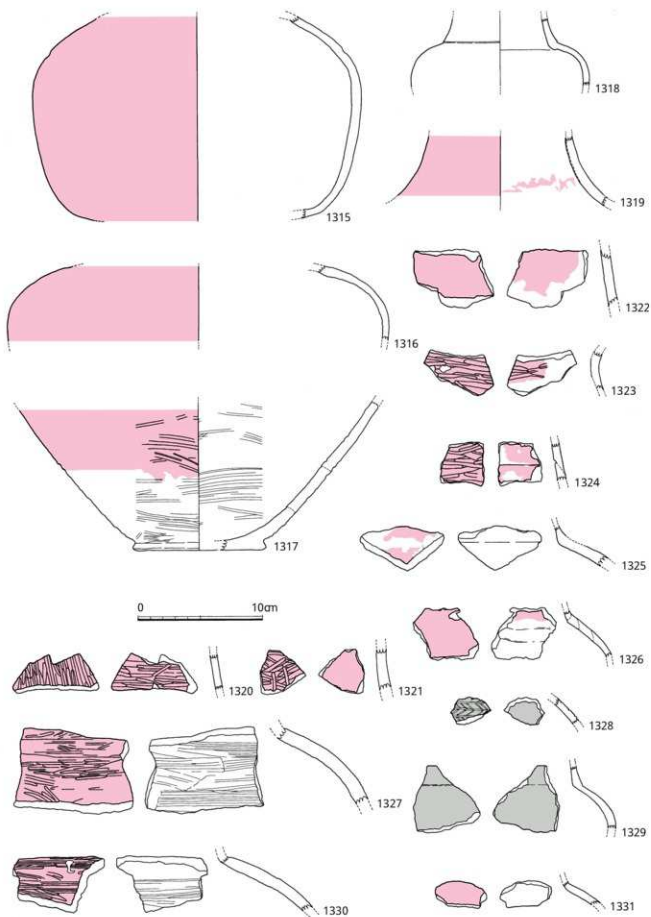
土製品（第125図）

1332は直径3.7cm、厚さ0.8cm、重量14.8gを測る。深鉢胴部片を用い、断面は研磨して面取りする。1333は直径3.8cm、厚さ0.8cm、重量13.7gを測る。深鉢胴部片を用いる。1334は直径2.7cm、厚さ0.8cm、重量5.8gを測り、深鉢胴部片を用いる。1335は直径4.2cm、厚さ0.9cm、重量13.7gを測る。深鉢胴部片を用いる。1336は直径4.0cm、厚さ0.6cm、重量12.0gを測り、浅鉢胴部片を用いている。1337は直径4.1cm、厚さ0.6cm、重量7.1gを測る。浅鉢胴部片を用いる。1338は直径4.1cm、厚さ0.8cm、重量9.2gを測る。深鉢C類胴部片を用いる。1339は直径3.5cm、厚さ0.7cm、重量10.9gを測る。深鉢C類胴部片を用いる。1340は直径4.0cm、厚さ1.0cm、重量22.1gを測る。深鉢胴部片を用い、断面は研磨して面取りする。1341は直径3.6cm、厚さ1.0cm、重量13.2gを測る。深鉢胴部片を用いる。

1342・1343は土製の紡錘車である。

1342はほぼ半分を欠損している。直径4.8cm、厚さ1.6cm、重量14.0gである。断面は両膨らみで側面には1条の沈線をめぐらす。表面はこのすぐ周囲と外縁沿いに1条ずつの沈線をめぐらし、鋸歯状の文様を配している。裏面にも表面と同様に内外に沈線をめぐらし、「V」字状の文様を反転させながら並べる。

1343は完形品であるが、焼成不良で状態はあまり良くない。直径4.0cm、厚さ1.3cm、重量22.0gで

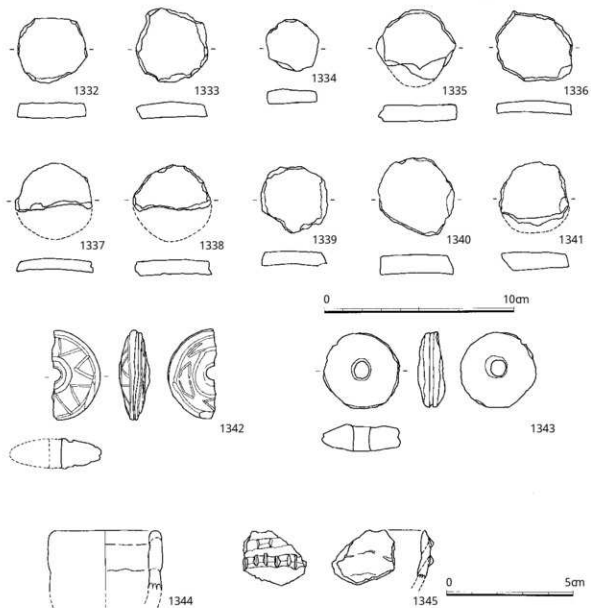


第124図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器片 (S = 1 / 3)

ある。断面は両膨らみで、側面に沈線を施すが、表裏面に文様は見られない。

1344・1345はミニチュア土器である。

1344は復元口径4.1cmを測る。輪積みの痕跡を残し、内外面ともにナデ調整である。1345は刻目突帯文土器のミニチュア土器で、2条の突帯を付す。内面には輪積みの痕跡を残し、内外面ともにナデ調整である。



第125図 縄文時代後期～弥生時代前期の土製品② (1332-1343 S = 1 / 2, 1344・1345 S = 2 / 3)

【参考文献】

橋口達也編 1984『石崎曲り田遺跡』福岡県教育委員会

藤尾慎一郎 1990『西部九州の刻目突帯文土器』『国立歴史民族博物館研究報告』第26集 国立歴史民族博物館

第17表 A・D区出土土器・土製品観察表①

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
50	1	J-27-J-29	Ⅱ-a・Ⅱb	貝殻条痕 磨過	磨過 ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	2	K-27	Ⅱ-a・Ⅱb	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	3	J-27	Ⅱ	磨過 貝殻条痕	磨過	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	4	G-30	Ⅱb	貝殻条痕	貝殻条痕+ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	5	H-28-H-29-I-29	Ⅱ-a・Ⅱb	磨過	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	
	6	I-27	Ⅱb	貝殻条痕+ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	7	I-28	Ⅱb	貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	口唇部剥目
	8	J-24	Ⅱ-a・Ⅱb	貝殻条痕	磨過+ナデ	黒褐色	明黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	9	J-27-K-27-K-28	Ⅱb	磨過	磨過	褐色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	10	J-28	Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
51	11	J-29	Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	12	K-28	Ⅱb	磨過	磨過	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	13	K-30	Ⅱb	貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	14	K-30	Ⅱb	貝殻条痕+ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	15	K-31	Ⅱb	磨過+ナデ	磨過+ナデ	にぶい黄褐色	粗灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	16	L-26	Ⅱb	磨過	貝殻条痕	灰黄褐色	黒褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	17	L-26	Ⅱb	磨過	磨過	黄灰色	にぶい黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	18	L-26-M-26	Ⅱ-a・Ⅱb	貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	にぶい黄褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	19	M-22	Ⅱb	貝殻条痕	貝殻条痕+ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
52	20	M-26	Ⅱb	磨過	貝殻条痕・研磨	にぶい黄褐色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	21	M-26	Ⅱ-a・Ⅱb	磨過+ナデ	貝殻条痕+ナデ	にぶい黄褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	22	M-26	Ⅱb	貝殻条痕	貝殻条痕	黒褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	23	M-30	Ⅱb	刷毛目+ナデ	刷毛目	浅黄褐色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	24	N-26	Ⅳ	貝殻条痕	貝殻条痕+ナデ	黄褐色	にぶい黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	25	I-28	Ⅱa	ナデ	ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	26	J-29	Ⅱa	磨過	ナデ	灰褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	27	K-30	Ⅱa	磨過+ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
53	28	M-24	Ⅱa	貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	29	M-24	Ⅱa	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	30	M-26	Ⅱa	磨過	磨過	にぶい黄褐色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
	31	J-25	Ⅱc	ナデ	ナデ	浅黄色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	焼成前穿孔
	32	H-29	Ⅱ	貝殻条痕	貝殻条痕+ナデ	明黄褐色	黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	33	I-29	Ⅱb	貝殻条痕	磨過	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	34	L-26-I-27-M-26-K-31	Ⅱc・Ⅱa・Ⅱb	貝殻条痕+ナデ	貝殻条痕+ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	35	N-24-M-24	Ⅱ-a・Ⅱb	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	リボン状突起
	36	I-28-I-29-J-29-K-27	Ⅱ・Ⅱc・Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	明黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	37	K-27-K-28-K-29	Ⅱ-a・Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	明黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	36と同一個体
54	I-29	Ⅱc・Ⅱb	貝殻条痕+ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	ヒレ状突起	

第18表 A・D区出土土器・土製品観察表②

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
55	39	N-26	Ⅲb	貝殻条痕・擦過	貝殻条痕・ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	40	J-26・J-29・K-28	Ⅲb・Ⅱ	擦過・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	41	J-27	Ⅱ	貝殻条痕・擦過	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	42	J-28・J-29・J-27・K-28	Ⅱ・Ⅲa・Ⅲb	貝殻条痕・擦過	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	41と同一個体
	43	J-27	Ⅲ	擦過・ナデ	ナデ	褐色	明黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
56	44	K-27	Ⅲb	貝殻条痕	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	45	K-27	Ⅲb	ナデ	ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	46	K-27	Ⅱ・Ⅲb	刷毛目・ナデ	ナデ	浅黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	47			刷毛目・ナデ	ナデ	浅黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	突起・6と同一個体
	48	M-26	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	49	N-24	Ⅲb	擦過	貝殻条痕・ナデ・擦過・ナデ	にぶい褐色	黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	50	H-29	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
	51	J-25	Ⅱa	貝殻条痕・擦過	擦過	灰黄色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	
	52	K-30	Ⅲa	擦過	擦過	灰褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	
	53	K-30	Ⅲa	貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕・ナデ	浅黄色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
57	54	O-22	Ⅱa	擦過	擦過	黄灰色	暗黄灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	55	K-28	Ⅲc	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	56	H-29	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	57	H-29	Ⅱa	研磨	研磨	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	58	J-25・J-27	Ⅲc	研磨	研磨	にぶい褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	59	I-28	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	角閃石・長石・石英	
	60	I-28	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	61	H-29	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	62	K-25	Ⅲb	研磨	貝殻条痕・研磨	赤褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	63	I-29	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	褐色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
57	64	J-28	Ⅲb	ナデ	ナデ	明褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	65	J-25	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	66	J-27	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	67	I-28	Ⅱa	研磨	研磨	明赤褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	68	F-30	Ⅲa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	69	J-29	Ⅲa	ナデ	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	70	M-24	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
	71	M-24	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英	
	72	M-26	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	73	K-25	Ⅱa	研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
74	I-28	Ⅲb	研磨	研磨	明赤褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
75	M-28	Ⅲb	研磨	研磨	黒褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
76	N-26	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		

第19表 A・D区出土土器・土製品観察表③

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考	
				外 面	内 面	外 面	内 面				
57	77	M-29	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	78	K-31	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	79	M-21	Ⅲb	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	80	J-27	Ⅱ	ナデ 磨透	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	81	N-21	Ⅲb	ナデ	研磨	にぶい赤褐色	褐灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	82	M-24	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	83	M-26	Ⅲb	研磨	研磨	明赤褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	84	L-30	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	85	L-30	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	86	O-23	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	黒褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	87	K-25	Ⅲb	研磨	ナデ ナデ・研磨	明赤褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英		
	88	M-24	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	89	N-22	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	90	M-26	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	91	K-27	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい赤褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母		
	58	92	K-30	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英	
		93	O-22	Ⅲb	研磨	貝殻糸痕・研磨	黒褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
		94	K-29	Ⅲb	ナデ	研磨	褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
		95	J-30	Ⅲb	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
96		N-22	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
97		N-22	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
98		M-24	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
99		N-22	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
100		M-28	Ⅲb	研磨	貝殻糸痕・研磨	黒褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母		
101		K-30	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	灰褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
102		D区		ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
103		N-22	Ⅲa	研磨	研磨	褐色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
104		F-30	Ⅲa	研磨	研磨	褐色	浅黄褐色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
105		M-23	Ⅲa	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
106	N-21	Ⅲc	研磨	研磨	褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
107	J-30	Ⅲc	研磨	研磨	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
108	M-24	Ⅲc	研磨	研磨	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
109	L-30・L-31	Ⅲb	研磨 貝殻糸痕・研磨	研磨 ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
110	L-31	Ⅲb	研磨	研磨	黒褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
111	L-23	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
112	M-24	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
113	N-24	Ⅲa	研磨	研磨	灰褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
114	K-29	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	褐灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子			

第20表 A・D区出土土器・土製品観察表④

区	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
58	115	N-21	Ⅲb	研磨	研磨	灰褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	116	N-24	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	117	K-23	Ⅲb	研磨	研磨	黒褐色	暗赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
59	118	M-24・O-22	Ⅱa・Ⅱb	研磨	研磨	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	119	M-28	Ⅱa	研磨	貝殻糸痕・ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	120	J-27	Ⅲb	研磨・ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	121	J-28	Ⅲb	ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	122	G-31	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	123	K-28	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	124	J-29・K-31	Ⅱa・Ⅱc	研磨・ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	125	D区		貝殻糸痕・ナデ	貝殻糸痕・ナデ	淡黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	126	M-22	Ⅲb	ナデ	貝殻糸痕・ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	127	I-27	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	128	K-30	Ⅲb	貝殻糸痕・研磨	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	129	M-23	Ⅲb	研磨	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	130	M-24	Ⅲb	研磨	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	131	M-24	Ⅲb	貝殻糸痕・研磨	貝殻糸痕・研磨	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
132	M-24	Ⅲb	研磨	ナデ	赤褐色	にぶい赤褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
133	M-28	Ⅱa	研磨	ナデ	褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
134	N-24	Ⅲb	研磨	研磨	黒褐色	にぶい赤褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
60	135	J-27・J-28	Ⅲb	貝殻糸痕・ナデ	貝殻糸痕・ナデ	黒褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
61	136	O-22	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け
	137	H-28	Ⅲb	貝殻糸痕	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	138	H-30	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	139	I-29	Ⅲb	貝殻糸痕・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	口唇部剥目
	140	J-28	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	141	J-31	Ⅲb	貝殻糸痕・ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	142	K-23	Ⅲb	貝殻糸痕・ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	143	K-24	Ⅲb	磨過	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	144	K-30	Ⅲb	ナデ	ナデ	補灰色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	145	L-23	Ⅲb	ナデ	ナデ	暗灰黄色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	146	L-30	Ⅲb	貝殻糸痕・ナデ	ナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	147	O-22	Ⅱa・Ⅱb	貝殻糸痕・ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	148	O-22	Ⅱa・Ⅱb	貝殻糸痕・ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け・147と同一体
	149	K-30	Ⅱa	貝殻糸痕・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰白色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	150	H-28	Ⅱ	貝殻糸痕	ナデ	にぶい黄褐色	明黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	口唇部剥目
151	J-25	Ⅱc	貝殻糸痕・ナデ	ナデ	黄褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
62	152	G-30	Ⅲb	ナデ	ナデ	補灰色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	

第21表 A・D区出土土器・土製品観察表⑤

器	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
	153	G-29	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	焼成後穿孔
	154	H-29	Ⅲb	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	
	155	H-30	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	156	H-30	Ⅲb	ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい赤褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	157	J-24	Ⅲb	貝殻条痕	磨過・ナデ	にぶい黄褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	突起
	158	J-28	Ⅲb	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	凹点
	159	K-23	Ⅲb	ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	160	K-23	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	凹点
	161	K-23	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	162	K-23	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	163	K-27	Ⅲb	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	164	K-27	Ⅲb	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	165	K-27	Ⅲb	ナデ	ナデ	暗灰黄色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	166	K-28	Ⅲb	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	167	K-28	Ⅲb	ナデ	ナデ	黒褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
62	168	M-23・M-24・L-23	Ⅱc・Ⅲa・Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	169	M-22	Ⅲb	ナデ	ナデ	淡黄色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	170	O-22	Ⅲb	ナデ	ナデ	明赤褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	171	K-27	Ⅲa	ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	172	I-29	Ⅱ	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	突起
	173	K-29	Ⅲa	ナデ	ナデ	明黄褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	174	M-22	Ⅲc	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	175	F-30	Ⅲb	磨過・ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	176	F-30	Ⅲb	磨過	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	177	H-29	Ⅲb	ナデ	磨過	灰黄色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	178	J-28	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	179	K-27・K-28	Ⅲc・Ⅲb	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	180	K-28	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	181	K-30	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	淡黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	182	L-25	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
63	183	L-28	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	184	M-22	Ⅲb	ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	185	M-28	Ⅲb	ナデ	磨過・ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	186	N-22	Ⅲb	ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	187	O-21	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	188	G-29	Ⅲa	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英	
	189	H-29	Ⅲa	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	190	J-25	Ⅲa	ナデ	ナデ	褐色	にぶい赤褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	

第22表 A・D区出土土器・土製品観察表⑥

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
63	191	O-22	Ⅲa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	黒褐色	良好	角閃石・長石・石英	
	192	K-29	Ⅲc	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	193	N-21	Ⅲc	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	194	F-30	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け
	195	H-29	Ⅲb	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け
	196	H-29	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	貼り付け
	197	H-29	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	黒褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け
	198	H-30	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け
	199	I-29	Ⅲb	ナデ	ナデ	明赤褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け
	200	I-29・H-29	Ⅲb	貝殻条痕	ナデ	にぶい褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	貼り付け
	201	J-29	Ⅲb	ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	良	角閃石・長石・石英	貼り付け
	202	L-23	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け
	203	N-21	Ⅲb	ナデ	磨過	黒褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け
	204	N-23	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け
	205	O-21	Ⅲb	磨過・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	粗灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	貼り付け
	206	I-29	Ⅲa	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	貼り付け
	207	O-22	Ⅲa	ナデ	ナデ	灰黄色	灰白色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け
	208	H-28	Ⅱ	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け
	209	K-27	Ⅱ	ナデ	ナデ	にぶい褐色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	貼り付け
	210	A区	黄土	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け
64	211	K-29	Ⅲa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	浅黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・指
	212	L-31	Ⅲa	貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・指
	213	J-27	Ⅱ	磨過	ナデ	明黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	刻目原体・指
	214	G-31	Ⅲb	貝殻条痕・ナデ	磨過	にぶい褐色	黒褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	刻目原体・指
	215	G-31	Ⅲb	貝殻条痕	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	刻目原体・指
	216	G-31	Ⅲb	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	刻目原体・指
	217	L-31	Ⅲb	貝殻条痕・ナデ	磨過・ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	刻目原体・指
	218	M-30	Ⅲb	ナデ	ナデ	浅黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	刻目 原 体・指・AMS 測定資料
	219	K-30・K-34	Ⅲa	貝殻条痕	ナデ	灰色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・指
	220	L-30	Ⅲa	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・指
	221	M-30	Ⅲa	貝殻条痕	ナデ	にぶい褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	刻目原体・指
	222	D-31	Va	ナデ	磨過・ナデ	浅黄色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・指
	223	I-29	Ⅲb	ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒
	224	G-30	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	刻目原体・ハウ
	225	O-22	Ⅲa	ナデ	ナデ	浅黄色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・ハウ
	226	K-25	Ⅲc	ナデ	ナデ	浅黄色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・ハウ
	227	L-31	Ⅲa	ナデ	ナデ	浅黄色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・貝殻

第23表 A・D区出土土器・土製品観察表⑦

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整			色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	底 面	外 面	内 面			
	228	I-29	Ⅲb	ナデ	ナデ	擦過	浅黄色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	229	K-30	Ⅲa	研磨	ナデ	研磨	橙色	灰白色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	230	I-28	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	橙色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	231	K-24	Ⅲb	ナデ	ナデ	擦過	にぶい橙色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	232	L-24	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	233	M-23	Ⅲb	研磨	研磨	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	234	N-21	Ⅲa	ナデ	ナデ	ナデ	橙色	橙色	良	角閃石・長石・石英	
	235	N-25	Ⅲc	研磨	研磨	研磨	橙色	橙色	良	角閃石・長石・石英	
	236	G-30	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	237	H-29	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	238	I-29	Ⅲb	貝殻赤灰・ナデ	研磨	研磨	にぶい橙色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	239	K-27	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
65	240	K-28	Ⅲb	貝殻赤灰・ナデ	ナデ	組織版	にぶい橙色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	籠目
	241	L-31	Ⅲb	貝殻赤灰・ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	242	M-22	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	橙色	にぶい橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	243	N-26	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	244	J-25	Ⅲa	擦過	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	245	O-22	Ⅲa	ナデ	ナデ	研磨	橙色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	246	G-31	Ⅲc	貝殻赤灰・ナデ	ナデ	ナデ	橙色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	247	H-29	Ⅲb	貝殻赤灰・ナデ	ナデ	ナデ	橙色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	248	I-29	Ⅲc・Ⅲb	貝殻赤灰・ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	249	K-25	Ⅲb	貝殻赤灰・ナデ	ナデ	ナデ	にぶい褐色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	250	K-27	Ⅲb	ナデ	ナデ	擦過	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	251	L-28	Ⅲb	擦過・ナデ	ナデ	擦過	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	252	K-24	Ⅲa	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英	
	253	K-30	Ⅲa	ナデ	ナデ	ナデ	明褐色	にぶい橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	254	H-30	Ⅲb	貝殻赤灰・ナデ	擦過	ナデ	にぶい黄褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	255	L-26	Ⅲb	貝殻赤灰・ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	256	L-31	Ⅲb	貝殻赤灰・ナデ	ナデ	ナデ	にぶい橙色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	257	K-28・M-26	Ⅲb	貝殻赤灰	ナデ	貝殻赤灰	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
66	258	N-23	Ⅲb	ナデ	ナデ	組織版	橙色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	籠目
	259	N-25	Ⅲb	貝殻赤灰	貝殻赤灰・ナデ	擦過	にぶい橙色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	260	I-28	Ⅲa	貝殻赤灰・ナデ	ナデ	貝殻赤灰	橙色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	261	K-24	Ⅲa	貝殻赤灰	ナデ	ナデ	橙色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	262	H-30	Ⅲc	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	263	H-30	Ⅲb	ナデ	貝殻赤灰		褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	264	O-22	Ⅲb	ナデ	ナデ	組織版	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	アソキ

第24表 A・D区出土土器・土製品観察表⑧

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考	
				外 面	内 面	外 面	内 面				
67	265	G-30-H-30	Ⅲb	研磨	研磨	暗灰黄色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	266	I-28	Ⅲb	研磨	研磨	黄灰色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	267	K-27	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英		
	268	L-23	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	269	L-31	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	270	M-22	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	271	M-22	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	浅黄色	良好	角閃石・長石		
	272	M-22	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	長石・石英・赤色粒子		
	273	M-24	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	274	M-29	Ⅲb	研磨	研磨	黒色	にぶい黄褐色	良	長石・石英		
	275	H-29	Ⅱa	研磨	研磨	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	276	L-30	Ⅱa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	277	M-31	Ⅲa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	浅黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	突起	
	278	N-24	Ⅲa	研磨	研磨	黒褐色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英		
	279	A区	良磁糸板・研磨		研磨	明赤褐色	明赤褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	280	M-29	Ⅱa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	黒	良	角閃石・長石・石英		
	281	O-22	Ⅱ	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	282	K-28-x-29+I-28	Ⅱa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母		
	283	G-30	Ⅲb	研磨	研磨	暗灰黄色	灰黄褐色	良好	石英・赤色粒子		
	284	G-31	Ⅲb	研磨	研磨	浅黄色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	285	G-31	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	浅黄色	良好	石英・赤色粒子・金色雲母		
	286	H-29	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良好	長石・石英・赤色粒子・金色雲母		
	68	287	H-29	Ⅲb	研磨	研磨	黒褐色	暗灰黄色	良好	長石・石英・赤色粒子	
		288	I-28	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	長石・石英・赤色粒子	
		289	I-29	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
		290	J-27	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
291		K-23	Ⅲb	研磨	研磨	暗灰黄色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
292		K-27	Ⅲb	研磨	研磨	暗灰黄色	暗灰黄色	良好	長石・石英・金色雲母		
293		K-28	Ⅲb	研磨	研磨	黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母		
294		L-25	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・金色雲母		
295		N-21	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
296		O-24	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	赤色顔料塗付	
297		I-25	Ⅱa	研磨	研磨	浅黄色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
298		J-29	Ⅱa	研磨	研磨	灰黄褐色	黒褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	赤色顔料塗付	
299		K-28	Ⅱc・Ⅱa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英		
300		B-31	Ⅱ	研磨	研磨	明赤褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英		
301		K-25	Ⅱa	研磨	研磨	暗灰黄色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英		
302		K-30	Ⅱa	研磨	研磨	灰黄褐色	黒褐色	良好	長石・石英		

第25表 A・D区出土土器・土製品観察表⑨

器	番号	出土グリッド	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
68	303	F-31	Ⅱ	研磨	研磨	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	ヒレ状突起
	304	G-30	擾乱	研磨	研磨	浅黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	
	305	J-30	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	306	K-28	Ⅱa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	赤色顔料塗付
69	307	I-28・I-29	Ⅱc・Ⅱb・ Ⅱ	研磨	研磨	にぶい黄褐色	褐灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	ヒレ状突起
	308	M-23・K-23	Ⅱc・Ⅱb	研磨	研磨	灰黄色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	凹点
	309	K-27	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	突起
	310	M-24	Ⅱa・Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	
	311	J-27	Ⅱ	研磨	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	312	N-22	Ⅱa・Ⅱb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	浅黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	313	I-27	Ⅲb	研磨	研磨	黄褐色	黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	
	314	K-30	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	凹点
	315	M-24	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	
	316	M-24	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	
	317	M-24	Ⅲb	研磨	研磨	暗灰黄色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	316と同一個体か
	318	M-28	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	突起・凹点
	319	M-29	Ⅲb	研磨	研磨	暗灰黄色	にぶい黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	320	N-24	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	凹点
	321	N-24	Ⅲb	研磨	研磨	暗灰黄色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	322	O-22	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	凹点
323	O-22	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土		
324	M-22	Ⅱa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土		
325	J-28	Ⅱc	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	不良	角閃石・長石・石英		
326	L-24	Ⅱc	研磨	研磨	灰黄色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土		
327	M-22	Ⅱc	研磨	研磨	にぶい黄褐色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土		
328	N-23	Ⅱc	研磨	研磨	明黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英		
329	A区		研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英		
70	330	N-28	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	
	331	M-24	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
71	332	E-31	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	333	J-29	Ⅱa	研磨	研磨	灰黄色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英	
	334	L-31	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	リボン状突起
	335	P-22	Ⅱ・Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	黄灰色	不良	角閃石・長石・石英	リボン状突起
	336	P-22	Ⅲb	研磨	研磨	黄灰色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英	
	337	I-29	Ⅲb	研磨	研磨	暗灰黄色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	338	I-28・K-30	Ⅱa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
339	D-30	Va	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土		
340	F-30	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英		

第26表 A・D区出土土器・土製品観察表⑩

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
71	341	F-30	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	342	G-29・G-30	Ⅱa・Ⅲb	研磨	研磨	黒褐色	黒褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	343	G-30	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・赤色粒子	
	344	H-29	Ⅲb	研磨	研磨	黒褐色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	345	H-29	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	346	H-29	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	灰黄色	良好	長石・石英・赤色粒子	
	347	H-29	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	348	H-29	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	ヒレ状突起
	349	H-30	Ⅲb	研磨	研磨	暗灰黄色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	350	H-30	Ⅲb	研磨	研磨	暗灰黄色	灰オリーブ色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	351	I-28	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	にぶい黄褐色	不良	角閃石・長石・石英	
72	352	I-29	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	353	J-25	Ⅲb	研磨	研磨	黒褐色	黒褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	354	J-25	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	355	I-29	Ⅱa・Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	356	M-28	Ⅲb	研磨	研磨	黄灰色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	357	N-21	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	358	N-22	Ⅲb	研磨	研磨	黄灰色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	359	O-21	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英	ヒレ状突起
	360	H-29	Ⅲa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	361	H-30	Ⅲa	研磨	研磨	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英	ヒレ状突起
	362	J-24	Ⅲa	研磨	研磨	浅黄褐色	にぶい黄褐色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
73	363	J-25	Ⅲa	研磨	研磨	灰白色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	364	K-28	Ⅲa	研磨	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	365	K-31	Ⅲa			褐色	褐色	不良	角閃石・長石・石英・金色雲母	リボン状突起
	366	G-30	Ⅲc	研磨	研磨	にぶい赤褐色	灰褐色	良好	角閃石・長石・石英	
	367	M-22	Ⅲc	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	368	N-20	Ⅲc	研磨	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	369	H-28	Ⅱ	研磨	研磨	暗灰黄色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	370	J-27	Ⅱ	研磨	研磨	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	371	K-23	Ⅱ	研磨	研磨	褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	372	O-20	Ⅱ	研磨	研磨	灰黄褐色	補灰色	良好	角閃石・長石・石英	
	373	N-24	Ⅱa・Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	リボン状突起・赤色顔料塗付・焼成前穿孔
374	L-28	Ⅲa	研磨	研磨	灰褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
73	375	I-28・H-29	Ⅲ・Ⅲc・Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	焼成後穿孔・赤色顔料塗付
	376	M-24・N-24	Ⅱa・Ⅲb	研磨	研磨	褐色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	377	G-31	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	378	H-29	Ⅲb	研磨	研磨	黒色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	

第27表 A・D区出土土器・土製品観察表①

図	番号	出土グリッド	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
73	379	I-28	Ⅲb	磨過・研磨	研磨	灰黄褐色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	380	I-28	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	381	I-29	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	382	J-27	Ⅲb	研磨	研磨	明赤褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	赤色顔料塗付
	383	I-29	Ⅲb	研磨	研磨	灰白色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英	赤色顔料塗付・七 し状突起
	384	J-28	Ⅲb	研磨	研磨	暗灰黄色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	385	K-27・K-28	Ⅱa・Ⅱb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	386	K-27	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	387	M-26	Ⅲb	研磨	研磨	補灰色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英	赤色顔料塗付
	388	K-28	Ⅲb	研磨	研磨	浅黄褐色	浅黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	赤色顔料塗付
	389	M-26	Ⅱc・Ⅲa・ Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英	
	390	J-28	Ⅱa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	赤色顔料塗付
	391	M-26	Ⅱa・Ⅱb	研磨	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英	赤色顔料塗付
	392	N-24	Ⅲa	ナデ	ナデ	浅黄色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
	393	M-24	Ⅱc	研磨	研磨	にぶい褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	394	J-25	Ⅱc	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
	395	J-27	Ⅱ	研磨	研磨	灰白色	灰白色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	396	H-30	Ⅱa	研磨	研磨	灰黄褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英	
	397	L-27	Ⅱa	研磨	研磨	灰黄色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	赤色顔料塗付
398	M-25	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	赤色顔料塗付	
74	399	F-30	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	補灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整・研磨
400	K-25	Ⅱa	研磨	研磨	浅黄色	灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	底面調整・研磨・赤 色顔料塗付	
401	M-26	Ⅱa	研磨	研磨	灰白色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英	底面調整・研磨	
402	K-30	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	暗灰黄色	良好	長石・石英・赤色粒子		
403	L-24	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英・黒曜石		
404	J-28	Ⅱa	研磨	研磨	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	焼成後穿孔	
405	K-23	Ⅱc	研磨	研磨	浅黄色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
406	L-23	Ⅱc	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英		
75	407	I-28・K-28	Ⅲb	研磨 貝殻茶痕	研磨	灰褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	赤色顔料塗付
	408	M-26	Ⅲb	磨過	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	突起
	409	F-30	Ⅲb	貝殻茶痕・研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	410	H-30	Ⅲb	磨過	磨過	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	411	I-28	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	412	I-28	Ⅲb	ナデ	研磨	オリーブ黒色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	413	J-27	Ⅲb	貝殻茶痕・ナデ	磨過 ナデ	にぶい黄褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	414	K-25	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	415	K-28	Ⅲb	貝殻茶痕・研磨	貝殻茶痕	にぶい赤褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	416	L-25	Ⅲb	ナデ	研磨	にぶい褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	

第28表 A・D区出土土器・土製品観察表12

図	番号	出土グリッド	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
75	417	L-25	Ⅲb	ナデ	研磨	にぶい褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	418	L-27	Ⅲb	擦過	擦過	黒褐色	黒褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	焼成後穿孔
	419	L-30-L-31・K-30	Ⅲa・Ⅲb	貝殻糸痕	研磨	褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
76	420	M-26	Ⅲb	貝殻糸痕・研磨	貝殻糸痕・研磨	にぶい赤褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	421	M-26	Ⅲb	貝殻糸痕・ナデ	貝殻糸痕・研磨	灰黄褐色	黒褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	422	N-24	Ⅲb	ナデ	研磨	褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	423	N-26	Ⅲb	擦過	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	424	M-26	Ⅲa・Ⅲb	ケズリ	ケズリ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	425	K-30	Ⅲa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	焼成後穿孔
	426	L-25	Ⅲa	貝殻糸痕・ナデ	ナデ	黄灰色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
	427	O-22	Ⅲa	貝殻糸痕・研磨	貝殻糸痕・研磨	にぶい褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	428	M-23	Ⅲc	貝殻糸痕・研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	429	L-23	Ⅲc	貝殻糸痕・ナデ	ナデ	褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英	列目原体・指
430	I-28-I-29	Ⅲc・Ⅲa	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整・ナデ	
77	431	J-28-L-28・M-26	Ⅲb	貝殻糸痕 屈曲痕	貝殻糸痕・ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	アンギン
	432	K-27-L-26・L-27・M-26	Ⅲ・Ⅲa・Ⅲb	貝殻糸痕 屈曲痕	貝殻糸痕・ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	アンギン、431と同一体
	433	K-30	Ⅲb	屈曲痕	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	アンギン
	434		Ⅲb	屈曲痕・ナデ	研磨	褐色	黒褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	アンギン
	435	H-30	Ⅲb	屈曲痕	ナデ	にぶい黄褐色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	アンギン
	436	I-28	Ⅲb	屈曲痕	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	アンギン
	437	J-24	Ⅲb	屈曲痕	ナデ	黄灰色	黒褐色	良好	角閃石・長石・石英・金色雲母	アンギン
	438	J-29	Ⅲb	屈曲痕	研磨	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	アンギン
	439	N-24	Ⅲb	屈曲痕	研磨	にぶい黄褐色	黒褐色	良好	角閃石・長石・石英	アンギン
	440	J-25	Ⅲ	屈曲痕	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	アンギン
	441	J-25	Ⅲ	屈曲痕	ナデ	灰黄色	黒褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	アンギン
	442	I-28	Ⅲc	貝殻糸痕 擦過 屈曲痕	貝殻糸痕	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	縦目
	443	H-29	Ⅲb	擦過 屈曲痕	擦過	灰黄褐色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	縦目
	444	H-30	Ⅲb	貝殻糸痕・ナデ 屈曲痕	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	縦目
445	K-27	Ⅲb	ナデ 屈曲痕	ナデ	明赤褐色	灰褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	縦目	
446	I-29	Ⅲb	貝殻糸痕 擦過 屈曲痕	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	縦目	
447	B-31	Ⅲc	屈曲痕	研磨	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	縦目	
448	H-29	Ⅲb	屈曲痕	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	縦目	
78	449	J-28	Ⅲb	屈曲痕	研磨	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	縦目
	450	N-26	Ⅲb	屈曲痕	研磨	にぶい褐色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	縦目
	451	N-24	Ⅲa・Ⅲb	擦過 屈曲痕	ナデ	にぶい黄褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英	縦目・AMS測定資料
	452	M-28	Ⅲb	ナデ 屈曲痕	研磨	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	縦目
	453	K-24	Ⅲb	屈曲痕	ナデ	にぶい黄褐色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	縦目
	454	K-24	Ⅲb	擦過	擦過・ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	455	M-24	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	

第29表 A・D区出土土器・土製品観察表⑬

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整			色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面		外 面	内 面			
78	456	I-28	Ⅱa	研磨	研磨		にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	457	I-29	Ⅲb	研磨	研磨		にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	赤色顔料塗付
図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整			色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	底 面	外 面	内 面			
79	458	H-30	Ⅲb	研磨	研磨	ナデ	浅黄色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	459	I-29	Ⅲb	研磨	研磨	擦過	灰白色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	460	J-28	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい褐色	浅黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	461	K-25	Ⅲb	ナデ	ナデ		褐色	淡黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	462	L-26	Ⅲb	研磨	研磨	擦過・研磨	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	463	L-26	Ⅲb	研磨	研磨	擦過・研磨	にぶい褐色	黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	
	464	M-29	Ⅲb	研磨	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	465	N-24・N-26	Ⅱc・Ⅱb	研磨	研磨	研磨	褐色	浅黄色	良好	角閃石・長石・石英	
	466	J-24	Ⅱa	研磨	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
467	M-24	Ⅲa	研磨	研磨	研磨	灰黄色	浅黄色	良好	角閃石・長石・石英		
図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整			色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面		外 面	内 面			
80	468	K-25	Ⅲb	研磨	貝殻条痕・ナデ		明赤褐色	にぶい黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	469	N-22	Ⅱc	研磨	研磨		明赤褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	470	D-30	Ⅱc				浅黄褐色	灰黄色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	471	K-24・K-25	Ⅲb	ナデ 研磨	ナデ		にぶい赤褐色・ にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	底面調整ナデ
	472	J-31	Ⅲb	ナデ	ナデ		明赤褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・赤色粒子	
473	K-23	Ⅲb	ナデ	ナデ		にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石		
474	M-24	Ⅲb	ナデ	ナデ		灰黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英		
475	N-21	Ⅲb	貝殻条痕・ナデ	ナデ		にぶい赤褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・赤色粒子		
476	N-24	Ⅲb	貝殻条痕・研磨	ナデ		にぶい黄褐色	黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
477	L-24	Ⅱa	ナデ	ナデ		にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石		
478	M-24	Ⅱa	研磨	研磨		黒褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
479	M-26	Ⅲa	擦過	ナデ		黒褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
480	M-26	Ⅲa	貝殻条痕	ナデ		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英		
481	M-26	Ⅱa	ナデ	ナデ		にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
482	M-29	Ⅱa	貝殻条痕	ナデ		黄灰色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・赤色粒子		
483	J-24	Ⅱc	ナデ	ナデ		にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石		
484	J-25	Ⅱc	ナデ	ナデ		にぶい赤褐色	灰褐色	良	角閃石・長石		
485	N-27	Ⅱc	研磨	研磨		にぶい赤褐色	黒褐色	良	長石		
486	I-28	Ⅱ	擦過	貝殻条痕		にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・赤色粒子		
487	J-27	Ⅱ	貝殻条痕	ナデ		にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・赤色粒子		
488	K-27	Ⅱ	ナデ	貝殻条痕・ナデ		補灰色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・赤色粒子		
489	D区		貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕・ナデ		にぶい赤褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
490	N-21	Ⅲb	研磨	研磨		灰黄褐色	黒褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
491	O-21	Ⅲb	ナデ			褐色		良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		

第30表 B・C区出土土器・土製品観察表①

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
82	492	P-13	Ⅲb	貝殻条痕	ナデ	橙色	橙色	良	角閃石・長石・石英	口唇部剥目
	493	Q-12	Ⅲb	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	494	Q-14	Ⅲb	貝殻条痕	ナデ	橙色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	495	Q-14-Q-15	Ⅲb	貝殻条痕	磨過・ナデ	にぶい黄橙色	褐色色	良	角閃石・長石・石英	
	496	Q-15	Ⅲb	磨過・ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	497	Q-15	Ⅲb	貝殻条痕	磨過・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	ヒレ状突起
	498	R-15	Ⅲb	貝殻条痕	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	499	R-15	Ⅲb	貝殻条痕	ナデ	にぶい橙色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	
	500	T-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	良	角閃石・長石・石英	口唇部剥目
	501	T-15	Ⅲb	貝殻条痕	ナデ	褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	ヒレ状突起
	502	V-8	Ⅲb	貝殻条痕	貝殻条痕・ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
	503	R-13	Ⅱa	磨過・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	
	504	R-15	Ⅱa	ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	
	505	U-9	Ⅲa	貝殻条痕	ナデ	橙色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	口唇部剥目
	506	Q-12	Ⅲc	貝殻条痕	貝殻条痕・ナデ	にぶい褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英	ヒレ状突起
	507	Q-11-Q-12	Ⅲc-Ⅱb	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英	突起・AMS測定資料
508	V-11	Ⅱ	貝殻条痕	磨過・ナデ	にぶい橙色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土		
83	509	P-13-P-14	Ⅲb-Ⅱa	貝殻条痕	磨過	橙色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	
	510	P-13-Q-14-Q-15	Ⅱa-Ⅱb	貝殻条痕	貝殻条痕・ナデ	明赤褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
84	511	R-11-R-12	Ⅱa-Ⅱb	貝殻条痕	磨過	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
	512	Q-15	Ⅲb	貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
83	513	P-14	Ⅲb	貝殻条痕・ナデ	磨過	灰黄色	黒褐色	良好	角閃石・長石・石英	ヒレ状突起
	514	Q-14	Ⅲb	貝殻条痕・ナデ	ナデ	淡黄褐色	にぶい橙色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	ヒレ状突起
	515	Q-14	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	516	Q-14	Ⅲb	磨過・ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	517	Q-15	Ⅲb	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	518	R-15	Ⅱa-Ⅱb	貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	519	S-12	Ⅲb	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	リボン状突起
84	520	U-13	Ⅲb	貝殻条痕	ナデ	にぶい橙色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	521	P-12	Ⅲa	貝殻条痕	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	
	522	P-14	Ⅲa	貝殻条痕	貝殻条痕・磨過	にぶい黄褐色	灰白色	良	角閃石・長石・石英	
	523	V-9	Ⅲa	磨過・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	524	V-9	Ⅲa	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
85	525	V-6	Ⅲa	研磨	研磨	褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	526	R-11	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	527	R-15	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	528	Q-13	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	
	529	U-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	

第31表 B・C区出土土器・土製品観察表②

区	番号	出土グリッド	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
B5	530	Q-13	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	531	U-14	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	532	U-14	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	黒褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	533	T-9	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	明赤褐色	良好	角閃石・長石・石英	
	534	T-13	Ⅱa	研磨	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	535	U-9	Ⅲb	ナデ	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	536	U-11・U-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	浅黄色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	537	U-4	Ⅲb	研磨	研磨	黒褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	538	U-12	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	539	R-13・R-14	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	538と同一個体
	540	Q-12	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	541	Q-13	Ⅱa	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	542	R-11	Ⅱa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	543	S-13	Ⅱc	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	544	T-14	Ⅱc	研磨	研磨	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英	
	545	U-14	Ⅲb	研磨	貝殻茶碗・研磨	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	546	U-9	Ⅲb	ナデ	研磨	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	547	U-14	Ⅲb	研磨	磨過・研磨	褐色	明褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	548	V-11	Ⅲb	研磨	貝殻茶碗・研磨	明赤褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	549	R-13	Ⅱc	研磨	研磨	にぶい褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	550	V-4	Ⅱa	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	551	U-7	Ⅲb	研磨	貝殻茶碗・研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	552	U-9	Ⅲb	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	553	R-9	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	554	R-13	Ⅲb	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
555	S-14	Ⅱc	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
556	W-5	Ⅲb	研磨	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
557	Q-13	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
558	V-8	Ⅱa	ナデ	研磨	褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
559	P-12・P-13	Ⅲc・Ⅲb・Ⅲ	研磨	ナデ	明赤褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	凹点	
560	Q-13	Ⅲb	貝殻茶碗・研磨	貝殻茶碗・研磨・ナデ	にぶい赤褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
561	P-14	Ⅲb	研磨	貝殻茶碗・研磨	黒褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
562	P-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
563	P-14	Ⅲb	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
564	Q-13	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
565	Q-14	Ⅲb	ナデ・研磨	貝殻茶碗・研磨	褐色	にぶい赤褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
566	R-15	Ⅲb	ナデ・研磨	貝殻茶碗・ナデ	黒褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
567	T-13	Ⅲ	研磨	研磨	にぶい黄褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		

第32表 B・C区出土土器・土製品観察表③

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
87	568	R-13	Ⅲb	ナデ・研磨	貝殻茶痕・ナデ	褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	569	T-14-S-15	Ⅱc・Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	570	U-14	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	571	U-6	Ⅲb	研磨	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	572	U-11	Ⅱa・Ⅲb	研磨	貝殻茶痕・研磨	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
573	V-7	Ⅲb	ナデ・研磨	ナデ	灰黄褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
88	574	Q-12	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	575	Q-12	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	576	Q-12	Ⅲb	ナデ	研磨	にぶい赤褐色	明赤褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	577	Q-13	Ⅲb	研磨	貝殻茶痕・研磨	明褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	578	Q-13	Ⅲb	ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	579	R-13	Ⅲb	ナデ	ナデ	明赤褐色	明褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	580	R-14	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	581	R-13	Ⅲa	ナデ	ナデ	暗褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	582	R-15	Ⅲb	ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	583	R-15	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	584	S-14	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	585	S-14	Ⅲa	研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	586	T-5	Ⅲb	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	587	T-9	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	588	U-7	Ⅱc	研磨	研磨	黒褐色	補灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	凹点
	589	U-9	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	590	U-9	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	591	Q-14	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	592	U-14	Ⅲa	ナデ	ナデ	にぶい褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	593	V-6	Ⅲb	ナデ	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
594	V-8	Ⅲb	ナデ	研磨	褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英		
595	V-9	Ⅱa・Ⅲb	ナデ	ナデ	褐色	明赤褐色	良好	角閃石・長石・石英		
596	W-5	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英		
597	S-12-T-9	Ⅱc・Ⅲa・Ⅲb	貝殻茶痕・研磨	研磨・ナデ	にぶい褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
598	V-7-V-8	Ⅱa・Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母		
89	599	P-12	Ⅲb	研磨	研磨	明赤褐色	にぶい赤褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	600	Q-11	Ⅲb・Ⅱc	研磨	研磨・ナデ	にぶい赤褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	601	T-6	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	602	V-8	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	603	Q-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英	
	604	Q-13	Ⅲb	研磨	貝殻茶痕・研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
605	Q-13	Ⅲb	研磨	研磨	黒褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		

第33表 B・C区出土土器・土製品観察表④

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
89	606	Q-13	Ⅱa	研磨	貝殻茶痕・研磨	にぶい褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	607	S-15	Ⅱb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	608	S-13	Ⅱa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	609	T-9	Ⅱb	研磨	貝殻茶痕・ナデ	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	610	T-12	Ⅱb	研磨	研磨	黒褐色	黒褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	611	U-8	Ⅱb	研磨	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	612	U-9	Ⅱb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	613	U-9	Ⅱb	研磨	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	614	U-12	Ⅱb	研磨	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	615	V-6	Ⅱb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	616	V-7	Ⅱa	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	617	V-8・V-9・U-9	Ⅱc・Ⅱb	研磨	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	618	U-9	Ⅱb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	619	R-34	Ⅱb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	620	Q-12・P-12・Q-14	Ⅱb	貝殻茶痕・ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	621	Q-13	Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英	
	622	Q-14	Ⅱb	ナデ	ナデ	補灰色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	623	Q-14	Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	624	R-34	Ⅱb	貝殻茶痕・ナデ	貝殻茶痕・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
625	R-15	Ⅱb	貝殻茶痕・ナデ	ナデ	灰黄褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
626	S-9	Ⅱb	貝殻茶痕・研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
627	T-7	Ⅱb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
628	T-7	Ⅱb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄色	良好	角閃石・長石・石英		
629	T-14	Ⅳ	貝殻茶痕・ナデ	ナデ	暗灰黄色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
630	T-14	Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
631	T-14	Ⅱb	貝殻茶痕・ナデ 擦過・ナデ	擦過・ナデ	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
632	U-4	Ⅱb	貝殻茶痕・ナデ	ナデ	淡黄色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
633	U-6	Ⅱb	擦過・ナデ	ナデ	褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
634	U-14	Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
635	U-14	Ⅱb	貝殻茶痕・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
636	B区	Ⅳ	貝殻茶痕・ナデ	貝殻茶痕・ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
637	Q-13	Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
638	R-12	Ⅱb	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
639	R-13	Ⅱb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英		
640	R-13	Ⅱb	研磨	貝殻茶痕・ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
641	U-9	Ⅱb	研磨	研磨	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
642	U-9	Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
643	U-12	Ⅱb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		

第34表 B・C区出土土器・土製品観察表⑤

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
91	644	V-9	Ⅲb	貝殻糸履・研磨	ナデ	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	645	U-14	Ⅲb	研磨	貝殻糸履・ナデ	にぶい褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	646	U-14	Ⅲb	研磨	ナデ	褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	647	U-14	Ⅲb	磨透・研磨	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
92	648	T-9	Ⅱa・Ⅱb	貝殻糸履	ナデ	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	649	T-10	Ⅲb	貝殻糸履	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	650	P-13	Ⅲb	貝殻糸履	貝殻糸履・ナデ	にぶい褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	651	Q-11	Ⅲb	貝殻糸履・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	黒褐色	良	角閃石・長石・石英	
	652	Q-12	Ⅲb	貝殻糸履・ナデ	貝殻糸履・ナデ	褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	653	Q-12	Ⅲb	貝殻糸履	貝殻糸履・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	654	R-13	Ⅲb	ナデ・研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	
	655	R-15	Ⅲb	ナデ	ナデ	浅黄色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	656	S-13	Ⅲb	貝殻糸履・ナデ	貝殻糸履・ナデ	浅黄褐色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英	
	657	U-9	Ⅲb	貝殻糸履	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英	凹点
	658	U-9	Ⅲb	貝殻糸履・ナデ	ナデ	明赤褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
	659	U-13	Ⅲb	貝殻糸履・ナデ	ナデ	にぶい褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	660	S-12	Ⅱc	貝殻糸履	ナデ	褐色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	661	V-9	Ⅲb	貝殻糸履	磨透・ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	662	R-12	Ⅱa	磨透	貝殻糸履・ナデ	にぶい赤褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	焼成後穿孔
93	663	P-12	Ⅲb	貝殻糸履・ナデ	貝殻糸履・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	
	664	U-12・U-14・Q-13	Ⅱa・Ⅱb	研磨	貝殻糸履・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	凹点
	665	U-9	Ⅲb	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	666	U-12	Ⅲb	貝殻糸履	ナデ	明黄褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	
	667	U-9	Ⅲa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・金色雲母	
	668	V-7	Ⅲa	貝殻糸履	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・金色雲母	
	669	W-4・V-5	Ⅲa	貝殻糸履・ナデ	ナデ	にぶい褐色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	凹点
	670	Q-12	Ⅲb	貝殻糸履	貝殻糸履・ナデ	灰黄褐色	黒褐色	良	角閃石・長石・石英	
	671	Q-12	Ⅲb	貝殻糸履	貝殻糸履・ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英	670と同一個体
	672	Q-15	Ⅲb	貝殻糸履	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
673	S-14	Ⅲb	磨透	磨透	にぶい黄褐色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母		
674	U-11	Ⅲb	貝殻糸履	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母		
675	U-4	Ⅲa	貝殻糸履	ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
676	P-13	Ⅲb	貝殻糸履	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け	
677	Q-14	Ⅲb	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け	
678	R-11・R-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け	
679	R-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け	
680	R-13	Ⅲb	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け	
681	S-14	Ⅲb	貝殻糸履	貝殻糸履・ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	貼り付け	

第35表 B・C区出土土器・土製品観察表⑥

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
93	682	S-14	Ⅳ	ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英	貼り付け
	683	S-15	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	貼り付け
	684	T-11	Ⅳ	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	貼り付け
	685	T-12	Ⅱb	貝殻条痕	ナデ	にぶい褐色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	貼り付け
	686	T-12	Ⅳ	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英	貼り付け
	687	T-14	Ⅲb	ナデ	ナデ	赤褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	貼り付け
	688	U-8	Ⅲb	貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	貼り付け
	689	U-9	Ⅲb	ナデ 貝殻条痕	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	貼り付け
	690	U-11	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	貼り付け
	691	T-15	Ⅱb	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英	貼り付け
	94	692	V-5	Ⅱb	ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土
693		V-8	Ⅱb	貝殻条痕	ナデ	橙色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	貼り付け
694		V-9	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	貼り付け
695		R-11	Ⅲa	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	貼り付け
696		R-12	Ⅱa	貝殻条痕・ナデ	擦過・ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	貼り付け・ モミ瓦痕
697		R-12	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	橙色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	貼り付け
698		R-14	Ⅱa	ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	貼り付け
699		U-6	Ⅱa	ナデ	ナデ	橙色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	貼り付け
700		U-9	Ⅱa	ナデ	ナデ	橙色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	貼り付け
701		U-11	Ⅱa	ナデ	ナデ	橙色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	貼り付け
702		U-13	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	貼り付け
95	703	U-14	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい褐色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	貼り付け
	704	U-14	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	貼り付け
	705	V-7	Ⅲa	貝殻条痕	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	貼り付け
	706	Q-12	Ⅱc	ナデ	ナデ	橙色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	貼り付け
	707	V-8	Ⅱc	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	貼り付け
	708	V-12	Ⅱc	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	貼り付け
	709	Q-12	Ⅱb	貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目胴体・指
	710	Q-12	Ⅱc	貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい褐色	にぶい赤褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目胴体・指
	711	R-12	Ⅲb	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目胴体・指
	712	Q-12	Ⅲb	貝殻条痕	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目胴体・指
	713	S-12・T-12	Ⅲa	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	輪灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目胴体・指
714	S-12・T-14	Ⅱa・Ⅱb	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	輪灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目胴体・指・ 713と同一個体	
715	Q-12・R-12・T-12	Ⅱa・Ⅱb	貝殻条痕・ナデ	擦過・ナデ	にぶい褐色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目胴体・指	
716	Q-12	Ⅱc・Ⅲa	擦過・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	刻目胴体・指	
717	U-5	Ⅲa	ナデ	ナデ	灰白色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目胴体・指	
718	P-12	Ⅲb	擦過・ナデ	擦過	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目胴体・指	
719	P-12	Ⅲb	ナデ	貝殻条痕	にぶい黄色	輪灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目胴体・指	

第36表 B・C区出土土器・土製品観察表⑦

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
95	720	P-13	Ⅲb		ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・指
	721	Q-13	Ⅱ'	磨過	貝殻条痕・ナデ	黒褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・指
	722	Q-11	Ⅲb	貝殻条痕か	貝殻条痕・ナデ	灰黄色	黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・指
	723	Q-12	Ⅱc	貝殻条痕	磨過	暗灰黄色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・指
	724	R-12	Ⅲb	貝殻条痕	磨過	明赤褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	刻目原体・指
	725	Q-12-R-12	Ⅲb	貝殻条痕	貝殻条痕・ナデ	黒褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・指・AMS測定資料
	726	Q-12	Ⅲb	貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	刻目原体・指・AMS測定資料
	727	Q-12	Ⅲb	ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・指
	728	Q-13	Ⅲb	磨過	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・指
	729	Q-13	Ⅱa	ナデ	ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・指
	730	Q-15	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・指
	96	731	R-11	Ⅱa	ナデ	磨過	浅黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英
732		R-11	Ⅱa	ナデ	ナデ	浅黄褐色	灰黄色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・指
733		R-11	Ⅱa	貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・指
734		R-11	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・指
735		R-12	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	浅黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・指
736		R-13	Ⅱa	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・指
737		S-14	Ⅱa	ナデ	ナデ	灰白色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・指
738		T-9	Ⅱa	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・指
739		P-14	Ⅱc	磨過	ナデ	浅黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・指
740		Q-11	Ⅱc	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・指
741		Q-12	Ⅱc	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・指
742		Q-12	Ⅱc	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・指
743		R-9	Ⅱc	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・指
744		R-11	Ⅱ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・指
745		S-10	Ⅱc	ナデ	ナデ	にぶい褐色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・指
746		S-13	Ⅱc	磨過・ナデ	磨過	黄灰色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・指
747		Q-11	Ⅲb	磨過	磨過	褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英	刻目原体・指
748		P-12	Ⅲb	磨過	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・指
749		Q-11	Ⅲb	ナデ	ナデ	明黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・指
750		Q-12	Ⅱa	貝殻条痕	貝殻条痕・ナデ	暗灰黄色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英	刻目原体・指・毛ミ付皿
751	Q-12-P-14	Ⅲb	磨過	ナデ	褐色	灰白色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・指	
752	Q-13	Ⅲb	ナデ	磨過	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・指	
753	R-11	Ⅲb	ナデ	ナデ	褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・指	
754	R-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	浅黄褐色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・指	
755	R-11	Ⅲb	磨過	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	刻目原体・指	
756	R-11	Ⅲa	ナデ	磨過・ナデ	灰黄褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・指	
97	757	U-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・指

第37表 B・C区出土土器・土製品観察表⑧

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考	
				外 面	内 面	外 面	内 面				
97	758	P-12	Ⅱa	ナデ	磨過	にぶい黄褐色	粗灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・指	
	759	Q-12	Ⅱa	ナデ	ナデ	橙色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・指	
	760	Q-12	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・指	
	761	Q-13	Ⅱa	貝殻条痕	ナデ	黄灰色	灰黄褐色	良	角閃石	刻目原体・指	
	762	R-9	Ⅱa	磨過	貝殻条痕・ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・指	
	763	R-12	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	淡黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・指	
	764	R-12	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・指	
	765	R-13	Ⅱa	貝殻条痕	貝殻条痕・ナデ	明赤褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・指	
	766	R-14	Ⅱc	貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・指	
	767	T-8	Ⅱc	ナデ	ナデ	淡黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・指	
	768	R-12・S-12	Ⅱa	磨過・ナデ	磨過・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
	769	Q-13・R-13	Ⅱb	磨過・ナデ	磨過・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・棒	
	770	Q-14	Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
	771	P-14	Ⅱb	ナデ	磨過	淡黄褐色	淡黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・棒	
	772	Q-13・R-15	Ⅱa・Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
	98	773	Q-13	Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒
		774	Q-12	Ⅱc	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・金色雲母	刻目原体・棒
		775	R-11	Ⅱb	ナデ	磨過	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒
		776	R-12	Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒
777		T-12	Ⅱc・Ⅱa・Ⅱb	磨過・ナデ	磨過・ナデ	橙色	褐色	良好	角閃石・長石・石英	刻目原体・棒	
778		R-12	Ⅱa	ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・棒	
779		S-9	Ⅱa	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
780		Q-12	Ⅱb	磨過	磨過	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
781		Q-13	Ⅱb	ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・棒	
782		R-12	Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
783		R-12	Ⅱb	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
784		R-12	Ⅱb	ナデ	ナデ	黄灰色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
785		R-12	Ⅱb	貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・金色雲母	刻目原体・棒	
786		R-12	Ⅱb	貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕・ナデ	淡黄褐色	紫褐色	良好	角閃石・長石・石英	刻目原体・棒	
787		S-13	Ⅱb			にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
788		T-11	Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・棒	
789		P-12	Ⅱa	ナデ	磨過・ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
790		P-13	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
791		Q-13	Ⅱa	磨過	磨過・ナデ	褐色	にぶい黄褐色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
792	Q-14	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・棒		
793	R-9	Ⅱa	貝殻条痕・ナデ	ナデ	淡黄色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒		
794	R-11	Ⅱa	磨過・ナデ	磨過・ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・棒		
795	R-11	Ⅱa	ナデ	ナデ	淡黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	刻目原体・棒		

第38表 B・C区出土土器・土製品観察表⑨

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
98	796	R-12	Ⅱa		普通	黄灰色	赭灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒
	797	R-11	Ⅱa	普通	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	刻目原体・棒
	798	R-15	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	刻目原体・棒
	799	S-12	Ⅱa	ナデ	普通	浅黄色	赭灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒
	800	T-11	Ⅱa	ナデ	ナデ	灰黄色	赭灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒
	801	T-14	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒
	802	U-11	Ⅱa	不明	不明	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒
	803	R-11	Ⅱ	貝殻条痕	普通	赭灰黄色	赭灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・棒
	804	R-12		貝殻条痕	ナデ	灰黄褐色	赭灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・棒
	805	S-12	Ⅱc	普通	普通	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒
	806	T-15	Ⅱc	普通	普通・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・棒
	807	P-12	Ⅱa・Ⅱb	普通	普通・ナデ	褐色	赭灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒
	808	P-13	Ⅱb	ナデ	ナデ	赭灰黄色	赭灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒
	809	P-14	Ⅱb	貝殻条痕	貝殻条痕	赭灰黄色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒
810	P-15	Ⅱb	ナデ	ナデ	黄灰色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・棒	
811	Q-12	Ⅱb	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
812	Q-13	Ⅱb	普通	普通	にぶい褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
813	Q-14	Ⅱb	ナデ	普通・ナデ	にぶい褐色	赭灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・棒	
814	R-12	Ⅱb	普通・ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	赭灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
815	R-12	Ⅱa・Ⅱb	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄褐色	赭灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
816	R-12	Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	赭灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
817	R-12	Ⅱb	普通・ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	黒褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
818	S-9	Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
819	P-14	Ⅱa	ナデ	貝殻条痕	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
820	P-15	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
821	Q-14	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
822	Q-15	Ⅱa	貝殻条痕	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
823	Q-15	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・棒	
824	R-12	Ⅱa	普通	普通	灰黄褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
825	R-12	Ⅱa	ナデ	貝殻条痕	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	刻目原体・棒	
826	R-12	Ⅱa	ナデ	普通	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
827	U-7	Ⅱc	ナデ	ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	刻目原体・棒	
828	R-11	Ⅱb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・棒	
829	Q-13-R-14	Ⅱa・Ⅱb	普通・ナデ	普通・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・へう	
830	R-11	Ⅱa	ナデ	普通・ナデ	にぶい黄褐色	赭灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・へう	
831	Q-13-Q-14	Ⅱa・Ⅱb	普通・ナデ	普通・ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・へう	
832	R-12-Q-13	Ⅱa・Ⅱb	普通・ナデ	普通	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	刻目原体・へう	
833	R-14-R-15	Ⅱa・Ⅱb	ナデ	普通・ナデ	褐色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・黒曜石	刻目原体・へう	

第39表 B・C区出土土器・土製品観察表⑩

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考	
				外 面	内 面	外 面	内 面				
III	834	T-11	Ⅲa	貝殻茶痕・ナデ	貝殻茶痕・ナデ	橙色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう	
	835	S-15-Q-12	Ⅲc・Ⅲa	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目磨体・へう	
	836	R-11	Ⅲb	擦過・ナデ	擦過・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう	
	837	Q-11	Ⅲb	ナデ	擦過・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	幅灰黄色	良好	角閃石・長石・石英	刻目磨体・へう
	838	Q-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう	
	839	Q-12	Ⅲb	擦過・ナデ	擦過	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう	
	840	Q-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう	
	841	Q-12	Ⅲa	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目磨体・へう	
	842	Q-12	Ⅲa	貝殻茶痕・ナデ	貝殻茶痕・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう	
	843	Q-12-Q-13- R-13-Q-14	Ⅲa・Ⅲb	ナデ	擦過	橙色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう・縹 刻・焼成進歩孔	
	844	Q-14	Ⅲa・Ⅲb	ナデ	擦過・ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう・縹 刻・843と同一磨体	
	845	P-14	Ⅲb	ナデ	貝殻茶痕・ナデ	浅黄色	幅灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう	
	846	Q-12	Ⅲa	擦過・ナデ	擦過・ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう	
	847	Q-13	Ⅲa	貝殻茶痕	貝殻茶痕・ナデ	明黄褐色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう	
III	848	Q-11	Ⅲb	ナデ	擦過	にぶい黄褐色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目磨体・へう	
	849	P-14	Ⅲa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	幅灰色	良好	角閃石・長石・石英	刻目磨体・へう	
	850	Q-12	Ⅲc	貝殻茶痕	擦過・ナデ	橙色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう	
	851	R-11	Ⅲa	貝殻茶痕・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	幅灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう	
	852	R-12	Ⅲa	擦過	ナデ	浅黄褐色	にぶい黄色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう	
	853	P-14	Ⅲb	ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう	
	854	Q-11	Ⅲb	貝殻茶痕	貝殻茶痕	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目磨体・へう	
	855	Q-12	Ⅲb	貝殻茶痕・ナデ	貝殻茶痕・ナデ	灰黄褐色	幅灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう	
	856	Q-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	刻目磨体・へう	
	857	Q-12	Ⅲb		ナデ	幅灰黄色	にぶい黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう	
	858	Q-13	Ⅲb	ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目磨体・へう	
	859	Q-14	Ⅲb	ナデ	ナデ	橙色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう	
	860	Q-14	Ⅲb	ナデ	擦過・ナデ	にぶい黄褐色	幅灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう	
	861	Q-15	Ⅲa・Ⅲb	ナデ	ナデ	橙色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう	
862	R-11	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう		
863	R-11	Ⅲb	ナデ	ナデ	浅黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目磨体・へう		
864	R-11	Ⅲb	ナデ	ナデ	浅黄色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目磨体・へう		
865	R-11	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう		
866	R-12	Ⅲa・Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう		
867	R-12	Ⅲb	擦過	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう		
868	R-14	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう		
869	S-12	Ⅲb	擦過	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目磨体・へう		
870	T-11	Ⅲb	ナデ	ナデ	浅黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目磨体・へう		
871	P-12-P-14	Ⅲa・Ⅲb	ナデ	貝殻茶痕	にぶい褐色	幅灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目磨体・へう		

第40表 B・C区出土土器・土製品観察表①

図	番号	出土グリッド	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
B	872	P-14	Ⅲa	ナデ	ナデ	浅黄色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・ヘラ
	873	P-13	Ⅲa	擦過	ナデ	にぶい黄褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・ヘラ
	874	Q-12	Ⅲa	貝殻糸痕・ナデ	擦過・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・ヘラ
	875	Q-13	Ⅲa	ナデ	擦過	にぶい黄褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・ヘラ
	876	Q-13	Ⅲa	ナデ	擦過・ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英	刻目原体・ヘラ
	877	Q-15	Ⅲa	ナデ	ナデ	浅黄褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・ヘラ
	878	R-11	Ⅲa	擦過・ナデ	擦過・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・ヘラ
	879	R-12	Ⅲa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	刻目原体・ヘラ
	880	R-12	Ⅲa	擦過・ナデ	擦過	浅黄褐色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・ヘラ
	881	R-12	Ⅲa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・金色雲母	刻目原体・ヘラ
	882	S-12	Ⅲa	貝殻糸痕・ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	刻目原体・ヘラ
	883	U-11	Ⅲa	ナデ	擦過・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・ヘラ
	884	Q-12	Ⅲc	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・ヘラ
	885	Q-13	Ⅲc	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・ヘラ
	886	Q-12	Ⅲc	擦過	擦過	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・ヘラ
	887	R-9-R-11	Ⅲc	ナデ	擦過	褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・ヘラ・縞別分
	888	S-15	Ⅲc	擦過	擦過	浅黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・ヘラ
	889	R-11	Ⅲb	貝殻糸痕・ナデ	擦過・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	刻目原体・ヘラ
	890	S-14	Ⅲc	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	刻目原体・ヘラ
	891	Q-13	Ⅲb	擦過・ナデ	貝殻糸痕・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	刻目原体・ヘラ・縞別
	892	Q-13	Ⅲa	擦過・ナデ	貝殻糸痕・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	刻目原体・ヘラ・縞別・891と同一原体
	893	Q-13	Ⅲb	擦過・ナデ	貝殻糸痕・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	刻目原体・ヘラ・縞別・891と同一原体
	894	Q-12	Ⅲb	擦過	ナデ	淡黄色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・ヘラ
	895	Q-11・S-12・T-12	Ⅲc・Ⅲa・Ⅲb	擦過・ナデ	ナデ	褐色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・ヘラ
	896	Q-13	Ⅲb	擦過	ナデ	にぶい黄褐色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英	刻目原体・ヘラ
	897	U-11-R-11-R-12	Ⅲa・Ⅲb	刷毛目	刷毛目	にぶい黄褐色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英	刻目原体・ヘラ
	898	Q-14	Ⅲb	擦過	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・ヘラ
	B	899	Q-14	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英
900		Q-15	Ⅲb	擦過・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・ヘラ
901		R-11	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・ヘラ
902		R-11	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・ヘラ
903		R-11	Ⅲb	擦過・ナデ	擦過	にぶい黄褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・ヘラ
904		R-12	Ⅲb	擦過・ナデ	擦過・ナデ	にぶい黄褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・ヘラ
905		R-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	灰黄褐色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・ヘラ
906		R-14	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目原体・ヘラ
907		R-15	Ⅲb	ナデ	ナデ	浅黄色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・ヘラ
908		S-12	Ⅲb	ナデ	擦過・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	刻目原体・ヘラ
909		U-12	Ⅲb	ナデ	擦過	にぶい黄褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目原体・ヘラ

第41表 B・C区出土土器・土製品観察表⑫

図	番号	出土グリッド	出土層位	文様・調整			色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	底 面	外 面	内 面			
							外 面	内 面			
104	910	P-14	Ⅱa	貝殻茶痕・ナデ	貝殻茶痕・ナデ		にぶい黄褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	刻目胴体・へう・焼成後穿孔
	911	P-14	Ⅱa	ナデ	ナデ		にぶい黄褐色	褐灰色	良	角閃石・長石・石英	刻目胴体・へう
	912	Q-12	Ⅱa	貝殻茶痕・ナデ	ナデ		にぶい褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目胴体・へう
	913	Q-13	Ⅱa	ナデ	ナデ		黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目胴体・へう
	914	Q-13	Ⅱa	磨過・ナデ	ナデ		にぶい黄褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英	刻目胴体・へう
	915	Q-13	Ⅱa	ナデ	ナデ		褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目胴体・へう
	916	Q-13	Ⅱa	磨過・ナデ	磨過・ナデ		にぶい赤褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目胴体・へう
	917	Q-14	Ⅱa	磨過・ナデ	ナデ		にぶい黄褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目胴体・へう
	918	Q-14	Ⅱa	磨過	磨過		灰黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	刻目胴体・へう
	919	Q-14	Ⅱa	ナデ	ナデ		にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目胴体・へう
	920	R-11	Ⅱa	ナデ	ナデ		褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目胴体・へう・横刻
	921	R-11	Ⅱa	ナデ	ナデ		にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目胴体・へう
	922	R-12	Ⅱa	磨過	ナデ		にぶい黄褐色	浅黄色	不良	角閃石・長石・石英	刻目胴体・へう
	923	R-12	Ⅱa	ナデ	ナデ		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目胴体・へう
	924	R-13	Ⅱa	磨過・ナデ	磨過・ナデ		浅黄色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目胴体・へう
	925	Q-12	Ⅱc	磨過	磨過		灰黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目胴体・へう
	926	S-12	Ⅱc	ナデ	ナデ		黒褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目胴体・へう
	105	927	P-12-P-13	Ⅱa・Ⅱb	貝殻茶痕・ナデ	貝殻茶痕・ナデ		にぶい黄褐色	にぶい黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土
928		Q-12	Ⅱc・Ⅱa・Ⅱb	貝殻茶痕・ナデ	貝殻茶痕・ナデ		にぶい黄褐色	にぶい黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	刻目胴体・貝殻
929		Q-12	Ⅱc・Ⅱb	ナデ	貝殻茶痕・ナデ		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	刻目胴体・貝殻
930		P-12	Ⅱa	貝殻茶痕	ナデ		灰黄褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英	刻目胴体・貝殻
931		P-12	Ⅱa	ナデ	ナデ		灰黄褐色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目胴体・貝殻
932		Q-12	Ⅱa	ナデ	磨過		にぶい黄褐色	灰白色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目胴体・竹簧
933		Q-14	Ⅱb	ナデ	ナデ		黒灰黄色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目胴体・棒
934		Q-13	Ⅱa	磨過・ナデ	ナデ		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	刻目胴体・棒
935	Q-14	Ⅱa	磨過・ナデ	ナデ		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	刻目胴体・棒	
106	936	P-14	Ⅱb	研磨	ナデ	研磨	褐色	灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	937	R-11	Ⅱb	ナデ	ナデ	組織痕	にぶい黄褐色	灰白色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	籠目か
	938	S-9	Ⅱb	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英	
	939	U-9	Ⅱb	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英	
	940	P-12	Ⅱb	ナデ	ナデ	ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	941	U-4	Ⅱb	研磨	研磨	研磨	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	942	P-14	Ⅱb	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	
	943	Q-11	Ⅱb	貝殻茶痕	ナデ	磨過	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	944	Q-11	Ⅱb	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	945	Q-11・U-14	Ⅱb	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	

第42表 B・C区出土土器・土製品観察表⑬

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整			色 調		焼成	胎 土	備 考	
				外 面	内 面	底 面	外 面	内 面				
Ⅷ	946	Q-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	研磨	にぶい褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	947	Q-12	Ⅲb	貝殻系灰・ナデ	貝殻系灰・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母		
	948	Q-13	Ⅲb	ナデ	擦過	組織版	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	籠目か	
	949	Q-14	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母		
	950	Q-14	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英		
	951	Q-14	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	952	Q-15	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	953	R-14	Ⅲb	ナデ	ナデ	擦過・ナデ	にぶい褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	954	S-12	Ⅲb	研磨	ナデ	ナデ	にぶい褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	955	S-12	Ⅲb	貝殻系灰・研磨	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	956	T-6	Ⅱa・Ⅱb	研磨	研磨	研磨	明赤褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	957	T-11	Ⅲb	研磨	研磨	研磨	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	958	T-11	Ⅲb	研磨	ナデ	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	959	T-11	Ⅲb	研磨	ナデ	研磨	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	960	T-12	Ⅱa・Ⅱb	ナデ	ナデ	ナデ	明黄褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	Ⅷ	961	T-14	Ⅲb	擦過・ナデ	ナデ	研磨	明黄褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
		962	U-13・T-14	Ⅱa・Ⅱb	貝殻系灰・ナデ	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	
		963	T-14	Ⅲb	貝殻系灰・ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	
		964	T-14	Ⅳ	ナデ	貝殻系灰・研磨	擦過	明赤褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英	
		965	T-15・Q-15	Ⅱa・Ⅱb	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
966		U-4	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	補灰色	良	角閃石・長石・石英		
967		U-8	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
968		U-9	Ⅲb	研磨	ナデ	ナデ	褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
969		U-9	Ⅲb	擦過	研磨	ナデ	にぶい赤褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
970		U-11	Ⅲb	ナデ	研磨	研磨	褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
971		U-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
972		U-13	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母		
973		U-13	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母		
974		U-14	Ⅲb	研磨	研磨	研磨	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・黒曜石		
975		V-7	Ⅲb	貝殻系灰・ナデ	貝殻系灰・研磨	研磨	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
976		V-6・V-8	Ⅱc・Ⅱb	ナデ	研磨	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英		
977		V-8	Ⅲb	研磨	研磨	研磨	にぶい褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
978		V-8	Ⅲb	貝殻系灰	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母		
979		V-9	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
980		R-11	Ⅱa	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
981	-	Ⅱa	貝殻系灰	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
982	R-12・S-13・S-15	Ⅱa	ナデ	ナデ	貝殻系灰・ナデ	明赤褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
983	R-15	Ⅱa	ナデ	ナデ	擦過	褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子			

第43表 B・C区出土土器・土製品観察表⑬

器	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整			色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	底 面	外 面	内 面			
B7	984	S-12	Ⅱa		研磨	研磨	赤褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・黒曜石	
	985	R-14-S-14	Ⅱa	ナデ	貝殻条痕・研磨	磨過	褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	986	T-14	Ⅱa	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい褐色	灰褐色	良	角閃石・長石・石英	
B8	987	U-9	Ⅱa	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英	
	988	V-7	Ⅱa	ナデ	ナデ	ナデ	明赤褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	989	V-11	Ⅱa	ナデ	ナデ	研磨	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	990	R-14	Ⅱc	研磨	研磨	磨過・ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	991	Q-11	Ⅲb	ナデ	ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	992	Q-12	Ⅲb	貝殻条痕・ナデ	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	993	Q-13	Ⅲb	ナデ	ナデ	研磨	にぶい褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	994	Q-13	Ⅲb	ナデ	ナデ	磨過・ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	995	Q-15	Ⅲb	磨過	ナデ	磨過	にぶい黄褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	996	Q-15	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英	
	997	Q-15	Ⅲb	貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	998	R-11	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	明赤褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	
	999	R-11-R-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	明赤褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
	1000	R-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1001	R-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	磨過	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1002	S-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	明赤褐色	灰褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1003	S-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	磨過	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1004	U-9	Ⅲb	貝殻条痕・ナデ	ナデ	磨過	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1005	U-9	Ⅲb	貝殻条痕	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母・黒曜石	
	1006	U-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	研磨	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1007	U-13	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	
1008	V-9	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母		
1009	P-12	Ⅲa	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土		
B9	1010	P-14	Ⅲa	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	淡黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1011	Q-13-P-14	Ⅲa	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1012	P-14	Ⅲa	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1013	P-14	Ⅲa	ナデ	ナデ	組織面	褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	
	1014	P-15	Ⅲa	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1015	Q-12	Ⅲa	磨過	ナデ	ナデ	褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1016	Q-14	Ⅲa	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	
	1017	R-11	Ⅲa	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1018	R-11	Ⅲa	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1019	R-12	Ⅲa	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1020	S-13	Ⅲa	ナデ	磨過・ナデ		褐色		良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1021	S-13	Ⅲa	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	

第44表 B・C区出土土器・土製品観察表⑬

図	番号	出土グリッド	出土層位	文様・調整			色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	底 面	外 面	内 面			
10	1022	S-4	Ⅲa	ナデ	ナデ	磨透	にぶい黄褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	1023	U-5	Ⅲa	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	1024	U-9	Ⅲa	貝殻赤板・ナデ	ナデ	ナデ	にぶい褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1025	V-9	Ⅲa	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1026	Q-12	Ⅱc	貝殻赤・ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1027	S-12	Ⅱc	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1028	F-12-Q-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	磨透	にぶい褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1029	R-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	1030	S-15	Ⅲa・Ⅱ	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英	
	1031	V-8	Ⅲa	貝殻赤板・ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1032	V-9	Ⅲa	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1033	P-14	Ⅲa・Ⅱb	ナデ	ナデ	ナデ・ 棒掻き型)	にぶい黄褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・黒曜石	
	11	1034	Q-11	Ⅲb	磨透・研磨	ナデ		にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子
1035		Q-13-R-11	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・黒曜石	
1036		Q-13	Ⅲb	磨透	ナデ	ナデ	淡黄褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
1037		Q-14	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
1038		T-6	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
1039		P-12	Ⅲa	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	
1040		P-15	Ⅲa	磨透	ナデ	磨透	褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
1041		Q-12-R-12	Ⅲa	貝殻赤板	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
1042		Q-14	Ⅲa	磨透	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
1043		R-10	Ⅱc	ナデ	ナデ	磨透	褐色	灰白色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
図	番号	出土グリッド	出土層位	文様・調整			色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	底 面	外 面	内 面			
111	1044	Q-12	Ⅲb	研磨	研磨		にぶい黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1045	Q-13-Q-14	Ⅲb	研磨	研磨		灰黄褐色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・金色雲母	
	1046	Q-13	Ⅲb	研磨	研磨		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1047	Q-14	Ⅲb	研磨	研磨		褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1048	R-11	Ⅲb	研磨	研磨		黄灰色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1049	S-12	Ⅲb	研磨	研磨		褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1050	T-13	Ⅲb	研磨	研磨		にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1051	V-12	Ⅲb	研磨	研磨		にぶい黄褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1052	U-14	Ⅲb	研磨	研磨		褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1053	V-6	Ⅲb	不明	不明		褐色	にぶい黄褐色	不良	角閃石・長石・石英・金色雲母	
	1054	V-8	Ⅲb	研磨	研磨		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1055	V-9-V-11-U-11	Ⅱc・Ⅲb	研磨	研磨		灰黄褐色	灰褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1056	V-8	Ⅲb	研磨	研磨		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1057	V-9	Ⅲb	研磨	研磨		淡黄色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	

第45表 B・C区出土土器・土製品観察表⑬

器	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
111	1058	R-13	Ⅱa	研磨	研磨	橙色	にぶい橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1059	S-12	Ⅱa	研磨	研磨	橙色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1060	S-14	Ⅱa	研磨	研磨	にぶい黄橙色	にぶい橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色露母	
	1061	T-13	Ⅱa	研磨	研磨	浅黄橙色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英	
	1062	U-14	Ⅱa	研磨	研磨	橙色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1063	Q-15	Ⅱc	研磨	研磨	暗灰黄色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英	
	1064	U-11	Ⅱc	研磨	研磨	灰黄色	にぶい黄橙色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1065	S-11	Ⅱ	研磨	研磨	暗灰黄色	明黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1066	P-12	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい橙色	補灰色	良好	角閃石・長石・石英	
	1067	P-13	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄橙色	黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
112	1068	Q-11	Ⅲb	研磨	研磨	橙色	橙色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	リボン状突起
	1069	Q-12	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1070	Q-14-R-14	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1071	Q-14	Ⅲb	研磨	研磨	浅黄色	灰白色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1072	S-15	Ⅳ	研磨	研磨	橙色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1073	T-9	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい橙色	にぶい橙色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1074	U-9	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄橙色	補灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1075	V-8	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい橙色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1076	T-9	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1077	V-8	Ⅲb	研磨	研磨	暗灰黄色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
113	1078	P-14	Ⅱa	研磨	研磨	にぶい黄橙色	橙色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1079	Q-15	Ⅱa	研磨	研磨	暗灰黄色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1080	R-12	Ⅱa	研磨	研磨	浅黄橙色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1081	R-14	Ⅱa	研磨	研磨	にぶい黄橙色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1082	U-9	Ⅲa	研磨	研磨	灰黄褐色	補灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1083	U-9	Ⅲa	研磨	研磨	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1084	V-12	Ⅱc	研磨	研磨	灰黄色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1085	P-13	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄色	浅黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1086	P-14	Ⅲb	研磨	研磨	浅黄橙色	浅黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1087	Q-13	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄色	灰色	良好	角閃石・長石・石英・金色露母	
113	1088	Q-13	Ⅲb	研磨	研磨	浅黄色	浅黄色	良好	角閃石・長石・石英・金色露母	
	1089	Q-13	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄色	浅黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1090	Q-13	Ⅳ	ナデ	ナデ	明赤褐色	にぶい橙色	良	角閃石・長石・石英	
	1091	R-11	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄橙色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1092	R-15	Ⅳ	研磨	研磨	にぶい黄褐色	補灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	凹点
	1093	S-8	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1094	S-12	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1095	S-13	Ⅳ	研磨	研磨	にぶい黄褐色	灰白色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色露母	

第46表 B・C区出土土器・土製品観察表①

器	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考	
				外 面	内 面	外 面	内 面				
10	1096	S-9	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英	突起	
	1097	U-9	Ⅲb	研磨	研磨	浅黄色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英		
	1098	U-12	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	1099	U-12	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	1100	V-7	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄色	黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	1101	V-8	Ⅲb	研磨	研磨	黄褐色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	1102	V-8	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	1103	V-8	Ⅲb	研磨	研磨	明黄褐色	浅黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母		
	1104	V-9	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英		
	1105	S-9	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英		
	1106	T-5	Ⅱa	研磨	研磨	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	凹点	
	1107	U-9	Ⅱa	研磨	研磨	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	1108	U-11	Ⅱa・Ⅱb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	1109	U-14	Ⅱa	研磨	研磨	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
11	1110	U-14	Ⅱa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	1111	V-5	Ⅱa	研磨	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	1112	V-9	Ⅱa	不明	不明	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	1113	Q-12	Ⅱc	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	1114	V-11	Ⅱ	研磨	研磨	灰黄色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	突起	
	12	1115	Q-12	Ⅲb	擦過・研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
		1116	Q-14	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
		1117	Q-14	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
		1118	Q-14	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	赤色顔料塗付
		1119	T-14	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	
1120		U-8	Ⅲb	研磨	研磨	補灰色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英		
1121		U-8	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
1122		U-12・U-13	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	1121と同一器体	
1123		U-9	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	褐色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
1124		U-11	Ⅲb	研磨	研磨	浅黄色	にぶい黄色	良	角閃石・長石・石英		
13	1125	U-12	Ⅲb	研磨	研磨	暗灰黄色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英		
	1126	U-12	Ⅲb	研磨	研磨	浅黄褐色	にぶい黄褐色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	1127	V-11	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	1128	T-12	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	1129	T-13	Ⅱa	貝輪茶碗・ナデ研磨	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	15	1130	R-14	Ⅱa	研磨	研磨 貝輪茶碗	灰黄色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
		1131	S-15	Ⅲb	研磨	研磨	浅黄褐色	明黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
		1132	S-14	Ⅲa	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	赤色顔料塗付
		1133	T-13	Ⅲa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	

第47表 B・C区出土土器・土製品観察表⑱

器	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
115	1134	T-13	Ⅱa	研磨	貝殻条痕・研磨	にぶい黄色	にぶい黄色	良好	長石・石英	
	1135	W-4	Ⅱc	研磨	研磨	褐灰色	褐灰色	良好	角閃石・長石・石英	
	1136	P-14	Ⅱb	研磨	研磨	橙色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1137	Q-14	Ⅱb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1138	R-14	Ⅱb	研磨	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1139	R-15	Ⅱb	研磨	研磨	灰黄色	にぶい黄色	良好	角閃石・長石・石英・金色雲母	
	1140	S-14-S-15	Ⅱb・Ⅳ	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	1141	T-13	Ⅱb	研磨	研磨	灰黄色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1142	T-14	Ⅱb	研磨	研磨	橙色	胡麻褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1143	T-14	Ⅱb	研磨	貝殻条痕・研磨	灰黄褐色	褐灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1144	U-5	Ⅱb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	突起
	1145	U-9	Ⅱb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1146	U-13	Ⅱb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1147	U-12	Ⅱb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	浅黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1148	U-14	Ⅱb	研磨	研磨	暗灰黄色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	
1149	B区	Ⅱb	研磨	貝殻条痕・研磨	にぶい黄褐色	褐灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
1150	R-13	Ⅱa	研磨	研磨	灰黄色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英		
1151	U-12	Ⅱa	研磨	研磨	灰黄色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母		
1152	U-14	Ⅱa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	リボン状突起・横 成前穿孔	
1153	U-13	Ⅱa	研磨	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
1154	U-8	Ⅱc	研磨	研磨	黄灰色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英		
1155	U-13	Ⅱc	研磨	研磨	浅黄褐色	灰白色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
1156	P-14	Ⅱc	研磨	研磨	橙色	にぶい黄褐色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
1157	S-12	Ⅱc	研磨	研磨	浅黄褐色	灰白色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
1158	S-12	Ⅱc・Ⅱb	研磨	研磨	浅黄褐色	灰白色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	1157と同一個体	
1159	P-12	Ⅱb	研磨	研磨	黄灰色	褐灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
1160	Q-14-R-14	Ⅱb	研磨	研磨	灰黄褐色	褐灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	ヒレ状突起・赤色 顔料塗付	
1161	U12	Ⅱa・Ⅱb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	浅黄色	良好	角閃石・長石・石英	赤色顔料塗付・横 刻・1160と同一個体	
1162	Q-12-Q-15・ R-15	Ⅱa・Ⅱb	研磨	研磨	浅黄色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
1163	Q-14	Ⅱb	研磨	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
1164	R-11	Ⅱb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	褐灰色	良	角閃石・長石・石英		
1165	R-11	Ⅱb	研磨	研磨	暗灰黄色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英		
1166	T-11	Ⅱb	研磨	研磨	灰黄褐色	褐灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
1167	R-12	Ⅱc	研磨	研磨	黒褐色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英		
1168	P-12	Ⅱb	研磨	研磨	灰黄色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
1169	U-14	Ⅱb	研磨	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	赤色顔料塗付	
1170	S-9-T-9	Ⅱa	研磨	研磨	浅黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
1171	U-12	Ⅱb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	褐灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		

第48表 B・C区出土土器・土製品観察表¹⁹

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
117	1172	U-13	Ⅱa	研磨	研磨	浅黄色	灰白色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1173	U-13	Ⅱc	研磨	研磨	浅黄褐色	褐灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整・研磨
	1174	P-13	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け
	1175	Q-11	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	貼り付け
	1176	Q-13	Ⅲb	ナデ	ナデ	褐色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け・1175と同一個体
	1177	Q-14	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英	貼り付け
	1178	R-12	Ⅲb	ナデ	磨過・研磨	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け
	1179	R-12	Ⅱa・Ⅱb	ナデ	磨過・研磨	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け・1178と同一個体
	1180	R-12	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	黒褐色	良好	角閃石・長石・石英	
	1181	Q-12	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け
	1182	R-12	Ⅱa	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英	貼り付け
	1183	T-10	Ⅱc	ナデ	磨過・ナデ	にぶい褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け
	1184	T-14	Ⅱc	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	貼り付け
	118	1185	R-11	Ⅱ	研磨	研磨	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子
1186		Q-12	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整・研磨
1187		R-11	Ⅲb	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
1188		Q-14	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
1189		U-13	Ⅲb	研磨	研磨	灰黄色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
1190		R-11	Ⅲb	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
1191		P-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	明黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
1192		V-6	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
1193		S-12	Ⅲb	研磨	研磨	灰褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け
1194		T-12	Ⅲb	研磨	研磨	明赤褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	貼り付け・1193と同一個体
1195		Q-12	Ⅲb	研磨	研磨	明赤褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英	
1196		Q-13・R-12	Ⅱa・Ⅱb	研磨	研磨	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	
1197		R-12	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
1198		P-14	Ⅱa・Ⅱb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
1199	P-12	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英		
1200	P-14	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
1201	Q-12	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英		
1202	Q-13	Ⅲb	研磨	研磨	浅黄褐色	暗灰黄色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
1203	Q-13	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英		
1204	Q-13	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母		
1205	Q-13	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
1206	R-12	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい赤褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英		
1207	R-12	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英		
1208	R-13	Ⅲb	研磨	貝殻磨版・研磨	明赤褐色	明赤褐色	良好	角閃石・長石・石英		
1209	R-14	Ⅲb	研磨	貝殻磨版・研磨	灰黄色	浅黄色	良好	角閃石・長石・石英		

第49表 B・C区出土土器・土製品観察表②

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
	1210	S-9	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	
	1211	P-14	Ⅲa	研磨	研磨	灰黄色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英	
	1212	Q-12	Ⅲa	研磨	研磨	黄灰色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	赤色顔料塗付
	1213	Q-12	Ⅲa	研磨	研磨	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	焼成後穿孔
	1214	Q-12	Ⅲa	研磨	研磨	灰黄褐色	褐灰色	良	角閃石・長石・石英	赤色顔料塗付
	1215	Q-15	Ⅲa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	暗黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
	1216	Q-15	Ⅲa	不明	不明	黄褐色	浅黄色	不良	角閃石・長石・石英・金色雲母	
	1217	R-11	Ⅲa	研磨	貝殻条痕・研磨	にぶい黄褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英	
	1218	R-12	Ⅲa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
	1219	R-12	Ⅲa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
119	1220	R-12	Ⅲa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1221	R-12	Ⅲa	不明	研磨	浅黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
	1222	R-13	Ⅲa	研磨	研磨	浅黄褐色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1223	R-13	Ⅲa	研磨	研磨	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1224	R-14	Ⅲa	研磨	研磨	淡黄色	浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
	1225	Q-11	Ⅱc	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1226	R-10	Ⅱc	研磨	研磨	暗黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
	1227	R-12	Ⅱc	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1228	U-14	Ⅱc	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1229	Q-11	Ⅱ	研磨	研磨	浅黄色	浅黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1230	R-12	Ⅱb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
	1231	R-12	Ⅱb	研磨	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	
	120	1232	Q-14	Ⅲb	磨過・ナデ	研磨	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英
1233		P-14	Ⅲb	貝殻条痕・ナデ	磨過	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
1234		Q-14	Ⅲb	磨過・ナデ	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	突起
1235		Q-14	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	突起
1236		Q-14	Ⅲb	磨過・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	
1237		Q-14	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
1238		U-11	Ⅲb	貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	突起
1239		U-11	Ⅲb	貝殻条痕・ナデ	研磨	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土・金色雲母	リボン状突起・AMS測定資料
1240		V-13	Ⅲb	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
1241		P-14	Ⅲa	貝殻条痕・ナデ	研磨	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	
1242		R-13	Ⅲa	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英	
1243		S-15	Ⅲa	貝殻条痕	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粘土	リボン状突起
1244		P-14	Ⅱc	ナデ	研磨	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
1245		R-12	Ⅱc-Ⅱb	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	口縁部割目・AMS測定資料
1246		R-11	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	貼り付け
1247		R-12	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粘土	貼り付け

第50表 B・C区出土土器・土製品観察表②

区	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
10	1248	R-11	Ⅲa	ナデ	ナデ	灰黄褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	貼り付け
	1249	Q-12	Ⅱc・Ⅲa	ナデ	研磨	にぶい黄褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	口唇部剥目
	1250	T-10	Ⅱc	貝輪条痕	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	貼り付け
	1251	T-14	Ⅲb	磨過・ナデ	研磨	にぶい褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	1252	Q-12	Ⅲb	貝輪条痕・ナデ・組織痕	ナデ	明赤褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英	アンギン
1253	R-11	Ⅲb	貝輪条痕・ナデ・組織痕	ナデ・磨過	灰褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	アンギン	
1254	P-14	Ⅲa	ナデ・組織痕	ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英	アンギン	
1255	P-14	Ⅲb	組織痕	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英	アンギン	
1256	B区	表探	組織痕	研磨	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	アンギン	
1257	B区	表探	組織痕	研磨	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	アンギン	
1258	Q-14-Q-15	Ⅱc・Ⅲa・Ⅲb	貝輪条痕・ナデ・組織痕	貝輪条痕・ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英	剥目	
1259	Q-12-R-12	Ⅲa	磨過・ナデ・組織痕	磨過・ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	剥目	
1260	S-15	Ⅱc	貝輪条痕・ナデ・組織痕	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	剥目	
1261	P-12-Q-12	Ⅲb	組織痕	磨過・ナデ	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	剥目	
1262	Q-14	Ⅲb	組織痕	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	剥目	
1263	Q-13	Ⅲa	組織痕	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	剥目	
1264	R-12	Ⅲa	組織痕	磨過・ナデ	褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	剥目	
1265	U-11	Ⅲa	組織痕	研磨	褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英	剥目	
1266	Q-11	Ⅱ	組織痕	研磨	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	剥目	
1267	P-14	Ⅲb	組織痕	ナデ	にぶい黄褐色	灰白色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	平織り	
1268	T-9	Ⅲa	ナデ・磨過・組織痕	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母		
区	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
11	1269	Q-12	Ⅲb	研磨	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母
	1270	Q-12	Ⅲb	ナデ	ナデ		褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英
	1271	Q-13	Ⅲb	ナデ	ナデ	研磨	褐色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英
	1272	R-12	Ⅲb	研磨	研磨	研磨	暗灰黄色	黒褐色	良好	角閃石・長石・石英
	1273	R-13	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子
	1274	R-13	Ⅲb	研磨	研磨	磨過	にぶい黄褐色	淡黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子
	1275	R-15-T-15	Ⅲa・Ⅲb	研磨	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子
	1276	S-12	Ⅲb	研磨	研磨	研磨	にぶい黄褐色	淡黄色	良	角閃石・長石・石英
	1277	S-13	Ⅲb	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母
	1278	U-12	Ⅲb	研磨	研磨		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母
	1279	P-15	Ⅲa	研磨	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英
	1280	R-12	Ⅲa	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子
	1281	R-14	Ⅲa	ナデ	研磨	ナデ	褐色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母
	1282	S-14-R-14	Ⅲa	研磨	研磨	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母
	1283	S-9	Ⅲa	研磨	研磨	研磨	にぶい黄褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子

第51表 B・C区出土土器・土製品観察表22

図	番号	出土グリッド	出土層位	文様・調整			色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	底 面	外 面	内 面			
102	1284	S-12	Ⅱa	研磨	研磨		橙色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1285	S-13	Ⅱc	研磨	研磨	研磨	明黄褐色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1286	S-12	Ⅱb	研磨	研磨	研磨	橙色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
図	番号	出土グリッド	出土層位	文様・調整			色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	底 面	外 面	内 面			
103	1287	Q-12	Ⅲb	ナデ	貝殻糸痕・ナデ		黄灰色・淡黄褐色	暗灰黄色	良好	角閃石・長石・石英	
	1288	Q-12	Ⅲa	研磨	ナデ 研磨		暗赤褐色・灰黄褐色		良好	角閃石・長石・石英	
	1289	Q-12	Ⅲa	研磨	研磨		赤褐色・明黄褐色	赤褐色・にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1290	R-11	Ⅱa				橙色・にぶい黄褐色	橙色・にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1291	R-12	Ⅱa	研磨	研磨		明褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・金色雲母	
	1292	Q-12	Ⅱc	研磨	研磨		明赤褐色・橙色	明赤褐色・にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1293	R-11	Ⅱ	研磨	研磨 ナデ		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	
	1294	Q-12	Ⅲb	研磨	研磨		暗赤褐色・にぶい黄褐色	暗赤褐色・にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1295	Q-12	Ⅲb	研磨	研磨		赤褐色	赤褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1296	Q-13	Ⅲb	研磨	研磨		にぶい黄褐色	明黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1297	Q-13	Ⅲb	ナデ		ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1298	Q-14	Ⅲb	研磨	研磨		暗赤褐色・にぶい黄褐色	暗赤褐色・にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・金色雲母	
	1299	R-11	Ⅲb	研磨	研磨		暗赤褐色・明黄褐色	暗赤褐色・にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1300	R-11	Ⅲb	研磨	研磨		暗赤褐色・明黄褐色	暗赤褐色・にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	1299と同一個体か
	1301	R-11	Ⅲb	不明	不明		褐色・淡黄褐色	灰黄褐色	不良	角閃石・長石・石英	
	1302	R-11	Ⅲb	研磨	研磨		にぶい褐色・淡黄色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
	1303	R-12	Ⅱa・Ⅱb	研磨	ナデ, 研磨		明赤褐色	明赤褐色・にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英	
	1304	P-12	Ⅲa	研磨	研磨		明赤褐色	明赤褐色	良好	角閃石・長石・石英	
	1305	P-15	Ⅲa	ナデ	ナデ		褐色・淡黄褐色	にぶい黄褐色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1306	Q-14	Ⅲa	研磨	研磨		明赤褐色・にぶい黄褐色	明赤褐色・にぶい黄褐色	良	長石・石英	
	1307	Q-14	Ⅲa	研磨	研磨		褐色	明赤褐色・褐色	良	角閃石・長石・石英	
	1308	R-9	Ⅲa	研磨	研磨		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	石英・赤色粒子	
	1309	R-11	Ⅲa				褐色・淡黄褐色	褐色・淡黄褐色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1310	R-12	Ⅲa	研磨	ナデ		にぶい黄褐色	黄灰色	良好	長石・石英	
	1311	R-12	Ⅲa	研磨	研磨		明赤褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	
	1312	R-12	Ⅲa	研磨	研磨		明赤褐色・にぶい黄褐色	明赤褐色・にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1313	R-11	Ⅲb	研磨			赤褐色・にぶい褐色	赤褐色・にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
1314	R-12	Ⅲb	研磨	研磨		赤褐色・にぶい褐色	明赤褐色・にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
104	1315	Q-13・Q-14・P-13	Ⅲa・Ⅲb	研磨	ナデ		赤褐色・にぶい黄褐色	にぶい褐色	良好	角閃石・長石・石英・金色雲母	
	1316	Q-13	Ⅲb	不明	ナデ		赤褐色・褐色	赤褐色・褐色	良	角閃石・長石・石英	
	1317	R-11	Ⅲb	貝殻糸痕・ナデ	貝殻糸痕・ナデ		赤褐色・褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	底面調整・貝殻糸痕・ナデ
	1318	R-11	Ⅲb	研磨	研磨 ナデ		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1319	Q-15・R-15	Ⅲa・Ⅲb	研磨	ナデ		赤褐色・褐色	赤褐色・褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	

第52表 B・C区出土土器・土製品観察表23

図	番号	出土グリップ	出土層位	文様・調整		色 調		焼成	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
13	1320	Q-11	Ⅱc・Ⅱb	研磨	研磨	明赤褐色	赤褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1321	Q-11	Ⅱ'	研磨	ナデ	赤褐色	明赤褐色・にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1322	Q-12・Q-13	Ⅱa・Ⅱb	研磨	ナデ	明赤褐色・浅黄褐色	明赤褐色・浅黄褐色	良	角閃石・長石・石英・金色雲母	
	1323	R-12	Ⅱb	研磨	研磨	褐色	褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1324	R-12	Ⅱa	研磨	ナデ	明赤褐色・浅黄褐色	明赤褐色・にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
	1325	R-10	Ⅲb		ナデ	明赤褐色・にぶい黄褐色	褐色・浅黄色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1326	R-12	Ⅲb	研磨	ナデ	明赤褐色・浅黄褐色	褐色	良	角閃石・長石・石英	
	1327	R-12	Ⅲb	研磨	貝殻糸痕	赤褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子・金色雲母	
	1328	V-7	Ⅲb	研磨	研磨	褐色	黒褐色	良好	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	1329	Q-12	Ⅱa	研磨	ナデ	灰黄褐色	黄灰色	良	長石・石英	
	1330	R-11	Ⅱc・Ⅲa	研磨	貝殻糸痕	明赤褐色	にぶい黄褐色	良好	角閃石・長石・石英	1327と同一個体か
	1331	Q-12	Ⅱc	ナデ	ナデ	浅黄褐色	にぶい黄褐色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	15	1332	Q-14	Ⅲb	貝殻糸痕	貝殻糸痕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・赤色粒子
1333		V-9	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
1334		R-12	Ⅱa	擦過	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
1335		R-12	Ⅱa	ナデ	ナデ	にぶい褐色	黒褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
1336		T-12	Ⅱa	研磨	研磨	黒褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
1337		U-4	Ⅲa	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	補灰色	良	角閃石・長石・赤色粒子	
1338		U-6	Ⅲa	貝殻糸痕・ナデ	貝殻糸痕・ナデ	にぶい褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
1339		R-11	Ⅱc	貝殻糸痕・ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
1340		S-12	Ⅱc	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	黒褐色	良	角閃石・石英	
1341		S-14	Ⅱc	擦過	ナデ	褐色	黄灰色	良	角閃石・長石	
1342		R-13	Ⅱa	ナデ	ナデ	褐色	黄灰色	良好	角閃石・長石・石英	
1343		Q-12	Ⅱc	ナデ	ナデ	褐色	明赤褐色	不良	角閃石・長石・石英	
1344		S-12	Ⅲa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
1345		R-13		ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	

(2) 石器・石製品

概要

権現脇遺跡では、縄文時代晩期～弥生時代早期の土器に伴って多量の石器が出土した。主な包含層はⅢ a層・Ⅲ b層である。この層から出土した石器は、基本的に出土地点の水平・垂直座標値を記録した「ドットマップ遺物」として採取した。該期の所産と考えられる石器はⅤ b層（縄文早期の包含層）やⅣ層、Ⅱ a～Ⅱ c層（中世以降の包含層）にも含まれているが、いずれも自然営力による上下動、遺構の構築、攪乱等により本来の帰属層（Ⅲ a層・Ⅲ b層）を遊離したものと考えられる。

それは逆にⅢ a層・Ⅲ b層にも時期の異なる遺物が混入している可能性を示しており、当該層の出土資料であっても技術的・形態的特徴やバティナの進行度などから縄文時代晩期以前と判断したものは、第Ⅲ章第4節1.(2)の報告分に含めた。

本項で対象とする縄文時代晩期～弥生時代早期と考えられる石器は、Ⅲ a・Ⅲ b層のドットマップ遺物として取り上げたもの以外にも多数存在する。グリッド単位での包含層一括や排土中、表面採集資料をあわせると膨大な量である。これらは石器群の総体として重要な意味を持つが、詳細な情報を有するドットマップ遺物と、包含層一括・排土中・表面採集資料等を一体化するには問題があるため、ここではⅢ a層・Ⅲ b層出土のドットマップ遺物を中心に報告する。

器種分類について

石器群は、加工痕や使用痕を有する「狭義の石器」と、原石・石核・剥片類など石器製作の工程を示す資料とに大別される。「狭義の石器」は、剥片を素材とするものと、礫や岩片を素材とするものがある。前者は剥片石器、後者は礫石器や礫塊石器と呼ばれるものである。ここでは前者を剥片素材石器群（A群）、後者を礫・岩片素材石器群（B群）と呼ぶことにする。この素材差による分類は、必ずしも機能的・用途的な分類と対応するわけではない。たとえば打製石斧では、安山岩の板状節理岩片を素材とするものが多く、B群に分類される。しかし一部には大型剥片を素材として製作されているものがある。これはA群に分類されるべきだが、器面風化が進行している打製石斧では必ずしも岩片素材か剥片素材かが判別できないわけではないため素材差にかかわらずB群とする。また穿孔具である石錐は、大部分が二次加工による錐部を作出した一般的な石錐で、A群に属する。一方、細長い棒状水磨礫を利用した石錐（礫錐）も見られる。これはB群に属する。

石器以外では、原石・石核・剥片・砕片・水磨礫・小礫・岩片がある。原石・石核・剥片・砕片は、剥片素材石器群の製作に関わる諸工程を示す資料であり、水磨礫・小礫岩片は、礫・岩片素材石器群の製作・使用に関わる資料である。このほか石製品として装身具（玉）が出土している。

剥片素材石器群の器種には、打製石鏃・局部磨製石鏃・石鏃未製品・石匙・搔器/削器類・石錐・彫器・楔形石器・つまみ形石器・筈状石器・異形石器・二次加工剥片・使用痕（と思われる微細剥離痕や磨耗痕を有する）剥片があり、礫・岩片素材石器群では磨製石庖丁・石庖丁様石器・磨製石斧・磨製石斧未製品・蛇紋岩片・打製石斧・打製石斧未製品・打製石斧剥片・ストーンリタッチャー・磨石/敲石類・礫錐・石皿・台石・砥石・石錘・円盤状石器がある。

第53表は器種分類と石材分類をまとめたもので、第54表は石器台帳の諸属性（サイズ・残存率・残存部位・刃部摩耗・被熱痕）をまとめたものである。

第53表 器種・石材分類表

大別		名称	
A	剥片素材石器群		
B	礫・岩片素材石器群		
C	原石		
D	石核		
E	剥片		
F	砕片		
G	水磨礫		
H	小礫		
I	岩片		
J	石製品		

剥片素材石器群 (A群)			
大別	中別	細別	器種名
A	01		打製石錘
A	02		局部磨製石錘
A	03		石錘未製品
A	04		石砧
A	05	A	搗・削器類 (A類)
		B	搗・削器類 (B類)
		C	搗・削器類 (C類)
		D	搗・削器類 (D類)
A	06		石鏟
A	07		彫器
A	08		楔形石器
A	09		つまみ形石器
A	10		籠状石器
A	11		異形石器
A	12	A	二次加工剥片 (A類)
		B	二次加工剥片 (B類)
A	13		使用痕剥片
A	14		A群不明

礫・岩片素材石器群 (B群)			
大別	中別	細別	器種名
B	21		磨製石磨丁
B	22		石泡丁礫石器
B	23	A	磨製石斧 (A類)
		B	磨製石斧 (B類)
		C	磨製石斧 (C類)
B	24		磨製石斧未製品
B	25		蛇紋岩片
B	26	A	打製石斧 (A類)
		B	打製石斧 (B類)
		C	打製石斧 (C類)
		D	打製石斧 (D類)
B	27		打製石斧未製品
B	28		打製石斧剥片
B	29		ストーンリタッチャー
B	30	A	磨石 / 磨石A類
		B	磨石 / 磨石B類
		C	磨石 / 磨石C類
B	31		礫鏟
B	32		石皿
B	33		台石
B	34		砥石
B	35		石鏟
B	36		円盤状石器
B	37		B群不明

石材名			
01	黒曜石A		
02	黒曜石B		
03	黒曜石C		
04	無珪晶質玄武岩		
05	チャート		
06	安山岩		
07	砂岩		
08	頁岩		
09	石灰岩		
10	蛇紋岩		
11	結晶片岩		
12	石英		
13	輝石		
14	スコリア		
15	不明		

第54表 石器属性表

サイズ	分類	表記	内容	適用対象: 磨製石斧・ストーンリタッチャー・磨石 / 磨石類・台石・石皿・砥石
	A	種小	最大長が20mm以下	
	B	小	最大長が21-50mm	
	C	中	最大長が51-100mm	
	D	大	最大長が101-200mm	
	E	特大	最大長が201mm以上	

残存率	分類	表記	内容	適用対象: 磨製石斧・打製石斧・磨石 / 磨石類
	A	完形	概ね90%以上残存	
	B	一部欠損	概ね75%以上残存	
	C	半欠	概ね50%以上残存	
	D	断片	概ね25%以上残存	
	E	破片	残存率25%以下で、全体形の推定が困難な破片資料	

残存部位	分類	表記	内容	適用対象: 磨製石斧・打製石斧
	A	基部側	基部側を残す残存	
	B	胴部	基部・刃部ともに欠失した胴部のみを残存	
	C	刃部側	刃部側を残す残存	

刃部磨耗	分類	表記	内容	適用対象: 打製石斧
	A	著しい磨耗	刃部加工における剥離面間の稜線部が極端に磨耗し、丸みを帯びている状態。	
	B	稜線部磨耗	刃部加工における剥離面の稜線部が磨耗しているもの。	
C	軽微な磨耗	刃部の磨耗がわずかに認められるもの。石材によっては磨耗度が自然風化かの判別は難しい。		

被熱痕	分類	表記	内容	適用対象: A-C・Fは黒曜石製の全器種、D-Eは礫・岩片素材石器群の全器種
	A	発泡・ゼラつき	強い火熱により、剥離面が発泡もしくはゼラついた状態。細かな剥離方向は、判別が難しい。	
	B	強い光沢鈍化	全体に黒曜石特有のガラス光沢が失われた状態。局部的に光沢が残る場合もある。	
	C	弱い光沢鈍化	全体に光沢鈍化が認められるが、その程度はBより弱く、部分的にムラがある。	
	D	ハジケ	加工面や素材表面の一部が、内部からの圧力により剥落しているもの。状態は石材により差異がある。	
	E	変色	黒色化・暗褐色化・赤色化など、被熱により石材本来の色調に変化が見られるもの。	
	F	クラック	被熱により亀裂を生じているもの。多くの場合、変色も同時に認められる。	

原石と認定できたのは黒曜石製だけである。全面が自然面（礫面）で覆われている場合は問題なく原石といえるが、一部、1～2枚の剥離面を有するものも原石に含めている。これは剥片剥離を意図したものではなく、自然剥離が石質を確認するための試制的な剥離であろうと判断したためである。

石核は目的的な剥片剥離と思われる2面以上の剥離面を有することを認定基準とした。黒曜石製は礫を素材とする例が多く、認定は比較的容易である。だが徹底的な剥片剥離を行った石核では礫面が失われ、最終剥離面の最大長が1～2cm程度のもも少なくない。このような小型石核では、剥出された剥片が石器の素材になり得るか、という疑問が以前から指摘されている。石核とは考えにくいのが、逆に石核以外の器種に分類することも困難である、という理由で消極的に石核に分類されることもある。しかし本遺跡の場合、二次加工剥片B類に1～2cm程度の小型剥片を多用していることが明らかになった。この事実は当該資料を「石核」と認定する上での有力な根拠となろうし、縄文時代晩期の少なくとも西九州域において、小型石核（と報告されている資料）が普遍的に存在する事実を考える上でも重要である。黒曜石製の石核に対する剥片剥離作業は、その限界まで徹底的に実施している観があり、それゆえに残核としての形状も多様である。石核形状の細分については個別解説で触れる。

無斑晶質玄武岩製では礫素材の石核は見られない。角礫状の原石から剥出した大型厚手剥片を遺跡内に搬入し、それを素材として剥片剥離を行うことが基本のようである。ただし剥片剥離が進行した例では、黒曜石製の石核と同様に素材が礫か剥片かという判別は難しく、礫素材石核が存在した可能性も想定しておく必要があろう。

剥片は本来、石核から剥出された全ての石片の総称として用いられるが、ここでは一般的な認識に従って剥片石器素材として利用可能なサイズ・形状を満たすものを剥片とし、それ以下を破片とする。前述のように本遺跡の石核の剥離面は長さ2cm以下のものが少なからずあり、1cmに満たない例も見られる。こうした小型石核から剥出された剥片では石鏃の製作さえ困難で、通常なら破片に分類されるべき小ささである。しかし小型剥片を多用する二次加工剥片B類の存在は、このサイズでも石器素材として有用であることを示している。そうした点から本稿では、最大長1cmを基準として、それ以上を剥片、以下を破片とする。ただし長さが1cm以上であっても、石器の素材として不適当な形状と判断される場合は破片とした。

無斑晶質玄武岩製の場合、黒曜石とは異なって二次加工剥片B類のような小型の石器は少ない。そのため無斑晶質玄武岩での剥片・破片の分類基準は、概ね2cm前後を境界としている。

水磨礫と小礫は水流により円磨された自然礫である。石材は様々だが、いずれも遺跡周辺には存在せず、搬入石材と考えられる。水磨礫のなかには最大長2cm以下のものも見られるが、これは石器の素材とは考え難いため、小礫として分離した。小礫が出土する意味については明らかにできないが、たとえば海藻類を採取して遺跡に運び込んだ際、付着していた小礫が遺存している可能性などを想定できるのかもしれない。水磨礫の一般的なサイズは拳大だが、なかには長さ30cmを超える大型品もある。いずれも磨石/敲石類・砥石・石皿などへの利用を目的としていることは明らかである。

岩片は遺跡周辺で入手可能なデイス（石英安山岩）の板状節理岩片と、砂岩・頁岩・結晶片岩など搬入石材の岩片がある。砂岩や結晶片岩は層理面や片理面から割れやすく、板状に破断しているものが多い。これらの一部には水磨面を残すものが見られる。その場合、本来は水磨礫であるが、原形を留めないため岩片として扱った。

石鏃は、平基または基部を浅く切り込んだ無茎式が主体を占め、側縁に屈曲点を有する五角形鏃が比較的多い。局部磨製石鏃は、胴部片面に研磨を施したものがA区から3点出土している。

石鏃未製品は認定基準を明文化することが難しい。全体形状や大きさ、二次加工の在り方、素材の用い方などを総合的に判断したが、なかには従来サイドブレイドとされてきたものを含んでいる可能性がある。また基部側からの調整剥離が先端側に及び過ぎて先端部を欠失したような製作途中の失敗品も石鏃未製品とした。

搔器／削器類は、二次加工による連続した刃部を有し、切削具と考えられるものを認定した。素材剥片に応じて大小各種のサイズがあり、形態も変化に富む。刃部は緩角度加工によるものと、急角度加工によるものがあり、両者の併存例も見られる。ここでは一般に搔器とされる前者をA類、削器とされる後者をB類とする。併存例は主要な刃部加工の在り方から判断した。弧状・曲線状の内湾する刃部を持つ挟入石器はC類とする。C類もバリエーションが多く、刃部加工は浅い角度のものから90に近いものまでである。鋸歯縁状石器は、挟入の最奥部が磨耗している例が多く見られたことからC類に含めた。A～C類の石材は黒曜石と無斑晶質玄武岩の二者を利用しているが、黒曜石製には小型品が多い。以上の搔器／削器類とは別に、無斑晶質玄武岩製の剥片を素材とする一群がある。これをD類とする。概形は半月形・逆半月形・三角形・台形・長方形で、形態やサイズが石砲丁や石鏃に類似するものである。大型厚手の縦長剥片や不定形の剥片を素材とし、粗い加工により刃部を作出する。背縁側は自然面・折断面の場合が多く、刃潰し的な急角度加工を施すものもある。D類は第131図45・46のように刃部に磨耗痕やポリッシュの認められる例があり、石砲丁や石鏃との形態の類似から「収用石器」である可能性が高いと考えられるが、使用痕分析を行っていないため便宜的に搔器／削器類に含めた。

石鏃も一種の切削具と考えられるが、ここでは搔器／削器類に含めず、独立器種として分離した。

石錐の認定は、明確な錐部の作出を必要条件とし、回転運動による錐部の磨耗痕が認められることを十分条件としている。本遺跡の石錐は、素材の湾曲した剥離面や折断面を活用し、片側だけに弧状の加工を施して錐部を作出する例がある。この場合、微細剥離痕の在り方から彫器や削器として兼用された可能性も考えられるが、石錐としての認定を優先している。

楔形石器は、両極打法の痕跡が認められるものを認定した。総じて不安定な形状の小型品が多く、両極剥片の生産を意図した「石核」とは考えにくい。

彫器も多様である。縦長剥片の側縁に主軸と平行する彫刀面を作出するもの、縦長剥片の末端部に横方向から彫刀面を作出するもの、横長剥片を横位に用いて彫刀面を作出するもの、横長剥片を縦位に用いて末端側に彫刀面をもつものなどがある。いずれも彫刀面の作出を認定基準としたが、なかには不明瞭な例も含む。なお器種分類では使用痕剥片としているが、剥片の末端部や折断面に、彫刀面の微細剥離痕と類似する剥離痕や擦痕の観察されるものがある。これは彫器と同様に使用された可能性を示唆するものだが、彫器には含めなかった。

つまみ形石器は、小型の縦長剥片を素材として頭部の両側縁に一对になる挟入加工を施したものである。端部につまみ部が作出されたように見えるためこの名称を用いたが、折断面を有するわけではなく、鈴桶型石刃や同石刃を素材とする剥片鏃に関係するとも考えにくい。その点では不適切な名称かもしれない。

異形石器は両面加工によって弓形状に整形され、両面に部分的な研磨が施されている石器である。該当する器種名が見あたらないため、異形石器とした。

筒状石器は、縄文時代後期後葉を主体とする島原市（旧有明町）大野原遺跡（読見編2001）の報告書において、「両面調整・片面調整で短冊形・バチ形の器形を作りだした石器」で「器軸にほぼ直交する刃縁部をもち、基端部に向けて幅を減じてゆく器形」（森川2001）とされたものに準拠している。

二次加工剥片は、素材に対して何らかの二次加工を施したものだが、削器などの器種に該当しない場合に用いられることが多い。ここではそうした資料を二次加工剥片A類としている。一方、剥片の側縁や末端部にプランティング状の急角度加工を施したものがある。これを二次加工剥片B類とする。サイズは様々だが、長さ1～3cm程度の縦長剥片・台形状剥片小型・不定形剥片が大半を占める。加工は限定的で小規模なものが多く、微細なものは使用痕剥片との区別に迷うこともある。

使用痕剥片は、正確には「使用痕と思われる微細剥離痕・磨耗痕・擦痕等を有する剥片」である。必ずしも使用痕という根拠があるわけではなく、偶発剥離による可能性もある。ガラス光沢の強い黒色黒曜石製では発掘時の新傷痕と紛らわしい例があり、疑わしい場合は除外した。

磨製石庖丁は擦切穿孔を施したものがB区から1点出土している。円形穿孔例は出土しなかった。

石庖丁様石器は、平面概形が長方形や半月形を呈する、石庖丁類似の石器である。岩片素材が多く、撃打により全体を整形し、刃部を作出しているが、一部には刃部を研磨しているものも見られる。

磨製石斧は伐採具と考えられる形態・重量で、中型～大型の両刃石斧をA類、小型～中型で片刃あるいは片刃に偏った石ノミ状をB類、幅広薄手で局所的な研磨が施されているものをC類とする。磨製石斧未製品は頁岩製および結晶片岩製で、全体の形状や加工の在り方から石斧製作を意図していると考えられるものの、研磨が極めて限定的か全く施されていないものである。

蛇紋岩片は文字通り蛇紋岩の破片である。蛇紋岩は遺跡周辺には産出しない石材で、明らかな搬入石材である。その利用は磨製石斧に限定されており、研磨痕が観察される資料は磨製石斧片と判断できるが、そうでない場合は蛇紋岩片とした。磨製石斧の製作や使用に関与した資料と考えられる。

打製石斧はA類～D類の四種に分類した。A類は細身長身で、両側縁は平行するかわずかに丸みを帯び、基部および刃部が先細り状を呈するものである。B類は両側縁が平行する幅広の短冊形で、幅に比べて身が薄いものが多い。いわゆる扁平打製石斧もB類に含まれる。C類はB類に類似するが基部側が三角形を呈するものである。なお打製石斧の一部には、部分的に研磨を施したものがある。これをD類とする。本来は局部磨製石斧とすべきであろうが、研磨は胴部に限定され、研磨による刃部を形成するわけではない。打製石斧と同等の石材を利用してあり、機能的にも伐採具・木工具とは考えにくい。胴部に見られる局所的な研磨を除けば打製石斧と変わるところがないため、打製石斧の一部に含めている。

打製石斧未製品は、石材や素材から打製石斧の製作を意図していると考えられるが、刃部が形成されていないなど、加工が不十分のものである。

打製石斧剥片は、打製石斧と同様の石材で、その製作時に生じたと考えられる剥片である。

磨石/敲石類は水磨礫の一部に滑面や敲打痕（被敲打痕）が認められるものである。滑面と被敲打痕は表裏面に、敲打痕は周囲に見られることが多い。このうち滑面だけを有するものをA類、滑面と敲打痕の両方を有するものをB類、敲打痕のみが観察されるものをC類とする。A類は磨石、C類は

敲石と呼べるが、B類は磨石と敲石を兼用したものである。被敲打痕は台石としての使用を示しているが、本遺跡では磨石/敲石類の中央部に残された被敲打痕は微弱なものが多く、明確なくぼみを形成するものは見られない。そのため凹石という名称は用いなかった。

ストーンリッチャーは鼠歯状痕が認められる堅緻な水磨礫で、磨石/敲石類とは区別している。

石皿・台石・砥石も、磨石/敲石類と同様に兼用の多い器種である。安山岩製や砂岩製の大型品で中央部に広い凹滑面を有する場合は石皿とし、滑面の間に段差が認められる場合は砥石と判断した。また滑面が認められず、主に被敲打痕だけが観察されるものは台石とした。しかしこれらの器種は、使用や被熱・凍結によると思われる破損・破砕で原形を留めていないものが多いため、必ずしも正確に分類できるわけではない。

石錘は、水磨礫の長軸両端に撃打による抉入部を施した打欠石錘がC区から3点出土しているのみで、石器組成における比率は極めて小さい。これは土器片錘ともあわせて考える必要があろう。

円盤状石器は結晶片岩などの岩片に撃打整形を施し、略円形に仕上げたもので、用途は不明である。

石材について

石器石材については、長崎大学教育学部の長岡信治先生に代表的な資料の鑑定をお願いしたが、風化面の肉眼観察という制約もあり、黒曜石などの特徴的な石材を除いて、岩石名を特定することは困難であった。そのため本文中で使用している石材名は可能性を含めての雑駁なものとなっており、誤認については筆者の責であることを明記しておきたい。

黒曜石は、権現脳遺跡における剥片素材石器群の石材として最も多く利用されているものである。外見上の色調や表皮の状態から黒曜石A～黒曜石Cの三種に細別する。黒曜石Aとしたものは、色調が黒色～漆黒色の良質黒曜石である。原石は角礫ないし亜角礫で、表皮はサンドペーパー状を呈するものが多い。原産地は佐賀県伊万里市腰岳と考えると大過ないであろう。黒曜石Bは、色調が暗灰色～青灰色で、長崎県佐世保市針尾島産の黒曜石に酷似する。青灰色の中でもやや緑色を帯びたものは長崎県西海市土井井行（龜岳）産の可能性がある。黒曜石Cは、色調が灰白色～乳白色を呈するものである。原産地としては針尾島古里海岸、佐賀県嬉野市椎葉川、大分県姫島村などが考えられる。

無班晶質玄武岩は、従来「サヌカイト」または「サヌカイト質安山岩」として報告されてきた石材と同一と考えられるものである。長岡・塚原・角縁・宇都宮・田島（2003）によると「サヌカイト」の名称には岩石学的に「四国讃岐地方に限定して産する中期中新世の無班晶質安山岩」であるという「岩質のほか、産地と時代が含まれている」ため「サヌカイト」と岩質は類似するが讃岐地方以外の産地や時代の異なるものは、一般に「サヌキトイド」(Sanukitoid)と呼ばれ、無班晶質安山岩のみならず無班晶質玄武岩までも含んでいる」とされる。また、「西九州の遺跡から出土する石器の石材に用いられているものは、ほとんどがサヌキトイドと考えられる」が、石器のように原産地から「移動してしまった無班晶質安山岩について、サヌカイト・サヌキトイドの外見上の区別は困難である」ため、「両者を区別せずに、単に「無班晶質安山岩」「玄武岩質の場合は「無班晶質玄武岩」とする見解が述べられている。

本稿で「無班晶質玄武岩」という名称を用いたのは、基本的に上記の立場に負うところが大きく、肉眼観察による限りカンラン石の班晶が認められる玄武岩質の石材が多かったことによる。正確には

「無斑晶質安山岩」とすべきものが含まれている可能性もあろう。そうした意味において、ここでの「無斑晶質玄武岩」という表記は、「無斑晶質安山岩」を包括した代表名である。

無斑晶質玄武岩は、黒曜石について利用率が高く、両者で剥片素材石器群全体の95%以上を占めている。黒曜石は角礫・亜角礫・円礫など原石状態で遺跡に搬入されている可能性が高い。その大きさは最大でも拳大程度と考えられ、平均的には鶏卵大、小さなものでは鶏卵大である。無斑晶質玄武岩の原石と呼べるものは出土していない。先にも触れたように、残存資料を見る限りでは大型厚手剥片の状態で搬入されている可能性が高いようである。黒曜石・無斑晶質玄武岩以外の石材では、チャート・鉄石英（Ⅱc層出土のため第56表には含まれない）も見られるが、いずれも微量である。

礫・岩片素材石器群では、安山岩・砂岩・泥岩・頁岩・石灰岩・蛇紋岩・結晶片岩・石英など多様な石材が認められるが、この分類も肉眼鑑定のため正確を期すことは難しい。

安山岩は、遺跡の包含層中にも含まれている普賢岳のデイスイト（石英安山岩）と、一般的な安山岩に大別される。デイスイトは大型の板状節理岩片が石皿として利用されている程度で、他器種への利用は少ない。斑晶が粗大で耐風化性が低いため、容易に入手できる石材ながら用途は限定的なのであろう。デイスイト以外の安山岩は輝石安山岩や角閃石安山岩で、その板状節理片が打製石斧の素材として多用されている。石質は比較的緻密で堅いものもあり、近郊の原産地としては島原半島南部や諫早市飯盛町などが考えられる。安山岩の水磨礫は、磨石/敲石類・石錘に利用されている。

砂岩は石皿・砥石・台石・磨石/敲石類に多用されており、礫・磨製石斧・石庖丁・石器・石錘・ストーンリタッチャー・円盤状石器にも利用されている。これらは海岸部での採取を想定できるが、重量が13 kgを超えるものもあり、標高200mを超える本遺跡への搬入には相当の労働量を要したことが推測される。頁岩は磨製石斧に多用されているほか、中型の堅緻な水磨礫（ノジュール？）がストーンリタッチャーとして利用されている。石灰岩と思われる石材は、磨製石斧が1点出土している。産地は不明である。

蛇紋岩は前述したように磨製石斧のみに利用されている搬入石材である。破片が極めて少ないことから磨製石斧の完成品または研磨前段階の未製品として持ち込まれている可能性が高い。結晶片岩は、打製石斧・磨製石斧・石庖丁・石器・円盤状石器など比較的多くの器種に利用されている。土器のなかには胎土の混和剤として結晶片岩の粉砕片が利用されている例もあり、A区で検出された結晶片岩の集中部分は、そうした用途との関連も考えられる。蛇紋岩・結晶片岩は、長崎半島や西彼半島に多く見られるが、熊本・天草方面の原産地も視野に入れておくべきであろう。石製品（玉）の石材については、個別説明で触れる。

【引用・参考文献】

- 長岡信治・塚原 博・角縁 進・宇都宮 恵・田島俊彦 2003『野首遺跡における石器の石材と原産地の推定』塚原博編『野首遺跡』小値賀町文化財調査報告書 第17集 長崎県小値賀町教育委員会
- 森川 実 2001『②石器 [第1群]』諫早富士部編『大野原遺跡 焼土群・粘土貯蔵穴を伴う縄文時代晩期の調査報告』有明町文化財調査報告書 第12集 長崎県有明町教育委員会

石器群の数量について

権現脇遺跡A～D区で、ドットマップ遺物として取り上げた石器・石製品は計6,498点に達する。その大部分はⅢ a層・Ⅲ b層から出土したものだが、調査区によってはⅡ a層～Ⅱ c層・Ⅳ層・Ⅴ b層の出土分を含む。

第55表は、ドットマップで取り上げた石器・石製品の数量を地区別・層別別に示したものである。A区では計2,460点のうち、Ⅳ層が4点、Ⅴ b層が3点である。B区はⅡ a～Ⅱ c層から82点、Ⅳ層から110点が出土したが、Ⅴ b層からの出土遺物はない。C区の石器はすべてⅢ a・Ⅲ b層からの出土である。D区は計319点中197点がⅢ a層・Ⅲ b層出土で、122点がⅤ b層出土である。

Ⅳ b層は、一部がⅢ a層・Ⅲ b層から混入している可能性はあるにせよ、縄文時代早期の遺物包含層である。Ⅱ a層～Ⅱ c層はB区で一部をドットマップ遺物として取り上げたが、これはB区から調査を開始したことによる試行結果である。Ⅳ層は基本的に無遺物層で、遺物出土は上面に限られており、Ⅲ b層中の遺物が自然営力によりⅣ層上面に沈降したものと考えられる。この点でⅣ層の遺物をⅢ b層出土遺物と同様に取り扱うことも可能だが、混乱を避けるため除外して考える。

以上の理由から、縄文時代晩期～弥生時代早期の石器は、Ⅲ a・Ⅲ b層から出土したドットマップ遺物を対象とする。その数量は全数(6,498点)からⅡ a～Ⅱ c層の82点とⅣ層の113点、Ⅴ b層の125点を除外し、第Ⅲ章第4節1.(2)と3.(1)の掲載資料(Ⅲ a・Ⅲ b層出土で縄文時代早期または弥生時代中期以降と判断したもの)を差し引いた、6,166点である。

第55表 地区別・層別石器数量表

	A区 調査面積：2,991㎡								B区 調査面積：1,458㎡							
	Ⅱ a	Ⅱ b	Ⅱ c	Ⅲ a	Ⅲ b	Ⅳ	Ⅴ b	計	Ⅱ a	Ⅱ b	Ⅱ c	Ⅲ a	Ⅲ b	Ⅳ	Ⅴ b	計
A 剥片素材石器群				368	707	4	1	1,080		1	52	441	752	48		1,294
B 礫・岩片素材石器群	1	1		77	155			232			8	69	177	8		264
C 原石					2			2				4	2			6
D 石核				24	36			60		1	2	27	51	5		86
E 剥片				252	461		1	714			11	188	538	23		760
F 砕片				58	159		1	218			2	15	324	18		359
G 水磨礫				9	14			23				8	4	1		13
H 小礫				4	15			19		1		13	18			32
I 岩片				33	77			110			2	78	113	7		200
J 石製品(玉類)				2				2								
合計				827	1,626	4	3	2,460	1	4	77	843	1,979	110		3,014

	D区 調査面積：870㎡(F列以南=125㎡)								C区 調査面積：1,171㎡							
	Ⅱ a	Ⅱ b	Ⅱ c	Ⅲ a	Ⅲ b	Ⅳ	Ⅴ b	計	Ⅱ a	Ⅱ b	Ⅱ c	Ⅲ a	Ⅲ b	Ⅳ	Ⅴ b	計
A 剥片素材石器群				24	53			55	132			114	169			283
B 礫・岩片素材石器群				4	6			10				44	55			99
C 原石					1			1				3			3	
D 石核				2	9		3	14				10	12		22	
E 剥片				5	44		37	86				61	115		176	
F 砕片				5	40		26	71				18	64		82	
G 水磨礫												2	1		3	
H 小礫					1			1				2			2	
I 岩片					3		1	4				15	20		35	
J 石製品(玉類)																
合計				40	157		122	319				266	439		705	

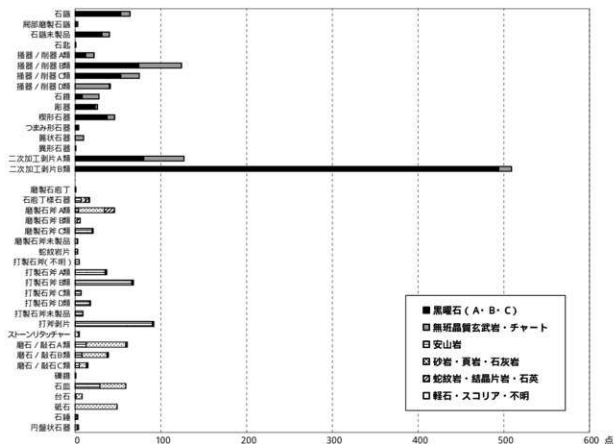
器種と石材の関係について

ここで先述の数値に基づいた器種と石材の関係を概観しておこう。第56表は器種別 石材別の集計表で、第126図のグラフは第56表から使用痕剥片と不明(A・B)を除外して作成したものである。

剥片素材石器群(A群)と礫・岩片素材石器群(B群)石器群の石材利用は、極めて対照的である。A群は黒曜石と無班晶質玄武岩を主用石材とするが、両者の比率は約4:1で黒曜石の利用率の高さがうかがえる。黒曜石では漆黒色良質のAが圧倒的に多く、全黒曜石の97%以上を占めている。

B群では安山岩と砂岩の利用が多く、各器種に用いられている。これと対照的な石材が磨製石斧に限定利用されている蛇紋岩である。頁岩は磨製石斧に多用されているほか石砲丁様石器・打製石斧・ストーンリッターなどにも利用されている。結晶片岩も同様の傾向を示す石材で、汎用性の高い安山岩・砂岩と、限定性の強い蛇紋岩との中間的な石材と言えよう。なお磨製石斧A類は多様な石材が見られるのに対し、C類で安山岩が多用されていることは両者の機能差を考える上で示唆的である。

A群は概ね黒曜石優位の利用状況で、石鏃・同未製品・搔器/削器A〜C類・彫器・楔形石器などの小型剥片石器は黒曜石製が多い。二次加工剥片B類では509点中494点(約97%)が黒曜石製である。逆に石鏃は小型石器ながら無班晶質玄武岩の利用が多い。籠状石器・石匙・搔器/削器D類には黒曜石製が見られず、より大きな剥片が得られる無班晶質玄武岩を多用している。



第126図 器種別の石材利用状況グラフ

第56表 器種別・石材別集計表

器種	石材	主に剥片素材石器群の石材					主に礫・岩片素材石器群の石材										計			
		黒曜石 A	黒曜石 B	黒曜石 C	無垢黒曜石製品	チャート	安山岩	砂岩	頁岩	石灰岩	蛇紋岩	話麻片岩	石英	輝石	スコリア	不明				
A	剥片素材石器群	2,118	38	5	457	1	1											12	621	
B	礫・岩片素材石器群						323	185	36	1	14	15	2					12	588	
C	原石	12																	12	
D	石核	140	1		27														168	
E	剥片	1,197	32	6	426	2			1										1,664	
F	砕片	564	10		109														683	
G	水磨礫					2	14	7				1							38	
H	小礫					1	8	2	2			1							53	
I	岩片						231	52	4			45		2	1				338	
J	玉																		1	
	総計	4,031	80	11	1,020	6	577	246	43	1	14	61	3	2	1			70	6,366	
剥片素材石器群	石皿	45	6	2	11														64	
	局部磨製石皿	1			2														3	
	石皿未製品	31			9														40	
	石匙				1														1	
	播磨 / 磨器 A 類	12			10														22	
	播磨 / 磨器 B 類	71	3		50														124	
	播磨 / 磨器 C 類	52	1		22														75	
	播磨 / 磨器 D 類				40		1												41	
	石鏝	8			20														28	
	彫器	23			3														26	
	楔形石器	37			9														46	
	つまみ形石器	3			1														4	
	筒状石器				10														10	
	異形石器	1																	1	
	二次加工剥片 A 類	79	1		47														127	
	二次加工剥片 B 類	485	8	1	15														509	
使用後剥片	1,254	18	2	191														1,466		
不明(A)	16			17	1													34		
計	2,118	37	5	458	1	1												1,262		
礫・岩片素材石器群	磨製石匙丁																		1	
	石匙丁礫石器					7	4	1				4							17	
	磨製石斧 A 類					4	4	25	1	7	5								46	
	磨製石斧 B 類							2		4									6	
	磨製石斧 C 類					20		1											21	
	磨製石斧未製品							2			1								3	
	蛇紋岩片										3								3	
	打製石斧 (不明)					5													5	
	打製石斧 A 類					35					1								37	
	打製石斧 B 類					66		1			1								68	
	打製石斧 C 類					7													7	
	打製石斧 D 類					17					1								18	
	打製石斧未製品					9													9	
	打斧剥片					90	1												92	
	ストーンリタッチャー						2	2											5	
	磨石 / 磨石 A 類					13	46												61	
	磨石 / 磨石 B 類					8	29					1							39	
	磨石 / 磨石 C 類					5	8					1							15	
	礫錐						1												1	
	石皿						29	30											59	
	台石						1	7											8	
	砥石							49											49	
	石鏝						2	1											3	
	円盤状石器							2				2							4	
	不明(B)						5	1	2										11	
	計						323	185	36	1	14	15	2						12	588

地区別・層位別の数量について

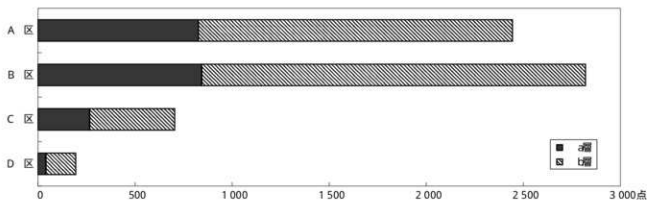
権現胎遺跡の調査はA～D区に分割して実施したが、C区はB区の西側に連続する地区で、D区はA区東端から北側に隣接する地区である。一方、A区とB区は標高差をもって東西に離れており、出土土器もA区が天城式～黒川式が主体であるのに対し、B区では突帯文土器が多いなど時期的な差異が認められる。そのため調査時の区画とは別に、A区とD区（Fグリッド以南）、B区とC区を一体化して、前者をA・D区、後者をB・C区と呼ぶことにする。

第58表はA区～D区のⅢ a・Ⅲ b層から出土した石器の数量を地区別・層位別にまとめたもので、第57表はA・D区、B・C区に統合して示したものである。第57～58表には実数値を示したが、各区の調査面積が異なるため、第59表では100㎡あたりの点数を示すことにした。対象面積は攪乱部分を差し引いた有効面積である。D区の総面積は870㎡だが、Ⅲ a層・Ⅲ b層の残存範囲が限定的だったため、Fグリッド以南の125㎡を有効面積として計算している。

第57～59表は、いずれも上段が大別器種、中段が剥片素材石器群（A群）の各器種、下段が礫・岩片素材石器群（B群）の数量で、第57～58表の各段最下行には調査区ごとの合計を母数としたⅢ a層・Ⅲ b層の比率を示している。全体の数値を見ると、A区Ⅲ a層33.8%、A区Ⅲ b層66.2%、B区Ⅲ a層29.9%、B区Ⅲ b層70.1%で、ほぼ1：2となっている（第127図）。この比率は剥片素材石器群、礫・岩片素材石器群でも同様である。C区とD区は、A区やB区に比べてⅢ a層・Ⅲ b層の比率差は小さいが、いずれもⅢ b層が多い。自然層としてのⅢ a・Ⅲ b両層間には、時間差を想定できるであろうが、両層に跨る接合資料も少なからず確認されており、必ずしもⅢ b層＝盛期、Ⅲ a層＝衰期という図式で単純に理解できるわけではない。むしろⅢ a層の遺物量がⅢ b層に比べて半減しているのはⅢ a層の上部が後世の攪乱により削平されていることや、ドットマップとして取り上げた遺物が少ないという、残存率・回収率に起因していると考えられる。

石器群総数を実数で比較すると、A区2,445点、B区2,821点で大差はない。比率は1：1.15である。しかし単位面積の比較では、A区81.78点/100㎡、B区193.48点/100㎡で、比率は1：2.37となり、遺物分布密度が大きく異なっている。A区とB区の時期差や、場の利用の在り方を考える上でも興味深い数値と言えよう。

以下、A・D区とB・C区に大別してⅢ（a・b）層の代表的な遺物を呈示し、個別解説を述べる。



第127図 Ⅲ a層とⅢ b層の遺物量比較グラフ

第57表 A・D区、B・C区石器組成表(実数)

	A・D区 面積: 3,116㎡				B・C区 面積: 2,629㎡				合計	
	Ⅱa	Ⅱb	計	割合計比	Ⅱa	Ⅱb	計	割合計比		
A 剥片素材石器群	392	754	1,146	43.72%	555	920	1,475	56.28%	2,621	
B 礫・岩片素材石器群	81	161	242	41.16%	113	233	346	58.84%	588	
C 原石		3	3	25%	4	5	9	75%	12	
D 石核	26	42	68	40.48%	37	63	100	59.52%	168	
E 剥片	257	505	762	45.79%	249	653	902	54.21%	1,664	
F 砕片	63	199	262	38.36%	33	388	421	61.64%	683	
G 水磨礫	9	14	23	60.53%	10	5	15	39.47%	38	
H 小礫	4	16	20	37.74%	15	18	33	62.26%	53	
I 岩片	33	80	113	33.43%	93	132	225	66.57%	338	
J 石製品	1		1	100%				0%	1	
計	866	1,774	2,640	42.82%	1,109	2,417	3,526	57.18%	6,166	
A・D区/B・C区の層別比率	32.8%	67.2%	100%		31.5%	68.5%	100%			
剥片素材石器群	石礫	8	14	22	34.38%	9	33	42	65.63%	64
	局部磨製石礫		3	3	100%				0%	3
	石礫未製品	5	13	18	45%	13	9	22	55%	40
	石砧				0%	1		1	100%	1
	掻器/刮器A類	2	8	10	45.45%	7	5	12	54.55%	22
	掻器/刮器B類	15	28	43	34.68%	31	50	81	65.32%	124
	掻器/刮器C類	9	17	26	34.67%	16	33	49	65.33%	75
	掻器/刮器D類	11	9	20	48.78%	10	11	21	52.22%	41
	石錘	3	11	14	50%	8	6	14	50%	28
	彫器	6	7	13	50%	5	8	13	50%	26
	楔形石器	10	16	26	56.52%	3	17	20	43.48%	46
	つまみ形石器		1	1	25%	1	2	3	75%	4
	蓋状石器	2	4	6	60%	1	3	4	40%	10
	箕形石器		1	1	100%				0%	1
	二次加工剥片A類	15	43	58	45.67%	30	39	69	54.33%	127
	二次加工剥片B類	67	144	211	41.45%	125	173	298	58.55%	509
	使用済剥片	230	427	657	44.82%	285	524	809	55.18%	1,466
	不明 ^{①)}	9	8	17	50%	10	7	17	50%	34
	計	392	754	1,146	43.72%	555	920	1,475	56.28%	2,621
	A・D区/B・C区の層別比率	34.2%	65.8%	100%		37.6%	62.4%	100%		
礫・岩片素材石器群	磨製石滄丁				0%	1	1	100%	1	
	石滄丁礫石器	5	3	8	47.06%	3	6	9	52.94%	17
	磨製石斧A類	7	9	16	34.78%	13	17	30	65.22%	46
	磨製石斧B類	1	4	5	83.33%		1	1	100%	6
	磨製石斧C類		7	7	33.33%	5	9	14	66.67%	21
	磨製石斧未製品	1	2	3	100%				0%	3
	蛇紋岩片		2	2	66.67%		1	1	33.33%	3
	打製石斧(不明)	1	1	2	40%	2	1	3	60%	5
	打製石斧A類	7	12	19	51.35%	6	12	18	48.65%	37
	打製石斧B類	8	26	34	50%	6	28	34	50%	68
	打製石斧C類	2	2	4	57.14%	1	2	3	42.86%	7
	打製石斧D類	1	5	6	33.33%	4	8	12	66.67%	18
	打製石斧未製品		5	5	55.56%	1	3	4	44.44%	9
	打製剥片	14	25	39	42.39%	25	28	53	57.61%	92
	ストーンリクチャー	1	2	3	60%		2	2	40%	5
	磨石/砥石A類	10	14	24	39.34%	13	24	37	60.66%	61
	磨石/砥石B類	2	20	22	56.41%	5	12	17	43.59%	39
	磨石/砥石C類	2	5	7	46.67%		8	8	53.33%	15
	礫錘				0%		1	1	100%	1
	石皿	8	6	14	23.73%	15	30	45	76.27%	59
	台石	1	1	2	25%	2	4	6	75%	8
	砥石	7	7	14	28.57%	8	27	35	71.43%	49
	石錘				0%	2	1	3	100%	3
	円盤状石器	2		2	50%	1	1	2	50%	4
	不明 ^{②)}	1	3	4	36.36%	1	6	7	63.64%	11
	計	81	161	242	41.16%	113	233	346	58.84%	588
A・D区/B・C区の層別比率	33.5%	66.5%	100%		32.7%	67.3%	100%			

第58表 地区別・層別石器組成表(実数)

	A区 面積: 2,991㎡			B区 面積: 1,458㎡			C区 面積: 1,171㎡			D区 面積: 125㎡			合計
	Ⅰa	Ⅰb	計	Ⅰa	Ⅰb	計	Ⅰa	Ⅰb	計	Ⅰa	Ⅰb	計	
A 剥片素材石群	368	703	1,071	441	751	1,192	114	169	283	24	51	75	2,621
B 塊・岩片素材石群	77	155	232	69	178	247	44	55	99	4	6	10	588
C 原石		2	2	4	2	6			3			1	12
D 石核	24	33	57	27	51	78	10	12	22	2	9	11	168
E 剥片	252	461	713	188	538	726	61	115	176	5	44	49	1,664
F 砕片	58	159	217	15	324	339	18	64	82	5	40	45	683
G 水磨礫	9	14	23	8	4	12	2	1	3				38
H 小礫	4	15	19	13	18	31	2		2		1	1	53
I 岩片	33	77	110	78	112	190	15	20	35		3	3	338
J 石製品	1		1										1
総計	826	1,619	2,445	843	1,978	2,821	266	439	705	40	155	195	6,166
各区の層別比率	33.8%	66.2%	100%	29.9%	70.1%	100%	37.7%	62.3%	100%	20.5%	79.5%	100%	

剥片素材石群	A区			B区			C区			D区			合計
	Ⅰa	Ⅰb	計	Ⅰa	Ⅰb	計	Ⅰa	Ⅰb	計	Ⅰa	Ⅰb	計	
石礫	8	13	21	7	22	29	2	11	13		1	1	64
局部磨製石礫		3	3										3
石礫未製品	5	13	18	11	7	18	2	2	4				40
石砧			1			1							1
掻器 / 刮器 A類	2	7	9	6	5	11	1		1		1	1	22
掻器 / 刮器 B類	15	23	38	26	37	63	5	13	18		5	5	124
掻器 / 刮器 C類	9	16	25	14	28	42	2	5	7		1	1	75
掻器 / 刮器 D類	11	9	20	10	10	20			1	1			41
石錐	3	11	14	8	5	13			1	1			28
彫器	5	7	12	3	7	10	2	1	3	1		1	26
楔形石器	10	16	26	3	14	17			3	3			46
つまみ形石器		1	1	1	2	3							4
蓋状石器	2	4	6	1	2	3			1	1			10
箕形石器		1	1										1
二次加工剥片 A類	12	38	50	27	33	60	3	6	9	3	5	8	127
二次加工剥片 B類	64	134	198	103	149	252	22	24	46	3	10	13	509
使用済剥片	213	399	612	212	424	636	73	100	173	17	28	45	1,666
不明 ^①	9	8	17	8	6	14	2	1	3				34
計	368	703	1,071	441	751	1,192	114	169	283	24	51	75	2,621
各区の層別比率	34.4%	65.6%	100%	37.0%	63.0%	100%	40.3%	59.7%	100%	32.0%	68.0%	100%	

塊・岩片素材石群	A区			B区			C区			D区			合計
	Ⅰa	Ⅰb	計	Ⅰa	Ⅰb	計	Ⅰa	Ⅰb	計	Ⅰa	Ⅰb	計	
磨製石器 ^②													1
石造り棒石器	5	3	8	3	4	7		2	2				17
磨製石斧 A類	7	9	16	11	14	25	2	3	5				46
磨製石斧 B類	1	4	5		1	1							6
磨製石斧 C類	7	7	14	3	6	9	2	3	5				21
磨製石斧未製品	1	2	3										3
鉋紋岩片		2	2		1	1							3
打製石斧(不明)	1	1	2	2	1	3							5
打製石斧 A類	7	12	19	5	9	14	1	3	4				37
打製石斧 B類	7	26	33	5	23	28	1	5	6	1		1	68
打製石斧 C類	2	2	4	1	2	3							7
打製石斧 D類	1	4	5	4	4	8	4	4	8		1	1	18
打製石斧未製品		5	5		2	2		1	1				9
打片剥片	14	23	37	10	21	31	15	7	22		2	2	92
ストーンリッター	1	2	3		2	2							5
磨石 / 砥石 A類	9	14	23	9	19	28	4	5	9	1		1	61
磨石 / 砥石 B類	2	19	21	3	7	10	2	5	7		1	1	39
磨石 / 砥石 C類	2	5	7		6	6		2	2				15
礫									1	1			1
石皿	6	6	12	7	21	28	8	9	17	2		2	59
台石	1		1	1	3	4	1	1	2		1	1	8
砥石	7	6	13	8	25	33		2	2		1	1	49
石錘								2	1	3			3
円盤状石器	2		2		1	1		1	1				4
不明 ^①	1	3	4	1	5	6		1	1				11
計	77	155	232	69	178	247	44	55	99	4	6	10	588
各区の層別比率	33.2%	66.8%	100%	27.9%	72.1%	100%	44.4%	55.6%	100%	40.0%	60.0%	100%	

第59表 地区別・層位別石器組成表(点数/100ml)

	A区 面積: 2.991㎡			B区 面積: 1.458㎡			C区 面積: 1.171㎡			D区 面積: 125㎡			平均
	Ⅰa	Ⅰb	計	Ⅰa	Ⅰb	計	Ⅰa	Ⅰb	計	Ⅰa	Ⅰb	計	
A 剥片素材石器群	12.30	23.50	35.81	30.25	51.51	81.76	9.74	14.43	24.17	19.20	40.80	60.00	45.62
B 塊・岩片素材石器群	2.57	5.18	7.76	4.73	12.21	16.94	3.76	4.70	8.45	3.20	4.80	8.00	10.23
C 原石		0.07	0.07	0.27	0.14	0.41		0.26	0.26		0.80	0.80	0.21
D 石核	0.80	1.10	1.91	1.85	3.50	5.35	0.85	1.02	1.88	1.60	7.20	8.80	2.92
E 剥片	8.43	15.41	23.84	12.89	36.90	49.79	5.21	9.82	15.03	4.00	35.20	39.20	28.96
F 砕片	1.94	5.32	7.26	1.03	22.22	23.25	1.54	5.47	7.00	4.00	32.00	36.00	11.89
G 水磨礫	0.30	0.47	0.77	0.55	0.27	0.82	0.17	0.09	0.26				0.66
H 小礫	0.13	0.50	0.64	0.89	1.23	2.13	0.17		0.17		0.80	0.80	0.92
I 岩片	1.10	2.57	3.68	5.35	7.68	13.03	1.28	1.71	2.99		2.40	2.40	5.88
J 石製品	0.03		0.03										0.02
計	27.62	54.13	81.75	57.82	135.67	193.48	22.72	37.49	60.20	32.00	124.00	156.00	107.33
石器	0.27	0.43	0.70	0.48	1.51	1.99	0.17	0.94	1.11		0.80	0.80	1.11
局部磨製石器		0.10	0.10										0.05
石器未製品	0.17	0.43	0.60	0.75	0.48	1.23	0.17	0.17	0.34				0.70
石芯			0.07			0.07							0.02
掻器 / 刮器 A類	0.07	0.23	0.30	0.41	0.34	0.75	0.09		0.09		0.80	0.80	0.38
掻器 / 刮器 B類	0.50	0.77	1.27	1.78	2.54	4.32	0.43	1.11	1.54		4.00	4.00	2.16
掻器 / 刮器 C類	0.30	0.53	0.84	0.96	1.92	2.88	0.17	0.43	0.60		0.80	0.80	1.31
掻器 / 刮器 D類	0.37	0.30	0.67	0.69	0.69	1.37		0.09	0.09				0.71
石錘	0.10	0.37	0.47	0.55	0.34	0.89		0.09	0.09				0.49
彫器	0.17	0.23	0.40	0.21	0.48	0.69	0.17	0.09	0.26	0.80		0.80	0.45
楔形石器	0.33	0.53	0.87	0.21	0.96	1.17		0.26	0.26				0.80
つまみ形石器		0.03	0.03	0.07	0.14	0.21							0.07
鐮状石器	0.07	0.13	0.20	0.07	0.14	0.21		0.09	0.09				0.17
箕形石器		0.03	0.03										0.02
二次加工剥片 A類	0.40	1.27	1.67	1.85	2.26	4.12	0.26	0.51	0.77	2.40	4.00	6.40	2.21
二次加工剥片 B類	2.14	4.48	6.62	7.06	10.22	17.28	1.88	2.05	3.93	2.40	8.00	10.40	8.86
使用済剥片	7.12	13.34	20.46	14.54	29.08	43.62	6.23	8.54	14.77	13.60	22.40	36.00	25.52
不明 ¹⁾	0.30	0.27	0.57	0.55	0.41	0.96	0.17	0.09	0.26				0.59
計	12.30	23.50	35.81	30.25	51.51	81.76	9.74	14.43	24.17	19.20	40.80	60.00	45.62
磨製石器													
磨製石匙丁					0.07	0.07							0.02
石匙丁棒石器	0.17	0.10	0.27	0.21	0.27	0.48		0.17	0.17				0.30
磨製石斧 A類	0.23	0.30	0.53	0.75	0.96	1.71	0.17	0.26	0.43				0.80
磨製石斧 B類	0.03	0.13	0.17		0.07	0.07							0.10
磨製石斧 C類		0.23	0.23	0.21	0.41	0.62	0.17	0.26	0.43				0.37
磨製石斧未製品	0.03	0.07	0.10										0.05
蛇紋岩片		0.07	0.07		0.07	0.07							0.05
打製石斧(不明)	0.03	0.03	0.07	0.14	0.07	0.21							0.09
打製石斧 A類	0.23	0.40	0.64	0.34	0.62	0.96	0.09	0.26	0.34				0.64
打製石斧 B類	0.23	0.87	1.10	0.34	1.58	1.92	0.09	0.43	0.51	0.80		0.80	1.18
打製石斧 C類	0.07	0.07	0.13	0.07	0.14	0.21							0.12
打製石斧 D類	0.03	0.13	0.17		0.27	0.27	0.34	0.34	0.68		0.80	0.80	0.31
打製石斧未製品	0.17	0.17		0.14	0.14	0.29	0.09	0.09	0.17				0.16
打製剥片	0.47	0.77	1.24	0.69	1.44	2.13	1.28	0.60	1.88		1.60	1.60	1.60
ストーンリッター	0.03	0.07	0.10		0.14	0.14							0.09
磨石 / 敲石 A類	0.30	0.47	0.77	0.62	1.30	1.92	0.34	0.43	0.77	0.80		0.80	1.06
磨石 / 敲石 B類	0.07	0.64	0.70	0.21	0.48	0.69	0.17	0.43	0.60		0.80	0.80	0.68
磨石 / 敲石 C類	0.07	0.17	0.23		0.41	0.41		0.17	0.17				0.26
礫錘								0.09	0.09				0.02
石皿	0.20	0.20	0.40	0.48	1.44	1.92	0.68	0.77	1.45	1.60		1.60	1.03
台石	0.03		0.03	0.07	0.21	0.27	0.09	0.09	0.17		0.80	0.80	0.14
砥石	0.23	0.20	0.43	0.55	1.71	2.26		0.17	0.17		0.80	0.80	0.85
石錘							0.17	0.09	0.26				0.05
円盤状石器	0.07		0.07		0.07	0.07		0.09	0.09				0.07
不明 ¹⁾	0.03	0.10	0.13	0.07	0.34	0.41		0.09	0.09				0.19
計	2.57	5.18	7.76	4.73	12.21	16.94	3.76	4.70	8.45	3.20	4.80	8.00	10.23

A・D区Ⅲ層出土の石器群

石鏃未製品（第128図1～4）

1は櫛状の剥離痕などの二次加工により表面は覆われるが、裏面は素材面を大きく残し周囲に微細な二次加工を施す。2は上半に両面加工を施すが、下半は素材面を残す。3は下面の折断面に微細剥離痕が認められる。4は両面加工により概形を整えるが、先端部や基部は未作出である。石材は2の無斑晶質玄武岩（以下、玄武岩と略す）を除いて黒曜石Aを用いる。

石鏃（第128図5～14）

5は両面に素材面を大きく残しており、先端部や基部付近は微細な二次加工により整形している。6・7は両面加工により正三角形に整形する。8・9は全面に両面加工を施すが、裏面のほぼ中央には素材面が残る。8の先端部は鈍く全体に丸みを帯びる。9の左側縁は急角度加工が施される。10は両面加工により素材面は残らない。11～13は表面の中央部を研磨した局部磨製石鏃である。11の先頭部は欠損ではなく二次加工により丸く整形する。14は被熱痕が顕著に認められ、両面ともに剥離痕が観察できない。いずれも基部の整形は不明瞭である。石材は5・7・12・13の玄武岩を除いて黒曜石Aを用いる。

石錐（第128図15～20）

15～18は錐部と頭部の境が明確である。15は小型の剥片を素材に用い、左側縁からの二次加工により錐部を作出する。16は下面中央に二次加工を施し小突起状の錐部を作出する。17・18は素材の末端に二次加工を施し断面変形の錐部を作出する。18は錐部の先端を欠損する。19・20は錐部と頭部が一体化する。19は素材を角錐状に整形し、周縁は二次加工を施す。錐部の摩耗が顕著である。20は全面に丁寧な二次加工を施す。錐部は欠損する。石材は16・19の黒曜石Aを除いて玄武岩を用いる。

彫器（第128図21・22・26・27）

21は右側面に櫛状剥離を施し彫刀面を作出する。素材の背面は石核の作業面が見られる。22は素材の腹面末端に2条の櫛状剥離を施し彫刀面を作出する。素材の背面には稜上調整が認められる。26は左側面に2条の櫛状剥離を施す。27は素材を折断により三角形に整形し、右側縁に櫛状剥離を施す。彫刀面周辺には微細剥離痕が認められる。石材は27の玄武岩を除いて黒曜石Aを用いる。

楔形石器（第128図23～25）

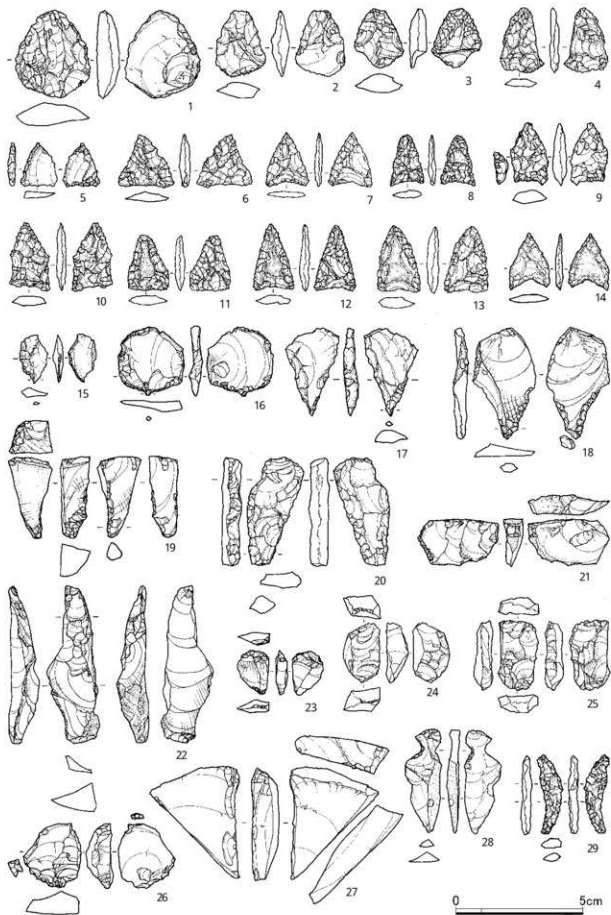
23～25は両面凹面で構成され、互いに向き合う方向の剥離痕が認められる。下端は潰れが生じており両極打法の痕跡が認められる。24の右側面はハジケが生じており、縦断面形は凸レンズ状を呈する。石材は24の玄武岩を除いて黒曜石Aを用いる。

つまみ形石器（第128図28）

28は縦長剥片を素材に用いる。つまみは両側縁上部に対になる挟入を施し作出する。素材末端にはわずかに微細剥離痕が認められる。石材は黒曜石Aを用いる。

異形石器（第128図29）

29は左側縁を内湾状に、右側縁を外湾状に急角度加工を施し弓形状に整形する。体部上端には対になる弱い挟入を施す。両側縁には潰れたような摩耗痕が顕著で、両面には研磨痕が認められる。石材は黒曜石Aを用いる。



第128図 縄文時代後期—弥生時代前期の石器① (S = 2 / 3)

擡 / 削器類 (第129図30~39, 第130図40~44, 第131図45・46)

擡 / 削器類は多様な形態を見せることからA類(33), B類(36・37・39), C類(30・32・35・38), D類(31・34・40~46)に分類した。

A類は黒曜石製の小型剥片を主な素材として用いる。33は寸詰まりで肉厚の剥片を素材に用い、末端に急角度加工による分厚い刃部を作出する。

B類は基本的に37のように黒曜石製の小型剥片を素材として用いるが、36・39のように玄武岩製の大型剥片を素材とするものも認められる。36は肉厚の素材を用い、ほぼ全周に両面加工により刃部を作出する。刃縁の摩耗痕が顕著である。37は背面に自然面を残す縦長剥片の右側縁に二次加工を施し刃部を作出する。素材の背面には打面を90° 転移した剥離痕が認められる。39は左側縁に両面加工による刃部を作出し、下縁はやや急角度の加工により刃部を作出する。

C類は黒曜石製の小型剥片を主な素材として用いる。30は両側縁に連続した二次加工を施し、左側縁下半はノッチ状の刃部を作出する。32は小型の剥片を素材に用い、下面には鋸歯縁状の刃部を作出する。被熱により光沢が鈍化する。35は右側縁と下面に急角度加工を施し、鋸歯縁状の刃部を作出する。38は微細な二次加工により縦長剥片の左側縁にノッチ状の刃部を作出する。

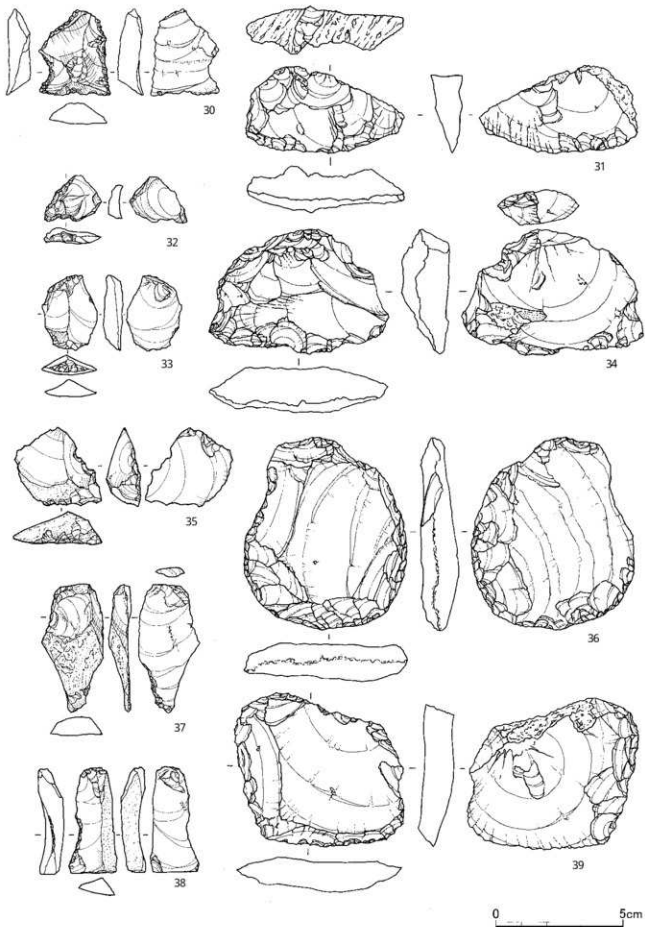
D類は玄武岩製の大型剥片を素材として用い、擡 / 削器A~C類で主に利用された黒曜石製の小型剥片は用いられない。形態的には下面に刃部、上面に平坦面を設けており大型削器としての機能を有する。

31・34は下面に両面加工による刃部を作出し、上面は一部に二次加工を施し平坦面を作出する。40は上面を折断し、両側面の急角度加工により長方形に整形する。下面は粗い二次加工により刃部を作出する。41は上面を2回折断し平坦面を作出する。下面は素材背面の自然面に数回の細かい剥離を施し鋸歯縁状の刃部を作出する。42は左側面を折断し、右側面は自然面の平坦面を残す。下面には直線的な刃部を作出する。43は縦長剥片を素材に用いる。下面は急角度加工により刃部を作出し、上面は平坦な自然面を残す。腹面側には上面を打面とする二次加工が施される。44は肉厚の縦長剥片を素材に用い、上下面に急角度加工を施している。

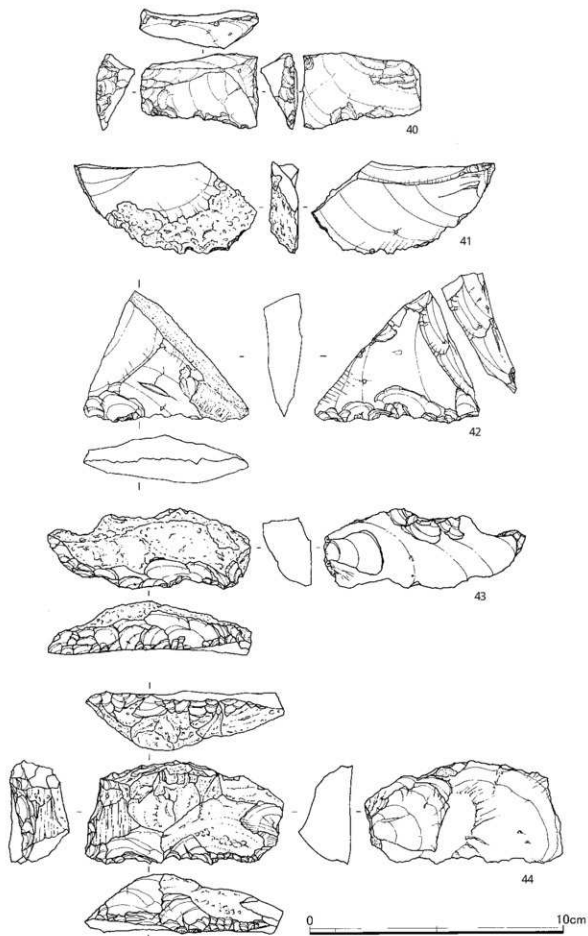
45は大型剥片を素材に用いる。両面ともに二次加工は周縁に限られ自然面、素材面を大きく残す。下面には両面加工による直線的な刃部を作出するが、裏面の加工に連続性は認められない。左側面から上面は比較的粗く大きめの剥離が両面に認められ、上面はやや平坦に整形する。裏面の左側縁周辺には二次加工を切るポリッシュが顕著に認められる。

46は大型剥片を素材に用いる。二等辺三角形と長方形を合わせた形状を呈しており、二等辺三角形の部分は肉厚で断面形状は三角形であるが、長方形の部分は比較的平坦な板状の断面形状を呈する。加工は主に二等辺三角形の部分に集中する。下面は背面側に二次加工を施して、直線的な刃部を作出する。上面は腹面側に平坦剥離による調整を施したあと、この面を打面とする急角度加工により平坦面を作出する。腹面側の刃縁付近にはポリッシュが顕著に認められる。

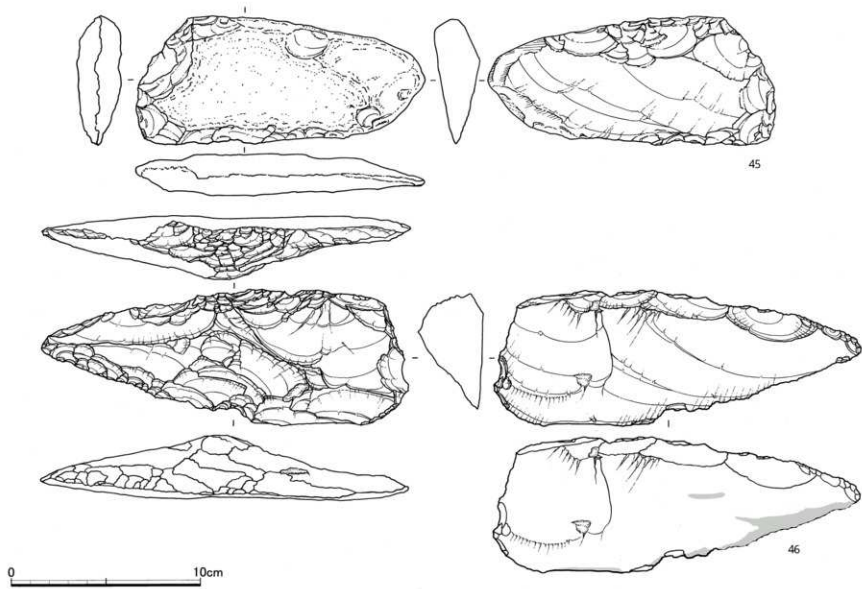
45で石材として用いられた安山岩は本遺跡出土の剥片素材石器群にはほとんど利用されないが、サイズや調整などから46との類似性が認められる。30・32・33・35・37・38は黒曜石A, 31・34・36・39~44・46は玄武岩, 45は安山岩を石材に用いる。



第129図 縄文時代後期—弥生時代前期の石器② (S = 2 / 3)



第130図 縄文時代後期—弥生時代前期の石器③ (S = 2 / 3)



第131図 縄文時代後期一弥生時代前期の石器④ (S = 1 / 2)

石庖丁様石器

(第132図47~50)

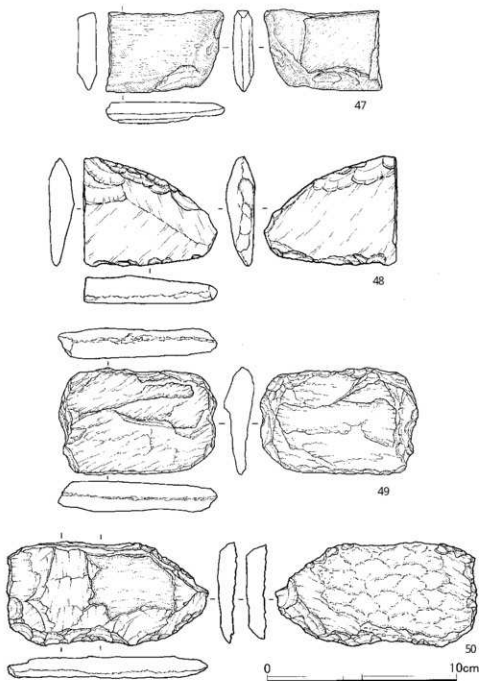
利用される石材や素材は打製石斧や素材は打製石斧と同じであるが、刃付けの方法やサイズに明確な違いが認められ、岩片素材の大型削器としての機能が認められる。

47は板状岩片を素材に用いる。上面と左側面を90度に折断し、概形は長方形を呈する。右側縁と下面に両面加工を施したあと両面に研磨を施し刃部を作出する。

48は板状岩片を素材に用いる。上下面に両面加工を施し、下面には直接的な刃部を作出する。研磨痕は認められない。

49は板状岩片を素材に用いる。上面は急角度加工により平坦面を作出し、下面は二次加工により直線的な刃部を作出する。両側縁中央には対になる小塊入が認められる。研磨痕は認められない。

50は板状岩片を素材に用い、上面を除く周縁に二次加工を施し五角形に整形する。下面には両面加工による直線的な刃部を作出する。上面は加工されず素材の平坦面をそのまま残している。研磨痕は認められない。47は砂岩、48は安山岩、49は結晶片岩、50は頁岩を石材に用いる。



第132図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑤ (S = 1/2)

原石（第133図51・52）

51は剥離痕をとどめない鶏卵大の原礫である。52は1枚の剥離痕が認められる初期石核である。いずれも黒曜石Aの亜角礫である。

石核（第133図53～58、第134図59～62）

黒曜石製の石核は打面の数、作業面の剥離方向などから5つに分類した。玄武岩製の石核は細分できるものについては黒曜石製の石核の細分に含めるが、多くは細分に至らなかった。

I類：打面を1ヶ所に設定し、同一方向の打撃により連続剥離を施すもので、作業面は1面のものから打面の周囲に設定されるものまで認められる。作業面1面のものはおおむね扁平形を呈するが2面以上のものは角柱、角錐、サイコロ状を呈する。

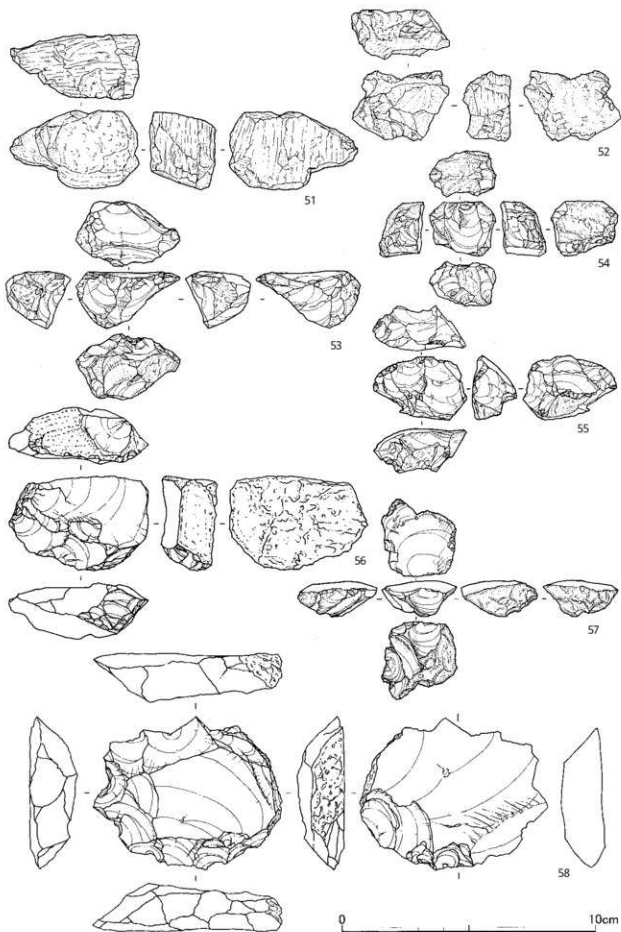
II類：両設打面で180°の方向で作業面の剥離痕が切り合うものである。作業面は1面で、打面形態は自然面打面、調整打面が認められる。上下両端の打面は作業面に対し急角度で後方に傾斜する形態を呈する。このため縦断面は凸レンズ状を呈する。最終剥離痕は作業面の剥離方向に対し直交する。原礫の長軸を縦位に用いる鈴桶型石核に類似する石核と原礫の長軸を横位に用いる石核が認められる。

III類：ランダムな打面転移を繰り返し、多方向からの作業面で覆われるものである。同一作業面の中で90°の剥離痕の切り合いが認められるものも含む。打面形態は自然面打面、調整打面、剥離面打面となる。サイズは小型で、形態は角錐、サイコロ状を呈する。

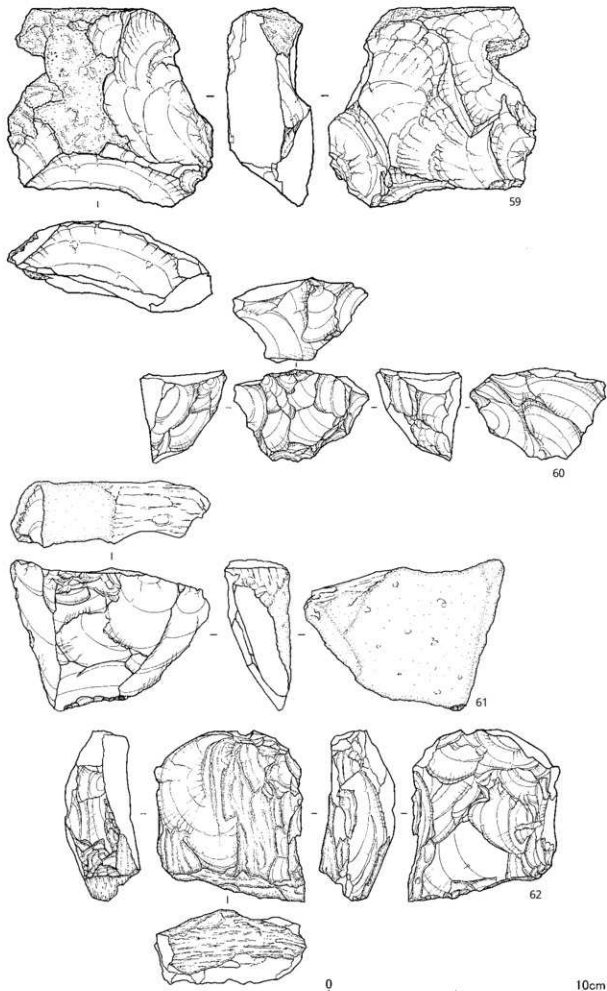
IV類：I～III・V類に分類できないものをIV類とした。この中で作業面は1面で作業面の周囲に打面を転移しながら求心状に剥片剥離を行う石核が認められた。サイズは小型で、形態は主に扁平な形状を呈する。

V類：剥片素材の石核である。肉厚の剥片の主要剥離面を打面とし周囲に作業面を設定する。

53は上面に打面を設定し、打面転移は行わず作業面を打面の周囲に2面有する。各作業面は上面の調整打面から同一方向の剥離が施される。裏面は縦長剥片の剥離痕が認められる。典型的なI類である。54・55は典型的なII類で素材には亜角礫を用いる。54は作業面を3面設定する。いずれの作業面も自然面打面でランダムな打面転移が認められる。作業面の剥離痕は寸詰まりの不定形を呈する。55はランダムで規則性の認められない打面転移を行い作業面を設定する。打面には自然面、剥離面を用いており、作業面の剥離痕は寸詰まりの不定形を呈する。56は角礫を素材に用い、作業面を1面設定する。同一作業面で90°の打面転移が認められ、剥離痕が切り合う。作業面の末端に二次加工を施しており、最終的に掻/削器類に転用したものと思われる。57は剥片素材の石核である。主要剥離面を打面に用い周囲に作業面をもつ。典型的なV類である。58・59・62は玄武岩製の剥片素材の板状石核である。58は亀の甲状の縁辺部に作業面を有する。59は表裏面に不定形剥片を剥離した作業面が認められる。62は主要剥離面に不定形剥片を剥離した作業面が認められる。60は角錐状の石核である。上面に打面調整を行い、周囲に小型の不定形剥片を剥離した作業面をもつ。61は玄武岩の亜角礫を素材に用いる。作業面は1面で上面の自然面打面から同一方向の剥離により不定形の剥片を剥離する。形態は裏面に自然面が残存するため扁平形を呈する。下端には細かい平坦剥離が施されることから、掻/削器類に転用したものと思われる。53～55・57は黒曜石A、56・58～62は玄武岩を石材に用いる。



第133図 縄文時代後期—弥生時代前期の石器⑥ (S = 2 / 3)



第134図 縄文時代後期—弥生時代前期の石器⑦ (S = 2 / 3)

剥片（第135図63・64・66・67・69）

63は背面に180°に切り合う剥離痕を有する縦長剥片である。上面は調整打面の痕跡が見られる。64は縦長剥片である。素材の打面と末端に自然面が認められることから、原石のサイズにより制約を受け寸詰まりになったものと思われる。66・69は縦長剥片である。66の打面は調整打面で、素材末端は折断面が認められる。67は素材の背面に石核の作業面を有し、下面は背面の作業面を打面とした剥離痕が認められる。石材はすべて黒曜石Aを用いる。

使用痕剥片（第135図65・68・70）

65は素材末端にウーラバッセが生じている縦長剥片である。左側縁中程に微細剥離痕が認められる。68は剥片の周縁に微細剥離痕が認められる。素材に特徴があり、素材背面は連続して小型剥片を剥離した石核の作業面である。素材の剥離方向と作業面の剥離方向では違いが認められることから作業面を破壊する段階で90°の打面転移を行った痕跡を示す剥片と考えられる。石核Ⅲ類との関連性が認められる。70は小型の剥片を素材に用い、両側縁には微細剥離痕が認められる。石材はすべて黒曜石Aを用いている。

二次加工剥片A類（第135図71・72）

71は肉厚の剥片の左側面に二次加工を施し三角形に整形している。下端の側縁に粗い二次加工を施している。72は周縁に粗い二次加工が認められる。71は玄武岩、72は黒曜石Aを石材に用いる。

二次加工剥片B類（第135図73～84）

73は素材の左側面から末端にかけて自然面が認められる。急角度加工は素材の末端に連続して施される。74は縦長剥片の末端側が幅広肉厚の形態を呈する。背面側の剥離痕が180°に切り合っている。右側面と下面に連続した急角度加工を施し、左側縁には微細剥離痕が認められる。75は素材のバルブ側を折断し方形に整形している。右側縁には微細剥離痕が認められ、折断面、左側縁上部、右側縁末端には急角度加工が非連続的に施される。76は素材の末端に主要剥離面を打面とした急角度加工を連続的に施す。77は素材の末端に主要剥離面側から急角度加工を施す。打面にはパンチ痕が残されており、ハンマー利用による剥片剥離が認められる。78・79は縦長剥片のバルブ側を折断し方形に整形している。78の左側縁には主要剥離面側から急角度加工を施し、素材末端には平坦剥離による二次加工が施される。色調がやや鈍化しており被熱の可能性がある。79の折断面にはやや内湾気味に急角度加工を施し、上面はノッチ状を呈する。素材末端にも非連続的な急角度加工を施す。80は素材のバルブ側を折断し右側縁に主要剥離面側から連続した急角度加工を施す。81は縦長剥片の左側面以外を折断し方形に整形する。急角度加工を施しており、下面は連続性が認められるが、上面は非連続的である。82は素材のバルブ側を折断し末端側を素材として用いる。素材末端に急角度加工を施し、左側縁には微細剥離痕が認められる。83は素材のバルブ側を折断し方形に整形する。急角度加工は上下面に施される。右側面には上面を打点とする櫛状の剥離痕が認められる。84は小型剥片のバルブ側を剥離し方形に整形する。急角度加工は両側面に連続して施す。石材は76の黒曜石Bを除いて黒曜石Aを用いる。



第135図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑧ (S = 2 / 3)

筒状石器（第136図85・86）

85は大型肉厚の剥片を素材に用い、両面とも二次加工により覆われる。基部は棒状で分厚く下半からやや幅広になり下縁に丸みを帯びる刃部を作出している。断面形状も刃部は基部と比べて幅広で平坦である。86は大型の剥片を素材に用いる。表面は二次加工により覆われるが、裏面の加工は周縁に限られ素材面が残る。石材は玄武岩を用いる。

打製石斧A類（第137図91～93）

91は大型横長剥片を素材に用いる。両側縁の二次加工により側縁はやや丸みを帯び、刃部及び基部が先細り状を呈する。基部端は破断面となっており、刃縁は摩耗が著しく丸みを帯びる。92は扁平で大型の棒状剥片を素材に用いる。両側縁に二次加工を施すが、端部は摩耗が著しく刃部・基部ともにほぼ二次加工の痕跡が認められない。93は大型で棒状の剥片を素材に用いる。周縁に二次加工を施し、側縁は丸みを帯び、刃部と基部は先細り状を呈する。刃部の摩耗は顕著である。いずれも安山岩を石材に用いる。

打製石斧B類（第136図87～90，第137図94）

87～89は板状岩片を素材に用いる。下面に両面からの主軸に平行する二次加工により刃部を作出し、側縁は主軸に直交する二次加工により側縁を平行に整形する。このため扁平短冊形を呈する。刃部の摩耗が著しく丸みを帯びる。90は大型剥片を素材に用い、側縁は主軸に直交する二次加工により両側縁を平行に整形する。下面は主軸に平行する二次加工を施し刃部を作出したものとと思われるが、剥離痕が観察できないほど著しく摩耗する。94は非常に肉厚で重量のある安山岩の岩片を素材に用いる。表裏面ともに自然面を大きく残し、加工は周縁に限られる。刃部は主軸と平行する急角度加工を施すため分厚く鈍い。両側縁は主軸に直交する二次加工により平行に整形する。石材は88の結晶片岩を除いて安山岩を用いる。

打製石斧D類（第139図108）

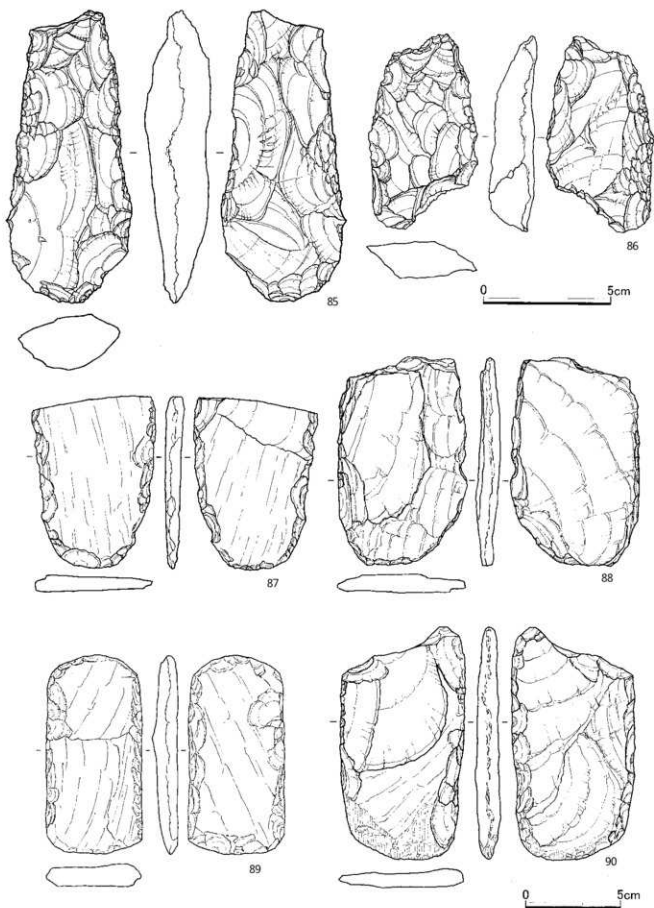
108は結晶片岩の板状岩片を素材に用いる。整形や刃付けの加工は打製石斧B類と同じだが、部分的に研磨を施している。刃部は研磨により作出されない。

磨製石斧未製品（第138図95）

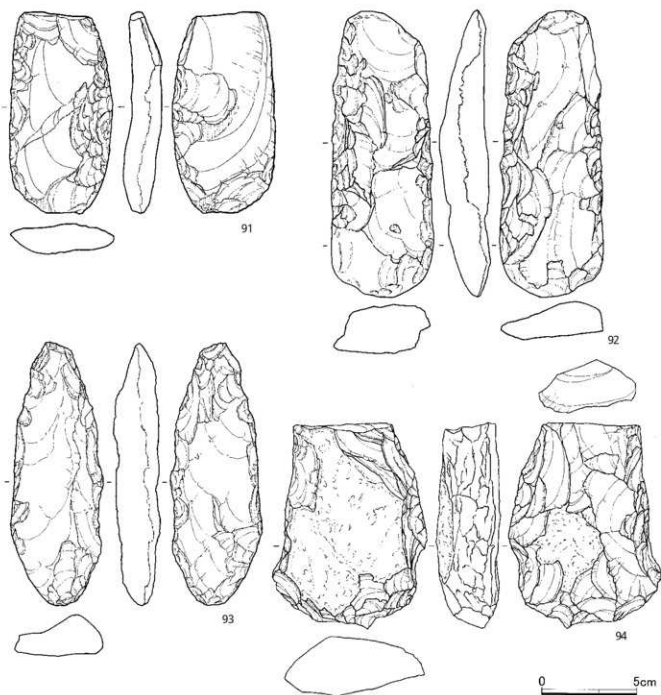
95は棒状の礫を素材に用いる。表面は周囲に剥離による加工を施すが、自然面を大きく残している。研磨は極めて限定的で表面中央に認められる。石材は頁岩を用いる。

磨製石斧A類（第138図96～99，第139図102・105）

96～98は両刃形でやや弧状の刃部形態を呈する。いずれも丁寧な研磨が施される。96の基部端は折断面となっている。98はほぼ全面を丁寧に研磨したあとに敲打整形を行う。基部は主軸と平行に剥離が施される。また、刃部には線条痕、潰痕といった刃縁と直交する使用痕が認められる。99は非常に肉厚で重量感のある素材を用い、全面に丁寧な研磨を施している。刃部と基部は破損したあとに再加工を施したと思われる。102は刃部を弧状の左右対象形とするため刃縁に二次加工を施している。基部は新たに作出されない。一度欠損した磨製石斧を再利用しているものと思われる。105は基部より刃部がやや幅広の形態を呈する。全面に丁寧な研磨を施し、下面には両刃形の刃部を作出する。96・97・105は頁岩、98は石灰岩、99は砂岩、102は蛇紋岩を石材に用いる。



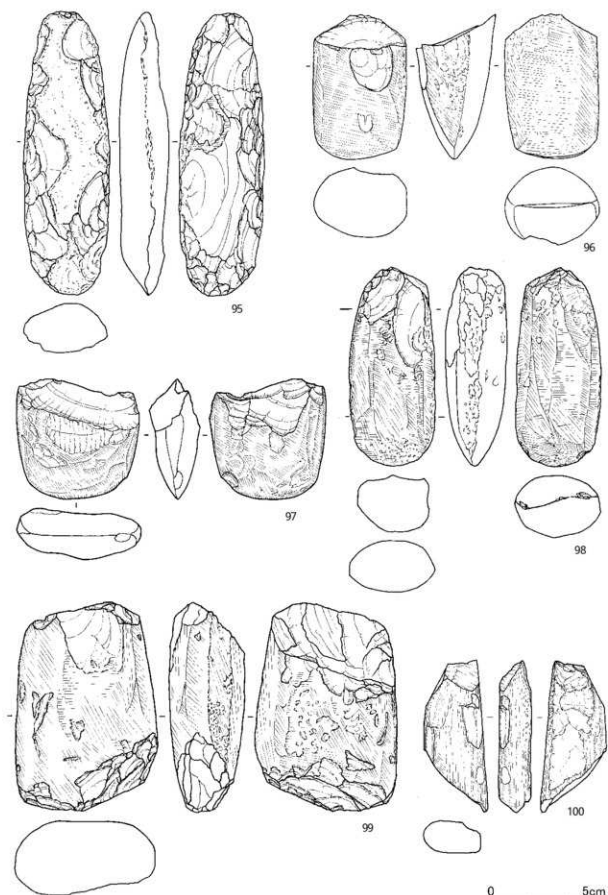
第136図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑨ (85・86 S = 2/3, 87～90 S = 1/2)



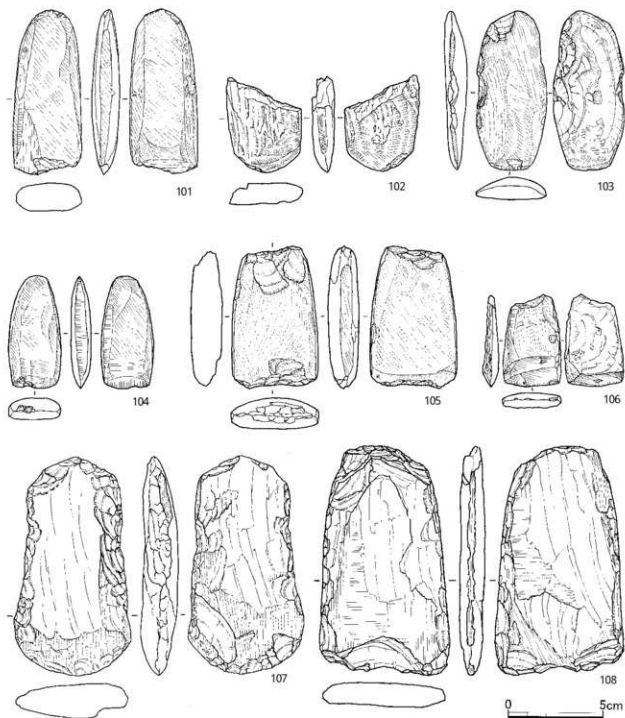
第137図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑩ (S = 1 / 2)

磨製石斧B類 (第138図100, 第139図101・103・104・106)

100は石材に頁岩を用いる。棒状を呈し刃部及び基部は欠損する。体部と側面に連続した敲打整形を施し、全面に丁寧な研磨を施す。被熱によるクラックやハジゲが認められる。101は風化により石綿状を呈する蛇紋岩を石材に用いる。刃部は片刃に偏った石ノミ状を呈し、弧状に作出する。刃縁は剥離痕、基部には溝痕が認められる。103は頁岩製の剥片を素材に用いる。刃部は主要剥離面側の研磨により片刃に偏った石ノミ状を呈する。側縁や基部は剥離による調整はほとんど施されず丁寧な研磨により整形する。



第138図 縄文時代後期—弥生時代前期の石器① (S = 1 / 2)



第139図 縄文時代後期—弥生時代前期の石器⑫ (S = 1/2)

104・106は石材に蛇紋岩を用いる。104は扁平で刃部が基部よりやや幅広の形態を呈する。刃部は直線的なやや片刃に偏った石ノミ状を呈する。全面に丁寧な研磨を施す。106は丁寧な研磨により刃部は直線的な片刃形を呈する。裏面は破断面が見られ大型の磨製石斧の刃部片を再利用して加工したものと思われる。

磨製石斧C類 (第139図107)

107は石材に安山岩を用いる。両側面は両面加工によりほぼ平行に整形し、扁平短冊形を呈する。限定的に研磨を施しており、刃部は両面加工を施したあとの研磨により作出される。

磨石 / 敲石 A 類 (第140図109・110・120)

109・110は拳大の円礫, 120は親指大ほどの水磨礫を素材に用いる。全面に滑面を有しており, 潰痕などのダメージは認められない。109は砂岩, 110は安山岩を石材に用い, 120は石材不明である。

磨石 / 敲石 B 類 (第140図111~119)

111・114・117は全面が滑面で覆われ, 主軸上には潰痕, 擦痕を有する。112・113・115・116・118は全面が滑面で覆われ, 肩部には潰痕を有する。115は表面上端に潰痕の集中が見られ凹み状を呈する。被熱により赤色化する。119は側面にダメージをもたず体部中央に潰痕が集中し凹み状を呈する。石材は111・112・115~118は砂岩, 113・114・119は安山岩を石材に用いる。

磨石 / 敲石 C 類 (第141図121・122)

121は乳棒状の円礫を素材に用いる。裏面の剥離痕には研磨面が認められ, 上下面には潰痕が集中する。122は扁平な水磨礫を素材に用いる。体部中央に潰痕が集中し凹み状を呈する。滑面は認められない。121は砂岩, 122は安山岩を石材に用いる。

ストーンリタッチャー (第141図123・124)

123・124は鶏卵大の水磨礫を素材に用い, 体部は滑面を有する。鼠歯状痕や擦痕が体部下面や中央に認められる。124の周囲には潰痕によるダメージが鉢巻状に認められ, 敲石との兼用品と思われる。石材は頁岩を用いる。

砥石 (第141図125・126)

125・126は礫・岩片を素材に用いる。125は溝状の砥面を有する有溝砥石である。表面の平坦面に細く深い2条の溝が確認できる。下面以外の平坦面でもやや凹みをもつ研磨痕が認められる。各面で研磨の方向に規則性は認められない。126の表面は平坦で滑面を有する。裏面中央は被熱により円形の黒色化した部分が認められる。表面の潰痕から台石, 石皿の兼用石器と思われる。石材はすべて砂岩を用いる。

石皿 (第141図127~129)

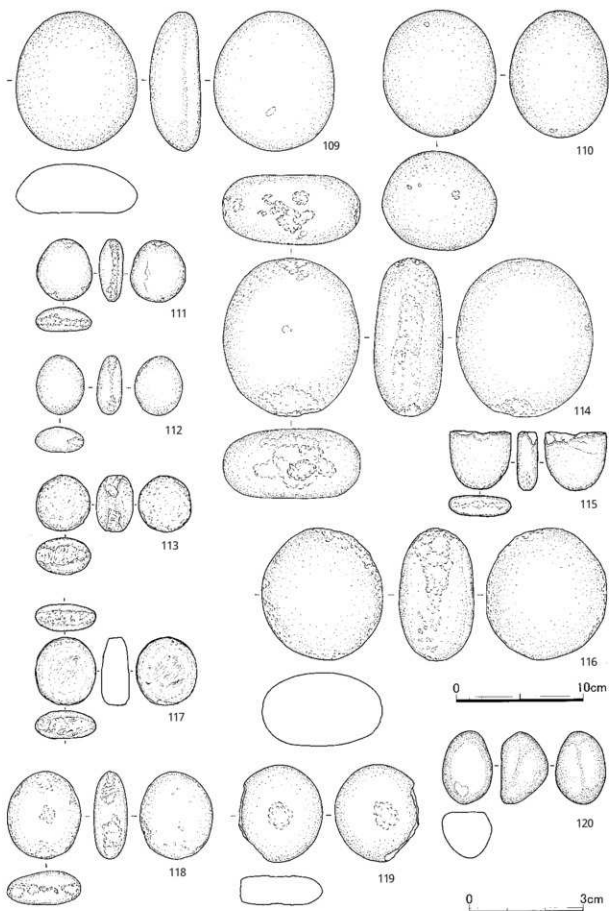
127~129は板状岩片を素材に用いる。127は丸みを帯びる側面から中央に向かって厚みを減らしている。表裏面は滑面を有する。128は上・左側面が破断面となる。両面に滑面を有し, 平坦面には潰痕が集中する。129は非常に厚みのある中央部の破片で両面に滑面を有する。石材は129の安山岩を除いて砂岩を用いる。

円盤状石器 (第141図130)

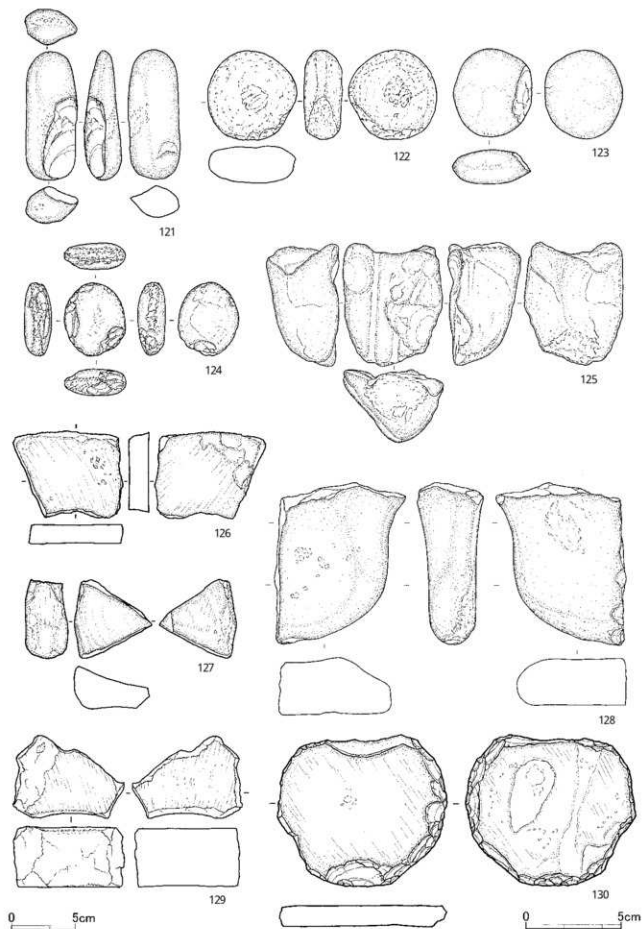
130は板状岩片を素材に用い, 周縁の敲打により全体を円形に整形している。両面とも滑面を有する。石材は砂岩である。

台石 (第142図131)

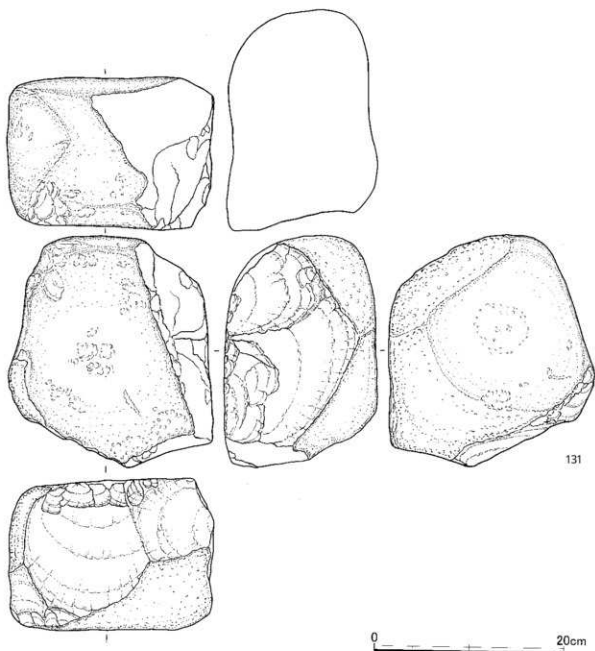
131は大型礫を素材に用いる。立方体の形状を呈し, 表・裏・左側面の3面を作業面として用いる。表裏面の平坦面は中央でやや凹んでおり滑面や潰痕が認められる。本遺跡から出土した石器の中で最大級の大きさである。石材は安山岩である。



第140図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑬ (109～119 S = 1 / 3 , 120 S = 1 / 1)



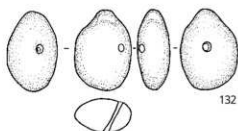
第141図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑭ (121～129 S = 1 / 3 , 130 S = 1 / 2)



第142図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑮ (S = 1 / 4)

玉 (第143図132)

132は長軸2.0cm短軸1.5cm程の楕円形を呈する。全面に光沢を有する研磨が施される。両面から直径約0.2cmの穿孔を斜方向に施している。石材は不明だが、色調は藍色でチャートまたは玉髄の可能性も考えられる。



第143図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑯ (S = 1 / 1)

第60表 A・D区Ⅲa・Ⅲb層石器計測表①

図	番号	器種	石材	地区	層位	グリッド	注記番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
128	001	石鏃未製品	黒曜石 A	A	Ⅲb	H-30	A:4535	3.4	3.0	0.9	8.0
128	002	石鏃未製品	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	J-28	A:3243	2.6	2.0	0.7	2.5
128	003	石鏃未製品	黒曜石 A	A	Ⅲb	K-28	A:3687	2.3	1.9	0.7	2.3
128	004	石鏃未製品	黒曜石 A	A	Ⅲb	J-28	A:3602	2.6	1.7	0.4	1.3
128	005	石鏃	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	K-28	A:4155	1.7	1.5	0.3	0.7
128	006	石鏃	黒曜石 A	A	Ⅲb	J-24	A:3028	2.1	2.2	0.5	1.3
128	007	石鏃	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	K-28	A:3719	2.1	1.7	0.3	0.8
128	008	石鏃	黒曜石 A	A	Ⅲb	O-22	A:2459	2.0	1.3	0.3	0.7
128	009	石鏃	黒曜石 A	A	Ⅲb	N-22	A:1988	2.5	1.5	0.6	1.6
128	010	石鏃	黒曜石 A	A	Ⅲb	O-22	A:2526	2.6	1.6	0.4	1.3
128	011	局部磨製石鏃	黒曜石 A	A	Ⅲb	G-30	A:4285	(2.2)	1.6	0.4	1.2
128	012	局部磨製石鏃	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	J-29	A:4211	2.6	1.6	0.4	1.2
128	013	局部磨製石鏃	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	N-26	A:0851	2.5	1.8	0.5	2.1
128	014	石鏃	黒曜石 A	A	Ⅲb	L-30	A:1205	2.2	1.6	0.3	0.8
128	015	石鏃	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	M-26	A:3166	1.9	1.1	0.4	0.6
128	016	石鏃	黒曜石 A	A	Ⅲb	L-30	A:1675	2.6	2.6	0.5	2.7
128	017	石鏃	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	K-27	A:3657	3.5	2.1	0.6	2.8
128	018	石鏃	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	L-30	A:4448	4.4	2.5	0.6	3.9
128	019	石鏃	黒曜石 A	A	Ⅲb	L-31	A:4412	3.2	1.3	1.2	5.6
128	020	石鏃	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	M-26	A:3358	4.3	2.2	0.8	6.8
128	021	形器	黒曜石 A	A	Ⅲb	M-26	A:3146	1.8	3.2	0.8	3.9
128	022	形器	黒曜石 A	A	Ⅲa	K-28	A:2086	6.2	2.1	1.2	8.2
128	023	楔形石器	黒曜石 A	A	Ⅲb	N-21	A:2436	1.7	1.2	0.5	0.9
128	024	楔形石器	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	M-26	A:3176	2.4	1.5	0.9	3.0
128	025	楔形石器	黒曜石 A	A	Ⅲb	N-25	A:1766	2.7	1.6	0.7	3.0
128	026	形器	黒曜石 A	A	Ⅲb	N-21	A:3774	2.6	2.2	1.1	4.9
128	027	形器	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	J-28	A:0246	4.4	3.5	1.1	15.7
128	028	つまみ形石器	黒曜石 A	A	Ⅲb	M-24	A:4322	4.1	1.4	0.5	1.8
128	029	異形石器	黒曜石 A	A	Ⅲb	I-27	A:4032	3.1	1.0	0.4	1.1
129	030	撻器 / 削器 C 類	黒曜石 A	A	Ⅲa	L-31	A:1716	3.4	2.8	1.0	6.9
129	031	撻器 / 削器 D 類	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	K-29	A:3214	3.4	6.2	1.8	25.9
129	032	撻器 / 削器 C 類	黒曜石 A	A	Ⅲb	J-25	A:3051	1.8	2.2	0.6	1.4
129	033	撻器 / 削器 A 類	黒曜石 A	A	Ⅲb	I-29	A:4542	3.0	2.2	0.8	3.8
129	034	撻器 / 削器 D 類	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	L-31	A:4414	5.0	7.0	1.9	57.6
129	035	撻器 / 削器 C 類	黒曜石 A	A	Ⅲb	J-29	A:4191	3.1	3.4	1.3	7.7
129	036	撻器 / 削器 B 類	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	H-29	A:3902	7.6	6.4	1.4	75.9
129	037	撻器 / 削器 B 類	黒曜石 A	A	Ⅲb	M-24	A:1799	5.1	2.4	0.9	3.0
129	038	撻器 / 削器 C 類	黒曜石 A	A	Ⅲb	M-26	A:3363	4.2	1.9	0.9	5.1
129	039	撻器 / 削器 B 類	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	M-22	A:2297	6.1	6.7	1.5	59.2
130	040	撻器 / 削器 D 類	無班晶質玄武岩	A	Ⅲa	L-28	A:0970	3.0	4.7	1.5	18.1
130	041	撻器 / 削器 D 類	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	J-29	A:3251	3.6	7.2	1.2	24.2
130	042	撻器 / 削器 D 類	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	L-28	A:3425	5.2	6.5	1.9	42.0
130	043	撻器 / 削器 D 類	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	K-28	A:4360	3.2	8.0	2.1	47.2
130	044	撻器 / 削器 D 類	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	H-31	A:3319	4.1	7.8	2.3	63.7
131	045	撻器 / 削器 D 類	安山岩	A	Ⅲb	N-21	A:4310	6.8	15.3	2.2	249.3
131	046	撻器 / 削器 D 類	無班晶質玄武岩	A	Ⅲb	N-28	A:0675	19.4	7.2	3.4	318.4
132	047	石胞丁様石器	砂岩	A	Ⅲa	M-26	A:0266	4.3	6.3	1.1	37.4
132	048	石胞丁様石器	安山岩	A	Ⅲa	I-29	A:0761	5.8	7.1	1.5	65.3
132	049	石胞丁様石器	結晶片岩	A	Ⅲa	J-28	A:0196	5.7	8.4	1.6	87.5
132	050	石胞丁様石器	頁岩	A	Ⅲa	K-30	A:1052	5.5	10.6	1.2	95.9

第61表 A・D区Ⅲa・Ⅲb層石器計測表②

図	番号	器種	石材	地区	層位	グリッド	注記番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
	133 051	原石	黒曜石 A	A	Ⅲb	I-28	A:1423	3.0	5.1	2.6	43.8
	133 052	原石	黒曜石 A	A	Ⅲb	M-24	A:0545	2.7	3.8	1.9	16.5
	133 053	石核	黒曜石 A	A	Ⅲb	K-29	A:1611	2.3	4.1	2.6	17.3
	133 054	石核	黒曜石 A	D	Ⅲb	F-30	D:0177	2.2	2.6	1.8	10.7
	133 055	石核	黒曜石 A	A	Ⅲa	I-29	A:2236	2.5	3.7	1.7	10.8
	133 056	石核	無珣晶質玄武岩	A	Ⅲb	M-28	A:2842	3.7	5.5	2.2	44.1
	133 057	石核	黒曜石 A	A	Ⅲb	K-30	A:1639	3.1	3.0	1.4	9.6
	133 058	石核	無珣晶質玄武岩	A	Ⅲb	K-27	A:0007	6.0	7.4	1.9	81.9
	134 059	石核	無珣晶質玄武岩	D	Ⅲb	G-30	D:0227	7.9	8.2	3.4	197.5
	134 060	石核	無珣晶質玄武岩	A	Ⅲa	M-26	A:0592	3.6	5.3	3.4	48.5
	134 061	石核	無珣晶質玄武岩	D	Ⅲb	G-30	D:0228	6.0	7.9	2.6	109.7
	134 062	石核	無珣晶質玄武岩	A	Ⅲb	J-29	A:2216	6.8	6.0	2.9	132.4
	135 063	剥片	黒曜石 A	A	Ⅲb	N-22	A:2372	4.7	1.9	1.1	5.1
	135 064	剥片	黒曜石 A	A	Ⅲb	N-21	A:2426	3.6	2.1	0.8	4.5
	135 065	使用痕剥片	黒曜石 A	A	Ⅲb	J-28	A:3624	3.4	1.8	1.4	3.9
	135 066	剥片	黒曜石 A	A	Ⅲb	M-24	A:1791	3.2	1.4	0.4	2.1
	135 067	剥片	黒曜石 A	A	Ⅲb	K-30	A:4601	2.4	3.1	1.5	7.9
	135 068	使用痕剥片	黒曜石 A	A	Ⅲa	N-22	A:1987	4.3	3.1	1.1	8.5
	135 069	剥片	黒曜石 A	A	Ⅲb	M-23	A:2598	2.6	0.9	0.3	0.6
	135 070	使用痕剥片	黒曜石 A	A	Ⅲb	J-24	A:3016	2.0	1.3	0.4	1.0
	135 071	二次加工剥片A類	無珣晶質玄武岩	A	Ⅲb	O-22	A:2502	4.8	4.9	1.9	39.3
	135 072	二次加工剥片A類	黒曜石 A	A	Ⅲb	M-24	A:2745	3.3	1.8	0.7	2.9
	135 073	二次加工剥片B類	黒曜石 A	A	Ⅲb	P-22	A:2550	2.8	1.8	1.1	4.3
	135 074	二次加工剥片B類	黒曜石 A	A	Ⅲa	N-24	A:0410	4.6	3.2	1.3	9.5
	135 075	二次加工剥片B類	黒曜石 A	A	Ⅲb	K-30	A:4602	2.3	2.3	0.8	3.1
	135 076	二次加工剥片B類	黒曜石 B	A	Ⅲb	N-24	A:2664	2.2	2.4	0.6	2.3
	135 077	二次加工剥片B類	黒曜石 A	A	Ⅲb	M-24	A:2774	2.5	1.1	0.6	0.8
	135 078	二次加工剥片B類	黒曜石 A	A	Ⅲb	K-31	A:4433	1.8	1.2	0.4	0.6
	135 079	二次加工剥片B類	黒曜石 A	A	Ⅲb	J-27	A:3636	1.9	1.8	0.7	1.7
	135 080	二次加工剥片B類	黒曜石 A	A	Ⅲb	K-29	A:4175	2.2	2.4	0.3	1.7
	135 081	二次加工剥片B類	黒曜石 A	A	Ⅲb	O-22	A:3780	1.7	2.4	0.7	2.1
	135 082	二次加工剥片B類	黒曜石 A	A	Ⅲb	K-28	A:4153	1.7	1.6	0.4	0.9
	135 083	二次加工剥片B類	黒曜石 A	A	Ⅲb	K-26	A:2994	1.4	1.3	0.3	0.4
	135 084	二次加工剥片B類	黒曜石 A	A	Ⅲb	O-21	A:3787	1.3	1.0	0.3	0.4
	136 085	簍状石器	無珣晶質玄武岩	A	Ⅲa	K-30	A:1073	11.5	5.0	2.6	122.4
	136 086	簍状石器	無珣晶質玄武岩	A	Ⅲb	M-26	A:1825	7.7	4.3	1.8	55.8
	136 087	打製石斧B類	安山岩	A	Ⅲb	K-30	A:4600	9.1	6.5	1.0	70.3
	136 088	打製石斧B類	結晶片岩	A	Ⅲb	M-22	A:2324	11.0	6.8	1.3	94.8
	136 089	打製石斧B類	安山岩	A	Ⅲb	M-26	A:3121	10.5	5.1	1.3	100.5
	136 090	打製石斧B類	安山岩	A	Ⅲb	O-23	A:4306	12.3	6.6	1.2	124.1
	137 091	打製石斧A類	安山岩	A	Ⅲb	J-29	A:4186	10.7	5.4	2.1	134.5
	137 092	打製石斧A類	安山岩	A	Ⅲb	L-28	A:3428	15.2	5.4	2.7	233.6
	137 093	打製石斧A類	安山岩	A	Ⅲb	H-29	A:3882	13.8	4.9	2.4	172.0
	137 094	打製石斧B類	安山岩	A	Ⅲb	G-31	A:4299	10.9	8.1	3.4	393.4
	138 095	磨製石斧未製品	頁岩	A	Ⅲb	N-22	A:2375	14.9	4.5	2.6	230.4
	138 096	磨製石斧A類	頁岩	A	Ⅲb	N-22	A:2445	7.2	5.0	4.2	171.9
	138 097	磨製石斧A類	頁岩	A	Ⅲa	O-24	A:0403	6.3	6.5	2.7	106.6
	138 098	磨製石斧A類	石灰岩	A	Ⅲb	I-28	A:1402	10.5	4.6	3.3	228.0
	138 099	磨製石斧A類	砂岩	A	Ⅲa	M-26	A:0268	11.0	7.5	4.0	500.0
	138 100	磨製石斧B類	頁岩	A	Ⅲb	K-24	A:2975	8.0	3.4	1.8	63.5

第62表 A・D区Ⅲa・Ⅲb層石器計測表③

図	番号	器種	石材	地区	層位	グリッド	注記番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
139	101	磨製石斧 B 類	蛇紋岩	A	Ⅲb	K-24	A: 2964	8.7	3.6	1.5	71.8
139	102	磨製石斧 A 類	蛇紋岩	A	Ⅲb	N-26	A: 3087	5.1	4.0	1.3	29.1
139	103	磨製石斧 B 類	頁岩	A	Ⅲa	I-29	A: 2234	8.4	3.8	1.2	45.8
139	104	磨製石斧 B 類	蛇紋岩	A	Ⅲb	J-28	A: 0202	6.0	2.8	1.1	32.3
139	105	磨製石斧 A 類	頁岩	A	Ⅲb	J-28	A: 3603	7.6	4.6	1.7	92.7
139	106	磨製石斧 B 類	蛇紋岩	A	Ⅲb	M-24	A: 2720	4.9	3.1	0.8	14.3
139	107	磨製石斧 C 類	安山岩	A	Ⅲb	N-21	A: 2353	11.6	6.2	2.0	159.9
139	108	打製石斧 D 類	結晶片岩	A	Ⅲb	M-28	A: 3389	12.1	6.9	1.3	178.7
140	109	磨石 / 敲石 A 類	砂岩	A	Ⅲa	K-30	A: 1046	10.9	9.6	4.0	550.0
140	110	磨石 / 敲石 A 類	安山岩	A	Ⅲb	M-29	A: 3472	10.0	9.0	7.8	1000.0
140	111	磨石 / 敲石 B 類	砂岩	A	Ⅲb	H-30	A: 4264	4.9	4.4	2.0	50.4
140	112	磨石 / 敲石 B 類	砂岩	A	Ⅲb	O-22	A: 3783	4.6	3.8	2.0	46.6
140	113	磨石 / 敲石 B 類	安山岩	A	Ⅲb	J-27	A: 3523	4.5	4.3	2.9	71.6
140	114	磨石 / 敲石 B 類	安山岩	A	Ⅲb	J-27	A: 1336	12.4	10.7	5.5	1200.0
140	115	磨石 / 敲石 B 類	砂岩	A	Ⅲb	H-29	A: 4507	4.6	4.9	1.6	56.5
140	116	磨石 / 敲石 B 類	砂岩	A	Ⅲb	M-29	A: 3458	9.9	9.5	5.9	900.0
140	117	磨石 / 敲石 B 類	砂岩	A	Ⅲb	J-28	A: 0189	5.3	4.7	2.1	81.3
140	118	磨石 / 敲石 B 類	砂岩	A	Ⅲb	K-29	A: 3215	6.9	5.8	2.6	145.3
140	119	磨石 / 敲石 B 類	安山岩	A	Ⅲb	M-28	A: 3385	7.7	6.6	2.3	183.6
140	120	磨石 / 敲石 A 類	不明	A	Ⅲb	I-28	A: 3259	1.9	1.3	1.2	4.1
141	121	磨石 / 敲石 C 類	砂岩	A	Ⅲb	H-29	A: 3881	10.1	4.2	2.9	145.1
141	122	磨石 / 敲石 C 類	安山岩	A	Ⅲb	N-22	A: 2629	7.0	7.0	3.0	185.5
141	123	ストーンリタッチャー	頁岩	A	Ⅲb	N-21	A: 2354	7.0	6.2	2.7	132.4
141	124	ストーンリタッチャー	頁岩	A	Ⅲb	N-24	A: 2647	5.8	4.8	2.1	82.6
141	125	砥石	砂岩	A	Ⅲb	M-29	A: 3432	9.6	7.8	5.8	382.1
141	126	砥石	砂岩	A	Ⅲb	N-22	A: 2336	8.8	6.9	1.6	167.8
141	127	石皿	砂岩	A	Ⅲb	M-26	A: 3184	6.3	6.2	3.4	108.3
141	128	石皿	砂岩	A	Ⅲa	M-26	A: 0295	12.7	10.4	5.3	700.0
141	129	石皿	安山岩	A	Ⅲa	L-24	A: 0529	6.6	8.8	4.9	400.0
141	130	円盤状石器	砂岩	A	Ⅲa	I-29	A: 0819	8.0	9.0	1.1	115.6
142	131	台石	安山岩	D	Ⅲb	F-31	D: 0276	25.6	23.6	16.2	13700.0
143	132	玉	不明	A	Ⅲa	O-24	A: 0395	2.1	1.5	0.9	3.8

B・C区Ⅲ層出土の石器群

石鏃未製品（第144図133～135）

133・134は周縁に粗い二次加工を施す。基部は未作出で、概形を整える程度の加工である。135は下面からの調整剥離が上面に及び過ぎて先端部を欠損している。製作途中の失敗品と考えられる。石材は133の玄武岩を除いて黒曜石Aである。

石鏃（第144図136～145）

136は非常に小型で脚部は作出されず柳葉形を呈する。基部が凸状を呈する資料（ドット取上げ）はこの1点のみである。137は裏面に素材面を大きく残す剥片鏃である。周縁の二次加工により整形し、基部には丸みのある深い抉りを施し脚部を作出する。138は小突起状の先端部から側縁は大きく外湾し、基部は深く丸みを帯びる抉りにより脚部を作出する。139の側縁はやや内湾気味に整形し、基部は直線的な抉りにより長脚を作出する。140・141・143は二次加工により器面全体が覆われ、素材面は残存しない。142・144・145は粗い二次加工により素材面が残存する。145の両側縁中央には対になる小突起が認められる。141～145は基部の調整が不明瞭である。石材は138の玄武岩、139の黒曜石Cを除いて黒曜石Aを用いる。

石錐・礫錐（第144図146～149）

146～148は錐部と頭部の境が明確である。素材末端に両面両側縁から二次加工を施し断面菱形の錐部を作出する。錐部の摩耗が顕著に認められる。149は棒状の小型水磨礫を素材に用いた礫錐である。錐部は丸く周縁には主軸と直交する線条痕が集中する。細部調整は認められず、頭部は滑面となっている。146・147は玄武岩、148は黒曜石A、149は砂岩を石材に用いている。

楔形石器（第144図150・151）

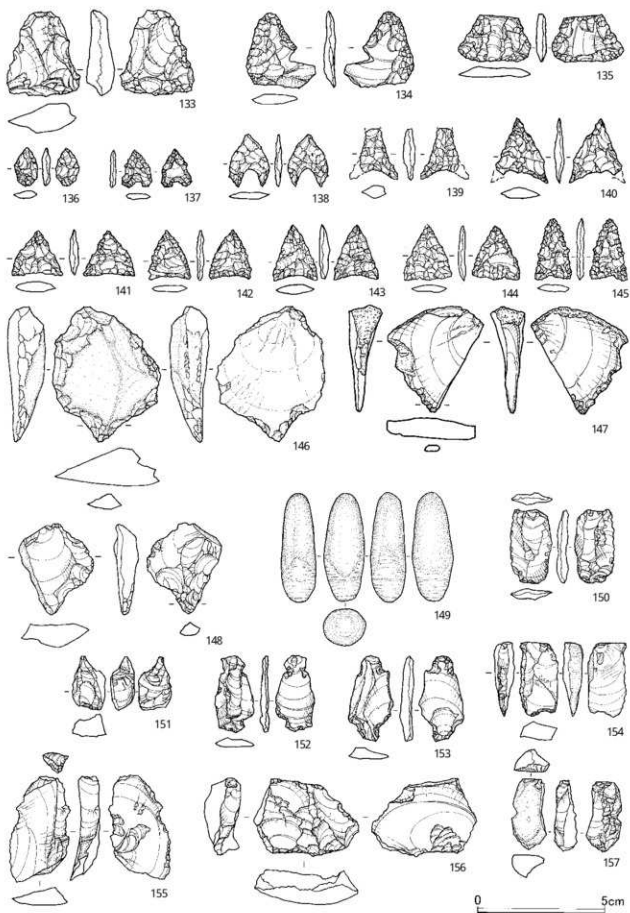
150は非常に薄手で、整った長方形を呈している。表裏面は上下両方向からの同時衝撃（両極打法）により剥離方向が180°に切り合っている。下端には潰れが生じており階段状に剥離している。151は全面凹面で覆われており、下面には階段状の剥離が認められる。側面の剥離痕はハジケによるものであり、縦断面で凸レンズ状を呈する。石材は黒曜石Aを用いる。

つまみ形石器（第144図152・153）

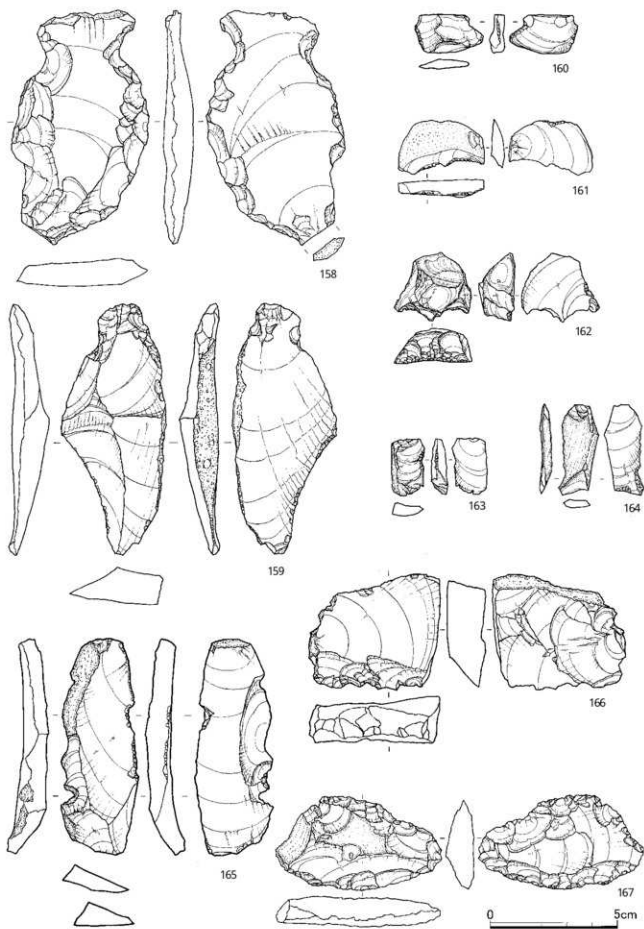
152・153は縦長剥片を素材に用いる。つまみは両側縁に対になる抉入を施して作出する。153は上下端とも対になるが、152の下端は対にならない。152は黒曜石A、153は玄武岩を石材に用いる。

彫器（第144図154～157）

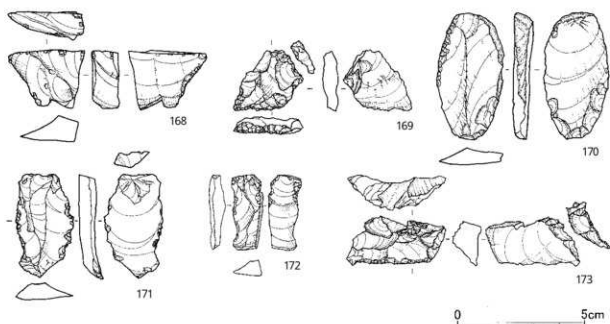
154は小型の縦長剥片を素材に用いる。左側面に2条の楕状剥離を施し彫刀面を作出する。155は素材の打面側に1条の楕状剥離で打面調整を行い、この面を打面として数回の細かい楕状剥離を施している。156は左側面の楕状剥離により彫刀面を作出する。下面には両面加工を施し分厚い刃部を作出する。彫器と搔／削器の兼用石器と考えられる。157は素材の打面側に楕状剥離を施し打面調整を行ったのち右側縁に2条の楕状剥離を施し彫刀面を作出する。彫刀面には使用痕が顕著に認められる。石材は156の玄武岩を除いて黒曜石Aを用いる。



第144図 縄文時代後期—弥生時代前期の石器⑬ (S = 2 / 3)



第145図 縄文時代後期—弥生時代前期の石器⑧ (S = 2 / 3)



第146図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑨ (S = 2 / 3)

石匙 (第145図158)

158は大型で幅広の剥片を素材に用いている。縦型の形態を呈し、素材末端の両側縁に抉入を施しつまみを作出している。素材の両側縁には連続した両面加工により分厚い刃部を作出するが、主要剥離面側の二次加工は粗い。石材は玄武岩を用いる。

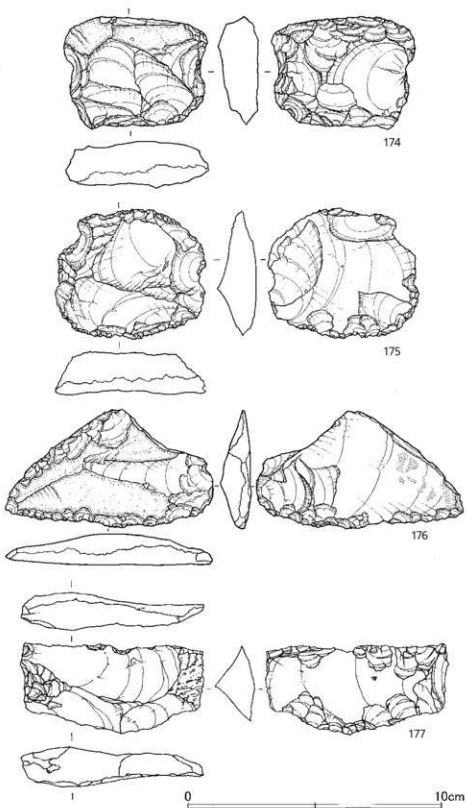
掻 / 削器類 (第145図159～167, 第146図168～173, 第147図174～177, 第148図178～181)

掻 / 削器類はA類 (169), B類 (159・161・168・170・172・173), C類 (160・162～164・171), D類 (165～167, 174～181) に分類した。

159は上端に二次加工を施し突起状に整形する。刃部の加工は認められず、左側縁下半のフェザーエンドを刃部として用いるためか微細剥離痕が見られる。160は素材のバルブ側を折断し方形に整形する。右側縁にはノッチ状の刃部を作出する。161は下縁に鋸歯縁状の刃部を作出する。162は下面に急角度加工による抉りを連続して施すため、刃部は鋸歯縁状を呈する。163・164は縦長剥片を素材に用いる。側縁に微細な連続した二次加工を施しノッチ状の刃部を作出する。165は縦長剥片を素材に用いる。右側縁中央に粗い二次加工を施し刃部を作出する。166は大型剥片を素材に用いる。上面は平坦な自然面を残し、下面は二次加工により刃部を作出する。167は大型剥片を素材に用いる。周縁に二次加工を施し、下面は弧状の刃部を作出する。168は左側面に微細な二次加工を施し刃部を作出する。上面の折断面から数条の剥離が認められる。彫器との兼用石器と考えられる。169は下縁や左側縁に急角度加工を施し直線的な分厚い刃部を作出する。170は素材の末端に両面加工を施し刃部を作出する。左側縁には微細剥離痕が認められ、周縁には二次加工を施し刃部を作出する。171は縦長剥片の左側縁に微細な連続した二次加工を施しノッチ状の刃部を作出する。172は下面に直線的な刃部を作出する。173は左側面に急角度加工を施し整形する。下面は微細な二次加工を施し刃部を作出する。174～181は大型剥片を素材に用いる。174・175は周縁に二次加工を施し方形に整形したあと、両側縁には対になる抉りを施している。下面には二次加工により刃部を作出する。176・178は周縁に二次加工を施し三角形に整形する。176は肉厚の大型剥片を素材に用いる。周縁に二次加工を施し

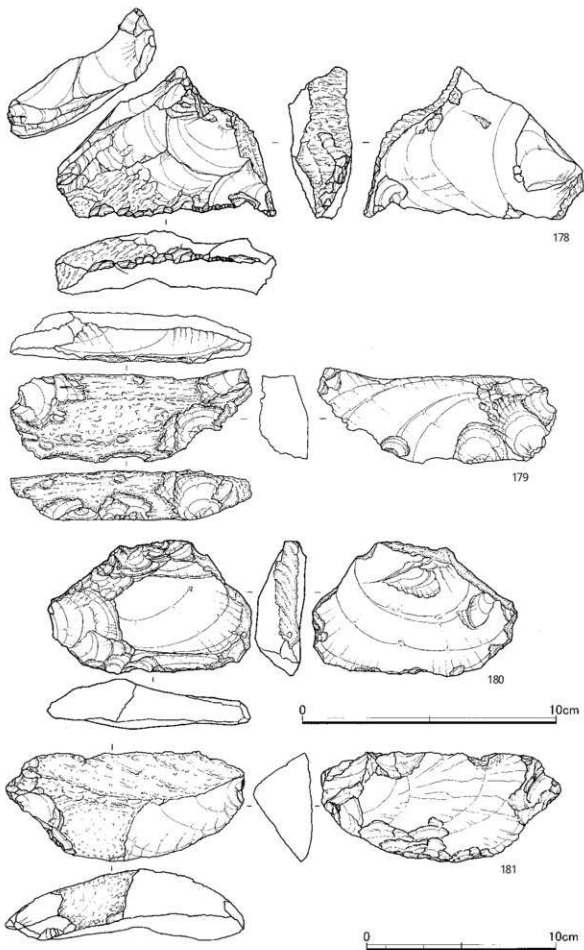
三角形に整形する。
 下縁は両面加工により直線的な刃部を作成し、刃部付近にはボリッシュが顕著に認められる。177は肉厚の縦長剥片を素材に用いる。下縁の背面側に二次加工を施し、やや弧状の刃部を作成する。178は右側面に平坦な自然面を残し、左側面は折断及び上下端からの二次加工により平坦面を作成している。下端からの剥離は櫛状を呈する。下面は二次加工により鋸歯状の刃部を作成する。179は肉厚の大型剥片を素材に用いる。上面は折断により平坦面を作成し、下面は急角度加工により刃部を作成する。180は上面に平坦な自然面を残し、下面に直線的な刃部を作成する。

B・C区では第128図45・46のような形態の大型品は出土していないが、181は非常に大型の縦長剥片を素材に用い、下面には分厚い弧状の刃部を作成する。左側面は両面から二次加工が施され突起状に整形される。石材は159・165-167・170・174-181の玄武岩を除いて黒曜石Aを用いる。

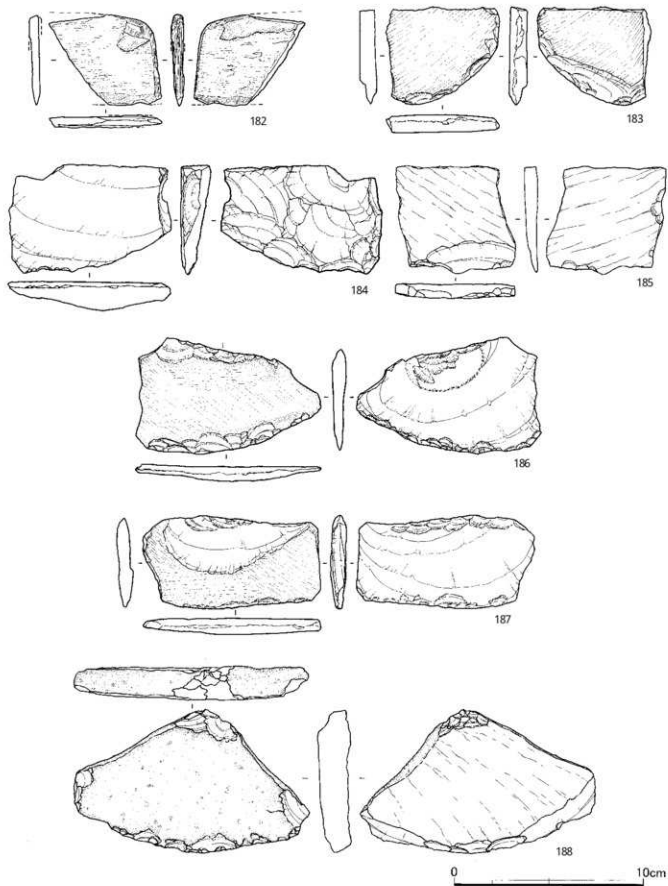


第147図 縄文時代後期-弥生時代前期の石器② (S = 2 / 3)

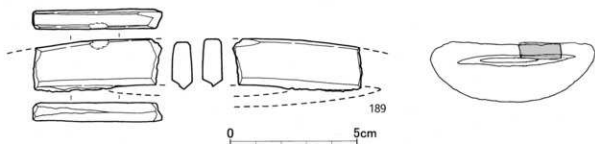
石材は159・165-167・170・174-181の玄武岩を除いて黒曜石Aを用いる。



第148図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器② (178～180 S = 2 / 3 , 181 S = 1 / 2)



第149図 縄文時代後期—弥生時代前期の石器② (S = 1 / 2)



第150図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器③ (S = 2 / 3)

石庖丁様石器 (第149図182～188)

収種用石器としてサイズや形態的には掻 / 削器 D 類と類似するが、素材に違いが見られる。素材の共通する打製石斧とは刃付けの方法や整形に違いが見られることから岩片を素材とした一種の削器と考えられる。

182は板状岩片を素材に用いる。表裏面には部分的に研磨を施しており、下面には両面からの研磨により直線的な両刃形の刃部を作出している。左側面は破断面となっており欠損する。183は板状岩片を素材に用い、両面に滑面を有している。外湾する側縁に両面加工を施し弧状で薄い両刃形の刃部を作出している。上面は折断により平坦面を作出している。研磨痕は認められない。184は板状岩片を素材に用いる。下面は二次加工を施し弧状で両刃形の刃部を作出している。上・左側面は折断、右側面は剥離により長方形に整形している。研磨痕は認められない。185は板状岩片を素材に用いる。下面に二次加工を施し直線的な片刃形の刃部を作出している。下面以外は折断し正方形に整形している。研磨痕は認められない。186は大型の剥片を素材に用い、下縁には両面加工を施し弧状の刃部を作出している。上縁は両面加工により直線的に整形している。上面はやや厚手に作出される。また、表面は滑面が認められる。187は大型の剥片を素材に用いる。下縁は両面加工を施し直線的な刃部を作出している。また、上縁にも両面加工を施し直線的に整形している。両側面は折断面となっており長方形に整形する。刃縁の摩耗痕が顕著である。188はやや肉厚の板状岩片を素材に用い、下面には両面加工により弧状の分厚い刃部を作出している。上面は自然面による平坦面を残すが、各角に丸みを持たせるための二次加工が施され隅丸三角形に整形している。182は結晶片岩、183～185は砂岩、187～188は安山岩を石材に用いる。186は石材不明である。

磨製石庖丁 (第150図189)

189は刃部を含む体部のほとんどを欠損する。薄手で全面に丁寧な研磨を施し、上面には2条の明瞭な溝が見られる。下面は擦切により溝状に整形している。溝の下端の稜は正面図中央より左は破断面となっており、中央より右は「く」の字状に屈曲している。このため中央より右側を穿孔していると思われる。穿孔は両面からの擦切りにより施され、裏面からの穿孔が表面からの穿孔と比べて深い。小型円形の穿孔は認められない。石材は不明である。

原石（第151図190・191・193）

190は拳大の亜角礫で、剥離面はとどめない。本遺跡から出土した原石の中で最大級の大きさである。191は鶏卵大の亜角礫で、剥離面は認められない。193は鶏卵大の亜角礫で、1枚の剥離痕が認められる初期石核である。石材はすべて黒曜石Aを用いる。

石核（第151図192・194～201，第152図202～205）

A・D区で示したとおり石核はその形態から5つに分類した。玄武岩製では204をⅡ類に203をⅢ類に分類した。

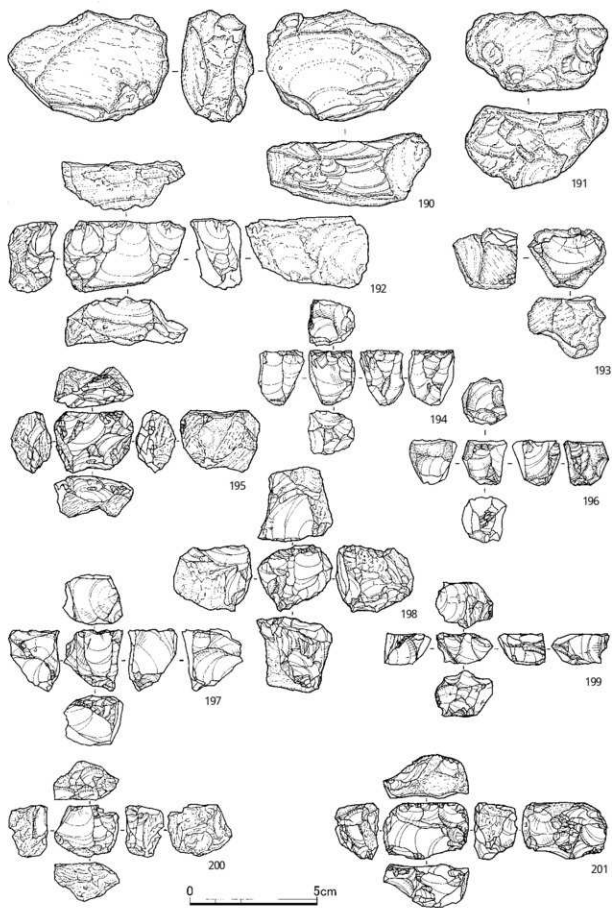
192・194は亜角礫を用いた典型的なⅠ類である。192は上面の自然面打面から作業面を1面設定し、同一方向の剥離を行っている。形状は扁平形を呈する。194は上面の調整打面から小型剥片を剥離した作業面を打面の周囲に4面設定している。いずれも上面の同一打面からの剥離となる。形状はサイコロ状を呈する。下面は自然面が残存する。

195は亜角礫を素材に用いる。素材の長軸を横位に用い上下面に設定した両設打面から剥片剥離を行っている。作業面は1面で上面は調整打面、下面は自然面打面でいずれも後方に傾斜している。打面から剥離角約90°で剥片剥離を行うため素材の中央で肉厚となり縦断面で凸レンズ状を呈する。典型的なⅡ類である。

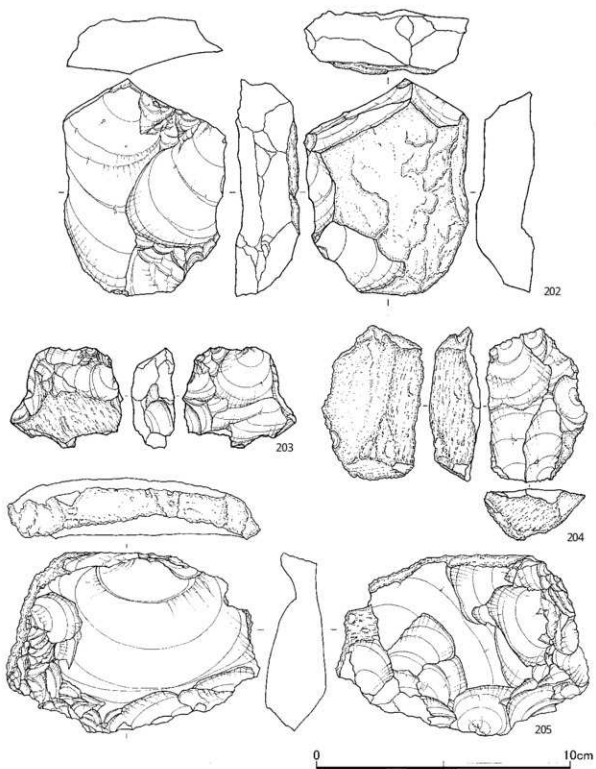
196～201は亜角礫を用いており、Ⅲ類に相当する。196は調整打面の周囲に作業面を設定し、同一方向の剥離を行うが、左側面で90°に打面を転移した痕跡が見られる。下面は著しく潰れが生じている。形状はサイコロ状を呈する。197の最終作業面の打面は剥離面打面である。ほぼ全周に作業面が認められることから、適当な面を打面に設定し剥片剥離を行っている。同一作業面で90°の剥離痕の切り合いが認められる。形状はサイコロ状を呈する。196と同じく下面は著しい潰れが生じている。

198・199は自然面、剥離面、調整打面から作業面を設定している。適当な面を打面に設定し剥片剥離を行っており、打面転移に規則性は見出せない。形状はサイコロ状を呈する。200は最終剥離面と左側面の剥離痕で90°の打面転移の痕跡が認められる。裏面と下面には自然面を残す。201は素材を縦位に用い縦長剥片を剥離するが、そのあと90°の打面転移で素材を横位に設定し、上面の自然面から小型の不定形剥片を剥離している。他の面も作業面として利用され、ランダムな打面転移の痕跡が認められる。

202は剥片素材の板状石核である。側面は龜の甲状に剥片剥離を行い、そのあと主要剥離面を作業面としている。203は扁平な板状石核である。素材の周囲に作業面を有し、ランダムに作業面、打面を転移しながら剥片剥離を行っている。黒曜石製石核のⅢ類に相当する。204は素材の主軸を縦位に用い両設打面から剥片剥離を行っている。作業面は1面で、上下面の後方に傾斜した自然面を打面として利用している。作業面の中央でやや肉厚になり凸レンズ状の縦断面を呈する。打面調整を行わないが、最終剥離痕が主軸と90°に切り合うなど形態的に鈴桶型石核と非常に類似している。205は大型で肉厚な剥片素材の板状石核である。左側面の自然面を打面に用い、両面に不定形剥片の作業面が設けられている。下面にも作業面を設けているが、この作業面は播/削器類の刃部として作出された可能性も考えられる。192・194～201は黒曜石A、202～205は玄武岩を石材に用いている。



第151図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器群 (S = 2 / 3)



第152図 縄文時代後期—弥生時代前期の石器② (S = 2 / 3)

剥片 (第153図206・209・210)

206は縦長剥片である。背面は自然面で覆われることから、石核から剥離した初期の剥片と考えられる。209は縦長剥片である。背面も縦長剥片を剥離した痕跡が認められる。210は細長い縦長剥片で、背面は自然面で覆われる。206と同じく初期の剥離と考えられる。石材は209の玄武岩を除いて黒曜石Aである。

使用痕剥片 (第153図207・208・211)

207は右側縁に微細剥離痕が見られる。素材の背面は大きく自然面を残しており稜上調整が認められる。208は肉厚で大型の縦長剥片である。右側縁に微細剥離痕が認められ、左側縁は自然面が残存する。211は縦長剥片を素材に用いる。素材のバルブ側と左側面を折断し長方形に整形している。側縁には微細剥離痕が認められる。石材は208の玄武岩を除いて黒曜石である。

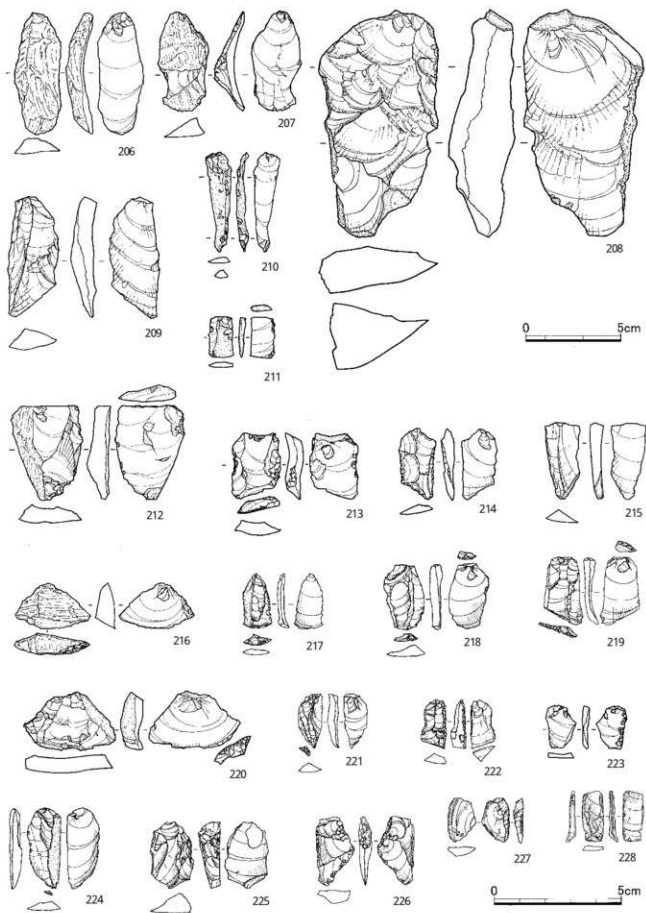
二次加工剥片A類 (第153図212・214・215)

212は縦長剥片の打面側を折断し、左側縁には二次加工が認められる。背面側には180°に切り合う剥離痕が認められる。214は縦長剥片の側縁に二次加工を施す。215は縦長剥片の打面側を折断し、側縁には二次加工を施す。石材は212の黒曜石Aを除いて玄武岩である。

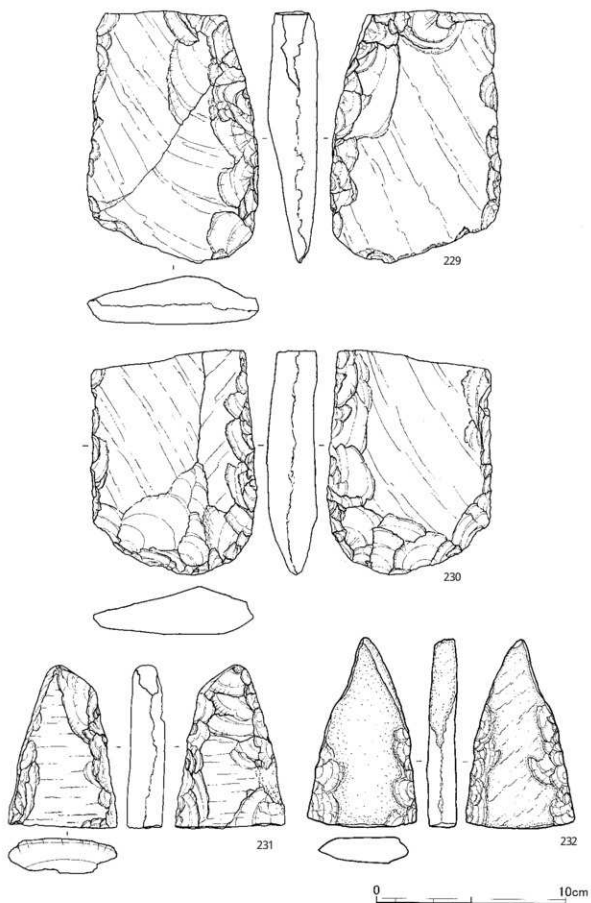
二次加工剥片B類 (第153図213・216～228)

B類の大きさは長軸で3cm以下を測る小型品が多く、形態は素材の末端や側縁の一部に急角度の剥離を施している。素材に注目すると不定形剥片、横長剥片、縦長剥片、寸詰まりの剥片を用いるが、基本的に縦長を呈する剥片が主体を占める。これらの剥片は総じて打面が小さく背面側に1～2本の側縁と平行する稜をもつことから縦長剥片や寸詰まりの剥片は石刃状の形態を示すと思われる。本遺跡の石核の形態と照らし合わせると、定型的な剥片石器群は本遺跡出土の石核から剥離された剥片を用いた場合素材の大きさに無理が認められる。石核の状態から二次加工剥片B類の素材となる剥片が剥離された可能性が高いと思われることから、最終段階での剥片剥離により生産された石器群と考えられる。

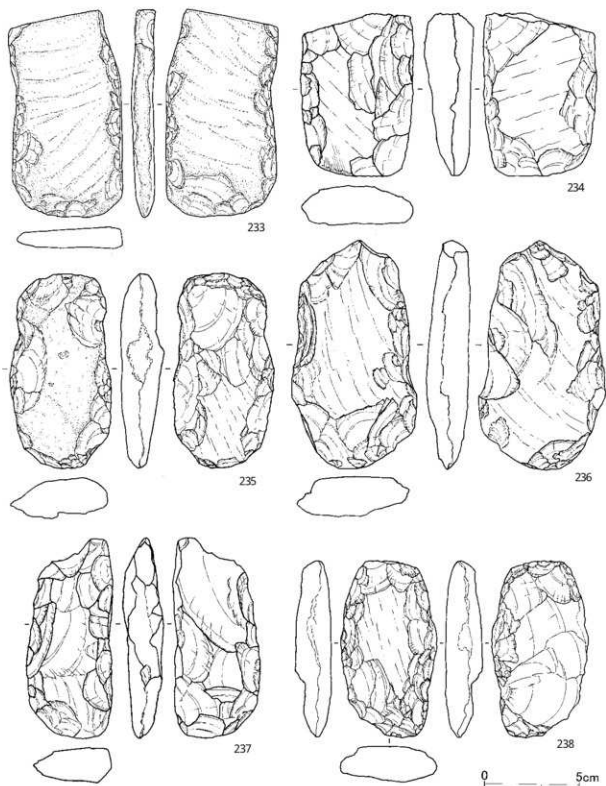
213は剥片の末端を折断し長方形に整形している。素材末端の折断面や右側縁に細かい急角度加工を施しており、折断面には右側縁を打面とする1条の細かい楯状の剥離痕が見られる。上面と左側面には微細な剥離痕が認められる。216・220は背面に自然面を残す横長剥片を素材に用い、下面の一部に主要剥離面を打面とする急角度加工を施している。217～219・221・224は小型の縦長剥片を素材に用い、素材の末端に主要剥離面を打面とする微細な急角度加工を施している。222・223は小型の剥片の末端部を折断し長方形に整形している。急角度加工は側縁に施される。225はやや肉厚の小型不定形剥片を素材に用い、左側面に急角度加工を施している。226は小型剥片を素材に用いる。左側縁の一部に微細な急角度加工を施している。227は小型剥片の末端に1条の楯状の剥離を施し、この面に素材背面を打面とする微細な急角度加工が施されている。228は縦長剥片のバルブ側を折断し、末端部を素材に用いている。左側面の一部には微細な急角度加工、右側縁には研磨痕が認められる。石材はすべて黒曜石Aである。



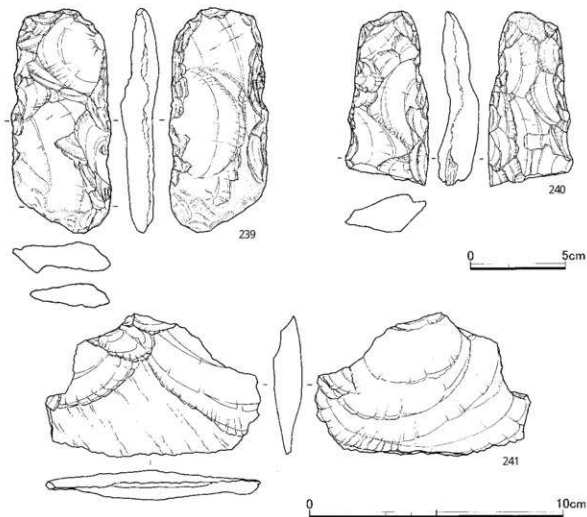
第153図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器類 (206・207, 209～228 S = 2 / 3, 208 S = 1 / 2)



第154図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑦ (S = 1 / 2)



第155図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器群 (S = 1/2)



第156図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑨ (239・240 S = 1/2, 241 S = 2/3)

打製石斧A類 (第155図235・237・238, 第156図239・240)

235は板状岩片を素材に用い、側縁は両面加工により平行に整形する。237は右上端に突起状の基部を作出する。両側縁は両面加工により平行に整形する。238～240は大型の剥片を素材に用い、両側縁を平行に整形する。下縁は二次加工によりやや丸みを帯びる刃部を作出している。239は刃部の摩耗痕が顕著である。いずれも細身で長身形を呈する。石材はすべて安山岩を用いる。

打製石斧B類 (第154図229・230, 第155図233・234・236)

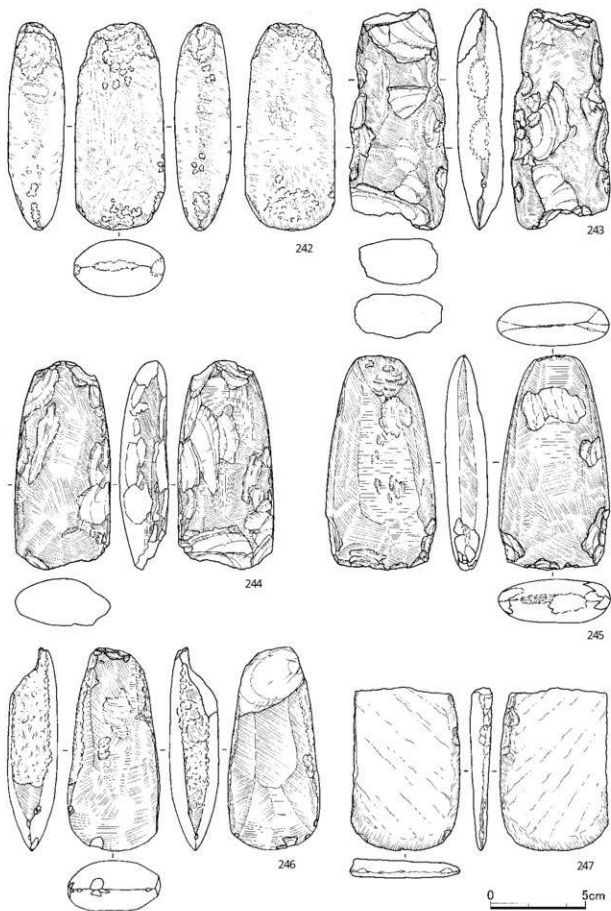
229・230は大型で幅広の板状剥片を素材に用いる。下縁には主軸と平行する両面加工により弧状の刃部を作出している。上面は折断面となり、229は折断面からの二次加工により基部を作出している。両側面は平行に整形するため扁平短冊形を呈する。233・234は幅広の板状岩片を素材に用いる。下縁は両面加工により直線的な刃部を作出する。236は大型の剥片を素材に用いる。刃縁の摩耗が著しい。石材はすべて安山岩を用いる。

打製石斧C類 (第154図231・232)

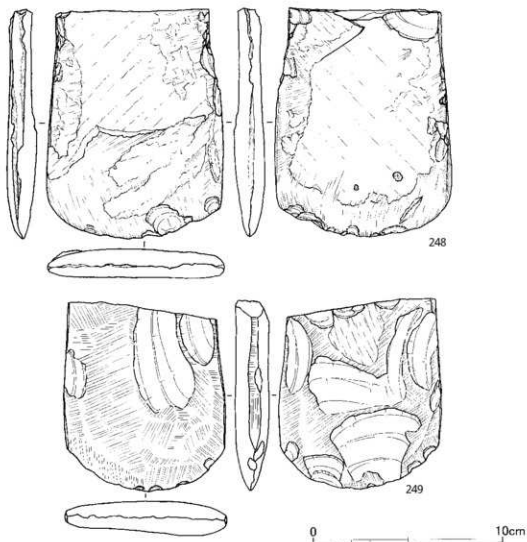
231・232は板状岩片を素材に用いる。下面は破断面となっており刃部は欠損する。側縁は両面加工を施し、基部端に向かってすばまる形状に整形している。石材はすべて安山岩を用いる。

打製石斧剥片 (第156図241)

241は打製石斧の製作時に生じたと思われる安山岩の剥片で、最大級の資料である。



第157図 縄文時代後期一弥生時代前期の石器③ (S = 1 / 2)



第158図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器③ (S = 1 / 2)

磨製石斧A類 (第157図242～246)

242は両面からの研磨により両刃形で弧状の刃部を作出する。体部中央には帯状の変色が認められ、着柄痕の可能性が考えられる。243～246は全面に丁寧な研磨を施す。243・244は研磨痕を切る敲打整形が刃部にまで及ぶことから、再加工中に廃棄されたものと考えられる。242・245は結晶片岩、243・244・246は頁岩を石材に用いる。

磨製石斧C類 (第157図247 第158図248・249)

247は248と比べてやや小型である。板状岩片を素材に用い、左側面と上面を折断し扁平で短冊状に整形している。研磨は右側縁から下端に限られる。刃部は両面からの研磨により、やや弧状の両刃形に作出する。248・249は大型板状岩片を素材に用い、扁平短冊形を呈する。器面全体を敲打整形したのち全面に研磨を施す。刃部は両面からの丁寧な研磨により弧状で両刃形に作出する。249は特に丁寧な研磨が施される。247・249は安山岩、248は頁岩を石材に用いる。

磨石 / 敲石 A 類 (第159図250・251)

250は大型の円礫を素材に用いる。非常に肉厚で全面に滑面を有し、表面の平坦面に若干の溝痕が認められる。251は小型の水磨礫を素材に用いる。右側縁の研磨痕が顕著に認められる。250は石材に砂岩を用い、251は石材不明である。

磨石 / 敲石 B 類 (第159図252～257・259・260)

252は扁平な水磨礫を素材に用いる。溝痕は下面左端に集中しており、平坦面は滑面を有している。253は掌大の棒状円礫を素材に用い、上面は主軸と平行する二次加工により整形する。下面に滑面を有し、平坦面には溝痕が集中する。254は直径50mm大の水磨礫を素材に用いる。側面には鉢巻き状に溝痕が認められる。255～257・259は水磨礫を素材に用いる。体部は滑面を有し、255は肩部、256・259は長軸上、257は鉢巻状に溝痕が集中する。260は掌大の円礫を素材に用い、平坦面は滑面や擦痕が認められる。体部中央には凹む程ではないが溝痕の集中が見られる。石材は254の石英を除いて砂岩を用いる。

磨石 / 敲石 C 類 (第159図258)

258は安山岩製の小型の水磨礫を素材に用い、右側面から上面に二次加工を施し整形する。滑面や研磨面は認められず、側面には鉢巻状に溝痕が集中する。

ストーンリタッチャー (第159図261・262)

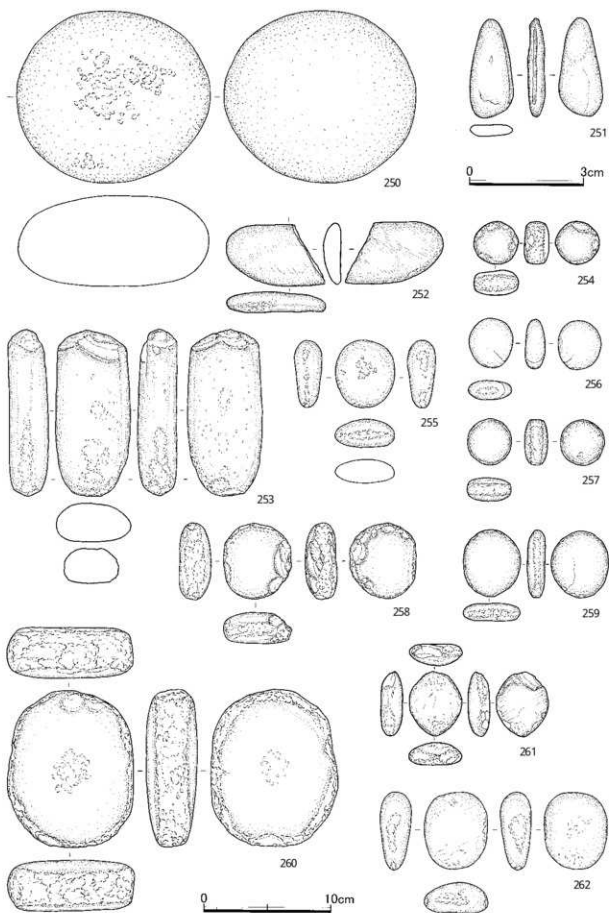
261は小型の水磨礫を素材に用いており、周囲は二次加工により整形する。肩部には溝痕が集中して認められる。素材の平坦面は滑面を有し、鼠歯状痕が顕著である。262は水磨礫を素材に用いる。全面に滑面を有し、側面の軸上には溝痕が集中する。両面の体部下半には鼠歯状痕、擦痕が集中して認められる。261は石材に砂岩を用い、262は石材不明である。

砥石 (第160図263～266)

263は非常に大型の原礫を素材に用いる。下面は折断面となっており、二次加工が施される。下面以外はほぼ全面砥面で主軸に沿った研磨痕が溝状を呈するものも認められる。本遺跡で最大級の大きさである。264は板状円礫を素材に用いる。右側面は折断面平坦面は砥面となる。砥面の線状の研磨痕は基本的に長軸方向へ延びる。265は大型の原礫を素材に用いる。右側面以外は折断面もしくは欠損している。正面のやや右端で稜をもって下方に屈曲するため石皿のような断面形状を呈する。平坦面の中央から左端にかけて滑面を有し、裏面の平坦面にも滑面を有する。表面の平坦面には平行する4本の線と直行する線が描かれている。266は大型の原礫を素材に用い、端部の立ち上がりにより石皿状の断面形状を呈する。側縁は敲打整形が施され円形に整形する。表面の平坦面には滑面を有し、擦痕が観察できる。また、わずかに溝状の研磨痕も認められる。裏面の平坦部は丁寧な研磨による溝が不定方向に交差する。砥石、台石、石皿の兼用石器と考えられる。石材はすべて砂岩製である。

台石 (第161図268・270)

268は板状円礫を素材に用いる。平坦面には溝痕の集中により凹み状を呈するが、凹石ほどの凹みは認められない。270は掌大の円礫を素材に用いる。平坦面には滑面を有し、体部中央には溝痕が集中して認められる。石材はすべて砂岩である。



第159図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器発 (250・252～262 S = 1 / 3, 251 S = 1 / 1)

269は板状岩片を素材に用いる。側面は二次加工により隅丸長方形に整形している。平坦面には滑面を有し、溝痕が認められる。また、直線的な研磨痕も認められ、砥面としても利用している。砥石との兼用石器と考えられる。270は拳大の円礫を素材に用いる。平坦面には滑面を有し、体部中央には溝痕が集中して認められる。石材はすべて砂岩製である。

石錘（第161図271～273）

271～273は水磨礫を素材に用いる。本遺跡では収穫具としての機能をもつ石器群の出土が多い中で特異な石器である。

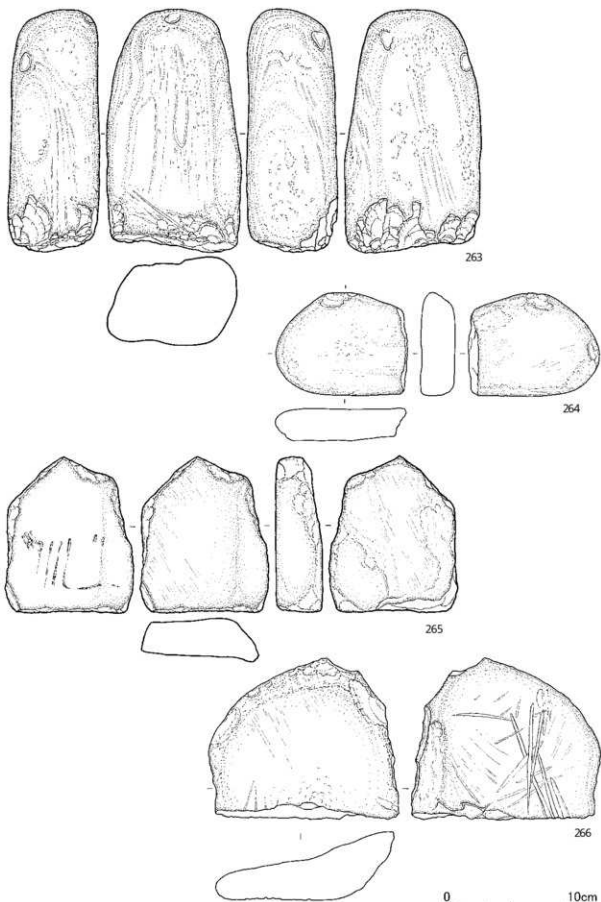
271・272は素材の短軸に敲打整形による挟りが左右対称に施される。滑面を有しており、272は体部中央や側面の主軸上に溝痕が集中することから、磨石/敲石B類の転用品と思われる。273は素材の長軸に敲打整形による挟りが左右対称に施される。いずれも重さは1 kg以下で、出土量は非常に少ない。石材は272の砂岩を除いて安山岩を用いる。

円盤状石器（第161図274～276）

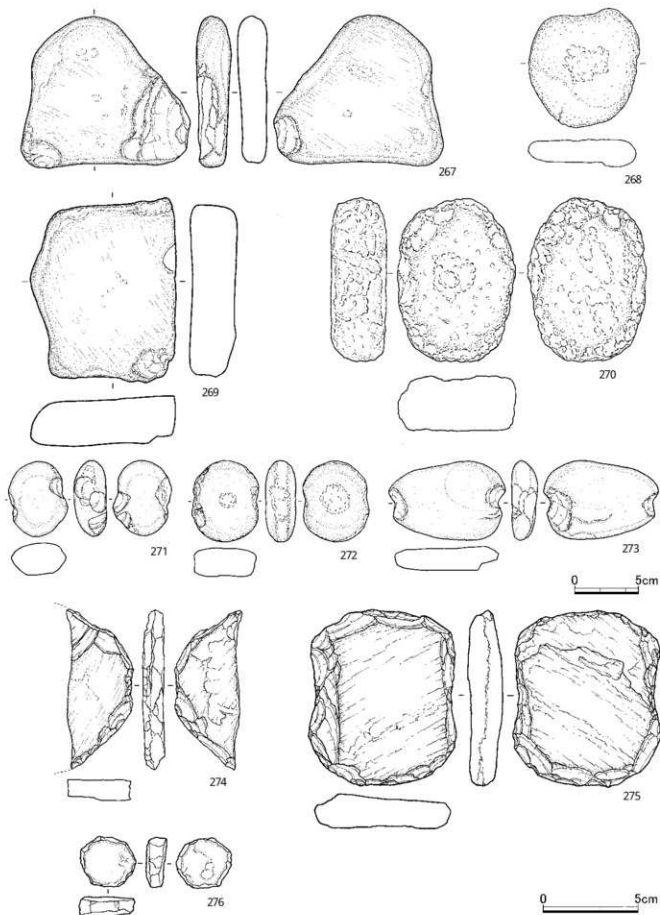
274・275は板状岩片を素材に用いる。周縁に敲打による二次加工を施し整形する。研磨痕や擦痕などは認められない。276は小型板状岩片を素材に用いる。周縁に急角度加工を施し円形に整形する。平坦面は自然面で研磨痕や擦痕などは認められない。274は砂岩、275は結晶片岩、276は安山岩を石材に用いる。

石皿（第162図267・269・277・278）

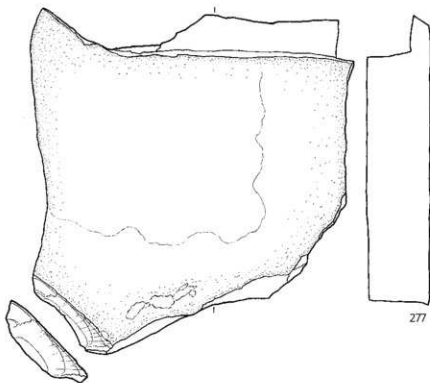
267は大型の扁平円礫を素材に用いる。全面に滑面を有し、平坦面には溝痕が認められる。表面には直線的な研磨痕が認められ、砥石との兼用石器と考えられる。269は板状岩片を素材に用いる。側面は二次加工により隅丸長方形に整形している。平坦面には滑面を有し、溝痕が認められる。また、直線的な研磨痕も認められ、砥面としても利用している。台石や砥石との兼用石器と考えられる。277は板状岩片を素材に用いる。表面の平坦面は滑面であるが、裏面は節理面が残存する。左下端は折断により整形される。平坦面に溝痕や擦痕は認められない。278は板状岩片を素材に用いる。左側面は自然面を残存するが、他の側面は折断により整形する。表面は滑面、溝痕が認められる。特に右端の突き出した面はやや凹状となり丸みを帯びた研磨面が認められる。裏面上端は敲打整形が施され、平坦面にも滑面や溝痕が認められる。石材は277の安山岩を除いて砂岩を用いる。



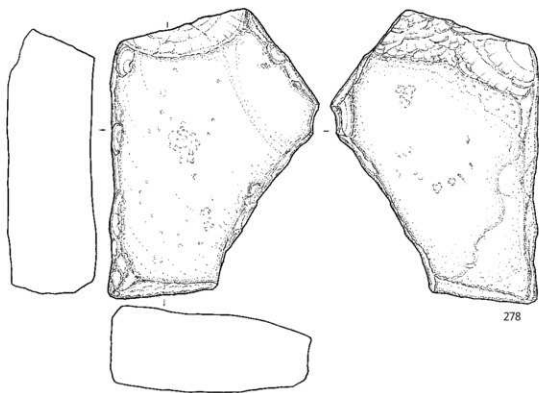
第160図 縄文時代後期—弥生時代前期の石器③ (S = 1/3)



第161図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑨ (267～273 S = 1 / 3, 274～276 S = 1 / 2)



277



278

0 10cm

第162図 縄文時代後期一弥生時代前期の石器⑤ (S = 1 / 3)

第63表 B・C区Ⅲa・Ⅲb層石器計測表①

図	番号	器種	石材	地区	層位	グリッド	注記番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
144	133	石鏃未製品	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲa	Q-12	B:0949	3.3	2.9	1.1	8.6
144	134	石鏃未製品	黒曜石A	B	Ⅲa	S-15	B:3057	3.0	2.7	0.5	2.5
144	135	石鏃未製品	黒曜石A	B	Ⅲa	Q-14	B:2429	1.8	2.8	0.4	2.0
144	136	石鏃	黒曜石A	B	Ⅲb	R-11	B:3704	1.5	0.9	0.4	0.4
144	137	石鏃	黒曜石A	C	Ⅲa	V-5	C:0042	1.5	1.2	0.3	0.3
144	138	石鏃	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲa	T-12	B:1300	2.1	1.6	0.3	0.6
144	139	石鏃	黒曜石C	B	Ⅲb	V-11	B:6720	(2.0)	(1.5)	0.5	1.0
144	140	石鏃	黒曜石A	B	Ⅲb	Q-13	B:2086	2.5	(2.1)	0.5	1.2
144	141	石鏃	黒曜石A	B	Ⅲb	S-14	B:4031	1.8	2.0	0.4	0.9
144	142	石鏃	黒曜石A	B	Ⅲb	Q-12	B:4537	2.0	1.7	0.3	0.8
144	143	石鏃	黒曜石A	B	Ⅲa	Q-13	B:1835	2.2	1.7	0.4	1.1
144	144	石鏃	黒曜石A	B	Ⅲb	P-13	B:4886	(2.2)	1.9	0.3	1.0
144	145	石鏃	黒曜石A	C	Ⅲa	V-4	C:0535	2.4	1.5	0.3	1.0
144	146	石鏃	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲa	R-12	B:0650	5.3	4.8	1.6	29.7
144	147	石鏃	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲa	P-12	B:0519	4.2	3.8	1.8	12.2
144	148	石鏃	黒曜石A	B	Ⅲa	R-14	B:3205	3.6	2.9	0.9	7.1
144	149	種鏃	砂岩	C	Ⅲb	Q-11	C:0969	4.3	1.6	1.4	13.4
144	150	楔形石器	黒曜石A	B	Ⅲa	U-11	B:0291	2.9	1.6	0.5	1.8
144	151	楔形石器	黒曜石A	B	Ⅲb	Q-14	B:5391	2.2	1.3	0.9	2.2
144	152	つまみ形石器	黒曜石A	B	Ⅲb	P-14	B:6620	3.0	1.6	0.4	1.1
144	153	つまみ形石器	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲa	R-12	B:1737	3.4	1.8	0.5	2.1
144	154	形器	黒曜石A	C	Ⅲa	S-8	C:0104	2.9	1.5	0.8	3.5
144	155	形器	黒曜石A	B	Ⅲb	Q-14	B:6588	4.2	2.4	1.2	7.0
144	156	形器	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲb	Q-14	B:2896	3.1	4.2	1.4	14.8
144	157	形器	黒曜石A	B	Ⅲb	Q-14	B:5263	2.8	1.4	0.9	2.7
145	158	石匙	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲa	P-14	B:1601	9.3	5.4	1.2	59.7
145	159	播器/削器B類	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲb	U-12	B:6806	9.9	4.2	1.5	43.0
145	160	播器/削器C類	黒曜石A	B	Ⅲa	P-14	B:1580	1.5	2.7	0.6	1.8
145	161	播器/削器B類	黒曜石A	B	Ⅲb	P-15	B:4935	2.2	3.4	0.7	3.6
145	162	播器/削器C類	黒曜石A	C	Ⅲb	V-8	C:1140	2.7	3.0	1.4	8.2
145	163	播器/削器C類	黒曜石A	B	Ⅲb	Q-12	B:4153	2.2	1.4	0.6	1.7
145	164	播器/削器C類	黒曜石A	B	Ⅲb	U-11	B:6336	3.6	1.6	0.5	1.8
145	165	播器/削器D類	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲa	P-14	B:1686	8.6	2.7	1.1	26.2
145	166	播器/削器D類	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲb	Q-14	B:3827	4.6	5.2	1.4	50.4
145	167	播器/削器D類	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲb	P-14	B:5046	3.6	6.5	1.2	27.1
146	168	播器/削器B類	黒曜石A	C	Ⅲb	R-9	C:0936	2.3	3.0	1.1	6.1
146	169	播器/削器A類	黒曜石A	B	Ⅲb	R-11	B:4314	2.4	3.2	0.7	3.6
146	170	播器/削器B類	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲa	Q-12	B:0959	5.5	2.6	0.7	11.4
146	171	播器/削器C類	黒曜石A	B	Ⅲb	Q-13	B:6564	4.1	2.3	1.0	5.6
146	172	播器/削器B類	黒曜石A	C	Ⅲa	R-11	C:0263	2.9	1.2	0.6	2.0
146	173	播器/削器B類	黒曜石A	B	Ⅲb	U-11	B:6741	2.0	3.3	1.5	6.7

第64表 B・C区Ⅲa・Ⅲb層石器計測表②

図	番号	器種	石材	地区	層位	グリッド	注記番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
147	174	播器/削器D類	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲb	Q-11	B:0122	4.4	5.6	1.8	51.9
147	175	播器/削器D類	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲa	Q-14	B:5224	5.1	5.9	1.7	51.9
147	176	播器/削器D類	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲa	R-12	B:0675	4.6	8.2	1.4	37.6
147	177	播器/削器D類	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲb	Q-13	B:5433	3.6	7.2	1.6	31.0
148	178	播器/削器D類	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲa	R-11	B:0440	6.0	8.7	2.5	99.1
148	179	播器/削器D類	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲb	R-12	B:4513	4.0	9.6	2.2	76.2
148	180	播器/削器D類	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲa	U-14	B:3558	5.3	8.1	2.0	75.7
148	181	播器/削器D類	無斑晶質玄武岩	C	Ⅲb	U-9	C:0880	5.8	12.6	3.8	228.8
149	182	石胞丁様石器	結晶片岩	B	Ⅲa	Q-14	B:2325	4.9	6.0	0.7	20.1
149	183	石胞丁様石器	砂岩	B	Ⅲb	Q-12	B:4179	5.2	6.0	1.0	41.3
149	184	石胞丁様石器	砂岩	B	Ⅲb	Q-14	B:2912	5.8	8.6	1.6	80.3
149	185	石胞丁様石器	砂岩	B	Ⅲb	Q-14	B:2852	5.7	6.3	0.8	38.3
149	186	石胞丁様石器	不明	C	Ⅲb	U-9	C:0881	6.1	9.8	0.8	51.0
149	187	石胞丁様石器	安山岩	B	Ⅲa	Q-14	B:3022	4.9	9.3	0.9	48.9
149	188	石胞丁様石器	安山岩	C	Ⅲb	U-9	C:0597	7.6	12.4	1.7	191.0
150	189	磨製石胞丁	不明	B	Ⅲb	R-12	B:4432	2.1	5.1	0.8	15.6
151	190	原石	黒曜石A	B	Ⅲb	P-13	B:4883	4.4	6.5	2.8	84.4
151	191	原石	黒曜石A	C	Ⅲb	Q-11	C:0964	3.2	5.6	3.1	56.7
151	192	石核	黒曜石A	B	Ⅲb	Q-13	B:5468	2.8	4.8	2.0	22.8
151	193	原石	黒曜石A	B	Ⅲa	Q-14	B:2418	2.4	3.1	2.5	16.7
151	194	石核	黒曜石A	B	Ⅲb	U-14	B:6886	2.2	1.8	1.8	7.3
151	195	石核	黒曜石A	B	Ⅲb	Q-12	B:4691	2.5	3.1	1.6	11.2
151	196	石核	黒曜石A	B	Ⅲa	R-15	B:2269	1.8	1.7	1.8	6.2
151	197	石核	黒曜石A	B	Ⅲb	U-13	B:6825	2.4	2.4	1.9	8.5
151	198	石核	黒曜石A	B	Ⅲb	Q-13	B:4879	2.6	2.9	3.1	20.0
151	199	石核	黒曜石A	B	Ⅲb	Q-13	B:3135	1.2	2.2	1.8	4.6
151	200	石核	黒曜石A	B	Ⅲb	P-14	B:4980	2.1	2.5	1.5	7.1
151	201	石核	黒曜石A	B	Ⅲa	Q-15	B:2488	2.2	3.4	1.7	11.5
152	202	石核	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲb	Q-13	B:2084	8.6	6.4	2.6	143.3
152	203	石核	無斑晶質玄武岩	C	Ⅲa	U-9	C:0404	4.0	4.5	1.7	32.8
152	204	石核	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲb	R-13	B:0760	6.1	4.0	2.0	41.8
152	205	石核	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲb	S-14	B:3184	7.1	10.0	2.3	179.7
153	206	剥片	黒曜石A	B	Ⅲa	R-13	B:0816	4.9	1.8	1.1	6.8
153	207	使用痕剥片	黒曜石A	C	Ⅲa	T-9	C:0368	4.0	2.0	1.2	3.5
153	208	使用痕剥片	無斑晶質玄武岩	C	Ⅲb	S-9	C:0563	12.0	6.4	3.6	203.7
153	209	剥片	無斑晶質玄武岩	B	Ⅲb	Q-12	B:4553	4.8	2.1	0.7	6.4
153	210	剥片	黒曜石A	C	Ⅲa	V-7	C:0286	4.0	1.0	0.5	1.0
153	211	使用痕剥片	黒曜石A	B	Ⅲb	P-14	B:5063	1.6	1.0	0.3	0.5
153	212	二次加工剥片A類	黒曜石A	C	Ⅲb	U-9	C:0778	3.7	2.8	0.9	7.8
153	213	二次加工剥片B類	黒曜石A	B	Ⅲb	P-13	B:4903	2.6	1.9	0.7	2.9
153	214	二次加工剥片A類	無斑晶質玄武岩	C	Ⅲa	U-4	C:0008	2.8	1.4	0.4	1.7

第65表 B・C区Ⅲa・Ⅲb層石器計測表③

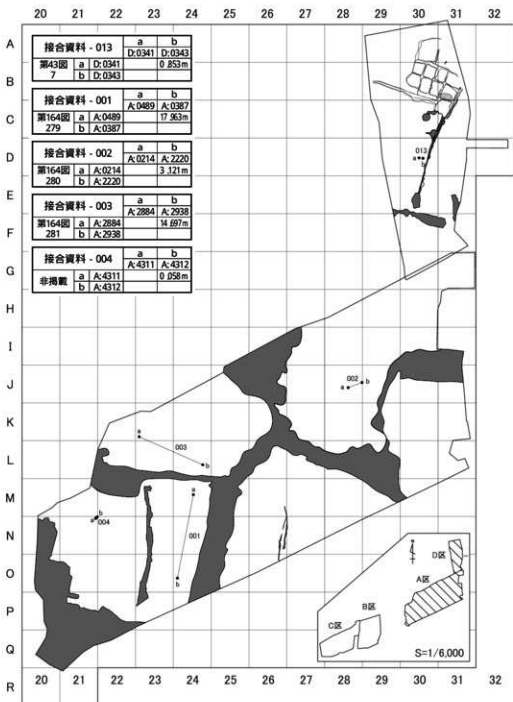
図	番号	器種	石材	地区	層位	グリッド	注記番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
153	215	二次加工剥片A類	無珣晶質玄武岩	B	Ⅲa	Q-14	B:2824	3.0	1.4	0.5	1.7
153	216	二次加工剥片B類	黒曜石A	C	Ⅲb	Q-11	C:0993	1.8	3.0	0.8	2.9
153	217	二次加工剥片B類	黒曜石A	B	Ⅲa	R-15	B:2280	2.2	1.2	0.5	0.6
153	218	二次加工剥片B類	黒曜石A	B	Ⅲb	Q-15	B:6595	2.6	1.6	0.5	1.5
153	219	二次加工剥片B類	黒曜石A	B	Ⅲb	Q-11	B:4404	2.7	1.5	0.5	1.2
153	220	二次加工剥片B類	黒曜石A	B	Ⅲa	P-15	B:2165	2.3	3.6	0.9	5.4
153	221	二次加工剥片B類	黒曜石A	C	Ⅲa	U-9	C:0466	2.1	0.9	0.5	0.7
153	222	二次加工剥片B類	黒曜石A	B	Ⅲb	S-14	B:6897	1.5	1.0	0.6	0.8
153	223	二次加工剥片B類	黒曜石A	B	Ⅲb	P-14	B:5590	1.7	1.2	0.3	0.5
153	224	二次加工剥片B類	黒曜石A	B	Ⅲb	R-12	B:4427	3.3	1.3	0.5	1.7
153	225	二次加工剥片B類	黒曜石A	B	Ⅲb	S-12	B:6067	2.6	1.7	0.9	3.4
153	226	二次加工剥片B類	黒曜石A	B	Ⅲb	R-11	B:4268	2.7	1.5	0.5	1.5
153	227	二次加工剥片B類	黒曜石A	B	Ⅲb	R-11	B:4301	1.8	1.1	0.4	0.6
153	228	二次加工剥片B類	黒曜石A	B	Ⅲb	Q-14	B:5160	1.0	0.5	0.2	0.5
154	229	打製石斧B類	安山岩	B	Ⅲb	U-14	B:6848	13.3	9.0	2.6	375.1
154	230	打製石斧B類	安山岩	B	Ⅲb	R-13	B:6915	11.9	8.8	2.7	349.3
154	231	打製石斧C類	安山岩	B	Ⅲb	P-13	B:4923	8.6	5.7	2.0	125.2
154	232	打製石斧C類	安山岩	B	Ⅲb	S-13	B:6077	10.0	5.8	1.7	100.4
155	233	打製石斧B類	安山岩	B	Ⅲb	Q-14	B:5313	11.0	6.0	1.2	132.5
155	234	打製石斧B類	安山岩	B	Ⅲa	P-14	B:1668	8.7	6.1	2.6	177.5
155	235	打製石斧A類	安山岩	B	Ⅲa	U-12	B:3410	10.3	5.3	2.3	139.0
155	236	打製石斧B類	安山岩	B	Ⅲb	S-15	B:3037	12.2	6.6	2.4	225.2
155	237	打製石斧A類	安山岩	B	Ⅲb	Q-11	B:0131	10.6	4.6	2.7	118.8
155	238	打製石斧A類	安山岩	B	Ⅲb	U-13	B:3448	9.3	5.1	2.0	110.9
156	239	打製石斧A類	安山岩	B	Ⅲb	P-14	B:5025	11.9	5.3	2.0	128.5
156	240	打製石斧A類	安山岩	B	Ⅲb	P-14	B:3645	9.2	4.4	2.2	78.2
156	241	打製石斧剥片	安山岩	C	Ⅲb	U-9	C:0779	5.7	8.5	1.2	46.7
157	242	磨製石斧A類	結晶片岩	B	Ⅲa	P-14	B:1576	10.9	4.7	3.0	267.8
157	243	磨製石斧A類	頁岩	B	Ⅲb	R-13	B:3169	11.6	5.2	2.5	213.5
157	244	磨製石斧A類	頁岩	C	Ⅲb	W-5	C:0692	11.1	5.1	2.6	206.7
157	245	磨製石斧A類	結晶片岩	C	Ⅲb	U-9	C:0874	11.4	5.9	2.3	244.7
157	246	磨製石斧A類	頁岩	B	Ⅲb	P-12	B:4798	10.8	4.9	2.7	189.9
157	247	磨製石斧C類	安山岩	B	Ⅲb	P-14	B:5070	8.6	5.8	1.2	75.3
158	248	磨製石斧C類	頁岩	B	Ⅲb	R-14	B:5921	12.1	9.4	1.6	244.6
158	249	磨製石斧C類	安山岩	B	Ⅲa	R-13	B:1872	10.1	8.6	1.8	224.7
159	250	磨石/敲石A類	砂岩	B	Ⅲb	P-12	B:5533	13.5	15.0	7.1	2200.0
159	251	磨石/敲石A類	不明	B	Ⅲb	R-14	B:5914	2.6	1.2	0.4	1.6
159	252	磨石/敲石B類	砂岩	B	Ⅲb	Q-14	B:5308	4.9	7.3	1.6	83.2
159	253	磨石/敲石B類	砂岩	B	Ⅲa	P-13	B:1492	13.4	6.0	3.2	364.7
159	254	磨石/敲石B類	石英	C	Ⅲb	R-11	C:0641	3.4	3.5	2.0	34.8
159	255	磨石/敲石B類	砂岩	B	Ⅲb	Q-14	B:5135	5.4	4.7	2.2	75.8

第66表 B・C区Ⅲa・Ⅲb層石器計測表④

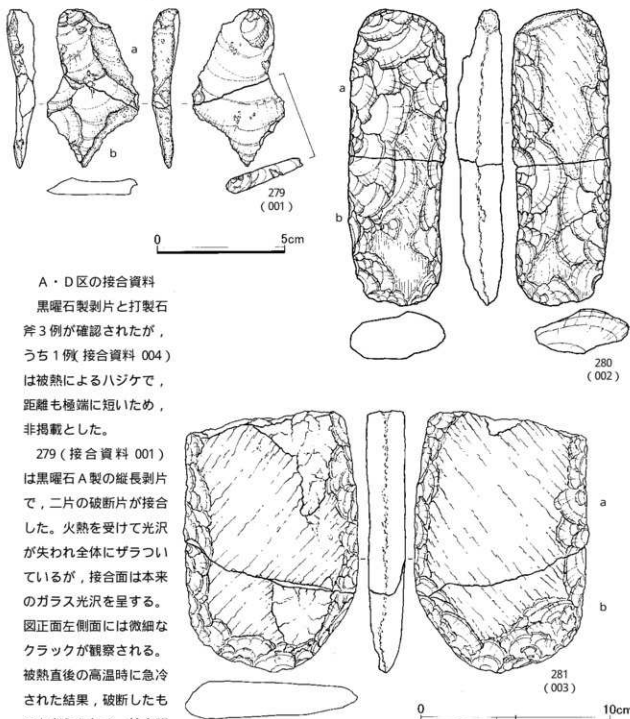
図	番号	器種	石材	地区	層位	グリッド	注記番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
159	256	磨石 / 敲石B類	砂岩	B	Ⅲb	Q-15	B:2587	3.9	3.4	1.5	30.5
159	257	磨石 / 敲石B類	砂岩	B	Ⅲb	Q-11	B:0026	3.6	3.5	1.8	34.3
159	258	磨石 / 敲石C類	安山岩	B	Ⅲb	P-11	B:0106	6.0	5.4	2.5	124.5
159	259	磨石 / 敲石B類	砂岩	C	Ⅲb	T-9	C:0904	5.2	4.6	1.5	49.9
159	260	磨石 / 敲石B類	砂岩	B	Ⅲb	Q-14	B:3826	12.3	10.0	4.1	800.0
159	261	ストーンリタッチャー	砂岩	B	Ⅲb	P-14	B:5078	5.2	4.2	1.3	44.8
159	262	ストーンリタッチャー	不明	B	Ⅲb	U-14	B:6864	6.2	5.0	2.5	110.6
160	263	砥石	砂岩	B	Ⅲb	R-11	B:3715	19.5	10.8	7.3	2150.0
160	264	砥石	砂岩	B	Ⅲb	Q-13	B:1997	8.1	10.4	2.8	368.2
160	265	砥石	砂岩	B	Ⅲb	R-11	B:1995	12.5	10.3	3.7	600.0
160	266	砥石	砂岩	B	Ⅲb	R-12	B:2584	12.7	15.0	5.4	1000.0
161	267	石皿	砂岩	C	Ⅲb	V-7	C:1288	12.0	13.4	2.8	500.0
161	268	台石	砂岩	B	Ⅲb	Q-13	B:4878	9.4	8.8	2.2	214.7
161	269	石皿	砂岩	C	Ⅲb	R-9	C:0559	14.6	11.5	4.0	1000.0
161	270	台石	砂岩	B	Ⅲb	Q-12	B:4580	12.9	9.3	4.3	800.0
161	271	石鎌	安山岩	C	Ⅲa	V-8	C:0317	6.0	4.7	5.6	95.4
161	272	石鎌	砂岩	C	Ⅲa	U-4	C:0242	6.4	5.3	2.4	134.6
161	273	石鎌	安山岩	C	Ⅲb	V-8	C:1260	6.3	9.2	2.1	136.7
161	274	円盤状石器	砂岩	B	Ⅲa	Q-14	Q-14-N	8.5	3.4	1.2	41.7
161	275	円盤状石器	結晶片岩	B	Ⅲb	Q-13	B:5395	9.3	7.8	1.9	185.3
161	276	円盤状石器	安山岩	B	Ⅲa	Q-14	Q-14-d	2.7	3.0	1.1	10.1
162	277	石皿	安山岩	B	Ⅲa	Q-13	B:1807	27.3	25.7	5.2	5800.0
162	278	石皿	砂岩	B	Ⅲb	R-12	B:1717	16.4	23.0	6.8	3600.0

接合資料 (第163～168図)

接合資料は、石器群の全体量から考えて潜在的に多数確認される可能性がある。しかし主用石材の黒曜石は個体別の分離作業が困難であるため積極的な接合作業は実施していない。以下では整理過程において偶然に確認されたⅢ a・Ⅲ b層出土の接合資料12例のうち9例を取り上げる。なお接合資料総数は、D区の石織(V b層出土で器体部と脚部片の接合：第43図7)を含めると、計13例となる。



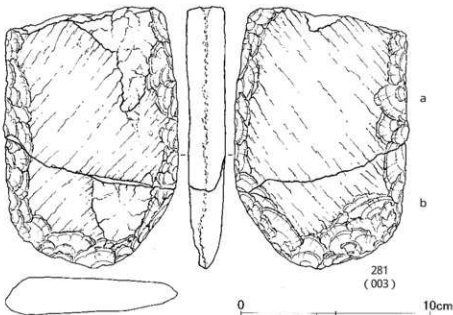
第163図 A・D区石器接合資料分布図 (S = 1/800)



A・D区の接合資料

黒曜石製剥片と打製石斧3例が確認されたが、うち1例(接合資料004)は被熱によるハジケで、距離も極端に短いため、非掲載とした。

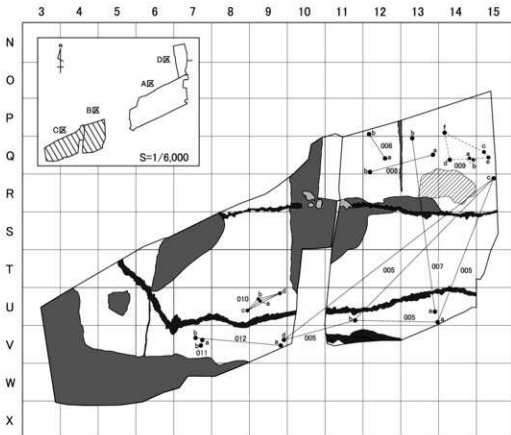
279(接合資料001)は黒曜石A製の縦長剥片で、二片の破断片が接合した。火熱を受けて光沢が失われ全体にザラついているが、接合面は本来のガラス光沢を呈する。図正面左側面には微細なクラックが観察される。被熱直後の高温時に急冷された結果、破断したものと考えられる。接合距離は17.963mを測る。



第164図 縄文時代後期一弥生時代前期の石器等(279 S=2/3, 280・281 S=1/2)

280(接合資料002)は、安山岩の板状節理岩片を素材とする細身長身の打製石斧A類である。器軸に直交する方向で中央部から破断した資料が接合した。刃部側は稜線部が磨耗しており、部分的に刃部再生加工が施されている。接合距離は3.121mを測る。

281(接合資料003)も安山岩の板状節理岩片を素材とする打製石斧で、B類に分類される。刃部側の破片(b)は節理面の一部が被熱によってハジケており、裏面側の節理面には黒色化が認められる。接合距離は14.697mと長く、重量の点でも自然営力による移動とは考えにくい。破断した後、何らかの目的で人為的に運ばれ、移動先で刃部側破片が被熱したものと考えられる。



第165図 B・C区石器接合資料分布図 (S = 1/800)

接合資料 - 005		a	b	c	d
		B:4001	B:1234	B:2260	C:0390
第166図 283	a	B:4001	17.651m	32.627m	32.721m
	b	B:1234		41.955m	15.614m
	c	B:2260			55.987m
	d	C:0390			

接合資料 - 006		a	b
		B:4240	B:4048
第168図 285	a	B:4240	6.149m
	b	B:4048	

接合資料 - 007		a	b
		B:6416	B:1998
第168図 284	a	B:6416	36.963m
	b	B:1998	

接合資料 - 008		a	b
		B:5453	B:4544
第168図 287	a	B:5453	13.802m
	b	B:4544	

接合資料 - 009		a	b
		B:5182	B:5170
第168図 288	a	B:5182	0.732m
	b	B:5170	

接合資料 - 010		a	b	c	d
		C:0423	C:0594	C:0340	C:0454
第168図 286	a	C:0423	0.602m	3.343m	4.599m
	b	C:0594		3.338m	4.757m
	c	C:0340			7.784m
	d	C:0454			

接合資料 - 011		a	b
		C:1098	C:1230
非掲載	a	C:1098	1.201m
	b	C:1230	

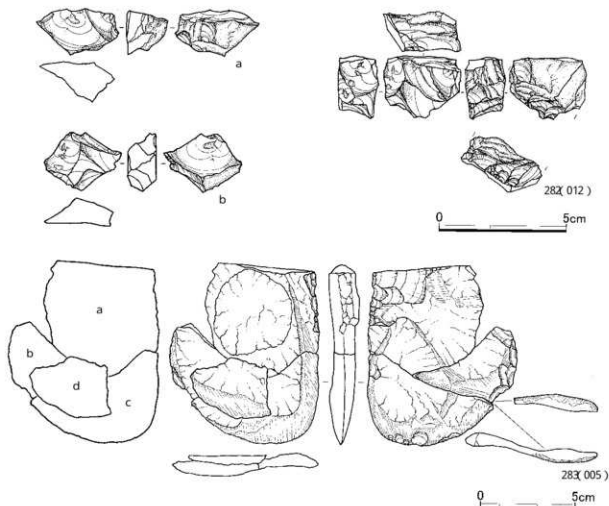
接合資料 - 012		a	b
		C:0387	C:0331
第166図 282	a	C:0387	18.884m
	b	C:0331	

B・C区の接合資料

石核 + 剥片 1例, 磨製石斧C類 1例, 打製石斧剥片 1例, 砥石 3例, 石皿 2例の計 8例がある。

282 (接合資料 012) は石核(a)と剥片(b)が剥離面で接合した資料である。接合後の状態は、打面転移を繰り返して、多方向からの剥離面で覆われる石核Ⅲ類となる。最終的には図上面の剥離面を打面として剥片(b)を剥出しているが、石核の分割に近く、石核・剥片のサイズには大差がない。素材は不純物を含む黒曜石Aの角礫である。石核・剥片とも接合面(最終剥離面)の縁辺には微細剥離痕が観察され、接合距離も18.884mと人為的な移動を示唆する長さである。

283 (接合資料 005) は、刃部付近を研磨した薄身の磨製石斧C類で、4点の破片が接合した。石材は安山岩である。全体に鈍い赤色化や淡い黒色化が見られ、被熱による破碎・ハジケと考えられる。総破片数は10点以上になる可能性が高い。磨製石斧としての機能は完全に喪失しているが、破片b・cの破断面(接合面)には研磨痕が観察され、破片bでは図裏面側にも破断後の新たな研磨が施されている。各点間距離は最短15.614m, 最長55.987m, 平均32.726



第166図 縄文時代後期一弥生時代前期の石器② (282 S = 2/3, 283 S = 1/2)

mを計り、B区東端一南端・C区南東端にかけて広い範囲に分布する。B・C区では2条の雨裂が東西方向に走っており、破片a・b・dの3点は雨裂に沿うように、a・b間17.451m、b・d間15.614mという近似した間隔で分布している。一方破片cは調査区の北側に位置しており、両者は地形的にも距離的にも懸絶している。以上のことから本例は人為的な移動を示していると考えられる。破片cの被熱度が最も強いことから、cの付近で被熱した後、a・b・dが運び出されたものと推定される。

284 (接合資料 007) は、砂岩の扁平水磨礫を素材とする砥石で、台石としても兼用されている。4片以上に破断していると推定されるが、接合したのは2片のみで、他の破片は見いだせなかった。出土グリッドはU 13a)とQ 13b)でB区の南側と北側に分かれており、点間距離36.963mを測る。この分布も雨裂を越えており、接合資料 005と同様に理解すべきであろう。

285 (接合資料 006) は砂岩製の扁平な板状水磨礫を素材とする砥石である。中央で破断した2片が6.419mの距離で接合した。破断面は鋭利で、再使用痕・再加工痕は認められない。

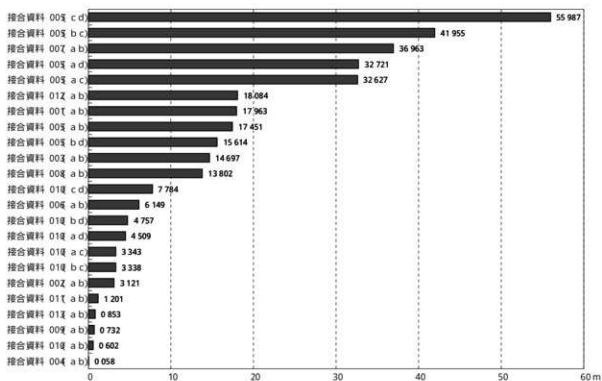
286 (接合資料 010) は砂岩製の板状岩片を素材とする石皿である。4片が接合したが、未発見の破片が多数存在するものと思われる。最短点間距離は0.602m (a・b間)、最長は7.784m (c・d間)で、1グリッド程度の比較的狭い範囲にまとまっている。このうち破片dは破断した後、層理面に沿って割れており、この面には再使用の痕跡が認められる。

287 (接合資料 008) は、砂岩の薄い板状岩片を素材とする砥石で 2 片が接合した。図正面側を主たる使用面(砥面)としているが、裏面側も部分的に使用されている。点間距離は13.802mを測る。破片bの右側縁には意図的な整形加工を施しているが、当初からの加工か再加工かは判然としない。

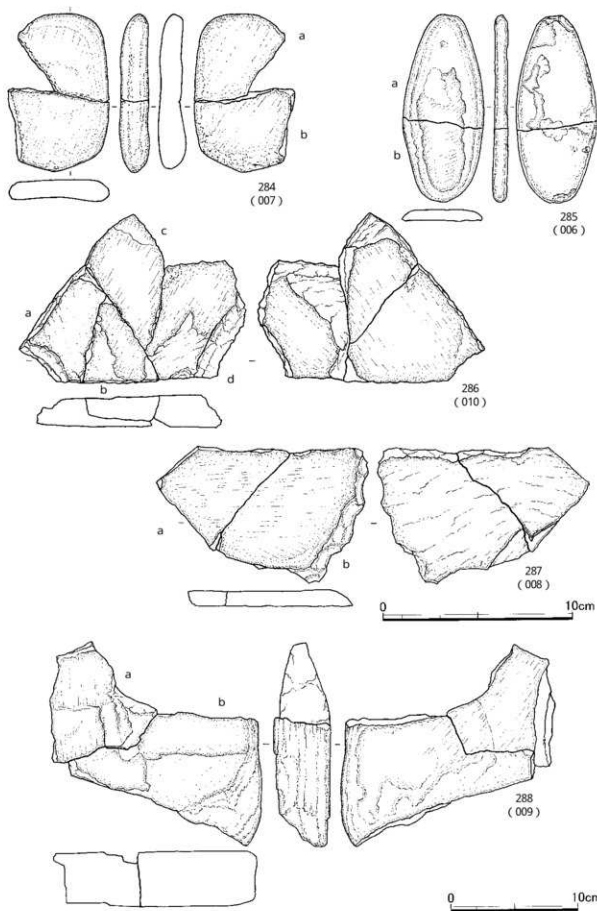
288 (接合資料 009) は、大型の板状水磨礫を素材とする砂岩製の石皿である。接合したのは 2 点で、ほかに非接合の同一個体と考えられる資料が 4 点ある。本来はかなり大型の石皿であったらしく、実測図で示すように両面が中央に向かって窪んでんでいる。両面の作業面を中心にクラックが見られ、部分的に淡赤色化を呈していることから、被熱による破砕と考えられる。接合した a・b の点間距離は0.732m、同一個体資料を含めた場合の最大距離は10.654mで、全体の平均は5.474mとなる。分布範囲はさほど広くなく、286 (接合資料 010) の石皿と類似した存在である。

小 結

接合分布の意味については、器種や重量、地形面の傾斜度など多角的な検討が必要だが、ここでは点間距離のグラフ(第167図)に基づいて検討したい。距離は(A)0.05~1m前後、(B)3~5m前後、(C)6~9m前後、(D)10~20m前後、(E)20m以上に大別される。最も距離が短い(A)は、自然営力による経年変化(移動)の可能性が高そうである。(B)・(C)は微妙な距離で判断が難しい。(B)程度の距離は自然営力による移動や被熱時の飛散という可能性もあるが、再利用例では意図的に運び出された結果が分布に反映されていることを考慮すべきであろう。(D)・(E)のような10m以上の距離は、人為性が濃厚である。とくに雨裂を跨ぐ形で分布するB・C区の接合資料は、破損した石器に対する再利用を示す事例として注目される。晩期の黒曜石製石器群は徹底的な剥片剥離が特徴的で、結果的に多量の遺物を残している。それは一見、乱暴かつ不経済であるかのような印象を受けるが、砥石や石皿など一部の器種では、積極的な再利用が行われていたことを示していると言える。



第167図 石器接合資料の点間距離グラフ



第168図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器③ (284～287 S = 1/2, 288 S = 1/3)

第G7表 石器接合資料座標値・点間距離一覽表

図	番号	接合 No	遺物番号	X座標値	Y座標値	Z座標値	接合距離 (m)						
164	279	001	a	A : 0489	- 28235 400	78356 236	223 216	b					
			b	A : 0387	- 28253 045	78352 869	223 965	17 963					
164	280	002	a	A : 0214	- 28212 770	78388 981	220 686	b					
			b	A : 2220	- 28211 672	78391 903	220 499	3 121					
164	281	003	a	A : 2884	- 28223 155	78344 776	223 526	b					
			b	A : 2938	- 28229 084	78358 224	222 655	14 697					
166	282	012	a	C : 0387	- 28308 251	78238 624	232 199	b					
			b	C : 0331	- 28306 659	78220 610	233 285	18 084					
166	283	005	a	B : 4001	- 28303 319	78271 801	228 975	b					
			b	B : 1234	- 28302 953	78254 354	230 349	17 451	32 627	32 721			
			c	B : 2260	- 28272 918	78283 647	229 832		41 955	15 614			
			d	C : 0390	- 28307 090	78239 298	231 856			55 987			
168	284	007	a	B : 6416	- 28301 111	78271 240	228 802	b					
			b	B : 1998	- 28264 461	78266 440	230 960	36 963					
168	285	006	a	B : 4340	- 28268 704	78260 695	231 413	b					
			b	B : 4048	- 28263 572	78257 307	231 861	6 149					
168	286	010	a	C : 0423	- 28298 873	78234 266	232 349	b					
			b	C : 0504	- 28298 428	78233 860	232 352	0 602	3 343	4 509			
			c	C : 0340	- 28300 873	78231 587	232 459		3 338	4 757			
			d	C : 0454	- 28297 222	78238 462	232 033			7 784			
168	287	008	a	B : 5453	- 28267 948	78270 826	230 585	b					
			b	B : 4544	- 28271 580	78257 510	231 580	13 802					
168	288	非掲載	009	a	B : 5182	- 28268 782	78278 640	230 053	b				
				b	B : 5170	- 28268 990	78279 342	229 959	0 732	3 294	4 264	3 943	7 669
				c	B : 2653	- 28267 363	78281 613	229 863		2 794	4 960	3 266	8 315
				d	B : 3102	- 28269 003	78274 382	230 396			7 415	1 503	9 265
				e	B : 3262	- 28268 518	78282 574	229 72				8 206	5 823
				f	B : 5072	- 28263 282	78273 295	230 604					10 654
非掲載	004	a	A : 4311	- 28240 235	78335 782	224 717	b						
		b	A : 4312	- 28240 210	78335 834	224 724	0 058						
非掲載	011	a	C : 1098	- 28307 110	78222 038	233 086	b						
		b	C : 1230	- 28308 270	78221 728	232 984	1 201						
43	7	013	a	D : 0341	- 28164 205	78403 959	220 914	b					
			b	D : 0343	- 28164 291	78404 808	220 726	0 853					

第68表 石器接合資料計測表

図	番号	接合 No	器種	石材	遺物番号	区	層	グリッド	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	
164	279	001	a	剥片	黒曜石 A	A : 0489	A	Ⅲ a	M - 24	3.9	3.3	1.1	9.2
		b	剥片	黒曜石 A	A : 0387	A	Ⅲ a	O - 24	3.7	3.6	0.9	6.2	
164	280	002	a	打製石斧	安山岩	A : 0214	A	Ⅲ b	J - 28	8.4	5.2	2.5	142.5
		b	打製石斧	安山岩	A : 2220	A	Ⅲ b	J - 28	7.3	5.1	2.4	118.9	
164	281	003	a	打製石斧	安山岩	A : 2884	A	Ⅲ b	K - 23	9.7	9.2	2.1	291.5
		b	打製石斧	安山岩	A : 2938	A	Ⅲ b	L - 24	6.0	8.9	1.9	104.9	
166	282	012	a	石核	黒曜石 A	C : 0387	C	Ⅲ a	V - 9	1.8	3.3	1.6	5.7
		b	剥片	黒曜石 A	C : 0331	C	Ⅲ a	V - 7	2.3	3.1	1.1	5.4	
166	283	005	a	磨製石斧	安山岩	B : 4001	B	Ⅲ b	U - 13	5.9	6.1	1.6	63.1
			b	磨製石斧	安山岩	B : 1234	B	Ⅲ a	U - 11	4.0	5.4	1.0	15.7
			c	磨製石斧	安山岩	B : 2260	B	Ⅲ a	R - 15	4.9	6.7	1.3	21.1
			d	磨製石斧	安山岩	C : 0390	C	Ⅲ a	V - 9	6.3	4.3	0.5	5.8
168	284	007	a	磨石 / 敲石 A 類	砂岩	B : 6416	B	Ⅲ b	U - 13	4.6	4.8	1.5	37.7
			b	磨石 / 敲石 A 類	砂岩	B : 1998	B	Ⅲ b	Q - 13	4.5	5.3	1.6	47.1
168	285	006	a	砥石	砂岩	B : 4240	B	Ⅲ b	Q - 12	6.0	4.2	0.8	24.9
			b	砥石	砂岩	B : 4048	B	Ⅲ b	P - 12	3.9	4.2	0.8	20.1
168	286	010	a	石皿	砂岩	C : 0423	C	Ⅲ a	U - 9	6.3	7.4	1.8	67.5
			b	石皿	砂岩	C : 0504	C	Ⅲ a	U - 9	4.7	4.0	1.4	25.6
			c	石皿	砂岩	C : 0340	C	Ⅲ a	U - 8	7.1	4.3	1.8	62.6
			d	石皿	砂岩	C : 0454	C	Ⅲ a	U - 9	6.8	5.4	1.8	79.9
168	287	008	a	砥石	砂岩	B : 5453	B	Ⅲ b	Q - 13	5.5	7.1	0.9	35.1
			b	砥石	砂岩	B : 4544	B	Ⅲ b	Q - 12	7.2	8.1	1.0	66.6
168	288	009	a	石皿	砂岩	B : 5182	B	Ⅲ b	Q - 14	9.6	8.5	4.2	900.0
			b	石皿	砂岩	B : 5170	B	Ⅲ b	Q - 14	10.6	15.3	4.5	
			c	石皿	砂岩	B : 2653	B	Ⅲ b	Q - 15				344.1
			d	石皿	砂岩	B : 3102	B	Ⅲ b	Q - 14				600.0
			e	石皿	砂岩	B : 3262	B	Ⅲ b	Q - 15				69.0
			f	石皿	砂岩	B : 5072	B	Ⅲ b	P - 14				800.0
非掲載	004	a	打製石斧	安山岩	A : 4311	A	Ⅲ b	N - 21	9.6	6.4	1.1	47.5	
		b	打製石斧	安山岩	A : 4312	A	Ⅲ b	N - 21	9.4	6.1	1.5	69.0	
非掲載	011	a	打製石斧剥片	安山岩	C : 1098	C	Ⅲ b	V - 7	5.4	3.1	0.9	17.3	
		b	打製石斧剥片	安山岩	C : 1230	C	Ⅲ b	V - 7	4.9	4.7	0.7	9.6	
43	7	013	a	打製石礫	黒曜石 A	D : 0341	D	V b	D - 30				
			b	打製石礫	黒曜石 A	D : 0343	D	V b	D - 30				

Ⅲ層以外の石器群

石鏃（第169図289～291）

289は肉厚の素材を横位に用い、両側縁から両面加工を施し整形する。下面は折断面となっており、基部は欠損する。290は両面に素材面を大きく残す剥片鏃である。周縁に両面加工を施し、先端部を作出している。基部は細かい両面加工により円形の抉りを施し脚部を作出している。291は粗い二次加工により全面覆われ、正三角形を呈する。基部は不明瞭であるが、浅い抉りを施している。石材は289の玄武岩を除いて黒曜石Aである。

石錐（第169図292・293）

292は頭部と錐部の境が明確で、錐部は両面両側縁からの二次加工により細長く作出し、断面形状は菱形を呈する。頭部も二次加工を施し扁平に整形している。293は頭部と錐部が一定の幅となる棒状錐である。全面に二次加工が施される。錐部の断面形状は菱形を呈する。上面は折断面となっており、頭部が作出されていた可能性も考えられる。石材は玄武岩を用いる。

石核（第169図294）

294は黒曜石Aの亜角礫を素材に用いる。上面の調整打面から作業面を1面設定し、同一方向の剥離を施している。裏面に自然面を残しており、形状は扁平形を呈する。典型的な1類である。

彫器（第169図295）

295は石材に黒曜石Aを用いる。右側縁に1条の櫛状剥離を施し、この面を打面とする3条の櫛状剥離により彫刀面を作出している。

使用痕剥片（第169図296・297）

296は泥岩製の剥片を素材に用い、右側縁に微細剥離痕が認められる。297は鉄石英製の剥片を素材に用いる。右側縁に微細剥離痕が認められる。

泥岩・鉄石英ともに本遺跡からの出土は極めて少ない。

楔形石器（第169図298・299）

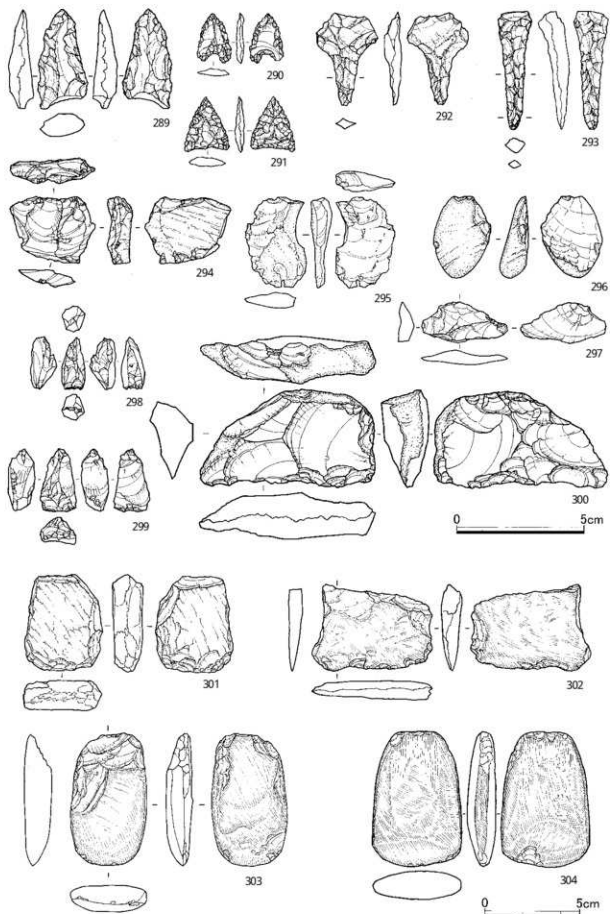
298・299は上面を打面として剥離を行うが、下面に剥離方向が逆になる剥離痕が認められる。下面は溝痕が集中しており、階段状の剥離痕が認められる。両極打法の痕跡で、縦断面は凸レンズ状を呈する。石材は黒曜石Aを用いる。

槌／削器D類（第169図300）

300は肉厚の剥片を素材に用いる。下縁には両面加工により分厚い直線的な刃部を作出し、上面には自然面と折断面により平坦面を作出する。ポリッシュといった使用痕は認められない。石材は玄武岩を用いる。

十字形石器？（第169図301）

301は板状岩片を素材に用いる。左側面は折断面となっているが、周縁は剥離痕が認められ方形に整形する。用途不明品である。石材は結晶片岩を用いる。



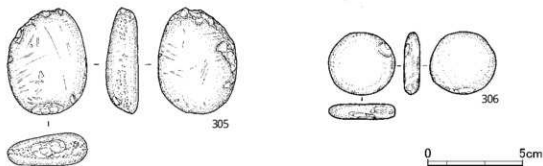
第169図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器⑨ (289～300 S = 2 / 3 , 301～304 S = 1 / 2)

石包丁様石器（第169図302）

302は安山岩製の板状岩片を素材に用いている。上面と左側面は折断し、右側面は両面加工により長方形に整形している。下面は研磨により直線的な両刃形の刃部を作出している。表裏面にも研磨痕が認められる。

磨製石斧B類（第169図303・304）

303は上面から左側縁上部に二次加工を施し基部を作出している。刃部は丁寧な研磨により片刃形の石ノミ状に作出するが、刃縁の両端は丸みを帯びる。304はやや刃部が幅広となる形態を呈する。全面を研磨したのち基部周辺に二次加工を施す。刃部は研磨によりやや弧状の片刃形を呈する。303・304ともに結晶片岩を石材に用いる。



第170図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器④ (S = 1 / 2)

ストーンリッター（第170図305）磨石 / 敲石A類（第170図306）

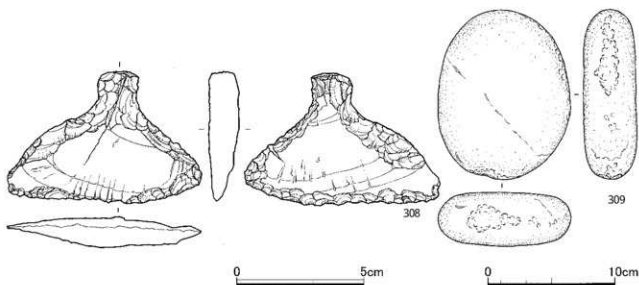
305は砂岩の水磨礪を素材に用い、上端から左側縁に二次加工により整形している。全面滑面となっており側面の肩部に潰痕が集中する。また、表裏面には鼠歯状痕が認められる。306は鶏卵大の水磨礪を素材に用いる。全面滑面となっており、側面の右下端に研磨痕が認められる。



第171図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器④ (S = 1 / 1)

玉（第171図307）

307は左側面がやや内湾する勾玉状の形態を呈する。全面に光沢をもつ研磨が施される。器面中央に直径約3mmの穿孔を施している。石材は不明だが、やや透明感のある淡青緑色を呈するもので、実見された数人の方からは朝鮮半島産アマソナイト（天河石）の可能性が高い、との御教示をいただいた。



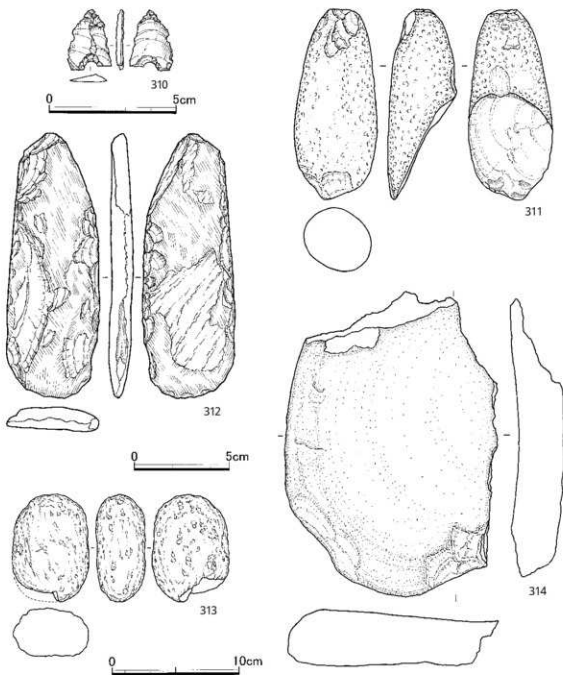
第172図 縄文時代後期一弥生時代前期の石器④ (308 S = 2 / 3 , 309 S = 1 / 3)

石匙 (第172図308)

308は横長の三角形を呈する石匙である。玄武岩製の横長剥片を素材に用い、素材の打面方向につまみを作出している。つまみの上面には自然面が残存する。三角形の形状を呈し、下面に両面加工による直線的な刃部を作出している。

磨石 / 敲石 B 類 (第172図309)

309は砂岩の水磨礫を素材に用い、全面に滑面が認められる。下面と上面肩部に溝痕が集中する。



第173図 縄文時代後期～弥生時代前期の石器④ (310 S = 2/3, 311・312 S = 1/2, 313・314 S = 1/3)

排土及び表面採集の石器 (第173図310～314)

310は黒曜石製の縦長剥片を素材に用い、両面に素材面を大きく残した剥片鏃である。下面の折断面に抉りを施し、脚部を作出する。311は頁岩製の磨製石斧の基部片である。器面は敲打により潰れ、基部を整形したあと研磨が施される。破断面も研磨しており、破損品の再利用が考えられる。胴部には研磨痕は認められない。312は結晶片岩製の板状岩片素材の磨製石斧である。側縁に二次加工を施したあと全面に研磨を施す。刃部は研磨により弧状の片刃形を呈する。313は軽石の円鏃である。314は玄武岩製の石皿である。正面中央に滑面を有し、断面は中央で凹む形状を呈する。

第69表 II・IV層出土石器計測表

図	番号	器種	石材	地区	層位	グリッド	注記番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
169	289	石鏃	無珩晶質玄武岩	B	IIc	Q-12	B:0625	3.9	3.0	0.9	6.2
169	290	石鏃	黒曜石 A	C	IIc	-	C_IIc 層③	2.0	1.4	0.3	0.6
169	291	石鏃	黒曜石 A	C	IIc	-	C_IIc 層④	2.2	1.8	0.4	1.0
169	292	石鏃	無珩晶質玄武岩	A	IIc	N-24	A_N_24_IIc 層	3.7	2.5	0.7	3.7
169	293	石鏃	無珩晶質玄武岩	B	IIc	Q-12	B:0553	4.7	1.4	1.2	4.0
169	294	石核	黒曜石 A	C	IIc	T-8	T8_NB_2C	2.6	3.4	1.1	8.2
169	295	彫器	黒曜石 A	B	IIc	P-13	B:1482	3.6	2.4	0.8	5.0
169	296	使用痕剥片	泥岩	A	IIc	G-31	G31_2c	3.3	2.3	1.2	6.5
169	297	使用痕剥片	鉄石英	C	IIc	V-9	V9_2c	1.6	3.4	0.6	2.4
169	298	楔形石器	黒曜石 A	C	IIc	R-9	C_R9_IIc	2.1	0.9	1.1	1.7
169	299	楔形石器	黒曜石 A	C	IIc	T-8	C_T8_IIc	2.5	1.4	1.1	8.2
169	300	播 / 削器 D 類	無珩晶質玄武岩	B	IIc	Q-12	B:0619	3.9	6.9	1.8	44.8
169	301	十字形石器?	結晶片岩	B	IIc	Q-15	B:2486	5.1	4.1	1.1	54.6
169	302	石胞丁様石器	安山岩	B	IIc	Q-14	Q 14 b IIc 層	4.5	6.4	1.1	32.5
169	303	磨製石斧 B 類	結晶片岩	A	IIc	I-28	I28_2c	7.0	4.0	1.4	63.5
169	304	磨製石斧 B 類	結晶片岩	D	IIc	G-30	D G30 IIc 層	7.1	4.7	1.5	88.9
170	305	ストーンリタッチャー	砂岩	C	IIc	T-9	T9_WB_2C	5.6	4.3	1.8	51.9
170	306	磨石 / 敲石 A 類	砂岩	A	IIc	I-25	A_I25_2c	3.3	3.5	0.8	14.2
171	307	玉	不眠(天河石?)	B	IIc	R-14	B_R_14_IIc 層	1.3	0.9	0.5	0.8
172	308	石匙	無珩晶質玄武岩	B	IV	R-13	B:7025	5.2	7.7	1.2	35.0
172	309	磨石 / 敲石 B 類	砂岩	B	IV	S-14	B:2526	13.0	10.5	4.2	950.0
173	310	石鏃	黒曜石 A	C	-	-	C_表探②	2.4	1.7	0.3	0.9
173	311	磨製石斧 A 類	頁岩	A	-	-	A_廃土030724	8.1	4.4	3.6	169.6
173	312	磨製石斧 C 類	結晶片岩	D	-	E-31	E_31_Vb 層_風倒木根	14.0	4.9	1.3	123.5
173	313	水磨礫	軽石	C	-	-	C_無加工軽石	8.5	6.0	3.4	51.0
173	314	石皿	玄武岩	A	-	-	A_東側(海手)表探	24.0	16.8	4.9	3000.0

【参考・引用文献】

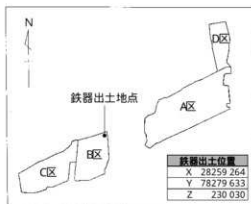
- 同志社大学考古学研究室 1990 『伊木力遺跡』多良見町教育委員会
 舘見富士郎 2001 『大野原遺跡』有明町教育委員会
 古門雅高・渡邊康行 1996 『頭ヶ島白浜遺跡』有明町教育委員会
 本多和典 2005 『下末宝遺跡・上睦津遺跡』深江町教育委員会
 橋 昌信 1978 『縄文晩期の石器 - 西九州における縄文時代の石器研究 1 - 』『史学論叢』第 9 号 別府大学史学研究会
 宝珍伸一郎 1990 『10 超大型礫石鏃に関する二、三の考察 - 付・有孔石製品 - 』『伊木力遺跡』多良見町教育委員会
 松藤和人 1990 『9 伊木力遺跡における石器組成と剥片剥離法の変遷』『伊木力遺跡』多良見町教育委員会
 金岡忍・佐原 眞 1997 『弥生文化の研究』5 道具と技術 雄山閣

(3) 金属器

B区北東部のグリッドP 14から鉄器の出土があった。ピットなど埋設するための遺構は確認しておらず、包含層からの検出である。

出土層位は当初Ⅳ層として取り上げたが、Ⅳ層上面での精査時での検出で、Ⅲb層の残存があった可能性がある。Ⅲb層は下位になるにしたがって色調を明るくする傾向があり、Ⅳ層との区別の判断が調査員によってはあいまいであったことは否めない。その後のⅣ層掘削においてもわずかばかりの遺物が出土したに過ぎず、Ⅳ層出土の遺物はⅢb層と変わらない。縄文時代後期から突帯文期までの土器を含んでおり、特にⅢb層との時期差も認められなかった。また、長崎大学長岡先生によると、Ⅳ層は水無川をはさんで遺跡の北側に位置する眉山の火砕流にその堆積の成因を求めることができる。よって本来的にはⅣ層は無遺物層と判断するのが自然であろう。Ⅳ層において検出した遺物については自然営力による移動や調査精度の問題を考慮することが必要であり、鉄器についてもⅢb層最下部のもの、あるいはⅢb層由来のものとして考える必要がある。

出土状況としては、斜めに立ったような状態での出土であった。調査は各層ごとに表面精査をし、遺構の検出・掘削を行ってから下層の掘削へと進んだため、上層からの攪乱等は考えがたい。B区におけるⅢb層出土の土器は縄文時代後期～弥生時代前期にほぼ限定されるが、D区においては弥生時代中期の樋口録故(図版176-1)の出土がある。Ⅲb層の時期的な下限が弥生時代中期まで下るか、弥生時代中期の遺物が混入する可能性もありうることを示している。鉄器の所属時期については弥生時代開始期の問題にも関わることであり、今後さらに検討が必要とされる。

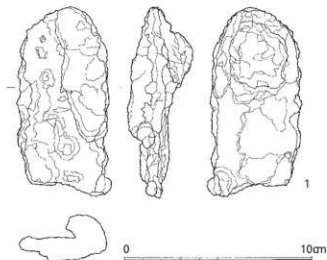


第174図 鉄器出土地点

出土遺物

1はB区出土の鉄器で長軸10.0cm、短軸4.7cm、厚さ2.3cmで、重量は113.9gを測る。

全体に酸化が進行し、サビ彫れによって形状は大きく変わっているものと思われるが、板状の製品である。器種については断定できない。



第175図 鉄器実測図(S=1/3)

3. 弥生時代中期以降の遺物

(1) 土器・陶磁器・その他(第176図～第182図)

包含層から出土した弥生時代中期から中・近世の遺物は主にⅡ a～Ⅲ a層にかけ出土し、特にⅡ c層に集中する。弥生時代中期以降の遺物は弥生土器が少量で、中世後期から近世にかけての時期のものが大半を占めている状況であった。また、ここでは弥生時代中期以降の土器や陶磁器以外にも、金属器を除いた時代に関連する土製品・石製品も掲載し、それぞれ調査区ごとに分けている。

A・D区出土遺物(第176～177図)

- 1・2は弥生土器である。1は中期の甕で鑄形を呈する口縁部片である。内外面に丹塗りを施す。
- 2は後期の高坏もしくは脚台付甕の脚部である。内外面にナデ調整を施す。
- 3は東南アジア系の褐釉陶器で壺もしくは甕の胴部片である。内面にアテ具痕と思われるものが見られる。
- 4は朝鮮李朝の高麗青磁壺もしくは瓶の肩部である。黒白象嵌の技法により蓮弁文を施す。

5～15は中国明代の景徳鎮窯系の染付磁器である。5は碁筭底皿の口縁部片である。外面の一重圏線下に文様を施し、内面の圏線間に文様を施す。6は端反碗の口縁部片である。外面の一重圏線下に渦状雲文を施し、内面に四方禪文を施す。外面の文様は神仙思想の「青花高士梅枝観月文」の一部の可能性がある。7は端反皿の口縁部片である。外面の一重圏線下に文様を施し、内面に二重圏線を施す。8～10は蓮子碗で外面に丸文を施す。8はわずかに高台が残存する底部付近で、見込みの二重圏線内に文様を施す。10は内面に二重圏線を施す。11は蓮子碗で外面に渦巻唐草文を施し高台に圏線を巡らせる。見込みに二重圏線を巡らせ、その上に一重圏線を施す。12は皿の底部である。外面に縦方向に象嵌を施す。見込みに龍文を施す。13は碗の底部である。高台の外面に釉がたれており、見込みに文様を施す。14は端反皿で高台外面に太い二重圏線を巡らせる。見込みに文様を施す。疊付けの調整が粗い。15は碁筭底で見込みに文様を施す。16は白磁の碁筭底で、高台内は兜巾の形状である。

17・20・21は明の漳州窯系の磁器(染付)である。17は磁器の皿で、内面のみに蔓草文を施す。

20は碁筭底皿で、外面に一重圏線を施す。21は碁筭底皿で、外面に一重圏線を巡らせ、見込みの一重圏線圏線内に菊花文を施す。高台内は兜巾の形状である。

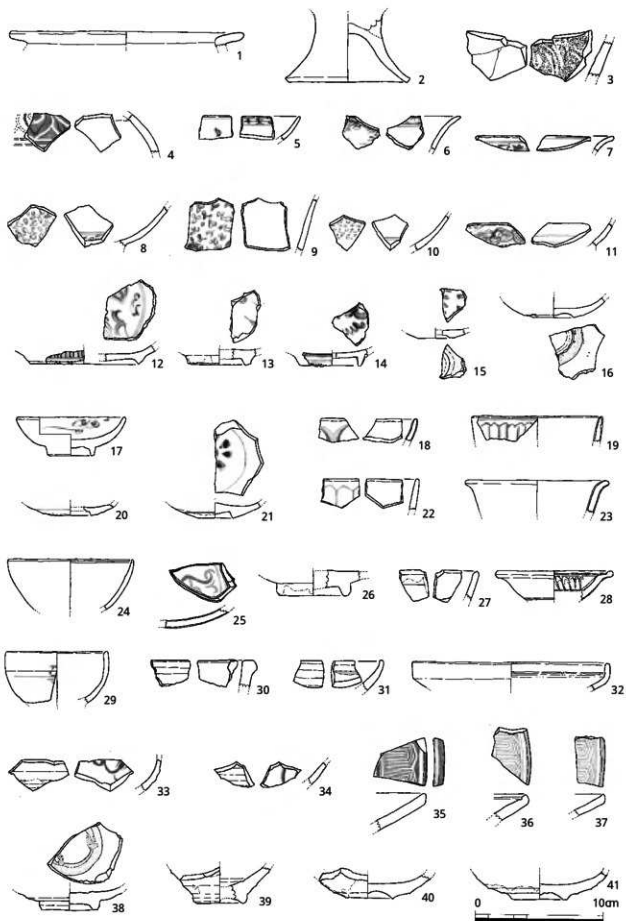
18・19・22～26は明の龍泉窯系の青磁である。18は碗で、外面に鑄蓮弁を施す。19・22は直行する碗の口縁部で、外面に細描蓮弁を施す。また、19は蓮弁の単位の意識が失われている文様である。

23は口縁部が外反する碗である。24は内湾する碗で、口縁部の内面に一重細線が見られる。25は大皿の底部で、内面に唐草文を施す。26は碗の底部である。高台の外面に釉たれが見られる。

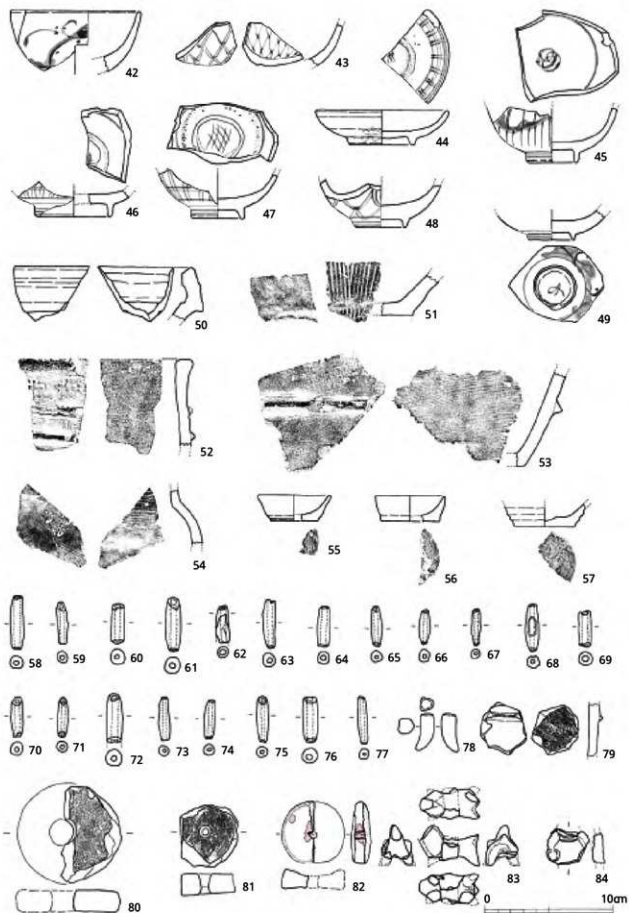
27は朝鮮李朝系の灰釉陶器のぐいのみであろう。口縁部の外面に釉がたれており、稜が見られる。

28は瀬戸・美濃系の折縁小皿である。黄褐色を呈する厚い灰釉を施している。

29～37・39～41は、唐津系の陶器である。29は絵唐津の猪口であろう。外面に鉄絵技法による文様を施す。30は陶器鉢の口縁部片である。31はぐいのみ口縁部片である。内面に草文と思われる文様が施されている。32は口縁が直行する皿である。33・34は絵唐津の碗で、内面に文様が施されている。35～37は三島唐津の口縁部片である。内面に象嵌の文様が施されている。35は口唇部にも象嵌が施されている。39は絵唐津の底部で、高台内は兜巾の形状である。40・41は皿の底部で、高台内は兜巾の形状である。外面に釉たれが見られる。



第176図 弥生時代中期以降の遺物 A・D区①(S=1/3)



第177図 弥生時代中期以降の遺物 A・D区② (S=1/3)

38は、肥前系陶器の底部で、内面に蛇の目軸八ギが見られる。

42～49は肥前・波佐見系の磁器である。42は丸形碗で、外面に雪輪草花文を施す。43は丸形碗で、外面に二重網目文を施し、内面に一重網目文を施す。44は五寸皿で、内面に斜格子文を施す。見込みには蛇の目軸八ギ内に格子文を施す。45は端反碗で、外面に虫竜文を施す。高台の外面に二重圈線を巡らせ、見込みの一重圈線内に渦福文を施す。46・47は端反碗で、外面に墨弾き手法により斜格子文を施す。高台の外面に二重圈線を巡らせ、見込みの蛇の目軸八ギ内に格子文を施す。48は丸形碗で、外面に二重網目文を施し、高台の外面に二重圈線を施す。49は丸形碗で、外面に唐草文を施し、高台内に渦福銘を施す。

50・51は備前系の播鉢である。50は口縁部片である。51は底部で内面に播目が見られる。

52～57は土師質土器である。52は中世火鉢で、突帯間に文様を型押しする。内外面は丁寧なナデ調整を施す。53は火鉢の底部付近である。外面に突帯をもち、内面は八ケ目調整である。54は土釜の口縁部付近から肩部にかけてである。外面は丁寧なミガキ調整で花文を型押しし、内面は八ケ目後にナデ調整を行っている。55～57は在地系の中世土師皿であろう。55・56は内湾気味な小皿で、内外面にナデ調整を施し、底は糸切りである。また、57は煤の付着はみられないものの、内面の中央に小さな窪みをもつ灯明皿であろう。

58～79は土製品である。58～77は土師質の管状土鉢である。A・D区から出土した土鉢は全30点で、その中で実測に耐えうるもの20点を図化している。重量はすべて10g未満の小型のものである。

土鉢の出土量は遺跡内で最もこの調査区に集中していると言える。78は角状の形態を呈する用途不明土製品である。79は土鍋か土釜の突帯部を転用したものである。円形に加工しており、遊具の一種と思われる。80～82は紡錘車である。80は瓦を円形に打ち欠いた転用品である。孔部は焼成前穿孔の可能性がある。81は砥石の転用品である。82は石製紡錘車であり、孔付近に鉄分が付着している。

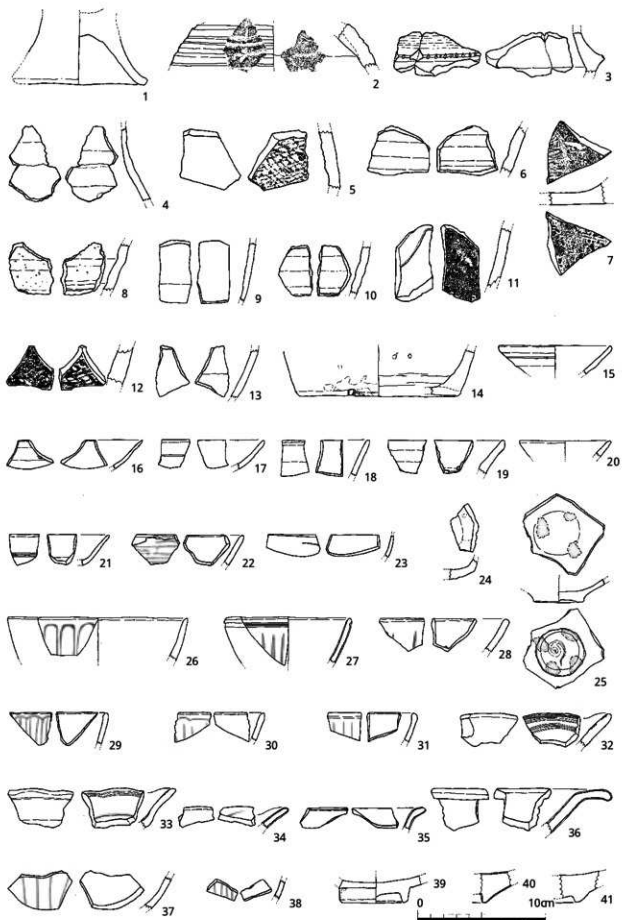
83は土製の馬形人形である。頭部および3本の脚部を欠損している。84は土製の七福神恵比寿と思われる人形である。頭部および手部、脚部が欠損している。背部は膨らみを持たず剥離していることから、本来は別の製品に接合されていた可能性がある。

B区出土遺物（第178～181図）

1～3は弥生土器である。1は後期の高坏もしくは脚台付甕の脚部である。内外面にナデ調整を行う。2は後期の壺の肩部である。外面は沈線下を斜めにケズリだしている。3は袋状口縁の壺である。外面に刻目を入れ八ケ目調整を施す。内面はナデ調整を施す。

4～14は東南アジア系の褐釉陶器の壺もしくは瓶である。4は瓶の肩部である。内面の上部が露胎である。5は内面にアテ具痕が残る。6は内面に稜が見られる。7は底部で、外面にタタキ痕が見られ、内面にアテ具痕が残る。8は内外面に稜が入り、外面の下部に露胎を残す。10は内外面に稜を残している。11・12は内面にアテ具痕が残る。14は底部で、外面の褐釉にむらがある。内面にアテ具痕が見られる。

15～25は、朝鮮李朝の灰釉陶器である。15・17・20・21はぐいのみ口縁部片である。23はぐいのみ脚部である。これらの陶器片は外面に稜線が入る特徴である。16は皿の口縁部付近の破片である。24は皿の底部付近である。25は皿の底部で、見込みと畳付に砂目跡が見られる。18・19・22は碗の口



第178図 弥生時代中期以降の遺物 B区① (S = 1/3)

縁部片である。22は外面に白土が施されている。口唇部から口縁部外面の上部にかけて表面が剥落している。

26～41は明の龍泉窯系の青磁である。26～31は碗の口縁部片で、外面に細描蓮弁を施しており、蓮弁の単位の意識が失われている。32～34は稜花皿で、32・33は口縁内面に輪花の二重沈線を施す。

33は腰折れ形の形状をなすものである。34は内面に文様が施されている。35は皿の口縁部片である。

36は盤の口縁部片である。器壁が厚い。37・38は外面に細描蓮弁を施している。39は碗の底部である。外面に釉たれが見られる。40・41は大皿の底部であり、器壁が厚い。

42～49・52～55・57～67・69～76・78～80は中国明代の景德鎮窯系の染付碗・皿類である。42～44は蓮子碗で、口縁部外面の上部に二重圏線を巡らせ、その下に丸文を施す。内面にも二重圏線を巡らせる。45は蓮子碗の口縁部で、外面に一重圏線の下に獅子文を施し、内面に二重圏線を巡らせる。

46～48は碗の口縁部で、外面に文様を施し、内面に圏線を巡らせる。49は碗か皿の底部付近で、外面に芭蕉葉文を施す。52・53・55は蓮子碗の底部で外面に文様を施す。また、53は外面に圏線を巡らせる。55は高台外面に圏線を巡らせ、見込みに不明な文様を施す。54は碗の底部で、高台に太い圏線を巡らせ、見込みに梵字もしくは文字を施す。壺付けの調整が粗い。57・58は碁筭底皿の口縁部片で、口縁外面の上部に波瀾文を施し、その下に芭蕉葉文を施す。57の内面は二重圏線の下に文様を施し、58の内面は一重圏線を巡らせる。59は端反皿の口縁部で外面の二重圏線の下に花唐草文を施し、内面に二重圏線を巡らせる。60は端反皿の口縁部で、内外面に一重圏線を巡らせる。61は端反皿で、内面に四方禪文を施す。62は端反皿と思われる、外面に二重圏線を巡らせ、その下部に唐草文を施す。内面に四方禪文を施す。63は皿の底部付近で、見込みに捻花文を施す。64は皿が碗の底部付近であるが、見込みの圏線内に花卉文を施す。65は皿の底部付近で外面に芭蕉葉文を施す。66は皿の底部付近で、外面に文様を施す。67は皿の底部付近と思われる、外面に渦唐草文を施し、内面見込みの二重圏線内に芭蕉葉文と思われる文様を施す。69は碁筭底皿で、外面に芭蕉葉文を施し、内面見込みの二重圏線内に草花文を施す。70は碁筭底皿で、内外面に圏線を巡らせる。71は碁筭底皿で、外面に一重圏線を巡らせ、内面見込みの圏線内に文様を施す。72は碁筭底皿で、外面に二重圏線を巡らせ、見込みに吉祥句「寿」のディフォルメされた文様を施す。73は碁筭底皿で、外面に二重圏線を施し、見込みに文様を施す。74は碁筭底皿で外面に一重圏線を巡らせ、見込みの二重圏線内に捻花文を施す。75も碁筭底皿で、見込みに文様を施す。76～78は端反皿と思われる。76は端反皿の底部と思われる、見込みに草花文を施す。78は皿で、高台の外面に二重圏線を巡らせ、見込みに玉取獅子文を施す。79は皿の底部で、器壁は薄く見込みに龍文を施す。80は白磁の碁筭底である。

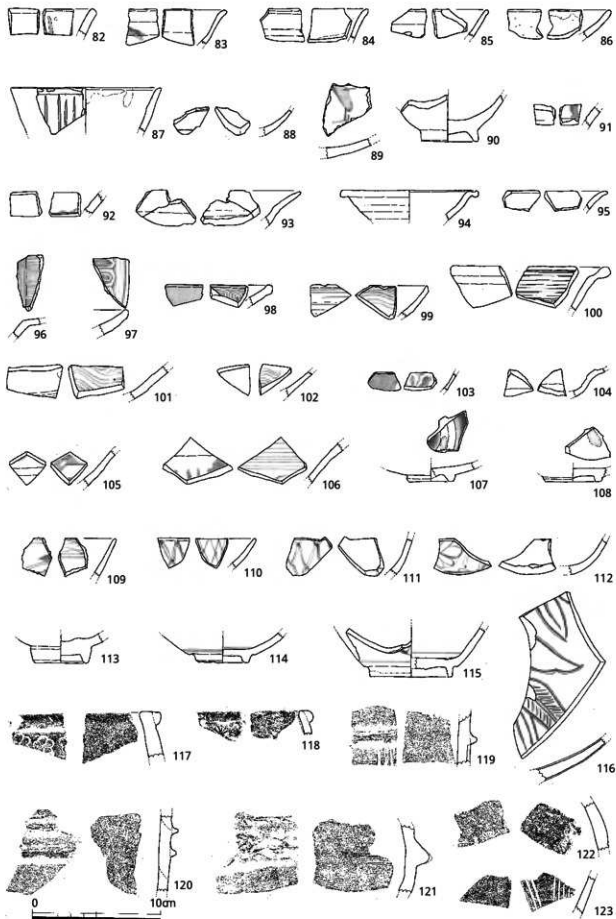
50・51・56・68・77は明の漳州窯系の染付碗・皿類である。50は碗の底部付近と思われる、外面に花文を施す。51は碗で、外面に文様を施す。56は皿の口縁部片で、外面に波瀾文を施し、内面に一重圏線を巡らせる。68は碁筭底皿で、外面に一重圏線を巡らせる。77は皿の底部で、外面に二重圏線で、内面に文様を施す。

81は、明代の白磁輪花皿である。口唇部と口縁部内面の上部にそれぞれ刺突が巡る。

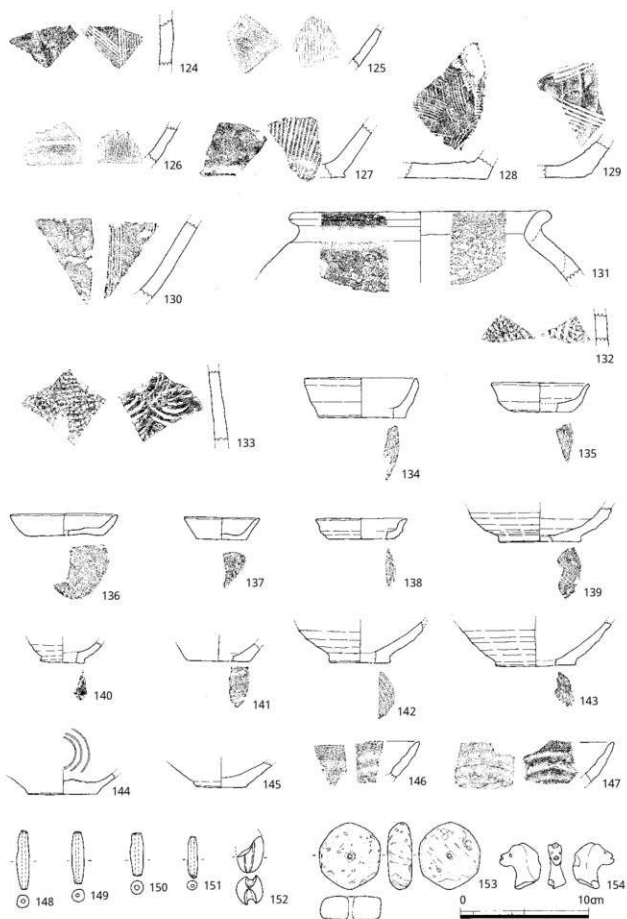
82～86・88～108は唐津系の陶器である。82は碗の口縁部片であり、内面に文様を施す絵唐津であろう。83は絵唐津の碗の口縁部片であり、外面に文様を施す。84～86は碗の口縁部である。88は碗の底部付近である。89は碗の底部付近であり、内面に文様を施す。90は碗の底部である。高台内は兜巾



第179図 弥生時代中期以降の遺物 B区② (S = 1/3)



第180図 弥生時代中期以降の遺物 B区③ (S = 1/3)



第181図 弥生時代中期以降の遺物 B区④ (S = 1/3)

の形状である。91～93は絵唐津の皿で、92の内面に鉄絵が施される。94・95は皿の口縁部である。96～98は三島唐津の口縁部片である。内面に象嵌文様が施されている。99～102は皿で、内面に櫛刷毛目が施される。103・105は碗で、104は皿である。106は絵唐津と思われる皿で、外面に文様が施され、内面に櫛刷毛目が見られる。107は碗の底部である。見込みに蛇の目軸八ギが見られ砂目が付着している。高台内は兜巾である。108は碗の底部で、見込みに砂目が付着している。高台内は兜巾の形状である。

87は陶器の碗で、口縁の外面に蓮弁文を施し、粗製のため口縁上部に列点状の気泡が巡る。産地は不明である。

109～115は肥前系の磁器である。109は碗で直行する口縁部片である。外面に草花文を施し、内面上部に青海波状文を施す。110は碗の口縁部で、外面に二重圏線を施し、内面に一重圏線を施す。111は碗で外面に二重圏線を施す。112は碗の底部付近で外面に草花文を施す。113は碗の底部である。

114は碗で内外面に二重圏線を巡らせる。115は碗の底部で、内面に蛇の目軸八ギを施し、内外面に一重圏線を巡らせる。

116は波佐見系の青磁の皿である。内面に草花文を施す。

117・118・123・124・127～129・132・133は備前系の播鉢・火鉢である。117・118は瓦質の火鉢で、外面に花文の型押しを施す。123・124・127～129は須恵質の播鉢で内面に播目が見られる。

132・133は襖で、外面にタタキ痕が見られ、内面にアテ具痕が残る。また、これら以外に産地が特定しがたいものとして、119～122・125・126の須恵質・土師質土器がある。119・120は火鉢の胴部である。119は外面の突帯下に型押しを施している。内外面にナデ調整を施す。120は外面に二重突帯を巡らせ、内外面にナデ調整を施す。121・122は土鍋である。121は胴部で外面に突帯が付き、内外面に八ヶ目が見られる。122は肩部で外面に花文を型押しする。125・126は須恵質の播鉢で内面に播目が見られる。131は須恵質の襖である。

134～147は土師質土器である。134は坏である。135～138・141・144～146は皿で、内外面にナデ調整を施し、底面系切りを施す。135・138は口縁部が外反している。137は小皿で口縁部がやや外反している。139・140・142・143・147は碗である。

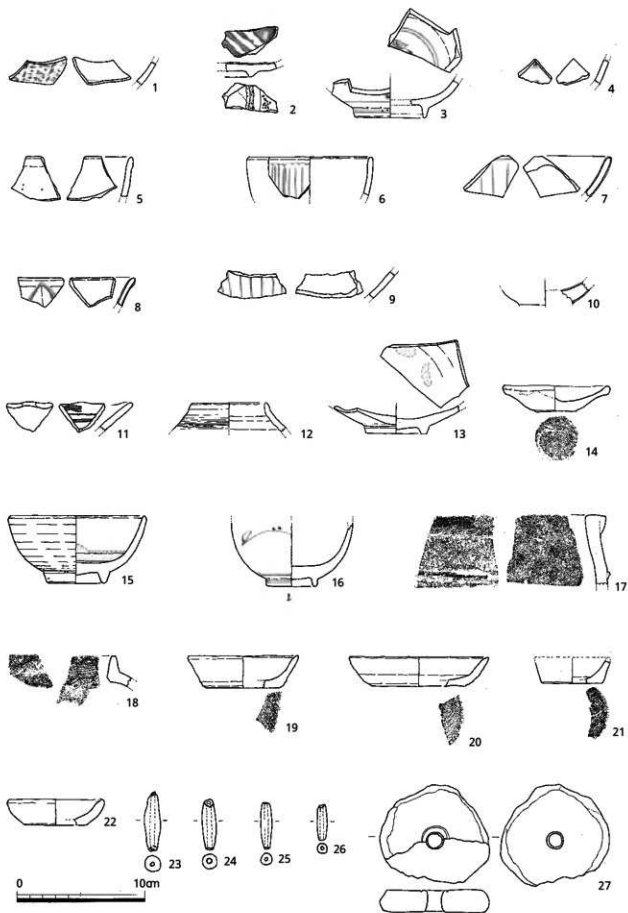
148～152・154は土製品である。148～151は土師質の管状土錘である。重量はすべて10g未満の小型のものである。152は遺跡から1点しか確認されていないが有溝土錘である。154は土製の馬形人形で、残存部は頭部のみである。153は軽石製の紡錘車である。

C区出土遺物（第182図）

1・2は中国明代の景德鎮窯系の磁器である。1は蓮子碗の底部付近で、外面に丸文を施す。2は皿の底部で見込みに文様を施す。

3・4は明の漳州窯系の磁器である。3は皿で、高台の外面に二重圏線を巡らせ、見込みに文様を施す。4は碗で、文様の下に圏線を巡らせる。

5～10は明の龍泉窯系青磁である。5は碗で、直行する口縁部である。6・7は碗の口縁部片で、外面に細描蓮弁を施しており、蓮弁の単位の意識が失われている。8は碗の口縁部片で、外面に蓮弁文と思われるものを施す。9は碗で外面に細描蓮弁を施している。10は碗の底部である。11は桜花



第182図 弥生時代中期以降の遺物 C区 (S=1/3)

皿の口縁部で、内面に二重沈線を施す。

13は唐津系の陶器の皿である。見込みに蛇の目軸八ギが見られ、その内部に砂目が見られる。

11・12・14は産地不明の陶器である。12は瓶の口縁部片であり、外面に数条の多線が巡る。内面には数条の稜が見られる。14は陶質の皿で、底面に糸切りが見られる。

15・16は、肥前系の磁器である。15は碗で、外面に幾条もの稜線が見られ、見込みに蛇の目軸八ギが見られる。16は碗で、外面に草花文が施され、高台外面に二重圈線が巡る。

17～22は土師質土器である。17は火鉢で外面に突帯を巡らせ、花文の型押しを施す。内外面に丁寧なナデ調整を施す。18は土釜の口縁部から肩部で、外面にナデ調整を施し、内面に八ケ目を施す。

19～22は土師皿で、内外面にナデ調整を施し、底面に糸切りが見られる。

23～26は土師質の管状土錘である。重量はすべて10g未満の小型のものである。他調査区に比べ出土数が少ない。27は瓦を円形に打ち欠いた転用品の紡錘車である。

小 結

包含層から出土した弥生時代中期・後期の遺物は、遺跡内で数点のみ出土した。この時期の遺物は、遺跡の主体を占める弥生時代早期・前期の突帯文土器段階に比べると出土量が激減している。このことは、深江町内の他遺跡のあり方とも類似する。

弥生時代中期以降の遺物は、大半が中世の遺物で占める。中世前期では、13世紀の高麗象嵌青磁の瓶もしくは壺の肩部を初源として1点のみ出土した。この高麗青磁は、中世後期頃に消費された伝世品の可能性が高い。多くは15世紀から16世紀頃の中世後期のもので、中世後期土器・陶磁器の割合は、中国の龍泉窯・景德鎮窯・漳州窯、東南アジア系、朝鮮系の貿易陶磁器類が7割で、須恵質・瓦質・土師質等の国産土器類が3割近くであり、貿易陶磁器類の全体に占める割合が、国産土器類よりも非常に高い状況であった。中でも戦国時代から安土桃山時代の16世紀を中心とした日明貿易や密貿易などによってもたらされたであろう中国陶磁器は、染付の碗・皿類が7割と圧倒的に多く、白磁皿や青磁碗・皿が3割で、それに次ぐ状況である。また、遺跡から出土した景德鎮窯系青花磁器は、型式及び器種の判別可能なものが41点であった。小野正敏分類（小野1982）を援用し、その41点を分類したところ蓮子碗（C群）が44%、暮筭底皿（C群）が32%、端反皿（B1群）が24%であった。蓮子碗と暮筭底・端反皿の比率は、碗が4割で皿が6割と皿が若干多い。

中世土器・陶磁器を輸入品と国産品の分布状況（第70表）は、S・T 13・14グリッドを中心としたB区の南半一帯、およびB区に隣接してC区の東側付近に遺物が最も集中し分布する。A・D区は、B・C区に比べて出土量が極端に減少するが、K・L 24・25グリッド付近と、及びその東側の2地点に若干集中して分布している。この2地点のうち、前者のK 25グリッドでは、高麗青磁片が出土しており、後者のJ 29グリッドでは、瀬戸・美濃系の折縁小皿が出土している。また、A・D区は、B・C区に比べ土錘や紡錘車の出土した率が高い。このように、A・D区とB・C区では、集中量・範囲と傾向に若干ではあるが異なる分布状況である。弥生時代中期から中・近世頃の遺物の残存状況は、破片のものが多く、接合資料は数点のみである。そのため、A・D区とB・C区の2地点では、消費過程における廃棄物が集中していることがいえる。

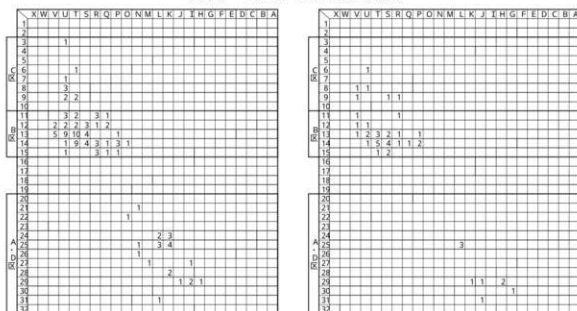
さて、次に包含層遺物と遺跡との関連性について考えてみる。遺跡で見つかった中世の遺構は、墓

坑が確認されており、近世の遺構は水場遺構が確認された。この様に近世については農業に関連する痕跡が確認されたが、中世からは墓域を除けば、何らかの中世集落に関連する遺構は確認できなかった。にもかかわらず、遺跡から113点の貿易陶磁器や46点の中世土器などの多くの遺物が出土したということから考えられるのは、この地に何らかの権力が富をもつものがいたのか、関連する消費地であった可能性がある。島原半島において中世陶磁器がまとまって出土した遺跡として、日野江城（北有馬町）や原城（南有馬町）があげられよう。領主有馬氏の居城が日野江城で、その支城が原城である。日野江城や原城からは中世後期から近世初頭にかけての中国、朝鮮、東南アジア産の貿易陶磁器や中世土器類が出土しており、権現脇遺跡の出土遺物と類似する。中世の深江は当時この有馬の勢力圏にあった。

『深江家文書』（町誌1971）によると、中世の頃の深江には、「安富氏」という地頭がいた。安富氏は、正応5（1292）年、蒙古襲来から間もない混沌とした情勢の中に新補地頭として深江へ着任している。その後、有馬氏と縁を結び、鎌倉時代中期から戦国時代に至るまで有馬氏の一党として深江城を居城とする。天正12（1584）年、有馬・島津の連合軍と龍造寺軍との沖田畷の戦いの際に、有馬氏から寝返って龍造寺氏に味方している。この時、有馬軍は、布津・深江の村落を焼き払い、安富氏の籠城していた深江城にまで迫っている。龍造寺軍が敗れると、深江城を去り佐賀県鹿島市へ逃亡している。

この記録によれば中世の深江は安富氏の領地であった。また、安富氏の領地であった当時の深江とは、深江家文書の中に「深江の四至（＝領地）」について、現在の深江町の行政区分とさほど変わりはないように記されている。その後、有馬氏は、豊臣秀吉の朝鮮出兵に従ったため、深江を含む高来郡内4万石を安堵されている。このように、遺跡周辺は、安富氏もしくはその後の有馬氏の領地下にあり、両氏いずれかの関連性のある遺跡である可能性がある。遺跡の西に隣接する門脇遺跡、別名、水源神社がある。また、遺跡の名称でもある権現脇、つまり権現（＝仏が神の姿で現れるの意）脇（＝

第70表 中世土器・陶磁器の分布状況



側)で「権現を祭る社」が遺跡近辺にあったことも考えられる(町誌1971)。中世権現船遺跡には、この様な時代背景と生活環境において中世後期に多くの貿易陶磁器類を消費していたことであろう。

島原半島では、近年中世の調査事例が増加し、多くの貿易陶磁や中世土器が出土している。今後、海に囲まれ、津の多い島原半島における中世後期の流通システムを解明していく必要があろう。

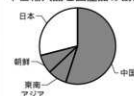
第71表 遺跡出土の中世土器・陶磁器類の集計表

産地・種類	輸入品						
	東南アジア系	中国				朝鮮	
		龍泉窯系	景德鎮窯系	漳州窯系	その他	高麗青磁	灰釉陶器
A・D区	1	7	12	3	0	1	1
B区	11	16	34	5	1(白磁)	0	11
C区	0	6	2	2	0	0	0
小計	12	29	48	10	1	1	12
合計	12	88				13	

国産品					
産地・種類	瀬戸・美濃	備前	須恵質土器	瓦質土器	土師質土器
A・D区	1	2	0	0	6
B区	0	8	11	1	11
C区	0	0	0	0	6
小計	1	10	11	1	23
合計	46				

産地国名	輸入品			国産品
	中国	東南アジア	朝鮮	日本
出土点数	87	12	13	46
割合	55%	8%	8%	29%
合計	112			46

中世輸入品と国産品の割合



【参考・引用文献】

- 大石昇・古賀正美 1996『久留米城下町 両替町遺跡』久留米市教育委員会
 小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 No.2』日本貿易陶磁研究会
 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁の分類について」『貿易陶磁研究 No.2』日本貿易陶磁研究会
 川内野篤編 2005『針尾城跡』佐世保市教育委員会
 国立歴史民俗博物館編 2005『東アジア中世海道』毎日新聞社
 佐藤浩司 1997『小倉城跡3』北九州市教育文化事業団
 鈴木康之 2004「消費活動から探る中世集落の動向」『日本考古学協会 2004年度広島大会 研究発表資料集』
 広島県立歴史博物館編 1991『瀬戸内の中国陶磁』広島県立歴史博物館友の会
 広島県立歴史博物館編 1996『海の道から中世をみる 中世の港町』広島県立歴史博物館友の会
 中里太郎右衛門 1989『唐津 日本陶磁大系』第13集 平凡社
 深江町編さん委員会 1971『深江町郷土誌』深江町
 宮崎貴夫 1984『今福遺跡Ⅰ』長崎県教育委員会
 文化庁・長崎県文化課・南有馬教育委員会他 1988『シンポジウム「原城発掘」西海の王土から殉教の舞台へ』
 山口譲治編 1995『博多47』福岡市教育委員会

第72表 A・D区土器・陶磁器・その他観察表①

図	番号	グリッド	出土層位	種類・器種	成形・調整・文様		備考
					外面	内面	
176	1	D-30	Ⅲb	弥生土器・壺	丹塗リナデ	丹塗リナデ	D区出土 弥生時代中期須玖式土器
176	2	H-30	Ⅲa	弥生土器・高坏?	ナデ	ナデ	高坏脚部か台付鉢脚部か不明
176	3	K-28	Ⅱ	陶器・壺・瓶		アテ具痕	東南アジア 褐釉陶器
176	4	K-25	Ⅱc	高麗青磁	蓮弁文・象嵌	回転ナデ	高麗青磁 13c-14c 後半
176	5	K-28	Ⅱc	磁器・唇底皿	一重圈線	圈線間に文様	景德鎮窯 15c-16c 後半
176	6	N-26	Ⅱc	磁器・端反碗	四方禪文	渦状雲文	景德鎮窯 15c-16c 後半
176	7	L-31	Ⅱc	磁器・端反皿	二重圈線・不明文様	二重圈線	景德鎮窯 15c末-16c 後半
176	8	K-25	Ⅱc	磁器・蓮子碗	丸を三つ結合した文	二重圈線・不明文様	景德鎮窯 15c末-16c 後半
176	9	M-27	攪乱	磁器・蓮子碗	丸を三つ結合した文		景德鎮窯 15c末-16c 後半
176	10	K-25	Ⅱc	磁器・蓮子碗	丸を三つ結合した文	二重圈線	景德鎮窯 15c末-16c 後半
176	11	L-25	Ⅱc	磁器・蓮子碗	渦巻唐草文	一・二重圈線	景德鎮窯 15c末-16c 後半
176	12	I-29	Ⅱc	磁器・端反皿		龍文	景德鎮窯 16c前半-中葉
176	13	L-24	Ⅱc	磁器・蓮子碗		不明文様	景德鎮窯 15c末-16c 後半
176	14	J-29	Ⅱc	磁器・端反皿	二重圈線	不明文様	景德鎮窯 15c末-16c 後半
176	15	L-25	Ⅱc	磁器・唇底皿		不明文様	景德鎮窯 15c末-16c 後半
176	16	K-25	Ⅱc	白磁・唇底皿			景德鎮窯 15c末-16c 後半 高台内兜巾
176	17	L-24	Ⅱc	磁器・皿		蔓草文?	漳州窯 16c末
176	18	K-24	Ⅱa	青磁・碗	縹蓮弁文		龍泉窯 16c
176	19	H-29	Ⅱ	青磁・碗	縹蓮弁文		龍泉窯 16c
176	20	L-25	Ⅱc	磁器・唇底皿	一重圈線		漳州窯 16c
176	21	K-24	Ⅱc	磁器・唇底皿	一重圈線	菊花文・一重圈線	漳州窯 16c
176	22	N-21	Ⅱc	青磁・碗	縹蓮弁文		龍泉窯 16c
176	23	K-24	Ⅱc	青磁・碗			龍泉窯 15c-16c
176	24	N-25	Ⅱc	青磁・碗		沈線	龍泉窯 15c-16c
176	25	O-22	Ⅲa	青磁・大皿	唐草文		龍泉窯 16c
176	26	I-29	Ⅱc	青磁・碗			龍泉窯 16c
176	27	I-27	攪乱	陶器・ぐいのみ			朝鮮李朝灰釉陶器
176	28	J-29	Ⅱc	陶器・折縁小皿			瀬戸・美濃 16c末-17c初頭
176	29	L-22	Ⅱb	陶器・猪口	不明文様		絵唐津 17c初頭
176	30	M-24	Ⅱc	陶器・鉢			唐津
176	31	I-30	Ⅱ	陶器・ぐいのみ			唐津
176	32	M-24	Ⅱc	陶器・碗?			唐津
176	33	N-22	Ⅱc	陶器・皿		不明文様	絵唐津 17c初頭
176	34	N-27	Ⅱc	陶器・皿		不明文様	絵唐津 17c初頭
176	35	K-24	Ⅱa	陶器・皿	象嵌	象嵌	唐津 17c後半-18c前半
176	36	I-28	Ⅱc	陶器・皿		象嵌	唐津 17c後半-18c前半
176	37	J-29	Ⅱ	陶器・皿		象嵌	唐津 17c後半-18c前半
176	38	-	-	陶器・皿	蛇の目軸八千		肥前
176	39	O-22	Ⅱc	陶器・碗			絵唐津
176	40	J-31	Ⅱc	陶器・皿			唐津 高台内兜巾

第73表 A・D区土器・陶磁器・その他観察表②

図	番号	グリッド	出土層位	種類・器種	成形・調整・文様		備考
					外面	内面	
176	41	K-24	Ⅱc	陶器・皿			唐津 高台内宛巾
177	42	-	-	磁器・丸形碗	雪輪草花文		肥前 18c 後半
177	43	J-24	Ⅱc	磁器・丸形碗	二重網目文	一重網目文	波佐見 18c-19c 後半
177	44	M-23	Ⅱc	磁器・五寸皿		斜格子文・格子文	波佐見 19c
177	45	M-23	Ⅱc	磁器・端反碗	斜格子文・渦福銘		波佐見 19c 前半
177	46	L-24	Ⅱc	磁器・端反碗	斜格子文・輪八千	格子文	波佐見 19c 前半
177	47	M-23	攪乱	磁器・端反碗	斜格子文・輪八千	格子文	波佐見 19c 前半
177	48	-	-	磁器・丸形碗	二重網目文		波佐見 18c-19c 後半
177	49	M-27	攪乱	磁器・丸形碗	花唐草	渦福銘	肥前
177	50	L-25	Ⅱc	陶器・甕鉢			備前 16c 前半(甕壁編年のV層)の前半期
177	51	K-29	Ⅱc	須恵質土器・甕鉢		掻目(卸目)	備前
177	52	L-25	Ⅱc	土師質土器・火鉢	花文型押し	ナデ	
177	53	H-29	Ⅱ	土師質土器・土鍋	花文型押し	ハケ目	
177	54	J-31	Ⅱc	土師質土器・土釜	花文型押し・ミガキ	ナデ	
177	55	H-29	Ⅱc	土師質土器・皿	ナデ・糸切り	ナデ	
177	56	L-25	Ⅱc	土師質土器・皿	ナデ・糸切り	ナデ	
177	57	G-30	Ⅱ	土師質土器・甕明皿	ナデ・糸切り	ナデ	D区出土

図	番号	グリッド	出土層位	種類・器種	法量(単位:cm・g)		備考
177	58	K-24	Ⅱc	土製品・土鉢	長さ4.1 径1.0	重量4.0	
177	59	M-26	Ⅱa	土製品・土鉢	長さ3.4 径0.9 0.8	重量2.1	
177	60	L-24	Ⅲa	土製品・土鉢	長さ3.1 径1.2 1.1	重量4.5	
177	61	J-24	Ⅱ	土製品・土鉢	長さ4.2 径1.2	重量5.9	
177	62	H-29	Ⅱc	土製品・土鉢	長さ2.8 径0.9 0.8	重量1.9	
177	63	O-22	Ⅱc	土製品・土鉢	長さ3.8 径1.1 0.9	重量3.6	
177	64	J-25	Ⅱc	土製品・土鉢	長さ3.1 径1.0 0.9	重量3.0	
177	65	K-23	Ⅱc	土製品・土鉢	長さ3.2 径0.9	重量2.0	
177	66	J-25	Ⅱc	土製品・土鉢	長さ2.2 径0.9	重量1.6	
177	67	M-28	Ⅱc	土製品・土鉢	長さ2.8 径0.7	重量1.2	
177	68	N-22	Ⅱc	土製品・土鉢	長さ3.7 径1.0 0.9	重量3.6	
177	69	J-25	Ⅱc	土製品・土鉢	長さ2.8 径1.0	重量2.0	
177	70	K-25	Ⅱc	土製品・土鉢	長さ3.2 径1.0	重量2.5	
177	71	L-25	Ⅱc	土製品・土鉢	長さ3.2 径0.8	重量1.8	
177	72	G-30	Ⅱc	土製品・土鉢	長さ3.8 径1.3 1.2	重量6.4	
177	73	J-25	Ⅱc	土製品・土鉢	長さ3.4 径0.8	重量2.4	
177	74	K-25	Ⅱc	土製品・土鉢	長さ2.9 径0.9	重量1.9	
177	75	L-25	Ⅱc	土製品・土鉢	長さ3.6 径0.9 0.8	重量2.4	
177	76	O-24	Ⅲa	土製品・土鉢	長さ3.5 径1.2 1.1	重量3.6	
177	77	O-22	Ⅲa	土製品・土鉢	長さ3.7 径0.8 0.7	重量2.1	
177	78	N-23	Ⅱc	土製品・不明	長さ2.9 径1.2	重量4.8	
177	79	L-24	Ⅱc	土製品・土製丹塗	径4.1 3.6 厚1.0	重量12.5	土鍋・土釜再転用品

第74表 A・D区土器・陶磁器・その他観察表③

図	番号	グリッド	出土層位	種類・器種	法量(単位:cm・g)		備考
177	80	-	攪乱	瓦質土器・紡錘車	径4.1 3.6 厚さ1.1	重量48.2	瓦の転用品
177	81	L-22	攪乱	石製品・紡錘車	径4.7 4.3 厚さ1.8	重量42.0	砥石の転用品
177	82	L-30	Ⅲa	石製品・紡錘車	径4.9 2.6 厚さ1.5	重量24.8	
177	83	H-30	Ⅲa	土製品・人形	径2.5 4.5	重量13.5	馬形人形
177	84	B-31	Ⅱ	土製品・人形	径2.8 3.3	重量7.3	恵比寿人形 D区出土

第75表 B区土器・陶磁器・その他観察表①

図	番号	グリッド	出土層位	種類・器種	成形・調整・文様		備考
					外面	内面	
178	1	T-12	Ⅲa	弥生土器・高坏?	ナデ	ナデ	高坏脚部が台付襷脚部が不明
178	2	S-14	Ⅱc	弥生土器・壺	沈線・ケズリ	ナデ	弥生時代後期
178	3	Q-14	Ⅲa	弥生土器・壺	剣目		弥生時代後期 袋状口縁
178	4	U-13	Ⅱb	陶器・瓶	稜線	稜線	東南アジア 褐釉陶器
178	5	U-13	Ⅱb	陶器・壺		アテ具痕	東南アジア 褐釉陶器
178	6	T-14	Ⅱc	陶器・壺か瓶?	稜線	稜線	東南アジア 褐釉陶器
178	7	S-12	Ⅱb	陶器・壺	タタキ	アテ具痕	東南アジア 褐釉陶器
178	8	Q-15	Ⅱc	陶器・瓶	稜線	稜線	東南アジア 褐釉陶器
178	9	U-11	Ⅱc	陶器・壺か瓶?	稜線		東南アジア 褐釉陶器
178	10	T-13	Ⅱc	陶器・壺か瓶?	稜線	稜線	東南アジア 褐釉陶器
178	11	T-11	Ⅱb	陶器・壺か瓶?		稜線・アテ具痕	東南アジア 褐釉陶器
178	12	T-13	Ⅱc	陶器・壺か瓶?	黒い斑点	アテ具痕	東南アジア 褐釉陶器
178	13	V-13	Ⅱc	陶器・壺か瓶?			東南アジア 褐釉陶器
178	14	U-13	Ⅱb	陶器・壺			東南アジア 褐釉陶器
178	15	T-13	Ⅱc	陶器・くいのみ			朝鮮李朝灰釉陶器
178	16	S-13	Ⅱc	陶器・皿			朝鮮李朝灰釉陶器
178	17	S-12	Ⅱb	陶器・くいのみ			朝鮮李朝灰釉陶器
178	18	R-11	Ⅱa	陶器・碗			朝鮮李朝灰釉陶器
178	19	V-13	Ⅱc	陶器・碗			朝鮮李朝灰釉陶器
178	20	T-13	Ⅱc	陶器・くいのみ			朝鮮李朝灰釉陶器
178	21	R-14	Ⅲa	陶器・くいのみ			朝鮮李朝灰釉陶器
178	22	Q-11	Ⅱ	陶器・碗			朝鮮李朝灰釉陶器
178	23	R-15	Ⅱc	陶器・くいのみ			朝鮮李朝灰釉陶器
178	24	U-13	Ⅱb	陶器・皿			朝鮮李朝灰釉陶器
178	25	P-15	Ⅱc	陶器・皿			朝鮮李朝灰釉陶器
178	26	R-15	Ⅱc	青磁・碗	蓮弁文		龍泉窯 15c-16c
178	27	V-12	Ⅱa	青磁・碗	蓮弁文		龍泉窯 16c
178	28	O-14	Ⅱc	青磁・碗	蓮弁文		龍泉窯 16c
178	29	U-13	Ⅱc	青磁・碗	蓮弁文		龍泉窯 16c
178	30	T-14	Ⅱc	青磁・碗	蓮弁文		龍泉窯 16c
178	31	S-13	Ⅲa	青磁・碗	蓮弁文		龍泉窯 16c
178	32	U-14	Ⅱc	青磁・椀花皿		二重沈線	龍泉窯 15c-16c

第76表 B区土器・陶磁器・その他観察表②

図	番号	グリッド	出土層位	種類・器種	成形・調整・文様		備考
					外面	内面	
178	33	U - 13	Ⅱc	青磁・椀花皿		二重沈線	龍泉窯 15c 後半
178	34	U - 12	Ⅱc	青磁・椀花皿		不明文様	龍泉窯 15c - 16c
178	35	R - 14	Ⅱc	青磁・皿			龍泉窯 15c - 16c
178	36	U - 15	Ⅱc	青磁・盤			龍泉窯 15c
178	37	Q - 12	Ⅱc	青磁・碗	蓮弁文		龍泉窯 15c - 16c
178	38	U - 13	Ⅱa	青磁・碗	蓮弁文		龍泉窯 15c - 16c
178	39	R - 14	Ⅱc	青磁・碗			龍泉窯 15c - 16c
178	40	U - 13	Ⅱc	青磁・大皿			龍泉窯 15c
178	41	U - 11	Ⅱb	青磁・大皿			龍泉窯 15c
179	42	T - 13	Ⅱc	磁器・蓮子碗	丸を3つ結合した文	二重圈線	景德鎮窯 T13-15-S14組合 15c末-16c後半
179	43	S - 13	Ⅱc	磁器・蓮子碗	丸を3つ結合した文	二重圈線	景德鎮窯 15c末-16c後半
179	44	S - 12	Ⅱ	磁器・蓮子碗	丸を3つ結合した文	二重圈線	景德鎮窯 15c末-16c後半
179	45	R - 11	Ⅱc	磁器・蓮子碗	獅子文・圈線	二重圈線	景德鎮窯 15c末-16c後半
179	46	V - 13	Ⅱa	磁器・蓮子碗?	二重圈線	一重圈線	景德鎮窯 15c末-16c後半
179	47	P - 14	Ⅱc	磁器・蓮子碗?	一重圈線	二重圈線	景德鎮窯 15c末-16c後半
179	48	P - 14	Ⅱc	磁器・蓮子碗?		二重圈線	景德鎮窯 15c末-16c後半
179	49	T - 12	Ⅱb	磁器・碗か皿?			景德鎮窯 15c末-16c後半
179	50	T - 13	Ⅱc	磁器・碗?	花文		漳州窯 16c末 底部付近
179	51	U - 13	Ⅱ	磁器・碗	不明文様		漳州窯 16c末
179	52	S - 14	Ⅱc	磁器・蓮子碗	不明文様		景德鎮窯 15c末-16c後半
179	53	T - 11	Ⅱ	磁器・蓮子碗	一・二重圈線		景德鎮窯 15c末-16c後半
179	54	S - 14	Ⅱc	磁器・蓮子碗?	一重圈線	梵字か文字?	景德鎮窯 16c
179	55	T - 12	Ⅱc	磁器・蓮子碗	一・二重圈線	不明文様	景德鎮窯 15c末-16c後半
179	56	U - 12	Ⅱc	磁器・皿	波瀾文	一重圈線	漳州窯 16c末
179	57	T - 13	Ⅱc	磁器・萼筒底皿	波瀾文・芭蕉葉文	二重圈線	景德鎮窯 15c末-16c後半
179	58	T - 14	Ⅱc	磁器・萼筒底皿	波瀾文・芭蕉葉文	一重圈線	景德鎮窯 15c末-16c後半
179	59	V - 12	Ⅱa	磁器・端反皿	花唐草文	二重圈線	景德鎮窯 15c末-16c後半
179	60	Q - 14	Ⅱc	磁器・端反皿	一重圈線	一重圈線	景德鎮窯 15c末-16c後半
179	61	Q - 12	Ⅱa	磁器・端反皿		四方禪文	景德鎮窯 15c末-16c後半
179	62	P - 13	Ⅱc	磁器・端反皿	唐草文・二重圈線	四方禪文	景德鎮窯 15c末-16c後半
179	63	R - 11	Ⅱ	磁器・皿		捻花文	景德鎮窯 15c末-16c後半
179	64	S - 14	Ⅱc	磁器・皿・碗?		花卉文・一重圈線	景德鎮窯 15c末-16c後半
179	65	T - 14	Ⅱc	磁器・皿	芭蕉葉文		景德鎮窯 15c末-16c後半
179	66	V - 13	Ⅱc	磁器・皿	草花文		景德鎮窯 15c末-16c後半
179	67	R - 12	Ⅱc	磁器・皿	渦巻唐草文	芭蕉葉文?・圈線	景德鎮窯 15c末-16c後半
179	68	T - 14	Ⅱc	磁器・萼筒底皿	一重圈線		漳州窯 16c末
179	69	S - 14	Ⅱa	磁器・萼筒底皿	芭蕉葉文	草花文・二重圈線	景德鎮窯 15c末-16c後半
179	70	U - 11	Ⅱ	磁器・皿	一重圈線	二重圈線	景德鎮窯 15c末-16c後半
179	71	P - 14	Ⅱc	磁器・萼筒底皿		二重圈線	景德鎮窯 15c末-16c後半
179	72	S - 13	Ⅱc	磁器・萼筒底皿	二重圈線	吉祥句「寿」文	景德鎮窯 15c末-16c後半 S13-U14組合

第77表 B区土器・陶磁器・その他観察表③

図	番号	グリッド	出土層位	種類・器種	成形・調整・文様		備考
					外面	内面	
179	73	T-14	Ⅱc	磁器・萐筍底皿	二重圈線	不明文様	景德鎮窯 15c末～16c後半
179	74	T-13	Ⅱa	磁器・萐筍底皿	一重圈線	捻花文	景德鎮窯 15c末～16c後半
179	75	R-15	Ⅱc	磁器・萐筍底皿		不明文様	景德鎮窯 15c末～16c後半
179	76	T-13	Ⅱc	磁器・皿		葉文	景德鎮窯 15c末～16c後半
179	77	V-13	Ⅱc	磁器・皿	一・二重圈線	不明文様	漳州窯 17c末
179	78	T-14	Ⅱc	磁器・端反皿	二重圈線	玉取獅子文	景德鎮窯 15c末～16c後半
179	79	T-13	Ⅱc	磁器・端反皿		龍文	景德鎮窯 15c末～16c後半
179	80	T-14	Ⅱc	白磁・萐筍底皿			景德鎮窯 15c末～16c後半
179	81	T-14	Ⅱc	白磁・輪花皿			萐筍底
180	82	T-13	Ⅱc	陶器・碗?	不明文様		絵唐津?
180	83	S-14	Ⅱc	陶器・碗	不明文様		絵唐津 17c初頭
180	84	T-15	Ⅱa	陶器・碗			唐津
180	85	U-11	Ⅱ	陶器・皿			唐津
180	86	Q-12	Ⅱc	陶器・碗			唐津
180	87	U-13	Ⅱc	陶器・碗	蓮弁文		
180	88	R-12	Ⅱc	陶器・碗			唐津
180	89	U-13	Ⅱb	陶器・碗		不明文様	絵唐津?
180	90	R-13	Ⅱc	陶器・碗			唐津・兜巾 17c後半～18c前半
180	91	Q-14	Ⅱc	陶器・皿			絵唐津 17c初頭
180	92	P-12	Ⅱa	陶器・皿		不明文様	絵唐津 17c初頭
180	93	T-12	Ⅱc	陶器・皿			絵唐津 17c初頭
180	94	R-12	Ⅱa	陶器・皿			唐津
180	95	Q-12	I	陶器・皿			唐津
180	96	T-13	Ⅱc	陶器・皿		象嵌	唐津 17c後半～18c前半
180	97	U-12	Ⅱb	陶器・皿		象嵌	唐津 17c後半～18c前半
180	98	T-15	Ⅱa	陶器・皿		象嵌	唐津 17c後半～18c前半
180	99	U-14	Ⅱc	陶器・皿		櫛刷毛目	唐津 17c後半～18c前半
180	100	T-13	Ⅱa	陶器・皿		櫛刷毛目	唐津
180	101	Q-14	Ⅱc	陶器・皿		櫛刷毛目	唐津 17c後半～18c前半
180	102	T-13	Ⅱa	陶器・皿		櫛刷毛目	唐津
180	103	T-12	Ⅱb	陶器・碗		不明文様	唐津
180	104	P-14	Ⅱc	陶器・皿			唐津
180	105	S-13	Ⅱc	陶器・碗		不明文様	唐津
180	106	U-12	Ⅱb	陶器・皿	不明文様	櫛刷毛目	絵唐津 17c初頭
180	107	R-14	Ⅱc	陶器・碗	蛇の目輪八千		唐津 17c後半～18c前半 高台内兜巾
180	108	R-13	Ⅱc	陶器・碗			唐津 高台内兜巾
180	109	R-13	Ⅱc	磁器・碗	草花文	青海波文	肥前
180	110	T-12	Ⅱc	磁器・碗	二重網目文	一重網目文	肥前
180	111	U-13	Ⅱb	磁器・碗	二重網目文		肥前
180	112	R-14	Ⅱc	磁器・碗	草花文		肥前

第78表 B区土器・陶磁器・その他観察表④

図	番号	グリッド	出土層位	種類・器種	成形・調整・文様		備考
					外面	内面	
180	113	S - 15	Ⅱc	陶器・碗			肥前
180	114	U - 13	Ⅱc	磁器・碗	二重圏線		肥前
180	115	S - 14	Ⅱc	磁器・碗	一重圏線	一重圏線	肥前
180	116	U - 14	Ⅱc	青磁・大皿	草花文		波佐見
180	117	T - 13	Ⅱc	瓦質土器・火鉢	花文型押し	ナデ	備前
180	118	T - 14	Ⅱc	瓦質土器・火鉢	花文型押し		備前
180	119	T - 14	Ⅲa	土師質土器・火鉢	ナデ・突帯	ナデ	
180	120	T - 13	Ⅲa	土師質土器・火鉢	ナデ・突帯	ナデ	
180	121	S - 13	Ⅲb	土師質土器・土釜	ハケ目・突帯	ハケ目	
180	122	U - 13	Ⅱc	土師質土器・土釜	花文型押し	ナデ	
180	123	R - 14	Ⅲa	須恵質土器・甕鉢	ナデ	濡目	備前
181	124	U - 14	Ⅱc	須恵質土器・甕鉢	ナデ	濡目	備前
181	125	P - 13	Ⅲa	須恵質土器・甕鉢	ナデ	濡目	
181	126	V - 11	Ⅱa	須恵質土器・甕鉢	ナデ	濡目	
181	127	P - 14	Ⅱc	須恵質土器・甕鉢	ナデ	濡目	備前
181	128	T - 14	Ⅱc	須恵質土器・甕鉢	ケズリ	濡目	備前
181	129	V - 12	Ⅱc	須恵質土器・甕鉢	ナデ	濡目	備前
181	130	S - 15	Ⅲa	須恵質土器・甕鉢	ナデ	濡目	
181	131	R - 13	Ⅱc	須恵質土器・甕	ナデ	ナデ	
181	132	S - 14	Ⅱc	須恵質土器・大甕	タタキ	タタキ	備前
181	133	U - 12	Ⅱc	須恵質土器・甕	タタキ	タタキ	備前
181	134	S - 15	Ⅲa	土師質土器・坏	ナデ・糸切	ナデ	
181	135	S - 14	Ⅱc	土師質土器・皿	ナデ・糸切	ナデ	
181	136	V - 13	Ⅲa	土師質土器・皿	ナデ・糸切	ナデ	
181	137	S - 14	Ⅱc	土師質土器・皿	ナデ・糸切	ナデ	
181	138	S - 13	Ⅱc	土師質土器・皿	ナデ・糸切	ナデ	
181	139	U - 13	Ⅱc	土師質土器・碗	ナデ・糸切	ナデ	
181	140	T - 14	Ⅱc	土師質土器・碗	ナデ・糸切	ナデ	
181	141	S - 14	Ⅲa	土師質土器・皿	ナデ・糸切	ナデ	
181	142	T - 14	Ⅲa	土師質土器・碗	ナデ・糸切	ナデ	
181	143	R - 11	Ⅱc	土師質土器・碗	ナデ・糸切	ナデ	
181	144	T - 15	Ⅱc	土師質土器・皿	ナデ・糸切	ナデ	
181	145	T - 13	Ⅱc	土師質土器・皿	ナデ・糸切	ナデ	
181	146	Q - 14	Ⅲa	土師質土器・皿	ナデ	ナデ	
181	147	P - 14	Ⅱc	土師質土器・碗	ナデ	ナデ	
図	番号	グリッド	出土層位	種類・器種	法量（単位：cm・g）		備考
181	148	R - 15	Ⅱc	土製品・土鉢	長さ4.6	径1.0 重量3.5	
181	149	R - 12	Ⅱc	土製品・土鉢	長さ4.1	径1.0 重量3.3	
181	150	U - 11	Ⅱc	土製品・土鉢	長さ3.4	径1.1 1.0 重量3.3	
181	151	S - 13	Ⅱc	土製品・土鉢	長さ3.3	径0.7 重量1.5	

第79表 B区土器・陶磁器・その他観察表⑤

図	番号	グリッド	出土層位	種類・器種	法量(単位:cm・g)	備考
181	152	U-13	IIc	土製品・有溝土鉢	長さ2.8 径2.2 1.1 重量7.8	
181	153	U-14	IIc	石製品・紡錘車	径5.3 4.8 厚さ1.9 重量10.5	石材は軽石
181	154	T-14	IIc	土製品・人形	径3.6 3.3 重量6.6	馬形人形

第80表 C区土器・陶磁器・その他観察表

図	番号	グリッド	出土層位	種類・器種	成形・調整・文様		備考
					外面	内面	
182	1	T-9	IIc	磁器・蓮子碗	丸を3つ結合した文	二重圏線	景徳鎮窯 15c末-16c後半
182	2	U-9	IIc	磁器・漏反皿		不明文様	景徳鎮窯 15c末-16c後半
182	3	U-8	IIc	磁器・碗	二重圏線	不明文様	漳州窯 16c末
182	4	U-8	IIc	磁器・碗	草花文		漳州窯 16c末
182	5	U-4	IIc	青磁・碗			龍泉窯 16c-17c
182	6	U-8	IIc	青磁・碗	蓮弁文		龍泉窯 16c
182	7	T-6	IIc	青磁・碗	蓮弁文		龍泉窯 16c
182	8	U-9	IIc	青磁・碗	鎮蓮弁文?		龍泉窯
182	9	T-9	IIc	青磁・碗	蓮弁文		龍泉窯 16c
182	10	U-7	IIc	青磁・碗			龍泉窯
182	11	U-8	IIc	陶器・椀花皿		二重沈線	唐津系
182	12	U-4	IIc	陶器・壺か瓶?			
182	13	U-9	IIc	陶器・碗	蛇の目輪八ギ		唐津
182	14	U-4	IIc	陶器・皿	ナデ・糸切)	ナデ	
182	15	U-9	IIc	磁器・碗			肥前
182	16	U-4	IIc	磁器・碗	草花文・二重圏線		肥前
182	17	U-6	IIc	土師質土器・火鉢	花文型押し・ナデ	ナデ	
182	18	V-8	IIc	土師質土器・土釜	ナデ	ハケ目	
182	19	S-9	IIc	土師質土器・皿	ナデ・糸切)	ナデ	
182	20	R-9	IIc	土師質土器・皿	ナデ・糸切)	ナデ	
182	21	U-8	IIc	土師質土器・皿	ナデ・糸切)	ナデ	
182	22	V-9	IIc	土師質土器・皿	ナデ・ヘラ切)	ナデ	
図	番号	グリッド	出土層位	種類・器種	法量(単位:cm・g)		備考
182	23	V-7	IIc	土師質土器・土鉢	長さ4.6 径1.3 重量5.2		
182	24	U-7	IIc	土師質土器・土鉢	長さ3.9 径1.2 1.1 重量3.9		
182	25	S-9	IIc	土師質土器・土鉢	長さ3.6 径0.9 重量2.7		
182	26	U-8	IIc	土師質土器・土鉢	長さ2.8 径0.9 0.8 重量1.3		
182	27	U-4	IIc	瓦質土器・紡錘車	径8.0 7.7 厚さ1.7 重量94.2		再利用品